

最近友達の一色いろはがあざとくない件について

ぶーちゃん☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

武高校一年生で生徒会長・一色いろはがあざとさを忘れている？

比企谷八幡に出会ってからのいろはの心情の変化をクラスの女友達視点から見た日常の1ページ。

目次

【リメイク】なぜか私の友達のはじめて物語がリメイクされる【第1話】	1
【リメイク】そして私の友達のはじめて物語がリメイクされる【第2話】	17
【リメイク】やはり私の友達のはじめて物語はリメイクされる【第3話 激闘編】	28
【リメイク】やはり私の友達のはじめて物語はリメイクされる【第3話 完結編】	37
なぜか私の友達はずっと封印する	49
そして私の友達はずっと俯く	58
やはり私の友達はずっと微笑む	65
【過去編①】かくして私の友達はずっと決意する	73
ついに私の友達はずっと先輩との会合を容す【前編】	81
ついに私の友達はずっと先輩との会合を容す【後編】	88
【過去編②前編】ゆえに私の友達はずっと恋に仕事にカーニバル	94
【過去編②後編】ゆえに私の友達はずっと恋に仕事にカーニバル	103
よって私の友達はずっと不意の遭遇に慌てふためく【前編】	114
よって私の友達はずっと不意の遭遇に慌てふためく【後編】	126
ともかくにも私の友達はずっとせんぱいが大好き過ぎる【前編】	137
ともかくにも私の友達はずっとせんぱいが大好き過ぎる【後編】	146
【おまけ】小悪魔と魔王のエスプレッソに天使のミルクを添えて	157
【過去〜現在編①】つまり私の友達はずっと物語はここから始まる	169
【過去〜現在編②】どうやら私の友達はずっと憧れの先輩の恋バナになにか	

悪巧む

179

【過去〜現在編③】とうとう私の友達のあざとくない理由に物語が追いつく

189

【過去〜現在編④】だけど私の友達は暖かな空間から目を背ける

198

【過去〜現在編⑤】さりとして私の友達はあざとくしたたかに前を向く

208

【ifバレンタイン編・序章】その日私の友達の運命の歯車が回りはじめ

217

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する①

226

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する②

232

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する③

244

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する④

254

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する⑤

264

【ifバレンタイン編FINAL】私の友達一色いろはは、大好きな先輩の背中を押した

276

【出会い編・前編】これが私の友達とのファーストコンタクトなのであ

る！

292

【出会い編・後編】これが私の友達とのファーストコンタクトなのであ

る！

299

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件①

310

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件②

318

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件③

331

【番外編ラスト】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件④

件④

340

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら①

354

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら②

363

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら③

371

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら④

379

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら⑤

389

【if】ちゃっかりと私の友達は逢引きをエンジョイする

404

【if】ちゃっかりと私の友達は逢引きをエンジョイしまくる

417

【if】ちゃっかりと私の友達は逢引きをエンジョイしまくりやがる

431

かくして私の友達はプロムクイーンとなる①

444

かくして私の友達はプロムクイーンとなる②

452

かくして私の友達はプロムクイーンとなる③

464

かくして私の友達はプロムクイーンとなる④

476

【プロムクイーン編最終話】やはり私の友達は最強の後輩様なのである

504

ゆえに私の友達は前を向く

487

【最終回、前編】私の友達一色いろはは、やっぱり最高にあざとい件について 517

【最終回、後編】私の友達一色いろはは、やっぱり最高にあざとい件について 530

【あざとくないスピノフ】こうして友達の一色いろは後日談はあたしが語る 前編 555

【あざとくないスピノフ】こうして友達の一色いろは後日談はあたしが語る 中編 575

【あざとくないスピノフ】こうして友達の一色いろは後日談はあたしが語る 後編 593

【リメイク】なぜか私の友達のはじめて物語がリメイクされる【第1話】

キンコンカンと日本全国お馴染みの鐘が校内に鳴り響き、ようやくお待ちかねのランチタイムが始まる。

「ぶへええ〜……お腹減ったあ〜……」

「ちよつと香織、あんたも一応女なんだから、ぶへえ〜は無いでしょぶへえ〜は」

「あと減った、じゃなくて空いたって言いなよ〜？ ホント女の子捨ててるよねー」

「うっさいよあんたら！ 一応でもなけりや捨ててもいないわっ。どっからどう見てもリア充満喫美少女女子高生でしょーが」

「はいはい」「そーですね」

「ぐぬぬ……」

友人共の心無い悪態に、解せん……と苦虫を噛み潰している美少女女子高生こと私 家堀香織は、県内有数の進学校とも名高い千葉県立総武高校に通う、才色兼備なりア充女子である。ウホッ！ 人生勝ち組すぎて敗北を知りたい！

……すみませんそこそこ盛りました。まあまあ才色兼備程度な認識でオナシヤス。ちなみに二学期の期末の順位は後ろから数えた方が早いかもっ♪ (白目)

「香織そこ椅子邪魔く。そっちにどけてー」

「かしこまっ☆」

「……」「……」

と、まあそんなどこにでも居るような私は(才色兼備投げ出すの早すぎィィ！)、中学からの友人でもある笠屋紗弥加・大友智子にとっても痛いものでも見るかのような生暖かい目で見られつつ、今日もいつものように机を移動してランチの準備を済ませた。やはり解せん。

「ごめん、ちよつと午後の会議用の書類整理してたら遅くなっちゃったー」

おつと、ランチの準備が終わった頃によく現れましたもう一人の友達の紹介もせねばなるまいね。

この子の名前は一色いろは。

私と紗弥加と智子とで四人グループを組んでいる中の一人であり、なんと一年生にして生徒会長という重責を担う女の子。

校内で知らぬ者など居ない、我が校の超有名美少女生徒会長なのだ！

× × ×

この一色いろはという女、一年生にして生徒会長という肩書きを手に入れた上、恵まれた容姿と人当たりの良いふわ空気(男限定)を遺憾なく発揮し、今や総武三巨頭(雪ノ下雪乃、葉山隼人、一色いろは)と呼ばれる程の大物なのである。

ちなみに三巨頭なんて呼んでるのは今のところ私くらいですがなにか？

……え？ 三巨頭とか名付けてる辺りがすでにオタ臭いつて？

いやいや私オタとかじゃないんで。

んん！ ま、まあそれはそうと、そんな一色いろはを一言で言い表わすとするのなら………そう、あざとい。

恵まれた容姿に加えて天性の男たらしの才能の持ち主で、クラスどころか学年中にファンが居るほどの小悪魔系美少女。

いや、サッカー部の女マネなんていう青春真っ盛りな事もやってるから、上級生にもファンなんていくらでも居るんだろう。

もつとも最近はあるま部活には顔出してないみたいだけど。

狡賢く打算的な『わたし可愛いアピール』に、まわりの男共のお手玉感はそのりやもう半端ない。

そのジャグラーっぷりはマジで凄くて、意中の男子をタラシ込まれた女子は両手の指じや数えきれないほどなんじゃないかしら？

もちろんそれにより恨みも手広く買っちゃってて、実はいろはが生徒会長になっちゃったのは、いろはへの妬みつらみからくる報復だったりするんだよね。

てかそんな女となんで私たちはグループを組んでんの？ って話なんだけど、まあぶっちゃけ、最初は打算もありました。なんなら打算しかないまである。

私、紗弥加、智子は中学時代からずっとグループ組んでたんだけど、決してクラス内No.1カーストってわけでは無かった。

まあいわゆる序列二番目くらい？

それはそもそも私たちがトップカーストとかに興味無かったからで、トップを狙おうと思えばいつでも出来たのさ。だって沙也加も智子も美人だし人気者だし。

ただいかんせんトップに興味なくて、どんなに人気があってもあんま興味の無い女子も男子もグループに入れないでいたから、グループ自体がデカくならずにはなれなかったのよね。

でもこの一年C組内カーストに関してはちよつと諸事情があつて「トップになつたんで！」と一念発起し、そこに白羽の矢が立ったのがいろはつつうワケなのでありますよ。なにせ男子人気「だけ」はクラスNo.1だったから、この子を引き込んじゃえばすぐにトップになれるんじゃない？ って。

女子にはすこぶる嫌われてたのが不安要素ではあつたけど、ま、そこはアレですよ。いざとなれば切り捨てちゃえばいいじゃない？ ってね！

やだ！ 超打算まみれ！

てなわけで、そんな軽い気持ちでグループに入れてみたんだけど、いざ腹を割って話してみたら意外や意外かなりいいヤツだし気が

合うしで、今やすっかり仲良し四人組って感じですよ。女の友情って美しい！（嘘つけ）

でもいろはをいいヤツって理解出来たのは当の私たちだけの話であって、やっぱ他の女子にはずつと嫌われっぱなしのまま、二学期の中頃には弄りという名の嫌がらせで、気が付いたらいろはは生徒会長に立候補「させられていた」のです。

とまあ最初は望まないカタチで会長になっちゃったわけだけど、こいつはそんな逆境を逆手に取って、今や押しも押されぬ有名人に登り詰めちゃったんだから、やはりこいつはマジで侮れない……恐るべしいろはす！

——でもね、そんないろはの様子が最近ちよつとおかしいんだよね。

どうおかしいのかと言うと、一色いろはの代名詞ともいうべき「あざとさ」がすっかりとナリを潜めている。端的に言う……一色いろはがあざとくない！

あれはそう、三学期初日からすでにおかしくなっていた。

いや、いま思えば、もしかしたら二学期の終わり……そう、生徒会長に就任してから初めての仕事でもあった他校との合同イベント辺りから、徐々におかしくなっていたのかも。

以前ならどんな時でも己の可愛さを周りにアピールする努力を厭わなかった。

甘あい猫なで声で朝から男子のご機嫌を伺い、甘あい魅惑的スマイルで悩殺。

困り事あらば甘えた態度で男に媚び、休日の買い物には男を荷物持ちに利用する日々。

でも、今はもうそんな素振りほとんど無い。

もちろんそこは一色いろはである。それでも通常の女子よりはよっぽど男を利用しようと努めるのだが、そこには以前のようなあざ

ときは無いのよねー。

なんていうか、仲が悪くなったとかそういうんじゃないやなくて……クラス男子に興味を失っちゃったって感じ……？

三学期初日からかなりの謎行動で、クラス全体がふよよと大量に疑問符を浮かべてたんだけど、そんなおかしさが決定的になったのはつい先日のお話である。

その日は朝からD組の中西翔太君が愛しのいろはを訪ねて来たのだ。

中西君は爽やかイケメンでもありバスケット部次期エースとも目される、学年でもトップを誇る人気者。

そんな人気者な中西君がいろはの術中にハマった事で、クラスどころか学年でも一色いろはアンチの流れが決定的になったまでである。

いろは的にも中西君はお気に入り荷物持ちだったようで、数多くの荷物持ちの中でもその利用頻度はトップクラス。

戸部先輩か中西君かってくらいによくご利用……お出掛けしてました☆

……う、うん、生徒会長強制立候補とか、やっぱり自業自得だわいろはすよ……！

でもここ最近めつきりいろはからのお声が掛からなくなった事が不安で不満だったらしく、ついに痺れを切らした中西君が朝からいろはを強襲したってわけなのよ。

『なあいろはー、最近全然遊んでないじゃーん。そろそろ次の休みにでも遊びに行かない？ 俺、いくらでも買い物付き合っちゃうよ？』

自分のウリが『買い物付き合っちゃうよ？』とか言ってる時点でお察しというか、完全にお得意様である。

あときはあまりの切なさに私も胸を傷めたもんだよ……

でもそんな隣れでいじらしい中西君に対し、いろははあざとい笑顔をすることも猫なで声で惑わすでもなく、普つ通りの笑顔で淡々ところ

言い放つたのだ。

『あ、ごめんね翔太君。最近生徒会の仕事忙しいしそつちに集中したいから、もう〴〵そういうの〴〵やめたんだー。今までありがとー』

まさかの全拒否!!

今までありがとーって、あんた卒業しちゃうアイドルグループメンバーかなんかかよ。みんなの事は嫌いになっても、わたしの事だけは嫌いにならないでくださいやい!

これには中西君もクラスの連中も絶句。

中西君は人気者の自覚もあるし周りの目も気にしてか「そ、そっか」と、あくまでも爽やかな笑顔を崩さず教室出てったけど、その小さくなつた背中にはマジ哀れ……

ま、いろはは元々葉山先輩狙いなのは有名だったし、それを知った上で自ら買ひ物の付き合いを申し出てたんだから、いずれこうなる事なんて分かつていただろうにねえ。

……そのうちいい事あるよ中西君っ! あざとい女には気を付けないはれやっ?

× × ×

「つーかき、いろはは最近真面目に生徒会活動してるよね」

「ねっ! お昼休みなのにまだ書類準備してるとか、なんかもう誰? って感じー」

お待ちかねの昼休みに仕事を被らせてまで頑張っているいろはに、たまごサンドにかぶり付きながら紗弥加が疑問を投げ掛けると、さすが智子が黒さを出す。

こいつも昔っからふわぼわ系に見せかけた腹黒女だからなー。

「ちよつと智子それは失礼じゃない? わたし、超真面目な模範生徒だしー」

「いやそれはない」「またまたあ」「無理あつから」「ふう〜」

元おな中トリオからの息の合った突っ込みに、いろははぷくーっど頬を膨らます。

最近男子に対してあざとくないとはいえ、こういうひとつひとつの所作はどうしてもあざとさが滲み出すのよね。やはり息を吐くようにあざとさを振り撒いてきたこれまでの十六年間は嘘を吐かないのか。

とはいえこのあざとさは男に対してとは違うものであり、私たち友達との間で交わされる、いわばお約束めいたものでしかない。あくまでも「小悪魔系美少女一色いろはのあざとさ」とは別物なのだ。

よし！　ここはモノのついでに、今まで疑問に思ってた事を聞いてみましょうかね。

「てかさあ、ぶっちやけ最近いろはってちよつと変わったよねー」

「へ？　……ふえ？」

私からの質問がよっぽど予想外の不意打ちだったのか、きよとんと首をかしげるいろは。わざわざ言い直さなくてもよろしくてよ？。

「だよねー」「私もそう思ってたー」

知らぬは本人ばかりか、きよとんと首をかしげるご本人様の横では、紗弥加も智子も深く深くうなずいている。

そんな私たちの様子に戸惑いながらも、いろはは訝しげに問いかけてきた。

「えつと……ちなみなどの辺が？」

「男にあざとくなくなった」

間髪入れずに即答した私たちに、いろははまたもやたこはすにメガシンカっ！

「別にわたしあざとくないですー！　つねに素ですー」

「あ、そう言うのいいんで」

いろはのあざとい対応に対しての私たちはなんとというシンクロ率か！　使徒も泣きながら裸足で逃げ出すレベル。

むーっ！ と相変わらず頬を膨らませるいろはだけど、しばらく膨らんで満足すると、んー……と人差し指を顎に添えてわたし考えてますポーズを繰り返す。

「……あれかもね。興味対象が変わった……？ のかも」

「興味対象？」

「うん。ま、わたし自身は自覚があるわけじゃないけど。ホラ、今までハチよつといいなって思った男の子にはとりあえず手を出……手を繋ぎたいかなー？ なんて思ってたトコあるけどー」

お前いま手を出すって言い掛けたろ。このふわぽよビッチめが！

「最近は……まあ、そういう気持ち薄れてきたのかもね。なんだかんだ言って生徒会結構楽しいしさー、だったら今までみたいに興味の無い男の子と無駄な時間過ごすくらいなら、もつと違うトコに集中したいかなー？ って？」

そっか、そういう事なんだね。

……って軽く流せない程の聞き捨てならないセリフをいけしやあしやあと吐きましたよこの女！

興味無い男の子と無駄な時間過ごしてた自覚あんなら、最初から思わせ振りの態度取らないだけでよお！ ほらほら、紗弥加達もドン引きしてっから！

「……やっぱお前地獄に落ちろ、このガツカリふわぽよめっ」

「は？ いやいや意味分かんないし。そもそもガツカリとか残念とか香織にだけは言われたくないんですけどー」

「残念じゃないやい！」

だいたい残念だなんて一言も言ってねーし！

やはり解せん……！ と、いろはに呪咀の念を送りつつ、箸でつんと卵焼きを弄んでいた時だった。

ふと視界の端の方で、見知らぬ男子生徒がクラスの男子を扉の近くで呼んでいるのが見えたのだ。

ふむ、呼び出してる男子も呼び出されてる男子も地味系だし、地味友かなんかかしらん？

でも……あれ？ 最初は見知らぬって思ったけども、よくよく見たらちよつと見覚えあんなあ。ん〜、どこでだっけ……？

「あ」

そうそう！ 確かいろはが生徒会選挙のゴタゴタがあつた辺りで、まさに今と同じようにいろはを訪ねてきた……確か二年生だったっけ？

もしかしたら生徒会の人なのかな？

……ああ、そういえばあの時はいろはの表情七変化は凄かつたなあ。

二年生のお客さんが来るとか聞いた途端に、目をキラ☆と輝かせてグルンつと凄まじい勢いで振り向いたかと思つたら、一瞬だけ悲壮感漂うガツカリ顔を晒したのよね。

でもそこはさすがいろはす抜け目ない。次の瞬間には営業スマイル張りつけて、可愛さ全開でパタパタと走つてつたっけ。

ま、おおかた二年生が来てるつて聞いて、まさか葉山先輩っ!? つて期待したんだろうけど、流星にあの落胆丸出しのガツカリ面は無いわ。あんたいくらなんでも先輩には敬意を表しなさいよ、ほんの少しくらいでもさ。

いろはの表情変化を目の当たりにしたあの二年生の引きつった表情つていつたらもうね。ついちよつとブークスクスしちやつたじゃない。

申し訳ない見知らぬ先輩よ……！ だつてちよつと面白かつたんですもの！

ふむ、もしかしたらあの先輩は、ああ見えているのは魔性に騙されていけない人種なのかしら？

あの二年生が今日もいろはに用事があるんなら、またあんな七変化

を見せてくれんのかしら？ とハラハラして見ていると、やっぱりク
ラスの地味男子がオドオドというはに声を掛けてきた。 ああ……
普段私らトップカーズト女子グループに話しかける事なんてないか
ら超緊張しちゃってるんだねごめんねー？

やはりあの二年生はいろはに用事があつたらしく、この女は予想通
り二年生に呼ばれてるって言われたその瞬間……

キラっ！ と！

グルンっ！ と！

そしてそう！ ガツカ………あ、れ……？

え？ な、なにその顔……？

あの悲壮感漂うガツカリ顔はどこいつちやったの？ 超嬉しそう
に表情緩めちやってるんですけどこの子！

……あつれく？ 訪ねてきたの前と同じ先輩だよね……？ 見間
違い……ではない……よね？

いろはは二年生男子の姿をバツチリ認識すると、すでに地味男子な
ど視界に入っていないかのようにスツと横を通り過ぎると、パタパタと
一直線に二年生男子へと駆けよった。そして……

「せーんぱあい！ どおしたんですかあ？」

甘つまーい！ 甘すぎるよう！

その二年生男子へと掛けた第一声は、ひと月以上ぶりに聞きたいろ
はの甘い甘い猫なで声。

え、なにその甘え声!? 思わず砂糖吐いちやうかと思つたわ！ こ
こ最近とんと聞いてなかったっていうギャップも相まって、その糖度
はブラックコーヒーが勝手にMAXコーヒーへとジョブチエンジシ

ちやうレベル。

クラスの連中もそんないろはの様子にビックリして何事かと様子を伺ってるから、おのずと教室内はしんと静まり返り、いろは達の会話がよく聞こえるのでした。

——思えばこれが私の盗ちよ……盗み聞き生活の始まりである。言い直した意味ない☆

家堀さんは聞いている！

× × ×

「先輩がわざわざわたしのクラスに来るなんて珍しくないですかあ？」

可愛さ（あざとさ）全開で謎の先輩に自分を目一杯アピるいろは。マジでこんないろは見んの久しぶり。……いや、以前毎日のように目にしてたいろはよりも、なんていうか……ずっと可愛い。

でもそんないろはを前にしたこの先輩はあからさまに「うつわ……」って顔を前面に押し出して一言。

「あざとい」

……へえ、やっぱあの先輩は『いろは』をちゃんと見てるんだ……だからなのかな、いろはがあんなに楽しそうなのは。

「むー、だから素ですー！ 第一声があざといとかマジで酷くないですかあ……？ つと、そんなことより何かわたしにご用ですか？

……あ！もしかしてぼっちランチが寂しくて、可愛い後輩と一緒にお昼したくなっちゃいました？」

「あん？ プロぼっちなめんなよ？ 何年お一人様ランチを楽しんできたと思ってるんだ。一人飯が寂しいのなんて小学校低学年のときにはすでに卒業してるわ」

……プロぼっちってなんですか……そして卒業早っ！

「購買行こうとしたら平塚先生に捕まっちゃまったんだよ……なんか来週のマラソン大会の件で生徒会に緊急召集が掛かったらしくてな。

……で、ついでだから一色呼んできてくれって命令された。マジ勘弁してくれ」

「えー……仕事の話ですか？ ホントつままない先輩ですわね」

「いやいや、貴重な時間割いてわざわざ呼びに来てやったのに俺が責められんの？」

「貴重って言ったって、どうせ一人寂しく味気ない購買パン食べるだけじゃないですか」

おうふ……いろはす辛辣う！

その先輩今に泣いちゃうんじゃないかしら。

「まあ別に否定はしないが」

泣くどころか迷いなく肯定しちゃった！ あの人ぼっち精神ブレないですなあ……

「まあそんな事より……」

斬り捨て御免すぎだよいろはす！ 辻斬り侍だってもうちよつと遠慮するから！

「先輩、さつきからなんでキョドってるんですかあ？ 照れっぷりがちよつと気持ち悪くて見てられないんですけど」

そう言ったいろはは、にまにまと悪戯っぽく微笑んで先輩を覗きこむ。

「……うっせ、一年生の教室来て女子を呼び出すなんて、俺には難易度高すぎて結構緊張してんだよ。……あとストレートに気持ち悪いか地味に傷付くからね？」

「ごめんなさい我慢して直視します」

「……ねえ酷くない？ お前年下とはいえ女子じゃなかったらそろそろぶっ飛ばしてるとこだわ。年下男子……てか大志だったら今ごろ東京湾直行まである」

「タイシ？ タイシって誰ですか？」

「そんなの今どうでもよくない？」

ホントにどうでもいいですよね。

でもなぜだかいろはさんが聞く耳を持たず、ただただ先輩からの返答を待っている。

これはあれかな？ 自分以外に仲の良い後輩が居るなんて聞いてないから気になるって感じなのかな？

そんな、答えを聞くまでは頑として動こうとしないいろはに、先輩は面倒くさそうに頭をがしがしと掻いた。

「チツ……あー、うちのクラスの川……川……川島？ って確かお前どっかで一回会ったことあったよな。あいつの弟だ」

「ああ……川なんとかさんって、クリスマスイベントの時に保育園で会った恐い人ですよ？ ……てか、なんで先輩ぼっちの癖して女子の弟さんをファーストネームで呼ぶほど親密な仲なんですか……？ もしかして先輩……川なんとかさんと結構仲良かったりするんですか……？」

お、おやおや……？ いろはさんの声が途中から急に冷たくなりましたが……

な、なんか寒いよう……！

「は？ ちげえよ。大志は妹の友だ……いや、妹にまとわりつく毒虫だ」

「……シスコン？」

低つく！ 声低いいろはす！

でもそんな冷え冷えとしたドン引きの眼差しを向けながらも、なんだかちよつとホツとしてるように見えるのは気のせいですかねえ？

「……ていうか妹さんて小町ちゃんの事ですよ？ そろそろ紹介してくださいよお、わたしだけなんですよー？ 小町ちゃんに会った事ないの」

「私だけでもなにも別にお前関係なくない？ ……そもそもお前と小町なんて恐くて会わせらんねえつつの。ただでさえ小町もあざといのに、さらにあざとい一色なんかと会わせたら、あざとシスターズ結成しちやって不幸な未来しか見えん」

「わたしと小町ちゃんてシスターズって……はっ！ それってもしかしてプロポーズのつもりですかどさくさに紛れて小町ちゃんのお義姉ちゃんになってくれとか言ってますかさすがにそれは色々と大事な事をすつ飛ばしすぎじゃないですかねもうちよつと良く考え

直してから出直してきて下さい、ごめんなさい」

すげーな、この振り芸……言い出し始めから丁寧なペコリと頭を下げるまでの流れに息つく暇がないじゃない。

てか最終的には出直してきて下さいとか言っちゃってんよこの子。……つてあれ？ これ振ってなくない？ まさかの交際要求やり直しである。

………あつ（察し）

でもどうやらこの怒涛の振り（？）芸は慣れたモノなようで、この先輩は辟易とした表情を隠そうともせず、軽い対応を返す。

「はいはいそうですね……。あ、そういやいつまでもお前と話してる暇なんかねえんだよ。早く購買行かないとパン無くなっちゃうわ」

凄いなあ、今の振り芸に対してこの対応。慣れすぎでしょ……

この人たち普段からこんな会話ばかりしてるのかしらん。

しかしいろには今の先輩の何気ないセリフに思うところがあつたご様子。

ピコーンと頭上に豆電球を光らすと、ぴこつと人差し指を立てて楽しそうにこんな提案を議会で提出した。

「あ、だったらお仕事が終わったらわたしのお弁当分けてあげますよ。どうですか？ 可愛い可愛い後輩と一緒にごはんを食べれるまたとないチャンスですよー？」

ニヤニヤと先輩をお誘いするいろはす。

いやん！ いろはすったら結構肉食ねえ！

「いやいらねえよ。一色のあざとさ100%の少量弁当なんか分けてもらっちゃったら、お前の旺盛な食欲が満たされなくて午後の授業で腹鳴りまくって、クラスメイトの皆さんに迷惑掛けちゃうし」

ほえく……いろはからのお昼のお誘いをこうも無碍に断るとは……ほとんどの男子だったら泣いて喜びそうなところなのに……

やはりあなどれないな、この男！

「……せんぱーい、それももうセクハラの域なんですけどー……。どうしよう、わたし先輩にクラスメイトの前でセクハラされて辱めを受けちゃいましたって奉仕部で発表しちゃいそう」

「勘弁してくださいすみませんでした」

あなどれないと感心してたのに、次の瞬間には土下座も辞さない勢いで後輩に即謝罪する上級生と、そんな上級生を満足げに見下ろすという見事な構図である。

それにしても……ホ、ホウシブ？ なにそれ悪の秘密結社かなんか？ そんなに恐怖の対象なのん？

「……と、とにかくだ。俺もう行くからな。パン売り切れてたらどうしてくれんだよ。……っーかお前も早く生徒会室行つてくんない？

……お前が遅いと俺が平塚先生からお叱りを受けるんだからな、物理的な」

ホウシブへのチクリに恐れおののいたのか、はたまたホントに購買の心配なのか、そう言つて先輩は逃げ出した！

「えい！ ちよ、ちよつと待つてくください、一緒に行きましょうよおー！」
しかしいろはさんは逃がさない！ 縋りつかんばかりに先輩の袖をちよこんと掴む。

「……いやなんでだよ、俺別に生徒会室行かないし」

「ええー……？ で、でもちよつとそこまでもいいから一緒に行きましようよー！」

「生徒会室と購買逆方向じゃねえか……じゃあな」

「ちよー！ ちよつとー!!」

おっと！ 可愛く掴んでいた袖をあつさり振り払われたいろはが、凄いい勢いで私たちのもとへと駆け寄つてきた！

そしてせかせかと机の上の食べ掛けのお弁当をお片付け。

「みんなごめーん！ 生徒会の仕事入っちゃったから、わたしもう行くねー！」

「う、うんがんばつてねー……」「がんばつてねー……」「い、行つてらー……」

光の早さで教室を飛び出すと、『生徒会の仕事が入った』いろははなんの迷いもなく生徒会室とは『真逆』の方向へと大爆走。そしてまるで甘えん坊な少女のように、甘つたるい声で喚きながら去っていく

のだった。

「……………もお、待って下さいよー！ せんぱあい！」

なにあれ可愛い。

……………えつと、んーと……………マジ……………？

いろはのあまりにも分かりやすい乙女ちっくな求愛行動に、私たち……………いやいやクラス全体が、ただただいろはの小さくなつていく声と背中を見送ることしか出来ないのです……………っ。

ちよつといろはすさんや!? あんたコレ帰ってきたらただじゃ済まないわよ!?

【リメイク】そして私の友達のはじめて物語がリメイクされる【第2話】

いろはとあの二年生の夫婦漫才が過ぎ去ってから、かれこれ三十分ほど経っただろうか？

あの子が教室を飛び出して行っちゃった時こそ静まり返っていた教室内も、遠くの甘ったるい声が聞こえなくなった辺りから一気に騒然としたのよね……

『えーなにあれえ？』『一色さんてさー、葉山先輩狙いじゃなかったのお？』『どうせいつものアレでしょ？ 利用しちやってるみたいな？』『で、でもさあ、そんな感じしなくなかった……？』『えー？ マジー？ もしかしてあんなのに乗り換えちやっただとかー？』『なにあの人ああいうのがタイプなのー？ ウケるー！』

等々、いろはのことなんてなんにも知らない女共が、勝手な推測で適当なことを騒ぎ立てていた。ホントうざっ。

ちなみに……

『うわー！ いろはすまじかよー！』『だから最近様子がおかしかったのかよー！』『ああ……俺もう生きるのに疲れたわ……』

と、アホな男共のアホな嘆きにちよつとだけ癒されちやっただのは内緒！

……でも、それだけだったらまだ良かったのよ。

本当の大問題はその後やってきた。

あのおバカが所構わず廊下なんかで騒ぐもんだから、他のクラスの

アンチいろは共も嬉々としてウチのクラスに集まってきたのよね……
私達はC組トップカーストだから、クラス内のバカ騒ぎだけならなんとかなったのだ。

でも、他のクラスからカースト上位なうえいうえい勢が大挙として押し寄せて来て、我がクラスのアンチいろは中心人物の元に集まっちゃったもんだから、もう私たちの手に負えるもんじゃなかった。

そしていろはの友達という事で、私たちにもいやーな話が飛び火してきたりもした。

全然聞きたくなくて無かったアノ情報。それを「ねえねえ香織ちゃん達も知ってるの？」なんて、歪んだ笑顔の皆さんに訊ねられることの不快さっていつたらもうね。

そして飽きることなく続くガールズトークは、未だ満開の花を咲かせている。

その麗しき少女達のサマは、一面ラフレシアのお花畑を優雅に舞うハエのようでした。

「……ねえ、いろはそろそろ戻ってきちゃうんじゃない……？」
周りの悪臭花畑を気にしつつ、紗弥加が心配そうにぼしよりと呟く。

「ね。……てか、これいま帰ってきちゃったらマズいよね……」
智子も眉をひそめて、嫌っそうに辺りを見渡しながらそう答えた。

……おっかしーなあ。こうなっちゃった時は即座に切り捨てちゃおーぜー！ との約束事だったはずなのに、今の紗弥加たちにはいろはを切り捨てるっていう選択肢はなぜか無いのよね。

ったくう……紗弥加も智子もすっかり丸くなったもんだことで。「んじやさ、私一応電話しとこっかな。教室戻ってくんなら、せめて五限ギリギリにしときなーってさっ」

ふふふ、ま、甘くなっちゃったのは私も一緒だけどねー♪

「んー」「おっけ」

そんなのは単なる一時的な問題先送りにしかならないだろうけど、とりあえず昼休みさえやり過ぎしちゃえば、放課後にでもマツクなりで皆で作戦会議立てられるしね。

おっと！ あんまり遅くなりそうなら、ママンに幼女先輩御用達のアイドルな活動とかポケットピカチュウとか、色々録画お願いしとかなくっちゃ☆

こればかりは絶対に忘れちゃならんよキミ。

絶対に忘れられない戦いがそこにはある！ そう深く心に刻みつつスマホを取り出し、まずはママンへの連絡よりもこっちが先よねと、いろはの通話履歴を引つ張りだしていると、不意にがらりと教室の扉の開く音が響いた。響いてしまったのだ……

「ただいまー。ようやく終わったあ………つて、あれ？ なにこの空気……」

なんてタイミングの悪い子だよこの子はもー！ あと一分二分だけでも遅ければ良かったのに……！

あまりにもバッドタイミングで帰還してしまった我らが生徒会長は、自分が教室に入った途端に妙な空気に支配されてしまった室内を訝しげにチラ見する。

そりゃあんだ、悪い意味であんだけ視線を独り占めしたら、こうもなりますでしょうよ……

「ど、どしたの？ わたしが居ないあいだにクラスでなんかあった……？ あ、まーた香織が所構わずかしこまとか言って教室中を寒くしちゃったんでしょー」

お前だよお前エ！ みんなお前の一挙手一投足を固唾を飲んで見守ってたんだよ！

………てかちよつと待って!! “また”ってなに!! 私のかしこまって普段教室中を寒くしちゃってるのん!?

うっそんな知りたくなかったわ (白目)

……ま、まあアレよねっ……わ、私ぜんぜんオタとかじゃないから、

い、いきなりリア充丸出しな私がそんなこと言ったら、そりやみんなビックリしちゃうわよね……！ ……よっしQEDQED。

……ふうく、あつぶね、大丈夫大丈夫まだバレてないバレてない。いやいやバレるもバレないも、そもそも私オタとかじゃ以下略☆

「あつと、今はそんなことどーだつていーや。早くお昼食べちゃわな」と昼休み終わっちゃうじゃん！」

私的には生きるか死ぬか、殺るか殺られるかの瀬戸際レベルだった必死の精神安定QED証明終了を、そんなことどーだつていーやでバツサリと斬り捨てたいろはは、うなだれる私など視界に入つてないかのようにとつととお弁当の準備を始めた。

「えつと……お仕事の方は大丈夫だったの？」

「ホント生徒の貴重なお昼時間をなんだと思つてんのよあの独身！ 教育委員会に提訴してやろーかなあ」なんて物騒なことをブツブツ言っているいろはに向けて、クラス中の目を気にしてか、当たり障りのない質問で場を落ち着かせようと試みる智子。普通この状況だったら真つ先に聞きたい事があるでしょうに。ふむ、さすが計算高い女。なかなか有能だのう。

「あ、うん。まあちよつと大変そうは大変そうなんだけどなんとか大丈夫そうかなー。ま、ホントにキツイようだったらアレを扱き使っちゃうからいいんだけどねー♪」

そう言つてこれでもかというほどどす黒い笑顔を晒すいろはす。

ちよつと？ 内面出てる出てるう！ 女の子がその顔をあんまり人前で晒したらダメよん？

でもこんなにも悪つそうな顔してるくせになんとも楽しそうですね。てかついさつきこんな素の笑顔見たばつかじやなかつたっけ……？

あ……「アレ」つて、まさか……？

「ん？ アレってなに？」

ちよ、紗弥加？ そこに触れんのはまだマズいってば！ もしかしたら息を潜めて私たちの話に聞き耳を立ててるハ工共の餌食になっちゃう話題かもしれないじゃん！

「アレ？ あー、先輩のこと？」

事もなげに楽しそうにそう答えたいろはに、クラスは一瞬だけザワつく。

くっそ、やっぱそつかあ……もー、せつかく智子が上手く話を逸らそうとしてたのに紗弥加め！

やばっ……！ つと、顔をしかめた紗弥加が私と智子に手を合わせてるんだけど、どうやらもう遅いらしい。

「そーいえばみんなにはまだ先輩のこと話したこと無かったっけ？

まあ？ わざわざ紗弥加達に話すような大層なヤツつてわけでもないんだけどー、ま、せつかくだししようがないから色々話しちやおっかなー」

なぜなら一旦その先輩の名を出した途端に、いろはが堰を切ったように話し始めてしまったから。

……嗚呼……どうやらいろはったら、ずっと友達に先輩のお話をしたかったみたい……！ でも今はマズいってば！

「い、いやいやいろは？ 別に私達はその話はいいから、は、早くお昼食べ……」

「えつとねー、どっから話せばいいかなあ？ ま、最初はやっぱ先輩との出会いからかなーっ」

ふええ……聞いちやいねえよう……！ ずっと話したくて話したくて蓄まっていたんだらうけどさあ……！

……ダメだ、こうなつちやつたらこの子はもう止まりそうもない。これは腹を括らなきやなんないか……紗弥加と智子もいろはの顔を見て諦めたみたいだし。

もう！ どうなつたって知らないかんね!?

× × ×

「でっさー、そんな経緯で先輩のせいで生徒会長やるハメになつちやつたんだよねー」

「そ、そう……」

「ホントあの先輩って根暗で性格悪くて捻ててぼっちでしょーもない先輩なんだあ。でもあー見えて意外と使え……頼りになったりするんだよねー」

「う、うん……」

「それなのにああ見えて実は成績だけは良くってさー、なんとなんと！ 国語だけなら学年三位なんだって！ 超ビックリじゃない？ ぷっ、先輩のくせに生意気だーって感じだよねー」

「そ、そうだねー……」

周りの目を気にして気が気じゃない私達の心ない相槌を余所に、乙女いろはの口は絶好調。なんなら舌好調まである。ふひっ。

なんだかなあ……至るところでその先輩——どうやら比企谷先輩というらしい——のことをデイスってんだけど、デイスりながらもすっごい優しさと笑顔に包まれてんのよね、この子。

まあ使えるところかい掛けちゃいましたけども！

なんというか……うん。大好きなんだなあ……って、そう感じる。それがラブなのかライクなのかは、乙女成分が若干不足気味の私にはまだ分かんないけど。

「んく……んくっ………ぷはあ！ あんまあっ」

「……てかさ？ いろはって、そんなん飲んでたっけ……？」

時間が迫ってきてるってのにお弁当も食わずに話し倒すいろはが、くぴくぴと喉を潤す為に手にした警告色を全身で模したかのような一本の缶コーヒー。

こりやまたなんつー攻撃的なドリンクを用意してきたんざましょ！

こんなアグレッシブな飲み物、いろは愛飲してなかったよね？

「あ、これー？ ちよつと意味分かんないくらいに甘ったるいよねー。最近たまにチャレンジしてるんだけど、未だに慣れないくらい甘いよー」

そう言っているのは舌を出し、うえ〜……と顔をしかめる。

意味分かんないなら飲むなよ。

「でもま、人生は苦いから、コーヒーは甘いくらいがちようどいい……ってねっ」

え、なに言ってるんこの子。

なんか渋いジェントルマンがブランドーのグラスでも傾けるかのようなポーズを決めて、キメ顔でアホなセリフを堂々と言い放ちましたよ？

なにそれダサイ。

「だき……！ なに？ それのキャッチフレーズかなんか？」

「えへへ〜、先輩が前に言ってたんだー。マジで超バカでしょ」

けらけらと先輩をバカにしながらも、またも愛おしそうにMAXコーヒーを口へと運ぶいろは。

——本当はこんな気持ちになっちゃいけないのよ？ いけないのは分かっているんだけど……

なんていうか、ほっこりしちまったよ……私だけじゃなくて、紗弥加も智子もさ。

いろはとはまだ一年にも満たない付き合いだけど、それでも最初の出会いから考えたら、結構身の詰まった付き合いをしてるんじゃないかね？ とか思っているんだ、私達。

打算で声を掛けたファーストコンタクトから始まって、お互いに探り探りの人間関係の構築。

それから林間学校やら夏休みを経て知り合いから友達へと進化して、文化祭、体育祭、生徒会選挙、クリスマスと色んな青春イベントをこなして大好きな親友になれた。

それでも、いろはのこんな顔は見たこと無かったから。こんなにも“いろは丸出し”で男の話をするこの子なんて初めて見たから。

だから、なんていうか……物凄くほっこりしてしまった。いま私達の……いや、いろはの置かれたマズい状況を忘れてしまうほどに。

「ねえねえいろはちゃん！　なんかすっごく楽しそうだよねえ！
よかつたら私も入れてよお」

……こいつの、襟沢恵理の声を聞くまでは。

× × ×

襟沢恵理。

ふあさつ……と優雅に金髪ドリルをなびかせ、私達のグループに勝手に交ぎってきたこいつは、我が一年C組の中でもトップクラスの女。

てか、私たち香織と愉快な仲間達ーズが居なければ、間違いなくこのクラスはこいつ中心に回っていただろう。

まあとどのつまり、この女が居たからこそ私達はC組のトップカーズトになろうと一念発起したんだよね。

だって初っぱなからウザくて仕方なかったから。なんかもう、このクラスの中心は私よ！　って態度が見え見えでさー。

この髪型でお察しの通り、こいつは二年生の三浦先輩をリスペクトしている。リスペクトっていうよりは、もう……神？

だからこの劣化版三浦は、神に倣って自分も女王たろうと努めた。

そんな襟沢がウザくて仕方なかったから、このアホだけにはクラスの全権なんて握らせてあげないんだからね!?　ってな具合に、いろはを加えて私達こそがトップとして君臨してやったわけなのですが、こいつは当然の如くそれが面白くなかったんですよ。そりゃこいつが面白くないようにやってやったんだから当然ですけども♪

で、私達グループの中でも特に嫌っているいろはを陥れて、まんまと生徒会長に立候補させてしまった張本人であり、我がクラスのアンチいろはの中心人物なのだ。

もっともいろはは相手にしてない……ってか、眼中にさえ入ってないけどね。

そんな襟沢がいやらしい笑みを湛えたままいろはに話し掛けてくる以上は、こいつの目的はさっきのアレなのだろう……

いろはと比企谷先輩の楽しげな騒ぎを聞き付けて、わざわざ他クラスから遠征してきたアンチいろはの中の一人が持ってきてしまったあの余計な情報。

……アレで、いろはを弄る為に。

ホントなら力づくでも止めたいけど、悲しいかなアレはすでにクラス中が知ってる事実なのだ……。だから、止められない……

願わくば、いろははすでにあの事実を知っていて、その上で比企谷先輩に懐いていて欲しいと思う。

あの事実を知っていてなお比企谷先輩に懐いてるんなら、この件で弄られようがなんだろうがそれはいろはの選択だけど、もし……もし知らずに懐いているのだとしたら……

——もしアレをいま初めて聞かされたら……そして、それが懐いてる先輩だと知ってしまったら……そんなの、残酷過ぎるよ……

「ねえねえいろはちゃん！ さっきの人といろはちゃんってどんな関係なの？ すっごく仲良さそうだったけどお」

チツ、わざとらしくてムカつくわ……

お前らもさっきまでの私達の会話、一言一句逃さないようにしっかりと聞いてたでしょが……

「んー、仲良いつていうかー、生徒会の仕事でお世話になってるってだけかな」

「えー！ うっそお？ それだけえ？ 超仲良しに見えたよお？ なんかならあ……一線超えちゃってるくらいな……？ なくんちやってえ、あはっ」

「……は？」

いつもなら相手にしてない襟沢だけど、さすがに今は勘に障ったのか、いろはの声色がぐつと低くなる。

そして普段は一方的に想うばかりで相手にされず、今までのらりく
らりと軽く躲され続けてきた襟沢は、ついに憎き一色いろはの心を
ザワつかせられたことに気を良くしたのか、ニヤリと口元を歪めた。
「あんなに楽しそうにしてたんだもおん。いろはちゃんなら余裕で手
くらい付け……あ、ごめえん間違っちゃったあ！ 手くらい繋いでそ
うだけどお？」

「……」

なんとか苛つきを隠そうと、なんでもなような顔をして口をつぐ
むいろは。

あー……クソ襟沢の望み通りの展開になっちゃってることが気に
食わない。

……でも、たぶんここからだ。こつからがこいつの本番。

「でもっさあ……」

……来た。まだでもしか言っていないのに、このムカつくツラが
雄弁に語ってくれてるよ……こいつの次のセリフを……

「……あの人ってえ、例の有名人だよねえ……？ ああ、噂のお」

「……え、噂？ なんのこと？ 先輩なんて有名どころか、存在さえも
ほとんど認識されてない地味人間だけど……？」

そのいろはの言葉を聞いた瞬間、襟沢は鬼の首を取ったかのように
高らかに笑う。表情だけで。器用な顔芸だなこんにやろ。

「ええ〜!? いろはちゃんもしかして知らなかったのお？ ほらあ、
あの人だよあの人お！ 文化祭の時に一躍有名人になっちゃった学
校一の嫌われものの人お！ その噂は知ってるでしょお？」

「……え？ ああ、噂の人って……先輩のことなの……？」

——ああ……やっぱりか……やっぱりいろはは知らなかったんだ。
比企谷先輩がああ噂の嫌われ者だったこと。

確かに一年の間でもそんな噂は流れたけど、私達はさして興味無
かったから、大して話題にもならなかったんだよね。だからそんな二
年生が居るらしいってトコで話が止まっちゃって、当然のように顔

も名前も全然知らなかった。

それが今になって私達の……いろはの首を締めるだなんて……

「そーだよお？ えー、知らなかったんだあ！ ちよつとヤバくなあ
い？ 学校の有名な生徒会長サマが、実はそんな二年生と仲良しで
したあ、なんてねえ！ これはマジでちよーヤバいってえ」

勝ち誇った顔でいろはを見下ろす襟沢。

でもいろはは襟沢なんかを意識を向けてる余裕なんて無いかのよ
うに、私達へと視線と質問を向ける。

「ねえ、どういうこと……？」

震え気味ないろはの声音に、私達は視線を外して答える。

ごめん。ちよつと……見てらんない……

「……さっきいろはが教室出てった後にさ……ほかのクラスの子たち
が入ってきて……「ねえ、今のつて例の二年生じゃない!？」って盛り
上がっちゃって……」

「私らも止めようと思ったんだけど……無理だった……」

「……ごめん、いろは……」

私達から事情を聞きたいろはは、肩を震わせてすつと俯いた。

俯いてしまったいろはの表情までは確認出来ないけれど、耳まで
真っ赤に染まっている……

学校中で悪い噂になった先輩だと知らずに懐いてたなんてことを、
クラス中で騒がれてバカにされてたなんて知ったら……そりや恥ず
かしくて悔しくて堪えないよね……

肩を震わせ俯くいろは。

そんないろはに声を掛けられない私達。

その様子を愉しげに眺め、口元を歪ませ続ける襟沢。

その一瞬、教室内は不気味なほどの静寂に包まれたのだった……

続く

【リメイク】やはり私の友達のはじめて物語はリメイクされる【第3話激闘編】

しん、と静まり返る教室で、たぶん……いや、間違いなく大好きなのであろう先輩の真実を知ってしまい、肩を震わせて俯くままのいろは。

「……いろは」

あんだけ楽しそうに先輩と話してるとこも見ちゃったし、あんだけ楽しそうに先輩の話をするとも見ちゃったから、今いろはがどんだけ辛い気持ちなのかはよく分かる。

……いや、分かるだなんて無責任なことを、軽々しく言っちゃっていいことじゃないんだろうね。それを分かるって言ってもいいのは当事者だけなんだから。

でもね……一色いろは、あんたにはそんな姿は似合わないよ。

あんたはいつだって余裕の笑みを浮かべてるムカつく小悪魔なんじゃないの？

懐いてる先輩がちよつと嫌われ者だって知ったくらいで落ち込むなんて、そんなの私たちの親友の一色いろはじゃないでしょうが。へー、それがどーかしたあ？ くらい言えよバカっ！

……こんないろはは見たくない。でも、悔しいけど今だけはどうしようもないのかもしれない。だから私は……んーん？ 紗弥加も子ども、この一色いろはにこんな姿を晒させている張本人をキツくキツく睨み付ける。

俯いたままのいろはに、勝ち誇ったムカつく笑みを向けているこのクソ女に。

「襟沢……っ」「……あんたさあ！」「マジムカつく……」「ぷっ」

……………ん？

ん？ ん？ あつれ〜？

いま私たちグループは襟沢に向けて怒りの言葉を放ったよね？
なんか変なの混じってなかった？

あれえ？ と思ったのは私だけじゃないようで、皆して疑問符を浮かべた間抜けヅラで、目を合わせて首をかしげる。

おい、なんでお前まで一緒になって私達と見つめ合ってたよ襟沢。

そして私達はその変な音がした方向へと目を向ける。
そこには……

「……………く、くくく……………」

なんかいろはすが俯きっぱなしで超ぶるぶる震えてますが。

あ、あれ…………？ そりや確かに最初から肩を震わせてはいましたけども……………なんか思ってたのと違くなーい？

「…………ア、アハハハハハっ！ ひーっ！ も、もうダメっ！ ぶはあっ！」

そしてついにいろはが壊れた。机とかバンバン叩いて悶え苦しんでんですけど。なにこれ。

「ひーっ……………ひー……………ふう……………ぷっ……………くうっっ！」

いろはは笑いを堪えようと、息を深く吸ったり吐いたりとなんとか呼吸を整えて、ようやく落ち着いてきたようだ。

……………え？ いやいやちよつと待って!?! もしかしてずっと震えてたのって、ただ笑いを堪えてぶるぶるしてただけなのんっ？

うっそマジかよ。次話に跨いでまで引っ張ったせつかくのシリアス返せよこんにやろう。とんだシリアスクラッシャーだな。

いやん次話とか言っちゃった☆

「ハア、ハア……………あー、そつかあ。なーんだ、うん。そういう事かー。」

……ふーっ……なるほどねー……あの噂の二年生が先輩だったなんてね。ぷーっ！ ヤっぱい超笑えるんですけどー。なんで今まで気付かなかったんだろってくらいにイメージぴったりすぎー」

さんざん笑い倒してようやく落ち着いてきたいろはは、一転、呆れたような、優しくも哀しげな微笑みを浮かべた。

「……はあ、先輩はやっぱり前からそんな事ばっかしてたのかー。……ったく……だからあんな事になっちゃうんじゃない……ホント……あのバーカ」

なんだろ、この笑顔。物凄く切なそう。

さつきまでは大好きな先輩の真実を知っちゃってショックを受けてるのかと思ってたけど、今のこの表情は全然別物に感じる……

なんていうのか、そんな薄っぺらい感情じゃなくって、もつと深く優しくて哀しいなにか。

そんないろはの内心はまったくもって分かりようがないけども、とりあえず置いてきぼりになってしまった私達（襟沢含む）は視線にていろはに説明を求む。

「……ん？ なに？」

「いやいやなにじゃないから！ え、なに？ どゆこと!?!」

なんで分かんないのん？ 結局ツツコンじゃったじゃん。

「どゆこととは？」

「いや、だってあんた比企谷先輩？ があの二年生だって聞かされて凹んでたんじゃないの？」

「だ、だよね！ てゆーか凹んでるところか泣いてんのかと思ったよ!?!」

堪らず智子も一緒になってツツコンできた。

「は？ なんでわたしがそんなことで凹まなきゃなんないの？ てか泣くわけないじゃんないってんのー？」

なぜか心底バカにされる私達。

あれ？ 私達がおかしいの？

「だってさあ、大好……あ、いや……気に入ってる先輩が学校中の嫌わ

れ者って言われたら、普通キツくない……？ だって、あの“二年じゃん？”

なぜかバカにされて茫然自失な私達に成り代わり、紗弥加が参戦。そうよ、言ったあさい。

「だって先輩だし」

確かに語尾に草が生えてるであろう感じで、けらけらと笑ういろはす。あんた先輩を尊敬してんじゃねーの？

「で、でもさあ、……なんつーか……最低なヤツって、学校中で噂になった人なんだよ……？ その……シヨックだったりとか、軽蔑したりとか……普通そういうのすんじゃん……？」

そう言う紗弥加はさすがにちよつと言いつらそう。

そりやね、友達の懐いてる先輩の悪口を本人に言うなんて、並大抵の嫌さじゃないもんね……

するといろはは紗弥加を見て……いや、私達の顔をすつと見渡してから、顎に人差し指をちよこんと添えて、んー……つと一思案。

「そういう事ねー。うん、みんなの言いたい事は分かったかも。……まあ、そりやね？ 普通だったらこの話を初めて聞かされたら、ちよつとうわって思うかもね。……でもそれは先輩の事をよく知らなければの話で、先輩がどういう人かって理解してる人だったら、呆れこそすれ……軽蔑とかはしないかな」

「呆れても、軽蔑は……しない……？」

そう問う私に、いろはは自信たつぷりに並の胸を張る。

「そ。先輩は確かに嫌なヤツだし、周りからは最低って思える行為だって平気でやっちゃうバカな人ではあるんだけどね、……でも、その最低な行為にはそれなりに理由があるんだよねー。あの人は意味もなく他人を傷つけるような真似は絶対にしない。だって、そんなの先輩にとつて非効率でしかないもん。だから文化祭の悪い噂もたぶん間違いではないんだらうけど……そうしないとつと大変な事になってたからなんじゃないかなー。うん、なにがあつたのかは知らないけど、それは間違いはないねー」

腕を組んでうんうん頷いて、一人で勝手に納得してしまつたいろは

の表情には一切の迷いが無い。

……なんだよこれ？ 超負けた気分なんだけど。

ラブ的な惚気では無いけれど、これ以上の惚気話ってある？ だって、どんだけ信頼してんのよってお話だもん。

なーんか心配してた私達がバカみたいじゃね？ なんて苦笑しながら目と目で通じ合う私達ではあるけども、この中で納得していない人物がひとり。

せっかく勝ち誇ってたのに、突然あつさりと展開を引つ繰り返されて固まってしまっていた襟沢がハツと我に返り、動揺も隠しきれずに顔を真っ赤にして食い下がってきやがった。

「……い、いろはちゃんさあ、そんなに無理しなくてもいいよお!!」

そ、そりやあんな最低な人と親密にしてたつてのがバレたら恥ずかしいのは分かるけどさあ……!!」

「別になんにも恥ずかしいことなんか無いけど？ ……そもそも恵理ちゃんさー、先輩のこと知ってるの？」

「そ、それは知ってるよお！ だ、だって文化祭のときみんな最低な二年生って言ってたじゃあん！」

「あはっ♪ ♪み、ん、な♪だつてー、超ウケるー！ 会った事も話した事もないのに、その♪みんな♪が言ってるの聞いただけで知ってるってコトになっちゃうんだー。じゃあ恵理ちゃんにとっては、こないだのワイドショーで不倫疑惑で噂になってたあのゲイノーゼンも知り合いなんだあ！ すつごーい！ ……あ、じゃあもしかして恵理ちゃんってアレ？ テレビでしか見たことないイケメンアイドルを「あの人って超いい人だよねえ☆」とかって訳知り顔で言っちゃうタイプ？ あはは、恵理ちゃんてば超ピュア〜」

「……ぐぎぎっ」

これはもう完全に攻守逆転ですわ。いや、いろはにとつては、そもそも攻められてる時間なんて存在してなかったのかも。

つまりは開始直後からずつというはすのターン!!

「ぶつ、なんも知らない癖に、噂だけ信じて誰かを馬鹿にするのって、

ホンットくつだらなないよねー。ピュアな恵理ちゃんは知らないかも
しんないけど、芸能リポーターの人達はお仕事で言ってるだけだから
ねー？ わかる？ ビジネスね、ビジネス。 ……まあ？ 仮に恵理
ちゃんが先輩の事を多少知ったところで、お子さまにはあれを理解す
るのはちよおつと難しいかなー。だからごめんねー？ 先輩の良さ
が分からない人にはなに言われてもなんも感じないやー」

こいつつ…！ なんも感じないやー、とか絶対嘘だろ……完全に
襟沢を殺しに掛かってるんですがそれは。

そしていろはは一方的な虐殺に終止符を打つべく、ニヤリと頬笑み
トドメを差しに行く。

完全に猫科の狩り方ですねありがとうございます。ごさいました。

「まあ？ 恵理ちゃんがこの先もわたしを弄る為に先輩の悪口を広め
るならどうぞ自由にー。 ……でもー、それバレたら… ……雪ノ
下先輩に目え付けられる覚悟くらいはしといた方がいーかもね」

へ？ なぜ唐突にあの有名人の名が？

「… ……へ？ な、なんで雪ノ下先輩が出てくるの!？」

「ホントになにも知らないんだねー。 ……それはね？ 先輩が雪ノ下
先輩が部長を務めてる部活の部員だから。 ……でもただの部員じゃ
なくってね？ なんてゆーかあ、お気に入り所有物？ 的なの？ だ
からね、私が先輩を借りようとしただけでも超不機嫌になるんだよ
ねー、あの人。あれマジで… ……すっごい怖いよー… ……？」

な、なんとあの先輩が、まさか氷の女王の所有物とはッ！

襟沢みたいなエセ女王じゃ蹂躪不可避。

「… ……ふえ… ……？」

「あー、あとねー、結衣先輩もちよー怒ると思うよー？」

「ゆ、結衣先輩って… ……え… ……？ ゆ、由比ヶ浜… ……先輩… ……？」

「です。由比ヶ浜先輩。あの人も先輩とちよー仲良しだから。
… ……つーまーりー、どういう事だか… ……分かるよね？ 結衣先輩

を敵に回すって事はー、イコール三浦先輩も敵に回すって事だよ？」

あ、ヤバい、襟沢の口から魂が抜け駆けてる。

なんの気なしに噂の二年生をバカにしてたら、後ろに氷炎女王が控えていたでござる。なにそれ死ぬる。

しかも三浦先輩つつたらこいつが何よりも崇拜する女王様にそれに即死。

……だがしかし！ いろはのターンはまだまだ終わらない！

なんといろはは襟沢の口から出かかっている魂をむんずつと掴んで逃がさな—い。

そのオーバーキルっぷりは、まるでスライムの群れにギガデインをぶつ放すくらいの勇猛さでした！ うん。完全にただの虐めである。

「あー！ ごめんね、さつきちよつと嘔吐いちゃったかも！ 恵理ちゃんに言われてもなんも感じないって言ったの、あれちよつと嘘かもっ」

てへっ、と頭をこっんこしてるいろはの目は、どうやら一切笑ってませんね。

「あれね、わたしもやっぱあんまり面白くないかもー。これでも一応それなりに尊敬してる先輩だしねー。わたしを弄りたくてわたしの悪口言うぶんにはぜんぜん構わないんだけどー、そんなくだらない目的の為にあんまり先輩のこと悪く言うようならー、……せつかく會長って立場があるわけだし、職権濫用して学内的に恵理ちゃんを抹殺……デリートしちやおっかな？」

言い直しい！ 言い直しの意味イイ!!

えへへ♪ つと満面の笑顔でそう言うのと、次の瞬間にはとてつものくどす黒い声で、そつとこう囁いたのでした……

「……………だって、もともとは恵理ちゃんに与えてもらった會長職だしー？ ……人として、与えていただいたご恩はしっかりとお返ししなくつちやだよ……ね？」

仄暗い瞳と冷淡な微笑でペロツと舌を出すいろはすが恐すぎて、ちよつぴりチビリそうになってしまったのは内緒！ あと一押しで乙女が散らされちゃうところでした☆

そして、そんないろはの頬笑みを一身に受けている襟沢はといえば
……

ちーん。ご臨終です♪

どうしよう、あまりの無惨さにちよつと同情しちやつたじゃない。

今にも泣き出しそうな、生まれたての小鹿よろしくふるふる可愛く震えているエセ女王様に興味を無くした我らが小悪魔いろはちゃん
は、

「さてと、早くお昼ごはん食べちゃわないと……って、誰かさんのせいでもうほとんど時間残ってないじゃーん！ ……やっぱ抹殺しちや
おっかな」

などと物騒なことを呟きつつ、慌てて残りのお弁当を食べだした。
やめたげてよお！ ビクンビクンしはじめちゃつたからあ！

「……いろはってさ、やっぱ変わったよね。比企谷先輩の事、すごい信
じてんだね」

白目を剥いて痙攣しかけている襟沢はさておき、私は目の前でハン
バーグをはむはむと咀嚼する友達に、そう訊ねずにはいられなかつ
た。

今のこいつは、私の知る一色いろはとは、どうしても違う女の子に
見えてしまったから。私の知るいろはよりも、ずっと素敵でずっと本
物なナニカに。

そしたらさ？ 事もなげにこう言うのよねー、この子は。

「んー、わたしは別に先輩のことなんて信じてないからね？ 先輩の
ことをちゃんと見てる人なら、ちゃんと知ってる人なら、普通に「分
かる」ことだもん。そーゆーのって、信じるとは違くない？」

——なんかもう信頼が天元突破しすぎてて、聞いたこつちがアホらしくなっちゃいますよねー。

おいおい、それを信じてるって言うんだよ！ ふふっ、心の底から、ね。

こうして至って平和な日常は、何事もなく今日も無事に過ぎていくのでした。

こんな日常は嫌っ！ 胃がキリキリしちゃうわ。

続く

【リメイク】やはり私の友達のはじめて物語はリメイクされる【第3話完結編】

「家堀ー、部室の鍵よろー。今日は先生が保育園にお子さん迎えに行かなきゃなんないみたいで、早く帰んなきゃやらしいから超特急で返してきてね」

「かしこまつ……りました部長っ……！」

「いやだからアンタ、毎日毎日畏まりすぎだから。しかもなんで畏まってんのにピースしてんのよ……。んじゃおつかれー」

「おつかー！……れさまでしたー……」
「……」

……ふう、少しでも油断すると、このリア充な私が危うくオタクと勘違いされてしまいそうになる辺り、やはり上司……もとい上級生との会話つてのは危険がいっぱいだぜ……！

まさにトラップまみれのデンジャラスゾーン。バレないように気を付けなくっちゃ！

まあバレるもなにも私オタ……略っ☆

と、恒例の冒頭ひとネタをいつものように華麗に消化した私は、部長から預かった部室の鍵を顧問に届けるべく、夕焼け色に染まりかけた廊下を職員室へと向けて早足で歩く。

ふふふ、今日はちよつと早めに終わったことだし、早くマイホームに帰って、夕ごはんまでの貴重なプライベートタイムに昨日の深夜アニメでものんびんだらりと観くよおつとお！ とブヒブヒしていたそんな時だった。

ふと視界の端に、昇降口で上履きからローファーに履き変えてる女

の子の亜麻色の髪が、ふわりと愉しげに揺れているのが目に入ったのだ。

「あ、いろはじゃん」

お、あいつも今日はもう帰宅かな？

あつれー？ おかしいですねえ。まだ校庭からはサッカー部員がへいへい言ってる声がこんなにも聞こえてるっていうのにねえ（ゲス顔）

ま、武士の情けじや。まる分かりな理由は、敢えてここでは言わないでおいてやろうじゃないかね。

おっと、そんなことより、せっかくだしいろはと一緒に帰ろっかなー？ 呼び止めて鍵返してくんの待っててもらおっと。

「いろ」

はす早い、いろはす早いっ！ 呼び止めようとしたら、嬉々としてビュンッと走ってっちゃったよ！

おいおい逃げ足早いなっ！ どんだけ電光石火なんだよ。今どきはポケモンだってスイツとフリックしただけで簡単にゲット出来ちゃう時代なんだぜ？

……って、んん？ なんであいつ駐輪場に向けて爆走してっちゃった？

いろはんちってモノレール乗ってった先の駅じゃん。自転車通学ってレベルじゃねーぞ。そもそも自転車で来るとか聞いたこともないし。

「どしたんだろ、あいつ」

よく分かんないけども、私は職員室に行くのを一旦後回しにして、いろはを呼び止めるべく駐輪場に向かう為そそくさと靴を履き替えるのだった。

× × ×

一色いろは襟沢虐殺事件から数日。

正直、私達はあの事件以来、毎日気が気じゃなかったのよね。

なにせいくら襟沢を成敗したとはいえ、それ以外の大勢のアンチいろはの目にもあの光景——いろはと比企谷先輩のイチヤイチャ夫婦漫才——を目撃された事実の間違いはないのだ。

この連中が面白可笑しく低俗な噂を広めたって不思議でもなんでもないし、こつぴどくやられた襟沢自身だって、仕返しであることないこと言いまくって、いろはの評判を落とす作戦に出たっておかしくなかったわけだし。

でも、結果としてはそんな心配は杞憂に終わってくれた。つまりいろはへの悪意に満ちた噂は一切流れずに済んだのだ。

まあ単純に、今までなんでもないような顔して、笑顔で自分へのヘイトを受け流してた一色いろはが、実はキレたらあまりにも恐かった！ っつてもあるんだろう。それほどまでにあの時のいろはの黒さはヤバかったです（白目）

あとは比企谷先輩の後ろに控えるらしきビッグネーム様たちのご威光に、アンチいろは軍が恐れおののいたってのもあるんだろうね。

いやマジこの学校で誰が雪ノ下先輩と三浦先輩を敵に回したのかと思うつてのよ。そんな命知らずなアウトロー、この学校では生きていけないなっちゃうわ。

ま、実はいろは曰く「ただ恵理ちゃんを懲らしめたかったからああ言っただけで、ホントはいくら恵理ちゃん達が先輩を悪く言おうが、先輩の噂には雪ノ下先輩はともかく、三浦先輩は一切干渉しないんだけどねー、てへ♪」との事。

あの小悪魔めっ。実にぐっじよぶである。

とまあアンチいろは軍団の面々はそんな恐怖の連鎖から逃げ出したわけだけど、噂を流すのはなにもアンチ達だけではない。

そう。噂でなによりも恐いのは、当事者以外の数多くの第三者達なのである。

悪意まみれの噂の源流とは違い、悪意ではなく単なる好奇心と興味本位で噂の水流を裾野へと広げ回る支流こそが一番の厄介ごとにならない。

別にいろはが特に嫌いではなくとも、噂が流れていく途中途中で、こいつらがその噂の中にほんの僅かでも悪意を込めてしまえば、それは一気に汚水の激流となって各地に被害を及ぼしながら、どこまでも広がってしまうだろう。

ならばなぜ今回の噂が広まらなかったのかというと、いろはが比企谷先輩のあの文化祭の噂自体を全く気にしていない様子や、代名詞ともいえるあざとさなどどこかにブン投げてしまったかのような、あの素まる出しのいろはの姿に、クラスメイト達（女子）のいろはに対する空気が好意的なものへと変わっていったからなのだ。

あとおまけに、いろはが男に媚びる姿を見せなくなった原因を作ったであろう比企谷先輩と、そんな比企谷先輩と仲良くしてるいろはの仲を好ましく捉える空気さえ出てきちゃったりね。

だってさ？ 恋する乙女達は恋敵が居なくなってくれて万々歳じゃない？

それさえ無ければ、わざわざ学校の有名人、一年生にして生徒会長の肩書きを持つ一色いろはにわざわざ敵対する理由なんかないんだもの。

もちろんいろはに恋心を寄せていた男子諸君は面白くなさそうではあったけど、女子の間でそういう空気になってる時に、男子だけがアンチ比企谷の空気なんか出せるわけないじゃん？

悲しいかな、今の世の中は男尊女卑どころか、男女平等（笑）を謳った女尊男卑な優しくも厳しい世界なのですよ☆

あ、そうそう。実はあのあと襟沢のアホが人目もはばからず「うええええええんっ！」とか大声で泣きだしちゃってさあ、そんな襟沢を、なんと泣かせた張本人のいろは自身がフオーロしたんだ。

実を言うと、いろははって襟沢に感謝してるらしいのよね。
ただの嫌がらせではあったけども、恵理ちゃんが生徒会長に立候補させてくれなかったら今の自分は無いんだから……だってさ。

ふふっ、〃今の自分〃ってより、〃比企谷先輩と出会えた自分〃でしょうが。

そんなこんなで悪い噂は勝手にひとり歩きする様子も一切無く、この一年C組に巻き起こった大騒動は一件落着おつかれちゃん！
つてな形と相成りましたとき。ちゃんちゃん。

そんなここ数日の出来事を分かりやすく(誰に?)振り返りつつ、ばびゆんと走っていったいろはにようやく追い付いた私が駐輪場で目撃した光景。

それは、件の比企谷先輩がいろはにゲットされている光景でした。
なんだよ、いろチュウ早すぎゲット出来ないぜ！ と思ってたなら、駐輪場に向かう獲物を発見したいろはが比企チュウをゲットしてたのかあ。そりや電光石火にもなるねっ！

あらまあ、なんて楽しそうな笑顔で先輩捕まえちゃってるんですよ。思わず私がニヤニヤしちゃう！

だったら私がこのあと選ぶ選択肢などひとつしかないではないか！ そう、NO☆ZO☆KIである。

そして私はあのフェイマスな出歯亀家政婦よろしく、気付かれないようそつと対象に近づくのだ。私 家堀香織の使命を遂行する為に……存在理由を証明する為に……！

そう、これはあくまでも使命なのである。決して趣味や道楽でノゾキと盗聴を楽しんでいるわけではない！ そう、決して……

……………ふひっ！

× × ×

おっと、私が現場に到着した時には、すでに二人の熱いラブラブ

ちゅっちゅバトルは始まっていたようだ。ラブラブちゅっちゅしているとは言っていない。

校舎の陰からぴよこりと可愛く顔を出して、ぼっちりノゾキ盗聴実況体勢に入った私の耳に、甘ったる〜い「先輩♪」が届いた。

「せ〜んぱい♪ せつかくたまたま偶然奇跡的にもこうして帰りが一緒になったんだから、駅まで後ろ乗せてってくださいよお」

「ただけミラクルいろはちゃんだよ。」

あんた必死で追い掛けてったじゃん。そういうの、偶然とかたまたまなんて言いませんからね？

……しっかし、んー、なんだろう？ 前に盗聴した時も思ったんだけど、いろはが比企谷先輩に見せるあざとさって、なんか今までのと違うのよねー。

今の帰宅のお誘いだって、言ってみれば男子を荷物持ちとしてお誘いするのとおんなじシチュエーション・おんなじ甘え方のはずなのに、やっぱどこかが違う。

なにが違うんだろ……私気になります！ これはもう私の使命として、じっくりと舐め回すように観察しなくては！ 使命として。

てなわけで、とりあえずはこの極上の見世物……やりとりに集中しようではないかね。

「え、嫌だけど」

そんなあざと攻撃など我には一切響かぬわ！ とばかりに、比企谷先輩はなんの迷いもなく即拒否。

いろはの甘いお誘いをこうもすげなく拒否っちゃうとか、やー、やっぱ手強そうだわこの人。

「なっ!?… なんですですかー！ てか考える間もなく拒否とか酷くないですかー？ ……ったく、こんな可愛い先輩と放課後デートとか、それはもうすごいステータスなんですからね？」

不満げにぶくつと膨らんだあざといろははすだが、すかさず自分と一緒に帰る事のメリットを顧客に提示した。

いやあんたデートで……

「なんでデートになつちやうんだよ……駅まで送るだけだろうが」

「ふふふ、言質いただきましたー。いま送るって言いましたよね？
言いましたよね？」

毘がダイナミックすぎワロタ。

そんな雑な毘で獲物を捕らえられるわけないでしょーが。

「……なんでだよ。いやホント恥ずかしいんで勘弁してくれませんか
ね……」

「うつわ……先輩なに恥ずかしがってるんですか？ 頬染めちやつて
結構気持ち悪いですよ？」

「おい、しかめっ面でキモいって言われるより、真顔で気持ち悪いって
言われる方が遥かにダメージでかいんだぞ」

……ああ、ちよつと分かる。紗弥加辺りに真顔で「あんたイタイ
わー」って言われた時のダメージと叫びたらもうね……

比企谷先輩とはいい酒が飲めそうだぜ。うう、涙なしでは語れませ
んなあ……

「いやいや先輩のダメージとか、わたしにはどうでもいいですし。む
しろこんな可愛い後輩とこうして楽しくお喋り出来てるって奇跡が、
先輩のような冴えない男子にとっては極上の癒しじゃないですかー
？」

お前何様だよ。もしかして即座にイチヤイチヤ帰宅を拒否された
事に対して、意外とおこななの？

「そもそも恥ずかしいとか今さらなに言ってるんですかねーこの先輩
は。先輩なんて学校一の嫌われ者じゃないですか。まさか今さら周
りの目とか気にしちゃうんですかー？」

うん、やっぱちよつと怒ってますねあの子。辛辣ウ！

「甘いな。学校一の嫌われ者なんていう一過性のムーブメント、七十
五日を待たずしてとっくに過ぎ去ったわ。むしろ当時の方が、俺はこ
の世界で生きてるんだって実感できたまでである。だが残念ながら今
は元通り、学校で一番存在を認識されてない男に戻っている」

ブワツ……！ あれれ、おかしいな……急に前が見えなくなつたよ

……？

「ああ……なんかすみません」

「……いやそこは引くところじゃなくてツッコむところだろ」

比企谷先輩……今のはさすがのいろはでもツッコめませんで……
気の毒すぎて。

先輩はそんないろはの無慈悲っぷりに本日最大級にどよんと目を腐らせたんだけど、次の瞬間には少しだけ気まずそうに頭をがしがしと掻いた。

「……っーか、知ってたんだな、それ」

「……ま、先輩は悪い意味で有名人ですからね。そういうのは、いつの間にか自然と耳にも入ってきますよ」

……いつの間にか、かあ。

それを知ったのはつい先日のはずだけど、いろははそれを言わない。

たぶん自分を訪ねて来た時にクラスメイトにバカにされたなんて知ったら、比企谷先輩はいろはを心配した上、不用意にいろはを訪ねてしまった自分を責めちゃうんじゃないかと思ってるんだろうね、この子は。

「……だったら余計にアレだろ。それ知ってんなら、俺と二人乗りとか見られたらマズいって事くらい分かんだろうが、生徒会長」

そつかあ……この人の拒否は、いろはと一緒に帰るのが嫌とか恥ずかしいとかじゃなくて、いろはの立場を考えての拒否なのかあ。

……なんか、いろはがこんなにも懐く理由が良く分かった気がする。この人は、実はとっても優しいんだ。不器用そうな優しさだけど、そこがまたストレートにズバッと胸にくるんだろうね。なにせ普段異性からいろはに向けられる優しさって、まず間違いなく下心込み込みだもん。

……そんな不器用な優しさに触れたいろはは一瞬だけ哀しげな笑顔を浮かべた。

そりゃね、自分に優しさを向けて貰えるのって嬉しいけど、比企谷

先輩のその優しさって、向けられる本人にはちよつと悲しい優しさだもんね。

……いろははそんな不器用で優しくて、そして悲しい先輩をそつと抱きしめ……

「……………あつれえ？　もしかしてえ、わたしのこと心配してくれてますー？」

るわけはなく、ニヤアつと悪い笑顔でまさかの挑発的態度である。だからさあ、ちよつとはシリアスな空気を大切にしようよう！　さくせん、シリアスだいに。

「ば、バツカ、生徒会長に悪い噂が立つような学校、小町が安心して入学してこられなくなるだりようが」

ぷつ、いろはの挑発に照れくさくなって、慌てて否定しようとして壮絶に噛んで真っ赤になってやんの！　やっぱ不器用だわこの人。どんだけ分かりやすいのよつ。

「はいはい、しよーがないから今回はそういう事にしといてあげますよー。てゆーかあ、先輩ってシスコン発言を照れ隠しに使ったりしますよねー」

嬉しそうにからかってくる後輩と目を合わすのが気まづくなったのか、比企谷先輩はぷいっとそっぽを向いているはの追及から逃げ出そうと試みる。

まあ？　真っ赤になって目を逸らしちゃう時点でお察しなんですけども！

「……………ちつ、アホか。小町を愛する心なめんな」

「ぷつ、はいはい了解です♪　んじやそろそろ行きますよっ」

……なんだこれ？　どうなることかと思いきや、最終的には結局単なるイチヤイチャ劇じゃねーかよ……

ふええ、そろそろ見てるだけで胸が火傷しちやいそうだよ……

お願いだから仲良く爆散しちやってください。

「……………だからお前は人の話聞けよ……二人乗りなんかしねえつつつてんだろ」

「ふつ、大丈夫ですよー。そりゃ先輩は学校で一番嫌われてるかも

知れないですけど、わたしだって決して評判良くないですしねー。ま、女子限定ですけど。だからまあ嫌われ者同士が二人乗りしてたつて誰も気にしませんってばー」

そう言ったいろはは、いつの間にか比企谷先輩の愛車らしきママチャリの荷台に跨った状態で、満面の笑みを浮かべてサドルをぽんぽん叩いていた。

こやついつの間に乗車完了!? やはり比企谷先輩の事となると、いろはは光の早さになるのか。

「……いやお前いつの間に乗ったんだよ。……だから嫌だと……」

「せんぱーい、そろそろ陽も暮れちやいそうだし、わたし超さむいです。ほーらー、はーやーくー」

ぽんぽん。

「いや、だから……」

「なんですかこのまま生足女子高生を冬空の下で凍えさせて風邪ひかせるつもりですか？ はっ！ まさかこのままわたしを凍えさせて、風邪引かないようにその冷えた生足を暖めてやるぜとか言つて生太ももをいやらしい手付きでさする作戦ですか正直変態ちっくなのはちよつと無理かもですのでノーマルプレイでお願いしますごめんなさい」

ぽんぽん。

「……」

いろは、あんたすげーよ……もう有無をも言わせねーよ……てかノーマルプレイでお願いしますってなんだよ。

「ほれほれー」

ぽんぽん。

このままぽんぽんぽん叩かれたら、サドルも根負けして埋まっていっちゃいそう！

比企谷先輩！ サドルの為にもそろそろ折れてえ！

「ぐぬぬ………チツ、くそっ………きよ、今日だけだからな……」

ついに折れました。そりゃこれはもう折れざるを得ませんよね。ホントうちのいろはがご迷惑おかけします。

ちなみに比企谷先輩が折れた瞬間のいろはのニヤリ顔は放送禁止レベルでした。

澁々サドルに跨る比企谷先輩の顔を、してやったりと荷台から覗き込むいろはは、紛うことなきあざとい小悪魔。

数日前、偶然比企谷先輩が我がクラスに顔を出すまでは、このひと月ほどすっかりとナリを潜ませていた小悪魔笑顔。

でも、やっぱりナリを潜めてたつてのとはちよつと違うんだよねー。だって、ひと月前まで良く目にしてた、あのあざとい笑顔とは全然別物なんだもん。

その正体に、その違和感に、ついさっきまでは首をかしげてたんだけど、さっきまでの二人のやりとりを見てたら、なーんとなくだけど分かつちやつたかも！

……それは、あざとさの「質」が全然違うのだ。

今までのいろはのあざとさって、男に媚びて甘えていいように利用してやろう！ っていう打算的なあざとさだったんだよね。

でも今の……比企谷先輩に対してのあざとさには、そういつた媚びとか打算とかは全然感じない。

比企谷先輩って、いろはをあざといあざといとウザがりながらも、実はあのあざとさに対して結構照れちゃったりしてることもある。

なんだかんだ文句言っても、たぶん脳内では「なんだそれ可愛いじゃねーか」とか思っちゃってんじやなからうか？

だからいろはは、そんな照れた比企谷先輩を惑わせてからかいたくて、わざとあざとい一色いろはを見せつけてるような気がする。

だって比企谷先輩には素がバレちゃってんだもん。あざとさを見せても意味のない先輩に、わざわざあざとい自分を晒す必要性なんて一切無いじゃない？

利用するために演出するあざとさと、気になる人を惑わせたい乙女

心のあざとさ。

そんなん別物だつて思いますよね。そりや違和感覚えちゃうはずですよ。

——友達にばつちり見られているとも知らず、得意の小悪魔攻撃で比企谷先輩を上手に転がし、大好きな温かい背中をまんまと独り占めにして颯爽と走り去るいろはの横顔は、自身の火照る熱による赤みなのか、夕焼けに染まる街と同じ赤みなのかは知らないけれど、とても幸せそうな朱色に染まった、とつてもあざとい素敵な笑顔でした♪

やはり私の友達一色いろはがあざとくないわけがないっ！（ただしせんぱいに限る）

余談ではありますが、夫婦漫才に胸がいつぱいになってそのままひとり寂しく帰宅した私ではありますが、部室の鍵を返却するのをすっかり忘れて、ずーっと待っていたらしい顧問と、そんな顧問からの電話攻撃に悩まされた部長に、翌日こっぴどい仕打ちを受けたのはまた別のお話っ。

いやん！ もうこういうオチは間に合ってますから☆

おわり

なぜか私の友達にあざとさを封印する

校内に4時間目終了のチャイムが鳴り響き、本日のお昼タイムが始まる。

私、家堀香織（かほりかおり）はクラスの女友達4人でいつものようにお弁当を広げた。

その友達の中のひとり、一色いろはが、ここ最近ちよつと様子がおかしい。

この一色いろはという女は、恵まれた容姿の上に一年生にして生徒会長という肩書きを手に入れ、今や学校の超有名人、雪ノ下先輩や葉山先輩と並ぶ程の有名人だったりする。

なにがどうおかしいかと言うと、ここ最近すつかりいろはの代名詞とも言うべき『あざとい女』がナリを潜めている。

この一色いろはという女、とにかく男子に人気がある。その恵まれた容姿に加え、天性とも呼べる程の男たらしの才能で、クラスはもとより学年中にファンが居る。

打算的で計算的であざとい「私の可愛さアピール」に、お馬鹿な男共はコロコロ騙される騙される（笑）

意中の男子をたらし込まれた女子も一人や二人、十人や二十人では無いってくらい、手広く恨みを買ってるみたい！

その上、勘違いさせるだけ勘違いさせて、いざ告られるとバツサバツサとなぎ払う：女の敵でもあり男の敵でもあるような、そんな女だ。

じゃあなんでそんな女とつるんでるかって？

最初は私達も打算だったんだよね。

もともと私香織とおな中の友達、紗弥加と智子の3人は中学でも派手目なグループだった。トップでは無いけれど。

で、こんな男子（のみ）に人気な美少女をグループに取り込めば、トップグループになれるんじゃない？ってワケ。

女子の反感買ってヤバくなったら切り捨てちゃえばいいしね♪

最初はそんな軽い気持ちで誘ったんだけど、いざ付き合ってみたら、予想外に良い奴！

始めの悪印象との対比も相まって、気付いたら仲良しになってました（笑）

コイツ男の前ではあんなんだけど、女の前ではサバサバしててすごく話しやすいんだよね。

今では私らグループの中心になっちゃったよ。

男の前で急にぶりっこしても、私らの中ではまたかよコイツくっつてな感じ。

でもやっぱりこの女が良いヤツって理解してるのは私らだけで、大多数の女子には嫌われている。

イジリ（イジメでは無い）で、勝手に生徒会長に立候補させられちゃうくらいだしね。でも今やその逆境を逆手に取って学校中に知られる美少女生徒会長となってしまうあたり、やはりこの女は中々に侮れない。

× × ×

そんないろはが、ちょうど三学期が始まったあたりから、すっかり『あざとい女』を見せなくなった。

以前ならどんな時でも周りの男子に可愛さをアピールする事は忘れなかった。

甘い猫なで声で挨拶、目が合えば魅惑的な笑顔で悩殺。

頼みごとがあれば上目遣いでお・ね・が・い☆

でも今はもうそんな素振りは一切ない。

もちろん仲の良かった男子と顔を合わせれば挨拶はするし無視つて訳でもない。

ただ、そこには以前のようなあざとさは無く、周りの男子には興味が無くなっちゃった感じなんだよね。

そんないろはの変化にクラスの連中も首をかしげていたのだが、決定的だったのがD組の中西翔太君がいろはを訪ねてきた時だ。

中西君は、バスケット部の次期エースと目されるファンの多い爽やかイケメンだ。

ちなみにそんな中西君が、いろはに夢中になった事でアンチいろはの空気が決定的になったと言えなくもない。

いろは的にも中西君はお気に入り(利用価値的に)だったようで、数多く居る休日お出掛け荷物持ちの中でも、かなり利用頻度が高かったっけな。それはもういろはが所属しているサッカー部のパシリ、戸部先輩ばりに…

………こうやって冷静に考え直すと、いろはすマジぱないわー

でも、ここ最近全然お声が掛からない事が不安で不満だったらしく、ついに先日自ら我がクラスまでお誘いに來たのだ。

『なあなあいろはー。最近全然遊んでないじゃん。また買い物付き合うから、次の休みにでも遊びに行こうよ』

そんな中西君に、いろははあざとい笑顔をすることもなく、いつもの猫なで声で惑わすでもなく、冷めた笑顔と淡々とした口調で、こう言い放ったのだ。

『あ、翔太君ごめんね。最近生徒会の仕事忙しいし、そっちに集中したいから、もう【そういうの】やめたんだ。』

その冷めた態度にクラス中絶句！中西君も絶句！

静まり返るなか周りの目を気にしてか、「そっかあ…」と大人しく自分のクラスに戻っていったけど、その背中は確かに泣いてたね(涙)ふぁいとっ！

× × ×

お弁当を広げながら、ずっとみんなが思っていた事を口にしてみる。

「いろはさー、なんか最近変わったよね」

「そ？別に特に変わんないと思うけどー。あ、でも意外と生徒会の仕事楽しくて、結構充実はしてるかも」

うーん。そんだけかなあ？紗弥加と智子も、なんか納得してないカ

ンジ。

そんな事を考えながら卵焼きを突いていると、視界の端の扉んトコで、見知らぬ男子がうちのクラスの地味男（あいつ名前なんてったっけ？）と話してるのが見えた。

チラッとそつちに視線をやると、アレ？なんか見たことあるな、あの人の人。

あ、前にいろはが生徒会長に決まるちよつと前くらいに、あんな感じでいろはを訪ねてきた二年生か。

生徒会の人なのかな？

そういえばあの時はいろはの表情変化は凄かったな（笑）

二年生に呼ばれてるって聞いた途端、目をキラツとさせてグルンと凄まじい勢いでそつち見たかと思つたら、ほんの一瞬だけ悲壮感漂うガツカリ顔。

でも次の瞬間には営業用スマイルを張りつけてパタパタ走つてたっけ。

ま、二年生つて聞いて、おおかた目を付けてる葉山先輩が訪ねてきたのっ!？って期待したんだろうけど、でも流石にあのガツカリ顔は無いわー（笑）先輩に対して…つてか人として？

今回もあんな早ワザ表情変化で笑わせてくれるかなー？つてワクワクして見ると、地味男がオドオドというはに声を掛けてきた。

普段私らトツプグループに話しかけたり出来ないから、緊張しちゃうんだよねごめんねー

予想通りいろはは二年生に呼ばれてるって言われたその瞬間…

キラツ！と！

グルンっ！と！

そしてガツカ…あれ…？

あれ？なにその表情…

期待したガツカリ顔はどこいったの？

超嬉しそうな満面の笑顔なんですけどこの子。

あれあれ？訪ねてきたの前と同じ人ですよ？後ろに葉山先輩でも居たの？

その二年生の姿を確認すると、すでに地味男の存在など忘れているのか始めから見えてなかったのか、一直線にパタパタ駆け出したいろはさん。そして…

「せんぱーいー！どうしたんですかー？」

甘い！甘すぎる！

久しぶりに聞いたよいろはの甘い猫なで声！

ここ最近ナリを潜めていた甘い甘い甘え声。

でも、若干の違和感。甘い猫なで声ではあるんだけど、いつものあざとさをあんま感じない。

ただただ可愛い甘え声。

クラスの連中も久しぶりのいろはは 스위트トボイスにビックリして、様子を伺ってる。

おのずと室内が静かになり、いろはとその二年生の会話がよく聞こえる…

× × ×

「先輩がわざわざわたしに会いに来るなんて珍しいですねー。あ！もしかしてぼっちランチが寂しくて、可愛い後輩と一緒にお昼したくなっちゃいましたかー？」

「は？プロのぼっちなめんなよ？何年お一人様ランチを楽しんできたと思ってるんだよ」

…プロのぼっちってなんですか…

「さつき購買行く途中、たまたま平塚先生に捕まっちゃったんだよ…なんか生徒会に緊急召集が掛かったらしいから、ついでに一色呼んできてくれたって」

「えー…仕事の話ですかー。つまんないですね先輩って」

「いやいや、貴重な昼飯時間を割いてわざわざ呼びに来てやったのに、俺責められちゃうの？大体呼び出しなら、校内放送なんかで呼べばいいじゃねえかよ……」

「あー、でも平塚先生が校内放送使ったら放送事故になっちゃうかもですよー。色んな意味で（笑）」

「お前酷いから！先生ああ見えてメンタル超弱いんだよ？超泣いちゃうよ？」

「まあそんな事より……」

「いやお前そんな事って」

「先輩さつきからなんで若干キョドってんですか？なんかうつすら照れてて直視出来ないくらいキモいんですけど」

「あ？一年生の教室来て女子呼び出すなんてそうそう経験あることじゃ無いから緊張してんだよ。……てかお前の言葉の刺が鋭すぎて今度は俺が泣いちゃうよ？」

「ごめんなさい我慢して直視します」

「もう泣いちゃおうかな……てかお前年下女子で良かったな。年下男子……てか大志だったら今ごろ確実に埋めちゃってるところだわ」

「タイシ？タイシって誰ですか？」

「あー、うちのクラスの川……川……川島？ってどっかで一回会ったことあったよな。アイツの弟だ」

「川島？川崎さんなら会ったことありますけど……クリスマスイベントの時に保育園で会った、ちよつと目付きが危ない人ですよ？……てかなんでぼつちの癖して、クラスメイト、しかも女子の弟をフアーストネームで呼ぶほど親密な仲なんですか……？もしかして川崎さんて人と仲良いんですか……？」

「……あれ？いろはさんなんか途中から声のトーンが低くくて怖いんですけど……」

「は？ちげーし。大志は妹の友達……いや、妹にまわりつく羽虫だ」

「うっわ……出たシスコン……てか妹さんて小町ちゃんですよ？いい加減紹介してくださいよー。わたしだけなんですけど。面識ないの」

「……なんかさつきから話が脱線しまくってただの世間話になっ

ちやつてますけど、緊急召集の方は大丈夫なんですかね…

「私だけって…なんでお前普通に仲間内みたいな顔してんの？そもそもお前と小町なんて恐くて会わせられるかよ。自慢じゃないがうちの妹はあざといんだよ。可愛いけど。そこにあざとマスターの二色なんか会わせてみる。あざとシスターズ結成で不幸な未来しか見えん」

「わたしと小町ちゃんです。シスターズって、それってもしかしてプロポーズのつもりですかすがにまだそこまでは考えられませんごめんなさい」

「アーハイハイソーデスネー…：てかいつまでもお前と世間話なんかしてる暇ねえんだよ。早く購買行かないとパン無くなっちゃうじゃねえか」

「あー！だったら召集終わったあとで私のお弁当分けてあげますから一緒に食べましょうよー」

「は？いやいらねえし。大体お前のあざとさ100%の可愛らしくちっちゃい弁当なんか分けてもらったら、お前の旺盛な食欲が満たされなくて、午後の授業で腹鳴りまくってクラスメイトの皆さんが授業に集中出来なくて迷惑掛けちゃうじゃねえかよ」

「…：先輩、それもうセクハラの域ですよ？クラスメイトの前でセクハラされて辱めを受けたって雪ノ下先輩と結衣先輩に言い付けちゃいますよ」

「勘弁してくださいすみませんでした。…とにかく俺はもう行くからな。パン無くなっちゃう。お前も早く生徒会室行ってくれよ…：あんまり遅いと俺が平塚先生からお叱りを受けるんだよ、物理的にな」

「え!?ちよつと待っててくださいよー！せつかくだから一緒に行きましようよー！」

「いや俺は別に生徒会室行かないし」

「えー…でもちよつとそこまでもいいから一緒に行きましようよー！」

「そこまでって、生徒会室と購買逆方向じゃねえか…つたく、じゃあな」

「ちよーちよつとー!!」

お！凄い勢いでいろはが走ってきた！

せかせかと広げたお弁当片付けながら

「香織達ごめん！急ぎで生徒会の仕事が出来ちゃったからもう行くね！」

「う、うんがんばってねー…」「がんばってねー…」「行つてらっしゃーい…」

猛ダツシユで教室を出て、生徒会室とは逆の方向に走って行きながら遠くの方で喚いてる。

「…待ってくださいよー！せんぱーい！」

なんかあんないろは初めて見た気がする…

今まで男と喋ってて、あんなに楽しそうだったっけ…？あんなに生き生きとしてたっけ…？

紗弥加も智子も同じ事考えてるのかポカンとしてる。

クラスの連中も呆気にとられてるみたいで静まり返ってたんだけど、次第にザワついてきた。

「え？なにあれ…？一色サンてあんなだったっけ？」「最近大人しくなったかと思ってたんだけどー」「てかあれ誰？あーゆーのが好みなん？」「だって葉山先輩狙いじゃないの？あの人」「どうせいつもの媚びてパシって使い捨てでしょー(笑)」「でもなんかそんな風に見えるなかつたけど…」「いろはすマジかよー(涙)」「うわー…もう死にてー…」

なんて好き勝手言いたい放題でクラス中祭り状態になってるよ！
そんな様子を見る私達も、顔を見合わせてぎこちなく笑う。

「いろはが最近おかしかったのって…」

「ね、アレ見ちゃうとねえ…」

「やっぱそういう事だよね…」

果たしているはが帰ってきた時、このクラスの空気はどうなってる
んだらうか…ちよつと心配…

そして私の友達は噂に俯く

いろはが生徒会の仕事に向かってから、もう30分くらいは経ったかな？

まあちゃんと生徒会室に行ったんだか二年生の人にくっついていつちやっただか分かんないけど…

とにかくその間教室内はすごい事になっていた…

廊下でいろはが騒いだもんだから、「さっきのアレなにー??」なんて他のクラスのアンチいろはの女共も下世話な情報交換にやってきては話に花を咲かせてた。花って言ってもラフレッシュレベルの臭さだけどね…ま、嗅いだことないけどさ。

私達も聞きたくもないのに、ちよつと嫌な話なんかも聞かされてウンザリ。正直表情が固まる。

智子が心配そうに

「コレいろは帰ってきてきて大丈夫かな…」

「ちよつとヤバイよね。せめて5限始まるギリギリくらいに帰ってきての方がいいかもね…」

紗弥加も同意しながらちよつと顔が青い。

メールしとこっか?なんて話をしてる時に、ちようど帰ってきてちやつたよ、この子…

ガラつと扉を開けた途端に室内に静寂が広がった。

そんな様子を不思議そうな顔をしながら席に戻り、キョトンとした顔で訊ねてきた。

「なんか変じゃない??なんかあったのー?」

「え?あ、うん。ちよつとねー…」

「へー」

と聞くだけ聞いといて一切興味無さそうなお返事。

…いやお前だよ!?!え?なにこの子…いつもあれだけ計算高く振る

舞ってるくせに、自分がなにをしたか気付いてないのっ!? まったくもう、ニブチンさんなんだからっ!

ってそんな場合でも無いんだけど……

でも確実にこれからの会話はクラス中に聞かれてると思っただ方がいいかも……

さっきのあの嫌な話もあるし、極力いろはの不利にならないようにしなきゃ。

紗弥加と智子に目配せする。うん。

なんてアイコンタクトを繰り返していると、私達の気苦労などつゆしらず、軽い感じで先にいろはが喋り出した。

「いやー危ない危ない! お昼取る時間なくなっちゃうところだったよー。これで食べる時間まで搾取されるようだったら、生徒会役員満場一致で教育委員会に物申してる所だよー」

「えっと、大丈夫だったの? 緊急召集って」

「それがさー、結構大変そうなんだよねー。まったくー! 完全に時間も人手も足んないよー」

大変大変と嘆くわりには、なんかニヤニヤと楽しそうですね。智子も気付いたのかいろはに訊ねる。

「ん? 大変そうなお割にはなんか楽しそうじゃない?」

「そんなことないよー。大変でやんなっちゃう! まあ仕方ないから思いつきりこきつかっちゃえばいいかー(笑)」

「えっと……こきつかうって、もしかしてさっきの二年生の人?」

って智子のおバカ! わざわざ地雷を踏み抜きに行くなっつーの!! 気になるのは分かるけどさ。うん……正直いろいろ気になりますよねー。

「そうそう。先輩って便利なんだよねー。今回は大変って大義名分あるからもう使いたい放題♪」

紗弥加もたまらず乗っかりました!

「あの人ってどういう人なの? 生徒会の人? いろは超仲良さそうだっ

たけど」

なにこの子達も分かってないのお？さつき目配せしたじゃーん…

「生徒会の人では無いんだけどさー、比企谷先輩って言って、なんか何でも屋みたいな変な部活の人なんだけど、わたしあの人の口車のせいで生徒会長やるハメになっちゃったんだよねー。だから仲良いつていうか、きつちり責任とって貰ってるって感じ？」

やるハメになったって割には、すつごく楽しそうですね、いろはさん！もう超ニヤついちゃってるよこの子は…

ああ…もうダメだ。いろはの為にも地雷踏みたくないんだけど、いろは楽しそうだし私達もほっこりしちやって、つつい色々聞いてしまふ…

「そう言えばさー！緊急召集とか言ってた割に、いろは話に夢中になって中々行かなかったじゃない？なんか生徒会室と逆方向に走ってっちゃってたし。大丈夫だったん？」

「いやー、平塚先生に怒られかけたからさー、『え!?先輩が呼びに来てからダツシユですぐ行きましたよ!?でも先輩呼びに来た時には戦利品(パン)たんまり抱えてたから、すっかり購買寄ってから来たんじゃないんですかねー?』って言ったたら、すんなり許してくれたよ?わ・た・しの事は(笑)」

うわっ！超悪顔でケラケラ笑ってるよこの子！マジ悪魔！

ひとしきり笑った後は一瞬考え中みたいな顔したと思ったら「ブツ！」って吹き出して咳き込みました！たぶん比企谷先輩とやらが平塚先生に物理的なお叱りを受けて必死で言い訳してる所を想像しちゃったんだろうね(笑)

比企谷先輩は可哀想なんだけど、いろは楽しそうだし、まいつか。咳き込んで苦しそうなのは、最近マイブームらしい千葉県民御用達のエナジードリンク・MAX(コーヒーとは言っていない)で喉の詰まりを流し込む。

このエナジードリンク、その昔食堂のおっちゃんになんでその自販にMAXコーヒー入れないのかって文句言ったら、あんなものコー

ヒーじやねえ！ってマジギレされたからねっ！まさかの実話だよ☆

「そう言えばいろはって今までそんなの飲んだっけ？殺人的な甘さじゃない？」

「ねー。でもまあ慣れちゃえば飲めなくもないよ。…人生は苦いから、コーヒーは甘いくらいでちょうどいい…ってね！」

キリリと渋い顔してエナジードリンクをブランドーのように掲げるいろは。

「いや、キリッ！じゃないし。なにそれキャッチコピーかなんか？」

「ああ、前に先輩がこんなような事を大真面目に言ってたんだよねー、バカでしょあの先輩（笑）」

こんな悪口を楽しそうに語りながらも次の瞬間には「でもねー、あぁ見えて文系の成績だけは超良くて、国語だけなら学年3位らしいよ！」とか「あの腐った目とか雰囲気で損してるけど、よく見ると意外とイケメンなんだよっ」なんて嬉しそうに、まるで自分の事のように自慢気に話すいろは。

やだなんか可愛い。

クラス内のヤバイ空気なんかすっかり忘れて、なんか可愛いいろはをつまみにほっこり語り合っちゃってたんだけど、視界の端に嫌なものを見て思い出した：

なんか会話に加わりたそうにウズウズしてる金髪縦巻き女が居る。

…：襟沢恵理《えりさわえり》。私達がいろはを加えてトップグループを作らなければ、この女がトップグループの中心だったんだろう。

そしていろはをイジリと言う名のアレで生徒会長に立候補させた

張本人：

なぜそんな事をしたのかと担任に問い詰められた際には

『一色さんならみんなに人気あるし超可愛いから、いい生徒会長になってくれると思ったんです』

なんて悪怖れもなく言うくらい、いろはの事が大嫌いな女だ。

例のD組の中西君も狙ってたんだよね、コイツ。

その髪型からお察しの通り、二年の三浦先輩をリスペクトしている女王になりきれなかったなんちゃって女王様。

この劣化版三浦の事は私達も大嫌いで、ちよつと前にいろはに陰口を言ってみたりもしてた。

『襟沢って三浦先輩意識し過ぎだよねー。劣化版で言うの?』

『そ? ああ見えて三浦先輩は可愛くて好い人だよ? なんかお母さんみたいな』

三浦先輩とは似ても似付かぬお母さんという単語が出てきてビツクリしたけど、よくよく考えたら「三浦先輩『は』」ってセリフの裏の意味に気付いて寒気がしたのと同時に、ああ…いろはもこの女嫌いなんだなと思った。

そんな劣化版がつかつかやって来た。ああ…コイツ今ここでアレを言う気なんだろうな…

さつきまでのほっこり感が、一気に冷えきっていく…

止めたいけど、もうクラスの皆が知ってる事だから、たぶん止められない。

願わくば、いろはにはすでにその事を知っておいて欲しい。

それを知っていてもなお比企谷先輩に懐いているなら、それはもういろはの判断なのだから…

でも知らずに懐いているのだとしたら………

「ねえねえいろはちゃんさあ、さつきの人とすつごく仲良さそうだったよねえ?」

何言ってるのコイツ、わざとらしい…さつきうちらで同じような会話してたの聞いてたクセに…

「あ、恵理ちゃん。うーん、仲良いっていうか、単に生徒会関係でお世話になってる先輩かなー、まあそこそこ尊敬してるけど」

「えー! うそお? 超仲良しにしか見えなかったけどお! なんなら一線

「超えちやつてるくらいな？」

「……は？いやいや別にそんな事ないから」

普段は襟沢の言動なんて大して気にも止めていないいろはの声のトーンが若干落ちる…

それに気を良くしたのか襟沢が畳み掛ける。

「またまたあー！あんなに楽しそうにしてたんだから、そんな訳無いってえ。でもさあ、あの人ってアレだよねえ。噂の二年生！」

…来た…

「噂？なんのこと？」

「ええ!?もしかして知らなかったりするのお？ほらあの人だよ！文化祭でやらかしちやつて学校一の嫌われものになつちやつたっていう例のあの人！その噂はさすがに知ってるでしょお？」

「……え？先輩があので二年生なの…？」

そのセリフが襟沢の顔を醜く歪ませる。

「そーだよお？マジで知らなかったんだあ！ヤバくなあい？学校中に知られる美少女生徒会長サマが、そんな二年生とな・か・よ・し☆だなんてえ！」

勝ち誇ったかのようなムカつく顔でいろはを見下す。そしていろはは視線を私達の方に向ける…

「マジで？どういう事…？」

ちよつと震えた声のいろはに私達は目を合わせられず、視線を外して答える。

「…さつきさ、いろはが教室出てった後に、ほかのクラスの子達が入ってきてさ…、今の人って例の二年生じゃない？ってクラスで盛り上がっちゃつてさ…」

「あたしらも止めようと思ったんだけど…全然ダメでさ…」

「……ごめん」

いろはは肩を震わせ俯いている。

下を向いてるから表情までは見えないけど耳が真っ赤だ…

そりやそうだよね。知らずに懷いて尊敬してた先輩が、あの噂の二

年生だったなんて。それをクラスで騒がれてたなんて……
恥ずかしくて悔しくて堪らないよね……

俯き肩を震わせるいろは。

声を掛けられない私達。

口角を上へと歪ませ見下ろす襟沢。

教室内は一瞬の静寂に包まれた……

やはり私の友達にあざとく微笑む

「いろは…」

私は俯いたまま肩を震わせるいろはから視線を襟沢に移した…
紗弥加達も勝ち誇った顔してご満悦な襟沢を睨んでる。

「襟沢…あんたさあ！なん」

「ぷっ！」

「??」「??」「??」「??」

ん??なんだ今の？

私達はその音がした方へ顔を向けた。

そこには…え??なんかいろはさんが超プルプルしてるんですけど
！そして…

「くくく…く…く…アハハハハっ！ひーっ！もうダメっ！ブハッ
！」

ヤバい！いろはが壊れたっ!?なんか大爆笑してるんですけど!?机
とかバンバン叩いてるし！

「ひーっ…ひー…ふう…ぷっ…くうっっ！」

なんとか笑いを堪えようと必死に息を整えて、ようやく落ち着いて
きたみたい…

…え?いやいやいや！俯いて肩震わせてたから超心配し
たのに、ただ笑いを堪えてプルプルしてただけっ!?

「あー…ハアハア…なんだ、うん。そういう事か…ふーっ…なるほ
どなるほど…いやあ、あの噂の二年生が…ブツ！せ、先輩だったなん
てね。プーっ！ヤバいウケる！言われてみればイメージぴったり過
ぎるっ！むしろなんで今まで気付かなかったんだろっ…不覚っ…く
くっ…ふう、ううん…うん……まったく…あの人は前からそんな事
ばっかしてたのかー。ま、そういう事なんだろうな、うん。本当に先

輩ってバカだなー！」

1人ウンウン頷いて納得してるいろには悪いんだけど、おいてけぼりな私達は視線でいろはに説明を求める。

「ん？なに？」

どうやら視線だけでは気付かないようだ。 って気付けよっ！なんだよそのおとぼけフェイス！

「えっと…いろは？どゆこと？ショックで泣いてんのかと思ったたら大爆笑って…」

「へ？なんでわたしが泣かなきゃいけないの？」

心底不思議そうな顔してキョトンとしてるいろはに智子が尋ねる。

「いやいやだって大好…仲のいい先輩が、噂の最低な二年生って聞いたらそりやショック受けるっしょ!？」

「いやだって先輩だもん（笑）むしろ納得？」

「納得って…だって酷い人って噂じゃん…？」

紗弥加が呆れたように訊ねる。

「うーん。まあ確かに酷い人ではあるよねー。でもただ酷いってわけじゃ無いんだなー、コレが。酷い事したならしたなりの理由があるんだよ、あの人には。ま、何があったのかは知らないけど間違いないねー」

突然の爆笑劇にずっと固まっていた襟沢がようやくハツと我に返って動揺を隠しきれずもなんとか食い下がる。

「い、いろはちゃんさあ、無理しなくてもいんじゃない!?そりやあんな最低な人と親密にしてたってのがバレたら恥ずかしくて気まずいのは分かっけどお」

「は？…なにが恥ずかしくてなにが気まずいのか良く分かんないんだけど…、恵理ちゃんさー、最低な人って言うけど、ちよつとでも先輩の事知って言ってるのー？なんも知んない癖に噂だけ信じて人を馬鹿にするのって、ほんつとくだらないね」

「はあ？だって学校中で話題になってたっしょ!？」

「プっ、学校中だって（笑）。自分自身の意見とかないのー？ま、仮に多少知ったところで、お子さまには難しいかな？あの先輩を理解する

のは。まあ別に先輩の良さが分からない人には何言っても無駄だし何言われてもなんも感じないけどさー」

そして一拍空けてからニヤリと挑発するように忠告する。

「まあ恵理ちゃんが先輩の悪口を広めるならどうぞ自由にならうけど、バレたら雪ノ下先輩に目え付けられる覚悟くらいはしといた方がいいよ?」

「は? な、なんで雪ノ下先輩が出てくんのよ!？」

「だってー、先輩は雪ノ下先輩の所有物みたいなもんだしー、わたしが先輩を借りようとしただけで超不機嫌になるんだよねー。マジで超怖いよー?」

「え……?」

「あ、あと結衣先輩も超怒ると思うよー?」

「は? 結衣先輩って…由比ヶ浜…先輩…?」

「そー。あの人も先輩好きだからなあ。つまりどういう事か分かるよね? 結衣先輩を敵に回すって事は、恵理ちゃんの崇拜する三浦先輩も敵に回すって事だよ♪三浦先輩自身も、結構先輩の事買ってるみたいだしねー」

「……………!!」

「あー……でもやっぱりわたしもあんまり面白くないかも。一応尊敬してる先輩だしねー。わたしの事嫌いでもわたしの悪口言う分には別に構わないけどさ、あんまり先輩の事悪く言うなら、せつかく会長って立場があるわけだし、職権濫用して色んなトコに手えまわして、学内的に抹殺しちゃおっかなー? ナンチャツテ」

ニコニコとそう言うと、次の瞬間にはとんでもないどす黒い声でこう付け加える…

「……………だって、元々恵理ちゃんに与えてもらった職権だし、お礼はちゃんとしなくっちゃねー」

仄暗い瞳と冷淡な笑顔でテヘツとするいろは。いやマジ超怖いです。そんな超こえーいろはに見つめられてる襟沢は…

……………あ、ヤバイ泣きそう! 早く逃げてー!

戦意を失って今にも泣き出しそうな襟沢にはもう興味が無くなつたらしく、次の瞬間にはにこぱーつと笑顔に戻り

「さーおべんと食ーべよっ。つてもうほとんど時間残ってないじゃん！」

慌てて残りのお弁当を食べだしたいろは。この子、こんなに強かつたんだ：てゆーかこれも比企谷先輩の影響で変わったのかな。

「いろはって、比企谷先輩の事信じてるんだね」

いろはの変化を目の当たりにし、私はそう訊ねてみた。

そしたら事もなげに当たり前前のようにこう答えた。

「んーん？別にー？ただ、信じる信じないとかじゃなくて、先輩の事『知ってる』人なら、みんな普通に分かる事だと思うよー？」

× × ×

数日後

いろはに対しての悪感情や比企谷先輩との仲の邪推などなど、色んな噂が流れてしまうのではないかとの心配は杞憂に終わっていた。

単純にいろはの怖さやビッグネーム様たちにビビったつてのもあるんだらうけど、比企谷先輩の噂自体を全く気にしない様子や、あざとさなどどこ吹く風、男子の目など気にしない素の爆笑劇を演じたことにより、女子からのアンチいろはの空気は次第に好意的なものへと変わっていった。

それどころかいろはがあざとさを見せなくなった原因を作ったであらう比企谷先輩と仲よくしてるいろはを好ましく捉える空気さえ出てきたよね、最近。

だってほら、恋する乙女達は、恋敵いろはの変化に安心するじゃない？

男子人気に対する妬みさえ無くなっちゃえば、基本いろはって良い

ヤツだからね。怒らせたら怖いけど（笑）

あ！そうそう。実はあのあと泣きだしちゃった襟沢をいろは自身がフオローしたんだ。

実際いろはは本当に襟沢に感謝しているらしい。色んな貴重な出会いと体験の場を与えてくれたからなんだってさ。

そんなこんなで、ここ数日観察してても、一向に悪い噂が一人歩きする様子も無く、この一騒動は一件落着！

そんな安堵の気持ちもあり気持ち良く本日の部活を終え、さて帰りますかねと下駄箱から靴を取り出そうとしてたら、いろはもちょうど帰るトコだったみたいで、パタパタと駐輪場の方へ走っていく姿が見えた。

「あれ？あいつチャリ通だっけ？いやいや、チャリで通えるトコじゃなかったよね！」

なんかあったのかしら？と追いかけてみたら、駐輪場で件の比企谷先輩を発見したいろはが居た。

どれどれ、家政婦よろしく、コツソリ覗いて聞き耳を立ててやろうかね！にひっ！

だってあの先輩と居る時のいろはすって面白可愛いんですもの…

× × ×

「せんぱーい！せっかく下校時間が一緒になったんだから、駅まで後ろ乗せてってくださいよー」

「は？嫌に決まってるんだろ」

「なんでですかー。こんな可愛い先輩と二人乗りしてたら、それはもうすごいステータスですよっ？」

…ふくつと頬を膨らますいろは。やはりあざとい…

「嫌だって。恥ずかしいっての」

「せんぱい頬染めちゃってキモいです。キモいです」

「キモいキモい言うんじゃないよ。大事な事だから2回言ったの？」

言つとくがお前が思つてるよりずっとダメージでかいんだぞ?」

「先輩のダメージなんてどうでもいいです。そもそも恥ずかしいって、先輩なんて学校一の嫌われ者じゃないですかー(笑)今さら周りの目とか気にしちゃうんですかー?」

「お前マジ許すまじ。最近はお前の事だけでノートが埋まるわ」

「えー?先輩の日記にはそんなにわたしの事ばかり書かれてるんですかあ?♪」

「……ある意味な。てか学校一の嫌われ者なんていう一過性のムーブメントなどとうに過ぎ去つてるっつーの。今の俺は元通りの学校一の認知されてない男だっ」

…やっぱ只者じゃないなあの人…そこで胸張るかな普通…

「あ、あー…なんかごめんなさい」

「謝られちゃった……。いや普通に引きすぎじゃね?なんかフオローとかあるだろ……。それに…その、学校一の、とか知ってんなら、俺と二人乗りとかマズいつて事くらい分かんたら」

「……………あつれえ?もしかしてわたしの事心配してくれてますー?」

「ばっかオメー、生徒会長様に悪い噂なんか立つような学校、小町が安心して入学してこれないだろうが」

「はいはい、そういう事にしといてあげますよー(笑)てゆうか先輩のシスコン発言で、たまに照れ隠しの言い訳に使いますよねー(笑)」

「は、はあ?バ、バカ言つてんじゃねーよ!俺の小町を愛する心は、そ、そんなんじゃねーしっ!」

「プッ!はいはい♪了解です。よし!じゃあ早く行きますよ?」

…もうYOUU達付き合っちゃいなYO…

「いやお前俺の話聞いてた!?だから二人乗りなんかしねえつつうの」
「大丈夫ですよー。確かに先輩は学校一の嫌われ者かも知れないですけど、わたしだって女子オンリーで言えばあんまり評判良くないですしねー。嫌われ者同士、二人乗りして帰つたって、ただいつも通り悪目立ちするだけですよー」

…なんか会話の内容はものすごく切ないはずなのに、なんだか微笑ましいなあ。

結局しばらくは比企谷先輩があれこれ理由を付けて煙にまこうとしてたけど、なんかいろはがそつと俯いて、ボソツと「……本物……」とか呟いたら、比企谷先輩は急に、まるでハイヤーの熟練の運転手のような、まるで高級ホテルの洗練されたドアマンのような流麗な動きでいろはをチャリの後ろに招き入れだした…

え？なに!?なんか比企谷先輩を従わせる呪文でも唱えたの!?

私も今度比企谷先輩と廊下ですれ違ったら、本物って呟いてみようかな…面識ないけど。

ふふんとしてやったりの顔して比企谷先輩を覗き込むいろはの顔は、満面のあざとい小悪魔笑顔だった。

あれ？でもこないだは、比企谷先輩に対してもあんまりあざとさを感じなかったような…

いや、違うな…『いつものあざとさ』とは違うけど、やっぱりあの時も確かにあざとかったんだ。ただ、なんかいつもと違うから違和感を感じてたんだ。

うーん………

………!!そつか、分かった！違和感の正体！

あざとさの『質』が全然違うんだ！

今までのいろははって、男を騙そう、男を利用してようって打算的なあざとさを使ってたはずだ。

でも今はどう？そういつた打算的なあざとさじゃ無い。

比企谷先輩はあざといあざといとウザがりながらも照れたりしてるとし目もあんま合わせないようにしてる。

そんな照れた比企谷先輩をニヤニヤとからかいたくて、いろははワザとあざとい自分を見せてるんだ。

利用したいから打算的に演出するあざとさと、ただ気になる人からかいたいだけの小悪魔心のあざとさ。

そりや全然違うよね。違和感感じるはずだわ。

比企谷先輩をまんまと丸め込めて二人乗りして駅まで向かってく、夕陽のせいなのか自身の火照る熱によるものなのかちよつとだけ朱色に染まったいろはの顔は、最っ高に可愛いあざとい笑顔だった。

うん！やはり俺の青春ラブコメはまちがイヤ違った。

やはり私の友達の一色いろはがあざとくないわけがない（ただしせんぱいに限る）

了

【過去編①】かくして私の友達は就任を決意する

11月もそろそろ終わりを告げようかという頃のとある日曜日、私は女友達3人で、千葉駅近くのお洒落なカフェであたたかい紅茶と美味しいデザートで午後の一時を楽しんでいた。

本日のお茶会メンバーは私、家堀香織《かほりかおり》と、おなかの親友である笠家紗弥加《かさやさやか》。そして総武高校に入学してから仲良くなった我がグループの中心、一色いろはの3人だ。

このお洒落なカフェは、千葉駅から少し住宅街に入った場所にある穴場的なカフェで、この近くの高校に進学した紗弥加の中学時代の部活フレンドに教えて貰った、私達のお気に入りのお店だ。

お気に入りといっても今回でまだ4回目くらい。

一介の女子高生には、こんな千葉にそぐわないようなオサレで高貴なカフェは、そうそう来れるような所ではないのです！

ここ最近いろはがちよつと心労たまってるから、久しぶりに来てみたんだよね。

「やっぱりここいいよねー！落ち着くし大好き〜」

うんうん。いろはも楽しそうで良かった良かった。

最高潮にご機嫌な時に無意識に出るあの癖が出てないから、最高潮ってワケではないんだろうけど、ま、もつともアレが出るほどご機嫌な時なんて、今まで2回くらいしか見たことないしね。

一度目は初めてこのお店に来た時。

二度目はいろはのおばあちゃんが体調崩して入院しちゃって、無事退院したお祝いを買に行った時の買い物終わりのスタバで。

私達の存在忘れちゃうくらい無意識に出ちゃうから、いろはにおーいって指摘したら

『はっ！ゴメン！つい無意識につ！子供の頃は良くやつちやつてたんだけど、ここ最近は全然だったんだけどなー！』

とかつてビツクリするくらいに激レアで無意識らしいんだけど、まあそんな激レアでご機嫌な素の癖を私達と遊んでる時に出してくれていたなんて何よりです☆

× × ×

午後の贅沢な時間を他愛ないおしゃべりで楽しんでいると、ガトーシヨコラを口に運びながらも、いろはのロールケーキに狩人《ハンター》の視線とフォークを向ける紗弥加が、ボソリと一言。

「智子のヤツ、今頃楽しくやってんのかなー……………チツ」

そう、うちのグループの1人である大友智子《おおともこ》は、本日彼氏とイチヤイチャデート中である……………ともとも☆とか呼ばれてるんだろうな。チツ

私も紗弥加も、めつきりと肌寒くなった人肌恋しいここ最近に彼氏と別れたばかりなんだけど、べ、別に羨ましくなんかないんだからねっ！

…………と、2人して目と目で通じあい力強くウンウン頷きあっている、いろはが羨ましそうに言う。

「いいなー！彼氏…………んー。彼氏とまでは言わなくても、大好きな人とこのお店でデザートつつきあったり他愛の無いおしゃべりたくなしたりして、まったり幸せな時間過ごしたいなあ」

な！なんですと!?

この女！それは私達に対する挑戦状と受け取ってもいいんですかね。

「アンタ、ここに連れてこれる男なんてより取り見取りじゃん！」

「そーだよー昨日だって中西君とデートだったんでしょ？先週の日曜も中西君で土曜は田辺でしょ!?!この男女の敵めっ」

2人でキツイツツコミを入れると

「別にデートじゃ無いしー。ただ買い物に付き合っただけ荷物持ってくれたから、お礼に食事とカラオケに付き合っただけだけだよー？」

刺されろっつっ!!

「んじゃあ、その時にでも連れてくれば良かったじゃん」

紗弥加が白い目を向け、呆れたように言うと、

「んー…そうゆーんじゃ無くってさあ…あくまでも『彼氏』とか『ちゃん好きな人』っ。こういうお気に入り場所は、ちゃんとそういう人と一緒に来たいなく…ってさ。…いつか絶対来てやるぞー！おー！」

「あんた中西君が聞いたら泣くよっ!?!どうせ『葉山先輩と来た☆』とかでしょ」

「えへへー」

えへへじゃねえよこのヤロウ。

でも、その相手が葉山先輩であれ他の誰かさんであれ、あの子が自分の意志でここに男の子を連れてきた時は、それが小悪魔 i r o h a ではなく、乙女いろはの心から望んだ人なのだろう。

「そういえば中西君って言えばさあ、最近妙にうちのクラスに来ていろはと喋ってない？いろは狙いなのは分かるんだけど、最近ちよつと来すぎじゃない？」

私も思ってたんだよね。そしたらいろはは事もなげに

「まあ、わたしの方から行かなくなったからね。うちのクラスに来てくれた方が何かと都合いいし」

……………コイツ……………

「……………あんたそれ、襟沢に対する当て付けでしょ…」

「ナ、ナンノコトデショーカ??……でも恵理ちゃんがこつちを恨めしそうに睨んでると、ちよつと面白いよね♪」

え?なにこの子悪魔なの?

まあ、気持ちにはわからんでもないけども…

「まああれだけ手の込んだ嫌がらせされたらねえ、襟沢悔しがらせてスツキリしたい気持ちも分かるけど!」

紗弥加がドン引きしながらも遺憾の意を示すのも仕方ないっちゃ仕方ない。

なにせ他のクラスのアンチいろはにまで色々声掛けて推薦人集めて、勝手に生徒会長に立候補させちゃったんだからね…あの女。

もうイジリつてレベルはどうに超えてるよねっ!

「注」ちなみにうちの学校にイジメはありません。

「それにしても生徒会役員選挙つてもう再来週じゃん。城廻先輩に相談したみたいだけど大丈夫そうなの?あの雪ノ下先輩とか由比ヶ浜先輩達も協力してくれるんだっけ?」

「うーん…どうだろう…実は雪ノ下先輩達じゃなくって、正直全つ然頼りない人に頼んなくちゃなんない状況になっちゃったんだよね…それでもなんとかしてもらわなくちゃだけどー!」

憂鬱そうに頭を抱えるいろは。生徒会長なんかになっちゃったら色々責任背負わされちゃうし、サッカー部のマネージャー続けんのもままならないだろうからなあ。

葉山先輩との接点が無くなっちゃうのは面白くないだろうしね。

まあこんな女の色恋沙汰なんてどーでもいいんだけど、でも……いろはが沈むとうちらのグループも暗くなっちゃうし(べべべ、別にいろはが心配なわけじゃ無いんだからねっ!)、なんとかなればいいんだけどなー…

× × ×

翌週の金曜日。

四時間目の終了を告げるチャイムが校内に響き渡り、本日のお昼タイムが始まる。

私達はいつものように4人でお弁当を広げていた。

数日後には役員選挙も控えているという事で、そんな話題でわいわいやりながらお弁当を食べようかとしていると、視界の端の扉んトコで、見知らぬ男子がうちのクラスの地味男（あいつ名前なんてったっけ？）に話し掛けているのが見えた。

地味友達かなんかかと思つてたら、なんか地味男がオドオドというはに声を掛けてきた。普段は私らトツプグループに話し掛けたり出来ないから緊張しちゃうんだよねごめんねー（…あれあれえ？…なんかこのやりとり、いつかデジャブ感じそうな予感がするぞー…？…）「…あの…一色さん、なんか二年生の人が呼んでるんだけど…」

そう言われた瞬間いろはは…

目をキラツと！

首をグルンと！

そしてほんの一瞬の悲壮感漂うガツカリ顔…

でも次の瞬間には営業スマイルを張りつけて、パタパタと走っていった。

……い、いやあ…今のガツカリ顔は無いでしょ、いろは…あの二年生もとっても苦い顔してるよ…ま、面白かったからいっか（笑）
どうせ葉山先輩とでも思っただらうけどね。

いろはが男子に呼び出されるなんて結構日常茶飯事だし、今回もまた告られの呼出しかなー？どうせバツサリ振るんだらうけど…と、クラスの連中も特に気にもしてない様子（一部男子はソワソワしてるけどねっ）。

でもそんな中、襟沢だけは超チラチラ見てる…超気にしてるよっ。

アイツ嫌い嫌いと言いながら、もうあそこまでいくと実はいろは大好きなんじゃね？

あ…会話が終わって二年生に背中を向けた途端に超嫌そうな表情になってダラダラとこっちに戻ってきた。営業スマイルはずすの早すぎィー!

「香織達ごめーん…ちよつと選挙の件で用事出来ちやつたみたいだから、ちよつと行ってくるねー…」

と広げたお弁当を気だるそうに片付け始めるいろは。

「う、うん…行つてらっしゃーい…」「行つてらっしゃーい…」「がんばつてねー…」

「はあく…なんでわたしがこんな目に…」

なんてブツブツ言いながら肩を落として歩いてくいろはを見送る。

「生徒会の人かなんかなのかねー」

「超やる気なさそう…」

「大丈夫かねえ…てかさっきの二年生に失礼じゃね(笑)?あの子」

× × ×

お昼時間がもう少しで終わりそうという所でいろはが帰ってきた。「ただいまー!」

と、なんかちよつと元気そう。

ん?なんか嫌そうに行く前とは明らかに表情が違うな…

なんかこう…男前になった…?…なんじゃそりや

うまくいったのかな?なんて私達が顔を見合わせると、

「わたしさー、生徒会長やってみる事にしたよ」

決意したように楽しそうな微笑みを浮かべたいろは。

「え…?うそ、なんで!?!」

「ふふっ。なーんかさー、わたしが思ってたよりも、ずつと面白そうなんだよねー♪」

生徒会の仕事があ!?!と尋ねようとすると、ぽしよりと一言。

「……………あの人……………」

と聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟き、ニヤリと悪魔顔を浮かべるいろは：

小悪魔じゃないよ悪魔だよ。

よく聞き取れなかったから、聞き返そうかと思つて視線を向けると、いろはは頬杖を突いて窓の外の景色を見つめ、ハミングするように小さな声で楽しそうに歌を口ずさんでいた：

ああ：これはアレだ。最大級にご機嫌な時のアレだ。

楽しくて嬉しくて仕方のない時に出るいろはの癖。

なんかよく分かんないけど、よつほど楽しい事があつたんだねー：と、私達はそんないろはを微笑んで見つめていた。

× × ×

翌週の木曜日、生徒会役員選挙でいろはの見事な演説が行われた。我が校のアイドル・葉山先輩からの熱い応援演説を背に受け、人に見られる事に慣れたいろはの演説は、まさに見事だった！

カンペも見ずに堂々と一生懸命公約を語る一方、たまにトチツたり囁んだりしては、ふええつと慌てた様子（あざとい）で葉山先輩に不安げな顔でチラリと助けを求め（あざとい）、全校生徒に向き直り頭をコツンと叩きテヘツと舌を出す（あざとい）：

そのたびに体育館には笑いと暖かな歓声が響く。

「一色ちゃんががんばれー」「いいぞー」「俺ファンになっちゃったよー」

「いろはちゃん可愛いー」「応援するよー」

などなど、男子からの歓声はもちろん、同級生女子には嫌われていろいろはも、上級生のお姉様方には概ね好評らしい。

保護欲をそそられるって言うんですかね。

いろは……あんたそれ絶対わざと噛んでるでしょ……

そんなあざとさ100%の見事？な演説は生徒達の心をしっかりと捕らえ、生徒会役員選挙は無事終了した。

選挙は即日開票が行なわれ、翌日にはいろはに会長就任のお知らせがクラスに届くと、その日のLHRで担任がいろはを教壇に立たせ、熱く暑く感動していた……

俺が！この俺が！こいつをここまで導いてやったんだっ！………てな体で。

てかお前だよこのエセ熱血教師！

お前が聞く耳持てるまともな臨機応変教師だったら、そもそもこんなゴタゴタ起きてねーんだよっ！

しらーつとした目で熱血教師の熱弁を聞き流していると、その隣では今や学校中の声援を受け、次期美少女生徒会長として一躍時の人となったいろはが、当初の思惑が外れて、ぐぬぬ顔で悔しがっている襟沢を始めとするアンチいろは連中を、満足気な微笑で見つめていた。

こうして私の友達一色いろはは、総武高校創設以来、初の一年生生徒会長として華々しく就任したっ！

はてさて、この小悪魔系あざと可愛い一年生美少女生徒会長のもと、我が校は一体どうなっていくますことやら……

ついに私の友達は先輩との会合を容す【前編】

「ハア…ハア…：…つ…ハア…」

私達、一年C組仲良し美少女4人組は、現在ただただ走っている。

「てかさあ…マラソン大会終わってんのに、まだ授業が持久走とか手え抜きすぎじゃね…？高木のヤツ…」

「マジそれだよー…あー…お腹空いたー…」

そう、私達は現在4時限目の体育で、絶賛持久走中なのである…
お昼前の持久走マジ堪えるわー。まじパないわー。

と、特に面識のない戸部先輩がまた私の中に降臨していると、前を行く紗弥加と智子の体育教師の高木への悪態が新たな盛り上がりを見せる。

「…てかさあ、高木、私らが走つてると思いつきり胸見てくんだけどお…特に智子の激しく揺れてる乳を…」

「うっそ…ーマジでえ…う…マジきも…暑いけどあたしジヤージ着て走ろっかなあ…」

と心底不快そうにギャーギャー騒いでいる。

…
うわあ…まじか…前々からなんか視線がキモいとは思ってたけど

…
ホント近頃の教員ってまじヤバくない？何がヤバいってまじヤバい。教師の選別はしっかりやってよく教育委員会…

あ、そういえば隣にちよっぴり権力持ってるヤツが走ってた。

「ねえ、いろはあ！会長権限でなんとかなんなの？変態教師の体
育見学禁止令とかさあ」

んな事出来るわけないが、冗談混じりに尋ねると、いろはは謎の返
しをしてきた。

「ん〜……やっぱり男ってさあ、おつきい方がいいのかな〜!?」

……は？急に何言いだしちゃってんのこの子。

てかおつきいって何よ。その言い方だと変な意味にも捉えられる
んですけどもっ!?

怪訝な表情で見つめていると、「でもなー、あつちはちっちゃいしな
〜…」とかブツブツ言ってる。

「い、いろはさん？何の話してんの!？」

いよいよもってマズい方向に話が向かっていつているのではない
かと心配になり声を掛けると

「例えば、例えばなんだけどさあ、すごく魅力的な2人の女の子が居る
とするじゃない?」

「……………はあ」

「で、片方が巨乳で片方が絶壁。それだったらやっぱり巨乳の方を選
ぶのかなあ?」

ホツ…どうやら胸の話なのねと何故だか安心する私。

いやマジでお父さん本当に心配しちやっただよ〜…

……………ん?…絶壁……………!?

「いや…それは好みの問題なんじゃ…」

「だよなー。でも絶壁な方もそこ以外ではとんでもなく魅力的な女の
子だね。……でねだね!そんな魅力的な女の子達の中に、魅力も負け
てるわ胸の装備も平均的(希望的観測)だわの女の子が割り込んで

いって、どうやったら一歩リード出来んのかなーってさ。まあまずは同じラインに並ばなくちゃなんだけど……。あ、例えばの話ね？例
えばの」

知らんわ……。大体そんな具体的な例えばなんて初めて聞きましたよ私。

てか希望的観測と言われましても答えづらいし……。あ、うん。まあ確かに希望的観測かもしれないねとチラリというはの胸部を一瞥してみる。

しかしあれだけ恋愛の楽勝人生を歩んでたいろはが、急にこんなおかしな事を言いだすほどのお悩み中とはねえ。

いろはが本気出して落ちない男子なんて、葉山先輩くらいなものんじゃないの？

あの人ってそんなに難易度高いのかなー。

そんな不毛な無駄話で無駄に体力を消耗しながら、体育は無駄に終わっていった。

× × ×

「あー…疲れたー…しばらくちよつと動けないかもー…」

「あんたら乳だのなんだの無駄に話すぎだからあ…んじやああたしら先に教室帰って、お弁当の準備しとくよー。飲み物も買つとくからねー」

ありがとー、と言う私いろはを置いて、紗弥加達は一足先に教室に帰って行った。

いや、乳の話はあんたらが言いだしたんですけどね？

しばらく休んでから私達も教室に向かっていると、そこには戦場が広がっていた…

「いやー…マジで買って戦場なんだねえ…」

「ねー、わたし達お弁当持ちで良かったよねー」

いやホントもう漫画かアニメかよ？つてくらいの殺伐とした戦場っぷり。

こんなの現実にあつたんだね…普段こんな時間に購買なんか近づかないから知らなかったよ…

戦々恐々と購買を横目に見ながら、ふと持久走の疲れを思い出し、目をキュツと瞑って伸びくくくつとしてみる。

くー！伸びるー！気持ちいいー！

「そういえばさあ…」

いろはに話し掛けながら目を開けると、そこにはもういろはの姿は無かった…

え!?!なに急にホラーな展開なの!?

Anotherなら死んでるの!?

と若干古めなアホな事を考えていたら、いろははいつの間にかかなり前方の男子生徒の元へと猛ダツシュしていた。

さつきまであれだけヘタってたのに…

× × ×

「せんぱーい!」

「…おう一色か、珍しいな」

「さつきまで体育で持久走してたんですよ…汗臭くないですかあ…?」

あ、比企谷先輩を発見したのね。

うわー…あの嬉しそうな悪顔…胸元ぱたぱたしたりして上目遣いでニヤニヤと身体を寄せ付けて比企谷先輩の様子を伺ってるよ…

「え?いや別に…」

「なに照れてるんですか気持ち悪いですよ先輩」

わざと照れさせておいてその言い草。ホント生き生きしてますね。
「照れてねーよ…てか汗臭いかどうかなんて嗅がせようとしてくん
じゃねーよ…恥じらいつてもんが無いのかね。近ごろの女は」

「大丈夫ですよ。しっかり制汗スプレーしてありますし。鼻腔をくす
ぐる爽やかで甘い香りしかしませんよー」

「じゃあなんで汗臭くないか嗅がせてくんだよ…あざとすぎだろ…」
「なに勘違いしちやってるんですか可愛い後輩に女を意識しちやっ
てますかそうですか」

「お前に女なんか意識しねえよ。お前ちよつと小町と被ってるから、
せいぜい妹くらいにしか見えねえっての」

「はっ…ドン引きするほどのシスコンの先輩が妹みたいってまさか一
生一緒に居てくれって意味ですかいくらなんでもまだそこまでは早
すぎますごめんさい」

「ちげーよ…ま、もうなんでもいいや…」

やばい…このままだと私の存在感が皆無！

「あ…あのー…」

声かけ辛っ！これ私会話に割り込んじゃって良かったのかしらん

…

でも割り込まないとこのまま空気だったし致し方ないよね…

「わー！ごめん香織！せんぱいせんぱい。この子友達の家堀香織です」

「……うっす」

「あ、初めまして！比企谷先輩。いろはの友達の家堀と申します」

「これはこれはご丁寧にも…。…ってか何で俺の名前知ってん
の？」

「いろはから色々とお話伺ってるんで！」

「色々って…。…どうせこいつの事だから、ろくな事言っ
てねえんだろ
うな…。…ぼっちだのシスコンの」

いや、その情報は以前あなたの口から聞きましたけどね？

「てか、……。…一色って俺の名前知ってたの？」

……え？そこから？

「いやいや、知らない訳ないじゃないですかー！わたしと先輩こんな
に仲良しじゃないですかー……本当に先輩は私の事なんだと思っ
てるんですかねー……」

ぷくつと頬を膨らませるいろは。

でもこの先輩にはそのあざときは通じないんだよねえ。

「え？俺と一色って仲良かったの？……そもそも知ってたんなら先輩
の前に名前付けろよ……」

呆れ顔でいろはを見ながらも、なぜか私をチラチラ見てくる比企谷
先輩。え？なに？惚れちゃった？

「あのー……何か？」

「お、おうスマンな。一色にもちゃんと同性の友達が居るんだなと
ちよつと驚いてな。なんなら全同性に嫌われてるまである、と思っ
たからな」

お、Oh……なかなか手厳しい先輩で……

「友達事情は先輩にだけは言われたくないんですけどねー……」

心底馬鹿にした目で先輩を見るいろはも大概だけどね……

「ま、まあ確かにいろはは同性には妬まれちゃったりイジられちゃっ
たりしてますけど、私とあと2人の親友は仲良くさせてもらってま
す」

ペコリとうやうやくお辞儀してみる。

いい？いろは。後輩つてのはこういうもんだって、しっかりと目に
焼き付けておきなさい？

派手なトップグループに所属しているとは言え、私は結構こういう
所はきちんとしている方なのだ。

「そうか。じゃあこれからよろしくやってあげてくれると助かる
わ」

そう言う比企谷先輩は、ちよつとだけ優しい笑顔を見せた。

へえ：目が淀んでパツと見は確かに印象悪いけど、こういう表情もするんだな：この人。

ちゃんというはを大切に想ってるんですねっ。

そんな優しいげな笑顔で自分の事を頼まれてるいろはも、ちよつと頬を染めちやつたりして嬉しそうに比企谷先輩に微笑んでる…

なによもうっ♪爆発しろっ♪

しかし、そんな和やかな空気を吹き飛ばすかのように、可愛らしく元気いっぱいの声が私達……というか比企谷先輩の元へと届いた。

「あーヒツキーこんなところに居たーっ」

ピンク掛かった茶髪に染め上げられた頭の上で、特徴的なお団子をゆらゆら揺らし、たわわに実った存在感たっぷりの2つの凶器をインバイン揺らし、子犬のようにパタパタと比企谷先輩へと走って来る一人の女の子。

美しき豊穡の女神が今まさにここに舞い降りた…

ついに私の友達は先輩との会合を容す【後編】

比企谷先輩の元へと舞い降りた、その元気おっぱ………いっぱいのも美しき女神は……、あ！この人って由比ヶ浜先輩だっ！

さすが学年どころか今や学内の最上位トップカーストのメンバーでもあるだけあって超可愛い!!そしてバインバイン。

「どうした由比ヶ浜。なんか用か？」

「やー、別に用があったって訳じゃないんだけどさ、紅茶きれちやっつたから飲み物買いに来たら、ヒッキーいつもの場所にいなかったから、どうしたのかなーって思ってたさー。………べー！別にわざわざ見に行ったとかじゃ無いよ!?!ついでに寄っただけだし!」

あわわわとブンブン手を振る由比ヶ浜先輩。やだ可愛い。

それにしてもヒッキー……?……あ、ヒキガヤでヒッキーか。

あだ名からして悪口!?!と思ったけど、悪意と言うよりは愛情を感じるな。むしろ愛情しか感じないまでである。

由比ヶ浜先輩は比企谷先輩しか見えてなかったみたいなんだけど、ようやく私達の存在にも気付いたようだ。

「て、あれ!?!いろはちゃんも居たんだ。いろはちゃんやつはろー!」

「結衣先輩こんにちはです!あ、こっちの子は友達の香織って言いま

す」

「おー、いろはちゃんのお友達かー!香織ちゃんもやつはろー!」

「は、初めまして!や……やつはろー?です……」

謎の挨拶は一先ず置いとくとして……

やべー!噂通り超いい人だ!最上位だからさすがの私も緊張しちゃうかと思っただけど、全然そんな壁なんか無いカンジ!

たぶんこれが三浦先輩だったら緊張で速攻トイレに行きたくなっ

ちやうレベル。

とつても人当たりがいいし元気な人だなあ。あとバインバイン。

ちよつとした雑談を交わすと、由比ヶ浜先輩は比企谷先輩へと向き直る。

「ねーねーヒツキー。今日なんてめっちゃ寒いのに、またこれからあそこでご飯食べるの？」

「まあな。俺にはあそこ以外に居場所ないしな。」

…やばいなんだか視界が滲むよ…

「じゃ、じゃあさー…そのお、たまには…部室で、ゆきのんと一緒にお昼ごはん食べない…？」

上目遣いでヒツキー先輩におねだりする由比ヶ浜先輩…まあなんて可愛らしいんでしょう！…ゆきのん？

「断る。俺は飯は一人で食う派なんだよ」

悪・即・斬！正に一刀両断の断りっぷり。

でも断わりながらも、ちよつと頬を赤らめて照れた様子で視線を逸らしていますね、ヒツキー先輩。なんか爆発しろって思いました。

「ノータイムで断われたっ!?こんな寒い日くらいたまにはいーじゃんっ！」

ぷくーつと頬を膨らます由比ヶ浜先輩。

…こっ！こっ！これが天然モノの上目遣いと膨れっ面の性能というやつか!!

いつも見慣れてるやつとは何かが違うよ！

「大体昼間っからあんな百合の世界に入って行けるかよ」

おや？百合とはあの女の子同士でイチヤイチャとかいうヤツですね!?

そ、そうか…由比ヶ浜先輩は部室でゆきのんとゆるゆりしてるのね?…メモメモ。

すると由比ヶ浜先輩ははっ！とし、顔を真っ赤に染め上げるとモジ

モジし始める。

「きゅー！急に呼び捨てとか反則だし！…そ、それにあたしはユリじゃなくてユイだし！」

「はっ？」

え？

えつと…ちよつぴり残念な人なのかな？由比ヶ浜先輩って☆
百合の意味が分かんないとしても、その勘違いの仕方はちよつと…

そんな2人のやりとりをつい微笑ましく見ていたのだが、ふと隣を見ると、養殖モノの膨れっ面のいろはすが我慢の限界なのか、堪らずに比企谷先輩の袖をちよいちよい引っぱり、

「先輩。わたしを放置しないでくださいよー」

と、つまらなそうに口を尖らせていた。

「おう悪い。で何か用だったのか？」

「…別に先輩なんかには用は無いです。ちよつと先輩で暇潰ししてただけです」

「…暇潰しってひどくね？こっちは色々いそがしいんだが。まあ用が無いなら俺はもう行くからな。あんまり遅くなると天使の舞いが終わっちゃうし。じゃあな」

天使の舞ってなんだよ。

「あーちよつと待ってよヒツキー！だったらさいちゃんも呼べばいいじゃん！」

あ、由比ヶ浜先輩には天使の舞いで通じるんですね。どうやら天使の舞いイコールさいちゃんらしいナンノコツチャ

「確かにそれは名案だが、お前早く飲み物持って帰らんと、雪ノ下に罵

られるぞ」

あ、ゆきのんて雪ノ下先輩の事だったのね。

……………!?あの雪ノ下先輩がゆきのん…だと…?」

てか由比ヶ浜先輩、雪ノ下先輩とゆるゆるりしてるのっ!?

「はっ…ゆきのん怒ってるかなあ……………つて、ちよつとヒツキー
待ってよー!……………あ!いろはちゃんも香織ちゃんもじゃあねっ」

「はい、さよならです!先輩も結衣先輩もまた後で!」

そう言つて胸の前でふりふり手を振るいろは。

私もペコリとお辞儀をした。

「…いや、だから何でお前は普通に部室に来ようとしてんだよ…」

そう言う呆れ顔の比企谷先輩に

「それは行くに決まつてるじゃないですか!。今日も先輩を利よ……
お願いしたい事が山ほどあるんですから」

と、精一杯のあざとい笑顔でお返しする。

でもなんかいつもと違う。無理してる感じ。

2人を見送り教室に戻ろうかといういろはを見ると、なんだか寂しそ
うに悔しそうに頬を膨らませていた…

普段ならそのあざとさにウゼーなコイツと思う所だけど、今日ばつ
かりは何だかとおしく思えてしまいました。まる。

× × ×

んー……………さつき私が思った事を思い出してみる。

『いろはが本気出せば、落ちない男子なんて葉山先輩くらい』

ゴメンいろは、私が甘かった。アレは強敵だわ…

比企谷先輩本人だけでも大変そうなのに、それだけじゃないんだ
ね。

最上位カーストで可愛くて人当たりが良く、男子人気も最上位クラス。

ちよつぱりおバカっぽいけど、そこがさらに魅力的でさえある。その上、噂によるとあの人懐っこさと人当たりの良さなのに、男子に対して超ガードが固いんでしょ？由比ヶ浜先輩って。

そのガードの固さなのに、比企谷先輩にだけはあんなにあからさまな好意的な態度って……。もうなんていうか、私が比企谷先輩だったら由比ヶ浜先輩可愛くて仕方なくなりそう……

アレはいくらいいでも相手が悪いわ……おまけにバインバイン。

さっきのいろはの言葉も思い出してみる。

『やっぱり男っておっきい方がいいのかな』

そりや悩みどころが多過ぎだよー！

あのいろはが、あんなおかしな事を口走って悩んじゃうくらいに、敵は強大だもん。色んな意味で。

さっきの別れ際の精一杯のあざとい小悪魔笑顔……たぶんこんな風に落ち込んでる姿は、あの人達の前では絶対に見せないようにしてるんだろうな。

完全部外者の私なんかでも、ちよつと見ただけでもなんとなく分かっちゃうくらいなの、あの特別な関係性。

しかもそこにはさらに、あの雪ノ下先輩も居るってんだから、恋する乙女には堪ったもんじゃない……

いつも嫌でもその空気にさらされてるのに、それでも尚、さらに自分からその空気に飛び込んでいくいろははホントに凄いと思う。

さっきの精一杯のあざとい笑顔は、弱音を吐けない自分への、そしてあの人達への精一杯の強がり……ってというか意地なんだよね……

……………がんばれっ！

こうして噂の比企谷先輩との初会合を果たしたわけだが、流石にこんな短時間と一言二言の会話だけでは、いろはが言うような魅力も、なぜこのいろはがここまでご執心になるのかも、まだ正直分からな
い。

でもこんなにも素敵な女の子達に慕われてる比企谷先輩には、やっぱり不思議な魅力があるのだろう。

今度会う機会があったら、もうちょつときちんと話して見極めてみたいな。

すっかり不機嫌になってしまったいろはの肩をポンと叩く。

「よし！いろは。とつとと帰るよ！今日はヤケ食いだっ！私のお弁当のおかず、なんでも好きなものひとつあげるからさっ」

「……………ヤケ食いとか…なんに対してのヤケなのか意味分かんないし……………でも食べる……………」

すっかりイジけ気味のいろはをなんとか宥めすかして教室へと向かう私は、先ほどの由比ヶ浜先輩の事、そして隣で可愛く膨れているいろはがさつき言ったことを思い出し、ふとこんな事を思うのだった……………

……………雪ノ下先輩って、絶壁なんだな……………

了

【過去編②前編】 ゆえに私の友達は恋に仕事にカーニバル

12月。

私の友達一色いろはが生徒会長に就任してから、まだほんの数日しか経っていないある日のお昼休み。

食事を終えた私達は、昼休みが終わるまでの間、いつものようにどうでもよいような事を面白可笑しく語らっていた。

私、家堀香織の部活での出来事。

中学時代からの親友、笠家紗弥加の兄貴のマニアックな趣味の話（みんなキモイ☆キモイ☆と大喜び）。

同じく中学からの親友、大友智子の中学時代から付き合っている彼氏、友樹君とのおのろけ&クリスマスの予定（あ、ちなみに智子の話はみんな特に聞いてませんでした）

そして生徒会長いろはの生徒会の仕事のグチなどなど、内容は薄っぺらく多岐に渡るが、そんなどうでもいいひとときが、年頃の女の子にとっては堪らなく楽しい時間なのである。

ていうかまだ数日しか経ってないのに、早くもグチしか出て来ないのね……

「おーい、一色！生徒会の件で話があるんだが、少し時間をくれないか？」

そんな楽しいガールズトークがひときわ盛り上がりを見せる中、ふいに生徒指導も行っている現国教師の平塚先生が、ガラリと教室の扉を男らしく開け放ち、そういうはを呼び出した。

「は、はいっ……」

おっかなびつくりとパタパタ掛けていくいろは。

私もそうなのだが、この子もこの平塚静という教師がちよつと苦手なのだ。てか怖い。

この平塚先生、まさに『格好良いキャリアウーマン像』を体現したかのような容姿と物腰で、女子にも人気があるととも良い先生なのだが、そこはかたなく香る残念臭が隠し切れていない……そしてなにより怖い。

随分前に、職員室に2人でクラスのレポートを届けに行った時、ファーストだからストだかのブリットと言う名のボディブローで、男子生徒が悶絶し崩れ落ちる様を目撃してしまっただけというもの、私もいろはもこの教師に若干怯えている…

ブリットってなんだよ……

いやそんな事よりも、昨今はそういうってマズいんじゃないの？なんか体罰的なやつ…

まあ的《てき》は的であって、風《ふう》と同じカテゴリのはずだ。サイゼのディアボラ風ハンバーグが、決して悪魔のハンバーグでは無いのと同じようなモノだろう。

だからあれは決して体罰では無いはずだ。平塚先生セーフです。いやアウトだろ。

てか悪魔のハンバーグってなんだよ。怖いよ！

なんならもう私がミンチにされてハンバーグにされちゃうの!?!ってくらいに怖い。

そういった意味では、あの崩れ落ちた男子生徒は今頃ミンチにされていてもなんら不思議ではない。

ああ…あの男子生徒は今頃無事人生の続きを送れているのだろうか…？と、見知らぬ男子生徒に思いを馳せていると、いろはが酷く浮かない顔をして戻ってきた。

「なんかやばい…。高校生になって初めてのクリスマスがあ…」

「どつたの…?」

「…なんか良く分かんないんだけど、海浜総合高校ってこの生徒会がさー、うちの生徒会と合同で地域のクリスマスイベントやらないか? って、迷惑な話を持ちかけてきたらしいんだー…」

地域のクリスマスイベント?

それを他校と一緒にやろうだなんて、まあ!なんて意識が高いんでしょ!

意識の低い生徒会長代表のいろはとは対極に位置する感じね!

なにせ依頼内容の第一印象からして『迷惑な話』だし…

「わたしまだ生徒会役員さん達とも全然うまく行ってないのに、いきなり他校と合同なんて、ハードル高すぎるでしょ…しかもよりにもよってクリスマスにやるって…」

いやそりゃクリスマスイベントをクリスマスにやらないでいつやるんだ? って話ですけどね。年明けてからやればいいの?

でも確かにハードルは高そうだ。

「とにかく放課後に先生と役員で会議するらしいから、断固反対せねばっ!」

ぐっ!と小さくガツポーズを決めて、わたしガンバっちゃうよアピールするいろははいつも通り通常営業のあざとさなのだが、頑張る方向が超後ろ向き過ぎるでしょ…

× × ×

翌日、もちろんいろはは死んだ目をしていた…

そりゃね!平塚先生が絡んでる時点で、抵抗なんて無駄に決まっ

ますよ！

「くっそおー……わたしのクリスマスがあ……こ、こうなったら！とりあえず様子見て、一応頑張りましたが無理でしたアピール出来る下地を作った上で、アイツを上手い事利用してやるっ……！」

などと、先ほどから意味の分からない供述を繰り返しておりますが、なんか言ってる事怖いよ!?

いろははすつてば悪役まっしぐら！

「わ、私はとも君とクリスマス忙しいけど、応援してるから、が、ガンバってねっ」

ふあいとっ！とガッツポーズをする智子を、いろはは淀んだ半目で睨んでいた……

くっ！友樹と智子のともともカップルめっ！

いろははその白けきった眼差しで智子を爆発させてしまえばいいのに。

× × ×

さらに翌日。

昨日は近くのコミュニティセンターで、海浜総合高校と初会合をしたらしい。

さらに目が死んでいた。

「マジでやばいよ……。なんか呪文が飛び交ってるんですけど……。カスターマーサイドに立ったロジカルシンキングなソリユーションでウインウィンって、なに……?」

頭を抱え、げっそりした表情で謎の呪文を唱えるいろはす。

ああ……やっぱり意識高い系なのか……依頼からしてそっち側っぽいもんな……

よく意味が分かんないから要約すると、パルスのファルスのルシが

パージしてコクーンみたいなのだろうか……？

あ、結局どっちにしても意味分かりませんでした☆

「しかも一応付き合いでごはん行ったりアドレス教えたりしたら、もうゆうべから何人もバンバンお誘いのメール来るしさー。あーめんどうかい…これはいいよもって、早速奥の手を使わなければ…」

いろはさんはたったの1日で、早くも奥の手の投入を決めたようです。

でも話の後半部分はいろはすがいけないんだと思いました。

× × ×

週が明け、奥の手を投入したらしいそれからのいろはは、毎日目まぐるしく表情を変えていた。

時にはやる気を失い、時には生き生きと。

「はあく、やっぱリアル便利だわく♪」と安心した悪顔を見せた時のいろはは、特に生き生きしていました。

あまりにも黒くて怖いから追及はしないけど、いったい何が便利なのかしら…？

それでも全体を考えると、内部事情（どうもやっぱ生徒会役員と上手くいっていないらしい）や外部事情（とにかく海浜の生徒会長がまじヤバいらしい）の不協和で、そろそろマズい所まで来ちゃってるらしいけど…

「はあ…生徒会長になって初めての仕事が失敗とか…」

と、もうイベントが失敗する事は、いろはの中ではほぼ確定事項になってしまっているようだ。

結局事態は一切好転しないまま、海浜総合高校との初会合から10日ほど経ち、イブまでにはついにあと1週間程度と迫った金曜日、その日は朝からいろはの様子がおかしかった。

朝からなんだか思い悩んだ様子で、何度も深い溜息を吐いていた。

昨日なにかあったんだろうか…？

確か昨日は会合が休みになったと海浜さんから連絡が入ったみたいで、ちよつとホツとしたような顔をしてたのに…

ま、そもそも時間も余裕も全く無く、イベント失敗待った無しの状態での会合中止のお知らせでホツとしちゃうなんて、色々と末期なんだろうけども。

「……………いろはさあ、何かあったん…？もしかしてイベント中止とか…？」

いや、中止なら中止の方が、悲惨な結果で赤っ恥かくよりは幾分マシなのかも知れないけどね。

「ん？んーん？なんでも無いよ？……………あ、あのさあ香織…」
なんでも無いんじゃないんじゃない…

「……………香織は……………何か、本物…って持つてる…？」
「……………は？」

「いやーごめん、何でもない…」

胸の前で慌てて両手をぶんぶんしていたのだが、また「ふう…」と溜息を吐いた。

いろはと付き合い始めて半年以上経つが、こんなのは始めての事だ。

仕事の悩みとかじゃないの？と思ってたのだが、どちらかと言えば人間関係、ともすれば恋に悩む純情な少女のようにも見えた。

紗弥加達と顔を見合わせるが、ただ事じやなさそうだし、いろはの事だから色々あるんだろうな…と、みんなあえて気にしないよう振る舞った。

今は無理に言わなくても、聞いてほしい時、相談したくなった時に

話してくれればいいよ？いろは。

× × ×

その日の夜、私はお風呂上がりでポカポカになった身体を冷まさな
いように、ホットココアを片手にベットの所で毛布に包まって、お気
に入りの漫画を読んでいた。

うーん！この至福の時間が堪りませんなあ♪

そんな至福の時間を堪能していると、ふいにスマホの着信音が鳴り
響いた。

こんな時間に誰だろ？

ココアと漫画を置き、手に取ったスマホの液晶画面を覗くと、そこ
には一色いろはの名前があった。

メールならともかく、こんな時間に電話してきたのなんて初めての
事だ。

ふいに今日のいろはの様子が思い出される…

『も、もしもし？どうかした!?!』

『あ、香織？ゴメンね、こんな時間に』

『ううん？全然大丈夫だよー。なんか話したい事でもあったん？なん
でも聞いちやうよおーっ?』

わざと明るい調子で話し掛けると、電話の向こうでクスツと笑う声
が聞こえた。

いろはも、今日一日自分の様子が変わった事、そしてその事で私達
が心配していた事は分かっていたのだろう。

だからこそ、私が明るく振る舞った事で、つい笑みがこぼれちゃっ
たんだろうね。

『え、え〜つとさー、明日なんだけどさあ、…わたし、クリスマスイベ
ントの視察を兼ねて、先輩方とディスプレイニー行く事になったん

だー』

びつくりした…今日おかしかったから、なんか悩みの相談かと思ったら、思いもかけない返答だった。

『へ？………そ、そーなの?!いいなあ!先輩方って、葉山先輩とか!』

『うん、そう…葉山先輩も来るよ』

『うわー、クリスマス時期に憧れの先輩とディステイニーとか、超羨ましいんですけどー!』

さつきまでと同様、私は明るく振る舞ってはいるが、なんだろう…。ディステイニーに憧れの先輩と遊びに行くっていうのに、いろはがとてつもなく緊張している様子が伺えて、それに引つ張られて私もなかなか緊張して手が震えている。ドキドキも止まらない。

『へへー、いいでしょー。でね、明日はちよつと……、…………思いつきり楽しんできちやおつかなく………って、………香織達に報告しとこう!…って思ってたさ』

『なによーっ!なにその嫌がらせ!爆発しろっ♪』

分かっている。たぶんあなたは何かを決意したんだね…

へへっって笑ってる声、かすかに震えてるよ…?

今のあなたの表情も、なんとなく分かるよ。

たぶん引きつって泣きそうな顔を、無理して笑顔にしているんでしょ…?
…?

まったく…。仕事の事で悩んでんのかと思ったたらコレだもんね、この女は…

心配して損しちゃったよ。

だから私はいろはに満面の笑顔ととびつきり明るい声でこう言つてやった。

『よしーいろはー思いつきり楽しんできなっ!!応援してるからねっ』

【過去編②後編】 ゆえに私の友達は恋に仕事にカーニバル

いろはが葉山先輩達とテイステイニーに行った日、私達3人は紗弥加の家に集まっていた。

もちろん私もそうだけど、紗弥加と智子も流石に昨日のいろはの様子が心配になったようで、急遽集まろうかって話になったのだ。

一応私達の方針も決めておかなきゃだしね。

「いろは今ごろ楽しめてるのかな……」

私がそう言うのと2人とも神妙な顔をしていた。

「どうだろうね……。昨日の様子だと、たぶん告るんだよね、あの子」

紗弥加の誰に対しても取れない質問に智子が暗い声で答える。

「うん……。たぶんね。正直厳しいよねえ、相手が相手だし……。やっぱ楽しめてるはず無いよね……」

「あの子ああ見えてリアリストだから、こんなタイミングで攻めに行っちゃうとは思わなかったよ……」

私もなんとか声を絞りだした。

しばしの沈黙のあと、パン！と紗弥加が手を叩く。

「ま、あたしらがここでグチグチ言っても仕方ないかつ！今夜、もしくは明日には何かしら連絡あるかも知れないし、遅くとも月曜になったら結果が分かっちゃうんだから！」

「そーだねーでもさ、私らから聞くのはやめとかない？言いたい事あるなら自分から言ってくるだろうし、言ってこないなら言いたく無いんだろうしさ」

「賛成ー！」

私達は、そう意見をまとめた。なんにせよいろは次第だ。

× × ×

結局当日も翌日も、誰にも連絡が来る事もなく、週が明けての月曜日。

なんとなく重い足取りで教室に入ると、そこにはすでにいろはが居た。

どう声を掛けようかな?と考えていたら、いろはも私が教室に入ってきたのに気付いたようで、先に声を掛けられてしまった。

「香織おっはよー!」

あれ?元気だぞ?

「……あ、いろはおはよー!」

うーん……。挨拶返したはいいけど、二言目が出てこないな。

するといろはは、

「いやー、土曜日超楽しかったよー。やっぱりすごい混んでて疲れちゃったから、昨日は一日中爆睡だよ」

テヘツとあざとく舌を出した。

あれ?別に無理してるとかじゃなくて、普通に元気そうだぞ?

あれあれ?もしかして告白してない!?!ただの取り越し苦労だったの?!

てか告白成功の可能性を考えてないって、友達としてどうなの!?!私。

そのあと紗弥加達も教室に入ってきていろはと挨拶を交わし、ぽけくつと拍子抜けした顔してる。

そうなりますよねー。

結局そのまま何事もなく過ぎていき、あまりのいろはの普通さに、「聞いちゃおっか!」と、みんなで顔を見合わせたりしたんだけど、地雷の可能性がストップ高で残っている以上、3人で決めた一昨日の約束通り、こちらからは何も言わないで普段どおりに振る舞った。

事態が動いたのはお昼休み。

いろはが「たまには生徒会室でごはん食べない？これ会長様の特権ね♪」と言いだしたので、あ、これなんかあるわ……と、みんなで領き合った……

× × ×

「わたし振られちゃった〜！みんな心配掛けてゴメンね！気を遣ってくれてありがとうー」

……え？そんなに軽くカミングアウト？

初めて入った生徒会室で、色んな意味で緊張しながらお弁当を広げていると、唐突に、なんのタメも無く、いろはが突然失恋を口にした……

「……あ、えつと……」

3人共言葉に詰まる中、いろはは柔らかい笑顔でゆつくりと言葉を紡ぐ。

「でもね、本当に全然大丈夫なの。振られてスッキリしたって言うか、ホントの意味で一步踏み出せたって言うか」

なんの嘘偽りも無い笑顔でさらに言葉を紡ぐ。

「別に恋を諦めた訳じゃないしさつ。むしろこれから本番！って言うかがんばんなきやつ！って、晴れ晴れした気分なんだよねー」
ぐっ！と小さくガツポーズすると、一拍あけてからいろははおもむろに私達に頭を下げた……

「だから、色々気遣ってくれてありがとう。とつても嬉しかったし有り難かったです。……実はホントはもっと言わなくちゃいけない自分の中の決意があるんだけど、それはまだ言えないかな。でもいつか必ず言うから。だからまたこれからもよろしくお願いしますー！」

えへっ、とそう言ういろはの笑顔は、あざとくも嘘臭くもなく、本当に心からの笑顔で。

そこに涙なんかは一滴《ひとしづく》だって無かった……！

× × ×

翌日からのいろはは、まるで人が変わったかのように仕事に取り組んでいた。

どうやらほんの少し光明が射したらしく、「これはわたし達次第でなんとかなるかもっ」と、休み時間もお昼時間も本やらプリントやらにとらめっこして、海浜側にプレゼンする企画を練っていた。

どうやら子供達主演の演劇をするらしい。

ああでもないこうでもない、溢れ出んばかりのやる気と熱意、そしてワクワク感を滲ませながら演出を考えていた。

まじですか…、いろははす。

あのいろはすさんが、こんなにも生き生きと仕事をしてますよ！

一体なにがいろはにこんな変化をもたらせたのかな。

葉山先輩に振られたこと？

イベントに光が見えたこと？

一歩踏み出せたこと？

まだ話せない決意のこと？

なにかはまだ分からないけど、いつか話してくれる日が来るのかなっ……

× × ×

12月24日、ついに来ましたクリスマスイブ！

その日私達3人は、学校近くのコミュニティセンターに、クリスマス

スイベントを見学するために訪れていた。

なんと智子も参加！

友樹君はさすがに渋ったらしいんだけど、どうしてもとお願いで、なんとか夕方まで空けてもらったらしい。

やるじゃん！智子！でも今夜はお楽しみですね？（ゲス顔）

今日はいろはは演出やら管理やらで忙しいだろうと思い、イベント見に行くよっ！とは言わないまま勝手に来ちゃったから、いろはがこつちに気付く事もなく、私達は単純にクリスマスイベントを楽しんでいた。

びつくりしたのは葉山先輩のグループが来ていた事！振ったばかりの女の仕事っぷりを冷やかしくくるなんて、どんな鬼畜プレイなのよっ!?

ま、普通に考えていろはが呼んだんだろうけどね。ホントあいつ綱だわ！綱メンタルだわ！

なんかもう色々錬成しちやいそうな勢い。

等価交換で友樹君を持ってかれてもいいのよ？

さて、まずは海浜総合高校側のプログラムのようだ。

出張クラシックの演奏や海浜生徒のバンドの演奏で、クリスマスソングやらの荘厳だったり軽快な音楽が奏でられると、コミュニケーションターに集まった子供達も親御さんも、お年寄り達もみんながひとつになって楽しんでいた！

なかにはノリノリに踊り出しちゃうおじいちゃんなんかもいたりして（笑）

うん！なかなかいいじゃん、海浜さん！

あれだけ失敗待ったなしだったって割には、すごくいいよっ！

いろはがちよつとだけ教えてくれたんだけど、どうやら我が校の側から、海浜さんを発奮させる爆弾を落とす人たちがいるらしい。

危うくイベント中止も辞さない空気になりかけたらしいんだけど、

これだけ盛り上がりつつあるのなら、陰の功労者だね！

口には出さなくても、あちらさん側も本当は感謝してるかもね。

× × ×

そして……。いろはがそれはもう一生懸命に情熱を傾けて企画した、子供達による演劇が始まろうとしている…。

「あ！見て見て！いろはが舞台袖から観客席覗いてるよっ（笑）超緊張してるー」

「あははっ、ホントだーっ！……っ！っ！なんか私も緊張して来ちゃったよ…!？」

「ん？でも誰か知らないけど男子と話してる…。なんか一気にリラックスしちゃったみたいだね。仲いい人なのかな？」

ワクワクドキドキを隠しきれずにいろはの様子を見てみると、やがて会場の照明が落とされ、あたりは暗闇に包まれる……

賢者の贈り物……。

それが今回いろはが選んだ演目だ。

私このお話知ってるんだよね。お母さんが好きだったなあ…（いや、母さんご存命ですよっ!?)

子供の頃はよく意味が分かんなかったんだけど、ちよっぴり大人になってから背伸びしてお母さんに借りて読んでみたら、とってもいい話で心がポカポカしたのを覚えてる…。

暗闇の中、可愛らしい子供の声でナレーションが始まると、舞台上明かりが灯り、ひとりの可愛らしい少女が登場する……。

綺麗で大人びているのに、たどたどしくも一生懸命にお芝居をする姿について微笑ましくなる。

子供達の舞台はとても素敵なものだった。

よくこういう子供のお芝居を学芸会レベルとか陳腐とかつて揶揄する人たちも居るけど、私はそうは思わない。

緊張した面持ちだけど一生懸命に演じる子供達の演技は、見ているだけで優しくなれるから。

舞台上も観客席も、なんだか不思議な浮遊感の緊張と安堵を繰り返しながら、演劇は滞りなく進んでいく。

そしてついにフィナーレ。

「メリー・クリスマス」

というナレーションと共に、あまりにも可愛らしい天使が舞台上に舞い降りた。

「めりーくりすまーすー！」

と、危なっかしい手つきでケーキを運ぶ。

あまりの可愛らしさに会場が優しい笑顔に包まれると、その刹那、ホールの扉が開き、これまた可愛らしいたくさんの天使達が客席にケーキを運ぶ……！！

「メリークリスマス」

と、舞台上の主演女優ちゃん達が蝋燭に灯をともすと、天使達も会場中でケーキの蝋燭に灯をつけ、ひとつ、またひとつと会場に灯火を広げていく。

可愛い天使達のキャンドルサービスだ。

薄暗い会場が天使達の笑顔の灯火で幻想的な光に包まれた……！！

そう…、これがいろはがああでもないこうでもないという試行錯誤し、考え付いたフィナーレのかたち……

この演出はいろはから相談や報告を受けて知ってたんだけど、机上で考えて文章と図面におこしただけの物と、こうして実際に体感するのは全然別物！

「綺麗……」

「うん……。そうだね……」

「やっぱごっちきで良かったあ……」

私達もおもいつきり感動しちゃったよ。ついつい乙女チックになっちまったよ……。

……やるじゃん！いろは！！

× × ×

「メリークリスマスっ！かんぱーい！」

「いえーいっ☆かんぱーい！」

「初仕事おつかれー！かんぱーい！」

「ありがとーっ！かんぱーい！」

12月25日、クリスマス当日。

クリスマスイベントの翌日、私達はお気に入りのおっしやれーなカフェでクリスマスパーティーをしていた。

イブが仕事になっちやったいろはには内緒で、私達はクリスマスと慰労を兼ねて、事前に予約をとっていたのだっ！

これで「えー、クリスマスはデートの予定が入ってるんですけどー」なんて言おうものなら、確実にファーストブリットっ！が炸裂していた所だったのだが、誘ったらとても喜んでくれたので、我が拳はひとときの休息を得られたようだ……。

てか私ブリット気に入っちゃってんじゃん……。

ちなみに今日も智子はしっかり参加！

またまた渋る友樹君をなんとか宥めて参加してくれた。なんならもうこのまま別れてしまえばいいのに。

でも、ゆうべはおたのしみでしたね？（ゲス顔）

「昨日来てたなんてびっくりしたよ！だったら声掛けてくれたら良かったのにー」

「でも忙しそうだったじゃない？あのあとだって片付けしたり、役員さんと海浜さん側達と打ち上げクリパだったんでしょ？」

「そうそう！まあ大成功の打ち上げだし楽しかったけど、めっちゃ疲れたよー」

「だろうと思ったから、昨日は声を掛けずに、本日の慰労の席を用意したわけです！」

「いやー、ホント感謝感謝です」

「でも昨日はホントに大成功だったよね！あのラストのキャンドルサービスとか、私かるくウルつとしちゃったもん」

「私もー！でもどつかでなんとかファイヤーすごかった！とか聞こえてなかった（笑）？」

「ぷっ！聞こえてたー！あれ確実にキャンプファイヤーと混じってるよね（笑）」

「うちの生徒じゃないと信じたい（笑）」

などと笑いあい語らいあいながら、カフェ特製クリスマスケーキとシャンメリーを頂く。

いや！ホントはシャンパン飲みたかったし、実はこっそり用意してるんだよ!?

でも店員さんがダメっ！って飲ませてくれないんだよー…。

そりゃ高校生だし持ち込み禁止だし、ダメなのは当たり前なんですけどねー。

あとで誰かんちで二次会でもやりますかねっ！

「それにしても、いろはホント頑張ったよね。正直あの頑張りは驚い

たよ！」

私がそう訊ねると、紗弥加も智子も力強くウンウンしてる。

「へっへー、まあね〜！でも、ちゃんと頑張って認めて貰えるのって、結構いいかも！……実はさ、自信が無いです……って言ったら、雪ノ下先輩が言ってくれたんだ。『できるわ。あなたを推した人がいるのだから、それを信じていいと思う』って」

そう言ういろはは、その時の情景を思い浮かべるようにそっと目を閉じた。

「できー！一生懸命頑張って劇も大成功したら、わたしを推してくれた人が、『結構良かったぞ。お前にしてはなかなか頑張ったんじやねえか？』って褒めてくれたんだ……！へへ〜っ、推してくれた人に頑張りを認めてもらえるのって……、結構悪くないかもっ」

そう言ういろはは超笑顔っ！

そして、にひっ！ととびきりの笑顔でこう付け加えた。

「だからさ、わたしあれもこれも、色々がんばっちゃうよーお？」

推してくれた人か……

葉山先輩、応援演説とかしてくれたもんねー。『お前にしては頑張ったんじやねえか？』って、全然葉山先輩っぽくないけどね。

まったくう……恋の為に仕事も頑張るなんて、実にこの女らしいんだから……（笑）

恋ゆえの仕事、仕事ゆえの恋。

どっちにしろ、ホントあんたらしいよ。

ふといろははに視線をやると、頬杖を突いて窓の外のクリスマスイルミネーションを優しくに見つめ、ハミングするように小さな小さな声で、幸せそうに歌っていた……

よしっ！私の友達の一色いろはよっ！思う存分恋に仕事にカーニ
バレっ♪

過去編、了

よって私の友達は不意の遭遇に慌てふためく【前編】

2月のとある日曜日。

私家堀香織は、現在千葉駅前にて絶賛ナンパ被害中である……。

いやー…超しつこい…。

ま、なんだかんだ言っても、私もトップグループで中心張れるくらいの整ったお顔立ちですから？

そりや今までだって、何度もナンパくらいされまくってますよ、はい。

でも今日のは本当にしつこい！かれこれ20分くらいは足止めされてるよお…。

今日は女友達とショッピングでも洒落込みましょうかねと、千葉駅前にて待ち合わせをしていたのだ。

待ち合わせていた内の1人と落ち合うとほぼ同時に、チャライのが2人やってきましたよ？

最初は笑顔で躲してただけど、あんまりにもしつこいから、私はウンザリ丸出しの顔してるし、友達なんかはいつお前をひっぱたいやろうか?!お前を蠟人形にしてやろうか?!

とデーモン閣下の如き視線で睨んでる。

て古っ！いやいや私センス古すぎねっ？

しかしこのチャラ男どもも、女の子に相手してもらいたいなら、この空気を感じとれるくらいの感性持ちなさいよ…。

ああ…無理だからこれなんですか…。

× × ×

おっと！そういえば友達の紹介がまだだったね！

本日は紗弥加と智子は都合が合わなかったので欠席です。

紗弥加は兄貴と秋葉に行くらしい。オイオイ大丈夫かよ？この兄妹。

智子は……。はいはいおたのしみおたのしみ。

で、もちろん今まさに同じく絶賛被害を受けている友達とは、肩下まで伸ばしたセミロングにふわりとパーマを掛けた茶髪の美少女。そう！襟沢恵理だ。

……。いやいや、襟沢かよ!?

しかも金髪縦巻きロールじゃないのかよっ!?

つてツツコミが聞こえてきそうんだけど、あの一件以来、色々あったのよ…。

教室で1人で暴走して1人で大泣きしちゃったもんだから、ちよっといつものグループが居心地悪くなっちゃったみたいでさあ。

で、あの時泣かされたいろはに優しくフォローされたじゃない？それ以来なんだか私達の方に視線を向けてきてたんだよね。

えりがなかまになりたそうにこちらをみている。

まあちゃんと謝罪してきてたし、なんか求めるように視線を向け続けてきてる襟沢が正直ちよっどめんどくさくなっちゃったのもあつたし、いろはも「木材屋みたいなもんでしょ。別にいんじゃない？」つて言うもんだから、気付いたらウチらのグループに寄生するようになったのよね…。

なんで木材屋さんが出てきたかは謎なんですけどね。木を売る人つてめんどくさいの？

てかあれだけ突っ掛かってきてた癖に、ちよつと優しくされたくらいでコロツというはに懐くって、どこの野菜王子だよってくらいチョロいなコイツ。

仮にも女王様目指してたんだから、フリーザ様くらい頑張れよ、ホツホツホってき。

やっぱり元々いろは大好きだったんじゃね？こいつ。

んで髪型に関しては、いろはが

『あ、そうそう。恵理ちゃんさ、前々からずつと言いたかつたんだけど、三浦先輩リスペクトすんのはいいんだけど、そのヘアスタイルは逆効果だよ？なんなら』……なんでコイツあーしと同じ髪型してんの？マジ不愉快だし』って一睨みされて終了まであるよ？』

と三浦先輩のモノマネ付きで言われた翌日にはヘアスタイル変えてきたからね！こいつ。

もう劣化版三浦どころか去年の文化祭実行委員長レベルの豆腐メンタルだよ…。

学名は、かまつてちゃん類相模科エセ女王様目ミウラモドキと命名しよう。

おつと、正直出オチ感が否めない襟沢の話題はこれくらいにしとくとして、とりあえずはこの目の前の問題を対処しなければ。

これで遅れて来る美少女小悪魔 i r o h a ☆まで合流した日には、こいつら永遠に付きまどってきそうだし…。

果たして襟沢に出オチ以外の出番はあるのかしらん？と若干の心配をしつつ、なんかいい手段無いかな？と辺りを見渡してみる。

すると、見覚えのある猫背と淀んだ目の男性と目が合った。

× × ×

お…おおっ！まさかの比企谷先輩だ！

うっわ…。超めんどくさそうな顔して目を逸らしやがった…！

あれあれ？なんか見なかった事にして歩きだそうとしますよ？
えくく？行っちゃおうの…？

あ、ハア…と溜め息付いて、めんどくさそうにボリボリ頭掻きながらこつち来た！

どうやら思い悩んだ末に助けしてくれるみたいですよ？

「おい、香織。お前いつまで待たせんだよ。待ち合わせとつくに過ぎてんぞ」

へ？まさかの待ち合わせシチュエーションプレイ？しかも呼び捨て？

「は？なにお前。この子の男？」

「あー…、すいやせんねえ。コイツこつちのツレなもんで、遠慮していただけませんかねえ」

「シヨツボつーなに？君らこんなのと遊ぶの!？」

いや、別にそんな予定はありませんけど…。

「はあ、まあ」

「だったらやつぱオレらと遊ぼうぜ！こんなんほつといてさあ」

いや、比企谷先輩はほつとくとしても、あんたらとは遊ばないよ…。

「しつけれな…。あんたらも良くここまで迷惑そうに蔑まれた目で見られてんのに心折れないよな。なに？不感症なの？」

「……………オイ。てめえフザケてんのかコラ…………」

ヤバい！比企谷先輩煽り過ぎだよ！

そして比企谷先輩は胸ぐらを掴まれそうになったその時、思いがけない言葉を口にした。

「なあ、香織ー。もうめんどくせえから兄貴に電話して来てもらえよ…」

「……………え？兄貴？」

どゆこと？私一人っ子ですけど!?

「ああ。昨日言っただけ無かったっけ？家堀さん、確か今日はすぐその交番勤務だろ？」

「……………!？」

なに言ってるんだろ？この人…すぐには理解出来ないでいると

「マジかよ…おいもう行こうぜ…」「そ、そうだな！」

とチャライナンパ男君達、略してチャランパ君がそそくさと退散していった。

あ…、成る程。あの一瞬でそこまで考えてたのか…この人。

架空の兄の事を『家堀さん』と呼び信憑性を持たせる為に、あえて私の事は呼び捨てにしたのかな。

私と架空の兄をどっちも名字で読むよりも、私は名前で呼び捨てる方が、なんか家族ぐるみで親密っぽくて信憑性高いもんね。

とにかく姑息！決して格好いい助け方ではないし姑息だけど、なんか凄いな。

さすがはいろはのお気に入りなだけあるわ。

隣では「香織ちゃんのお兄さんてお巡りさんだったんだ〜」と純粹に感動してる子もいますけど、とりあえず無視しとこう。

「比企谷先輩！ありがとうございます！」

「あ、いや、別になんもしてねえよ。じゃ」

と片手を上げて回れ右。おっと！早くもナチュラルに帰ろうとしてますよ？この人！

慌てて腕を掴む。

「ちよちよちよっ!?!なんで行っちゃうんですか！まだきちんとお礼もしてないのに！」

「いや、だから礼を言われるような事は別になんもしてねえって。じゃあな」

あれ？なんか若干顔赤くしてキョドってますね、この先輩。

あ！もしかして名前呼び捨てにしちゃったから照れてんの!?!?どんだけ純情なのよ！いろはがからかいたくなっちゃう気持ちがちよつと分かるかもつ。

「比企谷先輩！ちよつと待って下さいってば！ちゃんとお礼もしてま

せんし、この後いろはも来るから、このまま帰しちゃったら私いろはに怒られちゃいますよ!」

襟沢も居るからこの事いろはに言わない訳にもいかないし、そして何で帰しちゃったの!?! ってプンスカするいろはが思い浮かぶよ…。

「一色も来んの…?じゃあ帰りますんで」

スチャッと右手を上げると本気で帰ろうとしだしましたよ?

もちろん慌てて止めて、何ですか!?!と訊ねると

「いや、だって休日まで一色と顔合わせるなんてめんどくさいし」

………………。いろは。前途多難すぎるよ…。

そうこう揉めていると

「ごめーん!遅くなっちゃったあ!……………つ!て、な、何で先輩が居るんですか?!」

良かったあ…。帰られちゃう前にいろはさんご到着です。

このサプライズ、いろはもさぞや大喜びで比企谷先輩にちよつかい掛けに行くのだろうと思ってたなら、いろははすったら顔を真っ赤にして「なんで?なんで?」とあわあわしてる…。

「…………。おう一色。なんかお前の友達に捕まっちゃってな。いやいや急に居たからって、そんなに顔真っ赤にして怒んなくてもいいだろ…」
「あ、当たり前ですよ!ちゃんとか心の準備が出来てない時にいきなり先輩の顔なんか見たら気持ち悪いじゃないですか!…………。ちよ、ちよつとわたしトイレ行ってきますんでっ!」

私の横を通り過ぎる時、すっごい小さな声でボソツと「不意打ちとか反則だし…」と耳まで真っ赤にして駆けてっちゃった。

あらあらいろはすったら、そんなに自然な可愛らしい態度も取れるんじゃない!

さすがのいろはも不意打ちはダメだったみたいね。慌ててトイレに行って身だしなみをチェックしてくるのかな?

あらやだ可愛い。

比企谷先輩は啞然とそれを見送ると、スツと帰ろうとしました。もちろん全力で止めました。

いやマジで今帰っちゃったら本気で怒られちゃいますからっ！

「なんでだよ……。顔見るなりトイレに駆け込まれるなんて酷い拷問受けたのに、まだ帰っちゃいけないのかよ……」

× × ×

「で？なんで先輩のくせに日曜の昼間っからこんなところに居るんですか？」

「うっせーな…本買いにきただけだよ。今日発売の新刊があるからな」

「で？なんで先輩が香織達と一緒に居たんですか……？」

「いや、なんでって言われても……」

「あ！違うのいろは！私達さつきナンパされて……」

「ナンパっ!?!は？なに先輩のくせにわたしの友達ナンパしちやってるんですか!?!マジで気持ち悪くて腹立つんですけどー!」

うわー…いろはちゃんたらマジギレですよ…。

「アホか。俺がナンパなんかすると思うか？俺が逆ナンされちやうくらい有り得ないことだろ……」

「そっ…そりやそうですけどー……」

「違うってばー！私達がしつこいナンパに絡まれてた所を助けてもらったの!」

「へ？……あ、ああそういう事かー。そりやそうですよねー。先輩がナンパなんてしたって、ゾンビが這いよって来るみたいなものでもんねー。それくらい自覚のある先輩がそんな真似するはずないですよねー」

さつきまでの怒りはどこへやら、上機嫌で比企谷先輩を罵倒するい

ろは…。

いやだから生き生きしすぎだから！

「そんな自覚はねえよ……」

「てか先輩がナンパから助けるってどういう風の吹き回しですか？……はっ！まさかわたしの友達を助けた事によってわたしの好感度を最大限まであげてから告白しちゃうぞ大作戦を実行しようとか考えてましたかなんですかその恥ずかしい作戦気持ち悪いですすみませんもうちよつと考えさせてください」

「じゃあ俺帰らせてもらいますんで」

「ちよつとせんぱい！せつかくこんな所で会ったんですから、せつかくだから一緒に行動しましょうよー！」

「いや、今さつきまで嬉々として罵倒してた相手にそれ？俺忙しいんだけど」

「まあまあいいじゃないですかー。どうせ本買って、すぐお家帰って読むだけなんですよね？」

「そこが重要なんだが。早く買って帰って読みたいし」

「じゃあ急いで帰らなくなつて、カフェとかに入ってまったりと読むのも一緒じゃないですかー」

「いやいや、それって単独行動での話だろ？なんでそれをお前としなきゃなんねえんだ？そもそもお前友達と遊ぶんじゃねえのかよ」

「香織達はどう思う？」

きやるん☆と首をかしげ訊ねてくるいろは。

やだー、それも強制じゃないですかー。

かしこまつ☆

ま、とは言え、実際私も結構比企谷先輩に興味あるんだよね。

前に一度会った時も、もうちよつと見極めてみたいと思つたし、さつきの手際のよさも凄いと思つたし。

だからこれから一緒にお茶するってのは、そんなに悪くないかも！

そう思つて襟沢を見ると

「あたしはいろはちゃんがそうしたいつて言うならそれでいいよお？」

と、大人しく従う模様です。手下か！

「うん。私も別にいいよー！助けてもらったお礼もちゃんとしてないし」

私達から言質を取ると満足そうに比企谷先輩と向き合ういろは。

「と言うわけで決定です！」

「なにが、と言うわけだ。俺の意見は聞かないの？」

「先輩に発言権なんてあるわけないじゃないですかー」

なに言つてんのやだー！とでも言わんばかりの小馬鹿にした表情で、いろはは比企谷先輩にとびきりの笑顔を向けた。

「それではレッツゴーですよ！先輩」

「まじかよ……」

てな訳で連行決定！

商業施設内のおつきい本屋さんへと向かう最中で比企谷先輩がいろはに訊ねる。

「……あー、ところで書店寄つて本買うとして、そのあとはまたこないで行つた小洒落たカフェにでも行くのか？」

「えっ!?!」

……え？いろははあそこに比企谷先輩連れてつたんだ！

『彼氏とまではいかなくても、好きな人とまったり過ごしたい!』

いつぞやのいろはの台詞を思い出し、いろはは視線を向けると、いろはも頬を染めて気まずそうに私を見ていた。

「や、やだなく……！ただフリペの取材で行つただけだよ!……先輩まるでデートで使つたかのように言っちゃって気持ち悪いですっ」

ぷくーっと頬を膨らませ耳まで真っ赤にして俯いちゃった。先輩からかいすぎて墓穴掘つたねいろは☆

なんだか今日は照れ照れいろはすをたくさん見られるいい日です

ねっ！

「え？俺そんな風に言った……？」

意味分からんと困惑する比企谷先輩はもう放置。

そりや意味分かりませんよねー。

× × ×

私達は商業施設内の本屋さんに隣接するカフェ（というか喫茶店で言うのかな？）にて、読書お茶会をしていた。

比企谷先輩は本屋さんでお目当ての小説をすぐ見つけたようなので、私もせっかくなので、初心者にも読みやすいようなオススメの小説を教えてもらって買ってみた。

比企谷先輩は今日は純文学作品を購入したのだが、ラノベも結構読むようになったので、私が結構な漫画好きだと教えるとオススメしてくれたのはラノベだった。

ラノベというジャンルは前から結構気になってたので、ちよっぴり楽しみだ。

学校では恥ずかしくて読めんけど…。

『あっ！せんぱーい！コレこないだ借りた小説の新刊ですよー。続き気になってたんですよー』

いろはは比企谷先輩の影響なのか、最近は結構本を読んでいるらしく、自分のお目当ての本を手に入れたようだ。

襟沢は、今泣けると話題の少女マンガを大人買いしていた…。

もうあんたのキャラが分からないよ…わたしや。

喫茶店に入ってからもう一時間ほど。

ほんつとに全くしゃべらずに本を読んでもよ、この先輩。

こんなの初めてっ☆

今までデートだったり合コンだったり単なる遊びだったり、何度

か男と遊んだ事はあるけど、会話を途切らせるような男は居なかった。

会話が途切れそうになると、それはもう無理に盛り上げようとウエイウェイ言ったりフウフウ言ったりね。

だから最初はちよつと困惑したけど、こういうのも意外と悪くないかも！

そしてそして、ソファアに深めに腰を掛け、脚を組み文庫本を片手にコーヒを口へ運ぶ姿なんかは…。

うーん……。意外なほど格好良いんだよ！コレが！

結構整った顔立ちなのに、そのすべてを台無しにしてる淀んだ目も、真剣に本を読んでいる時は腐りがナリを潜めちやったりしてき。いろはも比企谷先輩の隣に陣取り大人しく本を読んでいるもの、たまーにチラツチラツと比企谷先輩の横顔みては満足そうにニヤニヤしてるしねー！

私の隣では襟沢がハンカチ片手に少女マンガに夢中だが、もう何も言うまい……

なかなかいいもんだねえ。こういうゆったりした休日も！

そんなまったりとした贅沢な時間を、刻が経つのも忘れて満喫していたのだが、あれ？なんかちよつと寒くなってきたよ!?空調の調子が悪いんじゃないですかー？店員さん？

カツカツカツカツ……

なんだか寒いのが近寄って来ましたよ……??

「あら比企谷君こんにちは。とても珍しい不思議な光景ね……。これは

「一体どういった趣向なのかしら……?」

その凜とした美しくも冷たい声色のする方に視線を向けると、そこには美しく艶やかな黒髪をたたえ、息をするのも憚られるような凍える美しい笑顔と眼差しの極寒の女神が、私達（下界）を見下ろすように降臨していた……

よって私の友達は不意の遭遇に慌てふためく【後編】

どうしてこうなった……………

よし！と、とりあえずこの状況を整理してみよう！

今日は確かいろは達と千葉までショツピングに来ていたはずだ。

そこで偶然にもいろはのお気に入りの先輩と出会い、いろはの小悪魔おねだりで（半ば強制的に）一緒に行動する事が決定し、みんな大好きな本を買って、そして今まさに本屋さんに隣接する喫茶店で読書お茶会を楽しんでるんだよねっ！

そのお茶会メンバーはと言えば、私香織と親友のいろは。オマケの襟沢と連行された比企谷先輩。

そして……………雪ノ下先輩……………

どうしてこうなった……………

× × ×

〜一時間前〜

「どういった趣向なのかしら…?」

とても優しく柔らかい笑顔で周囲を零下へと叩き落とす雪ノ下先輩。
「お、おう雪ノ下。奇遇だな。…………お前もその書店で買い物か？」

「ええ…。とても奇遇ね。お買い物を終えて書店を出たらあなた達が

見えたものだから」

「この喫茶店は通路側が吹き抜けになっていて、外からも結構中の様子が見えるのよね。」

「……で？どういった趣向なのかしら？」

笑顔は変わらないんだけど、なんか声のトーンがひとつ落ちましたね……

「あ、やべっ！そういういえば俺この後用事が……」

とおもむろに立ち上がる比企谷先輩を冷気のカーテンで優しく包み込み締め上げる……

「比企谷君……。いいからそこに座りなさい」

「……………はい。……………えっと土下座じゃなくても宜しいでしょうか？」

「土下座？あなたは何を言っているの……？このような公共の場で衆人環視のもと、自らの痴態を多くの人々に見せ付けて自己の歪んだ欲求を満たしたいとでも言うのかしら？分かってはいた事だけれど、とんだ変態ね。ごめんなさい比企谷君。私にはあなたの異常な性癖に付き合う事は出来ないわ」

戦慄の眼差しで比企谷先輩を見つめる雪ノ下先輩。でもね？雪ノ下先輩……。私はそんなあなたに戦慄しています。

「そんな性癖持ち合わせてないんで付き合わなくて結構です……」

「……………で？どういった趣向なのかしら？まさかお友達付き合い合ひと言うわけではないわよね？まともな人付き合いひとつ出来ないあなたが、同性どころかたくさんさんの異性と休日と共に楽しく過ごすなんて、到底信じられるような事案ではないのだけれど……。一体なにを企んでいるのかしら？」

「ゆ、雪ノ下先輩！違うんですよ！これはたまたまと言うか偶然と言うか……」

「一色さん」

「はー！はいいつ……」

「あなたはつい先日取材と称してその男を連れ出して生徒会の経費で遊び回っていたわね。今回もまたその男を勝手に持ち出して

なにか悪巧みをしているのかしら?」

「いや違うっつーの。だから…」

「黙りなさい」

「……………」

「一色さん? 確かにその男は奉仕部のごみかも知れないけれど、まだ集積場には出してはいないの。いくらごみとは言え集積場に出していなければ所有権は奉仕部にあるのよ。例えばどんなにけがれた生ごみと言えども、所有者に断りもなく勝手に持ち出す行為は現時点では窃盗になるのよ」

「おい、何度ごみ扱いすりゃいいん…」

「黙りなさい」

「……………」

ふえええ……………こわいよう……………ゆきのんこわいよう……………

これはマジでヤバイやつですわ…。怖すぎてちよつぴり涙出ちやつた☆

お父さんお母さん先立つ不幸をお許してください。私旅立ちます。

怖くて怖くて仕方なかったけど、助けてもらったお礼もあるし、私は決死の覚悟で割り込んで、いろはと一緒に今日の出来事を懇切丁寧に一から説明し、何とかご納得してもらえました…。これはマジで命のやり取りだぜっ……………あ、命を捧げるのはこちら側の一方通行でした。テヘツ

ちなみに襟沢は涙目でただただプルプルしていました。

しかしご納得いただけただけのもの、部長として性犯罪者予備軍の部員を、このままこの場に放置しておく事は出来ないし、おもむろに隣の席につくと紅茶を注文し、何事もなかったかのようにお茶会にご参加なさいました…。

もちろん比企谷先輩は帰ろうとしましたが、いろはすに袖を強く強く握り締められ帰らせてもらえませんでした。そして冒頭へと繋が

るのです…。

× × ×

不意の遭遇にいろはも比企谷先輩も初めのうちは動揺してたけど、雪ノ下先輩を宥めた後はすっかり落ち着いて、今は3人共何事もなかったかの如く、普通に読書を楽しんでいる。

雪ノ下先輩は美しい所作でページを捲り、比企谷先輩はコーヒーをちびちび飲みつつ本に集中している。

いろはは本に集中しつつも、時折「せんぱーい。コレなんて読むんですかー？」だの「せんぱーい。ココの登場人物の心理ってどんな感じだと思いますかー？わたしはこうだと思っくんですけど違いますかねー」だのと、につこにつこに「っつと楽しげに読書談義に花を咲かせたりしていた。

えー……？あれだけの地獄絵図だったのに、この人たちにとっては取るに足らない日常の一コマだったというの……？

間違いなく異常事態であったはずのソースは隣の襟沢。

なぜならここ一時間ほど、プルプルと震えた手で持ち続けている少女マンガが1ページも進んでないのです…。視線は一点に集中したままに……。

え!?なに!?そのその一コマがそんなに気に入っちゃったの？

かくいう私も、あれだけ楽しんでいたらノベが一切頭に入ってきたせんでした……。だって怖いんですもの…。

仕方ないので、改めて一度雪ノ下先輩を観察してみることにしましょうかね。

雪ノ下雪乃。

県内有数の進学校である我が校においても、さらに一ランク上の国際教養科に在籍し、その中でも更に異彩を放つ特別な存在。

容姿端麗文武両道、そのあまりの美しさとあまりの優秀さで俗人には近寄りがたく、正に『孤高』という表現がこれほどじっくりくる人も居ないのではないだろうか。

雪ノ下先輩に気付かれないように改めてじっくり見てみると、ホントに綺麗……。

艶やかな長い黒髪に芸術品のように整った顔立ち。

そして外見だけではなく、紅茶を口に運ぶ動き、髪を払う仕草、ページを捲るしなやかな指使い、腰掛けている姿勢まで、どれを取ってもひとつひとつの所作からして美しい。

……そして私は本当に、本っ当につ！気付かれないよう細心の注意を払いつつ、そつと視線を胸元へと落とす……。

……なるほど。これが噂の絶ぺ……!!!?

な、に……？この凍てつくようなプレッシャーは!?まるでこの宇宙全ての悪意を私に向けたかのような圧倒的プレッシャー……。

私は死を覚悟しながらも必死に視線を手元で開く小説のページへと戻した……！

震える指先をなんとか動かしページを捲り、震える脳内をなんとか鼓舞しながら思考を巡らす……。

そ、そんな馬鹿な……？彼女は読書に集中していたはずなのに……！僕達は感じあえるというのか……？解りあえるというのか……？

これが人類の新たな革新だと言うのか……。

ああ……らあ……。

……。おつとイカンイカン。それはかしこまの方だったか。落ちて着け私！今は雪ノ下先輩と仲良くパキッてる場合じゃなかったっ

ぷりっ！

よし！もう絶壁の事は忘れましょう。

え？絶壁ってナンデシタツケ？

フリークライミングかなんかの事かな☆

× × ×

「それにしてもあなたはきちんと理解しているのかしら？」

ずいぶん長いこと読書に集中している勝ち組と戦慄に怯えている負け組へと分かれて静かになっていた店内に、ふいに雪ノ下先輩の声が響き渡る。

「私達は来年度には受験生なのよ。つまり来年度は彼女達が二年生になり、総武高校を背負って立つ大事な身。そんな未来ある彼女達に、あなたの病原菌を感染させる事の罪が如何なるものかきちんと理解しているのかしら？比企谷菌」

「すいません。さつきから何度も言おうとしてたんですが、一色の前だけならともかく何も知らない純粋な一年の前で、ナチュラルに罵倒するのはやめてもらえませんかね…」

「ちよつと先輩！なんかまるでわたしが純粋じゃないみたいじゃないですかー」

「いやお前に純粋なんて言ったら純粋さんに失礼だろ」

「むー…ひどいですせんばい…」

ぷくーつと頬を膨らまして不満げに見つめてるけど、まさに正論！この子比企谷先輩と居ると、一体何度膨らむんだろう…？そのうち破裂しちゃうわよ？まったくいろはすったら。

「その膨らませた頬とわたし落ち込んでますアピールが、もう純粋とは真逆のベクトルじゃねえか」

「むー！」

「とにかく、あなたの病原菌が彼女達を蝕む前に、そろそろお家に帰って自室に引きこもり眠りにつく事をおすすめするわ。永遠にね」

「永遠にね」と言った時の雪ノ下先輩、すごく素敵な笑顔だったわ！こ

んなに嬉しそうな表情もするのね!

その言った内容でその最高の笑顔はどうかと思いますが…。

雪ノ下先輩の罵倒を要約すると、いつまでも他の女と遊んでないで、早く帰りなさいって事かしら?

「俺死んじゃうのかよ…」

「そんな事よりそろそろお腹空きませんか？」

「いやお前自由過ぎるだろ。俺が永眠しちゃうのがそんな事なの？」

「そーですねー。あーこの前連れてってもらったラーメン屋さんに行きませんか?結構美味しかった女の子だけじゃ入り辛いから、先輩が役に立ちますよっ!人の役に立てるなんて良かったですね!」

嬉しそうに楽しそうに小さくガッツポーズをするいろは。

なんだろう…?いろはと雪ノ下先輩…。この2人の生き生きとした笑顔がなんか似てる…。

比企谷先輩への罵倒はこの2人のエネルギー源なんだろうか?先輩…お悔やみ申し上げます…。

「聞いちゃいねえ…ま、もういいけど」

ヤバい…。なんだか食事に行く方向へと流れてるけど、胃が痛すぎてもう帰りたい…。これ以上この空気は無理っ!とてもじゃないけど、ラーメンなんてリバース一直線よ!

「……ラーメン?あの京都で一緒に食べたような物を今から食べるのかしら…?」

おや、雪ノ下先輩が難色を示しているみたいですよ?

「え…?一緒に…?…せんぱーい…。雪ノ下先輩もラーメン屋さんに連れていった事あるんですか…?」

おっと!ここでまさかのバトル展開勃発なの!?

一般人にはこれ以上は無理ー!

「あ?ちげえちげえ。旅館で二人揃って平塚先生に拉致られたんだよ」

まさかここで平塚女史の名が出てくるとは…。そーいや平塚先生ってお一人様ラーメンとか超似合いそう(笑)

「へー」

いろはすつたら聞かだけ聞いて興味なさそうな返事してるけど、ほんの瞬間の安堵の表情は見逃さなかつたわよん？

自分だけがラーメン屋さんに入れてって貰えたってステータスが宝物なのかしらん！ホント可愛い☆

「確かに味は美味しかったけれど、今からあれを一人前食べるのかと思うと……、正直躊躇するわね……」

「えー？だったら雪ノ下先輩は来なくてもいいですよ？」

「おっとまさかの挑発いろは！だからバトルやめてー！」

「私は部活責任者として、この男の犯罪を未然に防がなくてはならない義務があるのよ。……まあ仕方が無いわね。あの凶暴な旨味もたまには悪くはないでしょう」

「だからなんで俺が犯罪を犯す前提で話を進めるんだよ……。まあ大丈夫じゃねえの？ちゃんとあつさりしたヤツもあるから」

「よし！それじゃあ雪ノ下先輩もレッツゴーですねっ」

いろはって何だかんだ言っつて、ちゃんと雪ノ下先輩にも懐いてんのよねー。

由比ヶ浜先輩の事も大好きっぽいし。

なんか色々複雑そうよね……。

……つてヤバイヤバイ！これ普通にお食事決定じゃん！

なんとか逃げ出さないと……。

私はおもむろにスマホを取り出し、一世一代の芝居に打って出たのだ！

「いつけなーい☆ごめんいろはー。なんかお母さんからメールがきてー、家族でお食事に行くからそろそろ帰ってきなさいってきー！」

……我ながら酷いもんだ……。なんか比企谷先輩が引きつった苦い表情で私を見るけど、気のせいだと思いたい。

「そっかー。じゃあ香織は仕方ないねー。それじゃあ4人で行こっか」

Yes! Yes! うまいこと逃げられたYO!

安堵で胸を撫で下ろしていると、なんか服の裾をグイグイ引っ張られているような気がした。

ふと隣を見ると、襟沢が涙目でプルプルと助けを求めていた…。

あ、そういえばアンタ居たんだけ…。

存在感無すぎて忘れてたよ…。

うーん……。さ、さすがに襟沢だけ残していくのは不憫かな…。

メンタル弱すぎのコイツがこのメンバーに連行されたら、食事中に吐血しちやいな勢い。

お願いだから私を一人にしないでええ〜…という必死の無言の訴えに、さすがに良心の呵責が…

「あ…、そ、そういうえば襟沢は炭水化物ダイエットとかやってるんだっけ…? ラーメンは…ちよつと、アレだよね…?」

私の苦し紛れの助け船に、襟沢は力強くウンウンと頷いている。涙目で。

「え!? そーなんだー。んじゃあ別にラーメンじゃなくても…」

「ううん!? わ、私はいいのっ! いろはちゃんせつかくだから好きなもの食べてきてっ? 私も香織ちゃんと一緒に帰るからっ!」

襟沢必死っ…。ていうか襟沢の声久しぶりに聞いたよ…。もう色々とシヨックが強すぎて声を失っちゃったのかと思ってたわ。

「そっかあ。じゃあ先輩方! 3人で行きましょー!」

そうして私達は、あまりにも色んな事がありすぎ長居しすぎたこの喫茶店を後にした。

店員さん顔引きつらせて苦笑いしてたけどなんかゴメンなさい。

× × ×

寒風吹きすさぶ2月の夕方は身体の芯から凍えさせるような寒さだった。

長時間商業施設内にいた私達は、暖かさに慣れ切った身体を守るよ

うに、カバンから防寒具を取り出す。

マフラーを巻き手袋を付けていると、たまたま私の近くに居た雪ノ下先輩がカバンから防寒具を取り出しているのが見えてしまった。

ね…猫のミトン…だと…？嘘でしょ!?あの雪ノ下先輩が…!?

そして私はさらに見てしまった聞いてしまった…!

雪ノ下先輩は取り出した猫のミトンをほんの一瞬見つめたかと思ったら、猫と目を合わせとつても素敵な最高の笑顔で、誰にも聞き取れないほどの小さな小さな声で、「にゃー」と鳴いたのだ…

いやあああゝっ！もういつそ私を殺してくださいっ…!

このギャップは凶器だよ！胸を抉るよ！萌え死ぬよ！

さつきまでの零下の恐怖はどこに行っただよ、ゆきのーんっ！

アレ絶対猫と会話しちゃってるよお！絶対左右で違う名前付けてるよお！左と右で違う子だよおっ！

この世に生を受けてはや十六年。

私はこの日、生まれて初めて萌えて死ぬのもなかなか悪くはないものなのだな…と思いました。まる。

× × ×

「それじゃあ二人とも気をつけてねー」

「はいー！じゃあまた明日学校でねー。比企谷先輩！今日は本当にありがとうございました！雪ノ下先輩もさようなら！お会いできて光栄でしたっ」

「うっす…」

「ええ、さようなら」

私達は思い思いの別れの挨拶を済ますと、いろは達ラーメン組は目当てのお店があるらしき方向へと歩みだした。

この間由比ヶ浜先輩と会った時はイジけちゃってたいろはも、今日ががんばってんじやん！

まあ今日の比企谷先輩は由比ヶ浜先輩に照れさせられてた前回と違って、雪ノ下先輩には虐げられてたしねっ！

目の前で他の女にデレデレしてるの見るのは辛いけど、罵倒されてドロドロになっていく比企谷先輩は見てて楽しいんだろうね！小悪魔irohaだもんね☆

まつ！頑張りなさいっ！と思いつながらふと隣を見ると、安心して力の抜けた襟沢がしやがみこんでいた。

「……香織ちゃん。私さあ、いろはちゃんにかなうはずなんて無かったんだね。あんな状況に慣れてたら、そりゃ強くもなるよね……。なんか強がってたけど、今日初めて気付いたよ。私ってメンタル弱い小物だったんだねえ」

そういう襟沢に、いやお前そこはもつと早く気付けよと思いつながら、私は夜の帳へと消えていくんだか色々々と凸凹で不思議な三人組の背中を、いつまでも見つめているのだった……。

了

とにもかくにも私の友達はせんぱいが大好き過ぎる

【前編】

「うう〜……。さつむう〜…」

2月の朝はとにかく寒い。特に我が総武高校は海沿いに位置している事もあり、海からの吹きさらしの風が、より一層体感温度を下げる。

その上本日は朝からあいにくの曇天模様。

いつ雨とも雪とも知れない物が降り出してもおかしくは無い曇り空が、より一層心も身体も冷え冷えさせる。

私、家堀香織はその寒さに少しでも抵抗するように、マフラーに顔を埋め、通学途中に買ったミルクティーを頬にあてながら、昇降口に向かって足早に歩を進めていた。

昇降口に近づくと、駐輪場の方から見覚えのある男子生徒が、寒さと眠気で気怠そうに歩いて来るのが見えた。

なかなかの整った顔立ちを台無しにするかのような淀んだ眼差しと猫背で歩く姿は、知り合いでもなければ見向きもしないような人物なのだが、あいにく何度か顔を合わせた事のある知り合いだった為、こちらから声を掛けてみる。

「比企谷先輩、おはようございます！」

比企谷八幡先輩。私の友達で、一年生にして生徒会長でもある一色いろはが慕っている二年生。

「お、……………うっす。家堀か」

なぜおはようと言い掛けてうっすに切り替えたのか…。恥ずかしいの？

「先日は色々ありがとうございます！オススメされたラノ……………小

説も、すつごく楽しかったですよっ」

「お、おう、そうか。それは良かった」

素っ気ないお返事だけど、ちよつと嬉しそう！

比企谷先輩って友達居ないみたいだから、自分の好きな本を勧めたり、それを肯定されるような事があるま無いんだろうな。

そのまま雑談を交わしながら、並んで昇降口に向かう。

「ほんつとに面白かったですよ。あれって何巻まで出てるんですか？揃えちやおつかなく」

「そうか。もう10巻まで出てるから、揃えるとなると結構金掛かるぞ？もしあれだったら貸してやるけど。」

おつと、まさかの提案！若干緊張してらっしゃるから、知人との物の貸し借りにあんまり慣れてなかったりするのかな？

でもせつかくだからお言葉に甘えちやいませうかね！ラノベつて一から揃えるには、高校生にとっては結構高いのよね！

「え!?マジですか？それじゃあぜひぜひお願いしますっ」

「了解。じゃあとりあえず二冊ずつくらい、一色に渡しとくわ」

「ありがとうございますー！このお礼はまた後ほどっ」

「…………いや、お前の礼はろくな事にならないからいいや」

ああ…：そういうえばつい先日助けてもらったお礼がしたいからと無理に引き止めた末に、大変な目に遇わせちゃったつけ…。

「あ、あはははは…。そ、そういうばあのは大丈夫だったんですか…？」

「…………。まあ色々とな…」

あ、大丈夫じゃ無かったみたい。

そんな雑談をしながら歩いているとあつという間に昇降口に着き、学年が違い下駄箱の位置が違うため、そこで別れる。

「比企谷先輩、それでは！」

ペコリと挨拶すると「おう」と一言だけ返事をして二年の下駄箱へと向かう。

ホント照れ屋というかコミュニケーションが苦手な人だなあ。

まあそれなりにあの人を『知った』上でなら、全然悪い気はしない

んだけどね。

『ちゃんと先輩を『知ってる』人なら』

いつかのいろはの言葉がふと頭に浮かんだ。
なるほどなるほどっ。

確かに人つてちゃんと知らないと、つまらない事で不快になったり嫌な感情を持つちやったりするもんなんだな。

まだまだ知らない事だらけではあるけれど、一応それなりに比企谷先輩の事を知った今は、少なくとも一方的に女子に酷い暴言を吐いて傷付けるような『校内一の嫌われ者の最悪な二年生』なんかじゃ無いことくらい分かるもんね。

「八幡くっくっ！おはよっつ」

いろはの言葉に改めて納得して思いに更けつていると、ふいに背後で元気いっばいに挨拶をして駆けていく生徒がいた。

「八幡？」

聞き覚えのある珍しい名前に、ふとそちらへ視線をやると、比企谷先輩へと小走りに駆け寄る笑顔の天使が居た……。え、なにあの天使。なんか可愛すぎるんですけど。あれ？目の錯覚かな？なんかキラキラしてませんか？

「お、おう。おはよう戸塚。朝練終わりか？」

私には躊躇したくせに天使にはおはようかよっ！

「うんっ！さっき終わったところなんだ！エヘヘ：ちようど朝練終わりに八幡と会えるなんて、朝からすっごくツイてるねっ！嬉しいな……」

かあつと頬を赤らめながら上目遣いで比企谷先輩を見つめる天使。
なんて素敵な笑顔であんなにこっ恥ずかしい事が言えるんでしょっ！天使の特権なの？

「お、俺も朝から会えるなんてすげー嬉しいよ……彩加。明日から毎朝一緒に起きよう」

……はっ……

「え!?……もう八幡っ！前にも言ったでしょ……きゅ、急に呼び捨てなんて反則だよっ……！」

……え？何この関係？ただれてるの？

「それに毎朝一緒に起きるってどういう事？ほんとにもう…朝から変な八幡っ！」

アハツと頬を染めて穢れのない笑顔で笑う天使……。

え？なんなの一体……。い、いろはさんっ!?

朝からさんざんイチャイチャを見せ付けながら、比企谷先輩と天使は仲良く教室へと向かっていった。

え、え〜つと……。なんか見ちゃいけないモノを見ちゃいましたかね〜……。？

いろはすはあの天使を知ってるの？

雪ノ下先輩よりも由比ヶ浜先輩よりも、あつちの天使の方が遥かにヤバイじゃんっ!

だってあの天使、「行こっ?」って嬉しそうに比企谷先輩の袖をちよいちよい引っ張って教室向かいましたよ？あの比企谷先輩が、とんでもなくデレてましたけど！

ど、どうしよう…。いろはになんて言えばいいんだろ…。

てかさーっ、比企谷先輩ってぼっちぼっち言うわりには、全然ぼっちじゃ無くね!?

と、あまりにも動揺しすぎて全国の皆さんが思ってる事を思わず代弁してみました☆

× × ×

結局なにも言う事が出来ずにお昼休みになっちゃった……。外はついに空が我慢出来なくなっちゃったみたいで、先ほどからシトシトと雨が降り出していた。

私達はいつもと同じようにお弁当を広げてランチタイム。

最近いつもと違うようになったのは、一緒にお弁当を広げる相手が3人から4人になった事かな？

「えー？そろそろ智子ちゃんのラブラブな彼氏紹介してよお」

「マジでえ!? 紗弥加ちゃんのお兄さんってキモくて無理い☆」

誰とは言わないけどすつかり馴染んでますね、アナタ。

どれだけ私たちのグループに入りたかったんだよ……。

でもウザくて誰も聞いちゃいなかったノロケを聞いてくれるから、なんか智子も嬉しそうなんですよねー。

そんなキヤツキヤウフフな様子をぼけくつと眺めると、ふと視線を感じた。

そちらに目を向けると、いろはが私の事を半目で、ジーーツと見ていますよ?。

「な、なにかな? いろはす」

「香織さー、なーんか朝から変じゃやない? なんかわたしを避けてるって言うか目を合わせないって言うか。なんかわたしに隠してない?」

なにそれ女の勘? 女の勘って当事者になるとこんな怖いの?

男性陣は浮気に気を付けてっ! 浮気ダメ絶対!

「いやいや別になんもないよー!」

私は誤魔化すように唐揚げを口に運びモグモグする。

2 個目の唐揚げに箸を伸ばそうとすると、唐揚げにずばんっとフォークが突き刺さった!

「香織ちゃーん……。なーに隠してるのー……?」

こわいよ! こわいろはすだよ!

これは逃げられん……と、一応軽くジャブを入れてみることにした……。

「あ、あのさ、比企谷先輩って……」

とそこまで言っただけでいろはの表情がガラリと変わる。

まあ私が急に比企谷先輩の話題を振ってくるとは思わなかったんだろう。

「……へ? か、香織から……先輩の質問……?」

い、いや! 勘違いしないでね! 別に「比企谷先輩ってえ……、か、彼女とかって……居るのかなあ……」チラツ、なんて恥ずかしがる乙女のような、恋敵に牽制入れるような質問するワケじゃないからねっ!?

「いやいやいや！違うからねっ!?そ、そういうんじや無くってさ！比企谷先輩って雪ノ下先輩とか由比ヶ浜先輩と、すっごく仲良いじゃない?」

この台詞自体、あんまいろはに言いたくないんですけどね。

シユンつとしないでね?

ちなみに雪ノ下先輩の名前が出た途端に襟沢が身構えたのは、また別のお話。

「でさーでなんだけどお…、その2人以外にも、なんかもの凄く仲の良い可愛い女の子って…居る?」

「年上の美人さん?」

……………は?

えつと…、ノータイムで年上の美人?

なに?まだそんな隠し玉持つてんの!?あの先輩!

「い、いや、違ってさあ、同級生の子とかでさ…」

ズンつと空気が重くなりました…。

「……………ううん?……………そんな人知らないけど……………、どういう事?」

ハアアゝつ…こつ、こわい！笑顔なのに声が低いのがこわいよー!

「へ?いやいや何でも無いよっ!?ちよつと聞いてみただけかなー!みたいなの☆」

痛い痛い痛い！爪っ！爪が私の腕に食い込んでるよっ！

「……………別に興味ないんだけどさー、ただの好奇心?ってヤツう?どういう事かシリタイナー…」

いろはすつたらなんでそんなに笑顔なの!?

これはもう無理ー!

「あ、あのね!?あ、朝比企谷先輩とちよつと会ってねっ!?下駄箱で別れたら、ちよつと可愛い女の子が八幡く！って駈けてきてさ、お互い呼び捨てなんかにしちゃって凄く仲良さげなトコ目撃しちやっつてねっ!?!」

..... あ、これはヤバい間ですわ。

「.....へえ。.....で？どんな女だったの.....？」

低いっ！声低いっ！襟沢が涙目になってるからやめたげてっ！

「あ.....。いや、なんていうか...、その...天使みたいな？学校指定のジャージ着て、朝練終わりって言ってた、ショートカットの可愛い子.....なんです...けど.....」

つい敬語になる私...。いや落ち着けよ私。特徴教えんに天使みたいってなんだよ。

「.....あつ、なーんだ！戸塚先輩じゃんっ」

その瞬間、場の空気がふんわり軽くなりました。

え？空気ってこんなに軽かったっけ？

「へ？あ、し、知ってる人なの？確かに戸塚とかって言ってたけど...」「なーんだ！ついに先輩に彼女でも出来たのかあ？って、なんか面白そうだったのに、なーんだ！つまんなーい」

そういういろはは満面の笑顔。どこら辺がつまんなーいって顔なのよ？

なんかいろはって雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に対しては、ちよつと敵わないとか諦めにも似た...？、うーん。あの2人じゃ仕方ないかあ...：みたいな所があるっぽいんだけど（それでも必死に食らい付いてやるっ！って頑張ってるんだけどねっ）、それ以外の女の存在は許さないってスタンスなのかな？

でも、それならあんな天使とあんなに仲良しなの知ってて、なんでこんなにホツとしてるんだろ？

「な、なんで？あれだけ仲良かったら、付き合ってるって思うもんなんじゃないの？実際に私、この二人出来てるでしょっ！って思ったし...」

「えー？それはないよ。だって、戸塚先輩って男だもん」

「.....はっ。」

え？嘘嘘うそうそ?! いやいや何言ってるのいろはすきんつたら！
あの天使が男なわけないじゃんつ！

「2年F組のテニスの王子様って知らない？あの人がそうなんだー」
「えー、その人私知ってるー!」 「なんかすっごい可愛い男子なんでしょー?」 「比企谷先輩とテニスの王子様って仲良しなんだー」

と紗弥加達お三方が騒いでらっしやるけど、あんたらアレ見てないでしょ!?

「マジで……?あれが王子様?どっちかっていうとプリンセスじゃね……?」

「マジマジ!いやー、あれで男の子だなんて、女として自信なくしちゃうよねー!」

自信無くす割には、本当に楽しそう。

ホントあんただんだけ比企谷先輩好きなのよ (笑)

「でもさ、ホントにあれが男だとしても、ちよつと仲良すぎない!」

「まあねー!先輩戸塚先輩大好きだからなー。ホント気持ち悪いよねー!」

ケラケラと笑いまくるいろは。

いや、新たなライバルじゃなくて安心なのかも知れないけど、それはそれで大問題だろうよ、いろはす…。

まあ確かにあれなら道を踏み間違えてしまったとしても、誰にも比企谷先輩を責める事など出来んかも知れないが……、いやいいわけあるかっ!

× × ×

若干愛想笑いになりつつアハハと話を合わせていると、視界の端の扉んトコで、余りにも見知った男子生徒が、クラスの女子に話し掛けるのが見えた…。

その姿にクラスが若干ザワつく。

話し掛けられた子が、ポツとパタパタこちらに駈けてきて、いろはに声を掛けた。

「あの…、いろはちゃん…。せ、先輩が呼んでるよ？」

それを聞いた瞬間にいろはは

目をキラツと！

首をグルンと！

そして……！

嬉しそうな満面の笑みでも絶望のガツカリ顔でも無く、頭の上にくつもの疑問符を浮かべキョトンとした顔になった。

そう。ほんのつい3ヶ月程前なら、こうやって呼び出されることを一番に望んで夢見ていた人物…。

雪ノ下先輩と並ぶ超有名人、葉山隼人その人が、爽やかな笑顔で我がクラスの前に立っていたのだ。

とにもかくにも私の友達はせんぱいが大好き過ぎる
【後編】

思いがけない葉山先輩の登場に一瞬だけ戸惑ういろはだったが、次の瞬間には飛びきりの笑顔を張り付けた。

「葉山せんぱーい。どうしたんですかあ？」

ててつと葉山先輩のもとへと駈け寄るいろはに、クラス中が注目していた。

比企谷先輩の事があったから皆忘れていたけど、葉山先輩こそがいろはの想い人なんだって事は、一応皆知ってることだしね。

元々サッカー部のマネージャーになったのだから葉山先輩目当てなのは明らかだったし、生徒会役員選挙の時だって応援演説を買って出してくれたわけだしね。

正直私も……いや私達もずっと気になってた。お互い口にはしなかったけど。

葉山先輩に振られて、比企谷先輩と仲良くなり、楽しげな会話を目にし耳にし、今はもう比企谷先輩に気持ちに向いているんだろうなどは勝手に思っただけ、実際そうなるからいろはが葉山先輩と対峙するのを直接見るのは初めてな訳だしね。

前に比企谷先輩が訪ねて来た時のようにクラス中が静まり返る中、2人の会話が始まる……。

× × ×

「やあ、いろは。すまないね」

「いえいえ、それでどうしたんですか？ わざわざ葉山先輩が訪ねてくるなんて」

「ああ。今週の土曜日に相手方の学校に赴いての練習試合があるだろう？それにいろはが参加出来るのかどうか聞いてきたくてね」

「あ、わざわざすみません……。えっと、たぶん生徒会のお仕事が大変な時期なんで、遠慮しておこうかな……。大丈夫ですか？」

「了解だ。いろはも色々大変だな」

「いえいえ！わざわざすみませんでした！でもそんな事ならメールか何かでお知らせしてくれば良かったのに」

「俺もこう見えて一応主将だからね。部の仲間にはこういう事はちゃんと直接確認を取りたいと思ってるんだ」

「そうなんですか。流石は葉山先輩ですねっ！わざわざありがとうございます！」

「ああ。時間取らせてすまなかつたね」

……………え？

以上？

ただの業務連絡の上、想い人が訪ねてきてくれたハズのいろはの方から「それでは」ってあっさり話を切り上げたよ!?

あまりにも淡々としすぎた憧れの先輩との会話に、クラス中が絶句してるよ……………!

だって、こないだの比企谷先輩の時は、もっと……………さー!

ビックリしているクラスメイト達の間をすり抜け、やっぱりビックリしている私達のもとへと戻ってきたいろはは、私達の表情を見てキョトン顔。

「あれ？どうかした？」

不思議そうに首をかしげるいろは

「う、ううん？別にー？」

と、特になにも言えずにいる私達だった。

葉山先輩相手に態度が冷め過ぎじゃねっ？なんて言えるわけないじゃん！

結局何事も無かったかのように私達は昼食を進めていたのだが、そんな時またまた視界の端の扉んトコに、これまた良く見覚えのあるいろはへの来客が現れたのが見えて、思わず吹き出しそうになってしまふ。

今日は来客の多い日だなあ…、と思っていると、その来客がうちのクラスの地味男（あいつ名前なんてつたっけ？…：てかいい加減名前覚えてやれよ！私っ）に話しかけようとするのが見えたから、今回は私の方からいろはに教えてやった。

「いろは、またお客さんだよ！」

するといろはは「またあ…？」って顔をしやがったので、そのお客さんの名前をニヤリと告げてやった！

「比企谷先輩が来てるよっ」

するといろははキラツともグルンつともする事も無く…：…、いや、正確にはキラツともグルンつともする間もない程、瞬間的に一直線に比企谷先輩のもとへとパタパタ掛けていった！

なにこの差（笑）

もちろんクラス中の視線が集まる中、いろはと比企谷先輩の長い長い会話が始まった…：…！

× × ×

「せーんぱいっ！今日はどうしたんですかー？可愛い後輩に会いたくて我慢出来なくなっちゃいましたか〜？」

あらあら嬉しそうなことで！さっきと差がありすぎだよっ！

皆、目え丸くしてるじゃんっ。

「うぜー……」

「ちよつ!? 第一声がうざいって酷くないですか!? ホント先輩の中でのわたしの扱いがひどすぎですー」

「はいはいあざといあざとい。そんな事よりとつとと体育館行くぞ」

「体育館? いきなり体育館裏に呼び出して告白ですか? もつとムードつてものを考えましようよー」

「どんなダイナミックな告白なんだよ。そこまで大胆なら、もうこの場でしてるよ…。」

「なんで告らにやなんねえんだよ。仕事だよ仕事。教室で昼メシ食つてたら副会長に呼ばれたんだよ……。なんかこれから体育館で保護者の懇談会があるらしくてな。その用意は午前中に手の空いた教師達がやつとく予定だったらしいんだが、なんかトラブって順調に進まなくて、昼休み中に済ませちまおうって生徒会となぜか奉仕部にお呼びがかかったらしい……。まったく迷惑な話だ」

「まーた仕事のお話ですかー…。ホントつまんないですね、先輩って」
「いやだからなんで俺が責められちゃうんだよ? 大体なんで俺、生徒会にナチュラルにパシラされてんの? 百足譲って平塚先生の豪腕で奉仕部としての強制労働つてのならまだしも、なんで俺一色係みたいになっちゃうってんのかね」

「そんなの先輩がわたし担当の奴れ……。小間使いなんだから当たり前じゃないですかー。用件があったら直接わたしの所に来る! それ先輩の役目ですよ」

「うふふー。葉山先輩にはメールかなんかでもいいのにつて言つて、比企谷先輩には直接来い! ……ねえ。」

「それって俺の役目なの? ……あと言い直した意味無いからね? それ。この際奴隷も小間使いも変わんねえよ」

「とにかく先輩はわたしに対して責任取るのが義務なんですからね
☆」

「えへつとウインクしてとんでもない問題発言だよっ!」

「マジであらぬ誤解を生むような発言はやめていただけませんかね
…」

「そんな事より」

「そんな事なの!？」

「先輩が教室でお昼なんて珍しくないですか？居場所あるんですか!？」

「酷いっ！」

「いや酷くない？今日は昼前から雨降り出しちゃったろ。いくら俺でも雨の日以外では食えないからな。クソツ……雨さえ降らなきゃ副会長に発見される事もなく、今日も平穩無事に戸塚を愛でられたつてのによ。それに俺が昼に教室に居ると、まわりに気を遣わせちゃって申し訳ないし。つまり居場所は無いな」

「やっぱ無いんだ……。それにしてもどんだけ天使大好きなのよ。」

「そういう時はわたしのトコに来れば一緒に食べてあげますよっ。生徒会室で一緒に食べましょうよ」

「生徒会室を思いつきり私用で使うんじゃないよ……」

「まあまあ、いいじゃないですかー！ところで今日もまた購買のパンですか？いつもそんなんじゃないや栄養偏っちゃいますよ？」

「まあいつもそうだしな。栄養はちゃんと夜摂ってるし大丈夫だろ」

「……わたしってお菓子作り得意じゃないですかー？」

「は？どんだけ話飛んでんだよ……。大体初耳なんですけど……。知ってること前提で話進めないでくんない？」

「は？全然飛んでませんよ？ちゃんと人の話聞いてくださいよー！」

「あれ？なんで俺怒られちゃうの？」

「でなんですけどお、ここ最近お料理の方もちよつとずつ始めてみるんですよ。毎朝自分のお弁当作ってるんで、もし良かったら先輩のお弁当も作ってきてあげましょっか!？」

「おっと！キラキラした目で比企谷先輩を覗き込むいろはす！つまりは生徒会室で2人で私の作ってきたお弁当食べましょうよって大胆な提案だね？今日はなかなか攻めますねっ。」

「なんで？なんか怖いんだけど……」

「なんでって、そんなの葉山先輩の練習台に決まってるじゃないです

かー。せっかくだから葉山先輩には最高に美味しいお弁当を渡したいし！あれ？もしかして勘違いしちゃいましたか？はっ！毎日お弁当作ってもらってその勢いで毎朝俺の味噌汁を作ってくれとでも言いだすつもりだったんですかちよつと気持ち悪いですいくらなんでもまずはお付き合いからですよねもうちよつとだけ待ってくださいごめんなさい」

長い……。この2人っていつもコレやってるよなー……。しかもよく聞いてみるといろは断ってねーし。

「俺お前に一度も告白した事ないのにもう何敗目なんだよ……。戦つてもいないのになんかすげえ敗北感なんだけど」

「ふふつ、先輩なんてこの先ずーっと！一生わたしに負け続けるんですよ♪……。で？どうします？こんなに可愛い後輩の手作り弁当なんて、お昼休みが先輩の寂しい人生のオアシスなっちゃいますね〜」
「ここにこ笑顔で挑発するいろは。よっぼど比企谷先輩にお弁当作ってあげたいのね☆」

でもこの先一生つて、ずっと比企谷先輩の傍に居ますよ？つて事なんですかね。

「結構です」

「ありや…。」

「なんでですかー！わたしの手作り弁当ですよ!?!絶対みんな欲しがりますよ?」

「自分で言うなよ……。まあお前って見た目は良いしモテそうだから、そりゃ欲しがるとも沢山居るだろうけどな」

「へ?……なっ!?!きゅ、急にそういう事をさらつと言うところがズルいんですよ……。先輩って…。」

見た目が良いしモテそうって事は、つまりは比企谷先輩も少なくともそういう目で見てるって事だもんね〜。

いろはってあざとい自分を演出して先輩をからかっているから、思いがけない急な展開に弱いよねっ。

「頬染めてもじもじしちゃってもーっ！」

「は?何がズルいんだよ?意味分からん。大体急に手作り弁当作って

くるとか言われてもなんか怖いし。また何か企んでんじゃねえの?」「ううんっ! うんっ! ふう…まったく。……怖いわけないじゃないですか。なんにも企んでませんよっ?」

立ち直ってきやるんつと笑ってるけど、きやるんつとするいろはつて……、ホント信用度ゼロなのよねえ…

「そのム力つくあざとい笑顔が怖いんだよ…」

「せんばいひどいですー…」

あざとく落ち込んだフリをするいろはに面倒くさくなったのか

「分かった分かった。じゃあ練習台になってやるから、たまに持ってきてみるよ」

「ふふんっ! 最初っから素直にそう言えばいいんですよ、まったく! ほんつとに素直じゃないんだから…。……あ、でー、そのー…アレなんですけどー…」

「お? おう…どうした?」

「さ、さつきわたしお菓子作りが得意つて言つたじゃないですか? ……最近ちよつと色々つと練習してて、結構凝つたものも作れるようになってきたんですよ…。なので…、ついでにお菓子も作つてこようかなー…つと。……ホラ先輩つて甘党じゃないですかー」

なんでこんなにもじもじしてんの? この子。

「お、おう…。甘いもんは好きだからな。そつちも練習台になつてやるぞ?」

「ホントですかー!? 良かったです! ……で、先輩つてどんなのが好きなのかなー? と…。えーつと例えばですね〜…」

と、人差し指を顎に当てて斜め上を見ながらうくん…と、あざとい『わたし考えてます』ポーズを決めるいろは。

でもなんでだろう? 耳をまつ赤にして、空いてる方の手でスカートの裾をギュツと握つてる…。

「例えば…、その…ガ、ガトーショコラつ、とか…トリュフ…とか……。フォンダンショコラとか…ザツハトルテ…とか? ……。そんな感じので食べたい物つて、あります…?」

ゴクリと喉を鳴らし、とても不安げな上目遣いで比企谷先輩の様子を伺っている……。

うわっ、いろは……。それって……

「………………。あー…、一色、悪い……。」

謝る比企谷先輩に、え…？と哀しそうな驚いたような潤んだ瞳を向けるいろは。

「確かに俺は甘党なんだが、そんな小洒落た名前のもんを羅列されても、いまいち良く分かん。なんかこう分かりやすくプリンとかクッキーとかって言われた方がしっくりくるんだが。まあ強いて挙げるとするなら、最も最高の甘味はMAXコーヒーだな」

不安げに潤んでいた瞳は次第に落胆に、そして呆れ果てた半目に変わっていく…。それに比例するように頬つぺたもぐんぐん膨らんでいく。

「ほんつとに先輩って残念さんですよー…。はあく…こんなに残念な人って世の中にホントに存在するんですねっ…：はいはい！それじゃあMAXコーヒーでも練り込んだクツキーでも作ってきてあげますよ！」

パンパンになった膨れっ面と、この世の呆れを全て集めたような表情で諦めちゃったよ……。

「……………は？…なんで急に怒ってるの？俺なんかした…？」

比企谷先輩……。そりゃ怒りますよお……

今日は何月何日だと思ってるんですか、あなたは…。

さっきいろはが挙げたお菓子、全部チョコレート菓子なんですよ

……………？

あの日まであと数日なんですよ？

まったくもう！感付かれるの覚悟で勇気を振り絞って聞いてたのに……

いろはの一番の強敵って、雪ノ下先輩でも由比ヶ浜先輩でも大天使先輩でもなく、この人本人なんじゃないだろうか……。

ま、いつまでも葉山先輩をダシに使って誤魔化してるいろはもいけないんだけどねっ！

× × ×

「はあく……まったく。……あ！忘れてたあ……。ああ……もう！すっかり仕事の事忘れてましたよ……。もう！いつまでも無駄話してないで、ほら！時間が勿体ないからとつとと行きますよー」

頬をぷっくりと膨らませ、不満げなアヒル口で比企谷先輩の袖を引っ張って体育館に向かおうとするいろは。比企谷先輩は慌てて

「だー！こんな所で引っ張んじゃねえよ。目立つちゃって恥ずかしいじゃねえか……。てか無駄話してたのはお前だろ……」

と手を引き離そうとすると、離してやるもんかっ！とでも言わんばかりに力強く袖を握り締めながらふふんっところ言った。

「先輩なんて美少女生徒会長の尻に敷かれてる情けないせんぱいだっで、また学校中で悪い噂が立つちゃえばいーんですよーだ」

舌をちよこつと出してベーツとするいろはは、さっきまでの膨れっ面はどこへやら、とびっきりの悪戯めいたあざとい笑顔に変わっていた。

それはもう、ほんのちよつと前まで、アンタあざとさ封印したの!? : なーんて思うような事があったのなんて嘘だったんじゃないの? ってくらいの満面さでね!

そんな様子を見ながらふとまわりを見渡すと、なんかクラス中があったかい目でいろはを見守ってるような雰囲気な事に気が付いた。

隣の襟沢にしてもそうだけど、いろはの心情の変化って本人だけじゃなくって、まわりのいろはを見る目も変えてるんだなあ…

男とあざとくイチャついてるいろはなんて、ちよつと前なら殆んど女共が忌々しげにしか見てなかったの…。

ま、男共は羨ましげで悔しそうに見てるんだけどね。

比企谷先輩！爆発させられちゃわないように気を付けてください
ねっ（笑）

いろはの変化がこんなに心地いい空気を生みだすなんてね。へ
へっ！なーんかい感じっ！

× × ×

「一色…マジで離せって…」「知りませーん！乙女の心を弄んだ罰ですよー」「だから意味分かんねえっての…」

だんだんと離れていく比企谷先輩というはの声を聞きながら、私達は顔を見合わせて苦笑い。

「まったくう…。私の友達はどうだかせんぱいが大好きなんだかつ…」

比企谷先輩に夢中になりすぎて、すっかり忘れ去られているいろはの食べ掛けのお弁当をいそいそと片付けながら、呆れながらも思わずプツと吹き出してそう呟いた。

初めての本気の恋に戸惑ったり興奮したり、泣いたり笑ったり転んだり、時には間違ふことだってあるだろう。

それでも前を向いて一生懸命歩き続けている一色いろはに向けて、私家堀香織はこんな言葉を贈ろうと思う…………

たった一度っきりの青春なんだもの！たどえ間違っ
ていようとな
かろうと、思う存分青春ラブコメを楽しんじゃえっ！！

おしまい

【おまけ】小悪魔と魔王のエスプレッソに天使のミルクを添えて

暖房の効いた教室を出て、冷え冷えとした廊下を二人並んで歩く。行き交う生徒達は自身の所属する部活へと、あるいは帰宅のため友人や恋人の待つ場所へと思いいいに歩を進めている。

2月も中盤へと差し掛かったある日の放課後、私は友達の一色いろはと共に生徒会室へと向かっていました。

「ホント助かるよー。生徒会ってなんだかんだ言っただけで常に人手不足なんだよねー。特にこの時期は一番ヤバいみたいでさ。もちろん先輩はこき使うにしても、恵理ちゃんがお手伝いを買って出してくれたのは超助かるよー。副会長達も大歓迎だって喜んでたし、先輩にも友達がわざわざお手伝いに来てくれるですよーって自慢しちゃった！へーっ」

「んーん？どうせ私部活やってなくて暇だし、今のうちからそーゆーの慣れとくのもいいしねえ！」

私、襟沢恵理は総武高校に通う一年生です！

そして隣で私とお話しているお友達の一色いろはちゃんは、なんと一年生にして生徒会長なの！

まあなぜいろはちゃんが一年生にして生徒会長になったのかの経緯は、この際割愛させていただきます……

実は私、このいろはちゃんが嫌いだった時期がありました！

ま…、まあつい最近までの事なんですけどね☆

このいろはちゃん。元々恵まれた容姿のクセにさらに男子に媚を売って男ウケ狙って、とつても嫌なカンジだったんだよねえ……。でもある時期から急に真面目になっちゃって、それでもあんまり面白くなかった私は、いろはちゃんに意地悪をしちゃったんですよ

……。

そしたら……、それはもうこっぴどくやり返されてしまって、私、自分がチキンでヘタレだったんだって思い知らされちゃったんです……。

それなのに、意地悪しちやつた上に勝手に凹んだ私に優しくしてくれて、友達にまでなってくれたいろはちゃんには本当に感謝！

その経緯はいろはちゃん達とは多少認識は違うかもだけど……

そんな強くて器の大つきないろはちゃんを見習って、いろはちゃん
が成長した要因である生徒会のお仕事を手伝ってみたいなあ……って
思ってたら、こんなに早くチャンスが巡ってきたんだよね……！

正直生徒会のお仕事を手伝うという事は、自動的にあの雪ノ下先輩
ともお近づきになってしまう可能性が高くて、不安で不安でお腹痛い
んだけど、あの環境で一生懸命頑張っているいろはちゃんみたいな強い女
になって、少しでも憧れの三浦様に近付けたらいいなっ☆って思っ
てます！

× × ×

「あー！いろはちゃんだ。いつもご苦労さま！今日もよろしくね
〜」

「あつ！城廻先輩こんにちはー。今日もよろしくお願いします！」

あつ！この人、前生徒会長の城廻先輩だつ！

近くで見るの初めてだけど、なんかぼわんぼわんしてて噂通り可愛
い人だな〜。

月末の卒業式の準備に向けて、生徒会を引退したのにまだ手伝って
くれるなんてホントにいい人！

ちょっと猫被ってる時のいろはちゃんに雰囲気似てるかもっ！キ
ラキラ具合は別物だけどね〜（笑）本物と偽物の違いってやつ？

おっと！悪い癖はダメ！もう昔みたいにいるろはちゃんに嫌な気持
ち持たないようになきゃっ！

「いろはちゃんっ！こちらは？」

「あ！この子クラスメイトの襟沢恵理ちゃんって言うんです。生徒会の仕事色々お手伝いしてくれるらしくって」

「本当？わく、すぐ助かるよ！ありがとうねっ、襟沢さんっ」

「いいえ、とんでもないですよ！私い、いろはちゃんのお手伝いを通じて成長したいなあって！」

「それでこの子、次の生徒会選挙に立候補して、わたしの補佐もしたって言うてるんですよ」

わー！いろはちゃん急にそんな事まで言われちゃったら恥ずかしいよー！

そしたら城廻先輩はとっても嬉しそうな顔で私の手を握ってきてくれました！

「ホントにく！わく！すっごく嬉しいよ！いろはちゃんと一緒に総武高をよろしくねっ！襟沢さん達が居てくれるなら、私卒業してからもたくさん遊びにくるよっ」

はわく！なんかいいな！こういうの！

雪ノ下先輩の事でちよっぴり不安だったけど、こんなに優しい先輩と友達のいろはちゃんが居てくれるんなら、生徒会活動もすっごく楽しいものになりそう！

× × ×

「あつ！めぐり〜！遅れてごめん！」

とっても和やかな雰囲気私達に近付いてくるすっごい美女。

こんな美人のお姉さんはどちらさま!?

「あつ！はるさん！ご苦労さまです」

「あつ！はるさん先輩！ご無沙汰してますー！今日もご苦労さまです」

「おや？いろはちゃんだ！やつはろー」

どうやらこの美女はいろはちゃんとも顔見知りのようですね。

「いや、めぐりから聞いてるよ？いろはちゃん生徒会長がんばってるらしいじゃん！」

「そうなんですよー！いろはちゃん、すっごい頑張ってくれてるんだよね」

「いえいえ、そんな事ないですよー！若輩者なんでいつもいっぱいいっぱいです」

わく、なんかいろはちゃん、こんな美人のお姉さんとも普通に接してる！

どんな相手にも物怖じしないのって憧れちゃうなっ。

「ん？そういえばこっちの子は？」

ヒツ！急にこっちに話が来たっ！

ダメよ！恵理！物怖じしないで！

「あつ！あのお……、初めましてえ。私いろはちゃんの友達の襟沢恵理っていいですよ」

「襟沢さんね、これからの準備とか手伝ってくれるらしいんですよ！しかもっ！次の生徒会役員候補なんですよ」

ぱんつと両手を合わせて、城廻先輩がとっても嬉しそうに紹介してくれました♪

「へ〜やる気いっぱいだねえ。え〜と襟、襟……、まあエリエリちゃんでいつかな？私は陽乃でいいよ」

「はいっ！よろしくお願いします！えっとお、陽乃……先輩……でいいのかな……？」

「はるさん先輩はね、二年前の卒業生で、伝説の卒業生って言われてるくらい有名な先輩なんだよー」

ふわ……伝説の卒業生ですか！そりやこれだけ綺麗でこれだけ人に好かれそうな人なら、伝説にもなりますよね〜！

ホントすっごい素敵な人っ！

「いろはちゃん、いくらなんでも伝説は無いよー。なんかそれじゃ私がつっごい古そうじゃん」

「すっ！すみません！はるさん先輩っ……」

……………あれ？

なんかすごい違和感……

陽乃先輩こんなに笑顔なのに、なんでいろはちゃんこんなにびくびくしてるんだろ？

「やだなあ！別に畏まって謝るような事じゃないじゃない！……………あれ？そういうえば今日は比企谷くんは？」

「あ！先輩ならあとでもちろん連れてきますよー」

「比企谷……先輩？」

あれ？陽乃先輩って、もしかして比企谷先輩とも知り合いなのかな。

「ん？エリエリちゃんも比企谷くん知ってるの？」

「あ！そんなに知り合いって程では……」

「この子、最初は先輩の事、超悪く言ってたんですよ♪」

ちよっ!?!いろはちゃん!?それは言わない約束よ!?

そ、それに初対面の比企谷先輩のお知り合いにそんな事言っちゃったら……

「あはは〜！そりゃそうだよねー！比企谷くんいつも超ヒールだもんねーっ」

あれ？別に大丈夫だったみたい！

「でもこの前ー、しつこいナンパに助けて貰って貰ってから、結構いい人だよね〜！なんて言うようになっちゃったんですよー」

そうなの！あれ以来、私の中で比企谷先輩株が急上昇なんだよね！あんなに最悪な人とかって馬鹿にしたのにホントにいい人だった。今ではいろはちゃんが慕う理由もちよっぴり分かっちゃおうよな……………！

「……………へえ」

え?.....

なんか急に寒くなった?

なんだかお腹が痛いよ?

「.....えっと、襟巻ちゃんだっけ:~?」

へ?いや、襟沢ですけ:~ど.....

てゆうかさつきまでエリエリちゃんて言ってますでしたっけ

.....

「もしかしてさー、まさかとは思うけど、比企谷くんの事気に入っちゃったりしてないよねー?」

「い、いや、そんな事は.....」

あ、あれ?なんかホントにお腹痛くなつてきちゃった。

「そうだよねー!そんな訳ないよねえ。いやあ、なんかシチュエーション的にありがちじゃない?最初嫌いだっただけど、助けて貰ってから気になり出しちゃうー!みたいなの」

「そ、そんな事ないですよお!まだ一度くらいしか会ったことないですしい」

「そっかそっか!駄目だぞ?比企谷くん好きになっちゃ!」

えー?陽乃先輩って比企谷先輩の事好きなの?!?

そういえばこの間、いろはちゃんが香織ちゃんに年上の美人さん?とかって言ってたような.....?」

「比企谷くんは雪乃ちゃんのなんだから♪」

.....え?雪乃.....ちゃん.....?」

「.....え?えっと、雪乃ちゃん:とは.....」

「あ〜!はるさんはね〜、あの雪ノ下さんのお姉ちゃんなんだよ〜!」

.....え？

× × ×

いやいやいやいや！ちよつ！ちよつと待つてよ？

ゆ！雪ノ下先輩のお姉さんっ！

え？なにそれ？怖い怖いこわいコワイ.....っ！

あれヤバいよパニックっちゃってますよ私

じゃあさっきのあの空気って雪ノ下先輩的なやつ.....なの.....？

さつきまであんなに素敵に見えた笑顔が、恐ろしいものにはしか見えなくなってきたよ.....

助けてっ！いろはちゃんっ！

でもいろはちゃんは、私のそんな淡い期待をいともあっさり裏切ってくれました。

「やだなー、はるさん先輩！確かに先輩は雪ノ下先輩と仲いいですけどー、先輩は先輩の物ですよー。別に雪ノ下先輩のじやありませんよ」

ざわっ.....ざわざわわっ.....

ひいっ.....い、いろはちゃんっ！そっ！その人を刺激しないでっ！

私のヘタレリーダーがっ！すっごく反応してるのおっ！

「ふうん.....いろはちゃんってなかなか面白いねえ.....やっぱり比企谷くんが気に掛けてる事だけはあるのかな？」

ヒイツ！陽乃先輩のその笑顔は本当にヤバいやつです！

私が言うんだから間違いないよ.....！

ああ...、怖くて視界が滲むよ.....ママ.....。

「えー、そんなことないですよー。先輩が雪ノ下先輩の物じゃないなんて当たり前のことじゃないですかー」

もう視界がぼやけてよく見えないよ……

なんかウフフ……、オホホ……って恐ろしい笑い声が聞こえる……。幻聴かな……？幻聴だよね。

城廻先輩はっ!?あとはもう城廻先輩しか頼れる人が居ませんっ………あ、すっごいニコニコしてる……

城廻先輩の目には和やかでハッピーな光景に見えているのでしようか……？

「あー！ところでいろはちゃんさあ！もう明後日にはバレンタインじゃない？もしかして比企谷くんにあげたりするのー？」

「えー？そりやもちろんあげますよー。いつもお世話になってますしー。ほら私ってお菓子作り得意じゃないですかー。なので手作りあげちゃいますよー！まあもちろん葉山先輩の練習用に作ったやつですけどー」

「……へえ？いろはちゃん隼人が好きなんだもんねえ！でもまさか隼人ってダシじゃないよねえ？」

「えー？ダシってなんのことですかあ？わたし手作りチョコを作るのであって、別にお味噌汁作るわけじゃないですよお？」

いろはちゃん……。お願いだからもう許して……。私にはもう無理……

トイレ行きたい……

「そっかー！もうバレンタインかあ！じゃあ私も比企谷君にチョコあげちゃおっかなー」

えっ……？

「えっ…?」

「えっ…?」

「ちよつとめぐりっ!?めぐりも比企谷くんにチョコあげるのっ!?」

「うくん。まだ分からないですけど、ちよつとあげたいかな〜とかって思ってるんですよ」

「な、なんで城廻先輩が先輩なんかチョコあげるんですか!?!」

「だって、比企谷君にはすっごいお世話になったし!それに比企谷君の事誤解しちゃって酷いこと言っちゃった事もあるから、そのお詫びもしたいな〜って、ずっと思ってたんだよ〜!」

「あ、なんだ。そういう事ね!あくビックリした!。めぐり比企谷くん好きなのかと思っちゃったよ」

「……………えっ!?!も、もうはるさんやだなく!全然そんなんじゃないですよ〜…………」

「そ、そうだよね……………あはははは……………」

「城廻先輩、びっくりしちゃいますよ……………あはははは……………」

なんか気まずそうに顔見合わせて静かになっちゃった…………

「……………よ、よしっ!それじゃそろそろ行こっか、めぐり!」

「そ、そうですね〜!お話長くなっちゃいましたしね〜。あ、いろはちゃん達もこのまま一緒に体育館行く?」

「あ!城廻先輩すみません!私たち一度生徒会室に寄ってから行きますんで、お先にどうぞー」

「そっか、分かったよ〜!それじゃまた後でね〜」

「じゃね!いろはちゃん。また後でねー」

「はいっ!はるさん先輩も城廻先輩もまたあとですよー」

助かった…………。

なんかよく分からないけど、城廻先輩のおかげで助かったのかな……。
私、もう腰が抜けそうです……。

× × ×

「……………はあく……………こ、怖かったあ……………」

二人が居つちやつた途端にいろはちゃんが崩れ落ちた……
よく見るとすつごい足震えてるっ！

「い、いろはちゃん……？大丈夫……？夫？」

「ホント怖かった……最近雪ノ下先輩で慣れてきたからなんとか耐えられただけで、わたし超震えてるよ。ホントもう無理……。城廻先輩が居て助かった……のかな……」

あんなに堂々と渡り合ってたように見えたのにそんなに無理してたの!?

……………じゃああんな無茶しないでくださいよ、いろはちゃん。こっちに飛び火しちゃうじゃない。

「陽乃先輩って、すつごい素敵な人だったけど怖かった……」

「なにせ先輩が恐れるくらいだからねー」

いろはちゃんと雪ノ下先輩に挟まれてあれだけ罵倒されても平然としてた比企谷先輩が……？

ど、どうしよう……。この後また陽乃先輩と会うの？

でも逃げちゃダメ！城廻先輩だつて居るんだし！

弱い自分を卒業するんでしょ？

今日一日くらい我慢しなきゃ！

そう！たつた一日だけよ！

恵理ガンバっ☆

「でも今後生徒会でやってくんなら、はるさん先輩とは長い付き合いになるだろうから、恵理ちゃんも上手く付き合わないとねー」

なんで？

「そんなに暇なの？ってくらい、あの人が良く来るんだよねー。ああ見えてシスコだから雪ノ下先輩好きだし、さっきので痛いほど分かったと思うけど先輩の事も超気に入ってるしさー。それにお父さんが県議会議員だったりあの雪ノ下建設の社長だったりして、卒業式みたいな行事にはちよくちよく名代として顔出したりするみたいなんだよねー……」

ごめんなさいいろはちゃん私には無理みたいです。

「あ、あの……いろはちゃん。……も、申し訳ないんだけど、私ちよゝとと用事思い出しちゃったかな……なんて……」

「へ？」

「本当にごめんねえ！ちよつとお腹も痛くなつて来ちゃったし私もう行くね！また今度誘ってねっ！じゃあねっ」

私は走りだす……。とりあえずトイレ行こう。

ホントにごめんなさいっ、いろはちゃん！

私変わりたかつたんだよ！強くなりたかつたんだよっ！

でも！でもね！まだ私にはそっちの世界に足を踏み入れるのは早かつたみたいなおっ！

「ちよつ！ちよつと恵理ちゃん！わたし先輩にも副会長達にも友達連れてくつて言っちゃったんだよー！マジでっ！って期待してくれただよー！はるさん先輩だつて城廻先輩だつて来ると思ってるんだよ！わたしの立場どーしてくれんのよお！」

遠くで徐々に小さくなっていくいろはちゃんの悲痛な叫び声を聞きながら、私は心の中でいろはちゃんに涙ながらに謝るのです……

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

だって怖いんだもんっ！

小悪魔と魔王の濃すぎるブラックなエスプレッソには、いくらキラキラな天使のミルクを添えても、お子さまの私にはまだまだ苦すぎて飲めないみたい。でもヘタレでお子さまな私も、それはそれで可愛いよねっ！

はあ……やっぱり私にはいろはちゃんみたいな凶太い神経はないんだろうな……。

ホントに凄いつて感心しちゃうよ、あの凶太い神経。か弱い私には無い物ねだりなのかな……

ちなみに翌日、いろはちゃんに超白い目で見られながらも見ないフリして普通に和の中に入って行って、香織ちゃんに「あんたって凶太いよね〜」って言われたのはまた別のお話っ☆

オマケおしまい

【過去〜現在編①】つまり私の友達の物語はここから始まる

年が明けて早一週間。

ここは約二週間ぶりの教室。

私は朝のSHRまでの間、初詣以来に会う友人達との会話を楽しんでいた。

私、家堀香織は総武高校に通う一年生。

こう見えても一応このクラスのトップグループの一員なのだ！

友達のうちの一人笠家紗弥加はクール系の黒髪ストレート美人。

メンバーの中では姐御的存在かな。

そしてもう一人の大友智子はちよっぴり巨乳がウリのおっとりさん。

いつもラブラブ彼氏とののろけ話を聞かせたがるウザキヤラ粋☆

三人で久々のガールズトークに花を咲かせていると、ちよつと遅れてやって来ましたのはこの人！

我がグループの中心でもあり一年生にして生徒会長の肩書きをもつあざとい小悪魔系美少女こと一色いろは！

「久しぶりー！初詣以来だねー！」

クラス中が注目する中、私達トップグループが三学期初の集合を向かえるのだった。

× × ×

いろはがやってくると、クラスの男共が示し合わせたかのようにワラワラやってくる。

なに？砂糖に群がる蟻なの？生者に群がる亡者なの？

ま、クラスのアイドル…というよりは今や学園の妹的存在となったいろはへの新年ご機嫌伺いなんだろうね。

年明け一発目の魅惑的な微笑みと猫なで声をご所望とみえる！
年明けの猫なであけおめは年イチのレア挨拶だし、一年生の私達には初モノだしご利益とか考えてるのかも。

あざとい挨拶が新年初モノのご利益とか、ちよつと頭沸いてんじやね？この人たち。

あ！勘違いされちゃうと困るんだけど、べ、別に私らは私らのファンにすでに群がられた後なんだからねっ！

と、脳内で謎のツンデレキャラが降臨している私には一切お構い無く、群がる蟻共が我先にといろはに話し掛ける。

「いろはあけおめー！」「久しぶりー！超会いたかったよいろはすー！」「冬休み遊びたかったわー」「初いろはすー」「ね、年賀状届かなかったんだけど、もしかして俺の届いてない…？」

各々が姫殿下への謁見に赴き、思い思いの新年のごあいさつを捧げる。

中にはちよつとぴり涙色のごあいさつも混じってますね。

『あけましておめでとー！わたしも久しぶりに会えて嬉しいよー♪』
との甘ったるいお言葉を賜る事を期待して、今か今かと構えていた皆の者だったのだが、いろはの返答はこんなんだった。

「あ…、あけましておめでとう。ごめんねー、久しぶりに香織達と会ったから、ちよつとお話したいんだよね」

嘘…だろ…？って顔してますよ？姫の謁見の間に集まった従者共が。

いやまあ私達もちよつとびつくりしてますけどね！

そして年賀状のくだりは聞こえなかったのかな？いろはす。

お、おう…、と蜘蛛の子を散らしたように蟻共が霧散していく。

蜘蛛なんだか蟻なんだか紛らわしいわねっ！

「ど、どしたの? いろは」

「なんか機嫌悪いん……?」

紗弥加と智子が姫のご機嫌を伺うが、

「ん? なにがー?」

姫殿下は特になんともないご様子。

ど、どうしちやったのよ? あざとい我が友人いろはよ……

× × ×

いろはは席につくなり急にご機嫌ナナメ。

バターンと机に突っ伏すなりグチグチ言いだした。

なんだ。やっぱ機嫌悪いんじゃない。その愚痴を言いたかったからお邪魔虫を蹴散らしたのかな?

「ねー…聞いてよー! さつき戸部先輩から聞いたんだけどさー……、せんぱい達がみんなで初詣に行ってたらしいんだよねー……。なんてわたしを呼ばないかなあ……」

とパンっパンに頬を膨らませてぶーぶー言ってる。

てかあんた私達と初詣行ったじゃんっ!

なんすか!?! ご不満なんすか!?

「いやアンタあたしらと初詣行つたじゃん……」

紗弥加が冷めた眼差しをいろはに向ける。

そうだ! 言ったんさい!

「それはそれ! これはこれ! もちろん紗弥加達との初詣は楽しかったけどー……。そもそもまずわたしを誘わないってどゆ事!?! 信つじらんない! 超ムカつくう! あんにやろうっ」

あんにやろうって……。先輩でしよ……?

戸部先輩に言ってるんなら、……。まあ仕方ないか。

でもいろはがご不満って事は葉山先輩絡みよねえ。

「なに? そんなに葉山先輩と初詣行けなかったのが気に食わなかったの?」

私が尋ねると

「……え？葉山先輩……？うーん、どうなんだろう？居たのかなあ」
え？なにそのついで感？！

まさかいろはすは戸部先輩との初詣がご所望だったのかないやそれはない。

私が即答で自問自答を終らせると

「ど・に・か・く！放課後文句言いに行つてやんなきゃっ」
ぶんすかするいろはなのだった。

あんまり戸部先輩を虐めないであげてね？

ないわーないわー五月蠅いからさ。

私面識ないですけど☆

× × ×

そんな時、新年早々見たくもない顔がニヤつきながらやつてきましたよ？

「いろはちゃんあけおめえ！ねえねえ！いろはちゃんって葉山先輩と仲いいんだよねえ!?じゃああの噂ってホントかどうか知ってるのをお？」

うっわ……。朝から限りなくウザいな襟沢。

なにその嬉しそうなツラ！なんかいろはちゃんに不利な情報ありますけどお！って顔全体で表現してる！

腹立つ顔芸だなあ……

「恵理ちゃんあけおめー。んで葉山先輩の噂って？」

「あれえ？聞いてないのかなあ？朝から女子達の間で超話題になってるよお？」

するといろはは私達に、そなの？と視線を向けてくる。

うーん。私達は知らないなあ……と、顔を見合わせ首をかしげる。

あー、でも確かにクラスのとろで女共がなんかキヤーキヤーギヤーギヤー騒いでたな。

「あ、香織ちゃん達も知らないんだあ！えー！どおしよつかなあ？言わない方がいいのかなあ？」

マジうぜー。言いたいなら早く言えよ。

「えつとねえ、なんかあ、葉山先輩って、あの雪ノ下先輩と付き合ってるらしいよお？」

マジでっ!?

って私が食い付いちやっただよ！

色恋沙汰大好きな女のさがですかねえ。

するとガタツ！つと音を立てているはが立ち上がる！

「マジでっ!?!なにそれ!?!全然知らないんだけどっ!?!どこ情報!?!」

おお……、やはりすごい食い付きっぷり。

「なんかあ、お正月に一緒に千葉に居たところ目撃されちゃったらしいよお？学校中その話題で持ちきりになっちゃうのも時間の問題なんじゃない?」

いろはさまあ！って顔に書いてある。さまあ後に大草原不可避だよ。

襟沢の顔を大草原で一杯にしてやりたい。wをたくさん書いてやろうかしら、油性マジックで。

「え?それだけ?」

あ…あれ?すごい意外な反応。襟沢も目え真ん丸くしちやってんじゃない。

「うん……、そおだけどお……」

「なーんだ。それじゃ全然信憑性ないじゃん、つまんなーい。大体一緒に居るとこ一度目撃されたくらいで付き合ってるって……、総武高校女子一同はみんな中学生かってゆーのっ」

まあね。それで付き合ってるって言ったら、いろはと戸部先輩なんてとつくにラブラブカップルになっちゃってるわ。

戸部色カップル……やだちょっと面白い。

「休みに一緒に居たくらいで彼氏彼女なんだったら、あなたの大好きな中西というはも彼氏彼女になっちゃうって気付けよ襟沢」

紗弥加のきつつーい一撃で襟沢玉砕（笑）

「なあっ!?べっ別に私中西くんの事なんてなんとも思っただけだ!」

真っ赤んnapって行っちゃった……。

お前は小学生かよ。

それにしてもつまらないって?

「でもいろは、心配じゃないの?」

少なくともこいつは去年のクリスマス前に葉山に振られてるのだ。

いくら信憑性がなくても、あの雪ノ下先輩と一緒に居たなんて事実、普通不安になるもんじゃないのかなあ?

「うーん……。わたし雪ノ下先輩とも結構仲いいからねー。あの二人が付き合うとか、ちよつと信じらんないかなー。……でも……でも万が一その情報が本当なら……。」

ゴクリ……超シヨック?

「……ちやくんすっ♪」

あざとさなど忘れて、邪悪さ丸出しの低音ボイスに悪魔の如き笑みを浮かべる……

え?なんだって?

声ちっちゃいわ低いわで聞き取り辛かったんだけど、ちやくんすっ♪って言った?

いやいや!チャンスな要素なんてどこにもないよね!?!相手はあの雪ノ下先輩だよっ!?

なに?いろははすったらドMなの?

雪ノ下先輩を強敵《とも》とでも呼びたいの?

「それも含めて今日聞いてみよつと!あー!楽しみーっ」

おいおいおかしくね?楽しむ要素どこにあんのよ!?

「えへへへ、クリスマスイベントぶりかあ……早く会いたいなあ……えへへへ」

そんな私の脳内ツッコミ露知らず、いろははにへらくつと弛みきつた顔でトリップしてました☆

膨れたりニヨニヨしたり、新年早々お忙しい事でっ！

× × ×

始業式が終わりLHRも終わると、新学期初日の本日は早くも放課後へと突入する。

長期休暇明けの始業式ってなんかちよっぴり得した気分よね！

今日この後どーするー？なんて話をしてると、いろはがちやつちやか荷物をまとめだした。

「あれ：？いろは？今日どつか寄ってかないの？」

「ごっめーんっ！わたしこれから忙しいんだー！ほら、生徒会『とか』…」

『とか』なんだよ。

ああ、マネージャー業かな？

そしてとつと荷物をまとめて出て行くこうとしたところ、いろはに群がる他のクラスの蟻共も新年のごあいさつを求めてわらわらやつてきちやつたよ。

その中にはいろはのお気に入り（荷物持ち）の爽やかイケメン、中西翔太君の姿も……。

「いろはー！あけおめっ！」

そうにこやかに挨拶する中西君を筆頭に皆が挨拶する脇をピューっと走り抜けていくいろはす。

完☆全☆無☆視

というよりは早く行きたくて仕方なくて、余計なモノは視界に入っ
てなかったみたいなご様子。

いや余計酷くね？

あつれ〜……?と引きつった笑顔の、額に汗する憐れな下僕たちに優しい私がフォローしてあげるのだった。

「なんか部活と生徒会で忙しいらしいよー」

背中で泣きながら散っていく戦士達の背中を見送りながら、私は思うのだった。

一色いろはの様子がおかしい……………」と。

× × ×

翌日、登校してきたいろはは朝から落ちていた……………」。

これはあれか!?まさか本当に葉山先輩って雪ノ下先輩と……………」!

これは聞くべきなんだろうか……?と顔を見合せている私達に向かって……………」と言うよりは智子に向かっていきなりの謎発言。

「ねー、智子ってさあ、文系の成績めっちゃ良かったよねえ……?」

……………」は?

あまりの突然の事態にみんな固まった……………」。

え……?なんなの?急に……………」

「え……?え……?と……………」、う、うん!かなりイイ線行ってるよ……?」

最初は戸惑い気味だった智子もなんだかノツて来た!

やばい、智子がノるとちよつと……………」

「ほらあく☆友樹君がイケメン文学少年だか……」

「いや、そういうのいいから」

ザラキ!ザラキ!ザラキ!いろはすがクリフトばりの即死攻撃!

智子のライフがもうゼロになるうかという所だが、そんな小さなこととは構わずもう一度低くゆっくりと訊ねるいろはの笑顔は闇落ちしていた……………」

「智子って文系の成績めっちゃ良かったよねえ」

「う、うん！いいよっ」

余計な事を言わない智子に満足したのか、いろはすがこちら側に戻ってきました！

「だよね〜！智子で学年何位くらいなのっ!？」

「う〜ん……。文系だけの順位は出ないからなく。ちよつと分かんないかも〜」

「じゃ、じゃあちなみに国語はっ!？国語だけなら何位っ!？」

「ふっふ〜！私文系の中でも国語が一番成績いいんだよね〜。国語だけなら常に学年10以内には入るかな〜っ！最高で7位まで行きました〜！」

豊かな胸を張りえっへんと満足気な智子。

はああ〜…確かにこいつの文系の成績がいいのは知ってたけど……、智子ってこんなんの癖にそんなに成績良かったんだあ……

智子のくせに生意気だーっ！と、私の中にどす黒いジャイアニズム的思想が駆け巡っていると、いろはは一気に絶望の淵へと叩き落とされた……。

「うっそ……。マジで〜……。？」

そんないろはの様子に、へへんっ！と勝ち誇ったかのような笑顔を向ける智子なのだが、次のいろはの言葉にライフがゼロになった……。

「智子でさえ…!？智子でさえたつたの10位程度なの…?！」

そう言って頭を抱え込むいろはの横では「たつた…?」と智子が笑顔のまままで白くなっていった……

「うわー……。じゃあ最低でも智子並みにはなれるくらいじゃないと、同じ大学も目指せないんじゃないん?！」

消沈するいろはだが、ん!？大学!？

一体話はどこに向かってしまったの!？

「くっそー……。実は成績いいとか反則でしょー……。」

「……えっと、いろは？ 一体なんの話…」

てか葉山先輩は実はどこるか秀才で有名だと思っけど。

そんないろはの様子に戸惑ってる私達の元に、昨日姫殿下からの甘いお言葉が貰えなかった男子達が、今日こそは！と気合いを入れて集まってきた。

「いろはー！ おはよー」「おはよういろはすっ！」「オッス！ 一色っ」「あのさ…年賀状…」

男にはいつ如何なる時でも魅惑の微笑みと甘い猫なで声を絶やすことの無かったいろはが返したご挨拶は、今日もやっぱりこんなもんだった。

「あ、おはよ」

………最近私の友達の一色いろはがあざとくない件について、みなさんはどう思われますか??

続く

【過去〜現在編②】 どうやら私の友達は憧れの先輩の恋バナになにか悪巧む

友達の一色いろはが謎の変貌を遂げた三学期初日から数日ほど過ぎ、学校中は葉山先輩と雪ノ下先輩の話題で持ちきりになっていた。

しかしその頃にはすでに別の問題も起きてきていた。

なぜか葉山先輩告られ事案が多発するようになってきたらしいのだ。

正直私って乙女ちつくな思考をあんまり持ちあわせてなくって、好きな人に彼女が出来たらしいと噂になってから告白する女の気持ちが良い分からないんだよねー。

しかもその相手が相手だし。

ほら私って子供の頃から男子的趣味を持ち合わせて来たじゃないですかー……っていろはかよ！

漫画って言ったら断然少年漫画！

現実にこんなん居るかよ！って気持ち悪いくらいの爽やか完璧超人の背後に花が咲くとか草生えるわって感じだし、ゲームだってアニメだって男の子趣味丸出しっす！

け、決してオタクってわけじゃないんだからねっ！

アレ？でも今話題になってる人は花が咲きそうな完璧超人でしたね☆

そして今朝、実際に目撃してしまったのです。件の告白事案というやつを……。

× × ×

「ううう……、この時期の朝は地獄だわ……」

海沿いの我が校の冬はまつこと厳しいでござる！

私は目をバツテンにして、通学中に購入したホットココアをカイロ
替わりに校内へと入って行った。

う……、この寒さでちよつともよおしてきちやったよ……。トイレ
トイレっ！

こーらっ！はしたないゾ☆香織っ！

ここからなら混んでる可能性の高いトイレより、人が居なさそうな
特別棟のトイレの方が安心安全！

私はササツと特別棟に向けて足をのばした。

「ふっ……スツキルスツキリ！危うく漏れかけたぜっ！」

こーらっ！はしたないを通り越しておっさん一直線だゾ☆香織っ
！

やばいやばい……。私よ乙女心を取り戻せえっ！と心の中で乙女
とおっさんのリトル香織が熱いバトルを繰り広げていると、「……あ、
あのおっ！」と近くで女の子の声聞こえた。

ん？何事だ？こんな人気の無い特別棟で朝から艶っぽい声出しや
がって、全くもってうらやまけしからん！

と、おっさんリトル香織と乙女リトル香織が一瞬でフュージョン
し、声がした方を角から覗き込んでみた。

乙女仕事しろ。

「あのっ……、葉山くんて、雪ノ下さんと付き合ってるって……ホント……？」

キターーーー!!

フュージョンしたりトル香織が大はしゃぎ!

てかもうただの私そのものでしたねっ!

「いや、それはただの噂だよ」

「じ、じゃあー……その……、わたしと……じゃ……、その……、ダメかな……？」

じゃあつて……だからなんでそうなのよ……?

葉山先輩は雪ノ下先輩と付き合っていないのが、この女子生徒の質問に対しての解じゃないの?

そっからなんで私と付き合わない?に発展すんのかなあ……?

「……ごめん。君の事は良く知らないし、俺は今誰ともそういう関係になるつもりないから」

「……そっか……。ゴメンね……。急にこんな話しちゃって……っ! ……じゃあね」

口元押さえて走ってっっちゃった……。

残念でしたー。

ってか君の事は良く知らないって、知り合いとかでも無いんかい。ホント顔と人気くらいしか知らないで惚れたつもりになってるんだろうね、スイーツ(笑)乙女は。

恋ならともかく愛つてのはそういうもんじゃないでしょうに。

私もこう見えて結構告られたりしますけどおー?

でも告ってきた相手がほぼ知らない人だと、「え!?!なんで告つてくんの?どこ見て好きになったの?どうしてそれでOK貰えると思っ

たの?」って……、結構本気で困るんですよ……。

いや、マジで男なら告ってくる前にもっと自分を一生懸命アピールしてこいよ!

と。

もっと告る相手の内面と己の内面を突き合わせてお互いを理解し、させてから思いつきりぶつかってこいよ!

と、そう思うわけなんですよ、ええ。

どんなに見てくれが良からうがどんなに爽やかに見えようが、中身知らなきゃ付き合えるわけないじゃん。

付き合ってからお互いを知っていけばいいって?

いやいや!なにそのギャンブル!順番違うっての。

失敗が目に見えすぎてて限られた青春タイムが勿体ないですからっ!

その点いろはは偉いよね。

まず外見から入ったにしても、ちゃんとマネージャーとして自ら飛び込んでいって、ちゃんとアピールして自分の存在を相手に見せ付けてから行動したわけだからね。

一方的な片想い段階ならいざ知らず、相手の内面も良く知らない、自分の内面も見せていない……って段階で告るとか、正直意味分からん!

ホント断わる側の気持ちも考えてみてくんないかなあ……、結構くるモノがあんのよ?

と、もう一度コツソリ葉山先輩を覗いてみると、うーん……。やっぱり苦々しい顔してんなあ……。

いろはすみたいにオールウェルカムスタイルの人間でもなきや、断わる事が決定事項の上で告られるのって結構精神的にくるのよね

……。

おっと！語弊がありましたよ？

いろはすはオールウェルカムじゃなくって撒き餌を撒いて呼び寄せといて、キャッチもせずリリースしまくるオールスルースタイルでした☆

いやんホントに小悪魔！

……。
こんながずっと続いてるんじゃ、精神的に疲れちゃいますよね〜

お疲れ様です！葉山先輩。

× × ×

「おっはよー、香織！」

教室に着くと、そんな愛しの葉山先輩の精神状態など知ってか知らずか朝から元気ないろはす。

うーん……さつき見た事って報告すべきなのかなあ……。

でも一応先輩女子が無惨にも玉砕したワケだから、軽々しく教室で部外者がワイワイやるような問題でもないしねー。

「いろはー、今日の放課後って時間ある？たまには二人でサイズでも寄ってかない？」

ピクリと反応するいろはす。紗弥加も智子も加えずに『二人で』と言った所に反応したようだ。

「いいよー。今日は生徒会も仕事ないし！……あっちも毎日行きすぎると怪しまれちゃうんだよねー……」

ボソリと不可解な事を言ういろは。

あっちも？怪しまれる？

この子一体なにしてるの……？

「誘つといてなんだけどさあ、そういうえばマネージャーの方は大丈夫

なの?」

「マネージャー……? ああ! サッカー部ね! すっかり忘れてた」

いやいや忘れるってどーゆーことだよ!?

あんた部員じゃないの?

「いやー、最近なにかと理由つけて休んでるから、なんか所属してたの忘れちゃってた☆」

忘れちゃってた☆じゃねえよ。

あつれ……? あんたの目的はマネージャー業じゃなくて、それによる見返りなんじゃ無いのお……?」

見返りよりも生徒会の方が大事になってきちゃったのかな?

それとも生徒会長頑張っちゃってますよ私! アピールの方が効果的なのかしら……

あー、そういや前に『わたしを推してくれた人に頑張りを認めて貰えるのって結構いいかも♪』とかなんとか言ってたっけな。

× × ×

「うーん。じゃあわたしはミラドリとドリンクバーでっ」

「それじゃあ私はたらこクリームパスタとドリンクバーで!」

放課後サイズに到着し、さっそく注文を終えるとドリンクコーナーへ。

あ、ミラドリとはもちろんサイズ名物ミラノ風ドリアの事ですよ? わざわざ説明するまでもありませんでしたね!

ドリンクバーにているのは珍しくコーヒーを入れてくると、大量のガムシロとミルクを投入しました!

「ちよっ! いろは!? そんなに甘くしちやっつて大丈夫なの!? カロリー高いつて! てかそもそもそんな飲めんの!」

「んー? 今ちよつと甘いコーヒーに挑戦中なんだよねー。その分夕ごはん後のデザートとかめっちゃ我慢してるからだいじょーぶっ」

いえいつ！とピースで答えるいろはすだが、甘いコーヒーに挑戦つてまず意味が分かんないんだけど。

挑戦してどうすんの？その先になにがあるの？

スイーツ大好きいろはが、夕ごはん後のデザートを我慢してまで甘いコーヒーに挑戦……？

やっぱりなんかおかしいなコイツ……。

コーヒーを一口すすり、うげえ……と舌を出す。

じゃあやめればいいじゃん!?

「で？わたしになんか話があるんでしょ？わざわざ二人って指定してくるくらいだし」

「あ！そうそう。……一応いろはにはちゃんと言つところと思ってさあ。……最近葉山先輩に告白事案が多発してるって噂じゃん？

……実は今朝さ、見ちゃったんだよねー。告白シーン」

「マジでっ!?!で?で?」

すっげー勢いで問い詰めてきましたよ!?

いろはす圧が強いつ！略している庄！

なので今朝の顛末を説明した。もちろんリトル香織のフュージョンは内緒よ?。

「そっかー。ただの噂じゃなくて本当だったんだあ」

「私も朝からビックリだよ！てかさ、なんで彼女の噂が出てから告んの？しかも相手はあの雪ノ下先輩だよ？告ったって玉砕するだけじゃん」

「香織はやっぱり乙女成分足りてないな」

ほっとけ!

「うーん……。普段聞き辛い事だからこそ、逆に絶好のアピールチャンスになるってのかなあ……」

「どゆこと?」

「だから普段は告白する勇気もないようなチキン女でも、まずは噂から入れるじゃない？……で、その流れであわよくば告白までしちゃえ！みたいな」

「はー……成る程ねえ……」

乙女成分不足の私は、思考回路ショート寸前ですわ。

「やっぱ私には良く分からんなあ……」

するといろははピコーンと新たな技を体得した！

「じゃあさーちよつと香織実験台になってくんない!? わたしちよつと試してみたいから、感想聞かせてよー！」

「じ…実験台……? まあいいけど。……え!? いろはが葉山先輩にやんの!？」

「いやまあちよつとねーっ」

悪巧みしてる時の素の表情になってるよ……。

そしてうーん……と首を傾げて人差し指を顎にあててシンキングポーズ。はいはいあざといあざとい。

「よしっ…じゃあこれで……」

するといろはは急に上目遣いになって私を見てきた。

「先輩……。今付き合ってる人って、……いますか？」

……。

うおー！ やっべー！ おっさんリトル香織が無口になっちゃったよ！ そりゃ年頃の男の子にはアピールになりまくりっしょ！

「う、うん……確かに……。それで目をウルウルさせて頬でも赤らめられた日にゃあ男なんて一発で落ちますわ……」

するといろはは目をキラキラさせていろを掛けてきた。

「マジでっ!? よおっしーこれは使える！ 意識させられるかも！ さすがに香織相手には無理だけど、先輩相手にだったら緊張しちゃって絶対ウルウルしちゃうし、ほっぺただって超赤くなっちゃうだろうしっ！

しかも試しですよ？って一言断わつとけばリスクゼロ！」
なんか大興奮で「香織ありがとー！」とかつて両手でがっちり握手を求められております。

んー、なんか知んないけどお役に立ったみたいだし、それじゃあもう1つアドバイスしてあげますかね。

たぶんこの気持ちはいろはにはちよつと分かんないだろうし。

「でさー、葉山先輩要らん告白されまくって結構心労溜まってると思うのよねえ。ここでいろはが先輩を純粹に心配する心優しい後輩として、気分転換に気楽な感じで遊びにでも誘ってあげたらどうかかな？ふくよかなく……は無いな。まあ可憐な癒しとしてポイント上がっちゃうかもよ〜？」

そんな私のアドバイスにしばらく考え込んだいろはは、ハッ！となると急にギラリと目を光らす！

いろはすフラーツシユ☆

「そ、それ……それ使えるよ香織っ！……普段なら先輩にもあの人達にも警戒されちゃうような事でも依頼という形でそれを相談すれば、ヤツから決定的な言質が取れるっ！これは安パイなわたしにとつての最善策なんじゃない!? 一気に伏兵にのしあがれるかも！」

安パイってあなた……

ま、まあなんか楽しそうだからいいけど。

でもヤツって……？

「えっと……いろは？」

「……あつーごめん香織！ちよつと1人で盛り上がっちゃったっ」

テヘツとあざとく舌を出すいろはなのだが、次の瞬間にはちよつと遠くを見るような目をして表情がガラリ一変した。

「あはは……、いやー、どうせわたしには正攻法じゃ勝ち目ないからさあ……だからとりあえずはどんな手使つてでも、とにかく意識くらいはさせてやらないと、……へへえゝつ、なーんか悔しいじゃない?」

そう言ういろはの顔は、つい今しがた見せた一瞬の物憂げな表情などどこへやら、いつも通りのニヤリと企む小悪魔微笑だった。

葉山先輩大好きいろはが少しでも有利に戦えるように今日の作戦会議を企画したんだけど、なーんか私の思惑とは違う方向に向かつて行つてる気がするんだよな……。

まあ張り切っちゃつてるみたいだし、一応正解つて事でいいのかな……?

しっかし憧れの先輩の恋バナになぜか元気に食い付く一色いろはは、一体なにを企んでいるのやらっ!

続く

【過去→現在編③】とうとう私の友達のあざとくない理由に物語が追いつく

1月も中旬に差し掛かり例の作戦会議から数日後、いろはが朝からご満悦な表情で私の所にやってきた。

うつわ……なにその表情……。締めまりなさすぎでしょ……。

「おつはよー！いやあ、昨日の放課後は超楽しかったよー！」

「そなの？まさか……アレ、やったの……？」

するといろははによしながら身振り手振りで説明してきた。なんかウゼー。

「真っ赤になって声かすれさせちゃって、『いない、けど……』………だあってさあつ！ふひひっ！やくん！超面白かったっ！」

うわ……マジでやったんだ！ま、まあ確かにアレやられたらいくら葉山先輩でも……、って、え？葉山先輩がそれ？キャラ崩壊してね？

二次創作ならキャラの名前を使っただけの別モノって罵られるレベル。

私の頭上に大量の疑問符がふよふよ回ってる事などお構い無しに「あんなに照れちゃうとは思わなかったよ！あれ絶対意識しちゃったでしょ！」だの「なんかもう超可愛くてナデナデして抱き締めたくなっちゃった〜！」だのと未だ興奮醒めやらぬ様子。

「……えっと、それって葉山先輩……なんだよね？」

「うへへっ……へ？なんか言ったあ？」

聞いちゃいねー。

自分から話してきたんだからちやんと会話のキャッチボールしよ

うよー！いろは野球やろうぜ！

「どしたの〜？いろは朝から超ご機嫌じゃーん」

「ねーっ！なにになに何か良い事でもあったのお？ちなみに良い事と言えば昨日とも君がさあ〜……」

いろはのなんか知んない幸せオーラに紗弥加たちも参戦してきたのだが、誰も聞いてない智子のとも君情報と相変わらずにへらくつとしながらのいろはの独り言、めんどくさくなっちゃってスマホ弄りだしちゃった紗弥加とでもうカオス状態。

今日もいろはの変化に対しての疑問を聞く機会を逃してしまっただよ……。

そういえば変化といえはもう一つ！

最近いろはが登校してきても、いろははす臣下たちがご機嫌伺いしてこなくなっただよね〜。

なんかいろはの冷め過ぎた態度に警戒してるというか恐れてると言うか。

フレンドリーに挨拶してきてバツサリ斬られた時のダメージって半端ないですもんね。

中一の時クラスでジャンプ読んでたちよっぴりオタクな男子グループの中に入ってって、『私も朝見たよ〜！アレ超面白かったよね〜』と笑顔で話し掛けたら、超青ざめて散っついていかれたのは良い思い出☆

見た目ハデ目なりア充っぱい私が急に入っていったら、オタクをバカにしに来たと思って警戒しますよね〜……でも当時はかなり凹んだよ……。

あのやつほーってフレンドリーに挙げた手の所在の無さっていったらもうね！

あれ以来、学校で漫画の話はしなくなりました……。

そんな趣味友達ちよつと欲しいから、いろはに海老名先輩とか紹介

してもらおうかなあ……。

アレ？どっかから逃げてーって声が聞こえたような？

しかし今日はそんないろはに一人の勇者が戦いを挑んできた！

バスケ部次期エースと名高いD組の中西君である。

最近すっかり付き合いの悪くなったいろはに我慢出来なくなったのかな？

「なあなあいろはは〜！最近全然遊んでないじゃん。また買い物付き合うから、次の休みにでも遊びに行こうよ〜」

中西君って言ったたら、いろはの休日荷物持ちの中でも群を抜いたお気に入りのはず。

そんな彼にどう対応するのかわで、いかにいろはの様子がおかしいのかを計れるはず！……とクラス中が見守っている……

「あ、翔太君ごめんね。最近生徒会忙しいし、もうそういうのやめたんだ」

さつきまでニヘラニヘラして弛みきった顔はどこへやら、魅惑的な笑顔も猫なで声もない、あまりにも予想外の普つ通りの冷めた笑顔と冷めた口調で一閃！

これにはさすがに中西君もクラス中も言葉を失ったよ。

心で泣きながら去っていく中西君の背中を見つめながら、これはもうただ事じゃないと確信したね！

× × ×

さらに数日経ったある日の事、いろはが朝から何やら計画書らしき書類と睨めっこしながらうんうん唸っていた。

その表情を見る限りでは、なんだかめんどくさそうな顔してんな。

「どったの？いろは。なんか厄介ごと？」

「え？うーん……ちよつとねー。面倒ごと頼まれちゃってさあ……。

もーっ！こんな企画なんの予定もしてなかったから、急いで色々用意

しなきやだよ……」

「へー。ちなみに誰に何を願ひされたの？」

するといろはは眉をひそめて小声になった。

「……香織だから言うけどさー、本人に口止めされてるから内緒だよ？」

おお……なんか信用されてるな、私。まあ口の固さには自信あるかんね！

「……実は葉山先輩に、例の噂を終息させたいから協力してくれないか？つて頼まれたんだよねー」

「……マジで!?てか葉山先輩に頼られるなんてポイント高いじゃん！」

と、ヒソヒソ声のままおくりしております……

つて、脳内までヒソヒソする必要なかったね☆

「あ、うん。まあそれはどーでもいいんだけどさ」

……どーでもいいの!?そこ超重要なんじゃないの!?

つて、脳内ヒソヒソが止まらない☆

「……月末のマラソン大会で表彰式やる事になっちゃったんだよねー。優勝者インタビューでなんか言いたいんだってさー」

へえー、成る程ねえー……つて！なに!?優勝する事は前提なんだあの人！

どんだけ自信家なんだろ！まあ自信の裏付けがある人なんだろうけどもさ……。

「だから簡易とは言えステージっぽいモノも用意しなきやだし、役所に申請とかして公園の使用許可も取んなきやだし、マイクなんかの音源確保もしなきやだし……うー、めんどくさい……」

……なんか物凄い違和感……。

だって……、大好きな葉山先輩に頼られてるんだよ？

葉山先輩の噂を消し去れるんだよ？

これこそ推してくれた人に認めて貰える、褒めて貰えるつていう、生徒会長としての立場を思いつき張り切れるシチュエーションな

んじゃないの？

そしていろはは最後にその違和感を決定的とさせる一言を、本当に残念そうにつまらなそうに口にした……。

「……それにさあ、葉山先輩にどうしても内緒について言われてるから、先輩には頼れないんだよね……。ホントつまんない……。」

……そして翌日、ついにあの襟沢恵理大泣き事変が勃発し、ここ最近の一色いろはがあざとくない件の謎がすべて解けるのだった……。

× × ×

襟沢事変が収束し、いろはと比企谷先輩の駐輪場夫婦漫才を目撃した数日後……も・く・げ・き！ですからねっ！け、決してノゾキなんかじゃないんだからねっ！

私というはは移動教室の為廊下を歩いていた。

紗弥加達はお花摘みに行ってから向かうんだってさ。やだ乙女ポイント高い！

特別棟へと向かう途中、向かいから歩いてきた一人の教師に声を掛けられた。

「やあ、一色と家堀か。移動教室かね？」

現国教師の平塚先生だ。

「あ、平塚先生こんにちはです！」

「こ、こんにちは。はい、そーですっ」

私この人苦手なんだよねー……。

だって怖いんだもん。なんちやらブリットが……。

いや、物理的な恐さより精神的な怖さがね？

だって！三十路の女性がなんちやらブリットオとか言つて男子生徒を悶絶させてるんだよ！

なんかヤバくない!?色々と……。

あ、あれ……?なんか平塚先生、私の事睨んでない……??

き、気のせい気のせい!……そ、そういえば以前そのなんちやらブリットを食らつて崩れ落ちていた男子生徒は無事に生きてるのかなあ?

……つて!

あの時は名もなき男子生徒とか思つてたけど、記憶の糸を手繰り寄せてみたら……ア、アレって比企谷先輩じゃね!?

マ、マジですか……!なんたる運命の悪戯っ!

あとでいろはすとの話題で盛り上がろっ♪

「ああ、そういえば一色。進路相談会の準備はどうなっているかね?もう明日に迫っているが、なんの報告も来ていなかったものでね」

「相、談、会……?はわわあっ……わ、忘れてたあ!」

いや、はわわあつてアンタ……

「す、すみません!最近急ぎよマラソン大会の企画とかがあがつちやつて、すっかり忘れてましたあ……」

「そ、そうか。まあ仕方あるまい。最近生徒会の仕事を頑張ってるみたいだからな。マラソン大会の企画も一色が急ぎよ立ち上げたらしいな。なかなか面白い事を考えるじゃないか」

「あははは……」

おやおや、葉山先輩の名前が出せませんかからねー。

さすがに気まずそうですね。

「いや本当に良くやっているよ。まさか一色がここまでやってくれるようになるとはな……。失礼ながら嬉しい誤算だ」

微笑ましくいろはに語り掛ける平塚先生は、こうして見ると美人で優しいホントに良い先生なんだよなあ……。

残念要素が少しでも軽減されれば引く手あまただろうにのう……。

「本牧も褒めていたぞ。最初はやはり不安しかなかったようだが、今の会長ならしつかりサポートしてやりたいとな。おつと！私がこんなことを言っていたなんて内緒だぞ！」

人差し指を口元にあててウインクする先生を見ると、本当に心から思うよ！

嗚呼勿体ないと……！ゲフンゲフン

「副会長が……？」

「だがまあ特定のとある生徒を頼りすぎだと苦笑いしていたがな」

そういう平塚先生も苦笑い！

詳しい状況は知らないけど、いろはって本当に比企谷先輩にべつたりなのね。

「まあわたしのサポートを誠心誠意するのは先輩の義務ですからねっ！」

えっへんと薄い胸を張るが、オイオイ！いろはすそれ威張るところちやうつ！

「あつはつは！まったく！お前たちがこんなにも上手くやるとは本当に思ってもみなかったぞ。ま、比企谷も何だかんだ言いながらもお前をずいぶんと気に掛けているようだしな。せいぜい甘えるといい。そうする事であいつにも良い成長となるだろうし、比企谷と一緒に居ることで君の良い成長にも繋がりそうだからな」

へえく……比企谷先輩って平塚先生にもこんなに愛されてるのねく！

「もちろんです！もう甘えまくりますよー。甘えまくって、わたしが先輩を成長させてやりますんで♪」

お前も成長しろっ♪

「なので平塚先生！是非とも相談会の手伝いを先輩に依頼したいので、先生の方から言っといってくださいよー。わたしからだど、すーぐ逃げちやうんで！」

「ははっ！早速だな！了解した。それでは私の方から奉仕部に直接依頼しておいてやろう」

するといろははちゅちゅちゅ！と人差し指を左右に振った。

「せ・ん・ぱ・いだけで充分ですっ！そんなに人手要らないでしょうし、先輩一人の方がなにかと扱いやすいんで！馬車馬のようにこきつかってやりますよー」

ふっふっふ！と悪巧みする先生と生徒……。うーん！なんて悪の組織感っ☆

「よし！それでは私から上手い事言っついてやろう。……。どうだ？家堀、一色は最近ずいぶん良い成長をしただろう。なかなか面白い方向にな」

「そうですね。なんていうか、いい感じで素が出まくってますねー」
「ちよつと香織ー！それどういう意味ー？」

ぷくーつと頬を膨らめますいろはは相変わらずあざとさ100%だが、最近はやっぱり憎たらしいと言うよりは可愛らしく思えてきたかなーっ。

これも良い方向に成長してるってことなのかしらね！

「よし！それでは失礼するよ。君たちも早く行かないと移動教室に遅れてしまうぞ？」

「はいっ！失礼します！……………あっ！平塚先生」

「ん？なにかね？」

「今さらですけど……わたしを奉仕部に紹介してくれて、本当にありがとうございましたっ！」

そう言うと、いろはは深く深く頭を下げた。

いろはは心から感謝しているんだろう。

つい先日、大泣きしちやった襟沢に対しても言っていたように、とても貴重で大切な経験と出会いを与えてくれた全てのきっかけに。

恭しく頭を下げるいろはに、ニヤリと笑い右手を上げて去っていく平塚先生はととても格好良かった。

来週はついに、いろはが葉山先輩から依頼を受けた運命のマラソン大会だ。

なんだかなにかが起こりそうな予感……。

続く

【過去〜現在編④】 だけど私の友達は暖かな空間から目を背ける

1月末日、本日はとつても快晴なり！

ついにやってきましたマラソン大会〜っ！

ドンドンドンツ！パフパフパフ〜っ！

つて……無理にテンションでも上げてかなきややってらんないでしょ……。

どこの世界に校内マラソン大会で大はしやぎする女子高生が居るつてのよ……。

いや〜……。なんでこんな大会って存在すんだろ？誰得なの？

揺れる女子高生の乳を眺めて喜ぶ変態教師くらいしか得しなくない？

ああ、葉山ファンの女子高生達にとつてはお祭り騒ぎかもね〜。

あの人優勝して勝利者インタビューやるみたいだし。

我が校のマラソン大会は、距離の長い男子から走りはじめて女子は後からのスタートになる。

そういえば今年のマラソン大会は葉山先輩による葉山先輩の為に表彰式が行われるから、場所取りとか……そもそも表彰式に間に合いたい女子が多数の為に、必然的にタイム上がんじゃね？

うっわ……。ちよつと迷惑かも。

格好つけたがりの男子と違って、女子なんてマラソン大会はダラダラ走るのが恒例化してるから、私らも適当に走るときやそれなりの成績が得られたというのに……。

葉山先輩……。あなたの為だけのイベントが、こんな悪しき副産物を生んでしまってますよ……。

あつれ〜……？ 私なんか最近、葉山先輩に対しての感情黒くない？

× × ×

「あれー？いろははどこ行った〜？」

女子のスタートまで時間がある為私達は適当に時間を潰していたのだが、いろはの姿が見えない事に気付いた紗弥加達が訊ねてきた。

「ああ、そろそろ男子が始まるからスタート地点に応援に行つてんじゃない？！」

「あーそつかく。一応対外的には葉山先輩の応援でキャツキャシとかないとだもんね〜」

ニヤつとする智子。

まあ対外的よりも葉山先輩狙いつて印象を『本命』にアピールしたい、所謂伏兵作戦の一環なんだろうけどもね☆

「面白そうだから私らも見に行つてみる〜？」

「さんせーっ」

さて、スタート地点まで来たはいいものの、やはりギャラリーが凄いなね。

まあそりや葉山先輩に限らず、恋する乙女達は意中の男子の雄姿をちよつとでも見たいもんね！（応援してるよ！アピールの為とは言つてない）

こりやいろはの所に辿り着くのは無理かな〜？なんて顔を見合せながらキョロキョロしていると、ちよつと離れた所にいろは発見！

「葉山先輩がんばってくださいーい……あ、ついでに先輩も」

おー、応援してんねー！……先輩も『ついでに』！

そんないろはを私達がニヤニヤしながら見ていると、

「おー」

おっと……そっちが反応しちゃったか……。

これはもう戸部先輩のご冥福をお祈りするしかないかと思っていると、「いやいや、戸部先輩のことじゃないですから」と当然のごとく冷たい台詞で、ないないと手を振る……。

良かったね！戸部先輩！私のはてつきり無視されるかと思ってたよ

☆

なんかこの二人はこの二人で夫婦漫才の新たなる可能性を秘めているんじゃないか？……と思っていると、いろはの視線が違うほうに向いて途端に優しい表情になっていた。

「……先輩も頑張ってくださいねー！」

こちらこちら！もう感情を隠しきれてないよ？いろはすっ！

そしてついに大会会場にスタートのピストルが鳴り響き、いろはの王子様を含む総武高校男子一同は、みなそれぞれの思惑を抱えながらスタートをきるのだった。

× × ×

……っ、疲れた……。

つつがなくマラソン大会は終了し、私達は表彰式の会場でもあるスタート地点の公園に集まっていた……。

マラソンは……結果的に言うところ……とりあえず疲れしました。

順位とかはどうでもいいよねっ！

いろはは今、簡易的な表彰ステージの上で生徒会役員の皆さんと式の準備をしている。

あの子も元気だねー！さっきまでは私達と一緒にへろへろだったのに……。

まあ結局優勝は普通に葉山先輩で決まったわけだが、コレって女子優勝者の表彰はされないのかよっ！

やだー、ホントあの人の為だけの式じゃないですかー。

いろはが無関係だったらたぶん私らは帰ってる所だろうね。

しばらくすると表彰式が始まり結果発表が済むと、さあ！本日のメインイベント・優勝者のコメントの時間がやってまいりました！

いや、メインは馬拉ソンじゃねーのかよ。

いろはは軽快なあざトークで司会進行をこなし、「壇上にどーぞー！」とステージ上に優勝者葉山先輩を招く。

「葉山先輩、おめでとうございませうー！わたし、もう絶対勝つと思ってましたよー」

おいおい生徒会長！中立を守りなさいよ！

まあこの結果ありきで企画した表彰式なわけだから、優勝してもらわないと困っちゃいますけどねー。

「ありがとう」

葉山先輩らしい爽やかな微笑でそれに応えると、オーディエンスに向き直りコメントを始める。

なんだよオーディエンスって。葉山先輩のオンステージかよ。

「途中ちよつとやばそうな……………良きライバルと皆さんの応援のおかげで……………」

なんか綺麗事を並べただけのありきたりなコメントは正直頭に入ってるくない。

なんでだろう……………なんか薄っぺらい……………なんか中身を感じない。

ああ……………私って……………あんまり葉山先輩好きじゃないのかな……………？
特にここ最近は。

いろはの比企谷先輩トークを聞いたり、実際にやりとりを目の当たりにしたりして、『比企谷先輩』という人物を知ってしまうと、なんだ

か葉山先輩のあの爽やかな笑顔が薄っぺらい仮面に見えてきてしまってる。

そして……たぶんこれが言いたいが為にこの企画を仕組んだであろう最後の決定的とも言えるセリフに、なんか胸がぞわりとした。

「特に優美子と、いろは……、ありがとう」

うつわ……。これだけの観衆が居る中で、あえてそんな台詞を言っちゃうのかあ……。

いろはも急に名前を出されたからかビツクリしてモジモジしちゃってるけど、それよりも何よりも、嬉しそうに真っ赤に俯いている三浦先輩を見て心がえぐられた……。

……だってこれって

……雪ノ下先輩との噂を収束させる為と言い寄ってくる女避けの為に、いろはとあんなに嬉しそうに身を振ってる三浦先輩を利用したってことでしょ……？

そりゃ私は葉山先輩の事は何も知らない。

あの人にはあの人なりの考えや事情もあるだろうし、こんな風にただ薄っぺらく見えちゃうのだって、私がただあの人を全然知らないからだけなのかもしれない。

だからこんな風に一方的な考え方で葉山先輩を否定しちゃうのは間違いなのだろう……。

でもね？どんな考えや事情があろうとも、このやり方だけは許せない。

恋する乙女の純粋な気持ちを利用するだなんて、絶対に認められない……。

……葉山先輩……。私の友達をこんな事に利用しないでよ……。

「はい、ありがとうございますー。というわけで、優勝者の葉山隼人さんでしたー。はい、はくしゅー」

始めは急な展開に戸惑ってたいろはだが、一瞬ある一点を見つめハツとすると、なぜか急に表彰式をとつと切り上げ始めた。

たまに神妙な表情でチラチラと視線を向ける先には……泥まみれのハーフパンツ姿で、怪我して足を引きずっている比企谷先輩の姿があった。

「二位以下は別にいらないですよねー?」

たぶんもうすぐにも切り上げたいのであろう、副会長さんに確認を取ったその台詞が見事にマイクに乗ってしまい、やっべー☆となんとか言い繕おうと奮闘している。

……なにしてんの?あの子……。

片や仲間やファンに囲まれにこやかに笑う葉山先輩……。

片や泥まみれでぼろぼろの姿で、一人足を引き摺りながら会場を去っていく比企谷先輩……。

こんな対極な様子を私は複雑な気持ちで見ていたのだが、なんとか失言を言い繕おうと必死に苦笑いを浮かべるいろはのその瞳には、たぶんこの会場で誰一人として意識を向けてはいない大切な先輩の丸まった後ろ姿しか映ってはいないのだろう……。

× × ×

「おーいーいろはー! 私達も片付け手伝うよー」

表彰式が終わるとその時点で解散となり、生徒達はそのまま雑談に花を咲かせたりその場を後にしたりする中、生徒会役員達は後片付け

に追われていた。

てかこの企画自体をいろはにお願いして開いてもらったんだから、周りにいい顔振りまいてないで率先して片付けを手伝うべき人が居るんじゃないですかねー……。

うー……ダメだあ……。なんかどんどん思考が黒くなってきちゃうっ！

私はさっきの比企谷先輩と、その姿を心配そうに見つめるいろはの様子を紗弥加と智子に説明して、早くいろはを向かわせてあげようとして手伝いを買って出たのだ。

「おー、みんなー！マジで？助かるー！」

「ていうかさあ、片付けだけなら私達でやっとかから、先輩んところ行っていいよお？」

智子がニヤニヤそう言うと、

「べっつに先輩の事なんて心配してないしーっ！生徒会長なんだから、そういうわけにもいかないって！」

あれあれ？誰も比企谷先輩とは言っていないんですけどお？

葉山先輩って選択肢は存在してないのかなあ？

「いろはー、いいから行ってきな！たぶん学校に戻って保健室にでも行ってるんじゃない？急げばまだ居るかもよー？」

紗弥加も早く行かせてやろうと奮闘中！

「……だからいいってば……。大したことないでしょ……」

まったくこういう時だけ素直じゃないんだからー。

だったら魔法のコトバを唱えちゃいますかね♪

「だってさあ、先輩の怪我がもし良くなかったら、しばらくこき使うのに支障が出ちゃうよお？」

するといろははぱああつと笑顔を輝かせたかと思ったら、すぐさまニヤリと表情を変えて

「た、確かにそれはあるかも！小間使いの一大事だっ！まったく、仕方ないなー。じゃあちよつと様子見てくるよー」

「はいはい、行ってらっしゃーい」

言うが早いか副会長さんにペコリと頭を下げると、ピューつと走って行っちゃった☆

「ホントあの子は素直なんだか素直じゃないんだか……」

「ねーっ」

私達は苦笑いを浮かべながら片付けを再開した。

……のだが、副会長さんが声を掛けてきた。

「あのさ、会長のクラスメイトさんだよな？もう俺達だけで大丈夫だよ。なんか知らないけど急ぎの用事があるんなら終わりにしていいからね」

「あ、大丈夫です！私達は最後まで……」

「あー！そうですかあ？んじやあ私と智子であとやっつくから、香織はいろはの様子見てきなよ」

へ？なんで？

私が訝しげな目を向けると、二人ともすっげえニヤニヤしながらウインクして、ビシツと親指を立ててきた。

それはもうミサト三佐とリツコ博士もびっくりするくらいの見事なシンクロー率でっ！

……ああ、つまり見てこいと……。で面白情報があったら報告しろよ、と……。。

こいつら……ホントいい友達ですねー。

思わず棒読みになりながら、私もその場をあとにした……。

× × ×

学校に到着した私はまっすぐに保健室を目指した。

今ごろはイチャイチャ夫婦漫才でもやってんのかなあ？

よし！次の角を曲がれば保健室だっ！と、角を曲がろうとした所で

足が止まる……。そして私は身を潜めた……。

なぜなら、そこにはいろはが保健室の扉も開けず、ただ呆然と立ちすくんでいたから……。

え!?なに!?どうしたの……?!

なんか症状があんま良くないとか!?

するといろはは悔しそうに俯いたまま、保健室前から立ち去ってしまっただ。

そのあまりの様子に私はいろはが心配になり、その背中を追い掛けようと飛び出したのだけど、保健室の前を通りかかった時に中から聞こえた声に足が止まってしまった。

「じゃあ、行けたら行く」

「ええ、流れ次第で決めましょう」

「それ結局行かないパターンっぽくない!?!」

正直会話の内容までは分からなかった。

ただ分かったのは三人の生徒が会話をしていて、そのうちの一人が比企谷先輩という事、あとの二人が女の子だということくらい……。

ただね、いくら私にでも分かる事がある。

その笑い声、そのあたたかさ、その空気。

この薄い扉を一枚隔てた向こう側は、もうそれだけで完結してしまっているみたいだった……。

余人が入り込む余地などないくらいに、その三人だけで完成してしまっただ世界……。

この空間に入っていく勇氣なんて、たとえ少年漫画の主人公だつて、たとえ魔王からお姫様を助けに行く勇者だって持って無いんじゃないかな。

たぶん比企谷先輩を身近に感じていれば感じているほど、今は一番遠くに感じるのかも知れない……。

「じゃあ、一緒に行こっか……みんなで、一緒に」

その一言でさらに暖かな空気に包まれた空間の扉のこちら側は、校舎の中だというのに一年で最も寒いと言われるこの季節でさえも及ばないほどに寒く凍えるほど冷えきってしまった……。

もしかしたらいろはは、ずっとこんな空気と一人で戦ってきたのかもしれない……。

奉仕部、だっけ……？その部室に足を踏み入れる時は、いつもあんな風に入るのを躊躇っていたのかな……。

そしてあんな風に心が折れそうになりながらも、それでもなんとか踏張ってその重い扉を開いてきたんだろう。

でも……さすがにこれは無いよ……。

あんなにいつぱいいつぱい心配して、疲れた身体をおして一生懸命走ってきて、ようやく会いに来られたと……嬉しくて気持ちが安心してきって手を伸ばしかけた扉の先にこんな仕打ちじゃ……。

追うことも忘れてふと見上げた私の視線には、下を向いたまま校舎に儂く消えてくいろはの背中だけが映っていた……。

続く

【過去〜現在編⑤】 さりとて私の友達をあざとくしたたかに前を向く

マラソン大会の翌日。季節は今日より二月へと移り変わる。

「くぅ〜っ……身体痛ったいっ……」

私、家堀香織は、マラソン大会の後遺症（筋・肉・痛☆）と戦いながら、駅から学校までの道のりをのそのそと歩いていた。

てかマラソン大会の翌日は是非とも休みにすべきよね！

昨日は誰かさんのオンステージのせいで女子マラソンの平均ペー
スがめっちゃ上がっちゃって大変だったわ〜……。

結局昨日は、あのままいろはと会う事は無かった。

片付けが終わって帰ってきた紗弥加達にアレを話す事も出来ず、本
当にもやもやな気持ちのままマラソン大会は終了した。

あく……でも私達には関係無いから行かなかったけど、マラソン大
会の後には打ち上げと言う名の葉山祝勝会をどこぞの小洒落たパブ
でやるとかって、いろは言ってたなあ……。

あの子、あんな状態で行けたのかしら……。

そろそろ校門という所まで差し掛かった時、不意にスマホが歌いだ
した！

ヤベエツ……！思いっきりアニソンのままじゃん……っ！

マナーモードにし忘れてたあ………！

くっそお……！誰だよこんな時間にい！周りに生徒超いんじゃない
！もう顔が超熱いじゃんかよおっ！

と涙目になって、掛けてきた相手に八つ当たりする気まんまん電話
にでると紗弥加だった。

『……なによ?』

『いやいやなんで朝からそんなに不機嫌?!』

『……べつ、別に機嫌なんて悪くないんだからねっ!』

やべー……周りが「あの美少女からアニソン聞こえてきたんだけど……」って冷たい視線を向けてくるそんな空気の中、テンパってツンデレキャラ降臨とか、私社会的に終わってんじゃん!……え?被害妄想強すぎですって?

隠れオタってのは敏感肌なのよっ!

『まあいいや。あのさ、いろは知らない?てか一緒に居なかつたりしない?』

『いろは?いや、知らないけど……てかまだ学校着いてないし。……どしたの?』

ふと昨日の保健室前の光景が頭を過った。

なにか……あつたんだろうか……?

『あー、いや、別に大したことじゃないんだけどさ、智子がもう30分以上前にいろはと教室で会ったらしいんだけど、荷物だけ置いてどっか行っちゃったらしいんだよねー。部活か生徒会室でも行つてんのかなー?』

いろはがそんなに早く教室に居たの……?

前は真面目に朝練出てたからいつも早く来てたっぽいけど、ここ最近はずっと遅めに登校してきてただけだなあ……。

『とりあえず了解。教室着く前に見かけたら声掛けとくよ』

『ほーい。んじゃまたあとで〜』

スマホを切った頃にはちょうど校門に差し掛かる頃だった。

どうしたんだろ?いろは……。

そのまま昇降口に向かおうと歩いていた時ふと香織ちゃんは、VS七英雄戦ばりにピコーン☆と新しい技を閃いたっ!

「……駐輪場……かも」

私はそのまま真っすぐに駐輪場へと歩を進めた。

× × ×

居たっ……なにしてんの？あの子……。

やっぱりいろははそこに居た。

つい先日駐輪場で夫婦漫才をしていた場所、つまり比企谷先輩がいつも自転車を停めているであろう所からはちょうど死角になりそうな場所に身を潜めていた……アホか……。

あの子、マフラーも手袋もしないで何やってんの……？

いろはは両手をスリスリ擦り合わせたり、はああっと息を吹き掛けたりしながら、ぴよんぴよんと跳ねていた。

もしかしてここで30分以上待ってたの……？

はああ……まあなにがしたいかは一目瞭然だね。

でもあのバカ、風邪ひくつての！

まったく！このままほっとく訳にも行かないっしょ！

私がおバカに声を掛けようかと、前に進もうとしたちょうどその時、駐輪場に囚われたいろは姫を救いだしに来たかのように、白馬ならぬママチャリに跨った目の淀んだ王子様が到着したのだった！

私は慌てて隠れてしまう！

自転車を定位置に停める比企谷先輩↑身を潜め覗き込むいろは↑様子を伺う家堀香織……。

なにこの図……とつても危険でとつてもシニール。

比企谷先輩が自転車の鍵をかけて校舎に向かおうかと身を翻したその時、潜んでいたいろはの目がキラリと妖しく光り口元がニヤリと上がった！

「せんぱい……」

突然のあざとい強襲に驚いた比企谷先輩と、嬉しさを隠し切れずによによと駆け寄るいろはとの、恒例の夫婦漫才が幕を開けるのだつたっ!

× × ×

「え？……なんで居んの？」

超待ってたいろはにこうかばつぐんの一撃が入りました。

酷いよっ！比企谷先輩っ！

「ちょ!?朝イチで可愛い可愛い後輩が声を掛けてくれたっていうのに、それは酷くないですかあ？」

「いや、だって……なんで居んの？」

いろはのほっぺがぷくーっつと膨らんだっ!

本日最初のあざと風船頂きました!

「べっつに居たくて居たわけじゃありませんー!今日は朝から生徒会の仕事があつて、たまたま!た・ま・た・ま!ここ通っただけですー」
そんなに寒さで真っ赤になった顔してたまたまもなにもあつたもんじゃないでしょ……。

「へ、へー……そいつは朝からご苦労さん……じゃっ」

ホントこういう時の比企谷先輩のレスポンスの速さはマジ半端ない。

「じゃっ!じゃないですよー。わたし超寒いんですけどー」

「じゃあ早く校舎入れよ……」

そりゃそうじゃ〜

「それまで我慢出来せんっ!」

そういういろはは何かを閃いて悪魔の微笑を浮かべた。

「……………ていつー!」

「ひゃいつー!おいつー!」

「うっわ……ちよつとマジで気持ち悪くて無理ですごめんなさい。

……ほおお〜……温ったかい……さすがに自転車漕いで身体を動かしてきただけはありますねー」

……私もちよつとびつくりしちゃった……。

いろはが比企谷先輩に飛び付いて、冷えきった両手を先輩の両頬を挟むようにあてている……。

なんてーの？超あざとい。

ほかに生徒居ますけど……大丈夫なの？超見られてますよ？

「お前いきなりなにすんだよ！そしてこの状態でも振られちゃうの？」

「……そんな事はどうだっていいんですよー……」

まあ振り芸はいつものことだからいいっちゃいいんだけど、その状態はそんな事ってレベルじゃないですよ？

「……えつと……せんぱい祝勝会すぐ帰っちゃったじゃないですかー……？」

「お……おう。ああいう席は苦手だからな……もともと顔出しだけのつもりだったし……」

「せ・め・て！わたしに一言くらい声かけてくれてから帰ったって良かったじゃないですかあ……ちよつと聞きたい事だつてあつたんですから……」

「おう……そりや悪いことしたな。そつちはそつちで盛り上がったたし、邪魔しちや悪いなと思つたからな……。聞きたいことつてなんだつたんだ？」

すると急に俯くいろは。

「……えつと……その……けが……」

さつきまでの寒さで赤くなつた顔とは全然種類の違う朱みになつた顔で、俯きながらボソボソと喋ってる。

「……え？全然聴こえねえんだけど……」

「だつ……だからあ……そのお。……お怪我！お怪我の方は大丈夫だったんですかっ!？」

なんか恥ずかしさのあまりにキレ気味に怪我の心配をするいろはす……！

そっかあ……やっぱりずつと気にしてたのか……。

あんなに心配してたのに、怪我の具合聞けなかったもんなあ。

「け、怪我？……お、おう。まだちよつと痛てえけど、まあ大丈夫だぞ」

すると、たぶん誰にも聞こえないくらいの小さな声で、「良かった……」って、言ったのかな……。

口の動きしか見えなかったから定かではないけど、なにかを一言漏らしたあとに安心してきつたようにすっごい優しく微笑んでた……。

さつきからずつと俯きっぱなしだから、比企谷先輩には全然見えないただろうけどね。

「……え……と、サンキューな。なんでそんな事知ってるのか知んねえけど、まさかそんなに心配してくれてたなんてな……」

比企谷先輩が照れ隠しにガシガシと頭を掻くと、ようやくいろはが顔をあげた。

それもなぜか極上の小悪魔笑顔で！

「は？先輩なに言っちゃってますかあ？たかがマラソン大会でみつともなくコケたくらいの怪我なんかでわたしが心配するわけないじゃないですかー？……おやおやあ？可愛い後輩が心配してくれてると勘違いしちゃいましたあ？嬉しくなっちゃいましたかあ？」

「お前ホント最悪な……」

顔を引きつらせて呆れ顔の比企谷先輩を、ほんつとに超く嬉しそうな顔でニヤニヤとさらに罵倒を続けるいろは☆

「大体く、先輩なんかが葉山先輩と勝負になんかなるわけないじゃないですか？身の程を知りましょうよー！結衣先輩から聞きましたよ？なんか三浦先輩の依頼の為に、まーた無茶したらしいですよー」

「別に葉山に勝つつもりで走ってたわけじゃねえっての」

「でも結局は自分の身の丈に合わない無茶をして、すっころんで怪我したんですよねー？超カッコ悪くて超キモいです」

「そりゃ悪うござんしたね……」

すると口を尖らせてまた下を向く。

「……まったく……なんで先輩は他人の為にそんな無茶ばかりするんですかねー……マジでキモくてマジで無理です……」

いろは……

「心配してくれる人達を無視してそんな無茶ばかりしてたら……またクリスマス前みたいに呆れられてバラバラになっちゃいますよ……?」

ただ心配してるだけかと思ってたら、あいつ怒ってるんだ……。

「一色……」

「……ほんつとに先輩はバカですねー。また味方が一人も居なくなっちゃってもいいんですか……?」

するといろはは俯いていた顔をあげてまた前を向く。

切なげな潤んだ瞳で……でも精一杯あざとく小悪魔的に笑顔を浮かべて……。

「……でも……仕方ないですねー!先輩ですしね!……だから、もしまた先輩が一人ぼっちになっちゃったとしても、わたし“だけ”はずっとせんぱいの味方でいてあげますっ」

ずっと……かあ!

そう言い切ると、小悪魔さもあざとさも無い、とても暖かで優しい笑顔を比企谷先輩に向けた。

「ちよ……一色……?」

「な……んちゃってえっ!……ドキドキしちゃいましたあ?嬉しくなっちゃいましたあ?意識しちゃいましたかあ!……ただからかっただけなので変に意識して勘違いして告白とかしてこないでくださいねまだタイミング的に今じゃないんで無理ですごめんなさい」
「お前な……」

いろは……あんた照れ隠しもそこまでいくともう職人芸だよ……。

しかも、ちなみにここまで比企谷先輩の頬つぺたにずっと手をあてたままだからねっ!?

そつちを照れ隠せよっ！

「つて！いつまでもこんなところでバカやつてる場合じゃないですよっ！遅刻しちやいますよ遅刻！早く行きますよっ」

「じゃあまず俺の顔からこの手を離せ」

「しよーがないですねー！……んじゃ、えいつ」

「だからお前はなにすんだよ……」

ようやく手を離れたかと思っただら今度はポケット強襲だよ……マジでイチャイチャカップルかよ……爆発すればいいのに……。

「おおお……温かい」

「人のポケットで暖を取るんじゃありません！おいつ！離せっ」

「いいから行きますよー！ホラホラっ」

「このまま校舎入んのかよ……」

ピッタリと寄り添いながら……いや、いろはがウザがる比企谷先輩にピッタリくつつきながら、そのまま昇降口へと向かう二人。

そっか……そうだよね。

あざとい小悪魔生徒会長一色いろはともあろう者が、あの程度の逆境なんかで下を向いたままのわけないよねっ！

うん！例えほんのひととき俯く事があるうとも、やっぱりあんたはそうやってあざとくしたたかに前を向いてるのが一番似合ってる。

ふふっ！私の友達一色いろははそうでなくっちゃねっ！

私はそんな、とつても凸凹でとつても素敵な二人の先輩と後輩の仲睦まじく並んだ背中を、いつまでもいつまでも見送るのだった……！

カンコーン………

……え？

ちよつと？今チャイム鳴り終わらなかつた……？

やっぱあああああいつ！

え!?なにこれ？私が遅刻すんの!?

私、家堀香織は、本日二月一日、今まで必死に築き上げてきた皆勤賞をついにこの日手放すのだったっ！

いやんなにこのオチっ☆

おしまい

【ifバレンタイン編・序章】その日私の友達の運命の歯車が回り始める

「ねーねー、今度の日曜日、みんなでウチでお菓子作りしない!？」

いろはこの唐突な提案により、私達1年C組トップグループ4人+オマケ1人によるお菓子作り大作戦が決行される事となったのが今から数日前。

私、家堀香織を含む美少女5人組は、グループの中心である友達の一色いろはの家に大集合し、甘いスイーツバトルの開幕を今か今かと心待ちにしている最中なのである！

いやただのお菓子作りの練習会ってだけのお話なんですけどね☆

刻は2月半ば。

そう。お菓子作り練習とは名ばかりの、恋する乙女達の一大イベント！バレンタインチョコ作りの練習&作戦会議なのであるっ！

× × ×

「ホントに私まで参加しちゃって良かったのかなあ？私いろはちゃんち初めてえ！」

参加しちゃって良かったのかなあ？……だと？

お前、いろはのあの提案聞いた瞬間、仔犬みたいにいるはに懇願の眼差し向けてたじゃんよ。

「私あんまり料理得意じゃないから去年は市販品しかあげられなかったんだ〜！いろはのご教授楽しみ〜っ！とも君喜んでくれるかな〜」

お前は豊満バディにチョコ塗りたくってリボンでも巻いてろよ。

二人でチョコまみれになりながら爆発しろ。

「私と香織は別に来る意味無かったよねー。うちのファンにでも配っちゃおう?……いや、んなのチロルでいっか」

うっさい。余計なお世話だ!てかチロルさん舐めんな。

それに私は、ちよつと渡そうかな……?とか思ってる人居ますしー

!

あくまでも単なるお礼ですよ!?!本とか借りちゃったりしてるしさっ!

ま、まあ誰に?とはこの場では言いませんけどもっ!

うーん……でもさすがに手作りはやり過ぎかも……いろには絶対言えないし……

「まああげようがあげまいが、お菓子作りって楽しいし女子力アップで男ウケいいし今後絶対役に立つよーとにかく始めよーっ!」

どう考えても後者の理由でお菓子作りを趣味にしているいろはすの掛け声で、私達の甘いスウィーツバトルが開幕するのだった。

× × ×

「ところでみんな普段料理とかする?腕前に自信ある人々」

「私結構自信あるかもお!たまにクッキーとかケーキとか自作しちゃうしい!パパもすっごい喜んでくれるよお?」

おっと!元女王様もどきが意外な女子力を発揮っ!

こいつ意外と乙女ポイント高かったりするんのかな……

ちなみにパパってリアルなほうですよ?

……あ、こいつこいつ見えて恋愛脳レベルは小学生クラスだから心配ないか(笑)

「さっきも言ったけど私は……」

だからお前は塗っつけ。

「乙女レベルの低いこちらは言わずもがな……だね」

いやだから紗弥加さん?さっきから私を仲間に取り入れようとし

ないでっ!

でも……

「ええ。言葉もございません」

はいはい乙女仕事してませんよー。

「じゃあ普段から経験あるのは恵理ちゃんくらいかー。でもせっかく集まったのに、チョコ溶かしてハート型の型に入れて固めただけの手作りかつこ笑いを、『はいっ♪手作りチョコだよっ☆』ってのは痛いもんなー」

てかあんたの『はいっ♪手作りチョコだよっ☆』って言い方がすでに手作り感満載ですよ。

でも確かに……! 既製品溶かして固めただけのモノを手作りとたまう女の痛ましさは異常。

それを貰う男も対応に困るっての!

「やっぱ手作りチョコといえば、簡単なのに手が込んでるように見える代表格のアレがオススメかなー」

「うん。そーかもお」

料理出来ます乙女組が顔を見合わせて頷き合っている。

チッ!ちよっと乙女が仕事してるからっていい気になりやがって襟沢め!

「と、言うワケでー、みんなにはトリユフ作りに挑戦してもらいまーす」

ト、トリユフ!?あれって簡単なの!?

サボリ乙女に定評のあるこの私にも作れるのかしらん?

× × ×

結論から言うと、トリユフってかーんたんっ!

「まずはお湯沸かしてチョコ溶かしまーす」との号令のあと板チョコを熱湯にブチ込んだ紗弥加のお約束があったり、なんにも考えずに溶けたチョコに生クリームをドバドバ入れすぎてチョコレートドリン

クを作り上げてしまった智子を尻目に、なんと私の作ったトリュフは超キレイに仕上がったのだっ！

いやなんてーの？

『一色いろはの友達の私が意外と乙女な件について』

やばいもう1作書けそう。

うん！食感も大変よろしく美味しゅうございます。

美味でありますう〜！

いやん私ったら興奮しすぎ！かおりんがグルコサミンを大量摂取してメルヘンチェンジしちゃう勢い。

でもさすがにお菓子作りが趣味と公言してるだけあって、いろははちよつとレベルが違うな。

私達……主に紗弥加と智子が苦戦を強いられている中、自分は自分の何種類かのチョコ菓子をテキパキと作っている。

そしてその脇にはお菓子に練り込んでいるのであろう千葉県民御用達のあのエナジードリンクが数本。

そのお菓子って美味しいの？

いろはすにはかなわないものの、襟沢もなかなかの手際でチョコ作りを進めている。中西くんにもあげんのかね〜？

彼は今ごろ抜け殻のようになってるから、意外とチャンスかもよお？

ま、まさかあんたまであの先輩にあげようとか思っていないよね!?

まあグラスハートの襟沢には無理か！なにせ敵はひとりひとり魔王軍みたいなもんだからね☆

てか私は渡せるんだろうか？バレたらマジやばいつ。テヘツで誤魔化せられないレベル。

そうして私達は、紗弥加と智子の作った危険な香りがする“モノ”以外のチョコをお互いに味見しあいながら、甘いスウィーツバトルは

終結するのだった。

うん！紗弥加は別にあげる予定がないからいいけど、智子は本番までにはもつとガンバレっ！リアルに塗ることになっちやうよっ（ゲス顔）

× × ×

「ふうっ……お腹いっぱい……」

甘いもん食べ過ぎてみんなグツタリ……

なんだか最終的にはいろはのチョコの味見をする会みたいたった事、今気付いた。

はっ！まさか元々それが狙いだったの!?

いろは恐ろしい子！

お口直しに温かいストレートティーを飲みながらみんなであまり放課後ティータイムを過ごしていると、さつきから黙り込んでいろはがふうっつと深く深呼吸をすると、急に佇まいを正して口を開く。

「えー……皆様に報告があります……！本日集まって貰ったのはほかでもありません……！」

いや、ほかでもないも何も、目的はチョコ作りだろうよ。まあ味見させるのが真の目的なのかも知れないけどさっ！

しかしいろはは顔を林檎のように真っ赤にしながらも、真剣な顔を私達に向ける。

んじゃあ、茶化すわけにもいかないか。私達は顔を見合わせて頷き合うと、いろはは向き直った。

みんなの視線が集まったのを意識したいろはは、そっと目を閉じると決心したように「うっしっ！」と小さくガッツポーズをし、みんなの目をしっかり見てから語りだす……

「……実は……今、わたしには……好きな人が居ますっ……」

うん……だろうね。

「……それはみんなが知ってる葉山先輩とかなんかじゃなくて……もっとカッコ悪くてもっと情けなくてもっと嫌われもので………そしてもっともっと素敵で優しい人ですっ………」

知ってるっの。

「てかいろは今さらすぎー。まさかバレてないとかトボけたこと考えてなかったよなーっ」

真つ赤な顔で泣きそうになってるいろはを、紗弥加が場を和ませるように茶化す。

「ホントだよお！私がいろはちゃんにケチヨンケチヨンにされちゃった日から、みんな普通に知ってるってえー！」

襟沢も自身のトラウマを交えさせて泣きそうないろはに笑いかける。

「てかこれでバレてないか思ってたとしたらマジウケるし〜」

のんびり屋の智子の一言で場が一気に安らぐ。

「……うっさいなっ……！バレてることくらい分かってるっのっ！

……ただちゃんと口に出すのは初めてだからっ」

なにこの恋する乙女は。

そんなにモジモジしてないで、もっといろはらしくシャキとしなさいなっ！

だから私はこう口にしてやった♪

「んじゃあいろはさん！そんな愛しき想い人のお名前を、ここに発表していただきましょーっ！」

「いえーいっ」「いえーいっ」「いえーいっ」

私達4人の顔を恥ずかしそうに見つめコホンと一発咳払いっ。

ふう〜つとため息をついて顔をあげるとにひつと笑う。

「わたし総武高校1年C組生徒会長一色いろはは、二年F組奉仕部備品のっ、比企谷八幡せんぱいの事がっ！大っ好きだああああああっ！」

真つ赤な顔で涙に濡れながら、私達の友達は私達の前で初めてそう高らかに宣言するのだった！

いや備品って！

× × ×

今いろはは目の前で激しく後悔している。

元々私達に所信表明演説をするつもりだったにしても、涙ながらに叫ぶつてのはやり過ぎだったらしい。しかも自宅（笑）

「うう……盛り上がりすぎてやっちゃった……」

いろはのお父さんもお母さんも私達に気を遣って別室に行ってるけど、確実に自分の娘の魂のシャウトを聞いてるしね！

「ま、まあやっちゃったもんは仕方ないじゃん？ 私達も面白いもん見せてもらって満足だし！」

紗弥加……追い詰めんなよ……

「うう……」

真つ赤ないろはすはトマト味？

いいえ、いろはすはトマト味でも透明です。

よし！とりあえず聞いてみるか。なんで急に宣言する気になったのか。

「で？わざわざ宣言したってことは、ついにバレンタインでなんかつるつもりなの？」

「うーん。まだ分かんない。あまりにも敵が強すぎるからさ……先輩にとつての本物は……わたしじゃないし……でも本物になりたいし……でも先輩には本当の本物を手に入れてもらいたいし手に入れさせてあげたいし……」

本物……か。

そういえば度々出てきたワードだよね。

クリスマス前の、葉山先輩に告白する前の情緒不安定だった時にも言ってたし、比企谷先輩との夫婦漫才の時も言ってたっけ。

よく分かんないけど、比企谷先輩というは……違うか。比企谷先輩「達」というはにとつて、特別な意味をもつ……そんな言葉なんだろう。

「だから……自分でもどうしたらいいか分かんないんだ……負けたくないけど……でも負けることが先輩にとつての幸せなのかな……とか」

いろはが……あの一色いろはが相手の為に身を退くつての!?

「いやまあ、ほぼ負けは確定してるから、負けることが……なんて偉そうなこと言える立場じゃないんだけどねー」

やめなよいろは……そんな痛々しい笑顔すんの……

「端から見てもあんなに頑張つてたのに、戦う前から諦めちゃうの……?」

「諦めたくなんか……ないよ……先輩にとつての本物はわたしじゃなくても、わたしにとつての本物は先輩なんだもん」

だつたら……

「今度のバレンタイン、生徒会主導でイベントやるんだ……で、いつものように先輩には助っ人をお願いしてる。その結果がどう転がるのかなんか全然分かんないけど、それでも……それでもこのバレンタインで、なにかが変わりそうな気がする。わたし達の関係性とか色々。なんにもしなきゃこのまま終わっちゃういな気がするんだけど、だからこそ……わたしらしく最後まで悪足掻いてみたい！」

とつても不安そうに、でも精一杯の気合いを込めてそう宣言するいろは。

「……そっか。がんばんなっ！」

そして私達はいろはに向けて最大級の笑顔に向けて、グーっ!と親指を立てた!

「安心しなっ!骨は拾ってあげるからっ！」

「ひびくっ!」

恋する乙女達の希望と絶望を乗せて、時間は無情にも刻を刻み続ける。

バレンタインまでわずか数日。ついに……ついに運命の歯車が動き出す……！

続く

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する①

「お料理教室〜!?!」

私、家堀香織と愉快的仲間たちは、いろはの謎発言に声を合わせて驚いていた。

「あれ？最初に言わなかったっけー?……そ！例のバレンタインイベントは、お料理教室という形で落としこまれましたっ！」

なぜかドヤアつな顔で私達を見渡すこの女は、一年生にして小悪魔系美少女生徒会長の名を欲しいままにしている（欲しがってるとは言ってない）、私の友達一色いろはである。

時は2月。

男も女も坊っちゃんも嬢ちゃんも、お爺ちゃんもお婆ちゃんも浮き足立つ事に定評のある、あのバレンタインデーまであと僅かと差し迫ったある日の事であった。

× × ×

確かにいろはんちで手作りチョコ練習会をやった時に、生徒会主導でバレンタインイベントをやるとかって言ってたけど、なぜそれがお料理教室になった!?

ここ最近そのイベントの為に色々と掛けずり回ってるみたいだったし、すっごい張り切ってるのは目に見えてはいたけど、お料理教室とはちよつと……てか大分予想外。

「生徒会主導でのバレンタインって、確かにどんなことやんのかは謎だったけど、なんでそうなったの?」

私達を代表しての紗弥加の問いかけに、いろはが答える。

「まあそもそもこのイベントの発端が、チョコを絶対に受け取らな

いって宣言してるある男子生徒に、どうやってチョコを食べさせたらいいか？つて、ある女子生徒から奉仕部に依頼があつたからなんだ」

あ、そーなんだ。生徒会主導でバレンタインイベントとかつて聞いた時点で、すっかりいろはの公私混同イベントに生徒会と奉仕部を無理やり巻き込んだモノなんだろうなって勝手に思ってたよ。

「へえ〜？そおだったんだあ！……で？どこのだれが葉山先輩にどうしても食べて貰いたいなんて言ってるのお？」

いろはが一応ボカしたんだから、お前も一応ボカせよ。

「え？……いやあ、それはその……奉仕部への依頼人だし、わたしが名前言っちゃうのはマズいでしょ……」

「そりやそつかあ！でも超気になんだけどお！」

「でもそういう理由なら、私がとも君誘って一緒に行つてもすつごい場違いだよねー」

え!?あんたマジで連れてくるつもりだったの!?

どんだけお花畑なのよ……

「二応他の学校の生徒も呼んでるけどね。海浜総合の生徒会さん達。でもまあ生徒会主導って言っても、総武高側としてはイベントの理由が理由だから、内々で執り行いたいとは思ってるんだけどね。葉山先輩が参加とかつてなつたら参加者が半端なくなつちやつて、わざわざそんなイベントやる意味無くなつちやうじゃん？」

そりやそうじゃ〜。葉山先輩がチョコを受け取らない宣言してるのつて、余計ないざごぎが起きない為の措置だろうからね〜。

自分がチョコ受け取る〓女共がいざごぎを起こす。

それを理解していて早々にチョコ受け取りません宣言するとかマジクール。

てかくれようとしてる女がわんさか居る前提の思考にお腹いっぱい！

やめてっ！俺の為に争わないでっ！

いやマジどこの幸せの国の王子様だよ。もう白馬通学してこいよ。ま、子供の頃からバレンタインは苦勞してたんでしようけども！

でもそんなんだったら、モテる自分を抑えりゃいいじゃん。

まわりに優しい顔を振りまいたり茶髪にしたりしてルックスにも気を遣ってる時点で、なんか違うと思うんだよね。そういう乙女心を無視した平和思考がさ。

だつたら丸刈りやらモヒカンなりにしとけよと。

モヒカンは無い。

おっと！いけないいけない！久しぶりに葉山デイスりに花が咲いてしまいました☆

ま、それはそれとして、まさかの海浜さん!?

クリスマスはあれだけ苦労させられてたのに、よくまた合同でやる気になったもんだ。

「よ、よく海浜さんとまた合同でイベントやる気になったよね……?」

「なんか理由あんの?」

「ん?えへへ♪金銭的な問題でねっ!」

えへへ♪♪♪って言うような可愛らしい理由ではありませんでした。っ。

「まあそういうわけだから、このイベント自体あんまりおっぴらには出来ないんだけどお……」

てかそんな理由の内輪イベントが、よく生徒会主導で通つたな……そのイベントで生徒会予算が使えるって、とても不思議すぎて私気になります!

でも恐いから聞きません!なんか色んな闇の力が動いてそうなんですものっ!

「ちよおつと人手が足んないんだよねー。二人くらいでいいんだけど、誰か参加してくれる人ー!」

いやいや急に参加者大募集!?!少しいいから前フリちようだい!

「えっと、……奉仕部が手伝ってくれるんじゃないの?」

紗弥加が一瞬私にチラリと目を向けてからいろはに訊ねた。

ぐっ……

「うん。わたしもお菓子作りは得意なんだけどさ、雪ノ下先輩とかプロ級なんだよねー。だから講師的な事はやってもらっただけど、それ以外の事前準備くらいはたまには先輩たちにお手数お掛けしないようにわたし達だけでやろうと思ってるさっ」

へえ〜……この子こんなんでもちやんと成長してんのねえ！意識低い生徒会長代表はもう卒業かしらっ!?

「それに……えへへ〜っ……ちよつとくらいはやれるんだよっ!?!つてとこ、見てもらいたいし……」

いろはがにへらくつとはにかむと、その他三人が私にバレないように可哀想な視線を横目で向けてくる……

いやあああああつ！もうやめてえええつ！あんた達の視線バレバレですからあ！

てか襟沢でめーは見過ぎだ。

あの日以来、私は針のムシロっ☆

「……………あれ？どうかした…………？」

襟沢あ！あんたが見過ぎだから、いろはに怪しまれてるじゃないのよお！

お前あとで体育館の裏な？

「ん？んーん？べべべ別に〜っ？」

ヒイツ……いろはがとつても訝しげ！香織っ！話題をつ！話題を反らせ！

「と、ところでその不足人員なんだけど、さつきからいろはのチョコ目当てで男共が盗み聞きしながら遠巻きにそわそわ見てんだけど、あいつらは？」

「んー……却下。邪魔」

たったのふた単語で一刀両断されました。

ホント、ちよつと前まではお姫様にあんなに愛想を振りまかれてこき使われて喜んでたのにねえ〜……可哀想につ……まあ私も大概可哀想ですけども〜！

いやん私くじけない☆

× × ×

「で?で?どーかな?みんな来れる!」

私はとてもじゃないけど行けません。

断ろうとすると……

「とも君が居ないバレンタインイベントに参加するとか無理」

マジでお前とも君以外のセリフないのかよ。

「私もその日は無理かな。放課後兄貴と予定あんのよね」

男はしばらくいいと言つときながら兄貴は大好きだなあ、相変わらず。

これだから千葉の兄妹は……

「わ、私は雪ノ下先輩が来るならちよつと……」

あんたまだトラウマ抱えて生きてんの!?

「んー、でも雪ノ下先輩は講師で忙しいし、そうでなくとも由比ヶ浜先輩に付きつきりになるんじゃないかな。由比ヶ浜先輩の料理の腕前は壊滅的らしいっ」

ニヤリと満面の悪顔をするいろは。

おお……ようやく勝つてるとこ発見できて嬉しそう!

「それにさあ……」

そしてヤツは襟沢を畳み掛けるッ!

「三浦先輩……来るけどー?」

「私行くー!」

即落ちである。

まあそりや裏でこつそり三浦様とか言ってるくらいだしね。

てかさ、ある女子生徒からの依頼↓葉山先輩は必ず参加する↓三浦先輩も参加する↓ある女子生徒とは?

決定事項じゃん!!

ま、まあお近づきになるチャンス到来で良かったね、襟沢っ!

よし。これで犠牲者は襟沢に決定つと。

「香織はー？こないだ一生懸命チョコ作りしてたし楽しそうだったから準備さえ終われば結構楽しめるんじゃない？香織来るよねー？」
にこぱーつと私に微笑みかけるいろはですが、地獄の門番に見えました。

あ……れ……？私、なんか疑われてるのん……？

単なる被害妄想ですよ？でも、もしここで無理に断ったりして余計に怪しまれたら……

私はガクブルしながらこう答えたお！

「か、かしこまつ……☆」

笑顔のいろはすと憐れな子鹿を見つめる紗弥加達三人の視線を受けながら、私のお料理教室への参加が決定した瞬間でした。まる

続く

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する②

私は今、学校から程近いコミュニティーセンターに来ている。

うん。なんだかここって懐かしいなあ……！

「おいつ！稲村そこ邪魔っ」

あのクリスマスイベント以来だもんね。

ま、もつとも私はイベント当日に一度来たっただけで……

「うっせーなあ！そっち通りやいいだろうが！」

いろはは毎日ここに通いつめてたんだもんなあ……

あの時は毎日大変そうだったなっ、いろはのやつ。

「副会長……稲村先輩……あの……仲良く……」

でもその甲斐あつてか、クリスマスイベントは大成功だったけなっ

！

うん！あれはホントに良かった。

「……どうせ藤沢さんは……本牧の味方なんですよ……どうせ俺なん

てさ……」

あれだけ揉めてたのに、海浜さん側の用意したバンドやらなんやらの

演奏では会場中盛り上がったし……

「そんな……私べつに副会長だけの味方なわけでは……」

でも何よりも良かったのは、やっぱあの演劇よね！

「おい稲村！藤沢さんを責めんじゃねえよっ！」

あの主役を演じてた小学生の女の子、すっごい可愛かったし、

「ちよつと……副会長も稲村先輩も書記ちゃんもいい加減にしてく

ださいよお！……あー……マジ面倒くさっ……」

天使達のキャンドルサービスなんて、ホント幻想的だったもんなあ

……！

「いろはちゃんも落ち着いてよお……香織ちゃあん！どおにかし

てえっ」

あれ？なんかエリエリが一人で騒いでんな……私は今、煌びやかなクリスマスMASの思い出に浸ってんのよ。後にしてくんない？

「そんな……一色さん！私はべつに……」

そうそう！特にあのキャンドルサービスが…

「おい一色！別に藤沢さんは悪くないだろ」

「どうぞ会長！藤沢さんは関係ない！」

……

「あーはいはい……はあ……もうマジ面倒くさい……早く来てよー、せんぱーい……」

だ、だからあのキャンドル……

「香織ちゃあん！私お手洗い行ってくるう！」

だから……その……

「本牧先輩も稲村先輩も、一色さんを責めないでください……」

……あー、もうやだ……もう帰りたい……

「なっ！……お、俺は会長を責めてなんかないよっ！？沙和子ちゃん！」

「そうだよ！別に一色を責めてるわけでは……てか本牧、お前どさくさに紛れて急に沙和子ちゃんじゃねえよ……」

「あ？」

「は？」

「またそっから始まんのか……？せんぱーいつ……」

私、家堀香織は、今まさに修羅場に立ち会いながらも負けじと現実逃避をしながらイベントの準備をしている真っ最中なのであるっ！

てかなにこのどうでもいい修羅場……漫画でもアニメでもドラマでも、私いまだかつてここまでどうでもいい修羅場なんて見たことないんですけど。

私、今こんなにもどうでもいい修羅場に巻き込まれてるほど心の余裕がないですよねー……

なにせ自分自身が修羅場一歩手前なんですもの☆

いやんまじ笑えなーいつ！

× × ×

うわっ……早く準備しないと参加者が会場入りしてきちやうじやんよ……

私はトイレに行ったまま一向に帰ってこない襟沢の首根っこをひっ捕まえてホールへと優しく引きずって来ると、優しく睨み付けて優しく作業をさせた。

しかしこの雰囲気はよろしくない。マジでいつまで睨み合ってるのよ、あのモブ二年生二人組……

ため息を吐きつつパタパタと走り回っていると、留守番をさせられていた猫がご主人様のご帰宅の気配にピクリと反応するかのよう、いろはが急に色めき立った。

するとヤバイキャッチコピーの書かれた手作り感満載のポスターの束を胸に抱くと、あとよろしくー！とキラキラ笑顔で玄関の方へとダッシュで駆けていった。

てか未経験者歓迎！まではまだ分かるけど、ノルマなしとかアットホームな雰囲気とか独立するためのノウハウとか一体どこに向かってんのよいろはす。

今日は将来社会に出た時いろはの部下にだけは絶対にならないと心に誓った記念すべき日でした。

それにしてもおいおい会長様よう……この雰囲気を放置して逃げるのかよ……と玄関の外へと目をやると……

どくんっ……

いやいやどくんっ……じゃねーよ。いやまあ確かにどくんとしちゃいましたけどねっ！テヘツ☆

そこには会場入り時間まではまだかなりあるというのに、やはり可愛い後輩が心配なのか奉仕部の皆さんが中の様子を覗いていた。

てかいろはのあの笑顔は、先輩が来てくれた嬉しさ十この場から逃げ出す気満々な心の表れでしょ……あのクソ会長め……！この雰囲気放置して行っちゃうのかよ！もう帰っちゃおっかな……

あ、やばい……比企谷先輩と目が合っちゃった……私はペコリと頭を下げた。

あ、比企谷先輩がちよつと気まずそうに私にだけ分かるくらいにチヨコンと片手をあげてくれた！

よーしっ！頑張るぞー！

キリンさんが好きです。でもこんな現金な自分のほうがもっと好きです☆

× × ×

先輩たちにポスター張りの指示をして楽しそうにキャツキヤウフフしてる寒空の下のいろはを見ながら、暖房の効いたコミセンの中で押し黙って作業する寒々しい気持ちの私……

こっちは室内で暖かいんだもん！この二月の寒空で作業してるいろはなんて、ぜ、全然羨ましくなんかないんだからねっ！

はっ！いろはが近くのコンビニから買ってきたホットドリンクを皆さんに配ってる……！

はっ！千葉県民御用達のエナジードリンクをニンマリ顔で比企谷先輩に渡してる……！

ちくしよー！血涙が滲み出る程に羨ましくなんかないんだからあつ……！

最近めつきりとご無沙汰だった謎のツンデレキャラが連発で私の脳内を侵食していると、そこへ新たな一団がやってきた。

どうやら本日の主役の葉山御一行様がご到着したようですね。

葉山先輩を見とがめると、急にいろはが営業用スマイルを張り付けて葉山先輩に突撃していった。

あいつ……まだそれやんの……？もう逆効果にしか見えないんだけど……

もう引くに引けない状況なのか、その状況から急に比企谷先輩に告白してサプライズ演出を狙ってんのかは分かんないけどもね。

そんないろはに獄炎の視線が突き刺さってますね。でもいろははまったくもって意に介しませんね。

あいつマジっべーわ。

てか私、なにげに三浦先輩と初遭遇じゃね!?

まあ会話するような事もないだろうけど、なんか緊張してきたー……

そしていろははそんな三浦先輩と争うような格好で葉山先輩を両脇から挟むと、コミセンの中へと誘い込もうとしてる。しっかしなんでもそこまで挑発するかね……

「はあく……三浦様……」

後ろから襟沢の艶めいたため息が聞こえてきたんですけど、うん、聞かなかった事にしよう!

なんか今にリアルにお姉様な世界に突入しそうで割と本気で恐いんですが。

てかこいつマジでどこポジション狙ってるんですかね? はい。オチ要員です。

× × ×

そのままみんなでコミセンに入ってくるのかと思いきや、葉山先輩がいろは達を先に行かせて、まだ外に居る比企谷先輩となんか話でもあるみたい。

あの二人って、本当にどういう関係なんだろう?普通に考えたら接点なんてひとつも無さそうなのになあ。

なんか近くでぐ腐腐つとかブハアとか聞こえてくるんだけど、たぶ

んそれは足を踏み入れたらいけない世界なんだなと思い、あえて気付かなかったことにしようと思いました。まる。

ちなみに前を通り過ぎる三浦先輩を見ながらモジモジはあはあしてる変態も居たけど、そんな二つの危険な世界の入り口を見て見ぬ振りをしながら、調理室に向かう一段からいろはをフィッシングした。ちよつとお話があるので！

階段をのぼり調理室に向かう道すがら、一団から少し離れた位置でこそつと耳打ちする。

「ちよつといろは！あんたいつまで葉山先輩にちよつかい出してるフリしてんのよっ！こないだ頑張って悪あがきしてみるって言ってたばっかじゃん！」

まったく！こっちはそんな比企谷先輩に絶賛横恋慕中で悩んでるってのに！

あなたは堂々と告れんだからいつまでもそんな事やってんじゃ無いつての！

……絶賛横恋慕中って……

するといろはは何だかばつが悪そうな表情ながらもぷくつと膨れつつらをした。

「うっさいなあ……わたしだって思うところあるんだもんっ！ちゃんと色々考えてるもんっ！」

なんかいろはがもんもん言っちゃってますね。

自然体で居られる比企谷先輩と不自然体でしか居られない葉山先輩との狭間でキャラ崩壊しちゃったのん？

でもまあ、やっぱ色々と思うところがあんのかなあ……複雑ですものね。私含めて！

キャツ！ちやつかり関係性に私も入れちゃった！

× × ×

早めに来てくれた奉仕部御一行様と葉山御一行様の手伝いもあり、

一階に放置されたままだった割れチョコだの砂糖だのの材料が入った手付かずの段ボール群もようやく調理室へと届く。

マジであざっす！ホントは生徒会のモブ男子のお仕事だったんですよ、そういうった力仕事な雑用は。

いつまでも誰得な修羅場やつてる場合じゃないっての！

「家堀さんだっけ？これはこっちでいいのかな？」

爽やかなイケメン顔を振りまき、葉山先輩達も私達生徒会（いや私、生徒会じゃないですけどもー！）の指示で卓の準備を手伝ってくれていた。

「はい。ありがとうございますー！」

なにげに初接触じゃね？

やっぱ近くで見ると本当に爽やかイケメンさんですわ。その余りにも爽やかな笑顔で悩殺された私は、ふとこう思った。

やっぱりなんだか薄ら寒いと。悩殺されてないじゃん。

この人は、あの人と違って「自分」てモノを持てていないんだろうな……

どんな理由かは知らないけど、なんかそれはそれで可哀想な気がするな。

……だからいろははって、あんなに意固地になってまで、あんなに感情をストレートにぶつけようと必死な三浦先輩を煽ってんのかな？ちよつと一度真正面から三浦先輩を見てみなよ……って。

なんか私いい話に持つてこうとしますけど、でもそんな三浦先輩は、葉山先輩に優しく声を掛けられた私を睨んでいますけどもね？

怖いですっ！

そして襟沢は私の隣でそんな三浦先輩をハートフルな目で見つめ続けてますけどもね？

怖いわっ！

そして違う卓では、いろはや雪ノ下先輩に、戸部先輩が辛辣に扱われて「っべーっべー」五月蠅いですけどもね？

まあ……それはどうでもいつか！

そんな中、私は『やばいつ！比企谷先輩が近く通った！』とか『やばいつ！今見てたのバレちゃった!?!』なんて乙女チックな邪念など持つ事もなく、持・つ・こ・と・も・な・く!!……ほ、ほんとに持つてなんか……ないんだからねっ！

ん！んん！真面目にこのカオスな空間で準備を続けていると、外の方からまた新たな一団がガヤガヤと近付いて来たようだ。

「やあ、いろはちゃん。いやー、よかつ……パートナーシツ……アライアンス……オフア……」

なんか色々長いこと語ってたみたいだけど、なに言ってるのかよく分かんなかったから割愛させて頂きました。

「ですねー、お疲れさまですー」
だっっているはも流してるしねっ。

しかし出会い頭から強烈なジャブをたたき込んでくるね！

これはアレだ。噂のパルスのファルスのルシがパージしてコクーン会長さんだ！

マジで強烈ううっ！

しかし意識高い軍団の本番はここからだっただけだ！

「……ビジネスチャンス……クラウドファンディング……スキーム」
「それアグリー」「インセンティブを還元……メソッド……アーリー……刺さる」「……レモネード……」「……ケース」

……チクシヨウ……ちよつと面白くて割愛しきれねえよっ……
なにがなにに刺さっちゃうの!?!レモネードをケース売りしちゃうの!?

これはもう連続ジャブと言うよりは一撃一撃がKO級の必殺パンチ！

これぞまさに意識高く相手の意識を根こそぎ刈り取っていく伝家の宝刀カタカナデンプシーロールだあつ！
まっくのつうち。まっくのつうち。

脳内後楽園ホールでは熱い実況と観客が一体となり、我らが生徒会長様がどんな反撃を見せるのかの期待半分、まさかこの一試合だけで半年以上費やす（大量の休載含む）のではないかとの不安半分で見守る中、いろいろの出したカウンターパンチは一撃でその場をおさめた。
「あはっ☆そうですよー！すごーい♪」

……………いろは、やっぱあんた凄いよ……………まさかの内容完全無視。
なにが「そうですよねー」なのかなにが「すごーい」のか全然分からん…………

そしてさらになにが凄いって、いろはのそのカウンターに満足したのか未だにフリーダムにぐるんぐるんとデンプシってる海浜さん達。
ああ…………この扱いの仕方です。勉強になりました。

対戦相手じゃなく、まさかの観客の意識を刈り取る攻撃に脳内後楽園ホール中が若干白目を剥きかけていると、デンプシー軍団の中から一人飛び出してきた…………

「あ、比企谷じゃん。やっぱ来てたんだー」
なあっ!?だ、誰!?

なんか他校から飛び出してきたかなり可愛い女子が比企谷先輩に絡みに行っただけどっ!?

てかなんかちよっと私と見た目とか被ってるんですけど!?
なに? 主役交代!?ここにきて私リストラされちゃうのん?

あ、自分にちよっと似てる自覚がある女の子の容姿をかなり可愛
いって絶賛してる所はスルーでオナシヤス。

なんか比企谷先輩を中心に雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩にも絡みに
行ってるんだけど、比企谷先輩達の様子を見るになんか修羅場な空気

感……

まさかここにきて新たなヒロインの登場とは……！くそっ……天然スケコマシめっ……！

なんか向こうの生徒会長も入り乱れての気まずい空気になってんだけど、新たなヒロイン候補が比企谷先輩に笑顔で「んじゃ、またねー」と手を振りながら海浜メンバーの中に戻ると、とりあえず一応その場は終息した。

あとからノコノコ出てきて笑顔でまたねー！じゃねえぞコノヤロウ。

いやん私ひとの事いえなーいっ！

とにかく気になって仕方ないから、チヨイチヨイというはを呼び出しヒソヒソと小声でお話するよ？

「ちよ、ちよっというは！だ、誰よアレ!?なんか比企谷先輩と超仲良さげだったけど!?」

なんか私必死すぎじゃね？

「あー、折本先輩ね。なんか先輩とは中学の同級生らしいよー」

妙に淡々と語るいろはす。

「でさー、何度聞いても教えてくれなかったんだけどさー、あの二人中学の時になんかあつたらしいよー」

は!?なになんかあつたつて!?なにそれ由々しき事態じゃないのよっ！

てかそんな情報、なんでそんなに淡々と語ってんの!?この子つたら

！
あんたがそんななんじゃあねー！というはに視線をぶつけようと横目で見ると、なんか目の光彩失って闇落ちしてましたっ。

あまりにも恐すぎたのでそつと立ち去りましたっ。エへっ☆

× × ×

あれ……?待てよ……?!

ちよつと私と似てる女子が昔比企谷先輩となにかあつたつて言うんなら、これ私にもワンチャンあんじやね?……うへへ……

なんてことは決して頭の片隅でも一切まったく考えたりせずに、闇落ちしたままいろはが奉仕部の元へと帰っていくのを見ていたら……あれ?目の錯覚かな?なんか一人増えてない?

その増えたらしき一人を見咎めた闇落ち小悪魔は、一気に浄化されて現実に引き戻されたようです。

あの危険な目のいろはを一気に現実に引き戻した天使は城廻先輩だったようです!

いろはつて城廻先輩苦手なんだよね。

自分が作り上げたなんちゃってほんわかゾーンを、天然ほんわかゾーンで全部持つてかれちやうから。

養殖が羨望の眼差しでどんなに空を見上げてても、悲しいかな天然の破壊力には歯が立たないのですよ。

苦々しい顔をしたいろはを遠くから見えていたら、城廻先輩が「頑張るぞー!おー」と手を上げた。

なにあの癒し空間!ほんわかするやろーっ!

でもいろはは白い目で見てますけどね。

懲りずにもう一度「おー」とやる城廻先輩に、恥ずかしながらも「お、おー」と手を上げた比企谷先輩に死ぬほど悶えました。まる。

……あー……もう私いつ死んでもいいやー……比企谷先輩が可愛すぎて生きてるのがツライ……

なかなかの時間、一人気持ち良くトリップしていると、そこはかない圧力を感じて現実に引き戻されました……

「ひゃっはろー!ごめん、遅れちゃった?」

我に帰った私はそちらへ目を向けた。

うつわ〜！なにあの綺麗なお姉さん……何者？

てかなんであんなに綺麗なお姉さんにすごいプレッシャーを感じたんだろ？と隣を見ると……………

襟沢のバイブ機能がぶっ壊れていた……誰かあつ！襟沢のバイブ機能をOFFにしてあげてえっ!?

どうやらあの綺麗なお姉さんの登場により、このノルマがなく、アットホームな雰囲気、将来独立するためのノウハウを得られるというお料理教室は、この危機的クライシスにより更なるリスクで危険なデンジャラス空間へとメタモルフオーゼ級の変身を遂げ、もう私達にはイニシアティブな主導権は握れないみたいです☆

続く

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する③

ひゃっはろー。その世紀末な雄叫びと共に現れた美女に、私は戦慄していた。

だって、となりでマナーモードになってる襟沢もさることながら、あの奉仕部のお三方が同時に顔を強張らせたんだもの。

これはただ事じゃあない……

「というわけで、今日の特別講師のはるさん先輩ですー！」

「どもどもはるさん先輩です」

いろはお株を奪うかのようなあざとい返し、なかなかやりおるわ。

ふむ。どうやら普通にいろはが呼んだみたいだ。城廻先輩ともしこやかに会話している所から、総武高校の卒業生なのだろう。

超美人で人当たりも良く、人望もありそうなこのはるさん先輩とやらに、私は一体なにを恐れているのやら……なんて思ってたら、比企谷先輩がいろはをチョイチョイ手招きして不吉な事を口走りなされた。

「なあ、なんでこの人呼んじやったの？」

……うん。やっぱりかなりの危険人物のようです。

未だぶるぶると震える襟沢を横目で見ながら、このイベントはただ平和的には終わらなそうだな……と不安でいっぱいの家堀香織が現場よりお伝えしました。

それではスタジオにお返ししてこのまま帰りたいたい☆

× × ×

しかし意外や意外、お料理教室がいざ開催されると、命のやりとりの食戦が始まるような事もなく淡々とイベントは進んでいった。

開始直後は私達の近くを通ったはるさん先輩が

『あつれー？エリエリちゃんだー。こないだ急に帰ったって聞いてビックリしちゃったよ。また今度一緒にいろはちゃん手伝おうね』
なんて声を掛けられて肩をポンと叩かれた時なんかは、ピトー様と初対面のラモットさん状態でヤバかったけど、そのあとはこちらに特に近寄って来るでもなく城廻先輩と戯れあったり雪ノ下先輩や比企谷先輩にちよっかい掛けに行ってるだけで、こちらとしては安全らしい。

もつとも襟沢はずつとマナーモードのままですけどもつ。

しっかしまさかあの美女がああ雪ノ下先輩のお姉様とはねえ。そりや恐ろしいオーラを放ってるわけだ……

しかもいろはが前に比企谷先輩の話をしてる時に出て来た年上の美人さんってあの人の事だよね！どう見ても比企谷先輩の事お気に入りみたいだしっ！

ちよつとマジで比企谷先輩の周りどうなってるのよ！？割り込む余地とかないじゃんっ！

いやー、私の略奪愛は前途多難ですわ……って別に略奪する気なんて無いですよ!?

ふふっ！私は待ちの戦法ですから。

たぶん永遠に待ちぼうけです☆

グスンっ！

× × ×

そんなこんなで料理教室は更につつがなく進む。

ふむ！前はトリユフとかクツキーとか作ってみたけど、今日はガトーショコラかあ。

我々は三年待ったのだ!!と叫びながらチョコをテンパリングして

ると……あ、もちろん心の中でだけダ・ヨっ？

比企谷先輩が暇そうにウロウロしていた。

比企谷先輩も少佐の熱い名言を脳内で叫んでるのかな？っ？なんて思っただけでチラチラ見ると（チョコ作り集中しろ私っ）、比企谷先輩がいろはのお菓子作りの手際に感心した様子で、へえ……と声を掛けしていた。

わ、私には!?（乙女仕事すんな！私っ）

「お前、マジで料理得意なんだな……」

するといろはは恨めしそうにジト目で先輩を睨めつける。

「先輩、わたしの言うこと疑ってたんですか」

まあいろははみたいな今どき女子高生が料理得意とかにわかには信じがたいしね。

むしろ「やだっ！わたし包丁恐くっ☆」とか言っただけでそうまである。

「いや、そうじゃないけど。……なんかすげえなと思ったただけだよ。結構頑張ってたんだな」

頑張ってる？……あ、そっかあ、比企谷先輩はいろはが葉山先輩にアピールする為に料理とかも頑張ってるって思ってたんだもんね。

まったく！いろははホントおバカよね！

素直にアピールすれば、その頑張りが全部自分に向けられてるんだって、先輩も感動するってのにさっ！

するといろはは目を真ん丸にしてビツクリしてた。

ホントあの子って比企谷先輩に急に褒められるのに弱いよね！

「なんですか口説いてるんですか甘いものだけに甘い言葉を囁けばいいけるんじゃないかとかちよっと考えが甘いのもう少しよく考えて出直して来てくださいごめんなさい」

予想通りに照れ隠しの往年の名芸・振り芸の発動ですね。

でもオイオイ……「もう少しよく考えて出直して来て」って……断るどころか告白の出直し要求しちやってるよっ!?!いろははすったら！

いつも通り呆れ眼を向けている先輩のその一瞬の隙をついた衝撃的ないろはの攻撃はこうかばつぐんだ。主に比企谷先輩と私に。

私も大ダメージなのかよ。

「えいつー」

いろはは一瞬の隙をつき、比企谷先輩の口に強引にスプーンをねじ込んだのだっ！

キャーッ！か、間接ちつすよっ！

「先輩、こういう甘いのも、お嫌いですか？」

じつくりと味わわせたスプーンを真っ赤に頬を染めた先輩の口からゆっくりとエロく引き抜くと、お得意の挑発的な笑顔で比企谷先輩に微笑みかける。

その表情は上目遣いで首をかしげるあざと可愛い仕草ながらも、口元はニヤリ小悪魔さを忘れない。

「どうよ？」とでも言いたげに控えめな胸を目一杯に張るその姿は、つねに比企谷先輩専用だよねっ。

「……嫌いじゃねえけど」

「はあ。別に味の感想聞いたわけじゃないんですけど」

照れ隠しで、味に対してなのか行為（好意）に対してなのかわからないような受け答えをする比企谷先輩に、はあ……とため息をつくいろはだが、その眼差しは比企谷先輩の答えを待っている。

「それでも、答えは変わらない……」

「……そうですか」

比企谷先輩の答えに満足したのかご不満だったのかは分からないけどフム……と考える仕草を見ると、にこぱつと先輩に笑顔を向けた。

「参考になりました。じゃ、ちよつと行ってきますね。葉山せんぱーい！」

そう言うときクルリと背を向け、葉山先輩の元へと向かういろは。

しかし私は見逃さなかった！

比企谷先輩に背を向けた瞬間、頬を染めてにへらくつと表情を緩めると……はむっ！とそのスプーンを味見しやがったよあの子！

葉山先輩の元へと向かいながら幸せそうにはむはむし続けると、そのスプーンを大事そうにエプロンのポケットにしまつて新しいスプーンを用意していた……

チクシヨウつ（血涙）！う、羨ましくなんかないんだからねえっ（血涙）！お前らなんか爆発しちやえよおお〜！

しかしいろはが去ったあとの卓では、極寒の眼差しで茶色ではなく超！黒のチョコを味見させようとする雪ノ下先輩と、地獄のかまどから謎の液体をスプーンで掬い迫る由比ヶ浜先輩の恐怖の追撃が始まり、比企谷先輩はリアルに爆発しそうになってました。

ま、仕方ないですね。ええ、胸がスツとしました♪

× × ×

その後現れた平塚先生のおかげで比企谷先輩が救われていると、チツ……さらに新たなヒロインが登場したのです！

その少女は綺麗な髪をツインテールにした超可愛い子で、「はーちゃんはーちゃん」と先輩の事を呼んですぐく懐いていた。

いや、新たなヒロイン候補はそっぢやなくて姉の方だろ。

だって！確かにその姉も比企谷先輩と親しいみたいなんだけど、その少女をはーちゃんに預け……いやいやはーちゃんじゃないだろ！ど、どうしよ!?!私無意識にはーちゃんとか呼んじやったら……! 恥ずかしくて即死！

んん！ん！と、とにかくその姉は比企谷先輩に少女を預けてどっか行っちゃって、今まさに比企谷先輩と少女が超イチャイチャしてんだもんっ！

なにコレ……? 超癒されるっ！

最初比企谷先輩が少女の頬っぺたをぶにぶにと突ついて遊んでたら、今度は「えいつ」と少女が比企谷先輩の頬っぺたをつんつんと突つき返して、今はぶにぶにつんつんと突つき合ってるんですものっ！

はあく……わ、私も交ざりたいっ……なんて素敵パラダイスなおさわりタイムっ……

ぷにぷにつんつん……ぷにぷにつんつん……ぷにぷ……

「……ねえ、あんたなにしてんの」

姉の突然の襲来に比企谷先輩と私は冷や水をぶっかけられた！

いや私は見てただけです！はい。ちよつと妄想では交ざつてました！

心の中で平身低頭土下座してしまうほど、この姉がまた恐いつ！

なにが恐いつて、まだ保育園児くらいの妹にやきもちを焼いてるあたり。

いや、どうやらこの姉も重度のシスコンのようだから、やきもちとシスコンの板挟みな感じかな！

いやんすつごい複雑うっ！

すると幼女は比企谷先輩の腰あたりにひしつと抱き付いて離れない。

さすが幼女先輩！そのポテンシャルを如何無く発揮していらっしやる！勉強させて頂きます！私も幼女になりたいっ！

「ヤーちゃんもやるっ？」

と、なんの穢れもない純粋な眼差しで危険極まりない台詞を吐くと、姉は真つ赤な顔で拒否し幼女先輩をひっぺがし、比企谷先輩と二言三言会話を交わすと雪ノ下先輩達の卓へと加わっていった。

どうしようこのお料理教室……心が休まる時が無いんですけど

……

× × ×

しばらくすると、また新たなる珍客がつ！

それは比企谷先輩を狙うヒロインズ最強のライバル……そう！天使先輩のご登場である！

「八幡！」

ぱあつと純粹無垢な笑顔でとてとてと比企谷先輩に近づくそのお姿はまさに天使そのもの！

城廻先輩と戸塚先輩の二人が居れば、世界は救われるんじゃないかしらっ！

なんかその後ろから「はちまーん！はぽんはぽん」とか聞こえる気がするんだけど、アレ隠れオタク的にヤバイヤツや……

たぶん触れたら私的に地獄を見そうだからオールスルーな方向で……

てかああいうのが居るから私みたいな健全？なオタ（オタクとは言ってない）が世間様からコソコソ隠れなきやなんないんでしようがっ！てか比企谷先輩交友関係特殊すぎっしょ！

どうやら天使先輩は平塚先生のお使いとして、有名高級チョコの差し入れに来たみたいだ。

バレンタインチョコ作りのお料理教室に高級チョコの差し入れとかどんな嫌がらせだよ。まあお高くて普段食べられないようなヤツなんで頂きますけどもっ？

私こう見えても女の子なので。

そういえばはるさん先輩と平塚先生は仲が良いらしく、チョコを酒のツマミにするだのしないだので盛り上がり、「今度飲みに行こうよー」なんて騒いでいたのだが……なんととはるさん先輩の魔の手が比企谷先輩にも忍び寄った……

「あ、比企谷くんも来る？お姉さんたちと一緒に飲もうぜえ」

な！なんですとお!?美人女子大生が健全な男子高校生を飲みに誘うとは、なんとエロ破廉恥なっ！

比企谷先輩！逃げてえ！

すると比企谷先輩は……

「俺は未成年ですよ。酒はダメなんで、オレンジジュースください」

ブフオツ！……比企谷先輩！食べてる時に急にネタを挟まないでっ!?危うく戸愚呂（兄）が口から出ちゃうトコだったわ！

なんか平塚先生プルプルしてるしヤバい人は大爆笑だし、私あの人たちの仲間に見られたくないのよおっ！

私は隠れて腹パンしながらなんとかその危機を脱したのだった

……

なにこのお料理教室……マジで命のやり取りじゃないのよ……

× × ×

しかし今日は次から次へとヒロイン候補が現れる日ですなあ

……

マジでぼっち（笑）だよ、あの人。

しかしこの時香織はまだ知らなかったのだ。

この新ヒロイン四天王の中では、ヤツらなどまだまだ小物……と影でほくそ笑んでいる四天王最強の小学生ヒロインが居るのだという事に……

などと脳内では訳の分からない設定に銀河万丈大先生が素敵な声でナレーションをあててくれては居たものの、当の私は色々ありすぎて精神的に若干お疲れ気味だったので、休憩スペースの自販へとジュースを買いに向かっていた。

すると先にトイレか何かで調理室を出ていた比企谷先輩と偶然にもかち合ってしまったのだったのだっ♪

いやホントに偶然ですから！

「おう、家堀おつかれさん。まさかお前まで来てるとは思わなかったわ」

ひいつ！前にいろはが言ってたけど不意打ちとか超反則！やっぱ
いやっぱいい！！赤くなんなよ私っ！

「おお疲れさまでしゅ……す、比企谷先輩。い、いやー、いろはのヤツ
強引なんで断り切れじゅにちゅい……」

よしっ！よく頑張った私！……いやいや噛みまくってつか
らあっ！！先輩怪しんでますからあっ！

「お、おうそうか。あいつはホントにしゃあねえな……でもまあお前
もお菓子作り得意だもんな」

……へ？

「……………へ？」

「……ああそっういやまだお礼言ってなかったっけな。……まあ、その、
なんだ……家堀に貰ったチョコとクッキー、なかなか旨かったわ。サ
ンキューな」

そういうと恥ずかしかったのか真っ赤になって頭をがしがし掻い
て、ててつと調理室に行ってしまった。

……………反則すぎる……………つ☆

うわあああつ！マジで反則すぎるうっ！

なにあれなにあれ超嬉しすぎるんですけどおおお！

うおおおおっ！比企谷先輩が美味しかったって言ってくれたよー
！おかーさんっ！！

はあつ……作った物を好きな人に美味しかったと言ってもらえる
喜び……癖になりそう……

私も料理頑張っちゃおうかなっ……世界三代珍味は育てないけ
どっ……

と、一人夢見心地で悶えに悶えていると妙な視線が……

またかよ……と恐る恐るその視線の方向へと顔を向けると……

超ニヤついた顔の襟沢が壁に隠れて覗いていやがった……お前いつの間に復活してたんだよ。

「や、やあく……良いモノ、いや複雑なシーンを目の当たりにしちゃったよお、香織ちゃんっ……うへへ……ど、どうすんの？どうすんがっ!?!……」

私は、優しく包み込むようにアイアンクローを食らわせてそのまま優しく締めあげたのっ☆

× × ×

優しく襟沢を落とすと、そのまま調理室へと帰ってきた。

そこで私を待っていたのは、新たな事件の幕開けだった……

「あたし比企谷にチョコあげたことあったっけ？」

ピシイッ……昔比企谷先輩となにかあったらしいその女子生徒のその一言で、調理室内にはいまだかつて無いほどの緊張が走った。

マジでどんだけ波瀾万丈なんでしょうか……このイベント……

続く

【if バレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する④

「あたし比企谷にあげたことあったっけ？」

折本先輩により突如落とされたその爆弾で、場が静まりかえる。

一人五月蠅いのはふーふーと息で前髪を吹き上げる海浜会長玉縄さん。

いやだわちよつと普通に気持ち悪いわっ？

しかしそのキモ会長以外は静まり返り、比企谷先輩に惹かれているであろう女の子達が、ゴクリと固唾を飲む音がそこかしこから聞こえてきそうだ……

アレ？実際にゴクリと聞こえたよ？

あ！私のでした☆

「いや、……ねえだろ」

な、無いのかよつ……！ま、まあ何かあったにしても、バレンタインの時期にちようど何かあったってわけでもないしね……てか何かかって一体なんなの!?

「そっか、今年はあるよ」

ブフォっ！こ、この人って空気とか読めないのん!?

よくこの空気の中で平気で言えんな……手強いぞ折本っ……

「え、いや、あ、そう……」

ちよつとお？比企谷先輩っ!?!な、なに動揺しちやってるんですかねっ……

エアクラツシャー折本がその場を去るとようやく空気が弛緩した。しかしその空気の弛みを許さない人物が、さらなる爆弾を設置したのだっ！

「そういえば、隼人は昔、雪乃ちゃんから貰ったよね？」

は、はるさん先輩！あんたなんて事をつ！あの顔は明らかにわざとだ……

やはり恐ろしい人だ……折本先輩が天然エアクラッシュャーなら、この人は嬉々として自ら空気を破壊する人なんだ……ううっ、怖いよお！あの人もだけど、雪ノ下先輩と三浦先輩が超ピリついてるう！

いろはもはわわと唸ってるけど、葉山先輩がチョコを貰ったって事よりも、三浦先輩のピリついた空気と雪ノ下先輩の雰囲気、そしてなによりもそんな雪ノ下先輩を複雑な表情で見ている比企谷先輩と、その二人を気遣わしげに見つめている由比ヶ浜先輩に向けられてるみたい……

「ああ、あったね、小学校上がる前くらいに。陽乃さんと一緒に貰ったことが」

私は初めて葉山先輩が好きになりました。

場を整える薄ら寒い余裕の笑顔も、時と場合によっては必要なのねっ！

今度こそ落ち着いたと思われた空気を、この人はつまらなそうな顔から一転、魔王の如き笑顔を浮かべて闇に叩き落とす……！

ハラワタまで食い尽くしてやるわ！って声が今にも聞こえてきそう……

「で、雪乃ちゃんは誰にあげるつもりなの？」

なんなのこの人恐すぎイイイイ！

憎々しげに「姉さんには関係ない」と言う雪ノ下先輩だけど、明らかに動揺してる。

そんな雪ノ下先輩に、凍り付く微笑を浮かべながらこの人はさらに言葉を紡ぐ……

「昔から嘘はつかない子だった……でも本当のことを言わないことはある……誰にもあげないとは言わなかった……やつぱ

り誰かにはあげるんだ」

大魔王はニヤアつと笑う。これはもう裏ボスクラスです。

「馬鹿馬鹿しい。勝手に言つてなさい」

動揺しきりながらも、もうこれ以上は付き合わないと言わんばかりに、カシヤカシヤと荒々しい音を立てて片付け作業に戻った雪ノ下先輩を満足気に一瞥すると、ようやく裏ボスは雪ノ下先輩を解放した。

やつとの事で調理室内は平静を取り戻したわけだが、やっぱりまだ動揺が隠しきれないのだろう。からんと派手な音を立てて雪ノ下先輩がボウルを落とした。

完璧超人らしからぬ凡ミスに、いかに心が乱れているのかが見て取れるのだが、運命の悪戯か転がったボウルは比企谷先輩の元へ……
「ご、ごめんなさい……」と朱く染まった顔を俯かせボウルを拾おうとしやがみこんだ雪ノ下先輩と、足元に転がってきたボウルを拾おうとしやがみこむ比企谷先輩が、僅か数センチの距離で見つめ合つて固まつてしまった。

お互いに拾いかけ触れそうになった指先を慌てて引き、恥ずかしげに目を逸らす二人の姿は、どこか初々しくもあり、でもなぜか痛々しくも見える。

私はその二人をあわあわジェラジェラざわざわと、なんとも形容し難い複雑な想いで見てただけど、あ……あいつもヤバくない？……と、ふと気になって視線を向けると、そんな二人の様子を、なぜかいろははゾクリとする程とてもとても冷たい目で見ていた。

我に返りボウルに手を伸ばした雪ノ下先輩だが、その震える指先では上手くボウルを掴めずに再び転がる。

くわんくわんと音を立て転がるボウルの音で、さらに気ままずくなりかけたこの場を救ったのは由比ヶ浜先輩だった。

「ふん、ゆきのんもまだまだだね」

由比ヶ浜先輩はどこかの庭球の王子さまみたいに言うのと、ひよいつと拾ったボウルを優しくな笑顔で雪ノ下先輩に手渡す。

今度こそようやく場が弛緩した。

比企谷先輩達は今の出来事でちよつとした嫌味とかを交えて笑い合っている。

やっぱりこの三人って仲良いんだなあ……と思つて見てただけど、由比ヶ浜先輩が空いた手をギュツと握り、ほんの一瞬だけ、とても寂しそうな表情になったのがとても気になった。

そしてそんな三人の様子をジツと見つめてくすりと笑う人物が居た。

その笑う姿は、どこか自虐的でどこか儂げで……そしてどこか怒りを噛み殺しているような……そんな姿。

くすりと笑った人物……それは、一色いろはだった……

× × ×

お料理教室も終盤へと差し掛かる。

女子力の高い手慣れた子達はすでに完成してるし、若干女子力の劣る子達（私含む）の焼き菓子達も、もう完成間近。

調理室内に甘い香りが立ち込める中、ふともよおしてきてしまった私は、いそいそとトイレに向かう。

てか最近乙女ポイントが急上昇中と定評のある私だけど、もよおしてトイレ……とか言っちゃうあたり、やっぱりまだまだ乙女初心者みたいっ！

うふっ！お花詰みお花詰み♪いやん香織ちゃんキンモー☆

しかし、トイレ……お花詰み場に到着した私がトイレのドアに（ややこしいっ）手を掛けたちようどその時、中からガンっ！という物音と共に、とても抑えた声で……でもとても怒気にまみれた叫び声が低く低く響いた……

「あああああつ！……なんか違うつ！……こんつなんじやないつ……！」

余りにも聞き覚えのある声から発つせられた、そのイメージとは掛け離れたその叫びに私は驚いて急いでドアを開けた……

中には、怒りに満ちた表情で手洗い場の鏡の前で打ち震える少女が一人……

「いろ……は？……どしたの……？……なんか……あつた？」

私の存在に気付いたいろはハツとし、慌てて右手に持っていた何かをエプロンのポケットにしまうと、いつもの笑顔に戻る。

「う、うわっ！ビックリしたあ。か、香織かあ……ん？なんでもないよー。急に声掛けられたからビックリしちゃったよ！……香織もトイレでしょ？じゃあ私は戻ってるからねー」

「え？ちよ……なんでもないって……」

しかしいろはは、あははと笑いながらトイレを後にした。

訳が分からず視線を泳がせた私の視界に入ってきたのは、ゴミ箱に力一杯投げ捨てられたようにグチャグチャになった、ラツピングの封が開いた豪華な焼き菓子セットだった……メッセージカードらしき紙も一緒に入ってたんだけど、とてもじゃないけど私にそれを見る事なんて出来はしない……

× × ×

……どうしたの？いろは……さっきの調理室での表情といい今の叫びといい、なんにもない訳ないじゃん……

私は調理室に戻りながら思考を巡らす。

でもいくら思考を巡らせてはみても、答えなんか出てこない。頭に浮かぶのは、さっきからのいろはの不可解な表情ばかり。

そういえば、夫婦漫才してた時も、比企谷先輩の出した答えに一瞬複雑な顔してたっけ……

あの子、また色々悩んでんのかな……

頭ん中がグルグルしながらも調理室に戻ると、どうやら乙女成分が足りない子達の焼き菓子も完成したみたいで、三浦先輩が嬉しそうに葉山先輩に試食をしてもらっていた。

いろはの姿を探すと、その三浦先輩達の様子を比企谷先輩と見ながら何か会話している。

まだ距離あるし、正直今はちよつと近寄りがたいから会話の内容までは分からないけど、少しだけ聞き取れたいろはの台詞は……

「……あれくらいのこと……楽しい……中には張り合ってもしょうがない人たち……」

なんだろう……なんか胸がザワつく……

そして言い終わるとやれやれとため息を付き、「あ、そうだ」とエプロンのポケットから何かを取り出していた。

それは、小袋に簡易包装された、たったひとつのクッキー……さっきの封が開けられた焼き菓子セットが頭を中をどうしようもなくちらついた……

クッキーを比企谷先輩に投げ渡すと、内緒ですよ？とばかりに人差し指を唇にあて、小悪魔めいた微笑みでパチリとウインクを決めてみせていた。

その表情に比企谷先輩があからさまに照れた様子を見て満足したのか、先輩にクルリと背を向け葉山先輩の元へと駆け出した。

でも……背を向けたほんの一瞬見せた表情は、私の胸を締め付けるには十分すぎる表情だった……

× × ×

どうしよう……私はあれからいろはに声を掛けられずにいた。

会はほぼ終了。みんな思い思いに焼き菓子を食べたり雑談したりしてとても楽しそうな中、私だけはなんとも言えない……まるで空中を彷徨ってるかのような浮遊感……

しかしここへ来てまたもあの人が、幸せそうな特別な空間を作っているあの人達を挑発する。

はああ……もう勘弁してよ……私の頭の中はもうパンク寸前だよお……

「それが比企谷くんのいう本物？」

そうは思ってたんだけど、はるさん先輩のその一言に私は反応する……本物、と。

「こういう時間が君のいう、本物？」

「……どうでしょうね」

比企谷先輩はなんだか苦しそうだ。苦し紛れに一言だけそう返すと俯く。

雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩も加勢に入るが、そんな事には一切意に介さず、その目は比企谷先輩を捕えて放さない。

「コレがそうなの？………君はそんなつまらない子？」

つまらない……？この人から見た今の比企谷先輩は、つまらない存在なんだろうか……？

「今の比企谷くんたちは、なんかつままない。私は……、前の雪乃ちゃんの方が好きだな」

奉仕部のお三方は、言い返す言葉も気力もすでに失っている。

そんな力なくうなだれる三人に興味を失ったかのように、その人は深くため息をつくとかツカツとヒールを鳴らして去って行ってしまった。

言葉なく俯く三人を、そして興を削がれて立ち去る美女の様子を、いろはは最初から最後まで、真剣な眼差しでただジッと見つめていた。

× × ×

「あとは、生徒会でやりますから大丈夫ですよ？」

いろはの閉会の挨拶で本日の参加者達が一人、また一人とコミセンをあとにする中、調理室に残っているのは私達生徒会メンバー（いやだから私は生徒会じゃ無いっての！）と奉仕部の三人だけ。

いろはが比企谷先輩達にお礼を言い帰宅を促そうとしたのだが、どうやらこの三人も最後まで片付けを手伝ってくれるようだ。

てか今回のイベントの依頼者の三浦さん!?

あなたなに葉山先輩とイチャイチャ帰っちゃってんの!?!片付け手伝いなさい!?

なーんてねっ!

しよ、しよんな恐ろしいこと思うわけ無いじゃないでしゅかあつ……

そして片付けが終わる頃にはすっかりと遅くなってしまった……ああ……今日はマジで疲れた……早く帰って今夜の録画予約して寝たい……

最後まで残っていたメンバーはすっかりお疲れのご様子で、さすがに打ち上げだのなんだのをやる気力も残ってないみたいね……

「じゃ、先輩、お疲れさまでした」

コミセン前でいろはを筆頭に生徒会メンバー（なぜか私と襟沢を含む……）が奉仕部メンバーに一礼し、私達はそのまま静かに解散した。

さようなら比企谷先輩……今日、比企谷先輩にあの日のチョコを美味しかったと褒めてもらったのが、地獄絵図のような本日の私の唯一の癒しでしたよ……

にへらくつとキモい笑顔を浮かべ比企谷先輩の後ろ姿を見送りながら、あの一瞬の幸せを噛み締めて、うしっ!ちよつと料理も勉強しちやおーっ!と一人脳内で円陣を組んでいると、不意にポンつと肩を叩かれた。

振り返ったその視線の先には……天使の如きキラキラ素敵スマイルの悪魔の使い、もとい小悪魔が立っていました……

× × ×

ひいひい……そういえばあのトイレの一件から、ほとんどいろはと話してなかったっけ……！

いやあああつ！なにその笑顔！やべえ超恐ええ……！

「……い、いろはお疲れ……」

「うんお疲れー！今日はお手伝い、ホントにありがとねっ！すっごい助かつちやっただよー。……でさ」

……でさうな、なにが続くんでせう……？

「今日はすっかり遅くなっちゃったじゃん？香織わたしんちに泊まっ
ていきなよー」

すっごい笑顔で地獄への片道キップのご招待でした☆

……えつと……な、なんだろ？さっきのトイレでの話かなあ……？

口封じ……？まさかあつちの件じゃないよねっ？

「ほらー、香織もわたしに話したい事とか、あるじゃん？」

……ある……じゃん？

え？じゃん？

なんか私がお話を話す事が決定事項なのん？

いや、確かに今日のいろはの様子とかすっごい気になるし、聞いた
事はたくさんありますですわよ！

で、でもそれはいろはさんが話したくなってからでもいいと言いま
すかなんといえますか……

べべべ別にまだ話したく無い事をむむむ無理強いは出来ないとい
いますかなんといえますか……

「……あ、ほらっ！今日はもう遅いしっ！明日も学校あるしっ！
着替えもないしっ！ねっ！」

「えー？大丈夫だよー。どうせ制服のままだし、寝間着なら貸してあ
げるし、下着だって靴下だって洗濯機に突っ込んで明日の朝には

乾いてるしー」

あつれ〜？逃がしてくれないのかなっ？

「…………あ、や、それに…………べ、別にいろはに話したい事とか特に無いしー…………」

「またまたあーうふふ〜♪何の為に先輩と一緒に居る今日に手伝いにきて貰ったと思ってるのっ？」

ばちこーん！つと超可愛いウイंकをするいろはす。

あ、これ死にますわ。

私、どうやら今日一日観察されてたみたいですよ☆

「え!?なにになにい？今日いろはちゃんちでお泊り会やるのお!?私も行ききたあい！」

「…………あ、恵理ちゃんは帰っていいよっ？………………………………今夜の香織とのガールズトークによつては…………恵理ちゃんともあとでゆっくりお話したいしー…………」

「………………………………はい」

やはり原因は貴様か襟沢ああああっ！

泣きながら逃げ去っていく襟沢を見送りつつ、私はこの会話の始まりからずう〜つと同じ笑顔のまま固まっている悪魔に手を引かれ、地獄の三丁目へと旅立つのでした…………

拝啓お母様…………先立つ不幸をお許してください…………もし出来ればなんでしょうけど、今夜のアニメ、撮っといってくださいねっ（白目）

続く

【ifバレンタイン編】私の友達は憤慨し、そして決意する⑤

ぱちやりと音を音を立て、すくい上げたお湯を肩に掛けながら今日一日の疲れを癒す私、家堀香織。

うふふっ♪香織ちゃん初めての入浴シーンは、まるで地獄の釜戸に浸かっているき・ぶ・ん☆

いやんマジこの後なにが待ってんの……？

「香織ー、ここにパジャマ置いとくからねー。さすがに下着は貸せないから朝までは我慢してねー」

「あ、ありがとうー」

と、一夜限りのノーパンナイツ開催が決定した所で、本日の出来事に思いを馳せる。

今日は本当に色々あったな……イベントの準備に始まりチョコ作り、濃すぎるイベント参加者を次々さばき（実際は傍観してただけ！テヘツ）、いろいろの謎の微笑に動揺し、比企谷先輩の言葉に歓喜して、そしていろいろの心の叫びに言葉を失った。

そして今はなぜかいろはんちのお風呂を頂いているという謎事態……なんだこれ？

ああ、色々あったと言えば、いろはんちに到着した時も一悶着（笑）あったんだよね……

× × ×

「ただいまー」

「おじやましまさす……」

いろはんちは、つい先日お邪魔したばかりだ。あの時もチョコ作りでお邪魔したっけ。

まさに血の祝祭バレンタイン……

とホラー映画のCM風に脳内でアテレコして遊んでいると、なんか凄い勢いでいろはのご両親がパタパタと玄関に走ってきたっ！

「おかえりいろはっ!!……あら？香織ちゃんかあ、こんばんはっ!」

「あ、こんばんはです！スミマセン、急に押し掛けてしまっつて」

帰宅中の道すがら、いろはが家に友達連れて行くつて電話しといってくれたんだよね。ん？でも……

「ところで香織ちゃんかあ……とは？」

するとご両親が顔を見合せて苦笑い。

「あ、ごめんね香織ちゃん！いろははったらこんな遅くなった上に急に友達泊めるなんて電話してくるものだから、お母さん達てつきり比企谷くんつて子連れて来るのかと……」

「ちよっ!?ちよっとお母さん!?ななな何言っつてんのバカじゃないのホント意味分かんないからっホントごめんなさい!」

耳までゆでダコのように真っ赤になったゆではすは、私の手を無理矢理引っ張って部屋へと連れて行く……ああ、そういえばこないだのチョコ作りの時、いろはの奴「比企谷八幡先輩が大好きだー!」なんて叫んじやつてたっけ(笑)

たぶん私達が帰ったあと、ご両親から根掘り葉掘り聞かれたんだろうなあ……そりや両親で玄関まで走ってくるわっ!

そして無言のままゆではすに連れられて部屋に投げ入れられた私は涙目で睨まれました……

ゆではすのその涙目な眼差しは雄弁に語っていました。
もう今の件には決して触れるな……と。

× × ×

ま、そんなこんなで一日中心が休まる事の無かった今日だけど、お風呂入ってようやく一息つけた〜……!

でも、ここからが本物の地獄の始まりなのよね……お母さーんっ!

いろはのパジャマに着替えた私は、ノーパンの解放感にクセになつてはいけないと気持ちを引き締めながら部屋へと戻ってきた。

どんな引き締めだよ。クセになんなよマジで。

部屋に入ると、ニコニコいろはすがベッドに座って待っていた。

ピッ!と指差す床にはクッションがひとつ……ああ!その上で土下座しなさい☆と……

いつでも土下座の体勢に入れるようにクッションの上で正座になると……

「ん?どしたの香織。足崩しなよー!どうせ長くなるんだから……今夜は寝かさないぜっ?」

きやるんつと笑う、素敵な笑顔の中のその瞳は光彩がまるで無かったです。まる。

× × ×

「ほーん……」

小一時間も経つ頃には、私はほぼ全てを白状させられていました。フツ……いつでも土下座してやんよっ!

「……で?」

「ででで……で?とは……!」

「これからどーすんの?……って事」

ふええ……怖いよおっ……てか怖い!マジ怖い!!

「……あ、いや……ホントにごめん……ちよつとすぐには無理かも知れないケド……ちゃんと先輩の事は……忘れるつもり……です」

……まあ、そんな簡単に忘れられたら苦労はしないんだけどね……そしたらいろはは超意外な返しをしてきた!

「なんで？」

「いや……なんでって。だって……いろはが大好きな先輩を後から好きになっちゃった私がいけないんだし……」

「なんで？全然いいじゃん」

……………へ？

たぶん私はもの凄いやアホヅラをいろはに向けてると思う。

「それって悪い事なの？だってさ、好きになっちゃったもんはしょうがないじゃん。それ言ったら、わたしだって雪ノ下先輩達に悪い事してるって事になっちゃやしきー」

「いや、それはそうかも知れないけど……」

「それにさあ、そりや複雑な気持ちは超あるにせよ、わたし実はちよつとだけ嬉しいんだよねー」

……………はい？嬉しいってなにがでしようか？

「わたし前に教室でさ、恵理ちゃんに『別に先輩の魅力が分からないお子さまには何言われても気にしないし何言われてもなんも感じない』みたいなこと言ったじゃん？……だからさ、香織が先輩の良さを分かって、それで好きになったんだなあ……って思ったら、結構嬉しかったりしたんだよね……！だってさ、好きな人の事を、友達も分かってくれたって事じゃん？」

そしてとても幸せそうに言葉を紡ぐ。

「先輩ってさ、あんなだから他人から誤解されちゃうし、誤解されても別に関係ない……って顔しちゃうんだよね。まあ先輩がそれでいいならいいし、わたしだけでも分かってくればいいやつて思うんだけど、それでもやっぱり先輩の良さが分かる子が増えるのは……えへへ、なーんか嬉しいっ」

そして私の目をしっかりと見る。

「しかもそれが数少ない友達なんだもん……嬉しくないわけないじゃん。……だからわたしは別に香織が先輩を好きになっちゃったこと自体は全然責めないし、好きでいることも全然自由だと思うよ」

そうやっていろはは偶に見せる、小悪魔的でも無い、計算高くも無い、純粋な笑顔を私に向けてくれた。

……いろは……

良かった……！じゃあ、私……もう後ろめたい気持ちのまま、比企谷先輩を好きでいなくてもいいんだ……好きでいてもいいんだ……！

「……でも……」

あ、あれ……？私が感動にうち震えていると、いろはの声と表情が一変したよ？

やばいよやばいよー。なんかいろはがドス黒いよー。

「それとこれとは別問題だよねー」

ひいつ……声がっ！声が尋常じゃないくらい低くて棒読みだよおっ……

「まさかあれだけ乙女成分不足をアピールしてたくせに、わたしが熱出してる時にコソコソ先輩をデートに連れ出してたなんてねー」

ひいやああああっ……やっぱリソコは怒ってらっしやるう！超怒ってらっしやるうう！！

このあと、小一時間ほど説教されました。

フツ、もちろんそんな説教なんざ、ただ大人しく黙って聞いている私ではありませんよ……

え？どうしたのかって？

ええ、決まってるじゃないですか。その間、ずっとしてましたよ！

………DO☆GE☆ZA☆

「まあ、あとで恵理ちゃん達ともお話あるから取り敢えずこの件はひとまず置いとくとして」

え？ひとまず？置いとく!?

あつれ〜？まだ終わったわけじゃ無いんだあ（白目）

「……せっかくだから、恋バナしよっか？」

………はい？

「香織も先輩を好きになっちゃったわけだから、今まで話さなかった事とか、色々と話してあげるよ」

………そしていろはは瞳をそっと閉じる。自分の中の大切な想い出を探すために………宝物を友達に自慢する為に押し入れの奥から引っぱりだしてくる子供のよう………

そして、いろはの想い出語りが始まる。

それは余りにも真摯に、余りにも純粋に私の心を侵食し、やがて私の心のコトバとなる………

× × ×

………先輩と初めて会ったのは、わたしが生徒会長に立候補させられた時。

他に頼る人も居なくて、平塚先生と城廻先輩に相談して、連れられて行った特別棟の教室に、あの人は居た。

初めて見た瞬間、なんだコイツ………って思ったよ。でも、その瞬間から興味を持った。

だってさ、みんなに愛される“わたし”に、一切興味を示さなかったんだもん。

変な奴とは思ってたけどさ、それでも学校の有名人の雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩と一緒に居るくらいだから、ただの変な奴では無いんだろうな………って思った。

だから、上手いこと落とせれば利用出来るかな………って、色々とモーション掛けてみたりもした。

でも全っ然なんだよね、あの人。始めっからわたしのこと超警戒してんだもん。

だから余計になんかちよつと面白いかも………って思ってた。

それに先輩はわたしの本性見抜いた上で普通に接してくれたから

ね♪

わたしも思いっきり素を出せる異性ってだけで、ちよつと嬉しかったりしたし！

そして気付いたらわたしのの方が利用されちゃってさ、いつの間になぜか生徒会長にさせられちゃった！

なんか上手いこと言ってたけど、アレ絶対に先輩の策略だよー。

だからこそ、乗せられてやったんだあ。なんか思ってたよりもずつと面白そうじゃんっ！って思ってたさー！生徒会長じゃないよ？この先輩が……さ！

コイツにこのまま乗せられとけば、もつとこの先輩に面白くしてもらえるかな？って。

なにせ、わたしを生徒会長にした『責任』って弱みで利用出来るしねっ。

生徒会長になって初めて来た仕事でチャンス！って思ったよ。例のクリパね！

よしっ！利用してやろうってさっ！ふふっ……

んー、でもさ、利用する為に奉仕部行ったらさ、すっごい違和感があつたんだよね。

なんか、作り物の空間みたいだった。

あ、これはこの空間が崩壊する一歩手前なのかも……って感じたんだ。なんでか分かんないけど。

たぶんこの人達にはこの空間が大切なんだろうなって、でも瓦解しちゃうんだらうって感じたんだけど、それでも、そんな状態でも先輩はわたしを助けてくれた。

先輩ってわたしの事あざといあざとい言うけど、ホント自分が一番あざといんだよねー。

いつもめんどくさそうに目を腐らせてる割に超自然にわたしのこ

と助けてくれるんだもん。

あんなんの癖に、ナチュラルに荷物とか持ってくれた時とかは本気

でちよつとだけドキツとしちやつたよ。

でもさー、それでもイベントはやっぱ上手くないかなくて……そんな時に会議が中止になって、報告しなくちゃって奉仕部に行った時に聞こえちやつたんだよね。

それでも俺は、本物が欲しい……
って。

最初、は？って思った。

だってあの先輩がだよ!?

あの先輩が、声震わせて擦れさせて、涙交じりの声で雪ノ下先輩たちにそんなこと言ってたんだよ!?

最初はホント意味分かんなかったけど、次第にすつごいドキドキしてきた……本物ってなんだろう？って。

わたしはいつも偽物だったから……

いつも自分を偽って男の子と接して可愛いわたしを演じて来たから。

だから、たぶんあの先輩のあの熱つい魂の叫びに、一発で空っぽで偽物の心を驚掴みにされちやつたんだと思う。

でさ、その翌日から会議に雪ノ下先輩達も参加するようになって、それで三人の様子を見てたら………なんか無性に悔しくなつた

……

ああ、この人たちにとっての本物とやらはココにあるんだな……って。

だからわたしもどうしようもなく本物とやらが欲しくなつちやつて……葉山先輩に告白しちやつた。

あはは、そんなの本物なわけ無いのにね……葉山先輩には悪い事しちやつた。

もちろん振られちゃって、でも想像してたより全然苦しくなくって。

その日の帰り道にさ、先輩送ってくれたんだ！てか送ってくれるように誘導したんだけどねー。

でさ不器用なりにわたしを慰めてくれて、隣に居てくれる先輩に安心して、もつと一緒に居たいな……なんて思っちゃって、その時に気付いちやっただ。

あ、もしかしたらわたしの本物ってこれなのかも……って。

いつの間にか、ずっと素のわたしを見てくれる先輩と一緒に居るのが楽しくなって、一緒に居ると安心して、一緒に居るのが当たり前になって……そして先輩の本物の言葉に心を鷲掴みにされて……

だから、わたしは今度こそ本物が欲しくなった。

わたしの本物、先輩が欲しいって。そして本当のわたしを見てくれる先輩の本物になりたいって……本気で思ったの……！

× × ×

想い出語りが終わる頃には、いろはは泣いていた。

あれ？てか私も泣いてたっ。

そっか……それが本物なんだ……

「うう……なんか最近涙脆くなっちゃってるよわたしー。恥ずかしい……もう年かなあ」

「おいおい女子高生っ。そんな聞かれたら世の女性達に袋叩きにされるよっ」

大体あんたの目の前の可憐な女子高生も泣いてるっつの！

私まだまだ若いんでっ！

「あはは〜」

ようやく笑ったいろはを見てわたしや思ったよ。

はあ……まったく。えっらい事聞いちまったぜ……

これ、私が踏み入る要素ないじゃんっ！

でも悔し紛れに聞いてみちやうもんねーっだ！

「うん。いろはの気持ちは良く分かった。……でもさ、だつたらここに来て私がライバル候補みたいになっちゃったら、いろはす余計に困っちゃうんじゃない？」

するといろはは……なんとニヤリとしゃがりましたよ！

「んーん？全っ然困らないし、全っ然心配なんかしてないよー？……だつて、香織なんかじゃライバルに成り得ないもんっ」

なっ！なんですとー!?

そ、そりやちよつとは遅れを取ってますけどもー!?!……ん？ちよつとか？

と、とにかくライバルとしても認めてもらえないとか、ちよつと私を舐めすぎじゃねえ？

私は額に浮かんでいるであろう血管に落ち着けー、落ち着けーと言いつつ聞かせながら、あくまでも冷静に対処する。

ホラ、私つて大人ですからあ！

「にやにやにやつーにやんで……なんでよっ！私じゃあんた達に及ぶ可能なんかジエ……ゼロってわけ!?!」

うん！私つて超クール。

はいはいクールクール。

そしたらいろははジツと私を見据えてから勝ち誇ったかのように一言添えた。

「……だつてさ、たぶんだけど、さつき『良かった。まだ好きでいていいんだ……』とかつて思ったでしょ」

うぐっ……見透かされている……だと？

「その程度の覚悟の女なんて、どだい先輩みたいな面倒くさいヤツの相手なんか無理だし、そもそも先輩に振り向いてなんかもらえないもん！だから香織なんかじゃライバルに成り得ませーん♪」

……一言も言い返せない……

確かにそう。私といろははじゃ覚悟が違いすぎる。

「だから香織は他に好きな人が出来る『まで』は、先輩のこと好きで

いたらいいよ」

「どうよ！つて顔で私を挑発するいろは。」

「でも……でも……」

「そ、そりゃ私は比企谷先輩初心者だし、まだまだ覚悟は足りないかも知んないけど……でも、やっぱり好きだしさ……」

比企谷先輩初心者ってなんだよ。

するといろははニヤリととっても良い小悪魔顔になる。

「ま、どうせ負ける気なんてゼロだけど、香織が本気で覚悟見せるんなら、本気でライバルになりたいって言うんだったら、それは香織の自由だし好きにすればー？ちよつとは張り合えるかもよっ」

……くっそうっ！ハメラれたあ……

いろはの絶対の覚悟。絶対の自信。

それを加味した上での挑発に乗せられてしまった……

たぶんいろはは、好きなら好きでイジイジウジウジしてるのが嫌いなんだろう。

だから私を挑発したんだ。

たぶん私はこの先、ずっとイジイジウジウジしながら比企谷先輩の事を好きでいるだろうから。

だから当たって砕けてスッキリしなさいよねっ！って……

「……あーもう分かったわよっ！私だってウジウジしてないで、当たって砕けてやるわよっ！どうせ私なんかには勝ち目ないと思って余裕で挑発してんでしょお!?……だつたらいろはが伏兵狙いなら、私は大穴最低人気で狙ってやるわよっ！」

するといろははにへへくっつと笑う。

「まあ香織がその気なら、デートとかされちゃわないうように本気で邪魔するけどねー！」

邪魔すんのかよ。

「……………でも」

その瞬間、いろはの空気がガラリと変わる……

表情も声も、その瞳の光も……

そしていろはは一言だけ。一言だけ言葉を添えた。

「今は……まだダメ」

その時のいろはの空気、目、そしてこの顔には覚えがある……

お料理教室の時にくすりと笑った時の、トイレで叫んだ時の、最後にはるさん先輩が比企谷先輩を煽っていた時の、あの瞬間にほんの一瞬だけ見せた、いろはの儂なげなあ顔だった。

続く

「ifバレンタイン編FINAL」私の友達一色いろはは、大好きな先輩の背中を押した

「今は……?」

いろはの表情を見て、それを聞いてしまってもいいのかどうか分からなかった。

でもたぶん、いろはが今日わざわざ私を泊めてまで話をしたかったのは、これこそが目的なんじゃないのかと思った。

私の気持ちを聞いたのも、いろはが気持ちを話したのも、あくまでもコレのための布石……なんだか私はそう思ってしまった。

だから聞こう。たぶん……これから話す事こそがいろはの決意。

「今はダメって……どういうこと……?」

そしていろはは口を開く。決意を語る為に。

× × ×

「わたしはさ、本物が欲しいんだよね」

「うん」

「もしかしたらわたしにとっての本物が先輩なのかな? って気付いた時、同時にライバルが強力過ぎるって事にも気付いたの……でもまあそれはそれ。仕方ない事だし、何よりも本物に気付けた事が嬉しかったから、無理矢理にでも和に割り込んでやろう! って頑張ったんだ」

「だよね。あんた三学期始まってからの放課後は、ホント楽しそうに走ってどっか行っちゃってたもんね。」

「でも正直な話、結構キツイ時とかもあったんだ。あの空気の中に入っていくのに」

マラソン大会の後の保健室前で俯いたいろはの背中が頭に浮かんだ。

「でもそれでも頑張つて、ようやく最近ちよつとずつあの空気の一員になれていつてる実感が湧いてきたんだけど……」

比企谷先輩と一緒に居るとき、偶然由比ヶ浜先輩や雪ノ下先輩に遭遇しちやつた時とかも、あんなに頑張つてたもんね。

「そしたらさ、今度は逆になんだか違和感を感じたんだよね、あの人達の関係に……ここ最近は特にそう」

違和感……？あんなに仲がいいのに？

あ、でも……

「香織さ、今日一日あの人達見てて、なんか感じなかった？」

「……うん。ちよつとだけ、なんか感じた……かも」

はるさん先輩が掻き回した後、比企谷先輩と雪ノ下先輩の何とも言えない空気感に、初々しいか思いながらも痛々しいような……そんな良く分からない感覚が確かにあった、かも。

そしてその様子を儂なげな笑顔で見た由比ヶ浜先輩。

そしてはるさん先輩の最後のあの言葉……

「今のあの三人はさ、なんか違うんだよ。本物を目の前にしてるのに、でも本物を手に入れるのが恐くて、誰も傷付けないように大事に大事に扱ってるカンジ。なんか綺麗だけど脆いガラス細工でも扱ってるみたい……」

……そつか。だからこそあんなに痛々しく見えたのか……

「確かに目の前にした本物を大事に扱いたい気持ち、すつごい良く分かる。でもさ、それってなんか違わない？……どんなに綺麗な細工が施された高級な食器だったりガラスだったりしてもさ、その食器達は食器として生まれてきたのに、汚したくないから……傷つけたくないから、棚の奥にしまい込んだり飾ったりしたって、そんなの本物じゃないよね……？」

「……………」

「あの人達はさ、恐がつてるんだよ。本物を手に入れる為になんか何を傷

付ける事を。何かを壊しちゃうことを。……そんなの本物なんかじゃない。ただの馴れ合い」

傷付けないように大事に、でも震えながらビビりながら触れ合う関係か……確かになんだか痛々しい。

「あんなの間近で見てたらさ、勝ち目が薄くて討ち死に覚悟で張り合うよりもずっと辛い……だから張り合ってもしょうがない。だって勝ち目が無いどころか勝負にすらならないんだから。わたしがどれだけ頑張ったって、傷付けるのが恐くて逃げてるだけの人の本物になんかなれつこないじゃん」

そっか。だからいろははあんなに儂く自虐的に笑ってたのか。

「でもちよつとは思ったんだー。これはチャンスなのかも知んないって。お互いに傷付け合うのが恐くて踏み込めないでいるんなら、わたしがその逃げ場になつちやえばいいんじゃない？つて。……へへえ！なんだかんだ言っても最近結構先輩わたし意識してるしねー。元々わたしに甘いし、こんな状態で告白したらもしかしたら上手くいくかも知んないなつて。わたしに逃げてくれば、あの二人のどちらか一方だけを傷付けずに済むからっ」

元気にそう言ういろはの顔は、元気とは真逆の顔だった。

「でもさ……やっぱり本物から逃げた先に居るわたしじゃ本物にはなれないんだよ……そんなの、わたしが欲しがってる本物なんかじゃない……」

『なんか違うー！こんなじゃない！』

トイレでの叫びと怒り、そしてゴミ箱に投げ捨てられたチョコレート。そしてひとつだけあげたクッキー。

この子はずっと苦しんでんだ。

「このままじゃいけないなつて。このままじゃ誰も先に進めないなつて。……だから今日はるさん先輩呼んだんだ。あの人なら、今のあの人達の馴れ合い関係に対して、なんか問題提起してくれるんじゃないかって……で、まんまとしてくれた。グッチャグチャに」

『それが比企谷くんという本物？』『コレがそうなの？』『今の比企谷くんたちは、なんかつまんない』

冷めきつた眼差しでそう投げ掛けたはるさん先輩達を見ていたいろは。

今のいろはも、あの時とおんなじ顔をしてる。

「いろはは……どうするつもりなの？……どう……どう……したいの？」

そしていろはは言う。

この女の、一色いろはの決意を。

「わたしは………先輩に本物を手に入れさせてあげたい」

× × ×

本物を手に入れさせてあげたい……それはつまり自分は身を引くという宣言……

いろはは、大好きな先輩が本物を手に入れられる為に自分は諦めるのか……でも……

「いろは……あなたはそれでいいの……？自分から降りて、それで諦めつくの……？」

……だって、そんなのいろはらしく無いじゃん！

あんたはいつだって打算的で計算高くて小悪魔的で！

好きな人の為になにもせずに分から身を引くなんて……そんな一色いろはらしく無いよ……っ！

しかしいろはは……この女は私の質問にこう答えたのだ。

「諦める？…なんで？」

「……………はっ！」

いやいやなんでそんなにキョトンとしてんの!?

あれ？またいきなりシリアス崩壊!?

「なに言ってるんの？香織。わたしが本物手に入れるのを諦めるわけないじゃんっ」

いやそんなにアホを見るような目で見ないでよっ！

なんなのこの置いてけぼり感っ!?

「だって！あんた先輩に本物を手に入れてもらいたいって言ったじゃん!？」

するといろはは事もなげに語りだす。

どうやら、いろはすの真なる決意表明はこれからのようですよ？

「だからさー、あの人達にはあの人達で、一旦決着つけてもらうのっ！そうしないとなんにも始まらないからさー」

ええええ!?!一旦決着つて!?!

「今先輩が求めてる本物はさ、残念ながらわたしじゃないの。悔しいけどあの人達の中にしか無いんだよ。いくらわたしがあの空気に無理やり横入りしたつてさ」

「いやそれは分かったけど……」

「でもあの人達は決着から逃げようとしてる。腹立つことにつ！分かるっ!?!」

「あ、は、はい!」

「そこで逃げ続けてたらわたしには一生出番なんか巡ってこないワケじゃん!?!……だから一旦決着つけてもらうんだよっ」

えつと……理解が追い付きません。一般人のわたくしめ如きには……

「だってさー！決着つけるって事は、比企谷先輩が本物手に入れちゃうって事じゃん！一旦もなにも手に入れちゃったらもう手遅れじゃないの?」

するといろははニイッとスゲー悪顔をした。

なんかはるさん先輩に近くない!?!その顔!

「……一体いつ誰が、この世界に本物はひとつだけって言った?」

私はその言葉にあるひとつの可能性を思い浮べた……

そう……私たちオタ……いやいや違いますから。私はそういうんじゃないやしませんから。

と、とにかくそつち系の方々の永遠の夢！ラブコメの結論に困った作者の禁断の究極奥義!!

まさにミラクルパラダイス☆

そして私は劇画タッチな顔をして(妄想)、いろはにその究極の答えを問いたです。

「……………い、いろは……………ま、まさかあんた……………ハーレム展開狙ってんの……………?」

「……………は?」

これだけ真剣に聞いたのに、香織ちゃん史上最大級の軽蔑の眼差し頂きましたっ☆我々の業界ではご褒美です。

「香織ってさ、たまに本気で意味分かんないしキモいよね。ガチでそういうのやめた方がいいって。せつかく可愛くてモテんだから」

やめてっ……………!ご褒美は最初の一撃だけなのっ……………!

そのあとの淡々とした言い聞かせはただただツライだけっ……………

「まあいいや」

いいの!?!それはそれでキツいつ!

「本物ってのはさ、別にひとつっきりのモノじゃないと思うんだよね。……………だからさ、先輩には逃げずに一旦本物を手に入れて貰って、その上でわたしがそれ以上の本物になっちゃえばいい!先輩の本物の力タチがどんなモノかは分かんない。でもそっからがわたしの勝負だと思ってる」

「えつと……………つまり……………略奪愛……………?」

なにそのつい最近自分に降り掛かってきてるかのような悪魔の囁きっ!

いやん胸が苦しいっ!

「略奪……………いやいや言葉悪すぎでしょ……………香織がソレ狙ってたからって……………」

「ねねね狙ってにやいよっ!?!」

噛むわ裏返るわもう大変☆

「まあ先輩にとつての本物が、本当にただ雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩との恋愛事なのかどうか知らないからなんとも言えないけど、もしそうなら……そういう事になっちゃうかな♪」

いやここにきてテヘペロ☆じゃねえよこの女（白目）

無駄に可愛い分全然可愛くないからね!?

にしたってさあ……

「それって……分が悪過ぎない……? だってずっと願ってきた本物を手に入れた後に、さらにそれ以上の存在になるなんて……無理なんじゃ……」

するといろはは笑顔を陰らせて俯く。

今さっきまであんなに元気だと思ってたのに、良く見たら顔が真っ青だし手も震えてる……

この子は……本当はこんなにも恐いんだ。本当は不安で不安で押し潰されそうなんだ……

それなのにいろはは無理して笑顔で答える。

「そりゃね。でも、一体なんの為にわたしこんなに頑張っちゃってると思ってるの? いざ勝負の時に、いつでも優位な位置に立ってられる為に頑張ってるんだよ。……先輩はさ……他人からの好意をすっごい疑うんだー。すぐ裏を読んじゃうの」

そうだよね。比企谷先輩って、そういうトコあるよね……

「だから付かず離れず頑張ってるの! くっ付き過ぎて逃げられちゃわないように。かといってあなたを想う気持ちに裏なんかないんだよ。くっつて信用してもらえるように離れすぎないように」

「いや、いろははかなりくっ付き過ぎだと思えますけども……」

「だ、だって……いつも廊下とかで見掛けた時に……抱きつきたいのとか超我慢してるしっ……」

ポツ……じゃねえよ。そこは常識的に我慢すんだろ普通。

それが罷り通るんなら、私も抱きついちゃうっ!

でも、うん。だからくっ付き過ぎないアピールの為に葉山先輩が予防線なのか。

「だからさ、こうやって少しずつ少しずつ先輩の中のわたしを大きくしていった、いざ先輩が逃げずに本物を手に入れた時こそ勝負すんのか！あなたの一番の本物はわたしだぞー！って！」

「でも、やっぱりそれってさ……」

勝ち目が無さ過ぎる……そう言いたくてもとてもじゃないけど言えない。

その辛さは……今の私なら良く分かるから……

するといろはは震える手でパジャマをギュッと握ると、とても穏やかな……でも小悪魔全開なニヤリ笑顔でこう言うのだった。

「……だつてさ……そんなに簡単に手に入れられたら、本物なんて言わないじゃない？」

震えて泣いちやう程の不安と恐怖なのに、そんな感情を押し殺してまでのいろはの笑顔と決意に息をのむ。

こいつ……やっぱりとんでもないな……！

私は、こんなに凄い女に追い付けるのかな？

× × ×

そこで一旦話を区切ると、落ち着けようかというはがホットココアを淹れてきてくれた。

ほあく……落ち着く……

今日はもう色々衝撃が強すぎて、今が今日一日でようやく落ち着けた瞬間かも。

もつともとつくに日は跨いじやってますがね。

いろはもそんな悩みをずっと一人で抱え込んで、その上あんなお料理教室の状況をわざわざお膳立てまでして、さらにさらに私への尋問と決意表明と、かなり気を張っていたんだろう。

お互いにふうふうしながらホッと一息ついてる時にちょうど目が合ってしまった、なんか噴き出してしまった。

「ま、そういう事だからさ！香織が横恋慕すんのも略奪愛狙うのも自由だけど、今はまだあの人たちの邪魔はしないでねっ。香織に急に告白なんかされたら先輩のヘタレハートが揺らいじやうからさ」

もう略奪愛ネタはやめてえっ……………！

……………あ、そっか。今日のお泊り会の目的ってそれかっ……………

「べっ……………別に告るつもりなんて無かったしっ……………てか略奪愛はもうやめてと切実をお願いします」

でも告白云々の話題が出た事だし、一応聞いてみよっかな？

「てかさ、いろはは先輩があつちの決着つけるまでは告んの我慢とか出来るわけ？いつになっちゃうとか分かんないのに」

「むう……………もちろん今の状態で告る気なんて無いけど……………無いつもりだけど……………もしかしたら辛抱たまんなくて言っちゃう……………かも？」

ダメじゃん。

私が冷ややかな目を向けると慌てて一言。

「しないよ!?うん。しないはず……………で、でもさ、もし万が一しちゃったとしても、ほぼ百パー振られるしノーカンって事でオナシヤス！」

慌てすぎて戸部先輩出てきちゃってっから……………

「ま、振られたら振られたで、それもまた布石になるしね！先輩には恋に破れてもひた向きに頑張る可愛い後輩アピールも散々してきてるし〜♪」

こ、この子どもまで計算ずくなの……………!?

「たく……………さつきまでの格好良い決意はどこ行っちゃったのやら。ブレブレすぎ……………まったく……………人には告んとか言っというさー」

いやまあまだ告る気なんてさらさら無いですけどね？今私が告ったって、は……………で終わっちゃいますし！

「むっ！だったら告ればー？強制は出来ないし！でもどうせ香織なんかが告ったって、は？何言ってるんだコイツくらいしか思われぬいよーだ」

カッチーン☆

分かり切ってた事だけどそうまでハッキリ言われちゃうと、ちよつとだけイラツつときちやいましたよお？

「ふくんっ！いろははそうやって私に対していつまでも余裕でいれればいーよ！もしかしたら最終的に比企谷先輩の隣に居るのは私かも知んないしー！」

「……………なんで？」

怖いよっ！！

イラツと来て挑発したのに、一瞬で萎んじやつたよっ！

「だ、だってさあ……………さつきいろはも言ってたじゃん？比企谷先輩は他人からの好意から逃げちゃうって……………だから、意外と同じ趣味を共有して長く友達関係みたいに住られる、私みたいに待つタイプの女の方が、実は比企谷先輩攻略に一番向いてんのかもよお？」

ヒイっ！だからその目はやめて！

するといろははぷくうくつとごりつぶくくのご様子。

そして抑揚の無い棒読みで一言。

「だよねー。香織って意外と抜け目の無い泥棒猫だもんねー。なにせ友達の好きな人を後から好きになって、その友達が熱出して寝込んでる時にこっそりデート行っちゃうような女だもんねー」

吐血寸前っ☆

どうやら藪をつついたらへビが八万匹くらい出て来たみたいっ！
八幡だけにつ！テヘツ

× × ×

チュンチュンと小鳥のさえずりに目を覚ます。どうやらいつの間にか寝ちやつてたみたい。

結局あれからもずくつと比企谷トークで盛り上がってたんだよね

く……意識失ったのは明け方か？

「……ふっ……まさかいろはの自宅でいろはと朝チュンすることになるなんてねっ……」

「なに言ってるの……？」

おっと。ニヒルな感じで独り言してたら、朝一発目からの強烈な軽蔑の視線を浴びちまったぜ！

「ほらほらバカ言ってるんで早く起きて学校行くよー。いつまでわたしんちでノーパンで居るつもりなのよ」

いやんっ！

そしてせかせかと登校の準備を済ませ、いろはのお母さんが用意してくれた朝ごはんを有り難く頂くと、私達は学校へと向かうのだった。

もうそろそろ校門かという所で時計を見たら思いのほかギリギリでビックリ！

「なんか結構ギリギリだけど？いろはって最近いつも学校来るの遅いよねー」

「んー？そ？この時間なら全然よゆうだよ」

まあ間に合うは間に合うんだけど、ここ最近『寒いから』とふざけた理由でサッカー部の朝練にも顔出してないみたいだし（もちろん午後練もっ！）、良くこの子まだ在籍してられるわね。

そして校門をぐり昇降口へと向かってる最中、いろはがピクリと色めきたった！

ま、まさか!?

「よしっ！今日はピッタリ♪」

その一言だけ残し、ピューっと走りだしたその先に居たのは……もちろんあの人。今日はピッタリって……あんた最近遅いのはこの為かよ。

ま、しゃーない！やっぱこれが無ければ終われないっしょ！

× × ×

「せんぱーい！おはようございますっ！今日も朝から死んだ目してますねー」

恒例の夫婦漫才だし、私は聞き役に回ってましようかねっ。

てかいろはが隣に居る時に朝から比企谷先輩と会話するなんて難易度高すぎイイイ！

「うわっ……」

「はあ？朝から可愛い後輩に声掛けてもらえて、第一声がうわってなんですか」

「いやだって最近ちよくちよく朝この時間に居んだもん……」

「なんですかまさかわたしがわざわざ先輩に会いたくてこの時間に登校してきるとか勘違いして期待しちやってましたか自意識過剰すぎてキモすぎですごめんなさい」

いろは朝から元気だな……するとっ！

「おう、家堀も一緒か珍しいな。昨日はお疲れさん」

不意討ちダメ絶対！

「あっ……比企谷先輩っ……お、おはようございますっ！せせ先輩こそお疲れさまでしゆたっ」

最近私の噛みっぷりが黒歴史級な件について。

うん。これじゃあもう一本は書けないわ。

「ちよっ!?先輩無視しないでくださいよっ」

「だって朝イチから振られるとかキツいんだもん」

「だったら振られないようにもうちよっど頑張ってくださいよっ」

いろは……それももう逆告白だから……

「なにを頑張りやいいんだよ……」

「そんな事より」

だからいろはは話の展開が早すぎっ！

「今朝の先輩は普段よりもより一層目が腐ってないですかー？……もしかして……お料理教室の帰りとか、なんかあったんですか……？」

な、なんですとっ！

ま、まさかもう何かしら進展がつ!?

「え?あ、や、まあ別に特に何も」

どう考えても何も無いわけなさそう!

「……………何があつたんですか……………」

いろははす恐いいろははす恐い!

でも気付いたら私も軽く睨んじやったりして☆

「ああ、いや、マジで大したことじゃねえよ。由比ヶ浜と雪ノ下送つてつたら、雪ノ下の母親に夜遊びかと思つて怒られちまつたつてただ」

それを聞いているはは（私も）胸を撫で下ろす。

「ふむふむ、成る程です」

いろは、先輩に本物を手に入れさせてあげたいって言ってるけど、やっぱいざそうなっちゃつたら恐いんだろうね……………人のこと言えんけどね、私も。

「そうですね。雪ノ下先輩のお母さんとか超恐そうですねー」

「そりやもうな……………」

雪ノ下先輩とはるさん先輩のお母様ですからね……………

想像しただけでチビツちやいそう!

比企谷先輩の前でこんなはしたない脳内妄想してるなんて我ながら泣けるぜつ……………

「それはそうと先輩っ!」

「朝から話コロコロ変わるな……………で?なに?」

「もう何日かでバレンタイン本番じゃないですかー。学校休みですけど、なにか予定とか入ってるんですかあ?」

え?誘うの!?!それとも奉仕部リサーチ?

「おう。超忙しいぞ」

「……………えっ?」

いろはの肩がピクンと揺れた。

やっぱり、覚悟はしてても……………そう易々と割り切れるようなもんじゃないもんね……………

第三者みたいな私もちよつと手とか震えちやつてるし……

「なにせその日は小町の受験当日だからな。朝から晩まで神に祈り続けて他には何も手がつかないほど忙しい」

「うっわ……出たシスコン………はっ！まさかそう言いながら実はそれは暇アピールで何も手が付かないからと言つてあわよくば可愛い後輩を自宅に連れ込んでお祈りという名のイチヤイチャを強要するつもりなんですな正直なかなか魅力的な提案ではありますがお家デートはちよつと早いと思いますのでまずはわたしの身体じやなく心を開放させるように努力してくださいごめんなさい……はあ………はあ」

「お、おう。お前も大変だな……」

比企谷先輩振られすぎて逆に心配しちやつたよ！一切振つてないしね？

「はあ……はあ、ま、そんな事はどうでもいいんですけど……ふふっ！何だかんだ言つても、当日は何かしら予定入ったりするんじゃないですかあ？」

いろはは小悪魔顔で先輩を挑発する。

でも先輩には分かんないんだろうな……その小悪魔顔が、いつもよりちよつとだけ寂しそうなのが……

「別に……なんもねえよ……」

するといろはは冷めた感じで口を尖らせた。

「ふうくん。まあいいですけどね………でも、たぶん……」

「たぶん、なんだよ……？」

「……べつにつにー？……なんでもないですよーだっ」

比企谷先輩から視線を逸らしてつまらなそうな顔をしてるいろはを見て思った。

たぶん……やっぱり何かが起こるって、そう思ってるんだろうな………いろは。

やっぱ……恐くて不安でしょうがないよね。

私なんてなんも決意なんて出来てないってのに、こんなにも胸が張

り裂けそうなのに……

いろはは私なんかよりも遥かに張り裂けそうな胸を押さえ付けて決意を固めたんだもんね……この人たちが答えを出せるように。

「は？なんでいきなり不機嫌になってんの？」

「別になんでもないですう………とりやつ」

「痛てっ……あんだよ………」

膨れっ面をしながらも比企谷先輩の脇腹にパンチを入れるいろはがなんだか微笑ましくて……私もちよつとだけ気が楽になれた。

「ほらほらー！そんな事よりもうそろそろ行かないと遅刻しちやますよっ！せーんぱいっ」

いろはは比企谷先輩をクルリと回すと、その背中を優しく両手でポンッと押した。

先輩の耳には届かない小さな小さな声を、ぽしよりと一言添えて……

「………がんばってくださいねっ………せんぱいっ」

脇腹を擦りながら、二年生の教室へと向かう背中が見えなくなるまで見つめるいろははその横顔は、とても優しくとても暖かくて、そしてとても儂げな、そんな笑顔だった。

比企谷先輩の背中が見えなくなると、いろはは震える手を胸の前で握り締めそつと瞳を閉じて、ふう……と深い深い深呼吸をひとつ。

「よしっ………行こっか！香織っ」

そう言ういろはの顔は決意に満ちていた。

これから起こるであろう全てに対して向き合う決意の顔。

私が答える前にいろはは歩き出す。

その瞳は真っ直ぐに前を向き、その背中はまだ決して振り向かない覚悟の背中。

私はこんなすごい女の背中を追いかけられるのかな？こんなすごい女の背中に追い付けるのかな？

分からない。分からないけど、今だけは追い付かなくちゃ！追い付いて私もその背中を押さなくちゃ！

私は小走りでそのとつても小さくてとつても大きな背中に追いつくと、ポンつと優しく押した。

「だねー行こっ！」

この先、どんな未来が待っているのだろうか？

夢を叶えられる素敵な未来か、はたまた現実から目を背けたくなるような残酷な未来か……

でも、このいろはが、一年生にして総武高校トップカーストな超有名人、小悪魔系美少女生徒会長一色いろはが、あれだけ憤慨し、そしてあれだけの決意を見せた未来だもん。

だから私は見守ろう。

この子が、ううん？この子達が足掻いて藻掻いて苦しんで、そして悩みぬいた先によく見つけられる“本物の答え”を。

……そして……その時は私も!!

了

【出会い編・前編】これが私の友達とのファーストコンタクトなのである！

春眠暁を覚えずとは良く言ったもので、本日4月6日の朝も、私は春の麗らかな陽気に中々目を覚ます事無く、未だ幸せな夢の世界に旅立っていた。

『どどどどうですかね私が良くないですかね私に決めましょうよ!?
ねえ先輩！ねえってば』

「……………う、うう……………はっ!!?!……………なんだ夢か……………ってあれ?」

私なんか今、夢の中で恐ろしい体験してなかった……………?

今さつき「なんだ夢か」って言ったばかりなのに、すでにどんな夢だったのか覚えてないんだけど……………

とまあ他人の夢の話ほどどうでもいいモノはありませんよね!そんな事より……………

どうも!私、家堀香織は本日の入学式にて晴れて総武高校の新一年生となる、花の夢見る女子高生なのであります!

はあく……………今日からついに高校生活が始まるのかあ!

期待と不安に胸踊らせ、この日が来るまで待ちきれずに何度も袖を通した、我が母校となる総武高校の制服に着替えて支度を整える。

やっぱ、やっぱマジ可愛くない?この制服着た香織ちゃんてば!

髪をセツトしナチュラルなメイクも済ませ、再度姿見にてクルリと全身チェック!

銀河に響けっ!とばかりに鏡に向かってキラツ☆とした所で背後から声が掛かりました。

「はいはい可愛い可愛い。いつまでも銀河に響かせてないで、とつと

と朝ごはん食べちゃいなさいよ？初日から遅刻しちゃうわよ」

「……………」

……なにこの新生活のスタートから味わう、痴態を親に見られるという思春期には即死効果が期待できる程の地獄は。

もう早くもベッドにダイブして叫びたいんすけど。

いやいやお母さま？なんで私の反論も聞かずとつとと階段おりてっちゃうんですかね。

ここは普通「ちよつ！ノックくらいしてよっ!？」って娘が照れ隠しにキレルターンじゃないんですかね。

なんですか照れ隠しもさせてもらえないんですかそうですか。

どうやら響いたのは銀河ではなく、私の心の奥底にしまい込んである黒い歴史にだけだったようです（白目）

こうして私の新生活は、なぜか正夢にでもなりそうな、なんかよく分からん恐ろしい夢にうなされ、そして母親に鏡の中の自分に向かってランカってる所を見られてスタートしたのでした。

いやん私入学式までに立ち直れるかしらんっ？

× × ×

その後なんとか立ち直り、無事に入学式とその日のHRを終えた私は、この後一年間お世話になるC組の教室にて友人達との会話を楽しんでいた。

「へ〜！家堀さん達って中学時代からの友達なんだー!」「すごーい！それで3人で総武受かってしかも同じクラスとか!」「しかも3人揃って美人とか超羨ましい〜」

そう！私ってば結構美人さんなのだ！

いやいや違う違う。

そう！私は新しいクラスが発表されてぶっ飛んだ！

なんと中学時代から吊るんできた親友の2人と同じクラスになっていたのだ。

「まあね。私ら中学んトキからずっと同じグループだったんだよね」
親友のうちの1人、笠家紗弥加は黒髪ストレートなクール系。
ちよつとキツイ所もあるけど、私らに取っては良き姐御的存在って
所ですかね。

「ねっ！まあクラスが一緒だったのは一年の時だけだったんだけどね
〜」

もう1人の親友、大友智子は落ち着いた茶髪ボブのおっとり系な女
の子。

たまにラブラブな彼氏との自慢話がウザイ時もあるけど、私らに
取っては良きムードメーカーって所かな。

「いやしかしホントびっくりだよ。なんかこの腐れ縁はなかなか拭う
こと出来なそうだねえ。ようやく紗弥加と智子から解放されると
思ってたのにさっ！」

そしてわたくしことリア充丸出し美少女、家堀香織の3人ユニット
でお送り致しますあす♪

「いや解放されたかったのは私らの方だからね？このオタっ……！」
すばこーんっ☆とスリッパでひっぱたくかの如く紗弥加の頭をど
ついて、私達に集まってきた新クラスメイトへのお披露目は滞りなく
なく過ぎてゆくのでしたあ。

× × ×

そんなこんなで新生活がひと月近く過ぎる頃には、クラス内での
カーストがある程度出来上がってきていた。

私達、香織と愉快な仲間たちーズは、まあ所謂クラスの二番手グ
ループという所かな？

中学の時もトップグループにはならず、大体二番手グループだった
んだよね。

まあそもそも私ら自身がトップグループというカーストトップに
興味があんま無いから、クラスメイト達に根回しとかしないから
なあ。

もつとこうトップ風を吹かせて派手目な子たちやイケメン君たちを取り込んでいく活動、トリカツをすればトップになれるんだろうけど。

なんだよトリカツって。Let's トリカツ!!

というわけで別に二番手グループに甘んじているのは普段なら一切気にしない私達なのだが、今回ばかりはそうもいかないようだ。特に紗弥加が。

「ホントまじウザい、あの女。あんなんにでかいツラさせとくとか無いわー」

紗弥加の怒りのアフガンな視線の先を見るとそこに居るのは……

「ええ〜？マジでえ？そんな事ないからあ！私じゃまだ芸能人とかはなれないってえ」

うっぎ。確かにうっぎ！まだってなんだよまだって。

ま、正直見てくれは私らよりちよつと上かな？ちよ、ちよつとだけなんだからねっ!?

まあ見てくれ云々はどうでもいいとして、何しろウザい。

襟沢恵理。

見た目が華やかで目立つ女は他に1人居るけど、現状ではコイツがクラスの中心的人物だろう。

確かに初日は「おおっ……あの子可愛いなあ……」とか感心しちゃった事も遺憾ながら一瞬だけあったけど、翌日からはウザさ爆発!

その美少女な存在感を生かしてクラス内の派手目な子たちに声掛けまくってグループ作って、今やクラスの中心を占領しているトップカーストグループの中心になっちゃってんだよねー。

私達にも二番目に声掛けて来たんだけど、ああ、はいはいと軽く扱ってたらどうやらお気に召さなかったみたい。

それでも最初こそ自分のグループに引き入れたメンバーには気を遣う素振りも見せてたんだけど、入学式から1〜2週間くらいたった頃からアイツ急にあの金髪ドリルにしてきたんだよね。

どうやら二年生の有名な先輩に憧れて真似してるらしいのだが、金髪ドリルにジョブチェンジしてきてからさらにウザさが留まる所を知らなくなった。

どうやらその有名な先輩をさらに真似て女王様にでもなりたいたらしく、周りに気を遣う美少女から気を遣わせるエセ女王様に変貌してしまい、しかもなんかウチらのグループに敵対心を持つてるっぽくて、とにかくもう果てしなくウザいのだ。

「ホントどうすつかなく……こんな事なら最初からアイツに対抗して、ちゃんとグループ作りしとけば良かったよ〜」

Let's トリカツ!!

「最初はあそこまでの子とは思わなかったからね〜。三浦先輩に憧れて髪型変えてきてから、さらにおかしくなったよね〜」

「てか影響受けるの早すぎでしょ! その三浦先輩って人を知ったのだから、たかだか1週間やそこらだったっつうのに」

いやホント世間に流されるタイプなんだろうねえ。

そしてここで私も会話に参加することにした。

ピコーンと頭の上で電球（白熱）が光ったのだ!

「大体女子高生で金髪ドリルとかお蝶夫人かつつー話だよねっ。そもそも女子高生に対してあだ名が夫人って、それもはや蔑称じゃね（笑）？」

渾身の香織んジョーク炸裂うっ!

ぷっぷーつと小馬鹿にするように笑って、紗弥加たちからのリターンを待ってたのだが……

「……………とりあえず襟沢よりグループランクが下とかちよつとないよね」

「うーん。それはあるかもねー」

……あつれえ? 香織ちゃん渾身の鉄板ネタが、すっげえ間が合ったあと結局スルーされちゃったのん?

ダメです師匠（マイマザー）……師匠から伝授されたネタじゃ、古すぎてここではもう通用しないってよ……

ふええ……なんだか顔が熱いよお……絶対ウケると思ってたアニメネタを一般人にスルーされた時の死にたい感は異常。

それでもめげずに会話に加わる私まじクール。

「……つつてもさ、もう今更って感じあるよね。大体グループなんか出来上がっちゃってるし、めぼしいトコは襟沢に押さえられてるしさー」

「そうなんだよねー……くっそ、マジで失敗したあ……」

すると智子が遠慮がちに意見を言い出した。

「え、えつとさ……あの子はどうなのかな……？」

「あの子？」

「だれ？」

「ほ、ほら、あの子……」

智子が苦笑いしながら見つめる視線の先に居たのは……

「えー？そんなことないよー。わたしなんて全然だよお。彼氏とかだって居たことも無いしー！」

ア、アレ……？

クラスの男共の半数が群がるその中心に居るアレのこと言ってるんだよね……？

デレデレと緩んだ顔の男共が群がるその中心には、このクラスで襟沢と並ぶ美貌を持ち男子人気は襟沢以上。

襟沢がグループを作る時に、私達に声を掛けるよりも真っ先に声を掛けた人物。

「えー？カラオケー？このメンバーでー？」

すでにこのクラスの男共を手中に納め、他のクラスの男共にも多くの信者がいるらしいという噂の女。

「えー？でも男の子ばかりの中で女の子わたし1人ってちょっとヤバくなーい!？」

いいな、って思った男子を根こそぎ持ってかれて、すでにクラスの女共には確実に敵視されてハブられてるあの女。

「う〜ん……どうしよつかなあ？みんなちゃんと紳士で居てくれるう……？」

もつともハブられていると言うよりは、本人が女子と仲良くする気があるのかが疑問ではあるけどもっ！

「じゃあ〜、下僕……ボディーガードとしてー、サッカー部の先輩1人連れてつてもいいならいいよお？えへへっ！みんなとカラオケ楽しみ〜♪」

そう。そこに居たのは、亜麻色の髪をふわりとたなびかせ、魅惑的な笑顔と心を弄ぶ上目遣い、甘い猫なで声で今日も男たちを魅了し続ける総武高校一年C組小悪魔系美少女、一色いろはだった。

続く

【出会い編・後編】これが私の友達とのファーストコンタクトなのである！

香織と愉快的な仲間たちーズが見つめるその先でクラスの男共を手玉にするジャグラー一色を、紗弥加は蔑んだ視線を送りながら一言物申す。

「……智子あんた本気で言ってるの？アレはいくらなんでも無いでしょ……」

「そっかなあ……男の子ばっか周りに居るけど、一応どこのグループにも属してないし、意外と誘ってみたらいけるかもよ？」

あんたバカア？

……こんなベタなツツコミさせんじやないわよ……つたく。アレは属してないんじゃないよ……

「女子にハブられてんじゃないのよアレは。アレを仲間に取り入れつつもむしろ私たちに対する風当たりが強くなったらどうすんのよ……あんたバカア？」

もう一回言っちゃったよ！私……しかも脳内じゃなくてリアルでっ！

いやん恥ずいっ。

「そうだよ。それに大体一色じや襟沢と大して差が無いくらいムカつく感じじゃね……？」

「でも一色さんは私たちに敵対心持ってるワケでもないから私達的には別にムカつかないしー、」

はいはいスルー余裕ですよね分かってましたよ。

でも若干オタっぽい男子グループがハアハアと私に熱視線を送って来てる気がするのですが……

やめてっ？私そういうんじゃないですからっ！

「あの子がいくら男子たちを手玉に取っても彼氏持ちの私達に害ない

しー、多少イラツときたとしても襟沢さんのグループに対抗する為だけに我慢して表面上だけ仲良くしとけばいいじゃん？それにホラ！やっぱり一色さんが原因で風当たりが強くなるようなら、それこそとつと切り捨てちゃえばいいじゃない？罪悪感とか感じなくて済みそうだしー♪」

「……………」

……ちよつと聞きました!?奥さんっ!!

大友さんちの智子さんたらあんな酷いこと笑顔で言ってますのよっ?

あらやだっ！これだからおっとり系とかで通ってる女が一番腹黒くて怖いのですっ！

やあねえ！ちよつと見てよあの笑顔！ゲスよゲス！

脳内井戸端会議が終了するのを見計らって紗弥加と頷き合う。

紗弥加はヒクヒクと引きつった顔で私に聞いてきた。

「か、香織。こういう時つてどんな顔すればいいのかな…………？」

キ、キツタアーーーツ☆

「……………笑えばいいと思うよ?」

人生で一度あるかないかのチャンスをもノした私はとてもとても満足顔でした。

× × ×

『やっぱ私も紗弥加と一緒に一色は無いと思うわ、今んとこね。ちよつと様子見てみようよ』

更なるオタグループからの熱視線を乗り越えて(やべえ…………早くもバレてね…………?)、一色いろはをグループに引き入れるのかどうか?って案は一先ず棚上げにしておいた。

一色いろはかあ…………

私がC組に入ってきてまず目に入ったのが一色と襟沢だったんだよね。

襟沢が積極的にグループ作りに勤しんだのに対して、一色は一切動かずに男子が寄ってくるのをただ待っていただけだった。

待つてれば勝手に僕《しもべ》が集まって来るつて事を良く理解してるんだろう。

襟沢に声を掛けられた時も甘ったるい声で応対してたけど、あれつてどう見ても男に対する撒き餌でしかなくて、襟沢本体には一切興味なさげな態度を示してたつて。

だからこそ襟沢もご立腹になつちやつて、未だに私達グループに対する敵対心よりも一色個人だけに向けられる敵対心の方が上なんだろうけどね。

いやまあ私達もかなりぞんざいに扱いましたけどね？だつて私の下に付かなあい？つて空気が見え見えだったんですものアイツ。

確かにあの人気者（男限定）をグループに入れれば、クラス内の勢力図がガラリと変わるかもしれない事は間違いない。

なにせあの襟沢が真つ先に仲間を引き入れようとした程の存在感だもんね。

でもやつぱかなりリスキーではあるんだよねー。

あんな敵ばつかの女なんか入れたらどんな目で見られることやら……

でも私達グループの元々の影響力に、一色いろはの良くも悪くも圧倒的存在感をプラスすれば、そんな有象無象の目なんか寄せ付けない程の強烈なグループにだつてなりえるかも知んない。それこそ学年カーストのトップにだつて！

フハハハハッ！圧倒的じゃないか、我が軍はっ！

でもそもそも一色が女子グループからの誘いなんかに乗んの？つて問題点があるんだよねー。

だつてアイツ男にちやほやされて男を利用する事しか考えてない

でしょ……

なんだかんだ言っても、あの猫っ被りの態度はやっぱり気に食わないし………なんだかんだと言われたら、あの猫っ被りの態度はやっぱり気に食わないしと答えるのが世の情け！

なぜ言い直した。

……とにかく襟沢の為にあんなしよーもなさそうな女を引き入れるのって、ミイラ取りがミイラになっちゃう感じでもあるのよねー。

白い明日はどこで待ってるの？

× × ×

「……はあ、はあっ………はあ」

ちよマジかよこの部活……

なんで文化系の部活に入ったのに長距離走らされて体力つけさせられんよ私っ……

くっそう……騙されたあっ……！ただちよっとトランペットを吹いてみたかっただけなのにいつ……トランペットで鳩とコラボしたかっただけなのにいつ！

「げほっ……ほっ………嗚呼、しんど……」

ようやく本日のノルマを終えて学校に戻り校庭の脇を通り過ぎようとすると、それはもうイラつく程の甘ったる〜い声が辺りに響き渡った。

「葉山せんぱあい！お疲れさまでーっすう！タオルどおぞ〜っ♪」

うっわ………と思つてチラリと目を向けてみた。

おお………アレが巷で話題の最上級トップカーズト葉山先輩かあっ！

「ありがとう」とキラッキラした笑顔でタオルを受け取るそのイケメンはどうでもよくて、私が気になったのはそのキラキラ王子にタオルを渡している人物の方だった。

………なにあれ？サッカー部の女子マネ？

なに？最近のマネージャーってのは専属だったりすんのかい？芸能マネージャースタイルだったりすんの？プロデューズしちゃうの？Y o u やつちやいなよ！

他にいくらでも汗ダラツダラかいて引き上げてくる部員もたくさん居るつてのに、なんであの女子マネはそこから一步も動かないで葉山先輩だけに笑顔を振りまいているんだい？

ホラホラ、ほかの部員もタオルとか欲しそうにしてんじゃんよ。なんかウザそうな部員が「つべー！いろはすー！いろはすー！」とか喚いてるし！

なんだよそんなに天然水飲みたいの？

ま、理由は痛いほど分かるよ、いくら私だってさ。

でもコレは無い。マジお前みたいなのは部活やんなよ。ああいう女見てるだけで爆発すればいいのと思っちゃいますよねー。

あ……そういえば一色も確か葉山先輩目当てでサッカー部に入部したって聞いたなあ。

取り敢えず今は視界の中には居ないけども、あの女も部活中は大方あんなもんなだろう。

なんだか一色とこの馬鹿マネがあまりにも重なりすぎて、余計にグループに引き入れるのなんて冗談じゃないわよおうっ！つて思いが強くなってしまった。

ふむ。やっぱあの案は却下だな………そう思いながら校舎裏を歩いていた時のことだった。

「いろはちゃんっ！お洗濯はもう終わりそう〜？」

ん？いろはちゃん？

「ごめん！もうすぐ終わるー！………つてやっばい！もうこんな時間じゃん!?ドリンクとか用意して早く持ってかないと戸部先輩とか超ウザいっ！」

「大丈夫だよ〜！もうドリンク準備終わってるから、あとコレやつたら持つてただけだよっ」

「わ〜！さつつすがあ！……よしっ、干し作業完了つとー。やばいやばい早く行かなきゃ！行こつ！」

「うんっ！そろそろ戸部先輩がいろはすいろはす騒いでるかもね〜っ」

「もー！笑い事じゃないよ〜。あ〜、まっじウツザい……戸部許すまじ……」

そんな会話をしながら汗だくになって、女子生徒二人が猛ダツシユで駆けていった。

うっそ……今の一色なの……？

クラスで男に愛想振りまいてる姿と全然違うじゃん……

さっきの馬鹿マネと違って明らか裏方作業を汗まみれで超一生懸命やってたし、友達と思われるもう1人の女子マネと楽しげに会話する姿もクラスの女に話し掛けられた時とは全っ然違う……

一色って……実は素は結構真面目で一生懸命で、心を許してる同性にはあんなにも本性を丸出しにするようなヤツなのか……少なくともさっき馬鹿マネ見ちゃった時の不愉快さなんて全然無い。

ヤバイどうしよう………ちよつとだけ興味湧いてきちゃったかも私っ。

意外とグループに入れてもなかなか面白いヤツなのかも知らない

……！

「……よしっー！」

私は明日紗弥加達に話すある決意を心に決めて部活動へと戻るのだった。

ちなみに帰ってくるの遅すぎイイイ！と、明日からの基礎体力作りメニューの追加を言い渡されて枕を濡らしたのはまた別のお・は・なしっ☆

× × ×

翌日の休み時間。私は紗弥加と智子に告げた。

「昨日の智子の案だけどき、なんか意外と面白そうな気がしてきたよ？あたしや！」

「だよねー！」

「はい？マジで言ってるの？いやいや無い無い！絶対ロクな事にならないって！」

ま、そりやそうだ。私だって昨日の放課後の光景を目の当たりにしなかったら絶対無いと思ってたもん。

だから一応報告しておいてやろうかね。

「実は昨日さ〜」

そして私は昨日目撃した光景及びその際の自身の感情を打ち明けた。

「でもなあ……」

さすがに強情ですな紗弥加さん。

まあ実際に目撃しないと伝わり辛いのは良く分かる。

「ええー？今度の日曜日ー？どーしよっかなあ？映画もごはんも全部出してくれるって言われてもなー。午前中だけでも良ければ考えちやおっかなー？」

………だってアレだもの。

だから私は昨日の智子の台詞を引用してこう言った。

「腹黒智子の言う通り、風当たりが強いんならとつと切り捨てちゃえばいいしさ〜」

「ちよ!?!腹黒ってヒドくない!?!」

ちよつと腹黒はお黙り？

そして私は紗弥加を一発でオトす一言をニヤリとこう付け加えた。

「一色をうちのグループに上手く引き入れられた時の襟沢の悔しがる顔とか、想像しただけで爽快じゃねっ？」

「採用っつっ！」

こうして一色をグループに引き入れるという、法案提出当初はあまりにも馬鹿馬鹿しいと思われた案が、この度満場一致で可決される事となったのでした！

ま、一色が乗ってこなきや意味ないんだけどねー。

× × ×

四時限目終了のチャイムが校内に響き渡ると同時に、私達はすぐさま動き出した。

だって隙を見せると一色の元にすぐ男子が群がって来ちゃうんですもの！

私達3人は一色の待つ席へと足早に進む。

「えつと……一色さん」

思えば高校入ってクラスが決まって、あと少しでひと月が経とうという今日この日の今この瞬間が、私と一色いろはのファーストコンタクトであった。

先頭の私が一色に話し掛けると、教室は一瞬騒然とした。

クラス内カースト2位の私達グループが、昼休みに3人揃って異端児の一色に話し掛けるといえるのは、この狭い狭い世界の中では一大事！大事件勃発なのだ！

襟沢グループも固唾を飲んで超見てる！

てか襟沢超見過ぎいいい！

「えつと……家堀さん、だよね？……なに？」

訝しげな表情と、どうやら素らしいちよつと低めな声で警戒心剥き出しの一色に、私は一言こう言ってやるのだった。

「あのさー、私達と一緒に弁当食べない？」

ほんの一瞬だけ唾然とした表情を見せたが、次の瞬間には私達3人を値踏みするかのように下から上へと舐め回すように観察する。

イヤッ！そんなに舐め回さないでちょうだいっ？まだ心までは許して無いんだからあつ！

すると本当に一瞬だけチラッと襟沢を一瞥すると、すぐに私達に視線を寄越してニヤリとした。

なにこの子ニュータイプなのん？

やはりコイツは只者じゃあ無い。そのニヤリと笑った笑顔は、いつ

も教室で見るような……うーん、なんていうんだろう……ああ、あざとい？って言えばいいのかな？

そのあざとさとか一切無い悪魔の笑みを浮かべたコイツは、私の想像通りなかなか面白いヤツらしい。

そしてすぐさまいつもの営業用あざとスマイルを張り付けた一色はニコツとこう言うのだった。

「うんっ！いいよおー？」

こうして私、家堀香織と一色いろはのファーストコンタクトは、それぞれの思惑を抱えながらも無事果たされたのだったのですっ！

× × ×

「ちよつと香織ー」

「ちよ！香織ちゃんっ!？」

「……んあ……？」

はれ……？なんだ私いつの間にか寝てたのか……

なんだよまた夢オチかよと思つて辺りを見渡すと、そこにはコーヒーの香りと居心地のいい空間、そして友人達の呆れた顔が待っていた。

「ちよつと香織っ！今わたし説教中だよねー!？」

「香織ちゃん……ずるいよお！私ばかりこんな怒られてるのに、なんで当事者の香織ちゃんが寝ちやつてんのよお！」

「？　なんで襟沢正座してんの？」

「香織ちゃんのせいでしょお!？」

今日はバレンタイン当日。

私達グループは、バレンタインだというのに女5人で寂しく例のカフェに集合していた。いや、正確には集合させられていた。いろはの号令により……

あの流血のバレンタインイベントと魅惑のノーパンナイツから数日が経ち、私が比企谷先輩とこつそりデートしてた件&それを目撃したのに黙ってた件でいろはからお小言を頂戴しているのだった。

「香織あんたさー、略奪愛しようとした張本人の癖に寝てんじやないわよ……」

「そうだよ香織のお馬鹿っ！私なんて今日とも君との予定バツチリ入ってたのにいい！」

「ていうか紗弥加ちゃんと智子ちゃんだつて私と同罪のはずなのに、なんで香織ちゃんと私だけ正座させられてるのお……？」

「はいそこ五月蠅い。まだ言いたいこと半分だつて終わってないんだから静かにしようねー……恵理ちゃん……？」

「ひいっ!?……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……でっ、でも正座はなんとかしない!?お店の人の視線がずっと痛いんですけど……」

「あつれ〜?なにか問題でもあるのかなー」

「無いです」

うふふふ……かれこれ一時間以上続いているいろはの説教TIEに、どうやら私は気を失ってたみたいっ。

それにしてもずいぶん前のことを思い出しちゃったなあ。

私は正座しながらも、ふと友人達の顔ぶれを見渡してみた。

あんな出合い方をした私達が、約10ヶ月後にはまさかこのメンバーで、こんな風にお茶会を開いてるだなんてねっ。

正座させられて長時間説教受けてるお茶会ってどんなだよ。

紗弥加と智子は中1からの付き合いだからいいとして、あれほど敵対心を燃やして、なにかつーと絡んできてウザくてウザくて仕方なかった襟沢が、まさかまさかの今や私らグループのマスコットキャラみたいなもんだなんてね〜。

そしてあんなだけ男をジャグリングして、あんなだけ女子から孤立してたあのあざとい小悪魔一色いろはが、今や私らグループの中心でもあり、そして今や私の恋敵とかっ(笑)

襟沢にしてもいろはにしても、どっちもこれっぽっちも想像してなかった異常事態のはずなのに、なんだかすでにこんな光景が当たり前のように感じる程になんだか自然で心地いい。

ま、実際はあの後もGWやら夏休み、林間学校やら文化祭と本当に色々あったし、いろはと本当の意味での友達になれたのももう少し先の話だったりしたんだけどねっ。

でもまあそのお話は、いずれまた別の機会にでも思い出す事にしましょうかね♪

超説教してるいろはの膨れっ面と、それを聞きながら白目を剥きかけている襟沢。そしてそんな2人を見ながら何だかんだ言ってケラケラ笑っている紗弥加と智子の顔を見渡して、私家堀香織は気がつけばだらしなく頬が緩んでいたのでしたっ☆

「ちよつと香織いいい……なんでわたしがこんなに怒ってるのに、被告人の香織がなんでニヤニヤしてんのよお……?」
「ひいいやあああつ……ごめんなさあーい！」

終わりっ！

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になつちやう件つ①

「ひっ……ひぐっ……ふえ、ふええええ」え”え”くん！」

………やっちゃった………やってしまった………

自分から騒ぎの中心の場にした癖に、その中心の場であるここ一色いろはの席の前で、クラスメイト達の大量の視線の前でとんでもない大泣きをしてしまった………

私は高校に入学してからというもの、常にクラスの中心であろうと意識し振る舞ってきた。

小学校低学年の頃はあんまり気が付かなかった自分の魅力も、高学年になるにつれて次第に意識し始め、中学生になる頃には自分の魅力を生かして常にクラスを中心に居るようになり、みんなもそんな私をお姫様みたいにチャホヤしてくれた。

だから高校生になっても当然お姫様で居られるだろうと振る舞ってきて、実際にお姫様になれていたはずの私に、とんだ落とし穴が待ち受けていた。

チャホヤされる事に慣れすぎて私はすっかり忘れていたのだ。

私は……襟沢恵理は……元来とつてもとつてもヘタレだったのですうっ……

× × ×

「ううう……やだなあ………」

とんだ醜態を晒しちゃった翌朝、私は教室の扉の引き戸に手を掛けたまま固まっていた。

昨日のお昼休みにアレがあつて、五限の休み時間もLHR後もずっとしゅんとしてて、私のグループの子たちともグループ外の子たちとも一切言葉を交わさずに帰っちゃったんだよね……

だつてもうずっとお腹痛かったんだもん……

みつともなく泣きじやくつて凹みまくつて、そんな私を今までと同じようにみんなチャホヤしてくれるんでしようか……

「お、おはよおー！」

カラリ……と扉を開けた私にグループの子たちから向けられた視線と言葉は……

「……っ！お、おはよー！」「おはよー！恵理ー……」「あつ……、恵理ちゃんおはよつ……」

お姫様を見る目、お姫様に掛ける言葉じゃなくつて……とつても気を遣つてるかのような、痛々しい腫れ物に触るかのような、そんな空気を孕みまくつたモノだった。

どうしよう……もうトイレ行きたいいつ……

× × ×

結局あの日から数日。私はグループで……というかクラスで完全に浮いた存在になつてしまつていた。

ふええ……別に無視されたりする訳じゃないんだけど、本当に腫れ物扱いだよおうつ……！！

お昼休みなんかも、一応グループで集まつてはいるものの、私は完全に蚊帳の外なのです……

たまに話し掛けてきてくれても、とつても気を遣つてくれてる感じで、それが我ながらあまりにも痛々しくつて……

くつそ！それもこれも全部アイツの……一色いろはのせいだつ！
アイツさえうちのクラスに居なければ、私は完全にお姫様……んーん？あの方みたいになれてたハズなのにつ！

——でも……さんざん突つ掛かったり勝手に生徒会長に立候補

させたりと、ただでさえ酷い事してきてすっごい嫌われてるはずなのに、あの日、私が大泣きしちゃったときは優しいというか大物感が漂ってて、ちよつと格好良かったんだよねえ……いろはちゃん。

『ひっ……ひぐっ……ふえ、ふええええ”え”え”くん!』

『……え!?ちよつと恵理ちゃん!』

『うわっ……え、襟沢!?!……マジで!』

『ふえええええんっ!』

『ちよ!?!い、いろはどうすんのコレ!?!』

『いろはなんとかしてよー!』

『な、なんとかって言われてもっ!』

『あ”ああああくくんっ!』

『うつわ……マジめんどくさっ……!た、たくっ……しよがないなあ……えつと、恵理ちゃん?』

『うえええええつ……』

『た、確かに先輩のことなんか一つも知らない癖に、勝手な噂と思い込みだけで酷いこと言った恵理ちゃんにはちよつとムカついたし、弄りで勝手に生徒会長にさせられそうになったことも一時期は正直ムカついてただけだね……?』

『……ひっ……ひぐっ……』

『んー、でもね?今は不本意ではあるけど、ホントに感謝してるんだー』

『……ひぐうっ……?』

『私は恵理ちゃんに生徒会長に立候補させられたおかげでね?今まで味わったことないような素敵な出会いとか素敵な経験がたくさん出来たんだっ。んでその体験はこれからもずっと続いてく予定なの』

『……ぐすっ……』

『恵理ちゃんに陥れられなかったら、絶対に出会えなかった素敵な出来事だからさ、逆説的に言うとな恵理ちゃんが私の恩人まである。

……ってコレは誰かさんの物真似なんだけどっ』

『……』

『だからさあ、先輩を馬鹿にしたムカつきは、その恩でチャラにしたげるよ。さつきの騒ぎは無かった事にしてあげるから、ね?』

とまあそんな感じで私はようやく泣き止んだんだっけなあ……

いろはちゃん、マジで変わったというか……強くなったというか……

前はあるんじゃないや無かったんだけど、今のいろはちゃんは、悔しいけど、悔しすぎるけど、ちよつと尊敬しちゃうトコがあるんだよね……

そんな変化したいろはちゃんの対応に感化されて、結局あの日以降クラス内での反いろは派の動きは衰えていく一方だったし……ていうか恐れてるフシさえあるしで、そして意図せずになんか変化を引き出してしまった私は、なんといいですか……同じクラスになった日からずっと宿敵関係だと勝手に思いこんでたいろはちゃんが、妙に気になるようになってしまったのです。

早い話が……ちよつと友達になりたいなあ……つて。

だって!自分のシヨボさを自覚しちやつたからこそ、私もあんな風に変わりたいたもんだもん!

だから私はなんとか仲間に入れてもらえるように、いろはグループを観察するようになってしまったのですつ。

× × ×

あの大哭き事件から一週間以上経ち、あつという間にマラソン大会が終わってからも、今日もジィィィつといういろはグループを観察する日々が続いていた。

「んー?いろはー、なんか土日の良い事でもあったのー?」

話し掛けているのはいろはグループNo.2の香織ちゃん。

週明けの今日は、なんだかいろはちゃんが朝から上機嫌なんだよね。

グループの紗弥加ちゃんと智子ちゃんは、そんな緩みきつたいろは

ちゃんの顔を呆れ眼でただ見ている。

「ふへへえく……」

「ね、ねえ……？い、いろは？」

「……ふへっ？な、なんか言った!？」

「あんた心ここに在らず過ぎでしょ……」

こここのところ、図らずもいろはウオツチャーと化してしまったている私は知ってるのっ。

あの緩んだ顔は、年が明けてからたまに見せるようになった表情なんだって！

………てへっ！これじゃこのところどころか、年が明ける前からずっといろはウオツチャーだったみたいじゃありませんかっ！

「えへへ、ちよつと土曜日に先ば………知り合いとデー……遊びに行っただけど、結構楽しかったなあってさっ」

前から思ってたんだけど、いろはちゃんの言い直して……素、なのかなあ……

それももう意味無くない？

「おおおっ！そ、それってまさか！比企があっつ!？」

「お前はまだ黙ってなー」

さつきまで呆れ眼で見ていた恋バナ大好き智子ちゃんが光の速さで反応したところを、紗弥加ちゃんが光の速さで頭をはたいて黙らせた。

まあああやって止めとかなないと、智子ちゃんていつも自分のラブラブな彼氏の話題に持ってっちゃうもんね。

それにマラソン大会終了直後のあのグループを見てると、いろはちゃんの真の想い人の話題に関しては、とりあえず黙認というか、いろはちゃんが自ら語りだすまでは見てみぬフリを通すっぽいしねえ。

あつ！もちろん私、マラソン大会中も表彰式もあのグループの近くでこっそり観察してました！

なんかたまに冷たい目をした香織ちゃんと目が合った気がしたんだけど、それは恐らく気のせいのはズっ♪

「ほう……このリア充め……早く爆発すりゃいいのに………で？ど

「こ行ってきたの?」

「いや……そういう爆破計画はお得意の脳内で言っつてよ……超聞こえてるから……」

か、香織ちゃんてあの見た目と元気な性格でかなりモテるリア充なのに、なんかちよつとスレてるんだよねえ……

まあ確かに可愛いくても裏では残念美少女って言われてるけどつ。

……わ、私も言われたりしてないよね!?

「んーつとねえ……えへへえつ、卓球したりラーメン屋さん行ったり!……あとはー……あ、やー、な、なんでもなーい」

「なにそれ気になるんだけど。……つてか卓球にラーメン!?な、なんか『うっわ……この男最低ランクのレベルじゃね……?』とか『ポイント低くすぎて笑えるんですけどー。マジきもーい』とか言っつて、普段なら即お断り&そいつとは二度と行かないコースじゃね!？」

「……香織がわたしの事いつもどういう目で見てんのかよく分かったよー」

「ひいつー!」

「てか紗弥加と智子もなにウンウン頷いてんの!？」

「べ、別にな……!？」

「ききき気のせいだよだなー!」

思わず私も一人でウンウン頷いてたら、なんかいろはちゃんにギロリと睨まれた気がしたんだけど、き、気のせいだよねえ……!?

ちよ、ちよつとトイレ行っつてこようかなつ?

「まあ確かに普段なら帰つてるトコだけどお……」

「やつぱ帰んのかよ……」

「ふふふー、でもそれつてさー、つまんないのはデートコースとかデートの内容じゃなくつて、単純に相手つてだけの話なんだなあ……つて気付いたのつ……」

そう言ういろはちゃんは、その一昨日あつた、瞼の裏にでも焼き付いてるのであろう素敵な出来事を思い浮かべるかのように一度瞳を閉じてからニンマリした。

「へへ〜……うんっ、超楽しかった……！卓球は勝っちゃったしい、ラーメンも意外と美味しかったしっ……ねえねえ知ってる!? ラーメン屋さんで食べるラーメンで、カップラーメンとかと違って超美味しいんだよっ!? えへへっ！また連れてってモーらおっ♪」

なんかホントに幸せそうだな、いろはちゃん。

相手はあの憎つくき二年生だろうけど、あのビッチ丸出しで超ムカつくいろはちゃんをあんな風に変えちゃったあの二年生って、やっぱりいろはちゃんが言うようにホントは魅力的なのかなあ……？

「でもさあ、ホント信じらんないんだよー？あの人！最初は卓球じゃなくて映画見に行ったのにさっ、なんと！わたしがこれ見たいって言ったら、「じゃあ俺はこれ見たいから、終わったらスタバで待ち合わせな」って、ナチュラルに別行動取ろうとすんだもん！」

うわあ……

「うわあ……」「うわあ……」「うわあ……」

あ、なんか私、今ちよつとグループの一員になれちゃったかも！いろはちゃんの衝撃告白に四人（三人＋遠くから眺めてる一人）でシンクロしてたんだけど、当のいろはちゃんはブツクサ文句を言いながらもとつても楽しそう。

そんないろはちゃんを、香織ちゃん達は呆れながらも温かい目で見つめていた。

……いいなあ……やっぱ私も、あのグループに入れて貰いたいようっ！

つつい羨望の眼差しでガン見しちやっけると、香織ちゃんが急にヒソヒソ話を始めたみたい。

「……ところでさ、今日も襟沢が超見てんだけどー……」

「ねー……なんかここ最近ずつと視線感じてるー……」

「なにアイツ、私らのストーカーかなんかになっちゃったん……？」

「なんかキモいよねー！」

「智子声でけーよ……」

ううっ……ぐすんっ……ぜ、全部聞こえてるんだからあ!!
そして私は涙を滲ませながら真っ直ぐトイレへと向かうのでし
たっ……

続く

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件つ②

今日も今日とていろはグループ観察日記！

さ、さすがに日記はつけて無いけどね!?これで日記とかつけてたら、まるで私ストーリーカードだよおつ。

……………あ、また香織ちゃんと目が合っちゃった。

な、なんで香織ちゃんてそんなにゴミを見るかのような冷たい目で人を見られるの…………!?

うん。でもでも！まだストーリーカードとかまでは見られてないハズ！

…………こないだストーリーカードとかキモいとか言ってたような気がするけど、そんなの気のせいのはズだもん…………!

「いろはなんか忙しそうだよねー。あんまりとも君の話も聞いてくれなくなっちゃったし」

「いや、そんなもん始めっから聞いて無いから。…………んー、でも今かなり忙しいんだよねー。あと一週間くらいでフリペ完成させなくちゃなんないからさー」

「そ、そんなもん…………」

「アレ?なんか二月中旬くらいまでは余裕あるとか言ってたかったけ?…………あー、兄貴のツテの印刷所の持ち込み期限的なアレでか」

どうやらいろはちゃんは、今季の余った生徒会の予算を決算までに無理やり使いきる為に、期間ギリギリで無理繰りフリーペーパーなるものを作ってるみたいなのよね。

で、以前クリスマスのイベントの時に印刷物を発注した時の印刷会社さんをお願いした所、入稿締め切りまでに余裕が無くなっちゃったみたい!

ちなみにその印刷会社さんつてのは、紗弥加ちゃんのお兄さんが……ど、同、人……誌？とかなんかを刷る際にお世話になってるトコみたいで、紹介であれば安く済むかもって事でクリスマスの時にいろはちゃんが紗弥加ちゃんに紹介をお願いしてたのをたまたま聞いてたんだよねつ。た、ま、た、ま……！

「そーなんだよねえ……二週間でも厳しいと思ってたのに、掲載内容の監修やら確認の各所への手配、それによる修正反映諸々を考えたら、一週間くらいしか余裕がなさそうって雪ノ下先輩に言われちゃつてさあ……」

「……………」

……………？

い、一体いろはちゃんは何の話をしてるんだろう……？香織ちゃん達の頭上にも疑問符がフヨフヨと浮かんでる。

な、なんかおおよそ女子高生の口から出てくるセリフとは思えないんだけど……！

い、いろはちゃん……意識高そうでカッコいい！

「まあなんだか良く分かんないけど、印刷関係とかってシビアっぽいもんねー」

「いやいや、私は兄貴から聞いても良く分かんなかったけど、香織だけはそういうの詳しいんじゃないの？だってあんた中学ん時に同人誌がどうこうつぶうっ!!」

「ちよちよちよつと紗弥加!?わ、私同人にまで手え出してないんだかんね!?!」

紗弥加ちゃんの頭をはたいて必死に否定してる香織ちゃんなんだけど………たぶん香織ちゃんの趣味がクラスにバレてないと思ってるのは香織ちゃんだからね？

大体あの子、興奮するとそういうオタク用語?みたいなもの、すつこい大声で叫ぶし……(笑)

「いったあ……ま、まあ香織の残念っぷりはどうでもいいとしてさ、」

「残念っぷりって酷くない!?!」

「大体そのフリペ？作りだつて、予算云々はあくまでも建て前で、本当は例の先輩に頼る口実が欲しかったからなんでしょ？」

「ちつ、違つ……！た、頼りたかつたんじゃないよ……！……うう……！……！そう！利用！わ、わたしに會長押し付けた責任とつてもらう為に、キリキリ働かせて散々利用してやろうつて思つてるってだけっ！もう先輩はわたしの奴隷みたいなものなのっ！」

はいはい。

「はいはい」「はいはい」「はいはい」

無意味と分かつていながらも、真つ赤になつて一応否定してるいろはちゃんに対しての心のツツコミをしたところ……やたっ！またシンクロしちゃった！やっぱり私つてあのグループに合つてると思うのっ！

うう、早くグループに交ざりたいよう！

するといろはちゃんは、ぷくうつと頬を膨らめます。最近はクラス内ではあんまり見せなくなった仕草だよねえ。

「もー！はいはいつてなによ、はいはいつてー」

「だーからもうそういうのは想い人の前だけにしときなく。まあそういうトコ見ちゃうと爆発を望んじゃうからこつそりとイチヤイチャしてね〜」

「んべえーっ！」

いろはちゃん？そのべーつもあざといよ？男子がやらしい顔して見てるからね？

それにしてもあのグループは、いろはちゃんの想い人が誰なのかに關しては見てみぬフリをするみたいだけど、隙あらばからかう事は忘れないのよね。

ぐぬぬっ……なんか羨ましいいっ！

私も早く交ざりたいっ！私も一緒にからかい合つたりしたいのにっ！

……とは言うものの、やっぱり私の中では、あの比企なんかとかいう嫌われものの二年生の事は、まだ気に食わないままなんだけど。

だってえ……私もグループに入るからあ、グループの中心が慕って
るのが学校一の嫌われ者とかって、なんかグループランクが下がるつ
ぽくて嫌だし……！

そもそもアイツさえ居なきや、私だってこんな目に合っていないしい
〜！

「まあなんにせよ、こないだのデートでさえもこの件の口実に使つて
るくらいなんだから、頑張つて甘えて、せいぜい利用すんだよ？ホ
ントどこまでも計算ずくな女だねえ、あんたはっ」

ニヤリと笑い掛ける香織ちゃんに、さらに悪そうなニヤリ顔でそれ
に応えるいろはちゃん。

「えへへ〜まあたつぷりとこき使つてやりますよー」

そう。あの顔なの！あの顔。

あの、今までは決して男子の前では見せなかつた、あの小悪魔な笑
顔！

あの、絶対に男に見せちゃいけないような嫌々な笑顔を、平気でク
ラスで晒すようになってからのいろはちゃんは、なんだか無敵な気が
する……！

ただムカつくから対抗心を剥き出しにしただけのはずなのに、そ
んな一色いろはの全然違う魅力に気付き始めたのは、あの無敵になつ
たいろはちゃんを見てからなんだっ。

私も……あんな風が変わって、いつかは三浦様みたいになるんだも
んねー！

× × ×

「よし、今日も頑張つたし、明日もたつぷり熱視線送つちやうぞおつ
〜！」

帰りのLHRも終わり、ちよつとお花摘みしてきた私が荷物を取り
に教室に戻ってきたときだった……

むんずっ！

「っ！はえっ？」

席に向かおうと意気揚々と教室に入ろうとしたところで、私は何者かに首根っこを掴まれて、後ろ向きに廊下を引きずられて行く。

「ちょ!? な、なにになに!?」

こ、恐い! なんなの!? 誰なの!?

……はっ!! もしかして最近落ち目の私に対して、調子にのつてた頃に密かにムカついてた女子グループが、今こそチャンスとばかりに強制呼び出しなの!? シメられちゃうの!? 暗黒時代に突入しちゃうの!?

いやあああ! スミマセンスミマセン!

こここ恐いようっ! 土下座でもなんでもするから許じでぐだざあああい”っ!

私は心の中で泣き叫びつつジタバタして抵抗を試みたんだけど、結局そのまま引きずられて連れ去られてしまうのでしたっ……

ああ神様っ……憐れなわたくしめに簡易トイレを用意しといてくださいっ……

「襟沢、あんたさあ、なに企んでんの?」

拉致られたまま階段の踊り場まで連れて来られた私は、恐くて相手の顔を見ることが出来ずに涙目で斜め下を凝視しながらも “相手に聞こえないように” 小声でブツブツと呟いていた。

「……な、なんなんですかなんなんですか私あなたになにかしましたかこれは拉致監禁という立派な犯罪行為ですよ場合によっては訴えちやいますからね……なんなんですかなん……」

「……あんなに一人でブツブツ言ってるの……? こえーよっブツブツをリピートしかけた所に、もんのすごく呆れた様子の声が掛かる。」

その声はとても聞き覚えがあり、恐る恐る顔をあげてみると……あ、香織ちゃんだった。

「ふえー、か、香織ちゃんかあ〜」

「ど、どしたの? あんた……」

はああく、び、ビックリしたあ！相手が香織ちゃんだと分かり、一気にお腹の力が抜けていく。

神様！もう簡易トイレ大丈夫ですう！

「えっと、香織ちゃん、私になんか用なのお？」

「いやいやなんで急に横柄になつてんのよ……」

ひいっ！そのゴミを見るような目は勘弁してえっ！

ちゅみまちえんっ……！安心したらちよっと調子にのっちゃいましたっ……！

「あ、え、えっとお、どうかしたの……？」

思えば、香織ちゃんと二人で話すのなんて初めてかも。

どうしたんだろう。

「どうかしたのじゃないでしょ。あんたさ、なんで最近ずくつと私らのこと見てんの？なに企んでんのかなって思ってたさ」

「や！た、企むなんて！そんなこと無いよお」

「……企んでんじやなきや、なんでずっと見てんの？すっごい気になつちやうんだけども」

「そ……それはっ……」

ど、どうしよう！やっぱり私がジツと見てたのバレてたんだっ！

(当たり前前)

ここはいい機会だから仲間に入れて欲しいって白状しちやうべきかなっ？

でもでもお、実は私って結構いろはグループに好かれてない気がするんだよね…… (今更っ!?)

ここで急に仲間にな！とかグループにな！とか言っても、またゴミの視線を受けちゃいそうよね……

だったら……私は確かに仲間に入れてもらいたいし入るけど、それよりも前にしなきやと思ってたことを正直に話してみよう……

「その……私……いろはちゃんに、まだ謝ってないからあ……そのお……謝りたいなあって」

「……」

「わ、私い、いろはちゃんに泣かされてから……これでもすっごく反省

したのよ……?それにちよつと格好良いなあ……とか、優しいなあ……とかも思っちゃったりなんかして……。んで、ちゃんと謝つて、今度は仲良く出来たらなあ……なんて」

「恥ずかしかつたけど、そこまではカミングアウトしてみた。ど、どうでしょうか……?と、チラリと香織ちゃんの様子を伺つてみる。」

「はああああ……成る程ねえ。なんか今までみたいに敵に向けてくる視線とは違うと思つてたら、飴と鞭でデレたわけか……こいつチョロイン過ぎでしょ……」

「デ、デレ……?チョロ……?」

「あ、あの……趣味の専門用語を使わないで頂けないでしょうか?みんながみんなオタク用語が通じるとは思わないでね?」

「だから残念だつて言われてんのよ。」

「……あんた今失礼なこと考えたでしょ……」

「ひいつ!べべべ別につ!」

「な、なんで!?心読まれたの!」

「……言つとくけど、あんたすつごい顔に出まくるタイプだかんね……?」

「」

「し、知らなかった……」

「ううつ……お腹痛くなってきたあ。」

「まあいいや。あんたから失礼な思考抜いたらただのまともな美少女になつちやうもんね」

「それ褒められてるの!?!けなされてるの!?!」

「香織ちゃんにだけは言われたくないセリフに嘆いていると、そんな私の嘆きを余裕で無視して香織ちゃんは私の肩をポンと叩き、とつてもいい笑顔でアドバイスをしてくれた。」

「うん。無理。諦めな」

「酷いつ!?!」

× × ×

慈愛さえ感じるほどの笑顔で真っ向から否定された私は、それでも必死に食らい付く。

「なんで!?!謝るのも無理なお!?!」

私の悲痛な訴えに、香織ちゃんは面倒くさそうに指で頬つぺたをポリポリと掻きながら答える。

「んー。無理だね。少なくとも今はまだね。今謝ったって、まあ襟沢の望むような結果にはなんなんじゃないと思うよ?……あんたがうわべの謝罪をして、いろはがそれをうわべで許す『だけ』でいいのなら、それで満足するんらいつでも謝りやいいけどさ。……でもあんたの望みはそうじゃないんでしょ?そのあとに『友達になりたい』が付属しちゃうとなるとそうはいかない」

「なんで……?ちゃんと謝っても、うわべにしかなんないの……?」

「なんないね」

良く分かんないよお……

だって、私はちゃんというろはちゃんに悪いことしたって反省してるから謝りたいのに、それなのにうわべにしかなんないのお……?

「じゃあ聞くけどさ、襟沢はなんでいろはがあんなにドス黒さを出してまであなたにキレたのか理解してんの?」

「そつ……それは……私がいろはちゃんに酷いこと色々しちやっただか……?」

「ねっ、根本的な事が分かってないじゃん」

「へ?」

「色々な事なんていろはにとつちやどうでもいいのよ。だってさ、あんな散々いろはに酷い事してきたじゃん?反いろはみたいに女どもで連るんで陰でビッチだのなんだの悪口言って笑いやつたり、コソコソと裏で糸引いて生徒会長に立候補させたりさ」

「……うん」

「でもさ、いろはは別に表立って怒ったりはしなかったじゃない? まあ裏では中西君と仲良くしてるのをわざわざ見せびらかせて楽しんでたけど……あ、やっぱダメじゃんあの女」

あれやっぱりわざとだったんだ!?

「んん！んん！……ま、まあそれはそれとしてさ、あんなにまで嫌がらせされたのに、なんであんたに対してキレなかったと思う？」

「い、いろはちゃんの心が広がったから……？」

「ぶー！ハズレ。答えは……」

その答えを勿体ぶる香織ちゃんは、ちよつと意地悪な笑顔を浮かべたあと超真顔になった。

「あんたに興味ないから」

ぐはあつ！

まさかの単純すぎる上に一番残酷な答えに、私は力なく崩れ落ちるっ……うう……ホントは薄々気付いてはいましたけども……

「そんな興味の無い、どうでもいいあんたにでさえも、いろはがあそこまで怒りを露にしたって事がどういうことか分かる？」

香織ちゃん……どうでもいいまで追加しなくても、すでに私は死にかけてますので……

「それだけいろはにとつて、比企谷先輩は特別だつて事でしょ？まあ好き嫌いなんで人の自由だし、あの先輩は好かれる事の方が稀みたいだから、ただ嫌う分には別に構わなかったんだらうけど……」

香織ちゃんは、そこで一呼吸空けると私を一瞥した。

「あんたはなんも知りもしない人を、他人から聞いた噂だけで最低な嫌われ者だつて馬鹿にした。それもいろはを陥れる為に利用する形でね。だからいろははあんなにも怒つたのよ」

『最低な人つて言うけど、ちよつとでも先輩の事知つて言ってるのー？なんも知らない癖に噂だけ信じて人を馬鹿にするのって、ほんつとくだらないね』

いつかのいろはちゃんの言葉が頭を過つた。

あの時のいろはちゃんの声と顔を思い出しただけでも……

うう……ちよつと……チビっちやいそうっ……

「で、でも私はその事だつてちゃんと反省してるもんっ……！」

「……じゃああなたは比企谷先輩のこと、今ならちゃんと分かってる？」

「……へっ?」

い、いろはちゃんに謝る事と、あの二年を分かっている事って関係なくない!?

「んー。たぶん襟沢はさ、比企谷先輩のこと未だに全然知らない癖に、『あの最低な二年が居なきや私は女王様のままで居られたはずなのに!学校一の嫌われ者の分際でマジ腹立つ!』とかって逆恨みしてんでしょ?」

ぐう!やっぱり香織ちゃんてエスパーなんじゃないのお!?

「まあ知った上で嫌いなら嫌いでも全然いいのよ。でもさ?あの時と同じように、知りもしない癖に一方的に嫌っている状態でいろはに謝ったところでさ、それであんたの気持ちが通じると思う?」

「……うぐっ!」

「そんなんじやさ、本当の意味で、なんでいろはがあんなにまで怒ったのか? って理由は理解出来てないままじゃね?」

「う、うん……」

「そんなうわべの謝罪をさ、興味のないどうでもいい奴からされてみ? 『全然気にしてないからもういいよー』って言われてハイお仕舞い。そのあとに関わる事なんてなーんもない。ここんとこストーカーチックになってまで熱視線送り続けるあんたの謝罪はこれでご満足?」

「……………」

違うっ!私が望んでるのはそんなんじや無い!

でもっ…………じゃあどうすればいいのよお…………

目に見えて凹んじやった私に、なんと香織ちゃんは暴力を振るってきた!

「ていつ!」

「あいたっ!」

ポカッと軽くチョップをしてきた香織ちゃんに、うー…………つと両手で頭を押さえながら恨みがましい視線を向けると、今まで私には決し

て向けてくれなかった表情でニヤリと笑った。

「だから最初に言ったでしょ？ 今はまだ」ってさ。だからさ、本気で謝りたいって思うんなら、焦んなくてもいいから、ちゃんとあんなりに理解してから謝りにくれば？ って言ってるの。なんでいろはが怒ったのかってこと！」

「私なりに理解してから……？ そんなの、どうすればいいのか分からないよお……」

「それくらい自分で考えな」

香織ちゃんは背を向けて階段を降りていく。

香織ちゃんの言いたい事は理解出来たけどさあ……じゃあどうしたらいいのかなんて、全然分かんないですうっ……！

「あー、そうそう」

階段を降りながら、香織ちゃんは思い出したかのように教えてくれた。

「ぶっちゃけちやうとき、ホントは私も心配だったんだよねー。なにせ相手はあの噂の二年生。どんなにいろはが慕ってるって言っても、学校一の嫌われ者の噂が立つくらいの奴なんて、やっぱろくな奴じゃ無いんじゃないのかなってさ」

香織ちゃんは階段の中程で、振り向きもせずに言葉を紡ぐ。

「でもあの襟沢大泣き事件のあとさ、実はたまたま何回かいろはと比企谷先輩と一緒に居るとこ目撃しちゃったり、なんと一度だけ会話なんかもしちゃったりしてさっ。……少なくとも私はその数回見たり会ったりしただけで心配は無くなったよ。噂は噂でしかないってすぐ理解出来た。ちゃんというはが夢中になった理由もなんとなく理解出来た。てかあのいろはの顔見りや分かるか」

すると香織ちゃんは振り向いて私を見上げた。

「まあ散々聞き耳立ててるからどうせ聞いてると思うけどさ、なんか今日はフリーペーパーの仕事で比企谷先輩と二人で各部活回ったり写真撮影とかするらしいよー。だからもしかしたら普段よりも二人で居るところに遭遇する確率高いかもよ？……一度さ、邪な気持ち抜きにして、比企谷先輩の事、んでその時のいろはの顔を見てみりゃ、な

んか分かつかもしんないぜっ☆」

ニカツと笑顔でパチリとウインクすると、香織ちゃんはそのままゆつくりと下の階へと消えていった。

遠くの方で突然走りだす足音と「……やっべええ!!部活遅刻じやんかようー!いやん先輩にいたぶられちゃうううー!」という悲痛な叫びを残して……

ありがとうお!香織ちゃん!

実は香織ちゃんて、とつても男前でとつても良い子なんだねえ!やっぱりちよつと残念だけどっ!

× × ×

比企……なんとか先輩かあ……ホントに見ただけで何か分かるのかなあ……?

前にクラスに来た時にいろはちゃんと話してた時は、もういろはちゃんを貶める事しか考えて無かったもんねえ……

とはいえ、広い学校でそう易々と見付かるもんなのかなあ?

一応近くに特別棟もある事だし、とりあえず文化部から見回ってみようかなっ?

……と、思つて二階の廊下をてけてけ歩いてた時だったので!ふと窓の外、中庭に目を向けると……

「い、居たあゝ!?!」

なんたる運命のイタズラか、そこには比企谷先輩といろはちゃんが、なんと葉山先輩を取材したり撮影したりしてる光景が広がっていたのですう!

どうやら神様は、簡易トイレよりももっと素敵な贈り物をしてくれたみたい♪

続く

【番外編】最近宿敵の一色いろはがとっても気になっちゃう件っ③

二階の窓からこっそりと中庭の取材風景を見る。

ここからじゃ何を話してるのかまでは分からないから、本当は素早く中庭へと降りて近くで盗み聞……………こっそりと聞き耳を立てたいんだけど、私が到着するまでに居なくなっちゃったら元も子もないから、残念ながら動くに動けないのですっ…………

むう……………会話が聞こえないのつてもどかしいっ！

でも、んー、やっぱり葉山先輩って超格好良いなあ……………！さすが三浦様が惚れ込んでるだけはあるわよねえ！

私だって、もし憧れの三浦様が葉山先輩狙いじゃなかったら、もしかしたら葉山先輩狙いになっちゃってたかも！

それに引き換え、あの比企ナントカつてのは、どう見ても葉山先輩の引き立て役よねえ。

だってホラ！いろはちゃんだって、葉山先輩と比企ナントカに話し掛ける時じゃ全然態度違うじゃない。

いろはちゃんって、ホントにあつちの先輩に惹かれてるのお!?

うわく……………いろはちゃんがケラケラと馬鹿にしたようにナントカ先輩の腕をバシバシと叩いて、次の瞬間にはすぐに葉山先輩用のとびきりスマイルになつて……………って……………え？

なに？なんだろう？この違和感……………

いろはちゃんが二人の先輩に向ける笑顔が、全然違う……………？

「あ……………そっかつ」

葉山先輩に向けてる笑顔は確かに可愛い。

それはもうムカつくくらい……………ってか、私がずっと嫌いで心底ムカついてた、最近はすっかり見なくなった一色いろはのあの媚びるようなあざとい笑顔なんだ。

でも、ナントカ先輩に向けてる笑顔は、一見バカにしてるように見える、その実とっても自然な、私が見ても一切ムカついたりしない……なんていうか……イイ笑顔？

『てかあのいろはの顔見りや分かるか』

香織ちゃんの言ってたことって、こういうことだったのかな……？
あ、ぽけっつとしてたら、葉山先輩への取材が終わっちゃったみたい！

いろはちゃんは葉山先輩にペコリとお礼をすると、中庭から見えなくなつたのをきちんと確認してから、待ちきれなかつたかのようにすぐさまナントカ先輩に駆け寄ると袖をくいっくいっつと引っ張ってる。遠すぎてなんにも聞こえないのに、「ほーらー、先輩先輩！早く行きますよお」って声が聞こえてくるんじゃないかってくらいの甘えっぷり！

ふあゝ……あんな甘々ないろはちゃん初めてみたよお！

いや、私が泣かされちゃった日もあんな風な甘々っぷりだったんだろうけど、あの時は私の目が曇ってたからなあ……

って、あ！やつば!!

いろはちゃんが先輩の袖をぐいぐい引っ張ったまま行っちゃった！

うぐう……まだまだ見足りないのにこのままじゃ見失っちゃうつ！

私は、あの人たちが次にどこに向かうのかも分からないというのに、ダツシユで一階へと向かうのでした。

× × ×

靴に履き替えて昇降口から校庭へと飛び出し、すぐさま中庭周辺を

くまなく搜索してみるものの姿は見えず。サッカー部への取材が終ったんだから次は一番近くのテニス部かな？とかつて推理してみたものの、やっぱり居ない。

どうやら予想外にも、サッカー部よりもテニス部の取材を先に行った模様ですね。

ハッ!? テニス部と言えば、超有名な王子様がいらっしやるんじゃないかっただかしらっ!?

確か文化祭で葉山先輩とイケナイお芝居をしたらしくて、すごいプレミアチケツトになったらしいのよねっ!

どなたが王子様なんだろう!?

見てみたい!! でもいろはちゃん達を捜さなきゃ!

くっ……お、王子様あぁ……

私は王子様に優しく後ろ髪を引かれながらも、涙を飲んで搜索を優先させることにした……っ。

王子様……またいつかどこかでお逢いしましょう……

しかし、そんな私の涙なしでは語れない程の覚悟など露知らず、いろはちゃん達は一向に見つかりませんでした。

手っ取り早く近くの運動部を見て回ったり、上履きに履き替えて体育館にバスケット部やバレー部やらを見に行ってみたり、また特別棟へと引き返して文化部を覗いてみたりもしたんだけどどこにも居ない。

「あ……っ……やっぱり中庭で発見した時に、覗いてないですぐ一階に降りれば良かったよお……」

くそお! せっかく今日はいろは観察のチャンスだったのに……!

まあ一応ナントカ先輩へと葉山先輩への違いは目撃できたし、なんもないよりはマシかぁ……

と、また校舎から出て校庭の裏の方をウロウロしている時だった。

「い、居たぁあぁ!」

なんとなんと、外から校舎内を覗いてみた時に発見してしまったの

でした！

なんと誰も居ない図書室で、二人つきりで撮影会をしているではありませんかあ！

よおしっ！今度こそ逃げられる前に確保しなくっちゃー！

ダツシユで校舎に入り廊下から図書室へと回り込むと、静かくに扉を開けてこっそりと忍び込んで、二人の様子をじっくりとノゾキ………観察してみることにしました♪

だ、大丈夫だよね……？

二人つきりだからって、なんかえっちな撮影会になっちゃったりしないよね……？

× × ×

「撮られ慣れてるな……」

私が本棚の隙間からノゾキを始めた時には、どうやら撮影もそこそこ進んでる頃だったみたい。

何枚か撮ったあと、次の撮影に向けていろはちゃんがコンパクトで身だしなみチェックをしていた。

それにしてもフリーペーパーの表紙を生徒会長が飾るっただけで、そんなに何枚も必要なの？

あんな笑顔のいろはちゃんが表紙のフリーペーパーが出回ったら、また人気出ちやいそうじゃないっ！

ぐぬぬっ……私が生徒会長やつても良かったかもお……？

「そうですか？写真なんて普通にいつも撮りませんか？」
いろはちゃんはコンパクトの中の自分に視線を向けたまま問いかける。

「いつもは撮らないだろ」

男の人にはあんまり分からないかも知れないけど、女の子は記念とか大切なよねえ。

お洒落なカフェで可愛いデザートが出てきたっただけ、帰り道の夕

暮れがいつもよりも綺麗だったってだけ、そんなちよつとしたことでも撮っておきたいって思っちゃうものなのよね。

まあいろはちゃんの場合は良く男と遊びに行ったりするから、その度に写真撮ってたら慣れちゃったってだけなんだろうけど。

「思い出って大事じゃないですか」

いろはちゃんはコンパクトをパタンと閉じると、まだカメラを構えていない先輩に向けて、撮影の時とは全く違う笑顔を向ける。

わあ……その笑顔を撮れば良かったのにつ……

果たしていろはちゃんの言っている『大事な思い出』というのは、今まで色んな誰かと撮ってきた写真の事なのか、それとも今この瞬間の心のフアインダーの中の景色の事なのか。

「……そうだな」

ちよつと恥ずかしそうにそう肯定する先輩を満足そうに見つめるいろはちゃんを見たら、それがどっちなのかなんてのは誰でも分かっちゃうよねえ。

なんていうか……早くもいろはちゃんのこの甘い空気に胃もたれ気味なんですけど私っ！

そりゃ「あの顔見れば分かる」って香織ちゃんに言われるワケだよねえ……

「ですすつ。それじゃあ先輩？さっさと撮り終えちゃいましょー」
「……だな」

そんな会話にも一段落ついたのか、先輩がカメラを構えてまた撮影が始まった。

なんかもうノゾキは十分な気がしてきたよ？お腹いっぱいですう！

「あ、ところでせんぱあ〜い？」

「あ？……んだよ」

しかしまだまだ甘い空気は私を離してくれないようですね……いろはちゃんはレンズの向こう側の先輩に声を掛けた。

なんていうのかな……？普段のいろはちゃんとは全然違う、小悪魔

じみた悪戯っぽさっていろいろの？

そんな声に、先輩が若干警戒してる。

「さつきなんですけどお、撮影が始まった直後ですかねー……」

いろはちゃんは甘ったるい猫なで声で、先輩を伺うように覗きこんだ。

「先輩、レンズだけ向けて、シャッター切るの忘れちゃってませんでしたあ？」

「……へ？ななな、なに言ってるんのお前……？」

そんなあからさまに慌てた様子に、我が意を得たりっ！つとばかりにニヤアつと悪そうに口元を歪める。

「先輩ってば、超わたしに見惚れちゃってましたよねえ？……すっごい唇とかに視線感じてたんですけどお」

「ちよつとまで自意識過剰過ぎだろ。なにその言いがかり……そ、そうか。こうやって痴漢冤罪は生まれていくんだな……」

「へえ……そういう言い方するんですかー。……えつとお、最初にポーズ取って先輩がカメラ構えてから、ポーズとしちゃってシャッターも切らずにわたしを見つめ始めて、咳払いして正気に戻させるまでの時間はあ……えくつと、いち、にー、さーん……」

すっごいニヤニヤしながら、その時の体感時間を指折り数えていますよ？

そのニヤニヤたるや、最っ高の遊び道具を発見しちゃった悪魔のよう！

「ふむふむ。ざつと二十秒はわたしに見惚れてましたねー」

「は？馬鹿言ってるじゃねえよ、そんなには見てねえわ」

「……そんなには？」

キラーン☆と瞳を妖しく光らせたいろはちゃんと、対称的にドヨツと瞳を腐らせていく先輩。

「おやおやー？せんぱーい？そ、ん、な、に、はって、どういふことなんでしょうかねー？そ、ん、な、に、はって」

「な、なにいつてんの？んなこと言ってるねえつつの……」

「わたしー、記憶力には結構自信あるんですよ？『は？馬鹿言ってるん

じやねえよ、そんなには見てねえわ』……一言一句間違えてないですよね？先輩も記憶力良いから分かってますよねー？なんならもう一回言つてあげましょおかあ？」

いろはちゃんもうやめたげてよお！

もうあなたの大好きな先輩が逃げ出しちゃいそうなくらいに悶えてるじゃないっ！

「ぐぬぬ……」

「まったく先輩は仕方ないですねーっ！ふふっ、撮られ慣れてるな……なんて言つて見惚れてたコト誤魔化そうとしなくたっていいんですよー？」

「べべべ別に誤魔化してにゃんかねーし」

ふええ……もう涙であの先輩の顔がよく見えないよう……

それにしてもいろはちゃん、ホントに嬉しそうに楽しそうにあの先輩をからかってるなあ。

あの照れた様子をただ楽しんでるっただけじゃなくて、ホントは先輩が自分に見惚れちゃってたっという事実が嬉しくってしようがないんだろうなあ……

いろはちゃんは真っ赤に照れた様子の先輩をくすりとお優しく見つめると、あっ！と人差し指を立てて、左右にぴよこぴよこさせて小首を傾げる。

「なんでしたらあ、フリペ表紙用じゃなくて、先輩のスマホ待ち受け用とかパソコンの壁紙用に、特別にわたしの写真撮らせてあげましょおか？」

「いやいらんから……」

「またまた〜！こんなに可愛い後輩をいつでも見てたいって先輩の気持ちも痛いほど分かりますしー。こんなこと先輩だけの特別サービスですよお？」

「……いや、だからいらんっつうの……」

「だからそんなに恥ずかしくならなくて……はっ！ま

さかわざわざ撮らなくなつてお前の可愛い笑顔なんて常に瞼の裏に焼き付いてるぜアピールしてますか？なんか一方的にずっと見られてるみたいで正直キモすぎて引くんで今度からは一方的じゃなくてお互いに真正面から見つめ合うようにしてくださいごめんなさい」

ババツと両手を前に突き出して拒絶ポーズしてるけど、単に見つめ合いたいって宣言してるだけじゃないいろはちゃん！

「……へいへい……もうなんて言つて振られてんのかも分かんねえよ……アホらし。撮影も十分やったしもう行くからな……っ」

あ、逃げた。

「……へ？ちよーちよつと待つてくださいよせんぱーい！ホントに撮らなくていいんですかー!?」

耳まで真つ赤にして図書室から逃げ出そうとする先輩を、いろはちゃんはガツチリと確保した。

「だからいらんつつつてんだろ……つておい！引つ付くんじゃねえよ」

「えへへ、なんならこうやつて腕に引つ付いてるトコをツーショットで撮つて待ち受けにしたつていいんですよお〜?」

「アホか……いいから離れろ……こういうのは葉山にやれ」

「照れちゃつて嬉しいくせにー！それじゃあこのままもう少し校内回つて撮影の続きしちやいませいよー」

「いやもうしないから……てか鬱陶しいから取り敢えず離れてね……」

「捻デレはいいから早く行きますよー」

「……捻くれててもデレてはいねえよ」

「はいはい♪」

次第に図書室から離れていく二人の声を聞きながら私は心の底から思いました……

なんてゆーか、ごちそうさまです……

うっ、もう砂糖吐きそう……

続く

【番外編ラスト】最近宿敵の一色いろはがとつても気になつちやう件つ④

ちやぽんつと、つま先からゆつくりと湯船に入っていく。

身体が冷えきつてるこの時期は、この最初にお湯に入る瞬間が熱すぎて地獄なのよね……喉元過ぎれば熱さ忘れるじゃないけど、この最初さえ耐えきればあとは極楽なんだけど。

「ぐ、ぐうくつ……ぬぬぬっ……あひい〜」

私は変な声を出しながらゆつくりと肩まで浸かると、最後に気の抜けた声をあげてようやく落ち着いた。

まだ少し動くとお肌がピリピリしちやうんだけど、ふううう……
極楽極楽♪

お湯に浸かりながら、そつと瞼を落として今日学校であつた出来事に思いを巡らせてみる。

ここ最近では恒例となつたストーキング行為……いろはグループの観察はまあいつものことだけど、放課後は香織ちゃんに拉致られてお説教？なのかな……アドバイス？なのかな……を受けて、そしていろはちゃんとナントカ先輩と遭遇（ノゾキ）

——あれは甘つたるかつたなあ……勢いでケーキをホールで食べきつちやつた時くらいの胸焼けを起こしちやつたもんね。ケーキのホール食いなんて2〜3回くらいしかしたことないですけど。

でも……あのやりとりだって、香織ちゃんのお話が無かつたら、私はただ素直に見ていられたのかな。

やつぱり穿つた見方になつちやつてたんじやないかつて思う。

——いろはちゃんは、なんでこんな男と仲良くしてあげてんの？つて。

でもあのやりとりが胸焼けしちやう程に甘く見えちやつたつて事

は、私もちゃんと真つすぐな目で見られたって事なんだろうな。

知りもしないくせに、噂だけを鵜呑みにしてあれだけ一方的に嫌悪してた先輩だったけど、今日ちゃんと真つすぐな目で見てみたら、あることに気付いちやったのだ。

それは、学校一の嫌われ者な最低の奴であるはずのあの男がいろはちゃんに向けてたあの眼差し。

それは、最低と言われるような人間の眼差しなんかじゃ決してない。

だって私は、あんな眼差しに見覚えがあるから。

× × ×

自室に戻った私は机の上の写真立てを手に取り、その写真に写った人物を見ながらベッドへと腰掛けた。

ナントカ先輩のあの眼差しは、まさにこの人を連想させるに足るものだったから。

あの先輩がいろはちゃんに向けていた眼差し……それは、とても優しい眼差し。

いろはちゃんに小馬鹿にされたり、わざとらしいあざとさでからかわれたりしながらも向ける眼差しは、心底面倒くさそうで心底呆れたような、まさに『やれやれ』っていう目だった。

ただでさえ腐ってるかのような淀んだ目がさらにどんよりと淀んで、とてもじゃないけど優しさなんか感じられなさそうな目のはずなのに、それなのに不思議と温かさを感じる眼差し。

やれやれなんだけど、ただのやれやれじゃない。

『やれやれ、まったくコイツはホントしようがねえな。ま、コイツだし仕方ねえか』

って、大切な存在の頭を呆れた優しい笑顔で撫でてるお兄ちゃんのようなママのような、そんな慈愛に満ちた眼差しに見えた。

私はそんな呆れたような面倒くさそうな優しい眼差しを知っている。この写真立ての中で微笑んでいるその人とおんなじ目だ。そして私の脳裏には、その人のこんな優しい台詞がふわりと浮かんできたのだった。

『海老名、鼻血拭けし』

そうなのおっ！

ホントだったら三浦様とあんな男を重ね合わせるのなんて嫌で嫌でしょうがないんだけど、いつの日か偶然目撃しちゃったあの大切な心のアルバムの1ページと悔しいけど重なっちゃったの!!

お友達の海老名先輩が発狂して鼻血を吹き上げた時、三浦様は『やれやれ』って顔をしながらも、大切なお友達を優しく気遣うように、ママのような眼差しでポケットティッシュを差し出してたっ……!'

昨日のあの先輩の眼差しは、悔しいけど三浦様と一緒にだった。

——あんな眼差しをいろはちゃんに向けられるような人が、噂通りの最低な人間なはずがないっ……

いくら私でも知ってる。

実は三浦様も、一部の人間からは腫れ物扱いされてるってこと。

圧倒的なカリスマ性を持つが故に、お姉様には敵いようのない二番手三番手辺りの女子グループが、我儘女王様だの恐怖政治だのと裏でコソコソと悪く言ってるってことを。

でも、あんな低レベルなやつかみ連中が言ってるような人じゃないのよお姉様は……!'

私も最初は、ただ美しく強くて格好良い所だけに憧れてたけど、お姉様はそれだけじゃないのっ！強くて気高くて、そして大切な物を守る優しさも兼ね備えた完全無欠の女王様なの！

だから私は裏でお姉様をコソコソと言ってる女共を見る度にこう思ってた。

『なんにも知らない癖に』
って。

なんにも知らないやつかみ女ごときが、お姉様を悪く言うんじゃないわよお！って。

恐いから決して口には出しませんけどね!?

だからあの先輩というはちゃんのやりとりを見て思ったの。

そんな、私がお姉様に対して思う心が、お姉様を悪く言う女共に対して思う気持ち、今度は自分に返ってきたんだなあって。

私にはまだあの先輩の魅力とか全然分かんない。

正直、あの腐った目とかネクラそうなトコとか、やっぱりキモいとかって思っちゃう。

でも………もう一方的な逆恨みとか嫌いなんて気持ちは無くなったの。なんでいろはちゃんがあんなにも怒ったのかは、しっかりと理解できたと思う！

「決めた！明日、いろはちゃんにちゃんと謝ろうっ」

私は写真立てに飾られた、数ヶ月前に盗さ………こっそりと撮影したお姉様の写真を惚れ惚れと眺めながらそう誓うのだった。

× × ×

「いろはー、そういえば昨日の撮影だの取材だのは順調に進んだの？間に合いそうな感じ〜?」

「ん〜、まあそこそこ？納期ギリギリではあるけど、上手く使えばなんとかなるかなっ」

「使うってお前……」

「ホントいろはって腹黒だよ〜」

「智子にだけは言われたくないから〜！」「智子が言っちゃうのかよ!?」「お前が一番恐えつつの……」

「酷いっ!?!」

今日もいろはグループは仲良くコントやってるなあ。香織ちゃん曰くうらやまけしからんってヤツなのかな？

でも香織ちゃんの間合いそうかどうかの問いに対して、まあまあとか言いながらもあんなにニヤニヤと楽しそうないろはちゃんを見ると、そのギリギリ感さえも楽しんでるんだろ〜うな、一緒にお仕事出来るから。

一限の休み時間に、そんな楽しそうにお喋りしているグループを見ながら、私はさつきからずっと及び腰になってる……

謝ろうって決心したはずなのに、やっぱり恐い……!?!

——私は決めたの!謝るんなら堂々とって!

香織ちゃんにお願いしているはちゃんだけを呼び出してもらって、場所を変えての謝罪も考えちゃったりもした。

でも私の誠意を認めてもらうにはそんな風にコソコソするんじゃないで、堂々と教室で、みんなの居る前で頭を下げるのがベストだって判断したの!

クラスで浮いちやってる私の反省してますって誠意を、クラスのみんなにも分かってもらいたいし!

………誠意どころか打算まみれなようにも見えるかも知んないけど、そ、そんなんじゃないもんっ!

ううっ……でもやっぱりみんなの前で謝るって、恐怖心と羞恥心とプライドが邪魔するのよね……

これはやっぱり次の休み時間に回そうかな?それとも三限?いやいやここはやっぱり昼休みがベストよね!

……………ダメよ恵理！結局そうやって先延ばしして逃げて、今日も明日も言わずじまいで終わっちゃうんじゃない！

私はそんな自分を変えて憧れの三浦様みたいになりたいから、自分を変えられたいろはちゃんの元で修行したいんじゃないの!?

ここで逃げたら女が廢るの！根性見せて!?!恵理っ！

そして私は立ち上がる！

目指すいろはグループをしっかりとロックオンして真っ直ぐに目的地へと突き進む！

そう！トイレへと……………

だつてやつぱり無理いー！

よーしっ！ここは一先ず大好きなトイレでクールダウンしてから、次の休み時間へれつつごお♪

× × ×

「いろはー、今日もすぐ仕事行くの〜?」

「まあねー。早く行って早くこき使つてやんないと終わんなくてヤバいからね〜っ」

「おーおー、セリフとは裏腹に楽しそうなことぞっ!」

「ねーっ!」

「う、うっさいなー…………」

……………なんとということでしょう。

気が付いたら放課後じゃないですか…………。次の休み時間へれつつごお♪とか思つてたあの頃が懐かしいよう…………

これはマズい。なにがマズいつてマジマズい。

これは気が付いたら今日が終わつて二月が終わつて三学期が終わつて一年生が終わつちやつてるヤツだよ!

そうやつて焦つてたら、またお腹痛くなつてきちやつたよう!

「それじゃわたしもう行くねー」

「行ってらー」「んじやね」「ばいばーい」

ダメよ……！いろはちゃんが行っちゃうっ……

たぶん今日が無理なら永遠に言えない。

そんなの……やだっ！

香織ちゃん達に手をふりふり、自分の机から離れていこうとするいろはちゃん。

私は……私はっ……今度こそしつかりと立ち上がる！

そしていろはちゃん達の方へと身体を向けながら大きな声を出して呼び止めるのだった。

「い、いろはちゃん！お話があるぶべえっ！」

震える足でいきなり立ち上がった挙げ句に急に反転したもんだから、椅子に足が絡まり顔からべちゃつと床にキスしちゃいました☆それはもう両手を綺麗に上げてグリコのポーズの如く豪快に！

あまりの恥ずかしさにしばらくそのまま固まっていると、優しく肩にそつと手が添えられました……

「……えつと……恵理ちゃん？だ、大丈夫……夫？……んで、なんか用……？」

……恵理っ……まだ泣いちやダメえっ……激しく打った鼻から鼻血が出なかつただけでも儲けもんなんだからあ！ふええっ……

× × ×

「いろはちゃん！本当にごめんなさいっ……！」

不様に床を舐めたことがまさかの功を奏しちゃって、今私はついにいろはちゃんに謝罪する事が出来た。

どこら辺が功を奏したかというと、たぶん通常ならキツく当たってくるであろう紗弥加ちゃんと智子ちゃんが、あまりの情けなさで涙目になっちゃってる私の謝罪をとりあえず大人しく聞いてくれるトコかな。

「……えつと、なにが……？」

頭を下げてる私に、いろはちゃんは訝しげな視線を向けてくる。そりやそうだよね。いきなり謝られてもね。

「……アンチいろはの件とか生徒会長の件とかいろいろとあるんだけど……でも、ちゃんと一番に謝りたいのは……比企……比企……」

「……襟沢、比企谷比企谷……」

コソツと耳打ちしてくれる香織ちゃんありがとう!!

へー、比企谷って言うのねあの人。

「……比企谷先輩のことを悪く言っちゃったことっ……」

私は頭を下げたままスカートをギュツと握る。ぶつちやけ恐くて上を向けない。

そしていろはちゃんは、予想通りの返答を返してきた。

「……あー、うん。別に気にしてないからいーよー」

……たぶんいまのいろはちゃん表情は、なんの感情も籠もってない笑顔なんだろうな。

だから恐くて恐くて顔を見れない。

でも私が求めてた許しはこういうのじゃないからっ……! !

だから、無表情の笑顔は恐くて見たくないけれど、それでも私は顔を上げた。

「違うの……! !いろはちゃんっ……私が言いたいののはっ……」

「あのさー、襟沢。いろはがいいつつつてんだからもう良くない?」

「そうだよ恵理ちゃん。いろはも今忙しい時だしさあ。もういいじゃん」

うぐっ……やっぱり止められたあつ……

「……まあまあ、紗弥加も智子もいいじゃん。言いたいことくらいは言わせてやんなよっ」

香織ちゃん「やあ、あ、あ、んっ! !」

突然香織ちゃんが私の味方をしたもんだから、紗弥加ちゃんも智子ちゃんも、いろはちゃんもビックリ顔!

「ホラ、襟沢。言いたい事あんでしょ? !とつとつとつちやいなっ」

バシツと背中を叩いてくれる香織ちゃんマジ男前!

これで残念じゃ無かつたらなあ、勿体ない。

ヒイツ！なんか睨まれまちやったっ！

私は冷や汗かきつつ香織ちゃんからすい〜と視線を逸らしいろはちゃんをしつかりと見た。

するといろはちゃんは居住まいを正して、ジツと私を見てくれた。なんか、初めてちゃんと向き合えた気がする。

いろはちゃんは特に声を発するわけでも無く、視線と頷きだけで私に発言を促してきた。

——よしっ！いろはちゃんのその無言の視線は怖いけども！紗弥加ちゃんと智子の視線も怖いけども！クラス中の視線が痛いけども！

でも、ここが勝負っ！

「わっ、わたしえはあ〜っ」

壮絶に裏返っちゃいましたっ。

嗚呼……トイレに走っちゃダメかしらっ……!?

× × ×

お腹痛いいいい！

か、顔が燃え上がりそうに熱いけど、一旦落ち着いて私っ！

そして私はふう〜と息を吐くと、んん！つと咳払いして気持ちを整える。

「えつと……私はね？」

「うん」

「正直言うとやっぱり比企谷先輩の事なんか全然分かんない。あのゾンビみたいな目とかネクラそうな猫背とか、なんか急にニヤツとするトコとか、ぶっちゃけキモいって思っちゃう」

うう……謝ろうって思ってるのに、こんなんでもいいのかなあ……

でも、正直な気持ちぶつけなきゃ気持ちなんて伝わらないって香織ちゃんに言われたもんっ！

「でも……ちゃんと自分が間違えてたってことは分かったのっ……なんにも知らない癖にくだらないうんだけ信じて人を馬鹿にすることが、どんだけしょもない行為かってこと、自分の経験則と重ね合わせたら良く分かったの。私だってあれだけ他人のそういう行為を蔑んでたくせに、いざ自分の立場になると全然見えなくなっちゃうものなんだなあって」

いろはちゃんは、私の目を窺うように覗き込んで黙って聞いている。まるで品定めでもされてるみたい。

「でも、良く分からないけど、キモいって思っちゃうかも知んないけど、少なくとももうくだらない噂だけを鵜呑みにして一方的に嫌ったりはしないっ……！だから、そのっ……この間は本当にごめんなさいっ」

今度こそ本当に本当の意味でペコリと頭を下げた。

結局キモいとかなんとか色々悪口言っちゃったけど、ちゃんと伝わったんだろうか。

すると顔を下に向けたままの私の頭上で、低く、うつすらと、こんな声が聞こえた気がした。

「……へえ……」

ビククリして顔を上げた先で、いろはちゃんはニコニコしながらこう言うのだった。

「だからさー、さっきも言ったけど、もう全然気にしてないからいーよー」

——全然気にしてない——言われた言葉はさっきと一緒。

でも、そのニコニコ笑顔はさっきまでの無表情な笑顔なんかでは決して無かった。

届いたんだっ……！

だから私は今度こそ素直にこう言えた。

「ありがとうー！」
って。

謝罪もきっちり済んで、私はさらに踏み込む。

さすがにちよつと早計すぎるかも知れないけど、こういうのは勢いが大事なのだ!

「……で、なんだけども、いろはちゃん」

「……ん?どしたの?」

「あ、あのお、わ、私と友達になつてもらえないかなあ……?」

緊張でついつい笑顔が卑屈になつてしまう私はやっぱりまだまだ修行が足りないようです……

さんざん酷い事をしてきて、謝罪し、許諾されたばかりだと言うのに、早くも友達申請を提出した私に、いろはちゃんは勿論のこと、香織ちゃんも紗弥加ちゃんも智子ちゃんもちよつと呆れ気味にポカンとしている。

や、やつぱりもうちよつとお互いに自然な流れで情を育んでから申請すべきだったのかしらっ!?

「……う、うん。まあいいけど……」

「ほんとにつ?」

「てかまあ今までも一応クラス“メイト”だったワケだし、特に変化する関係性でも無いと思うしねー」

「やったあー!じゃ、じゃあこれからもよろしくねえ」

そっか!今までだつてメイトだったんだもんねっ。

なあんだ、私達つてなんだかんだ言つて友達だつたんだあ!

「う、うん……」と私を歓迎してくれてるいろはちゃんの手をとつて、熱く友情の握手を交わす私達。

すると「あ、そだ。じゃあせつかくだから……」と、いろはちゃんが親友になつたばかりの私に、庄とかの具合がそっくりなモノマネを交えて親切にアドバイスをしてくれた。

「恵理ちゃんさ、前々からずつと言いたかったんだけど、三浦先輩リスパクトすんのはいいんだけど、そのヘアスタイルは逆効果だよ?なんなら『……なんでコイツあーしと同じ髪型してんの?マジ不愉快だし』って人睨みされて終了まであるよ?」

「……………」

な、なんですつて……?」

「う、嘘おっ!？」

「いやマジで」

な、なんとということでしょうか……

尊敬しています憧れていますを全面に押し出そうと敢えてしていた髪型がまさかの逆効果だなんてえっ……

私は親友のいろはちゃんのアドバイスに従い、その日の学校の帰り道にその足で美容院へと走ったのでした（涙）

× × ×

四時限目終了のチャイムが校内に響き渡り、今日もお昼ごはんの時間が始まる。

「ところでさー、今度の日曜日に千葉に買い物でも行かない？なんか金曜の夜までにはフリペの作業が終わりそうだからさ、息抜きとご褒美でお出掛けしたいんだよねー」

「おー、いいねえ。私もちよつと服とか見たかったんだあ」

「あ、私はパス。日曜は兄貴にアキバに付き合ってくれて泣き付かれちゃってんのよねー」

「私もパス。とも君とお台場行くんだー♪」

「ええ!?!私絶対行く行くう!やばい今から超楽しみなんですけどお」

「……」「……」「……」

「……どおしたのー?みんなー」

紗弥加ちゃんが恐る恐る口を開く。

「え、襟沢さあ……ずっと疑問に思ってたんだけど……」

「？」

「なんでアンタ普通に一緒に弁当食ってたの……?」

「えー?だって昨日友達になつたしい」

あれえ?なんでそんなに愕然としちゃったのお?

すると智子ちゃんが信じられないものを見るかのような目で私を見つめて一言。

「恵理ちゃんさ……、と、友達になったのとグループに入るってのはちよつと違くない……？」

「なんでえ？友達と一緒に弁当食べるものでしょお？」

あれえ？智子ちゃんまでどうして驚愕の表情で固まっちゃうのお？

そして香織ちゃんがとつてもシラくつとした目を向けてくる。

「……ヘタレの癖に凶太いとか、ウザ過ぎてタチ悪すぎんでしょこの女……」

え？なんですつて？

ごめんね香織ちゃん。声が小さすぎて全然聞き取れなかったよお？

………ホ、ホントはちゃんと分かってるんだからあああつ……！

だって……みんなの冷え冷えした視線が突き刺さりまくって、お腹が痛くてしょうがないんだものおつ………！

でもでも、こんな無茶してでさえも無理矢理にでも輪に食い込まないとグループに入れて貰えなさそうだから、さつきからトイレにも逃げずに、極力目を合わさないようにして私とっても頑張ってます！

喉元過ぎれば熱さ忘れるじゃないけど、この最初だけを血反吐を吐きながらでも耐えきれば、あとは極楽なはずだもんっ！

「……はあああ……ま、まあいいんじゃない？……えつと、ぎ、材木……？木材……？も、木材屋？みたいな粹だと思えば、そのうち慣れるんじゃない……？」

……へ？

「……へ？」「……へ？」「……へ？」

急に木材がどうか言い出したいろはちゃんに、私達はまたもシンクロしちゃいました。

うん！やっぱり私はこのグループと息が合ってると思います！

相変わらず愕然と驚愕と冷え冷えとした視線を無遠慮に向けてくるグループの仲間達から必死で視線を逸らしながら、冷や汗かきかき「んー、おいしい♪」とママの作ってくれたお弁当を心行くまで堪能する私は、総武高校一年C組に所属する花の16歳の女の子！

学年でもひときわ目立つ一色いろはグループの襟沢恵理を、今後ともよろしくお願い致します☆

終わりっ

そして私の友達が本物のバレンティンを迎えたなら①

本年度も残すところあと二ヶ月弱。

そんな、私達の青春の高一時代終了の足音がすぐそこまで聞こえてくる2月半ばに近づいてくると、教室内の雰囲気は徐々に色を帯び始める。

「なーんかさあ、そろそろ甘いもんとか食いたくね?」「だよなー、そろそろ食いたくなりそうっつーか?」「なーな! ホントちよつとだけでいいんだよなー、チョコつとだけな!」

そう。あちらこちらで、妙に色付き始め…

「やっぱーい! これ間に合うかなあ…!?」「だ、大丈夫だよー! まだ間に合う間に合うー!」「いやいやどう見ても間に合わないっしょ……てか手縫いとかが引かれるってマジで」

……チツ……うん。有体に言おう。

「チツ、ウツゼ……」

「おーい香織、あんた今、心の内が全部口と表情に出てんぞー」

「気持ちに分かるけどさあ、その表情はヤバいってー」

「そうだよ香織ちゃん。またみんなに残念な子って言われちゃうよお? ぶほあっ!」

小生意気な襟沢の頭をスッパーンと軽くはたいてから、もう一度辺りを見渡してみる。

たく……どいつもこいつも色気付きやがって……

リア充グループ男子共はチョコチョコとウザいアピールを始めてるし、リア充グループ女子共は、意中の相手にどう気持ちをアピールしようかなっ♪みたいな顔してガールズトークに花を咲かせている。

あんた達もう爆発しちゃうなYO!

「フツ、なんかみんな青春してんなあ……って、ちよつとキラキラと眩しくなっちゃってねっ……」

「……あんたそんな優しい目してなかったから」

「もー、そんなに羨ましいんだったら、香織だつて彼氏作ればいいのに。彼氏が居ると幸せいっぱいだよお？」

「なにそのムカつく顔……べ、別に羨ましくなんてないんだからねっ!?!」

「……あんたツンデレキャラやるとオタ集団の熱視線が一斉にこつち向くからやめてくんない?」

「ツ、ツンデレじゃねーし!」

「もー……香織だったら選り好みしなきゃ男くらいいくらでも作れんでしょ? なんか好きな人でも居ないの?」

「……ふんっ、私のお眼鏡に合う相手が居ないだけだつての……」

ん、ん……ま、まあちよつとコイツ面白そうかもっ! っと思える人が居ないわけでは無いのですよ。

……ただちよつと相手が悪いっていうか、相手の相手共が悪いっていうか。

ですので、この件にしましては気のせいだったという方向に持っていきたい所存であります!

「………いったあ……もう香織ちゃん暴力反対っ!」

——と、このように2月半ばの休み時間ともなると、各地でその名を口に出すことさえも恐ろしい例のあの人……もとい例のあの日のアピール大作戦が決行されるのである。

乙女が長期休暇中と名高いこの香織さんとしては、ホンットにウザい事この上ないのよね。

「ちよつと香織ちゃん無視!?!」

女共の「わたし彼氏にチョコあげるのー!」アピールもマジで鬱陶しいけど、男共の「俺の鞆にはいくらでもチョコが入る余裕があるZ E☆」アピールがこれまた鬱陶しい。

ホラ、こう見えて私ってかなり可愛いから結構モテるんで?」

てか、私たちのグループがみんなモテますんで?」

あのチョコチョコとアピールしてくる男子共がさあ、チョコチョコ騒ぎながらチラチラと私らを見てくんのよ。

つたく……鬱陶しいったらありやしない……

あ、そういえば、そのチョコくれアピールを一番受けそうな、ヤツの姿が見えないな。

まあもつともそれは二学期までの話で、今ではヤツ狙いだった連中もほぼ諦めちやってるっぽいけどね。

「そういえばいろはは休み時間だつてのに、まーた生徒会室行つてんの?」

誰となしに尋ねてみると智子が答えてくれた。

「うん。そうみたいだねー。なんか例のバレンタインイベントの準備が忙しいらしいよー?」

「あー、そういえばなんか今回は奉仕部……つーか比企谷先輩に頼らないで、自分たちだけで用意するって張り切ってたもんね」

紗弥加も話に乗ってきたので、私も定番ネタで迎え撃とうじゃないかね!

「やー、いろはも成長したもんだねえ!クリスマスイベント前のやる気の無さがまるで幻のようだよ。……フツ……もう私に教えることはなにも無いようだね……一色くん」

「あんた一人でなにブツブツ言つて満足顔になつてんのよ恐えーよ。なにその言つてやった感……腹立つ……」

なんでよ!?!こういう時つて謎の師匠キャラは定番じゃないのん?

「まあ……成長つて言つても、なんか超我欲まみれっぽいけどねー……」

「あー……」 「まあねー……」

智子の一言に、私と紗弥加は思わず顔を見合わせ苦笑い。

「……ね、ねえ香織ちゃん!?!わ、私のこと見えてる!?!大丈夫? 私、ココに存在してるよね……!?!」

——1年C組トップカーズである我らグループの代表取締役でもあり、我が校の生徒会長の一色いろはは、3学期の頭から謎の變貌を遂げていた。

それは……………つてまあいつか！なんかもう今さらわざわざ説明する必要もないですよねー。字数稼ぎかよ!? つてツツコミが入っちゃう前にヤメときますね。

キャツ！字数とか言っちゃった☆

「ねえ香織ちゃん!？」

まあそんなわけでどんなわけだよ。

ある1人の先輩以外にはほとんどあざとさを見せなくなったいろはは、現在来るバレンタインイベントとやらに向けて頑張って奔走しているのだ。

そのイベントつてのは、つい数日前にアイツがあ部の部室で突然話を通してきたっていう、生徒会活動とはあまりにも無縁と思える、いろはを筆頭とする恋する乙女達の私利私欲にまみれたとんでもイベントである。

「ふ、ふええ……………む、無視はやめてよう……………」

ひひっ、「イベント決めて来ちゃったー!」ってワクテカで話して来た時のいろはのはしやぎようは、マジで面白かったっけなあつ。

恋する乙女心とは無縁の私でさえ、あのいろはがあんな表情が出来ちゃう恋とやらに、ほんのちよつとだけ羨ましさを感じちやったほどにね。

……………にしてもさつきからなんか五月蠅いわね。

× × ×

キンコンカンと、日本中でお馴染みのチャイムの音と共に本日の昼食タイムが始まる。

私達、香織と愉快的仲間達&オマケ（襟沢）グループは、今日も今日とてクラス中の男子の視線を集めつつ、代表取締役を困うように昼食の準備を進めていた。

本日のランチなのだが、どうやら社長からなにか一言があるっぽいんだよね。

別に「お昼に話あるからー」とかって宣言されてたわけじゃ無いんだけども、ま、朝からあれだけニヤニヤにやーにやーしてりやあ嫌でも分かるつつの。

ホラホラっ、今も弁当箱開けつつ、早くネタを吐いちゃいたいのん！って顔してニマニマと私達を見渡してますよこの子ったら！

「あのさー、ちよつと面白情報があるんだけどー」

皆の弁当箱が開いた瞬間を見計らって、いろはが早速口を開き始めた。

やれやれはいはい。

「え、なにににー、なんか面白い話でもあんのー」

いいから早く話せよ……と思いつつも、語尾に（棒）が付いちやいそうな勢いで一応聞いてあげる私って優しすぎると思うんですね。

ふと見ると、襟沢以外の二人も私と同じような目でいろはを見てる。そして、どうやら面倒だからこの会話は私に一任しようだ。

ねえ……私だつてこのいろはの相手すんの面倒くさいのよ？

でも一人ワクワクキラキラした目でいろはの言葉を待っているエリエリちゃんは、こう見えて意外と純粋少女なのかも知れませんか、と思いました。

「えへへ、聞きたいー？」

イラツ☆

「いいから早く話してよどうせ比企谷関連なんでしょうが」

「な!?べ、別に先輩とか関係ないし！葉山先輩メインの話ですうー！」

なんかいきなり茹ではすになって、手をぶんぶん顔をぶんぶん必死に弁明するいろはす。

……でたよ葉山ネタ。

いろははすつたら、いつまでこのネタ引っ張るつもりなのかしら。

この一色いろはという女、比企谷先輩にベタ惚れな事なんて、とつくに私達にバレてるのなんて気が付いてるだろうに、未だに「わたし

葉山先輩LOVEですがなにか?」って体で話を通してくるのよね。実にめんどくさいと思ったらありやしない。

なんなの? 照れくさいの? 振られた時の為の予防線なの?

あれだけ好き好きアピールをクラスメイト全員の前でしといて、マジでもう今更すぎでしょ……恋愛初心者かよ。

そんなんじゃないに私が盗っっちゃうゾ?

「はいはい葉山葉山。んで? 葉山せんぱーいがどしたの?」

「チツ……」

……っ!?

ねえちよつと!? 聞きました? 奥さん!

この子ったら舌打ちしましたよ舌打ち!!

嫌々ながらも付き合っただけで私に対して、なんたる仕打ちなんざましょ!

「……あー、なんかもう聞かなくてもいいかも知んな……」

「そんなに聞きたいの? もう香織はしよーがないなあ! ここだけの話だよー♪」

こっ、このヤロオおおっ……!

いやん! なんだかどつても屈辱的☆

いろはすの手によつて、この私が如何にムツキー! としてるのかなど一切お構い無しに、この女はきやるんと満面の笑顔で語り始めるのであった。

「えへへ〜! 昨日奉仕部できあ、イベント決めてきちゃった!」

はあ……まったくう……

どんなに面倒くさかろうがどんなにイラツと来てようが、そんなに素敵な笑顔で話し始められちゃったら、こっちもつられて笑顔になっちゃうじゃんよっ!

ふふっ、もつとも呆れ半分だけでもね〜。

× × ×

「なによ、唐突にイベントって……」

「は？時期的にバレンタインに決まってるじゃん」

いやいや！なんでそんなアホを見るような目で見られなきやなんないの!?情報無すぎ過ぎて分かるわけないじゃんよ！

眼鏡っ子少年探偵がじっちゃんの名に賭けても真実にたどり着けないレベル。なんか死神探偵が混ざっちゃった気がする。

ったくよ……これだから女子トークは難解すぎんのよ……

あ、こう見えて私も意外や意外に女子でした☆

「……………やっぱもう聞かなくてもいいや……」

「でねでね！わたし昨日奉仕部に遊びに行つてたんだけどさー」

あつれー……？聞き手の意思は完全シャットアウトなの？

これ、勝手に喋らせとけばOKなんじゃない？別に相づち打たなくてもいいじゃね？

「…………」

「ちよつと香織聞いてんの？」

相づちは打たなくちゃいけないのかよ。理不尽すぎんだろ、いろはす……

「…………あー。うん。で？」

「でっさー、まあ元々は先輩のチョコの好みをリサーチしに行っただけなんだけどー」

もう先輩にチョコあげる気まんまんなこと言つちやつてるよコイツ。

あんた葉山先輩という建前を全力で投げ出すの早すぎでしょ。

「そしたらね？三浦……ある女子生徒が葉山先輩に手作りチョコ渡したいって依頼に来てさー」

一応依頼人だから伏せようとしたのはなんとなく分かるけど、もう三浦って名前は隠れてないからね？

ソースは隣で色めき立ち始めた襟沢の危険極まりない（具体的に言うに変態顔）表情。

「…………でも、なんか葉山先輩って、女子からのチョコは受け取らない主義なんだってさ」

いやそこ「女子からの」ってフレーズはいらない？

絶対に腐った海に沸いた海老がホモチョコキマシタワァー！と
か言つて鼻血吹き上げてたでしよ!?

にしても……

「……チョコ受け取らない主義つてのは……な、なんか徹底してん
ねー……」

チョコ受け取らない!!よせよ!俺の為に争うなよ!!

なにそれカコイイ(白目)

「まあそれはそれとしてどうでもいいんだけどさー」

どうでもいいのかよ。

あんたもう葉山先輩の事はこの際どうでもいいって言っちゃつて
るかんね!?

「じゃあどうしたら手作りチョコを後腐れなく意中の相手に食べても
らえるかなー? つてみんなで悩んでる時に先輩がいいこと言ったん
だあ! 『……まあ、言い訳があればいいんじゃないやねえの。建前っつーか、
受け取るのが自然な状況なら話は別だろ。バレンタインっつーん
じゃなくて、試食してくれつてことなら葉山も食うだろ、たぶん。知
らんけど』………つてねっ」

「ぷっーなんかちよつと似てんだけどー!」

「でっしよー!先輩のモノマネとか超余裕だからっ。このダルそうに
目を腐らせるのがポイントなんだよねー。……なんなら、夜ベッドに
入る前に軽く練習してるまである」

そう言いながら、またモノマネっぽくダルそうに言ういろはがなか
なかに面白い。

あんたどれだけ大好きなんだよ。

「とーまあそんな先輩の意見を参考にさせて頂きましたー、来るバレ
ンタインデー!!の数日前に、コミセンにてバレンタインイベントなら
ぬお料理イベントを開催するという運びとなりましたー!ちなみに
私が提案して、即日企画書製作ハコ押さえ準備まではやっときました
!副会長が☆」

「はー……」「へー……」「ふーん……」「すっごーい!」

約一名を覗いて気の無い返事をしたかのように見えますが、こう見えてみんな結構感心しておりますよ？予想外のいろはの行動力に。

そして副会長さんの頑張りに。御愁傷様です。

「やー、三浦先輩のこの依頼にはホントすっごい助かつちやったんだよねー！伏兵的には、ライバル達に警戒されないよう、どうやって義理に見せ掛けた本命チョコを渡したもんかと悩んでたんだけどさー、これならこの『お菓子作り名人いろは』と呼ばれたこの私が、なんの制限もなく本気チョコを堂々と渡せちやうんだもん！えへへ〜」

誰もその通り名知らねーよ。そして三浦先輩って言つちやつてるよ。

あとさつき全力で投げた葉山先輩という建前は、今ごろブラジル辺りに到達した頃かな？

ホントこいつの行動力には驚かされるわ。

どこにも生徒会長の責務としての感情は一切！これっぽっちも！びた一文！見受けられないけどもっ。

でも目の前で、やる気に満ちたナチュラルスマイルをほんのり染めて「うし！用意頑張るぞー！」と小さくガッツポーズしてるいろはを見てたら、自然とこう思えちやうのよね！

ふひひっ、ま、楽しそうだしなんでもいっか！

続く

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら②

「さてと、んじやそろそろ部活でも行つてきますかね」

「行つてらー」「ばいばい香織」「香織ちゃんまた明日ねえ」

深き友情で繋がった友たちと、放課後になっても相も変わらずバレンタインという名の血の祝祭を盛り上げんと騒ぐ魑魅魍魎にまみれた教室に別れを告げ、私は我が在るべき場所が存在する特別棟へと向かう。

勇者かおりん、旅立ちの時である。ふひっ！

「ねえ……なんか香織ちゃんまた一人でニヤニヤしてて怖いんだけどお……」

「ほっとけば。どうせまた脳内旅立ちシチュエーションでも楽しんでんでしょ」

「香織は中学の時からほんと変わんないよねー。たまに一緒に居るのが恥ずかしくなるよね」

おいおい聞こえてんぞ、深き友情（笑）で繋がった友たちよ。そして智子さんちよつと酷すぎやしませんかね。

お願いだから聞こえないように言つてっ！クラスのみんなに聞こえちゃうう！

明日の朝イチで襟沢をシメることを心に誓いつつ、私は涙を拭いて部室へと向かうのであった……

くっそう！泣くもんかあ！

了

いやいや終わんないから。

もうちよつとだけ続くんじや。

× × ×

茶番もそこそこに、教室棟を抜けて渡り廊下を渡った先にある特別棟に入り、我が部室のある三階へと向かう為に階段を上る途中の踊り場で、とてもとても意外な人物と遭遇した。

「ありや、比企谷先輩じゃないですか。どもですつ」

「……おお、家堀か。……うす」

私はよく部活に行くときにこの階段使うんだけど、ここで比企谷先輩と遭遇したのは初だから、ホントに結構意外！

「なんかこんなトコで比企谷先輩に会うなんて珍しいですね。どうかしたんですか？」

「ん？ああ、なんか雪ノ下が珍しく紅茶を切らしてるらしくてな。んで飲み物がねえから下の自販まで買いに行くだけだ」

「あー、成る程です。ふふつ、例の千葉のソウルドリンクですか？」

「おう、分かってんじゃねーか。なんだもしかしてお前も愛飲者か？」
ちよつと!?!あなたそんなにキラキラした目が出るの!?!どんだけMAXラブなのよ……

てかMAXラブって、ちよつと愛が重くないかしら？

「や、やー……アレはさすがに上級者向け過ぎてちよつと……」

「……そうか」

ちよつとそんなにしょんぼりしないでよ……なにこの罪悪感！

MAX仲間が欲しかったのかしらん？

おつと、千葉県民御用達エナジードリンクの話なんてどうでもいいや。

せつかく会ったんだから例の件でも聞いとこうかな？

「あーそれはそうと聞きましたよ〜?なんかいろはの提案で、お料理教室という名のバレンタインイベント開催するらしいじゃないですかー」

「ああ、なんかそうみたいだな」

「いやー……なんかまたまたうちのいろはがご迷惑お掛けします〜」

クリスマスの件といいフリペの件といい、ホントうちの小悪魔が

サーセン。

「まあ元々はうちへの依頼だからな。別に迷惑とかは掛けられてねえよ」

確かに三浦先ば……ある女子生徒からの依頼つてのは聞いてるけど、結局はそれを上手いこと利用した私利私欲大作戦だもんなー。

「それに今回は今んとこ本当になにもしてねえしな。なんか本番も味見役をやらされるだけで終わるみてーだし」

ふふっ、その味見役こそがメインイベントなんですよ？

「……あー、そうだ。それはそうと……だな……」

比企谷先輩は急にどもり始めたと思ったら、少しだけ赤くなった頬をポリポリと掻きながらそっぽを向いた。

え？なにこれ。

まさか突然告白でもされちゃうのん？「そーういやお前もイベント来んのか？お前のチョコも味見出来たら嬉しいんだが」とか言われちゃうのん？

どどどどうしましよ!?

友情と愛情の狭間に揺れる私は一体どうしたらいいのっ!?

ああ神様!……あなたはなんて罪深いの？こんな非道いイジワルをするなん…

「……一色は、ちゃんとやれてつか……?」

そんなわけありませんでしたー（棒）

いやんちよっぴり恥ずかしい☆

「えつと、ちゃんとやっているとほ？」

いくら半分ネタとはいえ、そんなアホなことを妄想してちよっぴり恥ずかしくなった私は、羞恥を悟られないように冷静に聞き返す。

ここで囁んじやったりしたら目もあてられないですからね（遠い目）

「やー、その、あれだ……。なんかアイツ、お料理教室やりますよー、とか言い出したから、てつきりどうせまたこき使われんだろうなと思ってるたら、珍しく自分らだけで色々頑張ってるみたいでな……」

で、ここ数日奉仕部に顔も出さなくなつたもんだから、ちゃんとやれてんのか……って思つただけだ」

………ほっほーう？

なるほどなるほど、これはこれは！

つまりこれはいろはが心配で仕方が無いってことじゃないですかやだー！

なによこの人つたらん！

普段はいろはが付きまとつて来るのを面倒くさそうにしてる癖して、ホントは凄いい心配してんじゃないのよ。

良かったじゃんいろは！あんた愛されてるよお！

それにしてもまったく、捻くれた心配のセリフを吐くだけで、そんなに顔を赤くしちやつてからに！

どうしようちよつと可愛いんだけどこの人。

「ふふっ、心配しなくても大丈夫ですよ。バレンタインに向けて、いろは頑張ってますからっ」

「……いや、別に心配してるっつーワケでは無いんだが……。あーアレだ……普段人を奴隷みたいに雑用押しつけてくる奴がこういう時に来ないと、なんか気持ち悪いっつーか居心地悪いっつーか……。これはアレだな。いざ来た時にはすでに手遅れ状態になつて、修羅場に巻き込まれそうで恐いってヤツだな」

……こ、これは噂に違わぬ捻^レさんですな……

そんな照れくさそうな顔して、なにが「べ、別にあなたの心配なんてしてないんだからねっ（セリフに多少の捏造有り）」よ。

私はそんな先輩を見て、ついついニマニマしてしまう。

ああ、そりゃあのいろはがスケコマされてデレンデレンになるワケだわ。

だって、この姿見てるだけでもなんだか可愛くって仕方ないってのに、さらにメチャクチャ頼りになる先輩なんですよ？

そんな人が「……つたく、しゃーねえなあ」なんて言いながらも一生懸命自分の為になんかしてくれたら、そりゃ堪ないんでしょう

よ。

「にひっ！比企谷先輩は、ホントいろはを可愛がってますなあ」

「いやなんでだよ……ただのめんどくせえ後輩だっつの……」

うつひやあ……確かにコレにハマると危険そうだわ。

確かにちよつといいなつ、とかコツソリ思っただけ狙ってはいましましたけども、思ってたよりも危険ドラッグだわコレは。

ふむ。まあさすがに今からヤツラとバトる気なんかはさらさら無いけど、この捻くれた男にいろは達が全滅させられて、完全フリー状態になったあとならちよつとだけ狙ってみてもいいかも知んな……

「あれー？せんぱーいー！こんなトコでなにしてんですかあ？………
香織も先輩なんかとなに話してんのー……？」

っひいっつっ!?

ほんの……ほーんのちよつぴりだけ邪な考えを楽しんでいたそんな時でした。

階段の下からとっても可愛らしいんだけど、とってもとっても恐ろしく冷たい声が校舎に、そして私の心臓に響いてきたのでした。

涙目になりながらガクブルで階下へと視線を向けると、そこには我らが主・一色いろはすちゃん、とても素敵な笑顔をたたえたままなのに、もんのすごいドス黒いオーラを発しながら私を見ていらっしやいましたのん……☆

× × ×

胸に書類を抱えて、一階の廊下からきらんっ♪（鬼乱っ♪）とした笑顔で私達を見上げていたいろはは、ゆっくりと踊り場へと這い上がって来た。

いやもう這い上がって来たって表現自体がちよつとおかしいんですけども、だってなんかホンットに笑顔で階段のぼって来てるだけな

のに、貞子さんが変な動きしながら近付いてくるみたいなおーラが具現化してるんですものっ。

これアカンやつや。

「やだなー、香織ー。いつの間に先輩とそんなに仲良くなってたのー？」

踊り場へと辿り着くや否や、私の肩をぽんつと叩きながら、先ほどから一切変化のない笑顔でそう訊ねてきた。

人体の神秘ってまじやばーいっ！

人って、こんなに殺気まみれでこんな笑顔が出来るんですねー！

私まじピトーさんに肩叩かれたラモットさん。

「っへ!?……仲良くなんてっ……べ、別にたまたま会っただけだけだよ!?!」

ハタ坊でてきちやったよ。

「そーなのお?なんかずつとずつごい楽しそうに話してたけどー」

え?いつから見てらっしやっただんですかねこの人。

「いやホントホント。私部活。比企谷先輩自販。ここ、会った」

もうコントだろこれ。私ってこんなに片言だったかしら?

「あー、さっきも家堀に説明したんだが、雪ノ下が紅茶切らしちまっててな。だからまあ俺がアイツらの分も買いに行かされてんだわ」

「へー、なるほどです。それにしてもなんか楽しそうでしたけどねー」

「は?……んなことねえよ」

比企谷先輩は少しだけ照れくさそうにそっぽを向いて頭をがしがしと掻きだした。

……いやあぁっ!比企谷先輩やめてええ!

あなたアレでしょ!?!さっきいろはのこと心配してたのを私に突つかれたばっかなのに、その本人が急に目の前に現われちゃったから照れくさいんですよ!?

でもあなたの目の前に居る小悪魔には、その照れ方はそうは見えないのよおっ!

「……………へえ」

低つく！声低つく！！

痛い痛い！！私の柔肌に悪魔の爪が食い込んでますからあ！！

お願いだからさつきから私の肩に置かれっぱなしのその手をどけてください……

君は信じられるのかい？

登場時からここまで、いろはすスマイルは一切微動だにしていんだぜ？

てかき、いろはつてこんなに嫉妬深かったっけ!?

確か前に、まだ葉山先輩好きだった頃に、千葉で葉山先輩が他校の女子と遊んでた所に偶然出合わせたっていう翌日に、

『やー、まさか葉山先輩が他の学校の女と遊んでるなんて超意外だったよー。ちよつとビビったけど、あれくらいならなんとかなるだろうし、まあいつか』

とかつて軽くく言つてませんでしたっけ……？

こ、これが偽物の恋と本物の恋つてやつなのか……！

どどどどうしましょ！マジこええマジやべえ。

これは生き残る為に私に残された選択肢は二つ。

一つはこのまま逃げ出すか……

「い、いつけなーい！私つてば、早く部活行かなきゃ先輩にシメられちゃうんだつたー☆」

恐怖に駆られた私は迷わず離脱を選択しました。

二つめの選択肢なんて無かつたんや。

「そーなの？別にちよつと先輩と楽しくお喋りしてれば良かったのにー」

もうその笑顔勘弁してください。たぶん今夜夢に出ますよそれ。

てかき！別に私つてば、一切やましい事なんてしてませんよね？

ただちよつと邪な考えが頭をよぎっちゃっただけじゃないですか！

「や、やー、マジで急ぐからさつ！んじゃねー、いろはー。それでは失

礼します比企谷先輩」

「おう」

「じゃあねー、香織ー。……………また明日」

果たして明日なんてあるんでしようか……………？

いろはから頂いた「……………また明日」というそれはそれは恐ろしい一言を胸に刻みながら、私は心にこう誓うのでした。

——うん！比企谷先輩には極力近づかないようにしよう！こっさり先輩を狙つちやおうぜ♪なんて恐ろしい企みは、別の世界線の私に任せときやいいじゃない！——
とね。

がんばれっ！違う私！

私はまだ見ぬ別世界の私の安否に胸を傷めつつ、そつとその場を去って行く……………わきやーない。

だってこれから私のすぐ近くでは、楽しい楽しい夫婦漫才が繰り広げられるんだよ？

市原悦子を師と仰ぐ、見ちゃった家政婦志望の私としては、こんな極上のエンターテイメントを見ちゃわないわけにはいかないでしょう！

てなわけで、階段を上がっていったフリをしてコッソリ覗いている私の視線の先では、今日も比企谷先輩というのは夫婦漫才が幕を開けるのでしたっ。

続く

そして私の友達が本物のバレンティンを迎えたなら③

めくるめくような、素晴らしき面白可笑しい光景が繰り広げられる事に胸を躍らせて、私は眼下に広がる踊り場を、階段の手すりにコツと可愛く隠れていつものように覗き見る。

いやいや、なんかこういう言い方すると、まるで私がいつも覗いてるみたいじゃないですか。

どうも。覗きと2次元が趣味ですっ♪でお馴染みの、リア充女子高生こと家堀香織です。

やだ！乙女度メーターが残念側にレッドゾーン☆

と、そんな今更な自己紹介をついついしてしまうほどに（今更って言うっちゃったよ）、私の予想に反して、しばらくのあいだ眼下ではめくるめくような光景が広がらずにいた。

なぜなら、すぐさま動きを見せるかと思われたヤツが、未だ動きを見せずにいるのだ。

私はてつきりいつものように「せんぱーい！私お仕事超頑張ってるんですよー？ほらほらあ、早く頭ナデナデしてくださいよおー」とでも言うものかと思ってたよ。

まあそんなセリフ聞いたこともないし、そもそもそれキャラが崩壊しちゃってますけどね。

「お、おい一色……特に話がねえんなら、俺はもう行きたいんだが……」

なぜだか口を開かないいろはに痺れをきらした比企谷先輩が、困ったように問いかける。

だったらとつと早く行けばいいじゃん八幡さんよう！って？

それは無理なんですよねー。なぜならいろはは口は開かないけど手は出してるから。

まあ早い話が、比企谷先輩の袖をちよこんと摘んだまま動かないんですよー、もうあの子ったら！

なんなんでしょうかね、あの光景は。

袖を摘んだまま、俯いて膨れっ面してるいろはと、一度食い付いたら雷が鳴っても離さないスツポンの如きいろはす相手に、グイグイと引っ張っているのはの手を外そうと無駄な努力をしている比企谷先輩。

そして待つこと数十秒、比企谷先輩も私も頭の上にくつも疑問符を並べていると、ついにはいろはがこんな言葉を低音（低音）で発するのだった。

「……せんぱーい。わたしが珍しく一生懸命がんばってるつてのに、なにいつの間にか香織と仲良くなつて、裏でこそそそとイチャイチャしてんですかねー……」

デスヨネー。

やつぱ原因は私ですよねー。

ようやくお待ちかねの夫婦漫才が開演したつてのに、なぜだか恐怖心が先行しちゃって全然ワクワクしてこないんです私……

× × ×

「あのな……だから別に仲良くなつてないと言つてんだろ」

「それはどうですかねー。そのわりにはなんかデレツデレしてたように見えたんですけど」

「は？別にデレデレなんかしてねーつつの」

「そうは見えませんでしたけどー。嬉しそうにニヤニヤしてたくせに………。まあ香織は中身は残念ですけど、いい子だしガワは可愛いですしねー。年下好きの先輩に可愛い後輩が懐いてきたら、そりゃニヤけちゃいますよねー」

残念言わないでっ！とんだとぼっちりだよ！

いやまあガワは可愛いとかいい子とかって褒められますけども。

……ガワって……

「まあ見た目は良くて明らかにリア充なのに、中身が残念っぽいつてのはなんとなく分かつてるが」

バレちゃってるよ。

いやいや残念じゃねーし。ぎ、残念じゃないよね……!?

チクショウ！見た目は良いって思われてるって事で、嬉しくてほんのり桜色に染まった可憐な頬も台無しだよ！

いやでも見た目は良いって思われてんだうへへ。

「まあなんにせよたまたま会っただけだし、一色に隠れて一色の友達と仲良くしてたなんてことはないから安心しろ。どうせわたしの友達と仲良くしてるとかキモいんでごめんなさいとか言うんだろ？」

マ、マジですか比企谷先輩……やきもちですよやきもち！

あんた鈍感キャラ通さないと死んじゃう病かなんかにかかってんの？

「……………はああ……はいはい。まあそれですよそれ……むう」

オタクでは無いにせよ、オタクでは無いにせよ、2次元に精通した私からしたら、その深くいため息のあとのぶくつと頬っぺ、今日ばかりはお察しします。

え？なんだって？って言わないだけ、多少マジかも知んないけどもっ。

「……………じゃあ、なにをあんなに楽しそうに話してたんですかー？」

おいおいいろはす。あんた嫉妬に狂いすぎだよっ！

それ以上追及すると、あんたがその場で茹ではすになっちゃうからおやめなさい？

まあ、比企谷先輩が正直に「君を心配してたんだよ」なんて、葉山先輩みたいなキラキラスマイルで言うわけないけど。

想像してみたらちよつぱり気持ち悪かったです。

「べ、別に大した話じゃねえよ……」

「……………へえ。そうやって隠すんですかー。……はっ！まさかそうやってわたしの友達と仲良くすることで段々とわたしの外堀を埋めていって最終的に断れないように企ててから告白するつもりですかすみません正直逆効果でしかないですごめんなさい」

ばばっと両手を前に伸ばしてペコリとお辞儀の、ご存知お断りポーズ！

でもそのお断りは、他の女と仲良くしないで！って意味なんですけどねっ。

「あー、はいはい。この流れからでも振られちゃうのね」

呆れた顔した比企谷先輩と、相変わらずの長台詞ではあはあと息を切らすいろは。

ふう、でもこれでようやく普段の空気に戻ったみたい。

ふふっ、とりあえずこれにてこの不毛な話題にも終止符が打てたようですねっ！

「まあこの件はとりあえずはここまでにしときましようかねー。……あした本人に聞くんで……」

いやあああ!?!ボソリと一言付け加えないでえっ!?

どうやら終止符が打たれたのは話題じゃなくなつて私の方らしいですよ?ウフフフフ……(白目)

× × ×

ようやく夫婦の痴話喧嘩が一段落したこの場においても、未だ漫才は終わらない。

ここんどこ、いろは毎日のように先輩成分が足んない……とかつてボソボソと独りごと言つてたから、補給する気まんまんて一向に袖を離そうとしないんだよね。

「……まあそれはそうと、準備の方は捗ってんのか?なんにも相談とか来ねえけど」

「超捗ってますよー。ハコ押さえとかもう済んでますし、資金繰りの秘策なんかはわたしが考えたんですからー」

資金繰りの秘策ってなんだよ。

そんな悪そうな顔で言ってるの見ちゃうと不安しか無いよ。

なんかクリパンときのどつかの会長みたいに他校とか巻き込んで、相手の予算とか引つ張つて来そうな予感で悪寒。

「……資金繰りの秘策ってのがなんか恐えーし、お前がやったのってそんだけ?」

「なんですとお!?失礼なっ!ポスターの告知文言とかだつてわたしの案ですうー。あとは材料とか道具とかの手配だつてちゃんと手を回してますし、諸々のリストとかの書類まとめるのだつてわたしなんですからねー!」

「ほー……マジで結構真面目にやつてんだな」

「えへへ、当たり前じゃないですかー!わたしここ数日は休み時間もお昼休みも放課後も返上して走り回ってるんですからねっ」

えっへん!と並の胸を精一杯に張るいろは。

ま、すつぽりと手に納まるジャストサイズで、まあいいんじゃないかしら?ふふふんっ。

「そうか。やつぱお前つてやりやあ出来んだよな。成り行きとはいえ、お前を生徒会長に推した身としてはひと安心だわ。……あー、アレだな……元々はこつちにきた依頼なのにそんなに頑張つてくれちまつて、なんかありがとな」

おっと!突然の捻くれ無しのお礼に、いろはすの頬が桃味になつちやいましたよ?

「……なっ!と、突然素直にお礼とか、ちよつとズルすぎやしませんかねこの人……ま、まあこれはわたしにも利益があることなんで、特別に割安で貸しにしようといつてあげますよっ」

「へっ、お前の利益でもあるのに利息付きの貸しになつちやうのかよ」
「明らかな照れ隠しのいろはの憎まれ口に、比企谷先輩はヤレヤレつて感じて苦笑い。」

なにお互いに視線交わして微笑んでんすかね。しかもコレ、袖摘みつぱなしの光景だかね?

くっそ、イチヤイチャしやがつてよう!いろはす桃味甘過ぎんよ!

「ふっふっふ!でも貸しなのに、さらに義理とかあげちやうんですよ?わたしっ」

このやりとりで気を良くしたのか、いろはがチョコあげちやう宣言をぶちかまし始めちやつた!

「へっマジでっ」

「ですです！まあ義理も義理、超義理ですけどねー。んー、貸しも含めて30倍返しくらいでいいですよ？」

んー、と顎に指を当てて小首を傾げてあざとシンキングポーズをしてから、可愛らしくパチリと小悪魔ウインクをかますいろはだけど、30倍返しとは穏やかじゃない！

「いやお前可愛くウインクってレベルの要求じゃねえからな？それ」「どさくさに紛れて可愛いとかもしかして口説いてるんですかちよつと気が早くないですかねあと数日待っててくださいいごめんなさい」

「いやなんでだよ……」

いやいや……なんでだよはこっちのセリフだよ。

あと数日後にはわたしから告白しますうー！って言われてんぞ八幡さんや！

てかあの恒例のお断り芸って、いろは自身なに口走ってんのか理解してるのかしらん？

今までのお断りを比企谷先輩がトボけずに全部理解してたら、とつくに告白なんて終えてるみたいなもんだからね？

「まーセコセコな先輩に今からこんな話してたって意味ないですよねー。なのでそこら辺は先輩の『男としてのランク！』にお任せします♪」

「一番最悪なお任せになっちゃったよ……」

「ですので義理の件に関しては一旦置いといて、今現在の頑張ってるわたしに対してのご褒美としましては、とりあえず今から奢ってもらう飲み物で手を打ってあげましょー。やりましたね先輩！大サーブスですよっ」

「え？なに？飲みもん奢る事は決定してんの？」

「だって先輩これから自販行くんですよね？だったら当然じゃないですかー。し、か、も！今なら可愛い後輩のわたしが一緒に自販まで付き合っただけの特典付きなんですよ？こんな可愛い生徒会長をはべらせて校内を闊歩できる優越感とか、プラマイで考えたら先輩にとってプラスしかなくないですかー？」

「なにその超理論……」

あまりの無茶苦茶な理論に、呆れて口も開けずに論破されてしまった格好となっちゃった比企谷先輩の袖をグイグイ引つ張って、いろはは満面の笑顔で自販へと向かう。

「ほらほら、早く行きますよー！わたしはヒマな先輩と違って忙しいんですからねー」

「おいやめろ。だから校内で袖引つ張んじやねえと何度も言ってるが」

「おやおや〜？まさか先輩、袖じゃなくて手を繋いで引つ張られたいんですかー？」

「……もう袖くらいいくらでも引つ張ってください……」

ぷっ！うんざり顔の比企谷先輩を、素敵な悪い笑顔でニヤニヤ見つけて引つ張つくいろはは超楽しそう！

ふふっ、あんたここんどこホント頑張ってたからね〜。

爆発すりやいいのにかと思う一方、たまにはこんなのもいいかもね！って思っちゃうっ。

このひとときを楽しんでしっかり充電して、もうひと頑張りして万全の態勢でバレンタインに臨みなさいな♪

——私は、そんな二人の背中を眺めつつ、「おいおい、こりやまだ漫才続くじゃねーかよ☆」と独りごちて、ワクテカで階段を掛け降り

…

「家あ〜堀い〜……」

られませんでしたっ！

おやおやー？

ふむふむ。どうやら今私は子猫の如く首根っこをギリギリと捕まれているみたいですな。

「ひいっ！ぶっ、部長っ!？」

「……あんた部活来ないと思ったら、こんなとこでなに油売ってるのよ」

「い、いや……そっ、そのっ！ア、アレがアレでして………えへっ

？」

「まあ！素敵な笑顔ねえ！………あんたいい度胸してんじやない………」

アカンこれ死んだわ。

いやあああ！私にはまだ夫婦漫才を後世にお伝えするという大事な義務がああ………！

——こうして私は夫婦漫才に後ろ髪を引かれながらも、現実には後ろ髪を掴まれ引つ張り回され部室へと連行されて、優しい部長と温かな先輩方から、完全下校時刻までに校庭100周を命じられたのでした。

私、文化系の部活に入部したような記憶があつたんですけど？

いやん！もうこういうオチはお腹いっぱいなのんっ………！

続く

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら④

……あー、身体痛つたい……

んだよもー……ダルいから今日会社、じやなかった。学校休んじやおつかない……

大っ体さあ……上司がアレじゃ下はいつまでたつても着いて来ないっつもの。

部下のミスは上司のミスでもあるわけじゃん？部下がミスしたらさあ、上司であるアンタも責任感じて、そのミスを一緒にになって補っていこうよ、部長ー。

……友達とちよつと気になる先輩のイチヤイチヤちゅちゅ（ちゅちゅしてたとは言つてない）をウへへと覗き見してた挙げ句、それにより部活に大幅遅刻してお仕置きを受けたことを、居酒屋でめんどくさいOLのように愚痴るどうも私です。

すみません部長。あまりにも自業自得すぎて、一緒になって補える点なんてどこにもありませんでしたねっ！テへ☆

そんなことを考えながら今まさに通学中の私は、今日はまた違う上司からの呼び出しがあるのかと思うと、軽く血を吐きそうな気分だった。

ま、今日の上司の呼び出しに関しては、カウンターとしてフラッシュアイデアを用意してあるからノープロブレム！

あらやだ用意してあったらフラッシュアイデアじゃないわね。

そして、私はふううう……と深く息を吐き出し、教室の扉を開くのだった。

× × ×

おかしい……

登校してからしばらく経つのに、ヤツからの接触が一切無い……朝のSHR前から各休み時間に至っても、いろはが全く寄ってこない。てか目さえ合わそうとしないのですよ。

なんなの？女子特有の、恋敵に対する突然の手のひら返しなの？敵認定からの疎遠↓シカトなの？

なにそれ私泣いちゃう！私達の友情はその程度のもんだったの!?

女って怖い！別にこの私は恋敵とかじゃないんですけど!?

この私ってなんだよ。私3人目かなんかなのん？

紗弥加達も「今日いろはどうしたのー？」なんて、明らかに私を避けているいろはの事を疑問に思っただけで聞いてくるんだけど、「さ、さあ？」としか答えようが無いんですよ。

そんなモヤモヤした気持ちのまま時は過ぎていき、気が付けば四時限目終了のチャイムが校内に鳴り響いていた。

さて、どうしたもんか。

まあもつともここ最近、アイツ休み時間も昼休みもとつと生徒会室行っちゃうから、このランチタイムの心配をする必要は無いんだよね。

ちゃんと誤解は解いておきたいけども、どうせすぐ生徒会室行っちゃうだろうし、ここはいつも通りに我がグループで席を囲みますかね、と立ち上がろうとしたその時、頭上から声が掛かったのです。

「……ねーねー香織ちゃん！たまには二人で生徒会室で食べな〜い？」

「!？」

なん……だと？

つい今しがたチャイムが鳴ったばかりだというのに、いつの間にか敵に囲まれている……だと？

囲まれるもなにも敵は一人なんですけれども！

恐る恐る私の席の隣に立つ人物を見上げてみると、そこにはきやる

んつとした笑顔で私を見くだしている一色いろはの姿があつたのでした。

きやるんとした笑顔で人を見くだせるってすごいよね! (遠い目)

× × ×

「……あ、い、いろはさんチーツス……」

あはっ! 恐くてつい舎弟みたいになっちゃいましたー。

いやほんとマジでちゃん付けとか恐いだけなんでやめていただけませんかね。

「挨拶とかいいから早く行こうよー。時間無くなっちゃうから」

さ、殺戮にはそれ相応の時間が必要って事を暗に示唆しているのでしようか……?」

「え!? なになににい? いろはちゃんと香織ちゃん生徒会室でランチするのお? 私も行きた〜いっ」

「うん。恵理ちゃんはいらない」

「……はい。申し訳ありませんでした……」

襟沢ああ!

ああ……襟沢が目じりとお腹を押さえてトイレに直行しちゃったよ……

いろはさん! 目に輝きを宿してください!

「ほらほら香織ー、早く行くよー」

もう香織つてば! 逃がさないんだからねっ☆と言わんばかりに、先ほどから私の腕は掴まれっぱなしなのであります。

ふむ。どうやら朝から避けてたのは、一旦話始めちゃったら、先日の概要を聞かずにはいられないから接触を我慢してたみたいな感じらしいですねっ!

良かった♪ やっぱ私というはの友情はこの程度で避けあつたり無視したりする程度のもんじゃ無かつたみたい!

深い仲だからこそその闇つてのも世の中にはあるんですよ…… (白目)

「……あっはい」

食べられるかどうか分からない弁当の入ったカバンを手に取った私を、紗弥加と智子が憐れな物を見るかのような目で見つめていました……

ドナドナって、こんな気分なのね。

× × ×

カチャリ……と地獄の扉(生徒会室)が開かれると、そこはコキユートスでした。寒いよう……

おかしいな。地獄に足を踏み入れたばかりだというのに、もう最下層なの？

「邪魔者が入ってこないように鍵掛けとこつと♪」

ガチャリ。魔王からは逃げられない。

成る程さすが世界を統べる魔族の王は、防犯(逃走)の為の施設は怠らないんですね。そりや勇者パーティも逃げ出せないわけだわ。

「香く織つーホラここ座つてこー！」

ひとつの席を引かれて、そこに座るように促される。

どうやら床に直で正座という危機は回避出来たみたい。

「……えと……いい、椅子の上に正座とかじゃなくてもいいんだよね……っ？」

「………は？」

「ひっ！なんでもないですごめんなさい！」

大人しく席に着くと、いろはは会長席にある自分の椅子をいそいそと持ってきて、私の正面に鎮座した。

あれれ〜おかしいぞ〜？一緒にランチとか言っついて、いろはと私の間には机とか置かないのかな〜？膝と膝が触れ合いそうな距離しかなくて、お弁当とか置く隙がどこにもないよ〜？

と、コナン君みたいに疑問が沸いてきた。とりあえず近い近い。

「ひっ。」

まさかの一文字である。

にっこにこにーで発する「で？」の衝撃まじげない。

「で……とは……？」

するといろはの笑顔がより一層強まった。ちなみに言うまでもなく目は笑ってない☆

「だからー、香織ってば、いつの間に先輩と仲良くなったのかなー？つて。わたし全然知らなかったよー、香織と先輩があんなに仲良さそうにしてるなんてさー。ねえねえ、あんなに楽しそうになに話してたのー？オタク的なキモい話とか？あー、なんか香織と先輩ってなにげに興味合うもんねー。なに？もしかして香織って先輩のこと狙ってたりするの？もしかして香織って先輩のこと好きなの？もしかして香織って先輩と」

怖い怖い怖い。まさかリアルな世界でヤンデレに迫られるとは思って無かつたつす！

振り芸並みの勢いと早口でまくし立てられると私チビツちやいますから！

「ま、待って待って!？」

「……なに？」

どうしよう。どうしたら私は生きてこの地獄から抜け出せるのかしらん……

なあーんちやつてえつ！

ふはははは！一方的に蹂躪されると思っただ？残念！

私なんの秘策も無しに、大人しくこんな地獄の一丁目まで連れて来られると思っていたのかね!?

秘策という程のものでも無いんですけどね。

「あんたさ、あのとき私と比企谷先輩がなんの話してたか知らないんでしょ？」

そう、教えてやんよ！この世の真理つてやつをさあ！

「あのとき私達が話してた事はねえ」

まあ本来なら言わない方が比企谷先輩の為……ってか、比企谷先輩的には恥ずかしいだろうから言われたくは無いはずなのよね。

「それはね？」

でも生憎口止めはされていないのよねー！そりゃ口止めされてれば言わなかったかも知れないけどさっ。

だから私は言っちゃうの！ふひひっ、我が身を守る為なら容易く先輩を生け贄にだってしちゃうのだ♪

比企谷先輩ごつめーん！

いろはすちゃん？この最強のカードを使って、あんたを丸裸にしてやんよ！

ここからはずっと私のターンツツツ！

「いろは、あんたのこと話してたから、比企谷先輩はあんなに楽しそうにしてたワケだし、だからこそあんたになんの話をしてたか聞かれて、あんなに照れくさそうに誤魔化してたのよ？」

「……………へ？……………ふえ？」

いやあんた私の前でまでわざわざあざとく言い直さなくてもいいから。

× × ×

ふふふ、実は最初から勝負なんてついてたのよね。

だって秘策もなにも、ただ本当の事を言っちゃえば、いろはが作り出す極寒地獄ごとき、一瞬でポカポカな常夏リゾートに変わっちゃうんですもの。それはもう常磐ハワイアンセンター（旧名）並みの陽気に。

常夏リゾートじゃなくて室内じゃん。

ソースは目の前のいろは。

さっきの私のセリフ程度で、そわそわと聞き耳を立ててらっしやいますよ？

もしもいろはの耳が猫耳だったのなら、これからの私の一言一句を

聞き漏らすまいと、ピクツピクツと動いている事でしょう。

猫耳いろはす。やだ！商売の香りがするわっ？Y o u ねんどろっちやいなよ！

「で？で？で？どゆこと？」

餅つけいろはす、あんた食い付きすぎよ？

ふふ、まあ仕方ないよね。

「いろはさ、最近イベント準備が忙しくて、全然奉仕部に顔出せてないじゃん？」

「……うん」

「だからさ、比企谷先輩が恥ずかしそうに聞いてきたのよ。一色のやつ、ちゃんとやれてっか？ってねー」

「……嘘！ガチで!?!あのせんぱいが……？」

「ガチガチ！んで、私が比企谷先輩はホントいろはを可愛がってますよねー、って言ったたら、「ただのめんどくせえ後輩だっつ」なーんて、超照れくさそうにそっぽ向いて頭がしがしちやっさあ」

「~~~~っ！」

ふひっ、いろはってばあ。もう表情が崩壊寸前じゃないのよお。

嬉ししそうに頬を桃色に染め上げて、にまにまヒクヒクしちやってるよ。

あの人が照れくさそうに頭がしがし搔いてる姿って、ホントすぐ想像出来ちゃうもんね。

「たぶんそれがいろはから見たらデレデレしてるように見えたんじゃないのー？でっさー、せつかくその事をからかってやろうかと思ってた所にちようどあんたが来ちやっつたから、先輩ってば気ままずくなっちゃったみたいなんだよねー」

ホントはからかってやろうじゃなくて、萌えちやっつたから狙っちゃおうかな？なんて思ってたんですけど、その真実は墓場まで持つていく所存であります。

「ふ……ふくん、へー」

大して興味ないですけどなにか？みたいな返事してるけど、笑いを堪えちやってるからなのか、声震えてるからね？あなた。

「どうやらあの人の、いろはが遊びに来ないと調子出ないみたいなのよね。ふふっ！そろそろ部室の方にも顔見せに行つてあげたらあ？」
勝利を確信した私は、俯いてだらしない顔を上手く隠せてるつもりになつてゐるいろはに、ニヤニヤしながらそう提案してあげた。

するといろはは俯いていた顔を上げ、嬉しさと楽しさで紅潮した顔をわざとらしくニヤリとさせて、まあほぼ予想通りのこんな一言を口にするのだった。

「……………しよ、しよーがないな。マジあの先輩わたしが居ないとダメよねーっ。何度振つても全然懲りないしさー！仕方ないから今日辺り久々に顔出してあげよつかない！」

はいはい！もうそれでいいわよっ。

比企谷先輩に対しては、バレバレの好き好きオーラを発しまくりながらも、無駄に素直に認めないで、何かしら理由つけて振り回してる方があんたららしいもんねっ。

「よっし決めたー。どんなの作るかは書記ちゃんと話合つて材料発注しようかと思つてたけど、せっかくだから雪ノ下先輩に聞きに行こーつと！えへへっ」

こうして私は無事に難局を乗り越えたのでした。

ふう……………ナイスファイト私。グツジョブ私。

× × ×

「いやー、これからついにお料理教室ですな」

「ふふっ、色々がんばっちゃったから、ちよつと感慨深いよー」

あれから数日経つた日の放課後。

私達は、これからコミセンへと向かういろはのお見送りしていた。

「ど？いろは、上手く行きそ!?さすがにこんなイベントじゃ告白までは出来ないにしても、気合い入れたのあげちゃうんでしょお？」

「ふっふっふ、超気合い入れたのあげちゃうよー！他の連中が悪戦苦

闘してる中、わたしは一人女子力発揮しまくりで。パツと何種類も作って、豪華焼き菓子セットにしちゃうんだー。邪魔者の雪ノ下先輩は、手間の掛かる由比ヶ浜先輩と三浦先輩の相手が忙しくて大したもん作れないだろうし、女子力勝負はわたしの一人勝ちでしょー！へっへっ、わたしの見事な手際の良さに、絶対女の子を意識しちゃうよ？あの人ー！」

いつから女子力勝負になっちゃったのよこのイベント。

てかあんた、自分のお菓子作りの余計な手間にならないように、雪ノ下先輩一人に面倒全部押しつける気かよ。

にしてもさすが男ウケの為に、お菓子作りを趣味と謳ってるだけあるぜこの子。

作ってる姿さえもアピールに使うだなんてねー。

これはアレじゃね？「せんぱーい、ちよつと味見してみてくださいよおく」とか言つて、ちゃっかり間接ちつすとか狙っちゃってんじゃね？

「おつと、んじや用意とかあるからもう行くねー」

「行ってらー」「頑張つてねー」「三浦さまああ……私も行きだああい……」

襟沢……お前……

「いーろはっ！楽しんできてねー！」

「うん！楽しんでくるよー」

……満面の笑顔で去っていくいろは。

この時私は、このイベントの成功というはの奮闘を信じて疑わなかったのだ。

あんなに頑張ってたんだもん。報われるはずだよね！って。

でも……翌日登校したいろはは、いや、それからの数日間のあいだこの子は……ずっつとむくれていた……

な、なにがあったのん……？

続く

そして私の友達が本物のバレンタインを迎えたら⑤

花も恥じらう恋する乙女が一年間待ちに待ち望んでいた日……

そう。今日はバレンタインデー！

そんな、恋する乙女の祭典たる今日この日、乙女代表と言っても過言ではない私 家堀香織は、とても素敵なお気に入りのカフェで絶賛デート中なのっ！

「香織ー」

二人っきりの空間は、とっても幸せシヨコラ色。

甘いホットチョコレートと甘いケーキの香りに包まれて、私たちは愛を語り合ってるのっ。

「ねえ香織ー」

うふふっ、なにかとっても素敵なのが起こりそうな よ・か・んっ ♪

「ちよつと香織ー？聞いてんのー？返事しないとあと三時間くらいは余裕で語っちゃうよー」

「アツハイ……」

一体いつからデートの相手が男だと錯覚していた？

残念！相手はいろはちゃんでしたー！

もうかおりんを解放したげてよう……

なにが悲しくてバレンタイン当日に、女二人でお洒落なカフェでホットチョコレート飲まなきゃいけないのよ。

しかも今ならもれなく愛の語らい（愚痴）付き！

そりゃ現実逃避でもしなきゃやってらんない☆

チクシヨウ！やっぱ来るんじやなかったあ！

× × ×

バレンタインを明日に控えた今日も、私はいつもと変わらぬ夜を過ごしていた。

まあいつもと違う事と言えば、明日は平日にも関わらず、入試の為に学校が休みということくらい。

そーいやシスコン比企谷先輩の妹さんが、明日うちを受験するとかって風の便りで聞いたっけな。

風の便りと言っても、休み時間とか昼休みとかに、隣から勝手に情報の流れ込んでくるんだだけ。

いやはや受験生の皆さんっ、試験頑張つてね！かおりん、心から応援し、て、る、ヨ？ちゅっ☆

うわきつ……と自分自身に愕然としてみると、不意にスマホから、キヤハっ！ラブリー17歳♪と、大音量でウサミン星人の歌声が響き渡った。

うん。私きつついわー。

「誰え？こんな時間にー」

机に置いたままのスマホを覗いてみると、ディスプレイに表示された文字は………一色いろはだった。

——いろはは件のお料理教室の後はずっと不機嫌だった。特になにを言うわけでもなく、常にぷりぷりしていたっぶり。

まあイベントでなんか気に食わないことでもあったんだろうけど、こっちからその話題を振ると面倒くさそうだから、私たちはそっとしておいたんだよね。まあいざれ話してくんだろ……と。

『いざれ話してくんだろ』……その予想が当たったのが休日の前日、しかもバレンタインの前日とか、もう嫌な予感しかない。端的に言うともめんどくさそう。

ごつめーん！寝ちやつてたあつてヤツにしとこうかな？

どうしよつかなくと、しばらくのあいだ息を潜めて一色いろはの文字を眺めてただけど、あ、やべっ、留守電にセットしてなくね？

これ電話出ないというはが諦めるまで鳴り続けるやつだ。

もう嫌な予感しかない。

私は幾度のメルヘンチェンジを果したのち、諦めて電話に出る事にした。

ラブリーな17歳のエターナルハーモニー（永遠のリピート地獄）はさすがにキツすぎんよ（白目）

あんただんだけコールすれば気が済むのよ……着信するだけで充電切れちゃう！

「……あ、も、もしもしいろはー？ご、ごつめーん！ちよつと寝て……」
『あー香織ー？「あ、これめんどくさいヤツだ。電話切れるまで気付かなかったフリしよーつと」ってスマホをただ眺めてた件については不問にしてあげるから、明日お昼に千葉に集合ねー。あ、ちなみにサシだから』

いやんバレテラっ！

「か、かしこま……」

って言い切る前に切りやがった。まだ語尾に星も付けてないってのに……

語尾に星付けるってなんだよ。

大体明日は花も恥じらう乙女の祭典バレンタインデーなのよ？

乙女の私にちよつとは気を遣っても良かったんじゃないかしら？

あ、私だからこそバレンタインに気を遣う必要がなかったんだね！
むしろ一人寂しい私に気を遣って呼んでくれたまである。

どうしよう独神女教師まっしぐら！

「はあく……やれやれ、あー、めんどくせー」

溜息混じりにそうボソリと独りごちながらも、なぜだかちよつと顔が緩んでしまう私である。

——ふふっ、ようやく観念して喋る気になったのかあ？あんにやろ

め♪

だったら仕方ないから色々聞いてあげましようかね！色々ねっ。

「ふっふっふ、よおっし」

であるならば、私は私で明日の準備をしておこうじゃありませんか！

お料理教室以来元気が無かった我が友達を、少しは元気にしてやりますかね！ふひひ。

× × ×

そう思ってた時期が私にもありました。

例のカフェに連れ込まれてから、かれこれもう二時間くらい愚痴られて魂抜け掛けるどうも私です。

これは私の想像を遥かに超えて蓄まってますわ。

「……ほんつと、人の気も知らないで自分たちの世界でウジウジしちゃってさあ……！イチャイチャしてくれるんなら、もういつそ清々しいんだよ!?なのにあ、なーんかお互いの距離を計りかねてんのかなんのか知らないけどさー、ちよつとわたしがちよつかい掛けたくらいで不機嫌になるくせに、ちよつと部外者にからかわれたくらいでモジモジモジしちゃうわ、ちよーつとボウル落として拾おうとした時に手が触れ合いそうになったくらいで真っ赤になってあたふたしちゃってさー……マジで小学生かよって感じ……！」

「……………」

「なんか最近ホントもどかしいっていうかなんていうか、変な空気になっちゃってるからさー、いっそ掻き回しちゃえ！って思って、大魔王をゲストに呼んだのも失敗だったのかも知らないけどさー……………あー……もうほんつとイラつく……………」

「……………」

「だったらもうお前ら付き合っちゃえよ！って感じなんだよね……………いや、そりゃホントはやだけどさー……………でもでも、あんなんじゃないわ

しには割り込む隙なんて全然無いじゃん……？あんな状態でいくらわたしが頑張ったって、わたしの方になんて振り向いてくれないしさー……仮にそれである関係の決着から逃げ出して一時的にわたしを見てくれたとしたって、そんなの……絶対本物なんかじゃないもん……わたしが欲しい本物はそんなじゃないじゃん？」

「い、いや、だからね？……ないじゃん？……って言われましても、私にはなんのことだか……」

「なのにあいつらと来たらさ、今のぬるま湯な関係を保つ為に、なんも先に進もうともしないんだもん……なんとか少しでも張り合ってやろうって張り切ってるわたしがバカみたいじゃん……」

「……………」

「あー……もうっ！せつかく頑張って色々と準備したのになあ……もうわたしどうすればいいのかなあ…………ってちよつと香織聞いてんの!？」

ええ、聞いてますよ聞いてますとも。てかこの長つがいくんだり、カフェに入ってから三回目くらいだし。

それにあんた私があんか意見言おうとしても聞きやあしないじゃないのよ……

嗚呼……これだから女の愚痴ってやつは嫌なのよ……

ぶつちやけ聞き手の反応なんてどうだっていいのよね。

ただ言いたいことをつらつらと述べて、聞き手はいい感じで相づち打つときや満足なんだから……

だから聞き手がその愚痴内容をちゃんと理解してるかどうかなんてどうでもいいのよね。

……はあ……これ完全に疲れたOLの居酒屋愚痴トークのノリだよ……まさか前話の冒頭が最終回のフラグになるだなんて……

ぜ、前話の冒頭とか最終回って、一体なんのことかしらん？

しかし私もこのままおとなしく聞いているだけの夢見る少女じゃいられないのでありますよ。私の場合どちらかというと夢見る処じげフンゲフン！ゲッフンゲッフーンっ！

なんか黙って聞き流しちゃいけないことなんかも口走っちゃってるしねこの子。

「あのさー、いろは」

「……………なに？」

「いやいや、あんたなんでそんなに攻撃的なのよ。」

「愚痴トーク中に水差されちゃったのがそんなにおこななの？」

「そもそもひとつお聞ききしたいんだけどー」

「……………だからなに？」

「とりあえずさ、あんたの本命は比企谷先輩ってこと前提で話を進めちやっついていいんだよね？」

「そう。もうマジで今更過ぎることだけでも、そこを認めてくんなきゃ話が進まないですよねー。」

「するといろはは途端にカアツと真っ赤になって、両手の指をくるくるさせながら俯いて、上目遣いでこう言うのだった。」

「……………ど、どうぞぞ」

「あつさり認めちゃったよ。」

「まあここまで来て「せ、先輩のことなんてなんとも思っていないんだからねっ?」とか言われても、すばこーん☆とスリッパではたきたくなっちゃいますけれども。」

「ふふっ、でも真っ赤に俯いて上目遣いで「ど、どうぞ」だなんて、なんかちよつと可愛いじゃないあなた。」

「へえ、あんだけ葉山葉山言ってたわりにはあつさり認めたわね〜」

「ま、まあどうせバレてんのなんて知ってるしい……………、いい加減認めとかなきゃ満足に愚痴も言えないじゃん」

「あんたは愚痴って満足しても、私には不満しか残らないんですけれども……………」

「つてかバレてんの分かってんなら、なんで紗弥加達も呼ばなかったの?なんで私だけ?」

「被害者を最小限に抑える算段ですかね。まあお優しい!……………私以外に。」

「……………だあってさー」

もしもじと居心地悪そうにすると、いろははチラチラと私の様子を窺うように視線を向けてくる。

「み、みんなに好きな人の話を聞かれたら……その……は、恥ずかしいじゃん……?」

あらやだ可愛い!

なるほどねー、比企谷先輩への愚痴をぶちまけるって事は、それすなわち嫉妬心をぶちまけると同義だもんね。

恥ずかしいからホントは打ち明けたくないけど、どうしても愚痴らずにはいられないから、聞かせる相手は少なくて良かったわけだ。

「……だからまあ、バレンタイン当日ってこともあるし、バレンタインとは一切無縁の香織をセレクトしちやっただっ!てへ☆」

ぐはあ!聞きたくなかった衝撃の真実!

ちよ待てよ!オトコ居んの智子だけじゃん!紗弥加だって今は居ないよ!?

……いやまあ仲良しな千葉の兄貴が居るけどさ。

でも襟沢は!?襟沢なんて私以上な残念っ娘なんですけど!?

自分が残念って認めちやっただよ。

「……私帰る」

「嘘嘘嘘!香織にしか話せないからだっばあ」

「嘘つけ、この女……」

おいおい、いろはの席の後ろに座ってる三人客笑ってんじやねーよ。肩がプルプルしてんの丸見えだぞコラ。

……あああ、まったくしょうがないわね……

まっこと不本意ではありますが、最後まで付き合っただげますかね。

ふふふ、最後まで……ね。

× × ×

さて、ようやく私のターンになったわけだ。

ではでは香織いつきまーす。

「あのさ、いろはは結局どうしたいの？さっきから聞いてると、あんたが腹立ってんのって、比企谷先輩だけじゃなくて、雪ノ下先輩にも由比ヶ浜先輩にも……って感じだよね」

「……うん」

「うーん……まあ私には詳しい事はよく分かんないけどさ、いろははあの三人の関係性が気に食わないってわけなんですよ？」

「……そ。なんか、生ぬるいつて言うかなんというか……三人が三人、お互いがお互いを傷付けないように、びくびくしながら触れ合ってるっていうか……。なんか三人でウジウジしちゃってさー。あんなんじや、いつまで経ったって前に進めないっての……」

はー……なるほどねー……

ま、あの人達ってなーんか複雑そうだしね。

三人で居る時間が大切過ぎて、ヘタに動いてそれが壊れちゃうのが恐いのかな。

んー……確かに壊れるのが恐いからって、お互いに気を遣い合う関係なんて、そんなの本物とやらじゃないのかもね。

「で、いろはは今のまま、あの三人が前に進まないままじゃ、あんた自身も先に進めないからイラついてる……と」

「うん……」

「んで、仮に現状であんたが先輩を攻め落とせたとしても、そんなのほただ奉仕部の関係を壊さない為の逃げ道でしかないから、そんなのいろはが本気で欲しがってるものじゃない。だから攻めるに攻められない……と」

「……そ」

ああ……これは厄介ですなあ……

ちよっと前までのいろはなら、ターゲットとライバルがウジウジしてるんなら、むしろ好機！とばかりに横からちよちよいかつ攫っちゃえばおけおけおつけー！ってな感じだったはずだけど、今のいろははそういうの求めてないんだね。

元々勝ち目なんてオブラートくらい薄いくせに、その本物とやらを手にする為には、奉仕部の決着から逃げ出すんじゃないやなくて、ちゃんと答えを選んで欲しいってことか。

「だからさー、目の前で先輩にちよっかい掛けてあげれば、あのウジウジした二人も張り合っけてきてくれるかなー……なんて思ってたね？味見お願いするフリして無理矢理あーんってやってみたり、ちよつと前なんて、二人でこつそりデートしてこのカフェで撮ってもらった時のツーショット写メをわざと見せたりだっしてしたんだよ？……でも、張り合っけてくるでも無く、ただ単に不満たらたらに先輩を睨み付けるだけで、ホンっト子供みたいにウジウジするばっかできあ……」

いくら張り合おうとしても、張り合うことの意味の無さにご立腹ないろはは、ぷくつと頬っぺでムカつく思い出に記憶を巡らせている。でもそのぷくつと頬っぺには、いつものあざとさとかは全然無い、ホントに心からの膨れっ面。

今まで色んないろはの顔みてきたけど、こんなにももどかしそうないろはは初めて見る。

じゃあ結局は目的もはたせてないのかな？

「……で、結局チョコってあげたの？」

「あげたよ？」

「マジ!？」

なんだよ、ぐだぐだ言うわりにはやる事やってんじゃん。

「うん……クッキー一枚」

「……………は？」

あつれー？なんか豪華お菓子詰め合わせをあげちゃう！とか言っ
てなかったっけ？

「やー……ホントはさ？二人の前で明らかに本命っぽいのを先輩にあげて、少しは危機感煽ってやろうって張り切ってたんだよ……？でもさ……はるさん先輩……ああ、雪ノ下先輩のお姉さんね？とか、先輩の中学の時の同級生とか、あとはわたしのちよっかいとかホント色々あつて……色々あつたのに、それでも全っ然動こうともしないあの人達見てたら、なーんかバカらしくなっちゃって、葉山先輩用に用

意しといた義理の方を先輩にあげて、豪華詰め合わせの方を葉山先輩にあげちゃった……」

「……あんななにやってんのよ……なんでまだ葉山先輩なのよ」

「うー……だつてえ……」

……つたくこいつは……

「いやいや先輩方の事とやかく言えないくらい、あんたが一番ウジウジしちゃってんじゃない……」

「ぐぬぬ……そ、そんなん分かつてるつてのっ……でも……さ、わたしこんなの初めてだから、もうどうしたらいいか全然分かんないんだもん……」

……いろは……

「ぶつちやけね？……どうせ勝ち目なんて無いの分かつてるから、だったら大好きな先輩が本気で求めている本物が手に入れられるように、先輩達の背中を押しちやおうかな？なんて気持ちもどつかにあつたりするんだよね……」

こいつ、そんな事まで考えてんのか……

あの一色いろはが、ここまで恋に思い悩むなんてね。

「でも、やっぱ本当はそんなのやだし、本音を言えば、わたしが先輩の本物になりたい……なつてあげたい……」

そりやそうだ。そんなに簡単に諦められるんなら、こんなに悩んだりしないもんね。

「でも、先輩にとつての幸せつて、わたしが頑張ることなのかな……それとも雪ノ下先輩達を頑張らせることなのかな……。ねえ香織ー、わたし、どうしたらいいのかな……」

ウルウルと、ひと昔前に流行つた悪徳消費者金融のマスコットわんこみたいな目ですがつてくる小悪魔いろは。

「……いろは？」

……私は、そんなふるふるチワワないろはの肩を、慈しむような笑顔に向けて優しくポンと叩いた。

「……あんだ誰に聞いてると思つてんの？この香織さんに、そんな複雑な恋愛感情の質問されたつて分かるわけないじゃないっ」

いや私もつと頑張れよ。慈しむ笑顔で言うセリフかよ。

でもそんな乙女がバカンス中の私に分かるわけないじゃーん！

「……だよーねー」

ばたーんとテーブルに突っ伏すいろはすさん。

そんなに即肯定しなくなつていいんだよ？

しやーない。「あー……：香織なんかに教えを請うても無駄だつたー

……」とかつてとても失礼極まりない独り言をボソボソと呟いているいろはに向けて、私に言える精一杯のことを言つてやるか？。

「ま、私には分かんないけどさ、でも分かる事が1つあるよ？」

「なに」

「なんか今のいろははいろはらしくない……かな」

「……は？」

「そりや色々複雑かも知んないけどさ、なんか私が知ってるあんたなら、あれは本物だけどこれは本物じゃない！とかいちいち考えないでさ、どんなカタチであれ「最終的にわたしが本物になってれば勝ち♪」つてイメージなんだよね」

「……」

「なんかさ、恋が盲目過ぎて自分を見失つてんじやね？……ワガママ言いまくつて振り回しまくつてあざとく迫りまくつて、めんどくさがられながらも、最終的にハートを強引に捕縛しちゃうぞ？つてくらいの方が……ひひっ、あんたらしいじゃん？」

ばちこーんっ☆とウインクをぶちかましてやると、いろははほけーつとした間抜け面で私を見つめてた。

「……ふっ、なにそれ！わたしのことなんだと思つてんのー!?乙女が旅立つちやつた香織のくせにー」

かっちーん！やだなにこの女つたら！人がらしくなく頑張つて慰めてやろうとしてんのによー！

だから私はそんなムカつく笑顔でニヤついてるいろはにこう言つてやるのだつたのだ！

「まー相手が相手だしー？振り回しまくつてめんどくさがられた末に見事に玉砕すんだろうけどねーっ」

「酷っ!?!」

凶星突かれたあ! って感じで、ばたーんと再度テーブルに突っ伏すいろはだったけど、私は見逃しませんでしたよ?

さつきと違って、突っ伏す前の口元が緩んでたのをねっ。

× × ×

さて、それではそろそろエンディングに向かうとしましょうかね!
私は未だテーブルに突っ伏したままのいろはに向けて声を掛けた。
「つたくう……ホントしようがない女だねえ。……よっしーんじゃ、そのウジウジした気持ちを晴らす為にも、パアツと歌いに行っちゃいますかー!」

「……は? そんな気分じゃないんだけどー。なにが悲しくてバレンタインに女二人でカラオケ行かないのよー。絶対行かない」

あ? その悲しみを乗り越えて女二人でカフェでお茶してんだけども! あんたの愚痴の為の呼び出しですよ。

「ホンっとつくづくムカつく女だねえ、あんたは。ふっふっふ……そう言ってられんのも今のうちだかね?」

「な、なによ」

私は、訝しげな視線を寄越してくるいろはを嘲笑うかのように右手を高々と掲げると、ぱっちーんと指を鳴らすのだった!

「皆の者〜! 準備はいいかっ!」

「ほーい」「はいはーい」「はあい!」

私の号令でいろはの後ろの席でお茶をしていた三人客が立ち上がると、「は? え? なに!?!」と唾然とするいろはをガツチリ押さえ込んだ。

「え!?! ちよ、ちよつと待って!?! なんで居んの!?!」

「ふっふっふ……昨夜のうちに召集を掛けておいたのさ! なぜならっ、いろはのめんどくさい愚痴の被害者が私だけなんて嫌だからっ

！」

「いやお前最悪だな」「いろはの為だって言うからとも君とのデート時間削って来たのに!」「香織ちゃんクズい!」

「ごつめーん、てへぺろ☆でもいろはの為ってのはホントだからね?あと襟沢はあとでトイレな」

「ひいっ!」

そう。昨夜いろはからの電話を受けたあと、こいつらも呼んでおいたのだ。

もちろん巻き添えつてのもあるんだけど、一番の理由は……ひひっ!ばか騒ぎしているはを元氣付ける為に決まってんじゃんか♪

「……かつ、香織い!サシだって言ったのにいいい!」

「へへんっ、どうせ比企谷先輩の愚痴をみんなに聞かれんのが恥ずかしいだけなんだろうなって思ってたよー。ちなみに紗弥加たち最初っから居たから」

「じゃ、じゃあ……」

するといろははみるみる赤くなっていく。

でも両手を押さえられてるから、その林檎みたいに真っ赤に染まった顔を手で隠せなくて、恥ずかしそうにわなわなと悶えてる。

「せ、せんぱいの話とか……せんぱいへの思いとか……み、みんな、聞いてたの……?」

「もちろんバツチリ」「やー、いろは熱いねえ」「いろはちゃん、なんかいじらしかったよお?」

「や、やあぁっ!は、恥ずかしくて超死にそうなんだけどー!わたしもう帰るー!」

「あんたあんだだけ不機嫌オーラ撒き散らしてみんなに気い遣わせてたんだから、みんなに思いを知られとくくらいは当然の義務なのよっ!

……では皆の者!いろはをカラオケまで連行じゃあー」

「了解しましたー」「ほらあ、行くよ?いろはちゃん」「私、とも君待たせたままなんだから、いつまでも恥ずかしがってないで早くしてくれない?」

「やーだー！もうベッドに飛び込みたいのわたしー」と無駄な抵抗を続けながらも三人に連行されていくいろはの後ろ姿を見ながら、私家堀香織は思うのです。

いろははホントに辛いんだと思う。

恋に頑張りたいのに。それなのに恋の勝負をするどころか、土俵にさえ上がらせてもらえない現状に藻掻き苦しんでるんだろね。ホント独り相撲だもん。今の状況って……

でもさ、やっぱあんたは一色いろはだもん。

男なんて、自分を磨く為の道具くらいにしか思ってたあの一色いろはが、今までの自分なんか全部かなくなり捨ててまで選んだ本物の気持ち。

その本物を目の前にしてウジウジ悩んでるなんて、そんなのはやっぱりいろはじゃないよ。

だから……今はみんなでばか騒ぎして、モヤモヤぶっ飛ばしてスッキリしようぜ！

んで明日からはまたいつもの一色いろはに戻って、あんたの思うように自由にあざとく傲慢に、本物の恋に立ち向かってけばいいと思うよっ。

このバレンタインが明けたら、いろはは……あの人たちは、一体どうなってるんだろうか……？

分かんない。それは分かんないけど、でも………簡単に負けんなよっ、私の友達一色いろは！

後悔なんてしないように、あんたらしく全力で当たって碎け散れえ

♪

碎け散っちゃうのかよ。

おわり☆

「if」ちやつかりと私の友達は逢引きをエンジョイする

年が明けてひと月ほど経ったとある土曜日。私 家堀香織は、女友達二人で千葉に遊びに来ていた。

ふふふ、多少オタな血が流れているとはいえ、流行に敏感なりア充女子高生ともなると、1月末から2月頭の、一年で一番寒いと思われるこの時期には、早くもスプリングハズカムに向けて春物ファッションのチェックに向かわねばならぬのでありますよ。いやいや私オタクとかじゃないんですけど。

ちなみにもちろん冬物バーゲンの余り物探索も怠りませんよー？
目指せ！80パーOFF！

「ねえねえ香織ちゃん。なにさつきから一人でブツブツ言ってるのお？ ちよつとキモいし周りの視線もあるから自重し痛いっ!」
ペシツと優しくデコをどついて溜息ひとつ。なんでよりによってその女友達が襟沢なんだよ……他にも色々居るじゃん？ 兄貴にアキバ連れてかれた女とか彼氏とラブラブちゅっちゅ中のウザ腹黒女とか。

そう！上記の二人は残念ながらそんな上記な理由で本日は欠席なのだ。上記上記つて、上記で済ませちゃうなんてちよつと紗弥加と智子に対して手を抜きすぎじゃないですかね。

何はともあれ、そんな事情で今日は余り物の二人でのお出掛けとになってしまったのです。余り物つて言っちゃった！

でもまあなんだかんだ文句言つても、コイツと二人でも遊びに来ちゃう辺りが、実は私つてこのアホそんなに嫌いでも無いんじゃない？ ……なんて、己のツンデレ加減にちよつぴり萌え萌えなんかしちやつたりしてね！きゅんっ☆

あ、今更ではありますが、いろはのヤツも不在なのでありますよ。ゆうべお誘いの電話入れたら、なんかあいつも今日はどうしても外せない用事があるのかなんとか。

三学期に入ってからなあいつは、それまでよく行っていたオトコ遊び（荷物持たせ）を止めてたみたいだから、ここ最近の休日はこちらよく遊んでただけだねえ。

なんか電話越しにウへへエへへと不気味な笑い声をあげてただけで、一体なにがあることやら。

「チツ、襟沢なんかと二人でってトコが若干気に食わないけど、せっかくだしとつととシヨツピングでも楽しんじゃいますかね♪」

「酷い!?!……………つて、あ、あれ……………」

「ん?どしたの?」

「…………あれ、いろはちゃんだよねえ……………」

そう私に問い掛けながらもじいつとそちらを見たまんまの襟沢。その指差す先には、真冬だというのに生足ミニスカートに高めなヒールのブーツという、なんとも気合の入った格好をした我らが一色いろはが、壁ぎわにコソコソ隠れてある一点を見つめてすっげーによによしていました。

× × ×

「な、なにしてんのあいつ……………」

「さ、さあ……………」

なんだよあの怪しさ満載っぷり。でもあの怪しい覗きっぷりはなんか見覚えがあるな…………。んーと、どこでだっけ?

……………あ。

いやん!見ちゃった家政婦モードの自分自身でした!てへっ☆

現在午前10時の千葉駅前。土曜ということもあり、かなりの賑わいを見せるこの大都会!千葉!の駅前で、一人によによと壁に寄り

添っている美少女はマジやべえ。いくら美少女でも通報されちゃうレベル。

っておいおい。あいつ薄ら笑い浮かべながらスマホ取り出して、なんか撮影始めちゃったよ。なんなの？本日のどうしても外せない用事って盗撮なの？

「か、香織ちゃん……あ、あれっ……」

と、襟沢がまた新たな方向へと指を差す。

いやいやその驚愕の表情やめなさいよ。この危険すぎる光景を目にしたあとでも、まだそんなに驚ける事態が私を待ってるのん？もうお腹いっぱい胃がもたれちゃいますよ私。

でももう乗り掛かっちゃった船なんだからしゃーない。たとえその船が泥製品であろうとも！

そして私は、襟沢の生意気にも超綺麗な指先と盗撮いろはのスマホのレンズが交錯する方向へと嫌々目を向けてみた。

「……………あ」

そこには、待ち合わせ場所に相手がなかなか現れない事態に、何度もスマホで時間をチェックしているといった空気を醸し出している、とある人物がうんざり顔で立っていたのでした。

「比企谷先輩だ！」

× × ×

……えつと、一先ずこの状況を整理してみようかな。

本日は比企谷先輩が誰かと待ち合わせをして、たまたま通りかかったいろはが、待ちぼうけして目を腐らせている先輩の姿に萌え萌えムラムラしちやっつて、ついつい盗撮しちやっつたよ？えへへっ！っていう構図で合っているのだろうか？

なんかもう色々とおかしいよその構図。

あんたゆうべウヘウへして、明日わたし用事あるよ宣言してたじゃん。まさか本気でその用事って盗撮なの？

前日から決められていた用事↓盗撮Ⅱストーキング。

ほらほら！素敵な公式が出来上がっちゃいましたよっ（白目）

……い、いろは、あんた……

二人して戦々恐々と様子を窺っていると、撮影に満足したのかスマホをポケットにしまったいろはが、おもむろにバッグからコンパクトを取り出して前髪をちよいと整えたりリップ塗り直したり笑顔の練習したりと、その姿、デートに赴く前の恋する乙女が如し。

ま、まさか……

最後にコンパクトに向かってぱちりとウインクをかますと、こっそりと比企谷先輩へと向かっていくいろは。その姿、静かなること林の如く。

そんないろはを発見した比企谷先輩の視線をばっちり確認したいろはは、今ここに到着したばかりですけど何か？って面構えで、とてとてと比企谷先輩へと小走りで駆け寄る。その姿、侵略すること火の如し。

………つてオウイ！比企谷先輩の待ち合わせ相手ってやっぱお前なのかよ!?

はあ？意味分かんないんだけども!?!あんた待ち合わせ相手をわざわざ待たせといてなにやってんの!?

私達というは達の居場所は距離があるから声なんてもちろん聞こえないんだけど、あの女は比企谷先輩とのやり取りに、むーつとむくれたり、やれやれと溜め息吐いたり、不満げに口を尖らせたりと、出会い頭からあざとさ全開の仕草でひとしきり先輩を攻め立て、さらにわざとらしく肩を落としたかと思えば、すぐさま勝手にカツカツと歩き始める。

比企谷先輩に背を向けた瞬間に緩んだ口元と、舞うような軽い足取りを見る限り、その背中は如実にこう語っているようだった。

『ほらほらー、時間もつたないから早く行きますよー？せーんぱいっ♪』

と。

「ね、ねえ香織ちゃん……。いろはちゃんさ、比企谷先輩と待ち合わせしてたつてのはまあ分かるんだけど……。その前のアレ……。なにやつてたのかな……。？」

「……。知らないわよ。ま、まあ大方、休日の待ち合わせに敢えて遅れてきて、自分を待っててくれてる先輩を覗いて楽しもうとか思ってたから、その姿について嬉しくなっちゃったか萌えちゃったかして、ついつい記念として写真に収めたくなっちゃった☆とかじゃねーの……。？」
ほら、女つてデートの待ち合わせは、男を待たせとくことこそが正義！とかって面倒くさい人種なんでしょ……。？知らないけど。

女の思考つて謎すぎて難易度高過ぎイイ！……。あ、私も一応女の子だったんじゃないかしらん？

……。しっかし……。まさか休日二人でデートしちゃう仲にまで発展してたなんてねえ。

最近のいろは見てたら、コイツつて本命には意外と奥手なんじゃね？ぷっぷー！とか思ってたのに、なかなかやるじゃあーりませんか。

歩き始めた二人の背中を見送る私と襟沢。

さて、今日はせっかく千葉まで春物ファッションチェツクの遠征に来たワケだし、次なる行動といえば……

「よし、尾行るわよ」

「なんの躊躇もなく!？」

てか尾行る以外の選択肢なんてあるのかしら。買い物？なにそれ美味しいの？

「……。ちよ、ちよつと香織ちゃん……。いくらなんでも常識的に考えてそれはマズいんじゃない？」

やだ！私つてば襟沢ごときに常識について語られちゃってるわ？

「ばっかお前、あの二人が行動を共にしてるトコ見ちゃったあとで、キヤツキヤウフフとセルフミニファッションショーなんか楽しめると思ってたんの？ 今頃どんな面白可笑しいやりとりを繰り広げてん

のかしらと気になっちゃって、服なんか意識持つてけるわけねーだろjk」

「……じゃえ、JK?じよ、女子高生……?　なんで急に女子高生が出てくんのか分かんないけど……、だつて香織ちゃんつて普段ならあんなの見てたらテロ予告するタイプじゃない……」

だれが過激派だよ。

「うっさいー仕方ないでしょ!?　私には八色を監視しなくちゃいけない使命があんのよ!　それ怠ったら私の存在意義が根底から崩れちゃうのよっ!」

いやいや大人の事情ぶっちゃけすぎでしょかおりん……。ホラ、襟沢がドン引きしてんじゃん。

「……よ、よく分かんないよう……」

「……はあ……まあいいわよ。んじや私一人で行くから、あんたもう帰っていいよ」

「やあだ〜!せっかく今日を楽しみにしてたんだもおん!　行くう!　行きますう!」

なんだよコイツ、そんなに今日を楽しみにしてたのかよ。いきなりデレやがって、ちよっぴり可愛いじゃないのよ。

「……しゃーないわね……んじやまた明日買い物付き合ってたげるわよ……」

「マジでえ!?やた!」

いやん私もちよつとデレちった☆

こいつアホのくせに見ただけは妙に可愛いから厄介なのよね。グループのマスコツトゆるキャラかよ。

こうしてデレりんとエリっしーによる、いろは比企谷追跡ロードムービーが幕を開けたのでした!

× × ×

駅前から歓楽街へと続くメインストリートを、二人仲良く肩を並べ

て歩くバカップル。

や、よく見ると比企谷先輩が半歩くらい先を歩いてるわね。たぶんアレ、可愛い女の子と並んで歩くのが恥ずかしいのね。可愛いヤツめ。

そんな少し斜め前の照れた横顔を見てにんまり微笑みながら、恋する乙女はその半歩を一生懸命に詰める。

ホントは繋ぎたそうな右手をふわふわと彷徨わせながら。

「……爆発すればいいのに」

「じゃあやめればいいのに!」

だって仕方ないじゃん!?

好きな男とお喋りするいろはのコロコロと変わる表情がすげー楽しそうで、見るだけで大量の砂糖吐きそうなんですもん!

ブラックを!ワシのもとにブラックコーヒーを持って参られえい!

そんな爆発寸前のカップルを憎々しげにストーキングしていると、映画館に吸い込まれていったかと思ったら、すぐさま映画鑑賞を取り止めてなにやら相談しているご様子。

……くっ、せつかく尾行してるつてのに、近付けないから何言ってるのかよく聞き取れなくてもどかしい!

「っ!」

なん……だと?

突然いろはが比企谷先輩と向き合って距離を詰め始めた!

え!?なに!?こんなトコでいきなりちゅーしちゃうの!?ちっす!?ちっすなの!?

と思つてドキドキしてたら、どうやらいろはもその顔の近さによく気が付いたようで、慌てて距離を戻すとほんのり頬を染めていた。

……ふう、あつぶね。ど、どうやらちっすじゃ無かったみたいね……。くそっ、焦らしやがって紛らわしい……!

なんか二人しているのはブーツ見たり指差してるみたいだし、普段よりも視線が近いことを確かめてただけみたい。

たかだか視線の高さを確かめてただけなのに、なに二人して照れ照れに俯いちやっつてんのよ、中学生恋愛かよ。

そんな、中学生日記でアオハルなご様子を、ちゅーしちゃうのかと思つて手に汗握つてドッキンドッキンしてたDJ家堀香織が皆様にお贈りしております☆

「……………ぎゅんっ」

唾を飲み込む大きな音に視線を横に向けると、真っ赤な顔したエリエリがはあはあ言つていた。ここ中学生しかいないのかよ。思春期真っ盛りだなおい。

自分たちの純粹無垢な乙女っぷりに愕然としてみると、突然ターゲットが動き出す。

チラッと比企谷先輩へと視線を向けて、ほんのり染まった頬を誤魔化すようにえへへっ、と可愛くはにかむいろは。そんなあざとさの力ケラもない照れた笑顔に恥ずかしくなっちゃったのか、すつと目を逸らす比企谷先輩。とつとと先を行くと、いろははペコリンと小さく返事をして、ちよこちよことその背中にピットリくっついていった。

やだもうホント爆散して。

ん？どうやらボウリング場の方へと向かっている様子ですな。

ああ、だからヒールの高いブーツを二人して気にしてたんだね。香織納得！

そして私たちはみんなでボウリング場に向かうのでありました。

注・ターゲットと追跡者をみんなとは言いません。

× × ×

ボウリング場、かあ……

ここはストーキングにはなかなか不向きなトコだぞ……？
なにせ隣のレーンとかだとすぐバレちゃうし、そもそも混んでたら
レーンなんて選べやしないし。

そして最悪ボウリングに夢中になりすぎて尾行を忘れちゃうまで
ある。それボウリング場関係なく単なる自分たちのさじ加減次第で
す。

だがしかし、ボウリング場に入店したターゲット達は、まさかのボ
ウリング総スルーで卓球台へと一直線。

なん……だと……？

……は？なんなの？将来しつぱりと温泉旅行にでも行ったときの
為の予行練習なのん？ぽこペンぽこペンと軽く打ち合って汗かいた
あとは、お部屋に戻って布団の中でぽこペンぽこペンと激しい打ち合
いをお楽しみですか？……ケツ。

なんか今日の私、ちよつと荒みすぎじゃないかしら？

「だからやめればいいのに……」

しかもモノローグが口から漏れてたみたいですよ。キャツ！恥ず
い！襟沢の口を封じなくっちゃ♪

周りに自販やソファが置かれた、場内の隅にある卓球台に移動した
ことにより、ボウリングよりは若干観戦しやすくなったものの、結局
危険過ぎて近寄る事も出来ず、ミニスカをヒラヒラさせながらぽこペ
んしてるのをただ遠巻きから眺めるだけの私。

ほらほらいろはす、あんまり夢中になりすぎてアツくなっちゃう
と、そのヒラヒラと舞い躍ってるミニスカから勝負パンツがチラリス
ムしちゃうわよ？

てかさつきから比企谷先輩がそのチラリズムにプレーに集中出来
ずに、集中力が持ってかれちやつてるじゃない。まあいろはすったら
策士さんなんだから！

もちろんこれだけ離れてると会話なんか聞こえるはずもなく、たま
に聞こえてくる声と言えは「たあ」「ほい」「うりゃ」「死ねえ！」など
の、いろはから発せられる楽しげでのどかな声ばかり。

若干のどかと言うには相応しくないのも混じってますけども。

——はあ、どうしよう……なんかちよつと虚しくなってきたよ……てかなんで卓球で特大ホームランかつとばしてドヤ顔してんだよお……

んー……、残念だけどこんな楽しそうなラリーをただ見てるだけだなんて、ただただ不毛だし精神衛生上よろしくないですよー。

……しゃーない。そろそろお開きにしますかね、と思つてたところで、存在をすっかり忘れてた襟沢に肩をポンつと叩かれた。

ん？と振り替えると、なんかすげーキラキラした笑顔で私にナニカを差し出してきた。

「香織ちゃん香織ちゃん！近くの100均でこれ買ってきたよっ！ホラホラ早くこれ着けてもつと近くに行こうよお！」

嬉しそうに差し出してきたのは伊達眼鏡とマスク。いわゆる変装セットでした。

………こいつアホだろ。

さつき私に常識を語ってきたのって、私の記憶に間違いがなければ確かあんただったよね……？

なにコイツいつの間にか尾行楽しくなってきたよ？しかもいつの間にか買ってきたんだよ……アグレッシブすぎでしょ。

「これでニット帽に髪しまつちやえばバツチリだねえ！えへへ」
私が軽く引きつってる間に、襟沢は早くも準備おっけーで満悦な

ご様子。

お前、やつぱ大物だわ。大物とバカが紙一重だとするならば、やつぱバカなんだろうけど。

それにしてもメガネっ娘姿が無駄に可愛いのもなんか腹立つなこいつ。

「……ったく、しゃーないわね……。とうっ！なんちやらプリズムパワー！メイクアップ☆」

かくいう私もこのノリノリ具合である。そしてチョイスが古いのもご愛嬌。そこはせめてプリキュアにしとけよと。

……まさかとは思うけど、やっぱり私も残念な子なのかしら……？

メタモルフオーゼを完了させて残念美少女戦士なんちゃらムーンのななにかになった私たち二人は、ここそここそとターゲットに近寄っていく。フハハハ！見つかったてももう安心！

あ、でもかおりんメガネっ娘バージョンがとってもキュート過ぎて、逆に目立っちゃったらごめんねっ？

しかし残念ながら時すでに遅し！もう卓球終わって二人してソファで休憩してました！

……やっぱ変身シーンで、尺の時間稼ぎにバンクを多用しすぎるのは視聴者に不快感を与えちゃうからダメね……

やれやれ……でもまあやつと会話が聞こえてきたよ。

はてさて、なにを喋ってんのかなあ？

「だから、しばらくは……」

ようやく聞こえたいろはの声は甘い甘い砂糖まみれ。

そしてそつと比企谷先輩の耳元にぷるツヤな唇を寄せて、いたずら心たっぷり小悪魔乙女な一言ともう一匙のお砂糖をプレゼント。

「こんなことするの、先輩にだけですよ♪」

ぐはあ！あまりの甘さに爆発予告も忘れてポツと頬を染めちゃう乙女な私っ。

——こんなことするの、先輩にだけですよ——

比企谷先輩は、そんな意味深な問題発言をかましてくすつと笑いかけるいろはを、ただただ苦笑いで見つめていた。

なんか、私らが想像してなかったトコロで、かなり関係進んでんのかな!?!つい先日のマラソン大会の、あの凹み具合はいずこに!?!

——そんなこんなでボウリング場をあとにした我々ご一行様は、次なる目的地へと向かう。

注・ターゲットと追跡者をご一行様とは言いません。

どこへ行くのやらと思つてたら、まさかのなりたけでした。
おいおいマジかよ！あのいろはがデートでラーメン屋だと？

男がデートの食事にそんなチョイスをしようもんなら、

『(いやいや、さすがにデートでラーメンってギャグでしょ笑) ごつめーん！わたし用事思い出しちゃったからもう帰るねー。たぶんもう遊びに行くこと無いと思うけど、すつごく楽しかったよー(棒)』
と、今後の二人の関係に一切の希望を与えることなく、素敵な笑顔で永遠のサヨウナラをすること請け合いなあのいろはが!?

あ、いや、さすがにいろは引きつってるけどね。さつきまでくいくいとあざとく引つ張つてた袖から、すつと手を離すくらいには。

それでも、ぶーぶーと文句を言いながらも、いろはは比企谷先輩の背中を追うようにオレンジ色の看板でお馴染みのなりたけへと入つて行つたのでした。

× × ×

「……あー、お腹減つた〜……」

時刻はお昼過ぎ。本来であればどっかのサイズかMなバーガー屋あたりで食事しているとこなんだろうけど、この場を離れてる間にターゲットを見失ってしまったては本末転倒なのである。

うーん。張り込みってたーいへん！

てかなんでせつかくの休日こんなことしてんだっけ私……と、いろは達を発見しちやつた時の、謎の気持ちの盛り上がりになかなからず後悔し始めた私の肩が、またもや存在をすつかり忘れていた襟沢によつてポンつと叩かれる。

今度はなんだよ……、と振り返つてみると、襟沢がウツキウキでまたまたナニかを差し出してきた。

「香織ちゃん香織ちゃん！ はいどおぞ！ コンビニで買ってきたよお」

……あ、あんばんと牛乳……

……こいつやっぱアホだろ。今日び刑事ドラマでもこんな
チヨイスしたらギャグにしかなんねーよ。

真冬の寒空の下、あんぱんもきゅもきゅ牛乳ちうちう、友人のデー
トの様子をコソコソと張り込む美少女リア充女子高生二人の図。

そんな自分たちの姿を多角的な視点で客観的に捉えながら、私家
堀香織はこんなことを思うのです。

やはり私の青春ラブコメは正解の要素がひとつもない。

続く。

続いちやうのかよ。

「if」ちやつかりと私の友達は逢引きをエンジョイしまくる

あー、やつぱたまに食べるあんぱんとか超おいひい！

そしてただ美味しいだけじゃなくて、空腹と疲れた身体に染み渡るこの炭水化物と糖分の組み合わせの妙と言ったらもうっ……たまらん！

そりゃ「ぼくの顔を食べて元気になってよ〜」ってCV恵子に言われたら、食べあとが若干グロくなっちゃうって分かってても、誘惑に負けてカバオくん達もついつい戴いちやうわよねー。

まあカバオくん達がお腹空かせて毎日のように道端で泣き叫んでいるという、ネグレクトの疑いさえも掛かり兼ねない家庭環境には、些かの不安要素が残る案件だけでも。

それにしてもあんぱんと牛乳ってなんでこんなに合うんでしょ!? 口内にまとわりついたあんこのねっとりとした糖分を、クリーミーに優しく包み込んでくれる牛乳のこの優しさよ……

ああっ……あんこと牛乳がまるやかに混ざり合って、私の身体の力を駆け巡るようにトロけていくぅ〜!

………星 み っ っ!!

………どうしよう。なんかちよつと悲しくなってきた。

寒空の下で冷たいあんぱんと牛乳を食しながらLet's ストリークしているのがいくら虚しいからって、冒頭からあんぱんと牛乳の食レポだけで尺使いすぎじゃないでしょうかね？

いまだかつてラブコメというジャンルにおいて、こんな舐めたスタートがあっただろうか？ いや、無い（反語）

そんなやりきれない絶望感に一人打ちひしがれていると、ようやく比企谷先輩というはがほっこりツヤツヤした顔で地下店舗から階段を上ってくる姿が視界に捉えられた。

なんだよいろははす。あれだけ不満顔でぶーぶー入店してたくせに、なんだか満腹満足幸せスマイルになってんじゃんよ。

ちくしょう！私もあったかいラーメン食べたいよう！

てか今更だけど、襟沢のヤツなんで冷たい牛乳買ってくんのよ。お腹ごろごろしちやったらどうしてくれんのよ。

そしてほっこり温まった幸せな一行と、ひんやり冷えきった悲しい一行は次なる目的地へ。

は、早くどこかのお店に入って……！寒くて死んでまうっ！

「か、香織ちゃん……さぶいいい」

だから妙な雰囲気醸し出すためだけに牛乳とか買ってこないで、ホットなドリンク買ってくりやいいでしょっつの。

先に行く二人はすでに次なる目的地が決まっているのか、中心街を抜けて落ち着いた街並みをずんずん進む。正確にはずんずん進むいろはに比企谷先輩が引つ張られてるって感じかな？

——あれ？この方向つてもしや……

先に行く二人が楽しそうにお喋りしながらしばらく歩いていると、とあるカフェの近くで立ち止まる。

うわっ、やっぱそっか……

「い、いろはちゃん達ようやく止まったあ……！ わあ、なんか可愛い。あそこのお洒落なカフェが次の目的地なのかなあ？……や、やっとあったかいトコ入れるうっ……」

「うん、そうみたい。……へえ」

「ど、どしたのお？」

「いや、あのカフェ私らのお気に入りのカフェでさ、ずいぶん前にいろはが『いいなく！彼氏……んー。彼氏とまでは言わなくても、大好きな人とこのお店でデザートつつきあったり他愛の無いおしゃべりた

くさんしたりして、まったり幸せな時間過ごしたいなあ』とかなんと
か言ってたお店なんだよねー」

「うひゃあー」

うっひょー！キタコレ!!と目を輝かす襟沢。

てかあんた尾行楽しすぎじゃないかしら。

ま、あんなセリフを宣ってたいろはが、自らずんと男を引つ
張って連れて来ちゃうくらいですもんねー！そりや期待も高まるば
かりですなー。ふひっ！

そしてなにより、ようやく私たちもあつたか空間に有り付けるつて
もんだ。

っべー！いやが上にも盛り上がりまくりっしょー！

店内へ早よ！と祈りにも似た想いでヤツラを見守っていると、ちよ
うど退店しようと店から出て来たカップルに慌てて足を止めて、比企
谷先輩の背中にコソツと隠れるいろはす。

なんだよリスかよ可愛いなこんちくしょう。

どしたのん？とそちらのカップルに目を向けてみると……………お
？おお!?な、なんか見たことある二人だぞ!?このカップル！

…………ハッ!?そうだ！書記の子と副会長さんだ！確かいろはが書記
ちゃんと便利屋って言ってたっけな。ひでーよ。

なんなの？こいつら付き合ってるの？仕事するか爆発しろ！

いやあ…………なんてニアミスなんざましよ！生徒会役員の3人がこ
んなオサレなカツフェ〜で鉢合わせだなんて。唯一かやの外の会計
先輩涙目待ったなし！

にしてもいろはすつてば、前はあんだだけ色んな男とつかえひつか
え堂々と遊び回ってたクセに、なんで比企谷先輩とのデートだけはコ
ソコソ隠れちゃうんですかねえ（ゲス顔）

うふふー、遊びじゃないリアルな恋愛だと恥ずかしいのお？（ゲス
顔）

…………ま、それはそれと致しまして…………、フハハ！思わぬニアミスで
同職場カップルに意識が集中している隙を見逃す私ではないのだよ
！今こそ近づくチャンスっ！

すすつと二人の後ろに着けて会話をステイールする私。もう盗み聞きのプロといつても過言ではない。

なにそれ自慢にならない。むしろイタイ。

「なに、あの二人付き合ってるの？」

ですよねー。やつぱそう思っちゃいますよねー。

しかしいろははそんな比企谷先輩と私の意見には真つ向から反論なご様子。

「さー？違うんじゃないですか？ だいたい遊びに行つたくらいで付き合つてるとかちよつと単じゅ……」

と、そこまで言うとはツとする。

こ、この流れはもしやつ……

「はっ！なんですかもしかして今わたしのこと口説いてましたか一回遊びに行つたくらいでもう彼氏面とか凶々しいにもほどがあるのでもう何回か重ねてからにしてもらつていいですかごめんなさい」

ぴしいっ！と両手を前面に押し出して、はあはあと息を切らしてまで一息で言つた恒例のお断り芸がこれである。

なんかもうね……

「……ああ、うん、もうなんでもいいんだけどさ……いいから入ろうぜ。外寒い」

「あ、ちよつと待つてくださいいよー」

心底呆れた様子でとつと店内へと入っていく先輩の背中を、ぱたぱたと音が出そうなくらいにあざと可愛く追い掛けていくいろはを見ながら私はこう思いました。

……いやいや呆れてんのはこつちだから！比企谷先輩もいい加減お断り芸の内容ちやんと聞き取りなさいよっ！あんたいろはに「どうぞどうぞ！先輩がもっと積極的になってくれれば彼氏面カモンですばっちこいです。むしろ推奨しちゃうまである！」って言われてんのと同義でしょうがそれ！

「やばこら……」

なに『断られるの通算何度目か数えるのも馬鹿らしくなってくるよ』みたいな間の抜けた顔してんのよ。こつちが馬鹿馬鹿しいわ。

「……さぶいよう……」

——ん？でも……あれ？

もしかしたらこいつらもうコツソリ付き合っちゃってんじやね？とかまで思ってたけど、このお断り芸をいつも通り披露するってことは、思ってたよりあんま進展とかしてないのかな？

「……がおりぢやあん……、私だちもそろそろ入ろうよ」 う……」

誰ががおりぢやんだよ。

「そ、そうねっ……」

ちよつと私、仕事熱心過ぎて寒さ忘れてたわ。まあちゃんとお仕事しないと私の存在意義が根底から崩れちゃうから仕方ないけどもっ！

どうやら襟沢ももう限界らしく、真っ赤になった鼻をズビズビ鳴らして泣きそうになってることだし、とりあえず疑問は一旦脇に置いて、ポンコツ眼鏡女子コンビもコーヒーと紅茶の香るあたたかいカフェへと身を委ねることにしたのでした。

おおっ……ここは正に常夏パラダイスの玉手箱やあ……！

「……あ、店員さーん。私たちあのカップルの裏側にしてくださーい……」

そうホールの女の子にコソツと耳打ちすると、当然の如くめっちゃ怪しまれました。

やめてっ、そんな目で私を見ないで！なにかに目覚めちゃいそう！
なんも目覚めねーわ。

× × ×

ボサノバ調の穏やかなBGMが優しく流れる店内へと足を踏み入れると、そこはもうまどろみの空間。

扉を一枚隔てただけで、まるで非現実的なくらいにゆったりとした時間を手に入れられるこのカフェが、私はとっても好き。

こんな素敵なカフェだもん。のんびりとソファに腰掛けて、コーヒーや紅茶の香りに包まれたり、可愛い雑貨やお洒落な調度品が飾られた店内を眺めたり、ナチュラル系BGMに耳を傾けながら美味しいスイーツとダーズリンでティータイムを楽しんだりと、贅沢な時間を堪能したいところだよね。

ただ……うん。なにせ今日は目的が非常に残念なアレなもんでして……。いやもうホント宝の持ち腐れのなカンジ？

ごめんよおカフェ……！今日はお前さんを楽しめないんだよね……。次に来店した時は心行くまで癒しておくれ……？

変装しているとはいえ、襟沢はともかく私は一応比企谷先輩にも顔バレしてるから、とにかく慎重に気付かれないように案内された席へと通される私。

なんならほふく前進したいくらいな緊張感。うひよつ！一発でバレますね！

ホールの子に連れられていろはの後ろの席に座る頃には、すでに注文を終えているいろはが肘掛けに頬杖をついて幸せそうに小さくハミングしてた。

あ、これいろはが最高にご機嫌なヤツや。ふふつ、今幸せいっぱいなんだろうな、いろはのヤツつ。爆発しちゃえ♪

そんないろはの幸せなハミングに耳を傾けながら、いろはの様子を盗み見たり窓の外の景色を眺めたりしてる比企谷先輩も、なんだかとても穏やかな表情を浮かべている。

これがいろはの求めてた幸せティータイムかあ。良かったじゃん！夢が叶ってきつ。

「……なんだか素敵なお店だねえ……」

「……でしょお？」

ひそひそではあるけれど、お気に入りのカフェを襟沢も気に入ってくれたみたいで何よりですな。

「……今日はこんなんだけど、今度はみんなでゆつくり来たいなあ

……」

「……ま、次の機会にねー……」

ひそひそ声でひとしきり会話をしたあとは私たちも注文を済ませます。どうやらいろはもこの素敵な時間にご満悦のようで、意識が周りに向くような勿体ない時間の過ごし方をしなさそうだしね。

キャラメリゼされた見た目がとても綺麗な、オレンジのシブリーストとダーズリンティーのケーキセット。これが私のお気に入り。

襟沢はとちおとめのミルクフィードとロイヤルミルクティーのセットかあ。なんだよこいつ乙女なお嬢様かよ。もちろん私もひとく……ふた口以上は食べるからよろしこー。

「この店、生徒会で使ったりするの？」

注文を終えた私たちが聞き耳を立てていると、まったりとハミングを聞いていた比企谷先輩が不意にいろはに問い掛けた。

「あー、副会長と書記ちゃんのことですか」

ふむ。どうやら比企谷先輩は先ほどの遭遇がちよつと気になったみたい。私も気になります！

いろはによると、生徒会室で雑談してた時に話の流れでここの事を話す機会があったみたいだね。

今日のデートの為に「休みの日はどんなところ行くんですかー？」とかそんな事を副会長に聞いてるうちに、自分のお気に入りのカフェの話をしてみたんだそう。

つーかいろはなんかデートくらい慣れてんじゃないの？わざわざ草食系利屋先輩に聞かなくなつて大丈夫そうなものだけでも。

……ああ、そつかあ。いろはからすれば、普段のオトコ遊びは、あくまでもいろはす教の信者への奉仕であつて、それをデートとは捉えてないってことなのかな？

大好きな比企谷先輩にせっかくのデートを楽しんでもらいたいからつて事前リサーチしとくなんて、いろはのヤツめ。中々いじらしい乙女をやつてるじゃないかね！

ただいかんせん残念なのは「今日のために。今日のために！」と、上目遣いでいじらしさをアピールしてるトコだな。比企谷先輩もその

あざとアピールに呆れてんじやないのよ。……ったくう、それさえ無
きやねえ……

それにしても……後輩女子に教えてもらった店をさっそく他の後
輩女子とのデートに使うとか、ああ見えてあの副会長なかなかのやり
手だな……。シチュ的に誘いやすい上に断られづらいという抜け目
のなさ。見るからに無害そうな草食動物オーラを放ってるくせにつ。
草食動物顔してるくせにつ！

私が副会長への不信を募らせてる間に、ここからが本題だあ！とば
かりに、いろはがコロツと話を変える。

そしてその時、いろはの目がキラリンつと光った！いろはすフラ
ー
シユ☆

「まあ、ニアミスしちゃったのは正直予想外でしたけど……」

そこまで言うと、別に誰が聞いてるわけでもないのに（実はあなた
の友達が後ろで聞いちゃってますけども！）、ニコリとはにかんだい
ろはが口に手を添え、こしよつと秘密めかしてこう囁いた。

「今度はもうちょつと知り合いが少ないところにしましようね」

キタコレ!!次のデートのお誘い頂きましたありがとうございます。

『一回遊びに行つたくらいでもう彼氏面とか図々しいにもほどがある
のでもう何回か重ねてからにしてもらっていいですかごめんなさい』
などと自分から言つといて、その舌の根も乾かない内に自分から誘
いやがったよこの女！

とても迅速丁寧なご対応ですね。どんだけ早く彼氏面して欲しい
んでしょうか。

「次があるのか……」

もちろんそんないろはの真意に気付くハズもないプロのぼっちは、
ちよつとめんどくさそうに顔をしかめる。

やー……いろはからのデートのお誘いにそんな態度が取れるのは
比企谷先輩くらいなもんですよー……

もちろんいろははぷくぷくとごりつぷくぷく！

「なんでちよつと嫌そうなんですか」

「や、別に嫌なわけじゃなくてだな……まあ、そのなに、善処できるよう前向きに検討する方向性で調整しとくわ」

行く気ねえ……

いろはすふあいとつ！

「まったく現実味のなさそうな返事ですね……」

せつかくのお誘いを無下にされたいろははもつと怒ると思ったんだけど、はあ……と溜息を吐いて呆れながらも、どこか楽しげな苦笑いで先輩を見つめてる。

その表情を見る限りでは悲観の様子なんて一切なく、——まったくこの先輩はほんつとにしよーもない先輩ですねー。ま、嫌がったってその内また強引に誘っちゃいますからね♪——ってな顔してるよ。ふふふ、強いねー、いろはは！

その時が来たら今度は事前に教えてよね、私の友人よつ！なにせ尾行するには色々と下準備が必要だもの☆

また尾行る気かよ。はい、大事なお仕事です。

……とりあえずここまで盗み聞いた限りでは、この二人の仲ってまだ全然進展してみたいなのよねー。ちよつと残念なようなちよつと安心のような。

べ、別に私よりも先にいろははに素敵な彼氏が出来ちゃったわけじゃなくてホツとしたって意味じゃないんだからね!?

「おつ」

呆れた苦笑いを浮かべていたいろはが急に色めきたつ。どうやらようやくお待ちかねのスィーツが到着したようだ。

マカロンサンドケーキを前にしたいろはは、キラツキラと大きな瞳を輝かせてスマホで撮影したりしてる。

おいおいそのスマホ、比企谷先輩の盗撮写真が入ってること忘れんなよ？

その後比企谷先輩のゼラートやらコーヒーやらも撮影会したい

ろはは、店員さんを呼んで比企谷先輩とのラブラブツーショット写真とか撮って、それはもうホクホク笑顔でご満悦でした！ちよー顔とか近いでやんの。爆発しろ。

そんなイチャイチャしてる様子を羨ましげに見つめながら、私はお通夜状態でただケーキセットを待つのみだったのです。ホント爆発して。

こらこらエリちゃんや？ツーショット撮影の様子と私をもじもじと交互に見つめるのをやめなさい？

い、言つとくけど私らはツーショット写真とか撮らないんだからね！？

……………た、ただ心を許した友達とのああいう行為と記念写真に憧れてるだけだよな？お願いだからあんたのお姉さま属性の対象を私に移すのだけは勘弁してください。私より属性とか皆無だかんね……………？

てかD組の中西くん狙いとか、もう死に設定だろコイツ。

いやん設定って言っちゃった！

× × ×

「ふふっ、それにしてもホント先輩ってどーしよーもないですよねー」
「あん？」

「デートで映画見に行つて別のを観ようだなんて、わたしの16年の人生の中でも超レアですよ。超初耳ですよ」

「あのな、映画つてのは別に同行者と時間を共有する為に行くもんじゃねーだろ。自分が楽しめるものを観ないで、相手に合わせて観たくもねえもん観たって、それは映画に……………ひいては制作委員会の方々に失礼つてもんだらうが」

「……………うっわ、めんどくさー……………。だいたい映画なんて観終わった後に、感想やら批評なりを相手と語り合つてなんぼじゃないですかー」
「めんどくさい言うんじゃないよ。そもそも共感出来ない他人同士が

感想なんか言い合ってたって一切意見なんか合わねーよ。ただ不毛なだけだ」

「……………やっぱめんどくさっ……………」

襟沢からの熱視線をなんとか掻い潜り、いろは達の面白可笑しいお喋りをBGMに、美味しいスイーツとお茶で午後のひとときを楽しむ優雅な時間。メシウマだぜ！

てか先輩……………、いくらなんでも劇場で僕と握手！ならぬ劇場で僕らは解散！は無いですよ……………さすがの私でもドン引きですわ……………

そりゃいろはが即引き返すわけだわ。やはりプロのぼっちは伊達じゃない！

「やー、それにしても卓球とか超盛り上がりましたよねー。わたしよくトロそうとか言われちゃうくらいなんで、ホントはあんまり自信なかったんですけど……………」

おっといきなりの話題転換！女の子の自由トークはマジで目まぐるしいわね。

「その「トロそうとか言われちゃうんでー」とかあざとさ凄いから。なんなの？ 運動オンチキャラってあざと界ではウリになんの？ そういうの間に合ってますんで」

「むー…あざとくないですうー！ちよお素ですうー！ てかあざと界とか意味わかんなくてキモいですし超失礼じゃないですかねー？」

「はいはい、素素」

「むーっ」

やっべ、やっぱ超面白いわ、この二人！

最近あざとさを封印してるいろはが、比企谷先輩にだけはこんなに必死にあざとくアピールしてるのも微笑ましいし、それを軽くあしらう比企谷先輩の冷めた返しもまた最っ高！

そんな素っ気ない返しを受けて、ぷくつと膨らみながらもどこか満足気な微笑を浮かべるいろはは、あざといキャラに対して、こんな風に小気味よい返しをしてくれる比企谷先輩とのやりとりが本当に楽

しくて仕方ないんだろうなっと思う。

なんだかんだ言って総武高ベストカップルなんじゃないでしょうかね、こいつらっつてば。

「……えへへ、なんかすっごい楽しそうだねえ……」

そんな様子をニヤニヤと眺めてた襟沢も、ついつい楽しげに小声を漏らす。

「……でっしょお？これが私の最近のマイフェイバリットなのよねー……」

「……香織ちゃんってオタ趣味だけじゃなくて他の趣味も残念すぎ痛い！モガモガっ……」

「……バカー！でかい声やめい……！」

リア充真っ盛りの私には一切身に覚えの無い失敬なことをぬかす襟沢に、つい強烈なアイアンクローを食らわせちゃった私もほんのちよびつとだけ悪いんだけど、でかい声で叫びかけた襟沢の口を塞ぎながら、超びくびくで意識をいろはに集中させる私。

ひいつ……！見つかつてまうう！

………ふいっ、あつぶね。どうやら先輩とのお喋りに夢中すぎて気付かなかったみたい！

てかこんなにくんずほぐれつしてたら、周りから見たら私と襟沢もカップルに見えちゃうんじゃないかしら？ゆるゆるく。

ありや、暴れるからちよつとおっぱい触っちゃったじゃない。

………う、うへへ、なかなか良いチチしてはりますなあ……。完全に変態そのものである（キートン感）

いやいや冗談だから。ゆるゆるカップルとかならないから。

……だからあんたは頬をほんのり染めんのやめなさいっつてば。

そんなゆるゆる空間と化してしまった私達の後ろでは、八色漫才がさらに加速する。

「にしてもあの時わたしのスマッシュ超見事にキマりましたよねー！

あはは、先輩っつてば冷や汗ダラダラで、ただ茫然と見送ることしか

出来なかったですもんねー」

あんだスマッシュユなんて決めてたっけ？

「おい、ついさっきの記憶をこんなに早く捏造すんな。お前のはスマッシュユじゃなくてホームランだから」

ですよねー。今日は一体何本の場外ホームランを目撃したことか。

「なんですか目だけじゃなくて脳も腐っちゃったんですか？ 都合のいい記憶の改変でわたしを洗脳しようとするのやめてくださいー。

……はっ！その都合のいい記憶改変洗脳を利用していつの間にかわたしと先輩が彼氏彼女だって洗脳する気でしたかいくらなんでもそれは姑息すぎて無理ですどうせなら男らしく真正面から思いつきりドンツとぶつかってきてくださいお願いします」

とうとうお願いしちゃったよ。

「いやお前それはさすがに持っていき方が強引すぎだろ……そこまでして振りたいんですかね」

……あんだこそそこまで徹底して気付かない体でお断り芸をスルツとスルーすんなら、いつそのこと「え？なんだって？」でいいよもう……この唐変木めが。

——その後も二人の幸せトークは尽きることもなく、

「最初ラーメンとか信じらんないこのダメ男とか思っちゃいましたけど、意外や意外、結構美味しいモノなんですわねー！ わたしびっくりしちやいましたよー。えへへ、先輩なんて脇目も振らずにラーメンにガチ集中してましたもんねー。ふふふっ、まあしよーがないからアレだったらまた付き合っただけでもいいですよー？」

「……………」

「ちよ、ちよっとお！先輩今聞いてましたかー？てか今寝てませんでした!？」

「…………へ？ あ、や、聞いてた聞いてた。超聞いてたわ。ね、寝るわけねーだりよ…………」

「やっぱり寝てたんじゃないですかー！」

などなど終わることなく続き、そんなこんなでカフェでの素敵な時間ほこうして甘く幸せな空気に包まれ、のんびりまったりのんのんびり以上に過ぎて行くのでした〜！

あ、ちなみに襟沢は私の腕の中でぐったりしてました。

ウフフ、口を塞ぎすぎて危うく口を封じちゃうところでしたよ？て

へっ☆

続く

「if」ちやつかりと私の友達は逢引をエンジョイしまくりやがる

ふっほー！満腹満腹。てか糖分摂取し過ぎて糖尿病一歩手前だぜっ！

……そんな想いで胸がいつぱいになるくらいに八色夫婦漫才をお腹いっぱい堪能し、私達がカフェを出る頃にはすでに辺りはすっかりと夜の闇に包まれていた。

いやー……盛り上がりすぎじゃないですかねいろはすさん。

いくら真冬で日が落ちるのが早いとはいえ、私達がカフェに入店したのって確か1時過ぎくらいよね……？何時間イチャイチャ楽しんでんのよ。

ふふっ、でもまあずっと夢見てたカフェデートだもんねー！まさかあの時は、そのデートの相手が噂のあの二年生になるだなんて夢にも思わなかったけどもっ。

「いろはちゃんすつごく楽しそうだったねえ」

「ひひっ、これだからやめらんないのよー」

「……そ、そこは程々にしといた方があ……」

「うっさいわね。あんただってさんざん楽しんでたじゃん」

カフェをあとにした私達は、映画を見終わった後の感想批評でも語り合うかのように夫婦漫才の話題に花を咲かせつつ、夜の闇に上手く紛れながら駅までの尾行を続けていた。

もう夜ということもあり、遊び回ってうえいうえい騒いでる人たちが仕事帰りのリーマンさんOLさん達で込み合う道路の人込みにも紛れられるという事で、かなり追跡しやすい状況なのである。

覗き見のプロたる私にかかれればこれはもうイージーモード。アマ

チュアモードまである。

ふふふ、いつ発見されちゃうかドツキドキな昼間の尾行と違って、今ならもつと近くに寄って、歩きながらの会話だって楽しめちゃうのだよ♪

絶対に慣れていないであろう休日デートに若干お疲れのご様子の比企谷先輩。

駅に向かう最中、くあくつと欠伸をひとつ。

おやおや、可愛い女の子とデートの最中に欠伸をするなんて感心しませんなあ！

が、そんなリラックスした空気にはだされたのか、あろうことかいろはも可愛くくあつと欠伸を漏らす。

……い、いやあ……あのいろはが男の前であんなに油断するだなんてねえ。超びっくり！

いろはが男の前で油断した姿を晒すのは、あくまでも「わたし居心地良すぎてつい油断しちゃったっ！恥ずかしいよう……えへへ☆」てな具合に、男を手玉にするジャグラーテクニク上級編のはずなのに、今のいろはのは超素だったよね。

だって、先輩に欠伸顔見られちゃったいろはの「やばっ……！」って表情も、そのあとのバツの悪そうな表情も思いつきりガチなんですもん。

——恋愛つてさ、確かに相手にときめきを求めたりきゅんきゅんを要求したりするところがあるけどさ、でも結局のところ、最終的には二人の空気がどれだけ居心地よくて安心出来るかってところにあると思うのよね。たぶん、それが恋から愛へと変化していくことなんだと思う。

だから、男の前では常に可愛いわたしを演出しているがゆえに、常に気を張ってなくちゃいけないであろういろはのあの緩んじやつてる素の気持ちこそが、先輩に対する想いの全てを表してるんじゃないのかなっ？

……などと、全日本乙女選手権代表（笑）の私 家堀香織が、愛についてワケの分からない想いを供述している模様です。

いやん私ってばなにげに恋愛マスターじゃね？

はい。妄想だけなら誰にも負けません。ドヤア。

……ちよつとだけ虚しさが胸に押し寄せてきちゃった私ではありませんが、それはそれ、これはこれ。いま重要なのはイタイ自分を鑑みることではないのでありますよ！

そう、いま重要なのは、油断して欠伸を漏らしちゃったいろはが、バツが悪そうにこほんと咳払いで誤魔化しているその先の流れ。

私はそれを聞き漏らすまいと、うへへっ……も、もちつと近こう寄らんか、と、女中をくるくる回すエロお代官様のようにバカツプルにいやらしくにじり寄る。

あぐれく、ご無体なく。

「まあ、今日のところは10点って感じですかねー」

おっと、声が聞こえるくらいまで近付いてみたら、いきなりデート批評会が始まってました。

にしても、居心地の良さに油断しちやったいろはちゃんを誤魔化す為の採点とはいえ10点で……

「一応聞けど何点満点？」

「もち100ですよ」

ふふん！と勝ち誇ったかのように、薄い胸を一生懸命に張って100点満点採点だと言いつ切るいろは。

「なんでそんな低いんだよ……」

うんざり顔で尋ねる先輩に、「えーっとお」と指折り数え始める。

「まず葉山先輩じゃなかったのがマイナス10点」

「最初から無理難題なんだよなあ」

「それから、言動もろもろ含めてマイナス40点ですよねー？」

「それはまあ妥当だな」

妥当なんだ!?!そこは即答せずにねばくる君くらいはもうちよつと粘ろうぜ!?!

ふっ、まあいくら粘ったところで、キミでは我らが千葉の英雄ふなっしーの後釜は荷が重いのと思いますかね。もはや下火感是否めませんけど。

てかその点数の割り振りで言うとき、憧れて狙ってるはずの葉山先輩であるってメリツトがたつたの10点しかないんですけど。

まずはそこに気づけよ比企谷八幡！

「一応、自覚はあったんですね……」

溜め息交じりに呆れるいろはと、それとは違う溜め息を吐く私。

まったく、やれやれですなー。

そうしているはもやれやれと呆れながらも、「あとはー」と次なる減点へと話題を向けた……かと思ったら、突然ぎゅっと拳を握り、とりやつ！と先輩の脇腹に鉄拳制裁！

「女の子に呼ばれてはいはいついてきちやうあたり、マイナス50点です」

ほほー、まあ分かった事とはいえ、やっぱいろはのお誘いで実現したおデートだったんだねー。

しかも「女の子に呼ばれてはいはいついてきた」って問題が今回の試験での最高得点問題でしたか。

それ、今後は簡単に女の子とデートするんじゃないやありません！っていう、世に言うやきもちってヤツですよね分かります。

「お前が呼んだんだろうが……。ていうかゼロになっちゃったしさ」
するといろはは「ふふっ」と軽く微笑むと、並みのバストをえへんと張る。

「まあ、でも、楽しかったのでおまけで10点あげます」

「……それはどうも」

へいへいと、苦笑を浮かべ謝意を述べる先輩に声を大にして言いたい。

ちよっと!?葉山先輩じゃない!!マイナス10点、比企谷先輩とのデートが楽しかった!!プラス10点で、葉山先輩であることのアドバンテージ無くなっちゃってるんですよ!?気付いて!?

そしていろはにも。

まったくくう、そこは分かりやすく11点あげれば良かったんじゃないっ？

× × ×

それからしばらく歩き、千葉駅のロータリーへと続く短い階段に差し掛かった時、本日の得点を発表してからしばらく黙ってしまっていたいろはが不意にこう問いかけた。

「先輩は、どうでしたか？」

それは、先ほどまでの楽しげな声とは打って変わって、とても控えめでもとても不安そうな問いかけ。

そんな問いかけをしたいろはは、俯きがちで表情を見せようとはしない。

男と出掛けても、相手に気を遣わせるだけ遣わせて、相手が楽しめようが楽しめまいが、自分が楽しけりやおけおけおっけー☆ないろはだけど、今日のデートは先輩にも楽しんでもらいたい！って想いが強かったんだろう。

「先輩はわたしと一緒に居て楽しめたのかな？」って不安な気持ちがあひひしと伝わってくる。

そんないろはの不安な気持ちだが、鈍感王の比企谷先輩にちゃんと伝わってるとは到底思えないんだけど、それでもその問いかけをしつかりと受け取った先輩は、お得意の照れ隠し奥義・頭がしがしで一旦心を落ち着けると、相変わらぬの捻くれを交えつつこう返すのだった。

「まあ、俺もそんな感じだな。……ちよつと疲れたけど」

……ふふっ、楽しかったとはつきり言わないわ照れ隠しで疲れたと付け足すわけで、ホント捻くれてんなあ、この人！

でもっ……どうやらその答えは、捻^レ先輩に惚れこんでるいろは姫に対しては及第点な答えだったようですね♪

「疲れたとか正直すぎませんかね……別にいいですけど。それだけちゃんとわたしの相手をしたってことですし！」

俯いていた顔を上げたいろはは、きやるんっ！としたあざとい笑顔

で、愛しい人をからかうようにそう言い放った。

すると、つい今しがたまでの様子とのあまりの変貌ぶりに、比企谷先輩はこの上ないほど引きつった苦笑いを浮かべる。

「なんですかその超めんどくさそうな顔……」

もう！わたしがせっつかく褒めてあげたのにいつ！と言わんばかりにぷくつと頬を膨らませたいろはは、ぷいっとあざとくそっぽを向くと、早足で先輩の少し前を歩いて拗ねたようにこう宣った。

「めんどくさくない女の子なんていませんよ」

あはは、そりや確かに！

まあいろはのめんどくさは、数多く居る女の子の中でも群を抜いてるけどねー！

主に比企谷先輩関連で。

「……そうだろうな、めんどくさくない人間がそもそもいないし」

うっわ……こっちもやっぱめんどくさっ！

「うっわ、先輩めんどくさっ」

おっとまさかのシンクロ率。使徒も泣きながら裸足で逃げ出すレベルのめんどくささ。

……このめんどくさい同士、やっぱあんたらお似合いだぜ！

そんなこんなで駅までの珍道中もついに終わりを告げる。二人はついに別れの刻。

別れを惜しむからなのか、いろはが歩く速度を若干落としたりはしたものの、無情にも二人は朝の待ち合わせ場所でもあり本日の解散場所でもあるのであろうビジョン前に到着してしまう。

「とりあえず、今日は参考になりました。ありがとうございます」

「お、おう……こっちこそ……なんだ……あれだ」

……私も軽くびっくりしたんだけど、いろはの素直な謝意から続く流れるような恭しいお辞儀に、比企谷先輩が戸惑った様子でごによごによとどもらせた。

いろははそんな先輩の慌てた姿を見て可笑しそうにくすつと笑うと、とても優しい笑顔を向ける。

「……先輩もちやんと参考にしてくださいね？」

——先輩も参考に——

それはいろはにとつて何を意味しているのか。

『今度はもうちよつと知り合いが少ないところになりましたよね』

さつきカフェで次のデートの約束を無理やり取り付けてたし、次のデートではちゃんとリードしてくださいねっ！って意味なのかな。

それとも、あの人達との煮え切らない関係を後押ししようとしてるのかな……

それはいろはにはしか分からない。でも、優しい笑顔のその言葉の裏には、ほんのちよつぴりのピリ辛スパイスが混じっているようだった。

「……ああ。まあ、なに、今日はサンキユな」

「それじゃあ、また学校で」

「気をつけて帰れよ」

「ふふっ、せんぱいも♪」

お別れの挨拶を済ませ、いろははエスカレーターでモノレールのホーム階へと向かう。

徐々に離れていくいろはの背中を優しく見送っている比企谷先輩に、不意にくるつと振り返るいろは。

まだ立ち去らずに、自分の姿が見えなくなるまでは見送ってくれてるんだってことを確認したいろはは、にこぱあっとキラキラ輝く笑顔になると、姿が見えなくなるまで嬉しそうに胸のあたりでぴよこぴよこと小さく手を振っていたのだった。

——さてさて、これにて本日の逢引きとそれに伴う嬉し恥ずかし追跡劇が、無事に幕を閉じたのであります！

× × ×

嬉しそうに手を振るいろはを優しく見送った私と襟沢は、お互いに優しく微笑み合うとうんと頷く。

「よし、行くわよ襟沢」
「がってんー!」

そして私達はいろはの姿が見えなくなった方向へ、未だ優しげな眼差しを向けたままの比企谷先輩の横をするりと擦り抜けると、全力でエスカレーターを駆け上がる。

ふははははは！そりゃこのままいろはを逃がすわけがない！ここはもちろん突撃インタビューしちゃうに決まってるじゃないですかー？

当然の如く私達の身に危険が及ぶような素人さんみたいな真似はしないのよ？

ちょうど今そこで比企谷先輩と別れたところ目撃しちゃったんですけどー？って体で話し掛けるに決まってるじゃないですかー！

あんたもその辺ちゃんと理解してんでしょうね!?とアイコンタクトを送ると、あいあいさー!と可愛くウインクを返してくる襟沢。

不安で仕方ない。

でもあんまりこの件に触れてると余計なフラグを立ててしまいうなので、あまり触れずにいるのが吉と見た。

……ほらそのキミ！それもうフラグ立ちまくっちゃってるZ E ☆ハハーっとか言わないの！だったら先にちゃんと打ち合わせしときゃ済む話だろ？って？

だって急がないというはがモノレールの改札に入っちゃいそうなんですよ。

そしてようやく前をとぼとぼと歩くいろはの背中に追い付いた。なんかいつもよりもちっちゃいな、このとぼとぼと歩く背中。

どうやらデートがあまりにも楽しすぎて、お別れをしちゃったあとの孤独感が半端ないご様子ですな。

そのしゅんつとした小さな肩をポンツと叩くと、一瞬ビクリとした

いろはが、それはもう物つ凄いい勢いで振り向いた！

その首はグルン！と！

その瞳はキララあつと！

そして私達の姿を認識した瞬間、そのキラツキラ輝いていた瞳は、どよんとこの世の終わりを告げるかのように腐れ落ち、そのキラツキラ輝いていた表情は、深遠を覗いちやつて、その深遠さんに覗き返されちやつたかの如く酷く青ざめる。

「……な、なんで居んの……う？」

もしかしたら先輩が追い掛けてきてくれたのかもお♪なんて淡い期待から、デート終わりにまさかの友達との遭遇という恐怖のずんどこに落とされてしまったという余りの気持ちの落差に、とてもじゃないけど人前ではしちやいけないような顔で私と襟沢を見つめるいろはすマジやばい。やばいろはす。

「いやあ、今日二人で買い物してただけどさあ……、そろそろ帰ろうか？つて話してたら、そこでいろはと比企谷先輩がお別れしてるトコ見ちやつてさあ……なにになー？もしかしてデートでもしてたのお？」

やばいろはすに若干ビビりつつも、なんとかからかうようにそう言ってみた。

するといろははあわあわと慌て始め、いろはすピーチも真っ青なくらい頬をピンクに染め上げた。

その染め上がった頬つぺといったら、それはもうスパークリングでサイダーつてくらいにしゅわつしゅわ！

まあ全部透明なんですけどね。

「ちちち違う違うから！べべべ別にデートとかじゃないし！ただフリペの取材で先輩を利用してただけだってば！」

——ほっほおう、今回のデートのお題目はそういった理由付けでしたかあ。

そーいやこないだ『余った予算をとつと処分して、わたしの予算

が削られる前に証拠隠滅しなければっ！』とかなんとかアホなこと吐かして、フリペでも発行しちやおつかない、とかどうでもよさげに言っただけなコイツ。

「……へえー、そっかそっかあ。成る程そういうことねー。じゃああくまでも仕事であつて、別に楽しんでたわけじゃ無いってことかー」
「そ、そうそう！……ほら！先輩って超便利だからさー、こういうとき上手く利用出来るから今日は先輩を持ってきたみたいないな……？」

……コイツもホント強情よねー。フリペ取材に利用するだけだったら、戸部先輩とかの方がよっぽど便利なのに。だって財布にもなるわけだし？

ふひひっ、取材に付き合わせて、オマケに財布にもなるその他大勢の男子諸君を置いて来て、敢えて比企谷先輩を持ってきた理由ってなんなのかなあ？

それにそもそもあんなに楽しんじゃってる姿をあれだけ晒したあとに、「ただ利用してただけー」なんて言われましてもねえ、ぷっぷー！

とはいえ、ずっと見てたよんっ、なんて言えるわけがないから、これ以上無理に突つくと藪蛇にかぷつと噛まれちやいそうだし、今日はこの真っ赤に照れまくって無駄に否定してる面白いのを見れただけで満足としておきま……

「ぷぷぷっ、またまたいろはちゃんてばあ！ 朝から盗撮とか卓球とかラーメン屋さんとかカフェとか、あーんなにすっごい楽しそうにデートしてたくせに、お仕事だなんて言っっちゃってえー！」

……おいまてお前。

「……………は？」

「……………あ」

あ、じゃねーよ。うっかり☆じゃねーよ。やっぱお前バカだろ？

そりゃそう言っただけのやつだった気持ちは分からんでもないけどさ？ 私も我慢しきれずニヤニヤしちゃってたけどさ？……………あんたなに口走つちやっつてんのおおお!? バカなの？死ぬの？

「……………え？ちよつと待って？……………あれあれえ？ごめんねー？わたし今ちよつと混乱しちやってるんだけどさー……………え？どゆこと……………」

そう襟沢にお尋ねなさってるいろはすさんは、ほんのりピンクに頬を染め上げた可愛いろはさんから、血のように赤黒い赤鬼いろはさんへとメガ進化していらつしやいました。

「ち、違うのー！いろはちゃん違うのお！……………私はデートを尾行るなんてやめようよって止めたんだよお！……………でっ、でも香織ちゃんが『ばっかお前、あの二人が行動を共にしてるトコ見ちやったあとで、キヤツキヤウフフとセルフミニファッションショーなんか楽しめると思ってるの？今頃どんな面白可笑しいやりとりを繰り広げてるのかしらと気になつちやって、服なんかを意識持つてけるわけねーだろjk』とかワケ分かんないこと言っつて私を無理矢理っ……………」

……………私、売り渡されました。

なんでお前一言一句間違えずに覚えてんだよ。間違っつてなさすぎて否定出来ないじゃんよ。

「ちよつと待て！私あんたに、じゃあ先に帰ってれば？つて言っつたよね！言っつたよね！なに？無理矢理とか失敬にもほどがあんでしょ！」

「ち、ちがっ……………！いろはちゃん聞いて!?か、香織ちゃんなんてね、最近のマイフェイバリットがいろはちゃんと比企谷先輩の面白やりとりをこつそり覗くことだなんて胸張つて言っつてるんだよお！私 はひとつも悪くないもおん！」

「襟沢あ！じゃあ言っつてやつけども、今日の尾行は途中からあんたの方がよっぽど楽しんでたじゃんよ!?頼んでもないのに変装セツト買っつてきたりあんばんと牛乳買っつてきたりい！」

「ひいひい！言わないでえ！香織ちゃんの裏切りものお！」

「どの口が言っつてるのよこのバカエリ！」

「バカっつて言う方がバカなんですう！」

……………とんだ泥仕合である。

もうやめようよ……誰も幸せにはなれないよ、こんなの……

私達の醜い言い争いをぶるぶると聞いていたいろはは、光が一切宿らない目のまま、不意にバッグからスマホを取り出して何処かへと電話をしはじめた。

あつれー？通報でもされちゃうのん？

「……あ、お母さん？急で悪いんだけどさー、今日友達を二人泊めることになったからー。……うん。うん。あ、ごはんなら大丈夫ー。別に一食くらい抜いたって死なないしー。……え？そんな突然じゃ布団が無い？大丈夫大丈夫大丈夫ー、今夜はオールだからー」

……どうやら電話した先は警察じゃなくって処刑場だったみたいです☆

「はーい、はーい。んじゃそろそろ帰りまーす。ばいばーい。……じゃ、行こっか♪」

とつても素敵な笑顔で私達を処刑場へと誘う執行人いろは。

でも、語尾に音符を付けるような目ではなかったです（白目）

「や、やー……そそそそんな急にお泊まりとかになっちゃっても、いろはんちにご迷惑お掛けしちゃうし……？」

「そ、そうだよお！そ、それに私、パパとママに怒られちゃうし……？」

「そつー！それにホラー！下着とかの替えなんて持つてるわけないしさー！……ね！ね！襟沢！……や、やっぱ花も恥じらう乙女が下着も替えないとかありえなくなーい……？」

そんな必死の訴えをようやく理解してくれたのか、いろははとつてもとつても慈愛に満ちた素敵な笑顔で、私達にこうおっしゃられるのだった。

「……ノーパンで過ごせ」

「……か、かしこまつ★」

拜啓お母さま。いかがお過ごしでしょうか？

あまりにも突然のことで大変びっくりさせてしまうかもしれません。香織は今日は帰れそうもありません。

ふふっ、今夜はとても長い長い夜になりそうです。

了

かくして私の友達はプロムクイーンとなる①

「だんしんくいーん、んーふふー、んふー、んーふーふー」

あのバレンタインデーでの、哀しくも盛り上がってしまった女子カラから二日が過ぎた三連休明け。

来年から私たちの可愛い後輩になるであろう若者たちの入試が無事終了し、やる気！ 元気！ 寝起きく……で、今日からまた学生生活がんばりまっしょい！ と、意気揚々と登校すると、なんかいろはが頭ふりふりご機嫌なご様子でアバの名曲を口ずさんでいた。

もう完全に歌詞とかガン無視。だんしんくいーんしか歌詞言っていないし。

……い、いやいや、確かにカラオケは盛り上がったよ？ なにを血迷ったか、オーラスでダンシング・クイーンもみんなで合唱しちやったし。もちろんだんしんくいーん以外の部分はみんな「んふふ」だよ！

でもさ？ あんたカフェンとき、あんなに不満げにサガリまくってたじゃん。それはもうロマンシングもかくやってほどサガってたね。

それなのにその連休明けでそのご機嫌つぶりってどうなの？ 三日前に「ぬるま湯のあいっら（奉仕部）ムカつくー！ ムッキー！」って激おこだった人物と同じ人物とは思えないんですけど。

「……やつべ、今日のいろはす超ご機嫌じゃね？」

「鼻歌とか超かわええ」

ホラホラいろは？ 元いろはす教の信者共が、ゆめかわつなあんた見て興奮しているよ？ せっかく最近のあざとくない態度で離れていってくれたんだから、また信者に絡まれないように気を付けなさい？

そして――

「……」 「……」 「……」

三バカ（紗弥加たち）が、教室に踏み入れたばかりの私の姿を見咎めると、まるで助けを乞うかのような眼差しで私を呼ぶ。目と目で通じあう視線だけで。んー、色っぽい。

紗弥加達には心の中で激おこのかしくま☆をかましながらも、仕方ないので声を掛けますかー……

「お、おっはよー……」

ああ、朝からめんどくさいよう……。なんか最近、面倒くさい時のいろはの世話係りにされてる感があるよわたしや。

なんかあいつら、ああいうあからさまにめんどくさそうないろはだと認識すると、自分たちからは話し掛けず、すぐ私に相手させようとしてくんのよね。

決して三バカを会話に交ぜると書くのが面倒くさいとかいうメタな理由ではない。ないったらない。……ないんだからね！

「あ、香織おっはよー♪」

うわあ……。コレもう聞いて欲しいオーラを発しまくってるやつだよ。

待つてましたとばかりに、なんか机に豆腐みたいの置いてスタンバってるし。

「ど、どしたの？　なんかえらいご機嫌だけど」

聞きたくはない。だって面倒くさいし。

でも聞かないわけにはいかないの。悲しいけど、これって戦争なのよね。

「え？　別にそんなことも無いけどお……。え、気になっちゃうかんじー？」

うっわ殴りたい。めっちゃ殴りたい。なにそのツラ腹立つ。

「あ、そんなこともないんなら別にいい——」

「じゃーん、わたし、コレを使ってプロムクイーンになるんだー！」

え、こいつマジな言ってるの？　もう意味わかんなくて、いろはの話を拒絶しようとした私を無視して勝手に話しだしちゃってる件については目を瞑っちゃう！

「は？　なに言ってるのいろは。豆腐使ってなんのクイーンになんの

？」

と、ここまで尋ねて気が付いてしまった。

——ハッ!? めんどくささが天元突破しすぎて聞くのやめようかと思ってたのに、つい自分から聞いちゃったわ!?

お、恐るべしいろはす。どこまで計算ずくなんだこの女。……はい。単に私がツツコミ体質なだけですわかつてます。

「は?」豆腐なわけないじゃん。豆腐を裸で机に置いておくわけないじゃん。え? バカ?」

超真顔で返されちゃった。

「これプロジェクトだから。DVD、コード、セット、OK?」

なんで英語喋れない人が外人に説明するときみたいな片言なのよ。しかもジエスチャー交えて。

アレかな? 香織は別世界の住人なの? っていう揶揄なのかな?」

「うっさいな、知ってるつつの、豆腐じゃないことくらい」

むしろ本気で豆腐と思つてたら重症ですわ。

まあプロジェクトとは思わなかったけどね。

「あー良かった。ガチで言つてんのかと思つて心配しちやっただよー」

そりやすいませぬね。心配していただき痛み入ります。

「でー、コレはもしかしたらいつか使うかもしれない可能性もなきにしもあらずと思つて、ちよつと前に生徒会の経費で落としいた備品なんだけどー——」

使わない可能性が超絶高そうなモノを経費で落とさないで! 予算を余らせたくないからつて、なんでもかんでも経費で落としちやえばおつけー♪な風潮、どうかと思います。

にしてもあまりにも使う可能性が低すぎワロタ。でもまあこうして使う機会に恵まれたわけだし、結果オーライかな。……なんたらクインとかいう、ワケわからん用途ではあるけど。

「ふっふっふ、なんとコレとこのDVDを奉仕部に持っていくことによつて、あわよくばプロムが開催できるかもつて寸法なんだー」

だからプロムつてなに? 私あんまガンプラに興味はないのよね。

フィギュアは好きだけど。それはプラモやろ！　ってね☆

× × ×

プロムとはプロムナード、つまり舞踏会の略称。天下一を決める武道会ではない。

アメリカンなイケイケウエイウエイハイスクールスチューデント達が開く、なんともイケイケウエイウエイなダンスパーティーのことである。

ちなみに、冬休みに初めてプロムの説明をされて、「ああ、バックトゥザフューチャーで、マーティーが若い頃のママンと危ない関係っ！　になりそうになった時みたいなやつのことね」って納得したら、なんかいろは達からすつごく残念な目で見られました。解せん……

ちよ、ちよつとチョイスが古かったかな？　かな？

てか私ってば思いつきりプロム知ってんじゃないん。

なぜ知ってるのかと言うと――

「こないだみんなで集まってGlee観たじゃん？　でー、今日の放課後、奉仕部でプロジェクト使ってみなさんと一緒に観ようかと思ってるんだー」

そう。まあこないだと言っても冬休みにだけど、いろはんちに集まって海外ドラマのGleeってやつを観たからなのだ。

いっやー、アメリカンな若者達の青春群像劇ってのは、我々日本人の慎ましやくで大和撫子くすなノリとは全然違いますよね。

でも女同士のドロツとした裏側とかは世界共通☆

「はあ。……いやいやちよい待って？　話が全っ然繋がらないんだけど。それといろはがプロムクイーンになると、なんの繋がりがあんの？」

「あ、うん。だから奉仕部のみなさんと一緒に観て、あいつらのプロム熱を盛り上げようかと思って」

みなさんって言ったりあいつらって言ったり忙しいなこいつ。

「んで、もしも話に乗ってきてくれたら、来月の卒業式のあとの謝恩会

でプロムっちやおうかなーって」

なんだよプロムっちやうって。そんなジャーニーさんみたいに軽く言えるような内容じゃないでしょうが……

「ちよつと待って!!? いくらなんでも無理すぎない? あと半月くらいしかないじゃん! 無理無茶無謀すぎんでしょ……。てか、なんでそんな発想になっちゃったの!?!」

そう。コレはどう考えても無理筋すぎる。なにが無理筋って、まずあんたがプロムクイーンになる事は絶対ないだろ。クイーンになれるの三年生なんだから。

そもそも日本人気質丸出しの高校生にあんなウエイウェイなノリが合うとも思えないし(ごく一部は除く。決して戸部先輩とかって固有名詞は出さないゾ!)、大体アレってかなり規模がデカインじやないの……?」

パーティー会場は……これはまあ体育館を使えばどうとでもなるにしても、派手な装飾品の飾り付けやらダンスに使用する音楽やらパーティーに欠かせない豪華な食事やら、さらに言えばドレスとか、ね。

もしマジでプロムやりたいんなら制服とかジャージ、私服でさえも問題外。だってそれじゃただの謝恩会だし。

舞踏会の名がつく以上、飾り付けやら食事やらはある程度でよくても、やはりドレスアップは最低条件なはず。

どう考えたって時間とか足らないでしょ……。あとゼニ。そしてマネー。そんでもってお金。

「……うん、それは分かかってるんだけどさー」

するといろはは先程までの浮かれた表情から一転、どこか決意じみた表情で私を見据える。いや、私だけじゃなくって、さつきから私にいろはの相手をさせっぱなしのみんなの顔も。

てかあんたらいつの間に居たのん? 一言も発さないから、さらに五人分の会話を書くのが面倒くさい疑惑が持ち上がっちゃうじゃない!

「こないだ凹んでるときにカラオケに連行されて、みんなでバカみた

いに騒いで、みんなでバカみたいに笑って、みんなで冬休みに観たGleeでかかったダンスング・クイーンをみんなで歌って、で、そのときに思いついたんだ。あ、コレいいかもっ、て」

……私たちの顔を真っ直ぐ見据えて語りはじめたいろはの表情は真剣そのもの。

ぶっちゃけ言ってることはまだ要領を得ないままだ。だって、無理無茶無謀を押し通す理由にはなっていないんだから。

それでもいろはの瞳から目を逸らせない。だって、こないだと違ってめっちゃ生き生きしてんだもん、いろはの瞳。

そしていろはは核心に迫る。なんでいきなりこんなバカげた妄言を吐き始めたのかの核心へと。

「……香織のおかげで、わたし、決心が付いたからだよ……？ 確かにかなり難しいと思うけど、確かに無茶かもしれないけど、出来る可能性が少しでもあるならやりたいって。……香織が言ってくれたんじゃない」

『そりや色々複雑かも知んないけどさ、なんか私が知ってるあんたなら、あれは本物だけどこれは本物じゃない！ とかいちいち考えないでさ、どんなカタチであれ「最終的にわたしが本物になってれば勝ち」ってイメージなんだよね』

『なんかさ、恋が盲目過ぎて自分を見失ってんじゃないやね？ ……ワガママ言いまくって振り回しまくってあざとく迫りまくって、めんどくさがられながらも、最終的にハートを強引に捕縛しちゃうぞ？ っていうの方が……ひひっ、あんたらしいじゃん？』

「……って」

ああ、そういえばこないだそんなこと言ったっけ。

体感的には一年以上前に言ったイメージだけど、てへ！

「だからさ、やりたいと思ったことはがんばろっかなって。今やるしかない、今始めれば間に合うかもしれない、だから難しくても失敗しても、次の一手の為の布石を打たなきゃって……！」

そこまで聞いても、結局の所まったくもって「無理無茶無謀を押し通す理由」への要領は得られなかった。

でも気持ちだけはガンガンに伝わってきたよ。ガンガンに受け取ったよ。

なんでそこまでしてやりたいのかは分かんないけど……、問題山積なのはどうしようもないけど……、でもこないだの私のセリフで気持ち動いたって事は、それはつまり奉仕部に……比企谷先輩達のムカつくぬるま湯な関係に、一色いろはらしくばちこーん☆と風穴を開けてやろうって決心したってことでしょ？

だったら私はこう言ってやるしかあるまいて。

友達らしく、友達の背中をばちこーん！ って叩いてやる為に！

「ホントあんたって後先考えないよね。……ま、どうせ言いだしたら聞きやしないんだし、しゃーないかあ。よっし、よく分かんないけど、私たちが目一杯応援してやんよ！ なんか必要なことがあったら、遠慮なくなんでも言ってきてよね！」

そう言って、ちらと周りに目を向けると、紗弥加達も大きく頷いてくれた。ちなみにここまでセリフは一切なし。泣けるッ！

「ん、ありがとうと香織！ ありがとうみんな！」

こうして、一年生生徒会長一色いろはとしての最後の大事な幕を開けるのだった。

しかしこの時の私はまだ知らない。

なんでも言ってるね！ なんて気軽に声を掛けちゃったばかりに、あとあと私たちがドレスアップさせられ、スポットライトとミラーボールの煌びやかな光の中、スタンダードナンバーに乗ってウェイ

ウェイと踊り狂う羽目になるということ……

——え、三年生の謝恩会なのに私が踊っちゃうのん？

つづく

かくして私の友達はプロムクイーンとなる②

どこまでも真っ直ぐで、どこまでも純粋な暴走を貫く我が友から衝撃の告白（プロムクイーン）を受けたのも、今や半日ほど前のロングタイムアゴー。半日前は昔々じゃねーよ。

今日も今日とて部活動を終えた私は、陽も落ちかけてすっかりと薄暗くなった廊下を、えっちらおっちら昇降口へと向か——

「あ」

おうと思っただけで、そういえばいろは、今日は奉仕部でG1e鑑賞会やるとか言ってたっけ。そしてあわよくばプロム開催人員ゲッツ！

てことはまだ観てたりすんのかな？ それとももう観おわって、皆さん相手にネゴシエーションしてんのかな？

って考えると、のぞきマスターの香織ちゃんとしては俄然興味が沸いてきたのであります！ ふひっ。

ち、違うもん！ 私なのぞき行為は別に趣味とかじゃなくって、あくまでもストーリーテラーとしての職務だもん！

今までののぞき行為は偶然の出会いから起きていた素敵ミラクルだけど、たまには自らの足で現場に赴いたってバチは当たらないよねっ？

なにせ今日はいろはから本日の予定を報告してきたんだもの。それはつまり「ヘーイ！ YOUもトウギャザーしちやいなYO！」っていうお誘い合わせだもんね！ 違うかな、うん違うね。

でもまあ偶然の出会いと言ってしまえば偶然の出会いとも言えなくもない。なぜなら、実は我が部室から奉仕部部室は割と近かったりするのだ。同じ特別棟内で階が違っただけなんだよね。行っただことはないけど。

たまたま帰りにいろはの言葉を思い出し、たまたま近くを通っただけ、たまたま会話が聞こえてしまったっただけ。これはもう必然で

はなく偶然そのもの！ 違うかな、うん、これもまた違うね。

と、普段はわざわざ覗きに行ったりまではしないけど、いろはがなんであそこまでプロムを開催したいのかも気になるし、奉仕部の皆さんがあんな無茶無謀な作戦にゴーサインを出すのかどうかも気になってしまった私は、昇降口へ向けていた歩みを、一路特別棟四階へと向け直すのでした。

てくてく歩いてきた奉仕部部室があるというエリアは、噂に違わぬ静かな空間で本っ当に人気がない。マジこんなところに部室あんの？
って感じ。

あつれー？ 前にいろはに「あそこらへんにあるんだー」とかってアバウトな場所を教えられたんだけどなあ。

これはいろはすに騙されたかな？ なーんて思い始めていた時だった。

不意に視界に入った謎のプレート。

『この教室はナニナニ室である』という、教室の用途を示すはずのプレートには、なんら文字が記されていない。

それなのに、のっぺらぼうのまんまのそのプレートには、なぜか何枚もの可愛らしいシールが張り付けてあるではないか。

「……あ、これだっ」

そのデコプレート、略してデコプレには聞き覚えがあった。いろはに聞いたことあんのよね。「無地のプレートなのに、妙にデコデコして派手なんだよねー」とかなんとか。

てなわけで私 家堀香織は、二年以上（体感）もの永きあいだ一度も踏み入れる事の叶わなかった奉仕部の部室へと、ついに……ついに辿り着いたのだった！

もちろん職業柄（なんでも目撃しちゃう家政婦）中には入らないで、こっそり聞き耳立てるだけですけど☆

そして、壁にミミ子あり、障子にもミミ子あり、と、こっそり部室の様子に聞き耳を立てた私の鼓膜を揺らした初めてのセリフは、私のような一般人の想像の遥か斜め下をゆくものだったのです。

「つまり、葉山先輩がキングで、わたしがクイ……あつ、………」
ところで先輩、全然関係ないんですけど、留年とかしないんですか？」

「いやなんでだよ。プロム計画をネゴシってるんじゃないのん？」

× × ×

留年。それは、出席日数不足や単位不足という、ほぼほぼ自己責任にて起きてしまう人生の辛い岐路である。

風の噂によると、ひとたび留年と相成れば、つい先日まで後輩だった年下の子と同じ教室で机を並べなければならぬという生き地獄に見舞われると聞く。

やだ！ 居たたまれなさに押し潰されちやいそう！

しかし我が友人は、そんな地獄よりもキツイであろう屈辱の毎日、よりにもよって愛しの先輩へと強要しようとしているのだ。ああんっ！ なんとたるサド気質ウ！

「しねえよ……」

当然のごとく不満げにそう漏らす比企谷先輩に、うちのドSっ娘つたら、さらなる非情な言葉を叩きつけなさる。

「またまたあー、どうせ浪人するんですから同じじゃないですか。むしろ学割使えて超お得みたいな」

いろは、どこにもお得な要素がないよっ！

「決め付けるのやめて？ しかもそれ差し引きマイナス出てるし。ちゃんと滑り止めも受けるから浪人もしない」

「そうですか……」

きっぱりと拒否の意を示す先輩に、いろははめっちゃ不満そうにぼそりと呟く。

本日は盗み聞きだけだから姿は見えないんだけど、あの子ぜったいむーつと頬つぺた膨らませてるんだろうな。

ふふっ、なんてゆーか、後輩キャラが先輩に向かって「留年」をほめかす時って、「先輩と同じ学年になって、一緒に修学旅行行ったり一緒に卒業したいな……っ」とかいっ、MAXコーヒーもビツクリな甘々で妬ましくてクツサイ空気の時なのよねー。ギップリヤー！

あくまでも可愛い先輩をからかう小悪魔いろはちゃん☆つて空気を醸し出して誤魔化してるみたいだけでも、ホントは本気で留年希望なんでしょー？ ふはは、私の目は誤魔化されませんぜダンナ！

「あ、じゃあ代わりにプロムを手伝ってもらうっていうのは？」

なんて、人知れず廊下でにまにましてたのも束の間、次の瞬間いろはすったら、とつても悪そうな声色で謎の折衷案を繰り出した。

「代わりにってなんの代わりだよ……」

心底嫌っそうに呟く先輩。ちな私の顔もかなーり歪んでます。

いやもう、ホントビツクリしすぎて殺意が湧くレベル。おい、甘い空気かと思ってニヤニヤしてたのにただの交渉道具かよ。さっきの私のほっこり返して！

いや、ま、まあ今のはいろはらしい小悪魔なイタズラなのだろう。留年してでもあと一年一緒に居て欲しい……ホントならあと一年で終わってしまう比企谷先輩との高校生生活を、一年だけでも延ばしてあなたと一緒に卒業したい……！ って想いは事実だろうしね。

てかキングとかクイーンとか言ってたし、もしかしたら二年後のプロムキングには比企谷先輩、プロムクイーンにはわたしが……ってのが、実はいろいろの本物の夢なのかな?! ……うん、それはない。だって比企谷先輩がキングに選ばれるのはいくらなんでも難易度高過ぎイ！

「ちよつと待て。お前、本気でプロムやる気なの？」

脳内で未来のキング&クイーンの可能性を全否定していると、どうやら先輩は先ほどのいろいろの折衷案「留年しないんなら手伝え」に引っ掛かりを覚えたようで、些か驚きが隠せないように口を開いた。

謎の留年トークで話が見えてなかったんだけど、どうやらプロムそのもののお話はそこまで進んでなかったよう。

そしてそのプロム開催の案に、どうやら先輩方は懐疑的な目を向け

ているらしい。

「はい」

そんな中にあっても、事もなげにYESを即答するいろは。その言葉にはなんら迷いが無い。

でもやっぱり先輩方は朝の私の懸念事項そのままに、プロム開催への否定を始めた。

わざわざ細かな部分までは明言しないものの、その弁の中には時間やら金銭問題やら人材やら経験やらと、今からプロムを開催するに当たつての不足している部分を言外に含めていることが窺える。

——しかし……

「そうですねか……。分かりました。じゃあわたしたち生徒会だけでやってみます」

「ああ、そうだな……。へ？」

いろはから返ってくるであろう答えが予想していたものと真逆だったんだろう。流れで一旦同意しかけたものの、すぐにいろはがおかしな事を口走っていることに気が付いた比企谷先輩は、なんとも間の抜けた声を漏らす。

「……話聞いてた？」

「はい。なので、わたしたちだけでやります」

「お、おう……。そうか……」

そう不敵に宣言するいろはに先輩方はめっちゃびっくりしている。……びっくりしているみたいだけど、他でもない私が一番びっくりしてるよ！

——え、ちよちよちよ、ちよつと待つてよいろはさん？ あんたがプロム開催をする目的って、実際はプロムそのものじゃなくて、奉仕部に……。比企谷先輩に対してのなにかしらの意思表示なんじゃないの!?

一体なんの目的があつてプロムをやりたいのか、一体その目的の為になんでプロムという手段を用いようと思ったのかは知らないけど、とにかくにも目的が奉仕部と比企谷先輩に向いている以上、奉仕部

を抜かして自分達だけでやっちゃう事に意味ってあんの……？

私てつきり、可愛い後輩一色いろはに超甘い過保護な先輩方の庇護欲をこれでもかって刺激しまくって、いつぞやのフリペやバレンタインイベントみたいに無茶振りする気まんまんなのかと思ってたよ……

じゃあ、なんでそこまでプロムがやりたいの……？

「聞いてもいいかしら。なぜ、そうまでしてプロムをやりたいの？」

私の思考中もいろはと比企谷先輩の問答は続いていたんだけど、そんな私の疑問を代弁してくれるかのように、不意に美しくも冷たい声がかかるはに向けられた。

一色いろはと言えば、一年生生徒会長である事をいいことに、なにかしら問題が発生すると、その小悪魔的魅力を遺憾なく発揮して奉仕部に頼る甘えん坊さんなのは最早常識！ まあなんだかんだ言っつて、バレンタインの時はそれなりに親離れ子離れしてたみたいだし、いろはも極力頼らずにかなーり頑張ってたみたいだけでも。

それでもやつぱり一年生生徒会長を生暖かく見守る面々の中では、『先輩に頼る(甘える)後輩』という認識には違いないのよ。それは友達達の私達だけではなく、当の先輩方にとっては尚更だろう。

だからこそ、そんないろはがこんなにも困難な道を進んで選んでおきながら、さらには頼りもせず自分達だけでやりますと宣言した事は、彼ら彼女らにとっても想定外中の想定外なはず。

だからこそこの問い掛け。そう、奉仕部部长、雪ノ下先輩からの。

「え、や、だから、その、プロムクイーンを……」

「それは二年後の話よね？」

「あー、えっとそのための根回しを今からですね」

「仮に二年後プロムが行われたら、根回しなんかなくてもあなたはクイーンに選ばれるわ」

なんとも歯切れの悪いいろはの返答が続く。

そりゃね！ あんたらの生ぬるい関係にビシツと風穴あけてやるためだよ！ なんて言えるわけないもん。

ゆえに、冷静に淡々と問い掛ける雪ノ下先輩に対しての返答に我が

友が四苦八苦していると、不意に雪ノ下先輩はとんでもない事を口走った。

「は、はあ……はい？」

突然のトンデモ発言の内容に、どうやらいろはったら理解が及んでいないご様子。

それもそのはず、外野から聞いてるだけの私もちよびつくりしますもん！ だって今の台詞って、つまりは雪ノ下先輩は現時点ですでにいろはを「お前がナンバーワンだ！」と認めてるって事だもん。

やだ！ ツンデレ野菜王子のデレツぷりにカカロットもびつくりしちゃうレベル！ 学校トップからのいろはの評価って、想像してたよりずっと高いのねっ……！

まあそれは納得の評価ではある。容姿に関しては文句なしだし、こと知名度に関しても言うまでもなし。一年生生徒会長という肩書きは伊達じゃない！

……に、にしてもね？ ホ、ホラ、私も一応いろはと同じ一年生女子なんですよう？ わ、私だってクイーンに選ばれる可能性がないこともないじゃないですかー？

……うん、ないね！ 仮にいくらか票が入ったとしても、それはもうびつくりしちゃうくらい偏った趣味趣向の方々からの票でしたって未来しか見えないね！ 泣けるウー！

「今回必ずやらなければならない理由がない、という話よ」

「いや、絶対そんな話してなかったですけど……」

やはり、自分がそんなにも高評価されているという実感が湧かないのであるういろはは、いまいち雪ノ下先輩の発言の意図を読み取れていないようだ。

普段は平気で「わたしって学年で一番有名だし、当然一番可愛くないですかー？」みたいなツラしてるくせに、いざ憧れレベルの先輩から最大級の誉め言葉を受けると、途端にぼかーんとしちゃういろはすカワユス。

まあ雪ノ下先輩が醸し出す空気感が賛辞している空気感とは掛け

離れてるから、理解が追い付かないのもやむなしっちゃやむなしだけでも。

だが、そんないろはもいつまでも呆けていられるわけではない。雪ノ下先輩的にはそんな些細で当然のこと（私の可愛い後輩が一年生の中で突出した存在だというのが、そんなにおかしな事かしら？）よりも、質疑に対しての答えをご所望のようです。

そんな「早く答えなさい」というピリツとスパイシーな空気を感じ取ったのか、一瞬ううつとたじろいだいろはがなんとか答えを見つけだす。

「あ、ほら来年、わたしが生徒会長をやってる保証はないですし！ そうすると、いま企画するしかなくて……」

「その気があれば確実に当選するでしょう。立候補者はそもそも少ないし、決選投票になっても、能力も実績もあるあなたが勝つわ。来年でも問題はないと思うけれど」

しかし、そんな今思いついたばかりの言い訳が通用する相手ではないのだ。

いろはの思いつきの弁は、雪ノ下先輩の詰問の前にも容易く瓦解する。

てかさらつと言ってますけど……、か、確實って、マジいろはの評価たけえ……。あんた、校内一の有名人にどんだけ認められてんのよ。ちよつとこの人いろは好きすぎじゃないかしら？

ゆきいろ、あると思います！

「それは……、えつと……。はい、そうかもですけど……」

「であれば、来年以降でも——」

結局いろはの言い訳は彼女には届かなかった。

プロムを開催したい熱意だけは伝わっていても、どうしても今年行わなくてはならない理由には繋がらないのだから当然だ。

ここまでの雪ノ下先輩の話を聞いていてもよく分かった。いかに先輩がいろはを大事にしているか。いかに先輩がいろはを可愛がっているか。

ならば、ほぼほぼ失敗すると解っている無茶苦茶な計画を実行させ

ないように動くのは、可愛い後輩を持つ先輩としては当然のこと。だから、嘘まみれで強硬しようとするいろはの言い訳は決して届かない。

——しかし……

「それはだめです」

誰しもが、ここで話は打ち切られるかと思った瞬間に発したいろはの声色は、これだけは絶対に譲らないという迷い無き信念の色。そんな信念を感じ取ったのか、雪ノ下先輩は彼女の次に紡がれる言葉を黙って待つ。

「……来年プロムやるって言い出しても、たぶん無理なんです。先輩たちがさっき言ったみたいに、やっぱり無理だって否定されて、間に合わないって、たぶん諦めることになって……。だから、どんなに難しくても、失敗するとしても、次の一手の為の布石を打たないと……」

——あ……、今のって、朝教室で私達に向けて宣言した言葉だ。

「今やるしかないんです。今始めれば間に合うかもしれないから」

それは、思わず私も動かされちゃった言葉。

『今やるしかない、今始めれば間に合うかもしれない、だから難しくても失敗しても、次の一手の為の布石を打たなきゃって……！』

もう先ほどのまでの思いつきの『プロムクイーンに俺はなる！』『来年生徒会長やってないかもしれないから、今年やりたいなー？ みたいなの？』なんて安い言い訳など、どっかに放り投げちゃうくらいの本当に本当の本音。

「……それは、なんの為に、誰の為にやるの？」

だから届いた。だからこそ届いた。冷静沈着な真のクイーンたる雪ノ下雪乃に。そして——

「もちろん、わたしのためです！」

私のおバカな友達は並みの胸をどうだとばかりに張って、真っ直ぐにそう答えたのだ。

それは、綺麗事とかで飾り付けのされてない、嘘偽りのないどうしようもなく馬鹿な宣言。

ホンット馬鹿丸出し！　なんで今年の卒業生の為の催しなのに、なんで堂々と胸張って自分の為とか言っちゃってんのよ。あんたバカア？

本当に友達の馬鹿さ加減がとどまる事を知らなすぎて、私つてば思わず頬の筋肉が弛んじゃう！　っべー、一人で廊下で盗み聞きしながら超ニヤついちゃってんよ私！　マジっべー！

「そう。答えてくれてありがとう。……では、やりましょう」

そんなあまりにもふざけた答えに可笑しくなっちゃったのは、なにも私だけではなかったのだろう。

さすがに美の女神たる雪ノ下先輩は、私みたいなキモいニヤニヤは浮かべてないだろうけども、そう答えた雪ノ下先輩の柔らかい声が、とても優しい笑顔と共に出てきたであろうことは想像に容易かった。

……もしかしたら雪ノ下先輩は、この答えを待っていたのかも知れない。

あれだけ厳しく追及したのは、おどおどと受け答えるだけの上っ面な答えではなく、どんなに馬鹿げていようとも、笑顔で胸を張る本物の答えが欲しかったからなのかも、ねっ。

——そう、ついに私の友達は、無理無茶無謀なふざけた案件を、あの雪ノ下先輩相手に押し通しやがったのだ！

「は？　え？　マジでいいんですか、やだもう！　雪ノ下先輩超好き！　ていうかさっきのなんだったんですか超怖かったんですけどああいうのほんとやめてほしいんですけど」

雪ノ下先輩の急激な軟化と、まさかのYESという受諾に心底ホッとしたのか、いろはのぱたぱたと走る音ときゃーと言う声が奉仕部内に響き渡る。

「ちよつと……」と戸惑う雪ノ下先輩の声から察するに、たぶん今ごろ室内では美少女同士の熱い抱擁シーンが繰り広げられていることだろう。

ゆきいろ、あると思いますっ!!

「……さて、つと」

ここまで聞けばもう満足。この先はもうこの人達だけの時間なのだ。第三者がこれ以上聞くのは、あまりにも不粋つてもんだぜ!

……いや、それ言ったら盗み聞き自体始めつから不粋しかないだろうと、己に「めつ!」と可愛くツツコんでから、私はそそくさとその場を離れるのである。

そう。あくまでもこれ以上聞き耳を立てるのは不粋と感じた紳士的精神による行動であり、決して……

「ね、ねえねえ、ほら見て……? さつき通った時も居たけど、この寒いにあの子……てかもしかして生徒会長のグループの子じゃない……!? まだあそこで中腰になってドアに耳つけてニヤついてるんだけどお……」

「シッ! 聞こえちゃうから……!」

などという見知らぬ女子生徒達の不審な囁き声が聞こえてきたからではないのである。そう、決して。

——なんだよう! 人気が一切なかったから安心して行為に及んだのに、やっぱそれなりに人通るんじゃないかよう! しかも身元もバレテラ☆

いやん! 香織ちゃんつたら不審者への道まっしぐら!

今まで誰にも気付かれなかったこの趣味……げふんげふん! この職務、今後はちよつと控えなきやって心に誓った、そんな二月中旬最終下校間際の、ちよつぴり寒くて悲しいお話なのでした。(白目)

続く

かくして私の友達はプロムクイーンとなる③

「ほわあああ〜……」

鏡に写るのは、まだあどけなさを残しつつも、光沢のある黄色いドレスに身を包んだ華やかなる淑女。いつもならば元気よく外つ側に跳ねているクセツ毛も、今日ばかりは上品な編み込みが施され、華やかさの中に可愛らしさも同居している。

たとえ鏡に写し出された美しい淑女が自分自身の姿であっても、そのあまりにも普段とは掛け離れた己の姿に、口から漏れだすのは、ただただ感歎の溜め息ばかり。

「……やつべ、私ってば超可愛いくな〜？」

「……ねえ、まだ次が控えてんだけど。早くしてくんない？」

「アツハイ」

綺麗にドレスアップした自分にうっとり見惚れ、おかしな事を口走りつつ虫歯ポーズでゆめかわ！ っていると、おっそろしく冷たい声に一喝されて一発でお目々ぱっちりしちゃいました！

やだ！ ヤンキーに絡まれてる時の心境って、こんななのねっ？ 「ま、まあまあ沙希、そりゃこんな美人さんになっちゃったらビツクリもしちやうつてば。ねー、香織ちゃん！ ……やー、あたしも早く着たいなあー！」

「うひゃ、ありがとうございます、由比ヶ浜先輩！」

レディース総長のような圧を発するポニーテールの先輩にビクンビクンしていると、隣で作業していた由比ヶ浜先輩から優しいお声をかけてもらえました。

あ、やつぱ由比ヶ浜先輩もそう思っちゃいますー？ 私ってばなかなかイケてますよねー？

ふひっ、長年私の中で燻り続けていた乙女心が激しく荒ぶるぜい！ 恐るべし、ドレスアップの魔力。

そしてこんなにも綺麗に着飾った私は、ついにバージンロードへと

足を運ぶのです。こんなに美しく健やかに育ててくれて、ありがとうございます。お母さん、ありがとうございますお父さん。香織は……香織は今日、愛しの彼のもとへと嫁ぎます……っ！

ってなんでやねん。トリップしてないで周りをよく見て香織！ドレスアップして着飾ってんのは、なにも私だけじゃないから！みんなキラキラに輝いてるから！

——現在私は、このあとに控えるプロムの紹介動画撮影のエキストラ……通称ガヤとしての役目を果たすべく、体育館のステージ袖にある控え室にて、普段着ることなど有り得ないドレスなんかを着ちやつてるのであります！

ふふふ、ガヤ中のガヤであるクイーンオブモブの私には、正にうつつつけの大役大役ウ！

ってうるさいやい！私だってヒロインに憧れる、お年頃の女の子だ！

そして動画に出演するのは当然のようにドレスなど着慣れてない子たちばかりなので、控え室で由比ヶ浜先輩とヤンキー先輩が着替えやら髪の手伝いやらを手伝ってくれているのだ。

「うん、香織ちゃんはもうばつちしだね。ステージの方に出てていよー」

「はい！ありがとうございます」

そんな由比ヶ浜先輩達に、スカートの両裾を摘んでぺこりんつと可愛くお辞儀をしました。これぞ女の子が憧れるお姫様お辞儀、通称プリンセスぺこり。なんだよプリンセスぺこりって。初めて聞いたわ。

でもほら、女の子ってこういう格好したら一度はやってみたいもんじゃん？

「なんかさ……一色といいその友達といい、奉仕部の知り合いって変なのしか居ないわけ……？」

「や、やはは……」

そんなプリペこつてる私を冷え冷えとした眼差しで一瞥し、呆れたように問い掛けるヤンキー先輩と、それに対して特にこれと言った否定もせずに苦笑する由比ヶ浜先輩の囁き声を背に受けながら、私は涙を拭って舞台へと駆け上がるのだ。

……いやいや奉仕部の変な知り合いってのはあなたも含まれてますよ、川崎先輩！ それに由比ヶ浜先輩、そこは否定してよう……！と、心の奥底で嘆きながら……

控え室を出てまばゆいステージに立った私の瞳に飛び込んできたのは、フラワースタンドやバルーンアート、ミラーボールで飾り立てられたパーティー会場さながらの体育館内。

普段の体育やら全校集会でのシンプルな体育館の姿しか目にしたことのない私からしたら、その様相はなんとも非現実的な煌めき。

「うひゃあ……やっぱすげ〜」

控え室に向かう際に一度通った時もあったんだけど、こうして改めて見るとやっぱ凄い。マジでおいくら万円かかってんでしょ、この会場設置費用！

いくら卒業生の為とはいえ、その事前準備の為だけに一体どれだけの大枚（たいまい）が動いてんのやら……。そしてそのマネーを一体どこから引つ張ってきたのよ……。私気になります！

そんな異空間めいた体育館をぼんやり眺めつつ、私は過去を振り返る。一体なにゆえにこんな事態に陥ってしまったのかを。

ま、端的にいうと……、どうしてこうなった？

× × ×

「ねえねえみんなー、ちよつと踊ってみないー？」

「はっ。」「はっ。」「はっ。」「っ。」

これは、あの盗み聞きから幾日か過ぎた日の、とある生徒会長の謎の一言から始まった日常のひとコマである。そして、アホ面晒してぽけつとしている襟沢以外、ようやく掴んだ初セリフの瞬間でもあった

のだ！　ようやくの初セリフが一文字だけとか泣けるッ！

「えーとね、ちよーつと意味が不明すぎるんだけど。まず主語から入ろうぜ、いろはさん」

「え？　いやいやだからさー、わたし今雪乃先輩とプロム開催に向けて頑張ってるじゃない？　だからそんなわたしを助けると思っ、ちよつと踊ってみれば？　って話」

「全然わかんねーよ」

なにか思うところがあつたのだろう、あの日の翌日には雪ノ下先輩から雪乃先輩へと呼び方が変化していたいろは。

そんないろはの謎過ぎる説明に、被せ気味に真顔で返しちやっただし、いっしょうがないよね。いつものことだし、いろはからの唐突な発言には頭が追いつかないってのは理解してるけど、今回ばかりは追いつかないってレベルじゃねーぞ！

置いてきぼり過ぎて、思わず迷子センターに足が向いちやうレベル。ほらほら、香織ちゃんが迷子になってますよー？

それから詳細を聞いてみたんだけど、要約するとプロムを卒業生達に周知してもらう為、プロムとはどんなモノかをご理解いただく為の紹介動画を撮影して公式サイトにアップするという計画らしく、動画が寂しくならないようダンスシーンのエキストラを絶賛募集しているとのこと。

洋ドラ映像での説明だけだと実感が湧きにくいから、『実際に日本人高校生でプロムをやってみた』的な事らしい。

ぐへへ、可愛い女子高生踊らせて大量の再生回数ゲットだぜ！　目指せ、ユーチューバー生活！　働けよ。

しつつ、プロム計画のこのスピード感にはホントびっくりするよね。

だってさ、今日っていろはがプロムとかって寝言ほざき出してから、まだ半月も経ってないわけよ。

それなのにもう動画を撮影して公式サイトにアップするトコまで

計画が進んでるって事は、それってつまり撮影自体が予行演習的なものでもあって、会場設置やら衣装準備やら、実際に開催出来るまでの手筈はすでに整ってるって事でしょ……？

おいおいマジ有能すぎんよ雪ノ下先輩……。半月そこで費用面から設置面から全て揃えられるって、それって現実なのん？ 思わず私達の世界がフィクションなのかと疑っちゃう！

そうそう、もう一つ意外だったのは、どうやらこの計画には奉仕部自体は噛んでないらしい。なんか部としてではなく、雪ノ下先輩個人でのお手伝いらしいのよね。

確かにあの時あの人は言っていた。では、やりましょう——と。

私はそのあとすぐ盗み聞きから撤退したからどういう流れでそうなったのかは知らないけど、てっきり奉仕部としての活動の一環かと思ってた。

それにそもそも今回のプロム計画の目的って、プロムそのものには無いんじゃないっけ？ あくまでもプロム開催を通して、奉仕部の生ぬるい現状をぶっ飛ばしてやる！ ってのが目的なんじゃないかっただのん？

それなのに奉仕部……というか、メインターゲットの比企谷先輩を巻き込まないで計画を進めちゃって、そこに意味ってあるんだろうか……？

……まあその問題は今は横に置いておこう。そんなの私がいくら考えたって、どうせ分かるわけないんだもんね。それが分かるのもそれを決めるのも、全てはいろはだけなのだから。

今はそんな事よりも、いろはの唐突なお誘いにNOを突き付けねばいけないのである！

「い、いっやー、私はパスで……。だ、だっつき、ああいうのって、ドレス着てうえいうえいやるんでしょ……？ 人前でダンスとか、ちよっと私の大和撫子キャラ的に、ハズいっていうかなんていうか……」

人前でドレス着てうえいうえい踊るとか、ああいうアメリカナイズ

なノリって無理無理。

私一応リア充グループですけど、うえい勢とは違うんですよ。急に人前で戸部先輩みたいにはしゃげとか言われても、常人にはキツいっしょ？

するといろはすつたら、「ハッ（笑）大和撫子って（笑）」とばかりに鼻で笑いやがった。

「香織って普段あんなに恥ずかしいことばっかやってんのに、今更恥ずかしいこととかあんの？」

「酷でえ!？」

……え、私ってそんなに恥ずかしいことしてんの？

「それにカラオケ行った時とか、なんかよく分かんないアニメのアイドルの真似して、フルでガチダンスしてんじゃん」

「いやん! ……ち、違うの! あれは悔しいけど身体が勝手に反応しちゃうだけなの☆

「大体あのとき言ったよねー? なんでもやるから遠慮なく言っ
ねって」

「うぐっ」

そう、私は言ってしまったのだ。まさかうえいうえい踊れとお願いされるとは夢にも思わず、安請け合いなあんな一言を……!

マ、マジかあ……、ああいうノリに付き合わなきゃならないのかあ……、きつついなあ……

「ま、いいんじゃない? なんか面白そうじゃん。それにほら、ドレスアップとかしたら、十六年前に旅立った香織の乙女が帰ってくるかもよ? ぷっ」

「ねー! もしかしたら帰ってきた乙女がきっかけになって、新しい彼氏出来ちゃうかもよ? ぶふっ! ……ってかそんなことより! そ、それってとも君呼んでもいいのかなあ!？」

などにとつても失礼な事を言ってるけど、それにしてもこの紗弥加と智子、意外にもノリノリである。

うるさいわ。十六年前に旅立ったって、それ、生まれた時からずっと旅立ちっぱなしだよ!

あと学内イベントの紹介動画に他校の男呼ぼうとしてんじやねーよ、アホか。いいわけないだろ、アホか。ようやく喋ったかと思っただら相変わらずかこの女、アホか。早く別れろ。

「やっぱあい！ 私そんな気ぜんぜんないんだけどお、気が付いたらクイーンになっちゃってそお！」

——こうして、すでに撮影参加が決定事項になっちゃってるらしい襟沢のお花畑発言により、私たち一年C組トップグループのプロム（予行演習）参戦が決定したのであつた！

× × ×

何日か前の教室での出来事に思いを馳せながら、煌びやかに飾られた体育館の様子をぼけつと眺めていると、ドレスアップが済んで私より先に控え室を後にしていた、普段見慣れない、とても見慣れた連中の姿を発見した。

変な言い回しになっちゃったけど、毎日見慣れ過ぎて若干見飽きた感のある紗弥加と智子の、普段見ることの出来ないドレス姿って意味ね。

……ほっほう、私もかなーりイケてますが、さすがあの二人もなかなかイケてるじゃあーりませんか♪

スカイブルーのドレスに身を包む、スレンダーで背の高い紗弥加はなんともクールビューティーで、由比ヶ浜先輩ほどではないにせよ、豊富なバストを強調するように胸元が結構開いたシヨツキングピンのドレスに身を包む智子は………、うん、なんかすっげービッチ臭い。いや、いい意味で。

いい意味でビッチ臭いってなんだよ。全然フォローになつてないよ！

そんな二人も、控え室から出てきたばかりの私の姿を発見したようで、「ほお〜」と感心するような眼差しをビシバシぶつけてきた。

うふふ、二人ともプリパラチェンジしちゃった私の可愛さに驚い

ちやつてるのかしらっ？ みーんな友達！ みーんなアイドル！

てなわけで美しく変身してしまった私は、しやなりしやなりとしなをつくって彼女らにゆっくりと近付いてゆき、右手を頭に、左手を腰に添えて、あつはくんポーズで紗弥加達を誘惑しちゃうのさ。

「ふへへ、どおどお？ 私けっこうイケてなーい？」

「……あー、うん、今ので全部台無しになったわ」

「……やっぱ香織って……あ、うん、なんかごめんね……」

なんか謝られてしまった。解せん……。どうやら惑は惑でも、誘惑じゃなくて困惑だったようです。

そんなにダメだったかしら、私のセクスイーポーズ。

「にしても香織ってば、あんなだけ嫌がってた割に結構ノリノリじゃない？」

「いやー、それがさあ、いざドレス羽織ってみると、なんかこう気分が盛り上がっちゃうっていうの？ やっぱ私も、なんだかんだ言っても女の子なのよねー」

智子が言う事ももつともではあるのだが、ドレス着て気分がアがない女の子なんて居るわけがない。

あれだけアメリカナイズなうえいうえいパァーリ撮影を嫌がっていたのも今は昔、今なら先陣切ってお立ち台の中心でうえいうえい踊っちゃいそうまである。

……そしてそれがいつの日か、目を逸らしたいほどの黒歴史となることでしょうか……。ノリって怖い。

「まあたかがドレス一枚じゃ香織の滲み出る残念さを覆い隠すのは難しかったみたいだけど、それでもま、黙って立ってる分にはなかなかイケてんじゃない」

「うるさいよ、残念がデフォみたいにゆるな。……ひひく、でも自画自賛しちゃうけど、マジけっこうイケてるよねー！ もちろん紗弥加もイケてるよっ！ あ、智子はちょっとビッチ臭いけど」

「酷くない!?!」

「これヤバくね？ こりや今日の撮影会、私達がみんなの視線を独占

しちゃうんじゃね?」

いやもうホントそれね。

さすがは一年C組が誇る美少女グループ。エキストラなのに、私らで今日の主役食っちゃうんじゃね?

などと、ドレスアップの魔力で気持ちが悪くなっている私が調子に乗ってうえいうえいしていると、やれやれと首を振る智子が私の肩をポンッと叩いた。

「……香織さー、あっち見てもそう言えんの?」

へっ、と自傷気味な苦笑を浮かべる智子が指し示す方向に目をやると、そこに居たのはなんとも見目麗しい美少女軍団。なにを隠そう、我が校が誇る才色兼備な二年J組女子一同だったのです。

そう。本日撮影会のエキストラ役として呼ばれたのは、いろはの友人の私達だけではなく、雪ノ下先輩のクラスメイトもたくさん呼ばれていたのだ。あとついでに戸部先輩とサッカー部一年男子。

「おうふっ……!」

な、なにあれ!?! めっちゃレベル高くね!?

普段は突出しすぎた雪ノ下先輩という存在の影に隠れててあんま目立たないけど、そもそも二年J組ってのは、もしもそのクラスに雪ノ下先輩が居なかったとしても、やはり学内でも特別なクラスなのである!

「ぐぬぬ……」

いや、ぶっちゃけルックスレベルだけで言えば、私達だって決して負けてないのよ。いやマジで。うん、ホントホント。いやだからホントマジだってばあ……!」

でもこう、なんかねー……、醸し出してるお上品な雰囲気とかがなんでしょうか、馬子にも衣裳がドレス着て歩いているようなパチもん臭い私達と違って、あつちは本物の余裕っていうの? なんかこう、オーラが違うんだなあ……

あとはそう、数の暴力ね。

いくらルックスレベルでは負けてないって言っても、しよせん私らはたった三人の烏合の衆。

それに対してヤツらはほぼ一クラス分の美少女が参戦してるもんだから、これまたなんとも華やかなのよ……。てか一クラスでみんな結構な美少女揃って、……なに？　J組って書類選考から始めてんのかな？　わたしが知らないうちに友達が勝手に応募しちっちゃつてえ、とか言つとけばいいの？

くっそう！　なんだよう！　なんであの人たち頭いい上に美人揃いなんだよう！　なんかもう敗北感しかないよう！　って、……あれ？

「ん？　三人？」

あれ？　そういえばなんか忘れてね？

「ごめん、お待たせえ！　支度に時間掛かつちやったあ！」

そんな時、不意に後ろから私たち負け組一年C組トップグループに救いの女神の声が降り注いだ。

そう、私達はすっかり忘れていたのだ。私らにはもう一人強力な戦力が居たじゃないか！

バカだけど、ルックスだけに関しちや我が校が誇る人気生徒会長一色いろはレベルの美少女が！　バカだけど。

常であれば「別に誰も待つてねーよ」とツッコミを入れるベストポイントではあるけども、今日ばかりは事情が違うのだ。むしろ「待つてました！」とドンドンパフパフしちやうまである！

グループとしての精神的完全敗北を喫してしまった、この二年生のお姉さま方との圧倒的戦力差を少しでも埋めてくれるであろう一人の美少女へと向けて、私は勢いよく振り返る。ウエルカム襟沢！

……しかし私はまだ気付かない。位置的に、私よりも先に襟沢の姿を見咎めた紗弥加達の顔が、ゆっくりと歪んでいくのを……

「……マ、マリーアントワネットや……、マリーアントワネットがおる……っ」

振り向いた先でにこやかな笑顔を振りまいていたのは、正しくクイーン。

ペロア調の紫のドレスを身に纏い、未だ縦巻きの残る栗毛色の髪をたなびかせて現れた、真なるクイーンそのもの。

……エリエリ、それはプロムクイーンちやうよ！ それガチものの女王陛下や！ もうプロムクイーンとは違うベクトルのクイーンになっちやつてるよ！ プロムナード（舞踏会）は、ベルサイユ宮殿で行われる晩餐会じゃねーぞ。

てかそもそもそんな本気のドレス用意してあったっけ……？ てかなんでお前だけティアラとか付けてんだよ。え、私物？

う、うわあ……二年J組のお姉さま方が眉を顰めてヒソヒソしてらっしやる……！ これじゃコイツと一緒に居る私達まで完全に色モノだろう！

「えへへ、ど、どおかなっ？」

「……」「……」「……」

ほんのり頬染めて「ど、どおかなっ？」じゃないわよ……答えづらくてなんも言えねえ……

嗚呼……襟沢が来れば形勢逆転出来るかもと思つてた数秒前の自分を殴りたい。

——こうして襟沢のおかげで、まるでコスプレ大会にでも変貌してしまつたかのような茶番な空気漂う、とてもザワついた撮影会となつてしまつたのでしたー。

「おおおお……！」「わあ……！」「素敵……！」「

と、こんなしよーもない襟沢オチで終わつたりしないのが、今回のプロム撮影の内容の濃いところなのです。

普段ならきつちりオチるであろうこの茶番でさえ、これから起こる真のザワつきの単なる前座でしかなかったのだ！

そこかしこから小さな歓声が上がりはじめたことにより、訝しげに襟沢含む我らグループを眺めてザワついていた会場内の視線が、引き潮のようにサツと引いていった。それはまるで、襟沢オチなんかよりもずっと興味深いナニカに一瞬で心を奪われ、私達の存在など初めから無かったかのように。

そしてその視線達を釘付けにし始めた新たなるナニカは、会場内に別次元のザワつきをもたらした。

どよめく会場。そのザワつきは、場違い感たっぷりの襟沢に向けられていた笑撃のザワつきなどではなく、羨望と熱望、感歎の溜め息混じる黄色いザワつき。

ドレスアップし、あとは撮影が始まるのを待つばかりだったJ組女子一同を筆頭に、サッカー部の一年、そして私達の歓声と視線を一身に集める先に居たのは、つい今しがた控え室から会場へと姿を現わした、間違いなく本日のクイーンとキング。

鮮やかなオレンジ色のドレスをその身に纏い、隣を歩く紳士に向けてうっとりとした恍惚の表情を浮かべるクイーン・一色いろは。

そしてそんなクイーンに腕を貸し、紳士的にエスコートする、とんでもない……とんでもない美少年なキング様なのでした！

え？ 誰？

続く

かくして私の友達はプロムクイーンとなる④

パーティー会場に響き渡るメロディアスなナンバーと、スポットライトに照らされたミラーボールから降り注ぐキラキラな煌めきの中心で、美しきキングと可憐なクイーンの舞いは、今まさに佳境を迎える。

軽やかなステップと、コートの子イルが華麗にはためくターンでオーデイエンスを魅了し続けたキングのダンスに、会場内の女性陣（主にJ組女子）が異常な程の色めきを見せ、そんなキングの超絶美技に終始振り回されっぱなしではいたものの、ステップミスでキングの足を踏んでしまったり、ターンのタイミングがズレてよろめいたりする度に、しゅんとしたり恥ずかしげに微笑んだりという、お得意のあざとさ全開で技量不足の見栄えをカバーしていたクイーンのいじましさに、会場内の男性陣のハートはがっちりキャッチ。

そんな、我々を魅了し続けた今宵のキングとクイーンのダンスも、ジャン！ というBGMの締めと同時に見事に決まった決めポーズと共に、ゆつくりと幕を下ろしたのです。

いろはつてば、〃未来の〃どころか、今日でプロムクイーンになる夢叶えちゃったじゃん！ あんた二年後にプロムを開催したって、今日のクイーンっぷりよりも耀けるクイーンになんてなれっこないよ。

——こうして私の友達は、見事プロムクイーンの座を手に入れたのだった！

× × ×

「……やー、いいもん見たー。いろはも思ってたよりは良かったけど、やっぱり雪ノ下先輩ってマジとんでもないんだね……」

鳴り止まぬ歓声が響くなか感慨に耽っていた私は、隣でそう呟いた

紗弥加の声に覚醒した。

いやはやホントとんでもないよあの人。文武両道だ容姿端麗だと色々と言われてはおりますが、まさかまさかダンスまで……しかもクイーンいろはを見事にリードしつつ、男性パートをなんなく踊りあげてしまっただなんて……。ありやマジもんの化け物だぜっ……

……ん？　なんで雪ノ下先輩が出てくるんだよ、本日のキングは美少年じゃなかったのかよ！　って？

そう。本日のクイーンはもちろんウチのいろはすだったんだけど、キングの方は……なんと！　男装の麗人・雪ノ下雪乃先輩だったんですよ！

てかいろはすく、あんた雪ノ下先輩にエスコートされてる時、だらしない顔晒しすぎだから！　なにあの恍惚の表情。あいつ絶対「美少年侍らせんのって超気持ちく」とか思ってたでしょ。ゲスだなあいつ。

今は比企谷先輩LOVEではあるけど、いろはってそもそもが面食いだもんなあ……

あと周りの男共には興味失ってあざとさを発揮しなくなったくせに、なんで女の子の雪ノ下先輩に対してはあんなにあざとさ振りまくのよあんた。

そして未だに鳴り止まない黄色い歓声を上げてるJ組のテンションがヤバイ。なんていうか……、百合？　ちよつと百合入っちゃってんの？　若干我らがエリエリが「三浦さまあ〜！」とか言ってるのと被っててちよつと恐いんだけど、ま、まあ宝塚の男役にキヤーキヤー言ってるヅカファンに見えなくもないからギリでセーフ……、か……？

なんつーか、いろはとていいJ組のお姉さま方といい、時代は百合へと傾いてんのかしらっ？

おっと、あまりの素晴らしいショーを目撃したあまりに、ついつい思考が逸れてしまったよ。いつまでも百合百合しい現場にハアハア

してる場合じゃなかった。

そうなのだ。紗弥加の言葉や歓声が示す通り、キングとクイーンのダンスショーは素晴らしかった。本当に素晴らしかった。

それはそれとして………、えと、パーリーピーポーな学生達がノリと勢いだけでうえいうえい騒ぐプロムつて、……こんなんだっつけ……？

なんかこう、プロムで行われるクイーン&キングのお遊戯ダンスというよりは、なんかガチもんのダンスショーを見せ付けられたかのようなこの満足感はどうよ。

え？ 私たちモブなエキストラもこれから踊るんだよね？ 私たちにもこういうの求めているのん？ 無理無理無理無理無理！

そんな愕然としている私をよそに、とりあえずメインであるクイーン&キングのダンスシーンは撮り終えたという事で、休憩と言う名の映像チェックに入る生徒会と奉仕部ご一行様。

お、華やか過ぎる雪ノ下先輩の影に隠れてて今まで気付かなかつただけで、いつもはぼさぼさしてる髪をきちんとセットして、タキシードに身を包んだオシャレな比企谷先輩はっけーん！ やばいなんかウケる！

そんな比企谷先輩の晴れ姿を横目でチラチラ覗き見てはニヤニヤしてるいろはは、さつきから何度となく嘖き出しそうになってるし。

そしてさつきまで私たちの着付けを手伝ってくれていた由比ヶ浜先輩も、いつの間にかドレスアップしちやってますねー。

やめて！ J組のせいでただでさえハイソな空間になっちゃつてなのに、由比ヶ浜先輩までもがそんなに可愛く着飾っちゃったら、さらにここの女子レベルが倍率どんっ！ と上がっちゃって、私のようになちんちくりんは余計に居たたまれなくなっちゃうよう！

しかし「はい休憩入りまーす」と言われても、いろは達と違って我らエキストラ陣はオーディエンスという役回り以外まだなにもしてないので、疲労とか全然ないのよね。んで、結局はただのご歓談タイ

ムである。

そこかしこで「雪ノ下さんのダンス凄かったね!」「めっちゃ格好良いく……!」「ああ……私も雪ノ下さんにリードされて舞い踊りたい……」なんていう怪しげで色めいた会話が繰り返り広げられている中、下心丸出しでちよくちよく声をかけてくるサッカー部一年男子共やら、マリーアントワネットらと適当に雑談しながら執行部側をぼんやり眺めていると、あれあれ? どうやらあちらでは何かしらトラブっているみたい。

……いや、トラブルというか、なんかいろはがモニターを微妙そうな表情で眺め、それを後ろから覗きこんでる雪ノ下先輩も苦い顔してこめかみに手を当ててるって感じ。

ん? もしかしたら撮れてなかったとかピントがブレブレだったとかなのかな……?

あーでもないこーでもない、いろはが嫌そうに顔をしかめたり比企谷先輩が嫌そうに顔を歪めたり、打ち合わせが続き、しばらくすると――

「それじゃ、とりあえず一回やってみますか」

そんな声を本イベント執行部に発したいろはが、てけてけと我らエキストラ陣の方へと歩いてきて、ぱしぱしと手を叩いてこれからの予定を指示し始める。

「えーとみなさん注目です。只今わたしと雪乃先輩でメインを撮り終えましたので、これからみなさんにも一緒に踊ってもらって撮影したいと思いまーす」

と、どうやら先ほどの打ち合わせは、別に撮影ミスがあったとか、そういう類いのトラブルではない事が発覚する。

はて、それじゃさっきの微妙そうなやりとりはなんぞや?

果たしてその答えは、次にいろはが語りだす内容により明らかになる。

「ただ、今のはちよーつと雪乃先輩が本気を出し過ぎちゃったんで、楽しいダンスパーティーというよりは、かなりガチな競技ダンスみたいになっちゃってましたよねー?」

そう言ういろはをぽかーんと思つめ、発言の趣旨を理解出来ずに「なに言ってるんだこいつ」って顔で眉をひそめたエキストラ陣ではあるが、次第に脳内で発言の意味を理解してゆくメンバーの間では、くすくすと笑いが広がりはじめる。

ほつほう、なるほどなるほど。さっきのあの微妙な顔での打ち合わせはそういう事ね。どうやらさっきのガチダンスがプロムらしくないと感じてたのは、なにも私だけじゃなくて、ご本人様たちもそう感じてたみたいで一安心です。……ふう、私もガチダンスしなくちゃいけないのかと思つたよ。

そしてこうしてウケてるって事は、ギャラリーのみなさんも感歎の溜め息漏らしながらも、実はやっぱそう思ってたんですねー。

「ちよつと一色さん……？ アレは私だけのせいだと言いたいのかしら」

「……ひゃいつ！ すみませんー！」

そして当然のように雪ノ下先輩から雷を落とされるいろはの肩がびくりと跳ね上がる。すつごく仲良くなったみたいだけど、やっぱりまだ怖いよね！

そんな二人のやりとりに、またも穏やかな笑いが起きた。あらやだ微笑ましい。

「んん！ んん！ で、ですすねー、さすがにああいう動画だけだと紹介動画としてはアレすぎて、たぶんそれ見た卒業生のみなさんがプロムに対して構えちゃうと思いますので、これからみなさんにやっていただきたいのはさつきみたいなガチなのじゃなくって、もつところ……クラブとかでやってるような、ノリノリでうえいうえいで超適当な感じのヤツを求めていますのでよろしくです」

クラブで踊ってる人たちに謝罪と賠償を要求されるような酷い言い草でそう説明を締めくくるいろはす。超適当で。

でもまあ超適当でいいと言われれば、我らエキストラも気が楽になるというものよ！ いろはの説明に納得した私達は、いろはが勧めるままにぞろぞろと所定の位置へと移動を始めた。

とはいえダンスなんかした経験のない人達ばかりである。クラブ

とかでやってるようなと言われても、このエキストラ陣の中でクラブに行った事があるのなんて居ないでしょ。なにせ私らまだ高校生、しかも進学校の生徒ですもの。

みなさんなんとも戸惑いというか照れくさいというか、なんか浮き足立って照れ笑いを浮かべていると――

「始めのうちはどうすれば分かんないかもしれないかもしれませんが、このシーンでも一応わたしがメインとして、そして誠に遺憾ながらもなぜか戸部先輩と嫌々ながらも真ん中で踊りますので、みなさんもそれを見ながら適当に踊っちゃってくださいねー」

「酷くね?！」

そんないろはと戸部先輩の掛け合いに、場は一気に和やかムードへと変貌した。

戸部先輩を出汁に使ってみんなの緊張をほぐすとは、いろはすめ、なかなかやりおるわ。

と思つたら、あ、いろはすつてばリアルで嫌つそうな顔してました！ どうやら別に緊張をほぐす為の計算的発言ではなかった模様です！

なるほど、さっきの打ち合わせ中のいろはの嫌つそうな顔はそれが原因かつ！ 本当なら比企谷先輩と踊りたいであろうに、さすがに目立つのが嫌な比企谷先輩を……そして知名度皆無な比企谷先輩を、紹介動画のメインパートナーとして使うわけにはいかなかったんだろう。

しっかし……、ぷつ、いろはつてばさ、もう葉山先輩には興味ありませんってのが露骨すぎじゃありませんかねー。

自分がクイーン役でチークタイムとかを撮影する気なら、そこは普通戸部先輩じゃなくて葉山先輩呼ぶでしょうに。葉山先輩であれば相談されれば確実に参加してくれただろうし、いろはに言われるがまま流れでキング役をやらされたって、なんとも爽やかな苦笑を浮かべて受け入れてくれたでしょう。

なのに葉山先輩ではなく奉仕部に声を掛け、葉山先輩ではなく戸部先輩にお願いしてるって時点で、いろはの心情丸出しよねー。

そんなもって当の比企谷先輩のパートナーは……なんともはや……、由比ヶ浜先輩だし！

うっわあ……別に気にしてないですけど、なんてフリしながらも、いろはがちらつちらつと二人にジェラジェラ視線を突き刺してますよう……。女ってコワイ。

「あの、家堀さん、お、俺と一緒に踊らね……？」

舞台中央で練り広げられている二等辺三角関係を戦々恐々で眺めていると、……おや？　なんかサッカー部一年のなかなかのイケメン君が、私にシャルウィーダ〜ンス？　してきたよ？　あんた誰？

「え、えと……ごめんね？　私もうパートナー決まってるんだよねー……」

だがしかし、残念ながら私はそんなに軽い女ではないのだよ。ていうよりは、初めて会った殿方とシャルウィーダンスするとか無理無理く。だって明らかに下心ありそうだし、これを機に「夜も俺とベッドでシャルウィーダ〜ンス？」とか言われても困っちゃいますしい。

「そ、そっか、ごめんね」

「や、やー……こっちこそなんかごめんね……？」

気まずそうに苦笑を溢し、猫背でとぼとぼと去っていく見知らぬ男子の背中をなんとも言えない気持ちで眺めていると、なにやら痛い視線がビシバシと。

……おうふつ、紗弥加と智子の、まるで可哀想な物でも見るかのような視線が突き刺さるぜ！　これはあとで「これだから香織は……」と暴言を吐かれるコースが待ってそうだぞお？

ど、どうせアレでしょお……？　なんでせつかく男が出来そうなチャンス上台無しにしちゃうのかねこの残念な女は……、でしょ？

ごめんね!?　こんな残念な子で！

だってしよーがないじゃん、前の彼氏ん時に懲りてんのよ。異性として特に好きってわけでもない男の子と手とか繋いだ時の気まずさは異常。いやマジマジ。

なのに今知ったばっかの男子と仲良くダンスしろとか確実に無理っす。笑顔が引きつって、気持ち悪い顔になっちゃう未来しか見え

ない。なんなら踊りながら「きよ、今日はいい天気ですねー(棒)」とか言っちゃいそう。

余談ではあるが、会話が途切れた時に天気の話題を出す。会話が保てなくて気まずいんですけどー、ってことだよ？ 女の子と二人の時に天気の話題出されたら気を付けなはれや!?

……こんな私にも、いつの日かビビつとくる男の子が現れてくれるのかしらん？

そうこうしてるうちに、ダンスパーティーの舞台は着々と整ってゆく。「ウエイっしょ、ウエイ。ほら、ウエイ！」などと謎の戸部呪文が響き渡る中、紗弥加達からのそんなイタい視線をまるっと躲し、私は本日のパートナーの前へとしずしず向かうのです。

シャルウィーダ〜ンス？

やがて場内に流れはじめたダンスパーティーのスタンダードナンバー。スポットライトとミラーボールが、本日のダンサー達にキラキラな輝きを降り注ぐ。

最初はなんとなく気恥ずかしくって、誰もがぎこちなく肩を揺らす程度だったけど、戸部先輩をはじめとするノリ先行型のメンバーが楽しそうに激しく踊りはじめると、その熱と笑いは次第に周囲へと伝染していき、会場は一気にはか騒ぎのるつぼと化するのだ。

特にパートナーを持たず、男同士女同士の団体でにこやかにステップを踏む者。

いつの間に仲良くなったのか、初対面であろう男女で腕を絡めたり、肩と肩に手を回し合い、出鱈目なワルツを踊る者。

調子に乗ってパートナーの腰に手を回そうとするチャラ男に対し、調子に乗るなど回し蹴りでもかますかのような、切れのあるターンでスキンシップを全力で拒否する者。

まあ最後のチャラ男と回し蹴り女のくだりは戸部先輩というはだけど☆

みんな思い思いに、このプロムナードを楽しんでる。あはは、もう

これは単なる紹介動画撮影の為の偽物のプロムってことを、みんな忘れちゃってんじゃないのっ？

だったら私だって撮影の演者である事はさくっと忘れて、今を思いつきり楽しんでやろうじゃないか！

そして、ついに私の時間が始まる。

さあ！ 火曜夕方五時五十分からと木曜夕方六時二十五分から、自室のテレビの前で存分に鍛えあげた、テレ東師匠仕込みの私のキレッキレなダンスを披露する時がやってきたぜ！

何曲かのダンスナンバーが続いていき、アバの名曲『ダンシングクイーン』が響き渡る頃には、会場はもう乱痴気騒ぎ。

私も、時にはかしまったり時にはフツツヒと笑い声をあげながら、この身に深く染み込むほど馴れ親しんだ、ぷりっぷりでアイドル活動なダンスを、目の前で楽しそうに踊る今宵のパートナーのマリーアントワネットと共に本気で踊り上げ、この非日常の宴を心行くまで堪能するのでした。

踊る阿呆に見る阿呆。同じアホなら踊らにやシンガッソー!!

× × ×

宴が幕を下ろすと、会場内には拍手と歓声が巻き起り、ダンスパーティーの終演と共に皆様あちらこちらで友達やパートナーとの写真撮影なんかを始めてる。

なんとも意外だったのは、我がパートナーがその個人撮影会で謎の大人気なのである。……おいおい、襟沢との撮影に行列できちやっぴんぞ……。ここはデイスティニーランドなのかな？

まあアレよね。ここで撮った写真やら情報なんかはすぐさまSNSへとアップするんだろうし、マリーアントワネットとのツーショットとか超ウケそうだからインスタ映えでも狙ってるのだろう。分かる〜！

……なんだよインスタ映えって。口を開けばインスタ映え。二言目にはインスタ映え。三・四がなくて、五でインスタ映え。

お前ら写真ばつか撮ってないで、さつさと出された料理食べなさいよ！　せつかくのお料理が冷めちゃうでしょうが！

てかいくら集客の為とはいえ、料理出す側のプロが味じゃなくてインスタ映えをウリにすんなよ、アホか。

とりあえずインスタが映えとけばいいっていう頭の悪そうな風潮、いかななものかと思えます！

などと近頃のイケイケな女子共（てか女子って何歳まで使っているの？　三十路四十路過ぎのOLさん達が女子とか言ってるのってイタイよね☆）や世間を内心で嘲笑いながらも、全力でアйкаツした為になかなかの疲労感を憶えた私は、喉の渇きを潤す為に、ケータリング類が置かれたテーブルへと向かう事にしたのである。

「およう。」

用意されていたジンジャーエールをくいと傾けようとした時だった。幾つか用意されているテーブルの中の一角に、見知った顔を見つけたのだ。

普段ならばつさばさにしっぱなしな髪なのに、本日はパーリーピーポーという事で生意気にもお洒落なセットを施し、普段はよれつとしたブレザー姿なのに、本日はビシツとしたタキシード姿。

にもかかわらず、普段と特段変わらない猫背と疲れ切ったサラリーマンみたいなその表情の持ち主の名は、もちろん言わずと知れた比企谷八幡先輩その人。

おやおや、先程までは由比ヶ浜先輩と肩を寄せ合ってラブラブちゅちゅダンスに勤しんでいたくせに、なにをそんなに疲れてるんですかねー？（ゲス顔）

まああの人も色々あるんだろうからなー。雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩を天秤に掛けちゃったりとかー？（ゲス顔）

なににせよ、私と同様お疲れのご様子でドリンクを傾けている先輩を見掛けた以上、一応声でも掛けてみますかね。今日はまだ話さないし、私の美しいドレス姿もまだ見せ付けてないし！

何よりも、そろそろ前にお借りしたラノベが読み終わりそうだから

ら、「次を！ 次を早よ！」と催促しなくっちゃだわさ♪

いやん、先輩に話し掛ける理由が欲まみれ！

てなわけで、可愛い後輩をアピールしつつレンタルを強請る為に奴に近付いて行こうかとしてけてけ歩き出した私ではありますが――

「……………うおつと……………」

思わず小声でそうツブヤツキー、くるつと回れ右をすると、すたこらさつさくと人影に潜む私であった。

だって、ねえ…………？ 別方向から比企谷先輩の姿を発見し、とてつと小走りで駆け寄ってくる女の子の姿を発見しちゃったら、お邪魔虫は一旦退散してからこそつと業務を遂行するしかないじゃありませんか。

そして私は比企谷先輩が居るテーブルの隣のテーブルを静かに陣取り、そんな二人の様子を覗き見……………うおっほん！ 観察する事にしたのでした。

うふふ、お仕事お仕事〜！

続く

【プロムクイーン編最終話】やはり私の友達是最強の後輩様なのである

「せーんぱい、お疲れさまです」

「おう、お疲れ」

そんな、普段通りのやりとりにて幕が開けた今宵のメインイベント

！
テンションが高すぎる戸部先輩とのダンスがなかなかに激しかったのか、いろはは額にきらりと光る汗を浮かべつつ、テーブルの上に用意されていたドリンクに口をつけながら声を掛け、比企谷先輩はそんないろはに労いの言葉を返した。

でもま、明らかに疲れた顔してんのは先輩の方なんだけどね。
もちろんいろはもそんな先輩の様子を見咎め、うへえと顔を歪める。

「てか本気でお疲れのぐ様子ですねー」

すると比企谷先輩は、未だワイワイと騒いでるエキストラ役の男女や、装飾が施された会場全体をぐるりと見渡し、深々と溜め息を吐き出した。

「そりやな。やっぱこういうお祭り騒ぎは俺には合わねーわ」

「……へえ、そうですねー？ さっきまで散々結衣先輩と嬉しそうに踊ってニヤニヤしてましたけど」

お疲れの原因を告げた比企谷先輩に対し、いろははキラーンと嫉妬の瞳を輝かせ、なんとも嫌味つたらしく先輩の顔を覗きこむ。

その口元は意地悪そうにニヤリとしながらも、目はまったくもって笑っちゃいない。おっと、やっぱりこの女、しっかり根に持っていやがったか！

「ニヤニヤなんかしてねえよ……」

「いやー？ 超ニヤニヤしてましたよー？ それはもうガチでキモい感じで」

いやだわいろはす、ジエラジエラの炎が燃え盛ってるわよ？

「……ま、キモかったですけど、楽しめたんならいいんじゃないですかー？ キモかったですけど」

そう言つて頬つぺたをぷくりと膨らませたいろはは、唇をつんと尖らせて、グラスに注がれた黄金色に輝く液体からとめどなく湧き上がる炭酸の泡をつまらなそうに眺める。あ、なんか表現がしやらくさいフレンチレストランでのひとコマみたいになっちゃいましたけど、これシャンパンとかじゃなくてジンジャーエールですよ？ これはあくまでも健全な高校生同士のラブコメです！

それにしても……いやー、乙女してますなあ。

しかしいかんせんこの唐変木な先輩には、そんないろはの乙女心が通じるはずもなく、なにをつまらなそうにしているのか理解できないこの人は、こんな見当違いの言葉を投げ掛けるのだった。

「……つたく、そんなに戸部と踊んのが不満だったのかよ。結構楽しそうにダンシンググクイーンしてたじゃねえか」

「……はあああ……」

さすがのいろはも、これにはうんざり気味に呆れた溜め息を深く吐き出す。

もちろん私も思わず溜め息が零れちゃったじゃないですかー……

「……そーなんですよお！ なんで先輩なんかが結衣先輩とイチャコラしてるのに、なーんでわたしは戸部先輩と踊んなきやなんないんですかねー。あーあ、葉山先輩と踊りたかったなあ」

深い溜め息のあと暫く間を開けたいろはは、やれやれと首を横に振ると、仕方なく比企谷先輩の妄言に乗っかる事にしたようだ。

いや、確かに比企谷先輩は唐変木だけど、いつまでも葉山先輩を引き合いに出すあんたのその態度もいけないと思いますよ？

そして私ももう一度軽く溜め息を零すのだ。我が友ながらやれやれである。

「いや、だったら葉山呼べば良かったじゃねーか。なんで戸部呼んだ

の？」

「そりやアレです。生徒会の……てかわたしの用事の為にキャプテン呼んじやうわけにはいかないじゃないですかー？ わたしこれでもマナージャーなんで、ちゃんとサッカー部のことも考えてるんですよ。だから下つ端にお越しくださいたわけです」

下つ端で。

いやいやあんた、キャプテン呼ぶと迷惑かかっちゃうー！ みたいなこと言つてつけど、下つ……戸部先輩だけじゃなくて一年男子全員にお越しただいてる時点で、すでに本日の部活動には支障をきたしまくってますから！ なんなら本日は休部なんじゃね？ つてレベ

ル。
さすがにその言い訳は無理ありすぎつしよ、つべー！

「……そういうもんか」

と、私の脳内に下つ端の無念の魂が乗り移っていると、比企谷先輩も一瞬は訝しげに眉を顰めたのだが、部活動事情とかに精通してない先輩にはそういうのがよく理解出来なかつたようで、なんとか納得したみたい。

「ですです」

「……」

「……」

それにて会話は一旦打ち切られ、おかしなイラつきを見せたりおかしな言い訳をしたりと、いろはの妙な行動によつてなんとも変な空気になつてしまつたようで、場は暫しの沈黙が続く。

まあもともと比企谷先輩は会話がお得意ではないし、一度話題が途切れると、次に何を繋げればいいのか分からないだろう。

こういう時、普段であればいろはの方から会話のキャッチボールを投げ入れるんだろうけど、今回ばかりは若干不貞腐れ気味のいろはが中々ボールを投げ込まない。

そんな些か気まずい沈黙を嫌つたのか、頭をがしがしと搔いた比企谷先輩が先に動く事となる。

ふつと一息吐いた先輩はくるりとダンスフロアを見渡してから、ほいよつとばかりにいろはにボールを投げ入れる。

「にしてもアレだな。よくもまあこんな短時間でここまでのもんが出来たもんだ」

「はい？」

多少の不貞腐れと気まずさに、黙ってジンジャーエールを傾けていたいろはが、不意に投げ入れられた思いもよらぬボールに、なんとも間の抜けた声でお返事を返す。

「……いや、一色には悪いが、ぶつちやけお前がプロムとかワケ分からんこと言い出してから、本当に開催にこぎつける事が出来るかどうかなんて半信半疑だったんだわ。それがこんな短い期間でこれだけカタチが出来あがるなんて、素直に驚いた」

そんな突然の誉め言葉とも取れる発言に、ぶくつとしていたいろはも僅かに頬を緩めた。

「ふふ、わたしもびつくりしてますよ。今ならまだ間に合う……なんて偉そうなこと言つときながら、本当にカタチになっちゃうとは思いませんでしたもん」

「……いや、お前が思っなくてどうすんだよ。少なくともお前だけは思ってるよ……」

「あはは。……でもま、さつきも言いましたけど、全部雪乃先輩のおかげです。ホントあの人って凄いですよねー。凄すぎですよ。わたしなんてなんにもしてませんもん」

突然の誉め言葉に一旦は頬を緩めていたいろはではあったが、結局それは自分の功績じゃないから……と、ほんの少しだけ寂しげな笑顔を浮かべる。

でもねいろは、比企谷先輩はそんな弱音は許してくれないみたいだよ？

「……あほか、そんな事はねーだろ。確かに雪ノ下は凄い奴だし、なんか本人ヤル気満々だしで、当然あいつが居なくちゃここまでにはならなかったかもしれん。……でも、あいつを動かしたのはお前だろ。それに、自分を動かした奴が一生懸命頑張っただけなら、雪ノ下もこ

ここまで張り切ったりはしない。つまり必然的に一色も頑張ってたからこそ、この短期間でここまでのカタチになったって事になる」

「……」

——そう。そうなんだよね！ 私も比企谷先輩の意見に同意しちゃいますっ。アグリーー！

確かに雪ノ下先輩の戦力は、ギレン・ザビも裸足で逃げ出しちゃうくらい圧倒的なんだろう。

でもさ？ この半月の間、あんた超頑張ってたじゃん。休み時間も昼休みも書類とにらめっこしてたし、たまに「おいおい、コイツ業者かよ。JKやめちやったのん？」と思わしき電話を掛けてる時だってあった。

あれだよね。いま私が着飾ってるこのレンタル衣装だって、いま私の視界いっぱい広がってるキラキラな景色を創り出す為の小道具一式だって、関係各所への窓口とかは全部責任者であるいろはが務めてたんだよね。

それもこれも全部含めて、あんたの友達が一番近くで見てたんだよ？ わたしはなんにもしてません、なんて弱気な妄言、比企谷先輩だけじゃなくて、私だって言わせてやらないよ？

すると、そんな比企谷先輩からの思いがけない思いやりの言葉に、ちよつとびつくりして目をぱちくりしたいろはではありませんが、その表情は次の瞬間とても優しい微笑みへと変わり、次第にいやらしくニマアつと変化してゆく。

「……………ふっふっふ、やだー、先輩のくせにちゃんと分かっているじゃないですかー？ そーなんですよ。雪乃先輩が凄すぎて全っ然目立たなかったんですけど、実はわたしもこの半月の間、ちよーー頑張ってたんですよー！」

手のひら！ 手のひら返し早いな！

先ほどまでの寂しげな笑顔はなんだったのか!? ってくらい途端にきやるん☆と笑顔をはじけさせ、急に自身の功績と努力を褒め称え

始める我が友人。こいつすげえぜ。

「お、おう、そうか」

そんなあまりの早変わりっぷりに、比企谷先輩はヒクツとドン引きである。

そして軽く引き気味な先輩を見咎めたいろはは、その表情をまたも変化させた。

「そうですよ。まだまだ頼りないかもしれないですけど、わたしも意外と頑張ってるんですよ？　今回は結果的に雪乃先輩頼みになっちゃいましたけど、もう先輩なんか頼んなくなつたつて、わたし達だけだつてなんとかなるんです」

「……知ってるっつの」

笑顔のままではあるものの、とても真剣な目を真つ直ぐ向けて語り始めたいろはの弁に、比企谷先輩は異を唱える事なんかしない。

アホか、そんなの当たり前前の事だろ……と、あつさりといういろはの頑張りと実力を認めた。

そんな先輩を見たいろはは満足そうに頷くと、ここからが本題だとばかりに、ゆつくりとこんな言葉を投げ掛けるのだった。

「……どうです？　これでもまだわたしを妹扱いして、まだそんな可愛い妹に頼られて嬉しそうにしちゃいます？」

……は？　なんでこの話の流れの中で急に妹？　なんか唐突すぎて、なにを言ってるのか理解が追い付かないです。

あれかな？　二人は兄妹プレイでもしてるのん？　私の与り知らないところで、比企谷先輩はいろはに「お兄ちゃん♪」と呼んでもらいたい願望と欲望でも告白したのかな？　この変態め！

……ま、まあ赤ちゃんプレイよりはいくらかマシよね！　ばぶー。

「……別にお前を妹扱いなんかした事ねえよ。……ま、なんだ」

しかし比企谷先輩からの神妙な返しを見た瞬間理解した。これは、どうやらそんな卑猥でけしからん内容のお話ではないのだと。

……ないのだと。じゃねーよ。卑猥でけしからんのは私の頭ん中

ただだよ！

「……昼に言われた時も思ったんだけどな——」

なんとも言いづらそうに視線をあっちゃこっちゃに泳がせ、ポツと頬を赤らめる比企谷先輩ちよっちキモい。

そんなにキモく恥ずかしがってまで、これからそんなに恥ずかしいことでも言うのかしらん。

「……俺なんかより一枚も二枚も上手な最強の後輩様を、妹と思って頼られたがるなんて、それこそ俺にはおこがましいっての」

うひゃ！ 聞いているこつちが恥ずかしい！

ぷぷつ、聞きました奥さん!? 最強の後輩様ですってよ！ 比企谷

先輩ってば、アレたぶん元中二の血が騒いでるわね。早くその疼く右腕を鎮めて！

……と、おちやられるのもここまでにしておこう。

そういえばさつきもいろは言ってたっけ。

『もう先輩なんか頼んなくなつたって、わたし達だけだつてなんとかなるんです』

って。

私はちよつと勘違いしてたのかもしれない。

いろはは、雪ノ下先輩や結衣先輩には絶対に真似出来ない、いろはだけにしか行使できないセールスポイントを、これでもかって活用するつもりなのかと思つた。先輩に頼つて頼つて頼りまくって、先輩に甘える可愛い後輩なわ・た・し♪を “自分の持ち得る最大の戦力” にする気なんだと思つた。

それこそ、先輩が猫っ可愛がりするらしいっていう妹さんのポジションを狙つてでも。

でもそれはどうやら違つてみたい。いろははもうその先を見てたんだ。『頼られる満足と庇護欲』の目を自分に向けてもらいたくないじゃない。先輩に向けてもらいたいのには、『いつまでも頼ってくるばかりではない、独り立ちした一人の女の子』っていう信頼の目。

だからあんた、無理を押し通してまで比企谷先輩に手伝わせようと

しなかつたんだね。一応相談はしたけれど、協力を得られないのであれば別に構いません。自分たちだけでやります、って。

あれは別に助けてくれるであろう先輩に甘える為に奉仕部に行つたわけじゃないんだね。あくまでも、これから一生懸命頑張る自分をアピールする為に行つたんだ。

たまに真剣な目をこれでもかかってほど輝かせて言つてたもんね。本物が欲しいんだ、って。甘えたり頼つたりして過保護にされるばかりじゃなくて、対等の関係にならなくちゃ、本物になんて……なれるわけないよね……！

ひひっ、ま、大体？ 女の子にとって、好きな異性から妹扱いされるなんてのは問題外だしね！

あんたらの中で一体どんな話の流れで『妹扱い』なんてテーマが持ち上がったのかは分かんないよ？ これが私と比企谷先輩だったら、お兄ちゃんだけど愛さえあればいーや的なのとか、妹さえ居ればいいんじゃない？ 的な話題からの流れで、いくらでもソツチ方面へ話が行つちやうけど☆

でもソツチ系の話をしたって事もないだろうし、最近のいろはの様子を見る限り、多分この子溜まってたんだろうなあ……。身内に甘々な比企谷先輩に取り入る為に、頼つて甘えて世話を焼かれてきてはみたものの、ふと気付いちやつたのかもしんない。比企谷先輩のその過保護っぷりを。

あれ？ この甘やかしっぷりは、女を見る目じゃなくて妹を見る目じゃね？ これじゃ奉仕部の二人だけじゃなくて、わたしまでぬるま湯に浸からされちゃわね？ って。

じゃあいろはが「わたしは先輩の妹じゃないんですからね」と不満を漏らしたって仕方ない。だって恋する乙女にとって、愛しい男に妹扱いされる存在である事を容認出来るわけないもんね！

……などと、ろくな恋した経験もないケツの青い乙女（笑）が、まるで恋愛マスターでも気取るかのようになんか言ってますよ？

『失敗するとしても、次の一手のための布石を打たないと』
『今始めれば間に合うかもしれないから』

いろはは、私達に向かってもあの人達に向かってもそう言っていた。

つまりはそういう事なんだよね。今始めれば、自分もまだ間に合うかもしれないって……三人の中に割り込める余地が残されてるかもしれないって……諦めるにはまだ早いだって……、本気でそう思ったからこそ、あんたは行動を始めたんだよね？

恋にしろ仕事にしろ、いろはは諦めるのをやめたんだ。あの三人の関係に呆れたり怒ったり諦めかけたり、三人の応援に回ろうかと考えたりもしたけれど、それはもうやめたんだ。あの子は全力でぶつかって、自分を認めてもらいたいって決めたんだ。

だから、今始めれば間に合うかもしれない……、なんだ。

「ふふ、そですか」

比企谷先輩の、「最強の後輩様を妹扱いなんかできねーよ」などと言ううちよつと恥ずかしめな否定の言葉に、最初はほけくつと惚けていたいろはだけど、次第にほんのりと頬に朱色を彩りはじめたいろはは、満足そうに柔らかない笑みを浮かべ、こくこくと何度か頷くとほしりとそう呟いた。

「えへへ、そうですねよ先輩。先輩ごときがわたしを妹扱いしようだなんて、ちよつとチョーシこきすぎです。これからはわたしの事を、一人の可愛い女の子として崇め奉ってください」

いやなんでだよ……

「いやなんでだよ……」

突然舞い降りてきた絶対神のごとき不遜ないろはす神の言動に、比企谷先輩と私が驚異のシンクロ率を記録する。

この流れで急に新興宗教の教祖みたいなこと言いだされたら、そりやツツコみモノローガーな私と比企谷先輩は即座にツツコんじやうってなもんよ！

でも、崇めろだの奉れだのという不遜なお言葉は、本当は一番伝えたい言葉をこっそり隠す為の、照れ隠しのお茶目なベールなんだろう。

あんたが伝えたかったのは本当はただ一点。そう、わたしを一人の女の子として見てくださいね、っていうコレ一点のみ！

恋する乙女の真意に気付き、超絶キモクニヤニヤしちゃった顔を見られないよう、両手で頬っぺをぐにぐにしている私を余所に、相も変わらずうんざりと表情を引きつらせている先輩を見て、いろはは満足そうにむふーつと微笑えむ。

満足したからこそ浮かべる事が出来たのであろうその清々しいまでの小悪魔スマイルは、この話題はここまで！ と、この話題の打ち切りを宣言するかのような空気を纏っている。

この少女が次にこの話題の先へと踏み込もうとする時……、それは、もしかしたらいろはの覚悟の時なのかもしれないね。

だからこそこの、ここはひとまずのお話の打ち切りなのである。

「にしてもアレですよーねー」

そんな私の予想を肯定するかのようには、周囲をぐるりと見渡したいろははさくつと話題の転換を計る一言を告げた。

「あん？」

「せつかくここまで舞台揃えたんだから、どうせならダンスシーンだけじゃなくてプロム全体のPVも撮っちゃえば良かったかもですねー」

何様ですか？ 神様ですね分かります、な態度からの突然の話題転換に呆気にとられる比企谷先輩を置き去りに、いろははとつと次の話題へと突き進む。

ごめんなさいねー、比企谷先輩。ウチのいろはがゴーイングマイウェイで。でもウチのいろははつてば、そうなたらもう聞かないんですよ。

ついさつきまで不機嫌そうにぶくつと膨らんでいたかと思えば、嬉しい言葉を掛けられた次の瞬間にはにこぱつと笑顔になる。

とつても甘くてピリリと激辛スパイシー、ちよつぴりずるくてどこ

までも真っ直ぐな、正に女心と秋の空を体現したかのようなこの女は、さっきの話題の続きは今するべきではないと判断したのなら、なにがなんでもそのお話はお仕舞いってヤツなのです。

「……はあ。……ん？ 全体もなにも、プロムなんかダンス踊ってうえいうえいしてりや完了なんじゃねーの？」

そして厄介で可愛いこの後輩との付き合いをそこそこに済ませているこの先輩も、そんないろはの取り扱いは十二分にご存知のようで、やれやれ、と軽く溜め息を吐いたあとは、どうやらそのままいろはの話題転換に付き合ってくれるようですね。

こうして真面目な会話に一区切りつけて、ふと思いついたままに軽い雑談を交わし始めたという事は、統計的に見ても今宵の八色夫婦漫才も残すところあと僅か、終幕へ向けてまったりと続いていくだけなのだろう。

結局なんでもいろはがプロムにこだわるのかは謎のままではあったけど、あとは終幕に向けて進むだけのこのアホらしき極上のやりとりを、優秀な語りべたる私は軽いツッコみなどを華麗に挟みつつ、ラストシーンまで優しく見守ってゆきましようか♪

「はあ………違いますから。プロムというのはうえいうえいダンスだけをプロムって言うんじゃないかって、イベントの構成きっちりこなしでこそプロムです。ほら、さっき生徒会室で進行計画表見せたじゃないですか。例えば………ド派手な乾杯やったりー、生のロックバンドが乱入したりー——」

「……ああ、あれか……、あと公開告白イベントとかいう処刑法とかだったか」

そうそうそれぞれ！ プロムなんてダンスだけしてりやいいのに、なんで公開告白なんていう地獄の沙汰みたいなイベントを挟んじやうんでしょ。

ノリノリの時に大勢の前で告白するとか、アレって断り辛そうで超卑怯よね！ なんて好きでもない異性から突然告られて、断ったら「ノリわっつー！」みたいな目で見られなきやならないのん？

「です。なんだ先輩ちゃんと覚えてるじゃないですか。にしても他ののは全っ然覚えてなかったくせに、なに公開告白だけは覚えてるんですかね、この人。……はっ!? もしかして今口説いてますか告白なんて言葉を敢えて口にする事によりわたしに告白を意識させという自然な流れで今ここで公開告白するつもりですかそれはとても魅力的な提案ではあります。がまだちよつと早いんで焦らないでください。ごめんなさい」

「……いやなんでだよ」

と、いつものように一切告白してないのに、なぜか一方的にフラれるという日本古来の伝統芸を披露する二人を見て苦笑を浮かべていた私の脳に、ぴかりんつと閃きが舞い降りた。

——ん? 公開告白……?

ま、まさか! もしかしてあんたまさか!?

……あんたまさか、来年のプロムで、比企谷先輩に公開告白する気なんじゃ……?

いろはがなんで今年の開催にこだわっていたのかはなんとなく分かった。それは、あくまでも来年「必ず」開催する為の布石だからだ。

こんな急ごしらえな計画でも今年開催出来れば……、いや、よしんば今年開催には踏み切れなかったとしても、その経験と努力、そして『生徒会が開催の為に行動を起こした』という記録と記憶は、きつと来年の開催に実を結ぶから。

絶対に……確実に来年開催する為の今年。だから『今やれば間に合う』なんだ。

でも、それがなんでプロムなのかは分からないままだった。こんなチャラくてしゃらくさいイベントにこだわらなければ、もっと簡単に生徒会主催イベントとして実行出来たらうに、なんでプロムなんだろう? って、ずっと思ってた。

……でもまさかとは思うけど、それって……公開告白が目的だった
りすんの……？ んなアホな。

そう。確かにアホ極まりない。アホの坂田くらいアホである。

だからアホすぎてそれがいろはの目的である！ と断言は出来な
いけれど、残念ながら私の友達って、結構アホなんだよなあ。

いろはは再三キレていた。奉仕部のぬるま湯状態がムカつく、と。
張り合うのもバカらしい、と。

それを踏まえたら、あの二人の前で……それどころか、告白とかの
雰囲気から逃げだしちやいそうな比企谷先輩を、逃げられないように
大衆の前でガツチリ固めた、覆りようのない公開告白というのは、存
外悪いモノではないかもしれない。

それは明らかな宣戦布告。奉仕部三人に決闘状を叩きつけるには
もってこいの行為。

正直来年の今ごろ、あの三人がどうなってるのかは分からない。

もしかしたら、比企谷先輩がどちらかどくつついて、どちらかが一
人ぼっちになってるかもしれない。

もしかしたら二人の行く末を恐れるあまり、比企谷先輩が一人で逃
げ出しているかもしれない。

もしかしたら、三人で居る心地よさが壊れる事を恐れて、三人共が
見てみぬフリをしたままだったり、三人共がバラバラになっている未
来だってあるかもしれない。

そんな色々な可能性のどれに対したって、いろはからの突然の公開
告白はとんでもない宣戦布告になり得る一撃となるだろう。

もし誰かと結ばれていようともし、「わたしは諦めません」と宣言する
会心の一撃となり、比企谷先輩が二人の想いから逃げ出していたり、
三人ともが三人の状況から逃げ出して、ぬるま湯のまま三人で居たま
まだったりバラバラになつていたとしても、比企谷先輩を……雪ノ下
先輩を……由比ヶ浜先輩を挑発する、痛恨の一撃となる。

——なんてこった……。いろはが再三言っていた『次の為の布石』
『今始めれば間に合う』ってのは、こんなトコに繋がってたのかあ……

もちろんこれは私の単なる想像であり妄想である。

そもそも謝恩会代わりのイベントであり、あくまでも卒業生が主役でなくてはならない卒業生の為のイベントで、在校生であるいろはが主役を奪ってしまったては、会自体が失敗となりかねない。そんな暴挙、普通に考えたら会の責任者がするわけがないのだ。

だからこれはあくまでも私の想像前提という事で考えますけどもおお………うわあ、こいつってば超やりそう（白目）

むしろ、卒業式の送辞でやらかすという超王道的イベントよりは立場上のリスクがよっぽど少ないし、……うわあ、こいつってば超やりそう（白目）

そしたら下手したらアレじゃん。いろはに挑発された二人からちよつと待ったコールが掛かっちゃうかも shouldn't だよ？

いろはと雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩から同じ男への公開告白とか、それはもう体育館内は阿鼻叫喚の地獄絵図じゃないですか……！ひええ……！

「なあ一色、一旦締めた方がいーんじゃねえの？ 一部のエキストラ連中が時間持て余して、また勝手に踊りだしたりしちゃってんぞ」「え、マジですか」

おっと、いつまでも盗み聞きと妄想を楽しんでる場合じゃなかったYO！ 来ちゃうかも shouldn't 怖い未来に冷や汗をダラダラ流して放心していると、どうやらいつの間にかさっきまで思い思いに写真撮影とかしてたうえーい勢が、解散の号令が掛からないのいいことに、自分らのスマホで勝手にダンスナンバーを掛けて、うえいうえいと踊りはじめていやがる。

ふむ、どうやら本日の家政婦業務はここまてかな？ だって、早く解散しないとちよつちヤバい雰囲気じゃない？ あれ。

「……ああいうノリだけで生きてるような連中は、責任者が制御しないところでも調子に乗ってくぞ」

そうなのよ！ なんか一部ではちよつとイケナイ雰囲気突入しちゃいそうな勢い。

ノリだけで生きてるチャライ性欲の獣と、まだ純粹で、でも実は男

に興味津々なのであろう根がスケベ☆な女の子が意気投合しちやつた時の危険度は異常。

あいつら勝手にお熱いチークタイムとか楽しんじゃってるよう！
……ケツ、もれなく爆発しやがれ。

「ですわねー……」

さすがのいろはもこれには引き気味である。

こういう勝手な破廉恥行為を勝手にSNSに上げちゃう輩が居たりすると、なんかこうね、わたくし達PTAとしましては、こういう行為を学校側が容認してしまうのはいかがなものかと思うザアマス！とかいうスネちやまマンみたいのが出てきちゃうかもしんないよー？

「じゃ、そろそろ締めますか。解散してもらったあと、まだこの撤収作業も残ってますしねー」

ふむ。やはり本日の私のお役目はここまでのようだ！ 誠に残念ではありますが、あとは解散の号令を待つのみである。

「あ、でもー……」

と思ったのも束の間……どころかほんの一瞬の出来事だったぜ。

どうせろくでもない事に決まってるけど、いろははそんな勝手なダンサー達を呆れ眼で眺めた直後、何を思いついたのか頭上にぴこーんと豆電球を浮かべ、ニヤアつといやらしく口角を上げた。

「ふふふ、どーです先輩、こんなに素敵なプロムクイーンが目の前にいる事ですし、せっかくなんで一曲踊っちゃいます？ 丁度だんしんくいーんが掛かってますし♪」

え、なんだって？

「……は？」

な、なんとここでもまさかのクイーンからの誘いである。

あんた実はどんだけ踊りたかったんだよ！ と、全力でツッコミたい衝動に駆られるのを堪える顔と、ぶふつて噴き出しそうになるのを堪えるのに必死な私の相反する顔が、とんでもなく面白いレベルに達してますね。

しかしこの場において、私の顔芸などはどうでもいい些末なこと。

後ろで変顔を晒しているモブなどは置き去りに、困惑の比企谷先輩へのいろはからの熱烈なシャルウィーダンスは、緊張と羞恥で赤くなつてしまった彼の首が縦に振られるまでどこまでも続いていくのであった。

「先輩がプロムキングになる事なんてあり得ませんし、クイーンと踊れるチャンスなんて二度と来ないですよ？」

「いやいいから」

「ほらほら、みんな踊ってますし、誰も見てないですつてば」

「マジで勘弁してくれ……」

「むー、なんでですかー、踊りましょうよー」

しかしどこまでもいいお返事を得られないいろはの頬がぷっくりと膨れ上がり、ついには先輩の袖を両手でむんずと掴んでダンスホルのど真ん中へぐいぐい引つ張つていこうと足掻く彼女。

片や、絶対行つてはなるものかと、ジタバタと必死に藻掻く彼。

本日の夫婦漫才を締めくくるそんなふたつの背中を眺めながら、呆れ混じりの苦笑を浮かべる私。家堀香織は思うのだ。

比企谷先輩？ ウチのプロムクイーンは、そうなっちゃったら頑として譲りませんよ？

そう、それは別に今宵のダンスパートナーへのお誘いだけの問題じゃなくて、これからのことも全部含めて、ね♪

一色いろはは最強の後輩様だつて？

ちつつちつつ、甘い、甘過ぎる！ 十万石まんじゅうくらい甘過ぎなのよ、比企谷先輩は。あなたが認識してるいろはの最強さ加減なんて、ホントのあの子の最強っぷりに比べたら、まだまだ可愛いものなのよ。

ウチのプロムクイーンが覚悟を決めたのならば、あなたも今のうちから十分に覚悟しておく事をオススメしますよ？

比企谷先輩は認識を改めるべきだ。あれこそは、世界最強の私の友

達・一色いろはなるぞ☆

おしまいっ

ゆえに私の友達は前を向く

「くあく……ッ」

軋む身体をのびುತ್ತと延ばすと、なんともいえない爽快感が脳と全身をこしょこしょくすぐる。ん、か、い、か、ん☆

いつのまにやら日も暮れて、昇降口を出るとそこはすっかり夜景色。もう学年末だと言うのに、今日も今日とて我が部活の拘束時間のあまりの長さに、やはりブラツクな企業かどうかは入社する前にきちんとリサーチしておくことが大事だと思いました（小並み感）
「チツ、今度の卒業式に部長も卒業しちやえばいいのに！」

と、冒頭から元気いっぱいぶちぶち恨み言を呟いていると、なんとたるグッドタイミングか、前方にいろはすはつけーん！ 亜麻色の髪とチエツクのスカートをふわりなびかせて、なんかととととと走つてんぞあいつ。そんな短いスカートでそんなに走ったらパンツ見えちゃうぞー。

駐輪場に向けて、どうやら誰かを追い掛けているらしい一色いろは。我が生徒会長様をご所望の背中とは、果たしてどこの誰の背中のなのやら。まあ駐輪場に向かつてる時点でその誰かさんの名前は一抹ですけどもね！

おやおや？ これは早くも私の天命のお時間かな？ スタートからクライマックス、だと……？ まだ冒頭も冒頭だよ？ やはり神は私に休息の時間を与えてはくれぬというのかッ……！

「お」

するといろは、駐輪場から校門へと気だるそうに歩いている背中を発見した模様です。駐輪場から出て来たのに歩いてるとか、愛車はどしたのん？ チャリパクでもされたのかな？ 目も腐ってるし。あ、それはいつものことか。

そんな腐り目のプリンス様、比企谷八幡先輩を発見したいいろは。ぐ

いーんと方向転換して奴の懐に真っ直ぐ走る。

王子様も自分のもとへ向かってくるプリンセスの姿に気付いたらしく、彼女の到着を今か今かと待っている、プリンセスってば迷わず彼の横っ腹にいるはずパーンチ！

胸に飛び込むじゃなくて殴っちゃうのかよ。うちのプリンセス荒ぶりすぎだろ。お城の外に出してもらえないからって、自室の壁を蹴破ってお外に遊びに行っちゃうアリーナ姫も真っ青のおてんぼっぶりだね！

おや？ 「なにイチャイチャしてやがんだクソがつ！」と、ペペッと砂糖を吐き出しながら生暖かい目で見てたんだけど、どうやらそんなにスウィートな空間でもないようであります。

いろはのやつ、フニヤーっ！ と猫パンチを繰り出したあとは、呆れたような怒ったような不満たらたらの顔で奴と一言二言だけ交わすと、腐り目王子を置き去りにすたこらさっさと歩いていってしまった。その速度たるや、いろはすオチから裸足で逃げ出す香織&エリエリコンビの如し。つまりバリ早。

そんなプリンセスの迅速な背中を申し訳なさそうに追っているプリンスの姿は、なんとも痴話喧嘩じみていて。

なんっーの？ むくれた彼女のご機嫌を窺うダメ彼氏の装いつての？ なんだよ結局砂糖吐かなきやなんないのかよ。ペっぺっ。

んー、なんかあったのかしらん。

——あのプレプロムのあと、順調に進行していると思われていたプロムは、突如まさかの暗礁に乗り上げてしまった。らしい。

まあいろはから聞いた程度の知識しかないからよく知らないんだけど、やっぱりあの時の軽く乱れた感じの写真をインスタ映えさせた連中がいいねいいねと相互クラスタしまくった挙げ句、それを見た一部の保護者から待ったがかかったらしいのだ。ったく、これだからインスタ映えのことだけ考えて生きてる連中はよお……

つか香織さんや、あんただって一応はイマドキJKなんだから、少しは映えとかいいねに興味持ちなさいな？ いやいやなにをおつ

しゃいますやら香織さん。私だっていいねに関心ありまくりよつちゅーねん。但し私の興味が向いてるいいねは、インスタとかじやなくってようつベアニソン踊ってみた動画のいいね数だけど！ 目指せ、ヒカキン生活！ 香織チャンネル登録してねっ♪

おっと、そんなヤクザな商売の夢を二人（香織同士）で語らい合ってる場合ではなかったわ？ そんなペアレンツの窓口役として学校に乗り込んできたのが、あの雪ノ下姉妹のお母たまだというからさあ大変！ あの姉妹の母親とか、大魔王倒したあとの裏ボスかよって話よね☆（吐血）

いろはも必死に応戦したらしいんだけど敢えなく撃沈。すっかりお通夜モードだったのだからか。

んで、その際に魔王母娘からの初見殺しコンボでボロ雑巾と化した奉仕部一同とはっちやけ生徒会長様。特に比企谷先輩のダメージが半端なかったらしく、それから数日間、比企谷先輩ってば雪ノ下先輩というはの前に姿を現してないみたい。

そんなこんなな状況が今日まで続いていたにも関わらず、突如こうして目の前で痴話喧嘩を繰り広げてるっていうね。こんなの、神に覗き見の天命を与えられた香織ちゃんが気にならないわけがないじゃないか！

てなわけで、すたすた歩いて行ってしまった二人をこっそり尾行いたしましょうか♪ いやいやちげーし。尾行じゃねーし。

二人は駅方面に向かってるし、当然私だって帰宅の為に駅に向かわねばならないのよ。

つまりこれは世間様から後ろゆび指されるような疾しい尾行などではなく、たまたま偶然目的地が同じだから、あたかも後ろを尾行してるように見えるだけなのである。見えるだけなのである。大事なことなので二回言っておきました。

言い訳も済んだことだし、よっし、Let's 尾行たーいむ！

× × ×

学校から駅方面へ向けて歩くことしばし。相も変わらずいろははぶんすかぶんすか先を歩き、比企谷先輩はそんないろはに置いてかれまいと、一向に縮まらない距離を必死に追いつけていた。なんだあれ、まるで浮気がバレて愛想尽かされて、謝ろうと必死にご機嫌窺う間男じゃん。

このまま無言で駅までランデブーしちゃうのかと思っていたら、唐突にいろはが立ち止まった。駅まであとほんの少しの、小さな小さな公園の脇の小道で。

そしていろははかくつと肩を落として溜め息を吐き出したかと思うと、公園脇に設置された夜の闇に浮かび上がる自販機をびしつと指差した。どうやらジュースを奢れという無言の圧力らしい。ふむ、なにを怒ってんのかしらないけど、許してあげたくてもどこで折れてあげればいいのかきつかけが無いから、ジュース奢ってくれんなら許してやんよっ、てのが落としどころってヤツなのかもね。

そんないろはの思惑を察したのか、比企谷先輩ってばやれやれと嘆息しながらも、なんだかほんのり嬉しそうでやんの。ヤツは二本のジュースを購入して、好きな方をどうぞと両手を差し出す。そしてプリンセスは、プリンスの左手から花束ならぬ小さめの缶を不満げに受け取った。

……しかしいかんせん、私とヤツラの間にはまだまだ距離がある。普段の尾こ……盗み聞……ぐ、偶然の立ち聞きの時は、人混みに紛れたり物陰に隠れたりと上手く周りの景色と同化する香織ちゃんではありますが、残念ながらここには我が身を紛れさせる人も物陰もないんですよ！ なにせいろはが自販機を背にしやがみこんで缶ジュースを飲みはじめちゃったもんだから、近付いた瞬間に自販機から眩しく漏れるスポットライトに照らされてバレバレまである。

つまり、今二人がなにを飲んでいるのかも、今しがた始まったばかりの会話内容さえも私には分からない。やれやれ、こんなんじやキキミミスト失格じゃよ。

ふむう……、なんたる失態か。自販機の前ではすでにめくるめく夫

婦漫才が繰り広げられているというのに、覗きの天命を背負った私は未だまごまごしてるといっていただけである。

ダメよ香織っ！　こんなんじや私に天命を与えて下さった神様にちよきんとリストラされちゃうじやない！　かしこまの時代が終わっちゃうたからって、私もうクビなのん？　私の出番もう終わりなのん？　ふええ……この業界ブラックすぎんよ（白目）

しかし、まだだ、まだ終わらせんよ！　とばかりに、なんとか聞き耳立てなきやと一旦裏に回ってから公園に侵入し、自販機の裏にカサカサ近付いてゆく私。花の美少女女子高生が真夏の夜の黒いアイツもかくやってほどこにまで身をやつし、多くの方々に夫婦漫才をご提供できるような体を張って頑張るなんて、なんとも泣けるじやありませんか。この作品は、涙無しには語れない感動の物語です。

そして、そんな感動物語にさらなる花を添えてやろうと、自販機越しに聞き耳を立てた私の鼓膜を揺らしたのは、私の友達の口から発せられた衝撃の一言だったのです。

「わたし、こう見えて友達いないじゃないですか」

——いやん！　私の友達○　一色いろはに友達と認識されていなかった件について☆

× × ×

お、おうふ、き、気を確かに香織……！　な、なんかこう、友達と思ってたのは自分だけだったみたいダヨっ？　が発覚した時の脱力感てのは半端ないものがあるよね！

な、泣いてなんかねーし。

「お前は自分がどう見えているんだ……」

「むっ」

「どうぞ続けて」

そして比企谷先輩も比企谷先輩である。あんた「わたしの友達です」って私を紹介されただろうが。そこは家堀達が居んだろ……ってフォローしなさいよう！

しかし私とてプロのキキミミスト。比企谷先輩のプロぼつちにも決してひけは取らない由緒あるジョブなのである。

たとえショッキングな事態に陥ろうとも、公私混同で仕事に穴を空けるなんて一流のプロとして愚の極み。ここは涙をぐいっと拭って職務に邁進しようではないか。へ、へんつ、お前なんか友達じゃないやい！（涙目）

「先輩たちだけです。だから、先輩も雪乃先輩も結衣先輩も葉山先輩も……ついでに戸部先輩とかのその他大勢もちゃんと送りだしたいんです」

するといろは、先程までのおちやらけた雰囲気とは一変、とても優しい声音で想いをそう紡いだ。生憎彼女は自販機を背に腰を下ろしているから、陰に隠れている私にはその表情までは窺えないけれど。

でもその顔がどんな顔してるのかは容易に想像できるよ。いつものあざとい笑顔はどこへやら、とつても自然で優しい眼差しを比企谷先輩へ真っ直ぐ向けてるんでしょ？

ここまでの話の流れが分からないから単なる憶測でしかないけれど、たぶん比企谷先輩は「なぜそんなにプロムがやりたいのか、なぜそんなにプロムにこだわるのか」という質問でも投げ掛けたのだろう。そりゃ疑問に感じるのも無理ないよね。三年生とはそんなに関わりを持たないいろはが、ここまで反対されても、ここまで難儀な目に合っても、未だ折れずに絶対遣り遂げようと頑張ってるんだもん。そしてその解答が「先輩たちをちゃんと送りだしたいから」なんだ。送りだしたいのは現三年じゃなくって、来年の三年生。つまりあなたたちなんですよ、って。

うん、やつぱりそうだったんだ。城廻元生徒会長達には申し訳ないけど、本年度のプロムは、いろはにとっては来年度のプロムの為の布石なんだね。

来年のプロムを確実に開催する為に……自分が一番送りだしたい

大切な先輩方を自分の手できちんと送り出す為に……一年後の未来の為に“今”を頑張ってるんだ。

そんな温かな想いを、思いもよらず強引に受け止めさせられた比企谷先輩。可愛い後輩のその想いにどう応えるのやら、と思っただけ聞いていたら――

「ははあん、さてはお前いい奴だな？」

と、おちやらけた返しでお茶を濁しましたよ？

うむうむ、気持ちは分かるぞよ、比企谷くん。それでも言わないと、つい目頭が熱くなっちゃいそうなんだろう？

普段生意気でクズい後輩が不意に見せる真っ直ぐな優しさ。これはズルい。もはや卑怯ってレベル。ふふ、あんたの後輩は最強だろう？

「わたしが後悔しないためにですよ。わたしのためです。別に先輩のためじゃないです」

そしてそんなおちやらけに返す答えもまた、比企谷先輩に負けず劣らずの捻くれっぷりである。あくまでも自分の為だと宣ういろはつて、どことなく比企谷先輩に似てるよね。ホントどっちも素直じゃなくてめんどくさい。

さてはいい奴だな？ とからかわれて「あんたの為じゃないんだからね!」とか、見事なまでにツンデレ丸出しだよ！ 自販機と生け垣に遮られているのは表情までは窺えないけど、あいつ今絶対耳とか赤くなってるんだろなあ。ふひっ。

比企谷先輩と友達の（友達じゃない）いろはのアルティメット級の素直じゃ無さについついにんまりしていると、いろはは呟くようにぼしよりと言う。

「……だからプロムやりたいんですよね」

そうぼしよつと溢したいろはの声音は、まるで夢に焦がれる無垢な少女のよう。そしてぼしよつと溢したその想いは、このプロム計画に向けたいろはの本音を、遂にあらわにするのだった。

「そうやって、わざわざめんどくさいことやって、長い時間かけて、考

えて、思い詰めて、しんどくなつて、じたばたして、嫌になつて、嫌になつて……それでようやく諦めがつくつていうか。それで清々した……って、お別れしたいじゃないですか」

初めは眩くように語りはじめたそのセリフ。次第に熱を帯びはじめ、最後には明るく元気な笑い声に変化していった。

でもいろはのそんな明るい声音とは裏腹に、わたしの心にはえもいわれぬモヤモヤが飛来するのだった。

——いろは、それって……

「……まあ、わからなくはないな」

わからなくはないとか言いながらも、今のいろはのセリフの中に込められた本当の気持ちはなにひとつ理解していないであろう比企谷先輩。

……それは仕方ないことなんだろうとは思ふ。だって、あなたはあなたに向けられているいろはの本当の気持ちを知らないのだから。……でも、なんだか、胸が苦しいよ。だっていろは、あんたは……

「ほんとですか……？ だったら……」

それでも、やっぱいろははとことんめんどくさい女だね。ホントは苦しいくせに、それでもそんな風に笑えるんだから。

そして、そこでようやく私の目にいろはの姿が捉えられた。比企谷先輩のマフラーを掴んで立ち上がり、その小さな身体を自販機の陰から月明かりの下に晒したから。

「もっとちゃんとしてください」

ようやく見えたいろはの表情に浮かぶ色は優しい微笑み。でも、その瞳に浮かぶ色は優しさではなく真摯なまでの厳しさ。

見つめる瞳があまりにも近すぎて、比企谷先輩は頬を赤く染め上げ後退を試みる。しかしいろははそんな意気地なしな先輩の情けない姿に深く、深く溜め息を吐き出すと、敗走寸前な先輩の首を……もといマフラーをむんずと掴んで逃がさない。

「あ、ああ、悪い……」

「ちゃんとしてくれないと、こつちもちやんとできないんですから。ほんと困るんですよ、こういうの。めんどいし、厄介だし、あとめん

どくさいんです。それにめんどくさいし」

誰よりもめんどくさいいろはが、誰よりもめんどくさい比企谷先輩にめんどくさいを連呼して、責めるようにぐるぐるぐるぐるマフラーを絞め上げる。ぐるぐるぐるぐる、ぐるぐるぐるぐる。それはもう中尾彬も引くくらい、ぐるぐるぐるぐる。

「あいつたあ……」

そして風が入る隙間もないくらいの見事な中尾巻きが完成すると、その上からもふもふミトンでふにやつと猫パーンチ！

絶対に痛くないであろうもふもふでぐるぐるなふにやつとパンチではあるけれど、比企谷先輩にはそれはそれは大層重い右ストレートだった事でしょう。幕之内一步が弟子に対する暴行（ビンタ）で自首しちゃうレベルの破壊力。

だって、いろはの色んな想いがたつぷり詰まった、クリティカルで会心な痛恨の一撃なんだから……

× × ×

「あ、わたしちよつとこれから用あるんで、ここで解散しましょうか」
一連のイチヤイチャも幕を閉じ、残った缶ジュースをこくつと煽つた一色いろはは、空き缶をゴミ箱にぽいすると突然別れのご挨拶。

これには私もびつくりである。まあいろはにも色んな感情が渦巻いているのかもしれない。今は比企谷先輩と一緒に帰るのが辛いのかもかもしれない。でも二人で帰れる機会なんてあんま無いから、せつかの機会だしこのまま駅までイチヤイチャしてくのかと思ってた。

なのになさかここでいろはから現地解散を言い渡すとは。それほどまでに大事な用でもあるのかな。

「お、おう、いきなりだな。どこで用事があるのか知らんけど、もう暗いし、駅までは行けばいいんじゃないやねえの？」

そんないろはの突然の別れの挨拶に、他ならぬ比企谷先輩も驚きを隠せないご様子。だって普段ならつねに解散↓帰宅提案する隙を窺っているあの先輩が、まさかの同伴帰宅を提言するくらいなんだも

ん!

まあそれもそのはず。なにせ現在地は駅まで目と鼻の先なのだから。あとちよつと歩けば駅なのに、ここで解散とか意味わかんないんだろうね。

「え、どうしちやつたんですか先輩、らしくもない。らしくなさすぎて若干鳥肌が立つレベルなんですけど。そんなにわたしと一緒に帰りたいんですかー?」

「ちげえから。決して一緒に帰りたいわけではないから。つか暗いからと優しさを見せただけで鳥肌立たれちゃうのかよ……」

「いやいや鳥肌超立つでしよ。なにせあの先輩が率先して夜道を心配してくれるなんて。……は!? もしかしていま口説いてますか、心配するフリして送り狼になつちやう気ですか、確かに普段ぶつきらぼうな先輩が急に優しさアピールしてくるとかちよつとフラツときて少しくらい食べられちゃってもいいかなとか思わなくもないですけどよくよく考えたら今日は両親が在宅中なので無理ですごめんさい」

両親がお出掛け中だったら食べられちゃってもいいのかよ。とんだ肉食系な羊ちゃんだな。

「ああ、そう……」

ちよつと!? ちゃんと聞いてちゃんと気付いて比企谷先輩!? いろは、美味しく召し上がれっ♪ って言ってますからね!?

「ま、とにかくです。その優しさは気持ちだけいただいておきます。ちよつと忘れ物があるですよ。さすがに付いてこいとは言えないんで、ここでさよならです」

「そうか」

「はい」

ほーん。忘れ物か。ならここで解散も納得。

ま、男ならそこで「学校まで付き合つてやるよ」でしよ! と言いたいトコではありますが、この比企谷先輩にそこまで期待するのは酷というもの。暗い夜道を心配した時点で先輩にしちや及第点つちや及第点だね。だって比企谷先輩だし。

にしてもいろは、本当に忘れ物なのかな。普通忘れ物したらそれな

りのリアクションしない? 「あ!」とか「うへえ」とか。

でもいろははここまで何一つリアクションを起こさなかった。まるで最初からここでお別れする事を決めていたみたいだ。

あれかな? 忘れ物には随分前から気付いてたけど、どうしても比企谷先輩に追い付きたいから忘れ物は一旦置いといてとりあえず走ってきたのかな?

「んじゃ帰るわ。お前も気を付けて帰れよ」

「はい。ありがとうございます。あ。あとごちそうさまでした」

「おう、お粗末さま」

「ではではです」

自販機の明かりにぼんやり照らされたいろはは、次第に小さくなっていく比企谷先輩の背中に小さく手を振り続ける。

こういう時、見送られる側は何度か振り返って送り人に手を振り返すものなのだろうけれど、生憎あの先輩はそんな気の利く心など持ち合わせているはずもなく、振り返る事のない愛しい背中にただ手を振るだけのいろはの姿は、なんとも物憂げに見えた――。

「あ、そだ! せんぱーい」

でもね? うちのいろはがそんな切ないシーンのまま幕引きするはずないんだよね。うちのものにも友達じゃないんだけど(涙目)

いつまで経っても振り返る事のないダメ男に業を煮やしたいろはすは、こうして強引にヤツを振り向かせるのだ!

「あん?」

「今日のところはお汁粉で勘弁してあげましたけど、フツー怒ってる女の子にお汁粉なんてくれたって、絶対許してくれませんからね」

「う、うす」

なに飲んでんのかと思ってたらお汁粉だったのかよ。チヨイスが渋い(千鳥並み感)

「とゆーわけで、今度デートする時は今日のツケをちゃんと払ってもらいますんでよろしくです」

「はい? なんてデート?」

「はい？ 約束、忘れたとは言わせませんよ？ 前のデートのとき、カフェで約束しましたよね、「今度はもうちよつと知り合いが少ないところにしませうね」って」

「……了承してねえじゃねーか」

「ふふ、超高いの期待してますからねー。ではではーす」

「聞いてねえし……」

——今度こそ、ゆっくりだらだら去ってゆくだらしない猫背。でも同じお見送りシーンでも、つい先程までの切ないお見送りとは雲泥の差です。さすがはシリアスクラツシャーいろはす、見事なお点前である。

……うん。こつちの方が見てて楽しいから好きよっ！

「……じゃ、さよならです、先輩」

そして、なんの迷いもなくぐるり回れ右する我らが一色いろは。回れ右するのは忘れ物を取りに行く為か、はたまた比企谷先輩への想いに背を向ける為なのか。

それは私には解らない。解らないけれど、それでも私はあんたの決めた選択を全力で応援してあげるよ？

だって、いろはの瞳は全然後ろ向きじゃないもん。全然回れ右してないもん。

『長い時間かけて、考えて、思い詰めて、しんどくなって、じたばたして、嫌になって、嫌いになって……それでようやく諦めがつくっていうか。それで清々したーって、お別れしたいじゃないですか』

たとえばそれが諦める為の……お別れする為の回れ右なんだとしても、そこに至る想いは全力投球どストレート。たくさん考えてたくさん思い詰めてたくさんしんどくなった先にある諦めとお別れならば、それは一色いろはの本物なんだろうなと思う。

……だから、私は友達の選択を信じて、友達の選択を全力で応援するからね！ 友達じゃないけどっ（遠い目）

「さて、っと。それでは先輩も帰ったことだし——」

——そしていろはは真っ直ぐ進む。どこまでも、どこまでも、どこまでも真っ直ぐに。

「香織ー、どうせ居るんでしょ？ とつとと出てこい」

「なんでッ!?!」

「うっわ……、ホントに居たよこの人。五分五分くらいかなー？ つて気持ちで先輩先に帰したのに、当たり前のようにフツーに居るなんて……。軽く引くんですけど」

「嵌められた!?!」

「嵌めてないから。むしろどっちゃかって言ったらわたしが嵌められるから。………ったく、毎回毎回人の話を盗み聞きしやがって。あーあ、ホントわたしにはろくな友達居ないよねー。生徒会長に勝手に立候補させられたりプライベートを覗き見されたり。てか、人のプライベート覗き見してニヤニヤしてる子とか、友達って言えなくないですかー?」

「ご、ごもつともです（白目）」

「いやん！ 確かにいろはには友達居ないね！ 主に私の悪癖のせいだよー」

「で、いつまで隠れてんの？ 長くなりそうだから、ほら、とつとと出てこいよ。」

「……か、かしこまつー！（吐血）」

H☆ ——どうやら、いろはの忘れ物とは私への折檻だった模様DEATH

【最終回、前編】私の友達一色いろはは、やっぱり最高にあざとい件について

華やかなダンスナンバーと煌びやかな装飾達に包まれて、どうせこれが最後だ！ 我こそが本日の主役なりっ！ と舞い踊る総武高校三年生一同。

そんな荒くれ者どもなパーリーピーポー達の影が、レーザービームの如きスポットライトとミラーボールから降り注ぐ光の中にゆらゆらと蠢く。そう、本日はついにお世話になった先輩方の晴れ舞台、プロムナードである。

本日を持って我が学舎を去ってゆく比企谷先輩を筆頭とする三年生方の最後の勇姿を、私家堀香織はちよちよぎれる涙をハンケチーフでつついと拭いつつ、優しく穏やかに目を細めるのだった。

え？　なんで卒業すんのが八幡なのん？　誤字っちゃやってない？
って？

いやいやそうではありません。だって今日は、今はもう私もあとほんのちよつとで最上級生の仲間入りという春の一日なのだから。二年生の終わりを告げるプロムなのだから。

いやん！　唐突に刻がぶっ飛んで『——それから一年後』から始まる冒頭なんて、まるで打ち切り漫画の最終回みたいじゃない☆

だ、大丈夫！　このぶっ飛んだ期間って、逆にこれから語りたいたい放題なんだから！　ストーリーテラーたるこの香織ちゃんの気分次第で、如何様にも物語は続いてゆくのっ！　ふはははは！　物語の続きを欲する者共よ！　我を崇めよ！　「香織ちゃん！　今回も面白かったよー！　終わっちゃったからってお気に入り削除なんてしないし、なんなら評価10だってもりもり入れちやうゾ☆」と我をおだてて私の気分を良くさせて、物語の続きを促すがよいわッ！

……ま、待ってエ！ ひっさしぶりの出番に浮かれちゃって、ちよつと調子に乗っちゃっただけなお！ やめてください物を投げないでください罵声を浴びせないでください画面を消さないでください！ ……ちつ、うっせーな、反省してまーす。
けふんけふん。

——今からおよそ一年前、プレプロムで盛り上がりすぎて調子に乗って、PTAから待ったが掛かり開催が危ぶまれたあのプロムもなんとか乗り切り、私達は無事二年生に……比企谷先輩達は無事三年生へと進級を果たした。

いや、アレは決して無事には言えなかったよね。比企谷先輩も雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も。そして……私の友達一色いろはも。

あんなことやそんなこと、たかがストーリーテラーという名の覗き趣味の持ち主でしかないモブな脇役ヒロインの私には、到底想像も付かないような複雑怪奇な人間模様を乗り越えて、今、こうして彼ら彼女らはこの学校を巣立とうと……巣立たせようとしている。

『なんかさー、先輩と雪乃先輩、付き合う事にしたっばいんだよねー。本人達は周りに気付かれてないとか思ってるみたいだけど、マジありえねーっつーの、あー、アホらし』

三年生を送り出すプロムにて終わりを告げるかと思われていた、あの出会いと別れの春の催しごと。しかし、そのプロムが閉幕したかと思いきや、返す刀でまた違うプロム——しかも海浜との合同プロムとやらをぶち上げたのだしたあの人達。いろはにそれを聞かされた時は、謎過ぎて「は？」を何度か連呼したまである。

まああのいろはすも、それを聞かされた時「意味わかんない」を連呼したらしいけれど。

とにもかくにもそんな意味不明イベントの準備中な真っ最中、教室で仲良く駄弁ってた私達グループ員に向けて、突如そんな衝撃的セリフを鼻で笑いながらぼつりと溢し、また忙しそうにぱたぱたと仕事に戻って行った私の友達。

——え……？ なに？—待って？ マジかよあの唐変木がああ

変木と意思を疎通したのかよ。じゃ、じゃあいろはも由比ヶ浜先輩も爆死したってこと？ うっそマジ？

いろはの去り際、そんな語彙力皆無で小並み感満載な思考に囚われてしまった私。いやさ私達。

いやほんとマジで、一体なにがどうなってるんだかどうなってるんだか、いろはには聞きたいことが山ほどあった。

でも、あの衝撃的なセリフを鼻で笑いながら吐き捨てるだけ吐き捨てて、そのいきさつも内幕も一切つけず、そそくさと仕事に戻ってしまった時点で、このお話はもうこれでお仕舞い！ と、言外で私達に伝えていたのだろう。

その予想通り、それ以来いろははその件について——自身の失恋について……、私達に何一つ語ってくることはなかったし、私達から聞くこともしなかった。あの子が語るのは、自身の色恋沙汰とは全く無縁の、今までとなんら変わり無いあの人たちとの面白可笑しくめんどくさい関わりのお話だけ。そしてそんな当たり障りのない話を、私達はただ聞いていた。

『そうやって、わざわざめんどくさいことやって、長い時間かけて、考えて、思い詰めて、しんどくなつて、じたばたして、嫌になつて、嫌いになつて……それでようやく諦めがつくつていうか。それで清々したーって、お別れしたいじゃないですか』

——いつかの帰り道、いろはがああ先輩に向けて口にしたあの言葉。

その言葉通り、失恋（推定）した後のいろはは、生徒会長として一生懸命色々頑張っていた。もう比企谷先輩と結ばれることも叶わないというのに、それでもあの人達とあの場所を大切に思い、色んな行事を（副会長が）真面目にこなし、二期目の生徒会長もきっちり当選。めんどくさくて、思い詰めて、しんどくて、じたばたして……

そして今日、昨年の卒業式とは違い、二期目のベテラン生徒会長様らしく、涙を見せず堂々とした立ち居振舞いで先輩達を送り出した。

もつとも、昨年の卒業式に見せた涙はヤラセ……演出だけどね！

今、こうしてプロムを進行している我らが生徒会長は、あの日のあの言葉通り、めんどくさくて思い詰めてしんどくてじたばたして、ちゃんと比企谷先輩を嫌になれたのかな……。嫌いになれたのかな……。諦められたのかな……。

……清々しくお別れする準備は出来たのかな――

『――香織せんぱい！ これ終わったら余興始まりますので、BG M 捌け次第会場のライト前消して例のスポットライトよろしくです』

と、一年ほど前の思い出を振り返ってちよつぴりセンチめってた私の耳に、インカム越しに可愛い後輩からの確認が飛んできた。

その可愛らしくもあざとい声にはっと意識を戻した私は、少しだけずきりとした胸の痛みを振り払い、何事もなかったかのように元気にこうお返事をするのでした。

『――かしこま☆』

……ええ、わかってますよ。もうかしこまはオタ界限では終わってるコンテンツなんだって事くらい！

そ、そんなことないもん！ 今MXで再放送してるから現役バリバリだもん！ (涙目)

でもね、私には界限のブームとか覇権とか、そういうのはどうだっていいのさ！ いろはが永遠のかしこガルなら、私は永久不滅のかしこまガル！ 世間で廃れようが忘れ去られようが、好きなものは好きなんだと、どんつと胸を張って好きを貫いていきたい！ それが立派なオタ道つてもんじゃーい！

あ、いや、私オタとかじゃないんですけど！

『――小町ちゃんもばつちしのタイミングで音出しよろー』

『――かしこま☆』

私達ズツ友だよ!? と心の中でらあらに横ピースを向けつつ、今やすっかり仲良しになった比企谷さんちの小町ちゃんにそう確認を返

すと、小町ちゃんも可愛くお返事を返してくれました。やだんこの子ったら可愛い♡

今年のプロムは、昨年のプロムの大成功体験もあつてか、お手伝いを買って出てくれる有志には事欠かなかつたらしい。なので人手満載期日楽勝ガハハハ。去年はほんと大変みただったからね。特に合同の方。

そんな中、今や奉仕部部长である小町ちゃんや、いろはグループメンバーでもある私達ももちろん有志に参加している。

私は照明まわりを。小町ちゃんは音響まわりを。書記ちゃんこと新副会長ちゃんは全体の統括を。そのほか下っ端ども（エリエリとかエリエリとかその辺）は受付だのケータリングまわりだの雑用だのを割り振られ、去年は超大変だったらしい生徒会長様は、今年はMCに集中してる。

去年コスパ優良選手な割になかなかウケが良かったらしいスライドショー（BGM 小田和正大先生の例のアレ☆）にて幕を開けた本イベントは、参加者様方思い思いのご歓談を挟み、そしてメインイベントダンスタイム。

きらびやかなドレス、ピシッと決めたタキシードで着飾った卒業生達が、舞えや歌えの大騒ぎを楽しむ中つつがなく会は進行していき、そして今、小町ちゃんからの連絡通り、ダンスタイムとダンスタイムの合間に行うちよつとした余興のお時間となった――。

『――香織、そろそろ行くよー?』

『――かしこま☆』

インカムから聞こえてきた、舞台袖でスタンバるいろはの声。かしこガールにかしこまガールが元気よく応答した。

『――お米ちゃん、準備おつけー?』

『――あいあいさー!』

次にいろはは小町ちゃんに確認をとる。

この二人、初顔合わせの一瞬こそ若干の同族嫌悪でモメかけたらしいけど、今やお互い遠慮なしに物を言い合える仲良し姉妹のようである。今さらだけどお米ちゃんてなんだよ。

『——よし、んじや書記ちゃん、始めるよー』

『——了解しましたー。でももう書記ちゃんじゃないからね、いろはちゃん……』

——そして最後に全体の統括をしている書記ちゃんこと新副会長ちゃんにいろはがゴーサインを出し、書記ちゃんこた新副会長ちゃんが私はもう書記ちゃんじゃなくて新副会長ちゃんだからね、と悲痛な声で念を押した。なにこれややこしい。

「ご来場の皆さま方、それではここで、一時の余興をお楽しみください」

定番のダンスナンバーがフェードアウトし、一瞬の暗転。書記ちゃん……藤沢ちゃんのアナウンスが場内に響き渡り、そして私は、この余興の為だけの特別なスポットライトで舞台を煌々と照らすのだ。

さあ、狂喜と狂気のフェスティバルの始まりだぜ！ あそれ、ぼちっとな。

× × ×

ダンスダンスでウエイウエイウエイのノリ感満載な赤、青、黄色が輝く原色色彩が溢れていた会場から一転、私がぼちった照明から降り注ぐ光は、クラブもかくやという程アゲアゲ空間だったこのパーティー会場には不釣り合いの、春の日差しのような穏やかな暖色。真つ暗な会場にぼっかり浮かんだ舞台は、暖かな優しい光に包まれた。

と同時に、激しかった重低音が消え失せた会場に響くのは、皆の身体を——心を優しく満たしてくれるようなメロウでエンダアアな名曲の数々。

事前告知してあるとはいえ……タイムテーブルに記載されているとはいえ……、先ほどまで本能の赴くままに踊り狂っていた来客達は、この雰囲気のアマリの変わりように一気に静けさを取り戻し、皆

一様に舞台の上に立つ一色いろはに期待の眼差しを向けた、

「みなさん注目です。お待ちかね、余興タイムがやって参りました！実は去年もコレやりたかったんですけど、PTAやらなにやらお偉方の目が厳しくて開催出来なかつたので、安心と信頼の実績を得て若干緩くなつた今年はこっそり開催しちゃいます」

「「ウエーイー！」」

「こっそり開催という手前、混乱を招いてしまつたとわたしの立場的にちよつとやばいんで、こっそり配つた事前募集にて厳選なる抽選の結果選ばれた方々だけの参加となる事をご了承くださいーい」

「「はーい！」」

「でははいっちゃいませよー！………公開告白タイム、です♪」
「「おおお！」」

MC回しで盛り上げに盛り上げ、最後のセリフだけ、ばちこん☆とウインクを交えて密やかにあざとく宣言する一色生徒会長に、会場のボルテージは最高潮。

そう。本場のプロムなんかでは定番のイベントらしいこの公開告白イベント。しかし残念ながら、去年は開催を諦めた、らしい。なぜなら、いろはの言う通りPTAのザマス共が五月蠅かつたからである。

しかし今年は去年の実績がある分、保護者の方々の目が前回のよう
に光っていない。それすなわち、自主性を重んじる我が校の校風上、
ある程度は生徒達に責任を委ねられるという事。もちろん、あくまでも
学生モラルの範囲内で、との注釈付きでね！

そして、こうしてお偉方うるさき方の目が届かない隙が出来た今回の
プロム。ついに総武高校創立以来、初のふしだらイベントが開催され
る運びとなつたのである！……え？せつかくそれなりの信頼を
勝ち得たつてのに、こっそりふしだらイベントやっちゃうとか大丈夫
なのん？

——ん、んー、それにしても……、あ、あれ？なんだっけ？な
んか私、一年くらい前にこの公開告白イベントとやらに、なにかしら

思うところなかったつけ……？

なんかこう、胸がざわざわするんだけど……

「それでは一人目の参加者さん、どうぞ！」

と、なんだかわからない不安にドキがムネムネしていると、そんな私の不安をよそに、いろはに促された一人目の挑戦者が舞台上へと！

……ん？ あ、あれは！

「……え、えー、三年B組、大和です」

って誰!?! いやいや、私あの人ぎりぎり知ってるよ？ 由比ヶ浜先輩のグループの人でしょ？

なんでよりによって貴重な一発目にあのモブパイセンなのん？

「えっと……ゆ、由比ヶ浜結衣さん！」

「え!?! あ、あたし!?!」

「結衣！ 実は俺、ずつとお前と二人でスクラム組みたいと思ってたんだ！ 俺にお前をジャツカルさせてくれ！ 二人でワンチーム――」

「――ごめん無理」

「ぐはっ」

即断だった。食い気味どころかセリフ遮っちゃったよ。

なんで大和パイセンなのかと思ってたら、せつかくのラガーマン設定が生きているのが正に今！ ここだけ！ だったからかよ。

……ふ、ふう、さて、次、次つと！

「やー、残念でしたねー。ではでは次の方、どうぞー」

全然残念そうじゃない、なんなら半笑いのいろはに促され、次に舞台上上がったのは……!?!

「ど、ども、三Dの戸部翔つす……」

戸部先輩キターー！

これもうやる前から負けフラグびんびんじやないですかやだー。てか、大和パイセンに続いて戸部先輩とか、これほんとに厳選なる抽選したの？

「え、えーと……、……つべー、超緊張しまくりなんだけど……！ え、

えと、海老名、姫菜さん！」

「……うん」

「ず、ずっと前から好きでした！ 付き合ってください！」「ごめんなさい」

「ぐはっ」

これまた即断だった。あれ？ このイベント大丈夫？ 盛り上がる気配がないんですが。違う意味ではめっちゃ盛り上がりつつあるけどね！

……いや、まだだ、まだ終わらんよ！ さ、さて、次、次と……！

「やー、残念でしたねー。ではでは次の方、どうぞー」

と、全然残念そうじゃない、なんなら半笑いのいろはに促されて、懲りずに次の挑戦者が！

「……え、えつと、三年G組、海老名姫菜です」

……なん、だど？ 今戸部先輩を振ったばかりの海老名先輩が、てれつてれに照れた様子で舞台上上がった、だど？

っべー！ 今まさにとぼとぼと舞台から下りようとしていた戸部先輩の呼吸がやばい。

にしても、これ完璧に厳選なる抽選（笑）だわ。主催者側の独断と偏見にまみれすぎじゃないかしら！

「え、えと、……ひ、比企谷、八幡……くん」

「はっ」「はっ」「はっ」「はっ」

おつと、ここでもさかの比企谷先輩だー！ なんか会場のそこかしこから低くい「はっ」が聞こえてきましたよ？

あれは呼ばれた本人と雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩とマイク越しのいろはの声だね！ お前もか。

そ、それにしても、まさか海老名先輩までもが比企谷推しだったなんて超意外！ これは面白くなってきた！ 一体どんな告白すんの！？ やっぱい、超気になるー！

「ヒキタニくん！ もし良かったら……、……は、隼人くんと夜のスクラムを組んでワンチームを超えたワンボディーにブハアー」
「勘弁してくれ……」「勘弁してくれ……」

……気にならなきや良かったよ！ この公開告白イベント、もうダ

メかもわからんね（白目）

× × ×

鮮血に染まる舞台と、阿鼻叫喚なBL被害者二人の叫び。

これはもう、このままカオスな大失敗に終わるかと思われたこのイベント。しかしながら、最初の出オチ三人衆以降の参加者達は存外真面目なノリで、もちろん失敗もあつたけどカップル成立大成功もあつたりと、最終的にはなかなか盛り上がったイベントでした♪

……へッ、こういうノリだけの告白で誕生したカップルって、一夏の恋くらい儂く終わんのよね！ 精々今のうちだけ喜んでればいいんじゃない!?

べ、別に羨ましくて妬ましいから悪態吐いてるわけじゃないんだからね!?

『——やー、一時はどうなるかと思いましたが、なかなか盛り上がりましたねー』

誕生したカップル共のあまりのはしやぎように、思わず一年前に離別した平塚先生ばりの呪怨を周囲に振り撒いていると、不意にインカムから小町ちゃんの声が。

『——でもああいうのって長持ちしなさそうですよねー』

そしたらこっちからも黒い波動が！

まあ小町ちゃんの場合、平塚思考じゃなくて腹黒いろは思考の率直な感想なんだろうけども。率直な感想でコレだから酷い。

『——それね！ どうせ後々ノリに負けた自分を殺したくなんだから、ほんと早く別れればいいのに』

『——……うわあ、なんかお兄ちゃんと話してるみたい』

せつかく乗ってあげたのに、なんか全力で引かれました。解せん。

『——まあ香織先輩の残念さは今更なんでもいいとして』

どうも。可愛い後輩に軽く流されるくらい残念さに定評のある、わたくし家堀香織と申します☆残念じゃないやい！

『——確か今告って振られそうな人が最後の人手ですよ』

「——そうだね。この今にも振られそうな人が二十人目だから、これでラストだね」

『——ですよー。じゃあこの人が振られたら、またダンスタイム再開になるんで、照明の方お願いでーす』

「——かしこま☆」

『——あ、あはは……』

普通に会話してただけだけど、なんか酷いやりとりだった。いつから聞いてたかわかんないけど、藤沢ちゃん完全にドン引き笑いしてるし。

てか藤沢ちゃんさー、ちょっと彼氏居るからって、なんかその小馬鹿にした笑い方、ちよつと上から目線なんじゃないかしらー？ とつとと牧人くん（笑）と爆笑しちやいなYO！

「やー、残念でしたねー。ではでは次の方、どうぞー」

そして、もはや恒例になりつつある定型文を持ってして、ついに予定されていた二十人分の告白タイムが終了したのである。やっぱし振られちゃったのね。

——…って、あれ？

「——え？」『——え？』『——え？』

あれ？ いろは今なんつった？ 次の方どうぞ？ やば、あいつ勘違いしちやってない？

『——あ、いろは先輩マズくないですか……？ 今の人で終わりなのに、進行間違えちやってますよ……？』

『——ど、どうしよ、いろはちゃん今インカム着けてないから伝えられないよ……』

私と同じく、いろはの進行間違いに慌てふためく裏方二人。これはマズい。なにがマズいってまじマズい。

せっかく盛り上ってたイベントでさらなる参加者の紹介。これは、会場中がいやが上にもさらに盛り上がってしまう。

それなのにここでのこのミスは、大惨事とまではいかないまでも、会場のせっかくの熱に水を差してしまいかねないのだ。

「——見えるかわかんないけど、とりあえず私が上から合図送ってみるわ。最悪一回暗転させちゃうし」

となれば、一時でも早い火消しが必要である。照明係の私は、めっちゃ遠いし上階ではあるけれど、言うなればいろはから真正面に位置している。ぐるぐると手を回して巻きの合図を送ってやれば、あいつ気付いてくれるかしんない！

「……え？」

そう思った。そう思ったよ。次の瞬間、舞台の真ん中に立ついろはの姿を、こうしてまじまじと見るまでは、ね。

——呼び込まれたはずの参加者は、なかなか登場しようとしなない。ボルテージ最高潮の来客達は、次第にその喧騒を鎮め始め、どうした事かとMCに視線を集める。

すると、今や会場中の注目の的となった主演女優一色いろはは、両手でマイクをそつと握り締め、静かに……ただ静かに瞑目していた。

しん、と静まり返る会場。誰も彼もが、この異様な光景に、ただ息を飲む。

「……それでは、公開告白タイム、最後の参加者となります——」

言って、いろははゆっくりと瞳を開けてゆく。まるで、会場中が静けさを取り戻すのを待っていたかのように……、会場中の視線が、自身に集まるのを待っていたかのように……

——ああ、私、すっかり忘れてたよ。……私の友達は、一色いろはだったということ。

めんどくさいことやって、思い詰めて、しんどくなって、じたばたして。

そして、嫌になれたかな、嫌いになれたかな、清々しくお別れする準備は出来たのかな、だって？

アホか私は。どんだけあの傲慢で傲岸で豪胆で豪傑なクズ女と付き合ってきたんだよ。あの女が、あのいろはが、そんな生易しいタマなわけないだろうが。

そう気付けたから、気付くことが出来たから、私は手を回す事も暗転させることもせず、今からやらかしてしまう大切な友達を真っ直ぐに照らそう。春の日差しのような、暖かな優しい暖色のスポットライトで。

——真っ暗な会場にぽっかり浮かんだ舞台上で、ゆつくりと瞳を開けたいろは。その顔には、これからとんでもない事をやらかしてしまうとは到底思えない、そんな穏やかな微笑をたたえて。

そして彼女は、とても……とても優しい声音で、囁くようにこう紡ぐのだった——

「……最後の参加者、二年F組、一色いろはです」

続く

【最終回、後編】私の友達一色いろはは、やっぱり最高にあざとい件について

——たぶん、はじめからそういうことだったんだ。

あいつは……いろはは、ずっとこの時を待ってたんだ。

『そうやって、わざわざめんどくさいことやって、長い時間かけて、考えて、思い詰めて、しんどくなつて、じたばたして、嫌になって、嫌いになって……それでようやく諦めがつくってというか。それで清々したーって、お別れしたいじゃないですか』

もう嫌になって、嫌いになって、諦めがついて、精々しただなんてとんでもない。

一年前実質的に振られちゃったのに、それなのにこの一年間、奉仕部の皆さんとずっと一緒に過ごし、彼ら彼女らと楽しく過ごしながらもすっかりと会長としての責務を全うし、二期目の会長戦に出馬し見事再選し、そしてこうして二度目の在校生代表を勤めているいろは。すべてはこの日の為……この瞬間の為だったんだ。

一年前のプレプロム。あの日、ケータリング前でご歓談中の八色夫婦漫才をにやにや眺めながら、私思ったじゃん。もしかしたら、いろはは公開告白イベントで告白する気なんじゃないか、って。

付き合うつもりのない相手からの告白なんていう、気まずくて居心地悪くて目を逸らしたくなるような辛いイベントから、あの臆病な比企谷先輩が逃げ出してしまわないように、衆人環視のもと逃げ場も逃げ道も奪った状態を作り上げてから、思いの丈を伝える気なんじゃないか、って。

——私、なんで忘れてたかな。そんな大切なこと。

それはたぶん、比企谷先輩と雪ノ下先輩が付き合いはじめたって聞

かされたあの時、私が逃げてしまったからなんだろう。大切な友達
の胸の傷みから。

いろはがどれだけ比企谷先輩を想っていたかを痛いほど知って
いたからこそ、逆に目を逸らしちゃったんだ。いろはの胸の傷みから。
「……………ごめん、いろは」

本当に自分の口を突いて出て来た声なのか、もしくは頭の中だけで
響いた声なのか、自分自身でさえもわからないくらいの小さな呟き
を、ぽろり溢した私。

……………私は、友達だからこそ、目を逸らすべきじゃなかった。いろは
からもうこのお話はお仕舞い、という無言の圧力があつたからなんて
都合のいい解釈をして、比企谷先輩への想いをこれ以上追求するのは
よそう、なんて、逃げ出すべきじゃなかったんだ。

——だからさ、私、今度こそあなたの勇姿をしっかりとこの目に焼
き付けるよ？

この、絶対に報われることのない告白を持ってして、いろははよう
やく諦めがつくのだろう。ようやく清々しくお別れが出来るのだら
う。

大切な友達が、もの凄く大好きな人に痛々しく振られる姿を見るの
は、正直めっちゃ辛い。

でも、私、今度こそちゃんと見るから。たぶん私が見るのはこれで
最後になるであろう、私の友達があざとくない件についてっぷりを。
……………友達の清々しいお別れの姿を、しっかりとこの両眼に焼き付けて
やるから……………！

卒業生による卒業生の為の公開告白イベント。そんなイベントの
舞台に、現生徒会長であり、今や学園のアイドルともいえる一色いろ
はが立ってしまった事に、会場中は正に騒乱の渦の中。

でも、そんな中であつて、こうして堂々と微笑んでいられる、健気
で……………それでいて逞しいその姿が、彼女のその人への想いを、覚悟を、

逆に引き立たせた。

だから、誰も不平を漏らさない。誰も不満の言葉を投げ掛けない。彼女の想いを肌で感じているからこそ、皆、ただじつというはの言葉を待つ。

くるりと会場を見渡して、聴衆のそんな様子に満足げにうんうん頷いた彼女は、こほんと咳払いをひとつすると、ふふつと口許を弛めるのだった。

——そして、いろははゆつくりと口を開く。

ずっと聞かせたかった、でも、ずっと言えずにいた、源泉からこんこんと沸き出し続ける水のような、そんな溢れる想いを伝えるために……

× × ×

「……先輩？ 聞いてます？ 可愛い後輩が、今からあなたに告白しちゃいますよ？」

マイク越しなのに、たくさんの聴衆が居るのに、いろははまるで、たった一人にだけ語り聞かせるように……ここがたった二人きりの空間であるかのように……甘く優しく、そう声をかけた。

そして彼女は一拍置いてから、想い人がそれをちゃんと聞いたことを確信したのだろう、悪戯っぽくくすりと笑む。

「今、ほんとはわかってるくせに、ああ、一色にとっては先輩なんていくらでも居るし、これは俺のことじゃねーだろ、葉山辺りに決まってる、なんて、誤魔化そうとしたでしょ」

悪戯を楽しむかのようにふつと目を細め、艶めいた微笑をとある一点に向けたいろはは、でもね、と言葉を紡ぐ。今日ばかりは逃がしてあげませんかからね？ と、甘くてスパイシーな罨を張るように。

「はい、でも残念でした。今回ばかりは誤魔化させてあげませんよ？ わたしが言ってるのは葉山先輩じゃないですし、もちろん他の先輩でもありません。あなたですよ？ せんぱい？」

「……ッ」

薄暗い体育館の海の中、スポットライトにより孤島のように浮かび上がっているのは、いろはが立つステージの上だけ。

だからキャットウォークから館内を見下ろしている私の目には、正直比企谷先輩の姿は見つからない。

でも、確かに感じましたよ？ 比企谷先輩、小悪魔に逃げ道を塞がれて、ごくりと息を飲んだあなたの喉の音を。

「ふふ、ざまあないですね。どうですか先輩、このシチュエーションだと、お得意のくだらない屁理屈を捏ね上げるのも無理くないですか？ だって、告ってる最中、発言権があるのはわたしだけですもん。そんな事はないだの、それはお前の勘違いだだのと、このたくさんのオーディエンスの中、ヘタレな先輩に言えるわけないですよね？ なので、今日はつまらない邪魔も、いつもの全然聞いてないやつもさせてあげないです。このあとダンス誘いに行くんで、文句があるならそのとき言ってくださいね」

……やっぱり、か。いろはが告白にこの舞台を選んだのは、他でもない、告白する相手に邪魔されたい為なんだ。

それにいつもの全然聞いてないやつって、それってお断り芸の事だよね？

そっか……、これは口が滑ってるだけなの？ なんて思ってたりもしたけれど、前々から結構アピールしてたんじゃない。

先輩、わたしOKしてますよ……？ ……ねえ、早く気付いてよ、つて、笑顔の下で切ない胸を痛めて慟哭して、それでもほんのちよつとの期待を込めて。

でも全部スルーされてきて、実は内心もやもやしていたんだろう。だから彼女は言うのだ。今回こそは邪魔はさせない、と。今回こそは誤魔化させません、と。

つまりこの最後の夫婦漫才は、いろはのオンステージ。比企谷先輩の発言を許さない、いろはだけのソロステージなんだ。

「……先輩」

大好きな先輩の無駄な反論を封じ込め、満を持していざ想いを告げ

んとするいろは。

私も多くの聴衆も、次に彼女の口から放たれるのは一体どんな言葉なのかと固唾を飲んで見守っていたのだけれど、いろはが口にした言葉は、皆の期待とは異なる、とても意外なものだった。

「……今日という麗らかな春の日、無事この学校を巣立ってゆく大切な先輩に、わたしからこの言葉を贈らせていただきます。……先輩、ご卒業おめでとうございます」

……いろはは、比企谷先輩の旅立ちをお祝いしたのだ。

「先輩と出会ってからこの約一年半、本当にお世話になりました。先輩とのたくさんの思い出は、わたしにとって、とても大切な宝物です」

他の参加者同様、この在校生代表も当然のように愛を語るのかと思っていた矢先、突然の祝辞を述べはじめたいろはに会場中が困惑しているのを余所に、彼女の独白は続いてゆく。

普通、このシチュエーションで卒業祝いの言葉を並べるだろうか。

……これじゃ告白じゃなくて、まるで送辞ではないか。

「先輩、わたしとの出会いの日を覚えていますか？ あの日、先輩はどうだったかわかりませんが、わたしにとっては結構衝撃的な出会いだったんですよ？」

祝辞は次第に思い出話へと変化していき、彼女の顔にはうつすらと温かな微笑が浮かびはじめる。

「普通、初対面のわたしが可愛い仕草でお願いしたら、男子なんてみんないい顔で聞いてくれるものですよ？ それなのに先輩は、いい顔どころかちよー嫌々な顔しましたよね。なんですかあれ、可愛い女子に對して失礼過ぎですよ」

言って、彼女はそのセリフとは裏腹な穏やかな笑顔を見せた。当時の記憶を脳裏に呼び起こして、思わず頬と心が綻んでしまったのだろう。

「もうほんと、なんなのコイツ、超いけすかねー、って、初顔合わせから印象超最悪でしたよ。出来るだけこんなのは二度と関わりたくねー、って、ね」

言うほどに笑顔が華やいでいく。よっぽど可笑しくて仕方ないんだろうな。

「でも、結局それからも事あるごとに——クリスマスにマラソン大会、あ、フリペなんてのもありましたよね。それからバレンタイン、そしてプロム。……どれもこれも、先輩と関わる事になっちゃいました。まあ、なっちゃったものにも、わたしから頼ったんですけどね」

……。

「で、先輩のトコに向かう度に、あー、またアレと関わるのかー、あー、めんどくせー、って心の中ではぶつくさ文句言ってたんです。……けど、ほんと言うと、先輩のトコに行けば行くほど、回数重ねるごとに段々とスキップ気味になってっちゃってたんです。あー、めんどくせー♪って」

……胸が、痛くなる。

大切な思い出を振り返り、大切な思い出を語る度、いろはの笑顔が少しずつ崩れていつているのがわかるから。今ではもう、その笑顔が涙で歪みかけているから。

——ああ、そうなんだなあ。告白というよりはまるで送辞。……そう、これは送辞なんだ。生徒会長として卒業生を送り出したおぎなりの送辞じゃない。一色いろはとして、大好きな先輩だけに向けた送辞。

あんたは、こうして彼を温かく送り出すつもりなんでしょ？

そして、思い出を語りながら涙で送り出すという事は、それはつまり……サヨナラの挨拶。

この子は、まるで送辞みたいなこの告白で、清々しくお別れするつもりなんだ……

「めんどくさくて、目が腐ってて、ド腐れ外道で、でも実は意外と頼りになって、たまくにすっごい真剣な顔になって、なんだかんだ文句言っても結構わたしを大切にしてくれる先輩のこと、気が付いたら好きになっちゃってました」

出会ってから一年以上という長い月日をかけて、ようやく口に出せた「好き」の二文字。

でも、ずっとずっと口に出したかったはずの「好き」なのに、せっかくのその言葉を出すことが出来たいろはの顔には、もう笑顔は無かった。

少女の顔に浮かんでいるのは、苦しく苦い悲痛な叫び。

「あーあ……、でも、気持ちに気付いた時には、ちゃんとすぐに伝えるべきなんですね、こういうのって。今伝えても受け入れてもらえないうって解ってたから……、先輩達、ごちゃごちゃしてたから……。全部すつきりするまで待とうって思ってたら……。すつきりしてくれるんなら、それまでは先輩達の背中押そうって思ってたら……。いつの間にかいきなり付き合いたしちゃうんだもん。もう、告る隙さえ無くなっちゃってたんですもん。……ずっとこいですよ。ほんと、ずるずるです……。ま、背中押してるトキからわかってましたけどね、そのなるの……」

泣き笑いの悲しい吐露に、しんと静まり返る会場。皆の心を優しく包むメロウなナンバーだけが、今はただ虚しく響く。

いろはが突然公開告白イベントの参加者として登場した時には、まさかこんな風になるなんて、誰も想像出来ていなかったから。どうせあのいつも元気で明るくて男にモテモテの、恋愛に悩みなんてないであろう生徒会長のことだ。他の参加者同様、愉快で騒がしくて、絶対に失敗しないと計算ずくの上での告白をするんだろう、って、誰もが思っていた一色いろはの告白劇。

でも蓋を開けてみれば、重苦しい空気漂う切ない悲恋の物語。失敗しないどころか、はじめから叶うこととはないとわかっている物語。

……誰もが口をつぐまないわけがない。誰もが胸を痛めないわけがない。この痛々しいまでのリアルな女の子の姿が、普段の一色いろは像とあまりにもかけ離れすぎていて、逆にいろはの苦悩を引き立たせるのだ。

「……でも、わたしこう見えて、実は先輩が幸せになってくれた事、結構嬉しかったんですよ？ もちろんめっちゃムカついたしめっちゃ

ショックだったですけど、それでも……あのどうしようもない先輩がやつと幸せになれたんですもん。可愛い後輩としては、嬉しくないはずがないんです」

それでもいろはは下を向かず、しっかりと前を……比企谷先輩を見据えてこう宣うのだ。

声を震わせ、涙を浮かべ、顔を歪ませても尚、頑張つて笑顔を作つて、大好きな先輩の幸せを祝福するのだ。

「だから仕方ないんで、わたしこれから応援してあげますね……！先輩の幸せを……っ」

「……」

なんて強いのだろうか。なんて素敵なのだろうか。私の友達は。

誇りに思うよ。あんたの見事なまでの失恋を。

支持するよ。あんたが選んだこの選択を。

「……というわけで、改めまして、ご卒業、おめでとうございます」

言つて、彼女は悲しみに暮れた笑顔にほんの少しの悪戯心を添えて、なにかを思い出したかのようにわざとらしく「あ」と呟いた。

そして、ふふつと微笑を漏らしながらこの言葉を付け加えるのだった。

「あと、これはこの一年間、ちよつと悔しくて言えなかったんですけど……、ぼっち卒業、おめでとうございます☆」

ぺろつと舌を出し、言つてやったとドヤ顔をしている彼女の姿はとても逞しく――

「二年前立派にぼっちを卒業し、本日立派にこの学校を卒業してゆく大切な先輩を、わたし一色いろはは、在校生代表として……、先輩の唯一の可愛い後輩として……っ、……清々しく、送り出します」

大好きな先輩の幸せを想い、涙で笑顔を滲ませながらも頑張つて彼を送り出す彼女は、小柄な少女とは思えないくらい、とてもとても大きな姿だった。

この一年半――体感的には四年くらいの濃密な時間かな？ 本当

に色々あったけど、それまでは見たことないようなあなたの楽しそうな姿も苦しそうな姿もたくさん見てきて、そんで今のいろはがあるわけじゃん？

だから今私は心から思うよ。楽しい事だけじゃなくて辛い事もたくさんあったけど、あの日々があったからこそ今の一色いろはがある。だから残念ながら恋は実らなかったけど、あの日々は決してまちがいじゃなかったんだよね、って。

だからさ、あんたが比企谷先輩を清々しく送り出したように、私も清々しい気持ちいっぱい、あんたにお疲れさまであってあげてあげるね……！

——こうして、一人の少女のひとつの恋は終わりを告げたのだった。

——と、こんな感じで綺麗な悲恋で終わると思うじゃん？

でもね、こんな切ない恋のまま終わるほど、うちのいろはさんは出来た人物でもなければ大人でもなかったのです！

「……なーんて、言うとか思いましたかー？」

「!?!?!」

そんなセリフと共に、ガラリと変わるいろはの表情。突然の豹変ぶりに、ざわり騒つく会場中の観客達。かくいう私もめっちゃ動揺しております。

嘘泣きだったんだか演出だったんだか、瞳に浮かぶ水滴をブレザーの袖でぐいと拭いたいろはの表情には、すでに悪く笑い浮かんでいたのだ！

「わたし、そんな乙女ちつくで恋する少女みたいな無駄な時間を過ごすほど暇でも殊勝でもないんで、大人しく先輩なんて送り出してあげませんし、ましてや先輩の幸せなんて応援してあげませんよ?」

あ、あつれー? さっきまでのしおらしいいろははどこ行っちゃったのー? あんた、この告白を持ってして清々しくお別れする気なんじゃないかったの!?

「ぶっ」

……でもね、そんな動揺と同時に、私の心の奥底からは、えも言われぬ笑いが込み上げてきちゃったのさ!

だって、確かにこの結末がいろはが選んだ結末なら私もそれを支持するよ、なんて思っていたけれど、……でも、やっぱ、心のどこかで、こんなのいろはらしくないって思っちゃってたから……

そう。そうなのよ。やっぱり一色いろははこうでなくっちゃ!

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、いろはは、つい今しがたまで見せていたはずの悲痛さなんてぽいっと投げ捨てて、にんまり小悪魔笑顔で不敵に笑うのだった。

「送り出す? 応援する? ばつかみたい。なんですかその生産性皆無の無駄な行動。そんな無駄な時間ないっつの。女の子の貴重な時間は、いつだって有限なんです」

言つて、ヤツはステージの上から、文字通り見下すように比企谷先輩に向けぴしっと人差し指を伸ばした。

「そう、わたし、送り出してなんてあげないです。応援なんかしてあげないです。わたしがしたいのは聞き分けよく送り出す事なんかじゃなくて、むしろ全速力で追っ掛けてって、先輩のみつともない猫背に飛び蹴りをぶちかましてやることなんですから! 応援するんじやなくて、わたしが先輩を幸せにしてあげることなんですから!」

「あははっ! ……ひ、ひいっ、あいつってほんとバカ! お、おなか! おなか痛いよう!」

生徒会長のあまりの変貌っぷりに、会場には、もう先ほどまでの重苦しい空気なんて微塵も無くなってしまった。

変貌当初こそ意味がわからず目を白黒させていたオーディエンス

達も、事のなり行きのあまりの面白さに次第に沸きだし始めたのだ。もちろん私もこの大爆笑っぷりである。

すでにここには、あの一色いろはの悲痛な叫びに共感し、心から憂いていた卒業生達はもう居ない。そこかしこからぴーぴー口笛を鳴らす音、フウー！ ウエーイ！ と笑顔で囃し立てる者、我らがアイドルが全力でデレている姿にちいつ！ と舌打ちを鳴らす者共と、もはや会場はお祭り騒ぎ！

大きな瞳にたつぷり雫を溜めて、自身の悲恋を切々と訴えていた庇護欲たつぷりのいろはで民衆の心を打ち、一転、普段あまりお外では見せない本性全開小悪魔いろはで民衆の心をがっちり掴む。

おいおい、俺たち私たちのいろはたんをここまで苦しませておいて、他の女とイチヤコラしてるクソ野郎は一体どこのどいつやねん！ と、今や名も知らぬいろはの想い人は完全に会場中の敵である。

なにこのヒトラーも裸足で逃げ出す演説力！ 友達ながらこえーよ！ さすがにそれをカミングアウトしちゃうのはマズイと理解しているであろう、彼と彼女の名前を明かさないので、せめてもの武士の情けってね☆

そして、そんな名(迷)演説により一体と化した会場を視線で一舐めして満足げに頷くと、相変わらずの並みの胸をばーんと張る並みはす。

「もともと先輩にやらされた生徒会長なのに、なんで二期目まで真面目に務めたと思ってるんですか。それはもちろんこの日の為です。だめだめな先輩に、胸張って堂々と宣言する為です」

まったく！ お胸はそこまで無いってのに、今のあんたは超おつきく見えるぜ！

そしていろははその言葉通り、堂々と宣言するのだ。ベリーのよう

に甘くすっぱく、そつと囁くように……

「……先輩？ わたし、来年先輩の大学受けますね」

……え？ マ？

「わたし、勉強そんなに得意くないですけど、今、結構必死こいて勉強頑張ってるんですよ？ なぜかって、それはもちろん先輩の大学に行

く為に決まってるじゃないですかー？ ……だから送り出すどころか、今は追っかける為の布石をばら撒いてる真っ最中です。先輩を落とす為の下準備の真っ最中です」

うっそ、困るー、私そんなの聞いてないよー！ だから最近、あいつ成績上がってきたのか！

すると彼女は、小悪魔だった笑顔に性悪スパイスを追加で振り掛けて、とつても嫌々悪魔笑顔でにっこりいろはすスマイル！

「ねえ、先輩？ 高校の時から付き合ってるカップルの、一体何割がそのままゴールインまで到達すると思ってます？ はっきり言って、そんなもんほぼ皆無ですよほぼ」

……ひ、酷でえ。い、いや、そりや確かにそうんだけどさあ……それにしたって、それなりにカップルが居るであろう高校生が揃ってる会場でそれ言っちゃうのん？ せつかく盛り上がってた会場が若干引いてますよ！

あ、インカムの向こうから書記ちゃんの呻き声が。

つか大学追い掛ける宣言から、なぜに急に学生恋愛の悲哀事情に？ 「まあ？ それでも確かに？ ぶっちゃけ現時点でも想定外っちゃ想定外なんですけどねー。だって、まさか先輩と彼女がまだ続けているなんて、一年前には思ってたかったですもん。ほっとけばすぐ破局すると思ってたんで、正直ちよつと計算外です」

そしてこれまた酷でえ。

っべー上から様子を眺めてるだけの私にも、下から雪ノ下先輩の圧倒的な冷気ががが……！

「でも、なにせ人として拗れに拗れたひねくれたお二人ですし？ これからわたしが本気出せば、はつきり言って余裕でわたしが勝っちゃうと思うんですよねー」

やめてえ！ 寒い、寒いよう！

大丈夫？ 薄手のドレスしか纏ってない会場中のお嬢様方に毛布配給しようか？

「先輩、彼女がいる人を好きになっちゃいけない法律なんてないし、諦めなくていいのが女の子の特権なんですよ？ だからわたし諦めな

いです。だって、わたしこう見えて先輩のこと結構好きですもん。めんどくさくてクズくてどうしようもない先輩にドハマりしちゃってますもん」

いろはは、挑発的だった口調から一転、ふんわりとした雰囲気を纏って、とても……とても熱烈な愛を囁いた。そしてここで初めて自信の本音を吐露したのだ。この恋は諦めない、と。

なるほど、なぜに急に学生恋愛の離別率のお話になったのかと思ったら、大学追い掛けてって憎き恋敵からジャツカルしちゃうゾ☆宣言だったわけだ。いいぞもつとやれ！

「二年前、言いましたよね？ わたしこう見えて都合のいい女ですけど、諦めも悪い女なんですって」

うはつ、マジかいろは！ あんた、私が覗いてないところでそんなこと言ってたのかあ。

私は、そんないろはの言い分を聞いて、思わずぷつと吹き出してしまった。

だって、都合がいいのに諦めが悪いって、それ全然都合よくないじゃん！ 男にとつて扱いやすいから『都合がいい』なのに、その相反する諦めの悪さまでセットにして宣言しちゃうってのが、なんともいろはらしくって。

「てわけで、今は絶賛下準備中なんです。先輩が彼女と別れるのを待つんじゃないって、先輩にわたしを選ばせる為の！」

す、すごいいろはさん！ あんたの後ろに、どん！ って効果音が具現化してるよ！

と、そんなあまりの男前な一色いろはの勇姿に私を含め会場中が惚けていると、ここでいろはからとんでもない爆弾が投げつけられることになる。

「……なので雪乃先輩？ 今だけは先輩を貸しといてあげます。精々今のうちに楽しんでいてくださいねっ」

「……は？」

い、言ったああ！ 武士の情けで名前を明かさないと思ってた

のに、ここにきてまさかのカミングアウト！

うおお……！ 会場中がどよめいてやがるッ！ そりやそうだ。一色いろはの恋敵が、まさかあの雪ノ下雪乃だったなんて。そもそも知ってる人しか知らない事だから、あの雪ノ下雪乃に彼氏が居たという事実自体が、超文春砲レベルの大ニュースなわけだし！

「それに結衣先輩もです。この一年それなりに背中も押ししましたし様子も探ってみましたけど、この公開告白でわたしみたいに動かなかった時点で、もう負ける気とか全然ないんで」

こつちも言ったああ！ すっごい飛び火っぷりだよ由比ヶ浜先輩！

そして、あのトップカースト由比ヶ浜結衣の名が上がったことにより、さらに激しくどよめく体育館。一步VS千堂の後楽園ホールくらい揺れてるんじゃないかしら、この会場！ まっくのつうち。

さあ、この突然のトンデモ事態に、喧嘩を売られた本人達の反応やいかに！

「……ふふふ、さつきから黙って聞いていれば、本当にいい度胸ね。……一色さん？ よく知っているとは思うけれど、私、こう見えてなかなかの負けず嫌いな。たっぷりと泣かせてあげるから、覚悟しなさい」

はい、秒で買いましたー。

「あたしだってこういう事したかったけど、いろはちゃんと違って大人だから、……てい、TPP？ をわきまえたただけだし！ ……あたしだって、ゆきのんにも……いろはちゃんにも負けないから！」

そして由比ヶ浜先輩は、なぜか環太平洋パートナーシップ協定をわきまえちゃったってよ。世界経済相手にわきまえちゃうとか、やっぱ由比ヶ浜先輩は色々（意味深）スケールがデカイぜ！

——うっひゃく！ にしても、これってキラ☆やばく！

あの雪ノ下先輩の彼氏で、さらにあの由比ヶ浜先輩というはにも狙われてる男とか、それどこの色男だって話だよね！ これもう正体バレたら袋叩き待った無しですわ。……うわあ、いま比企谷先輩、死に

たいんだろぅなあ……。ざまあ♪

そして騒然としてる会場内で、そんな比企谷先輩を見て一人だけおなか抱えて大爆笑してる人が居んなあ、と思つたら、なんか葉山先輩だった。

あの人、相変わらずほんと性格悪いなあ（褒め言葉）

こうして、あまりにも強大な敵に、見事真正面から喧嘩を売り切つた我らがいろはさん。不敵に冷笑を浮かべる雪ノ下先輩（額には血管がぷっくり☆）と、ぷくつと膨れつ面の由比ヶ浜先輩を満足そうに上から眺めると、にっこり笑顔で今一度本命の彼と向き合うのだった。「ふふん、こっちはこっちで話が済みましたんで、あとは先輩が覚悟しとく番ですからね？ だから待つててください、わたしが先輩のトコに行くのを」

そして彼女は言う。片手を頭に添えてくねつと身体をくねらせて、あのお得意のポーズでマツ缶のような甘つたるい極上の落とし文句を。

「わたしをこんな風にした責任、いつか絶対とつてもらうんで、その時はよろしくです♡」

「……うわあ、あざとい」

その姿を見て、思わず口から本音が漏れ出てしまったけれども、たぶん会場中の気持ちが一いつになった瞬間だと思います。まる。

でもま、うん、確かにあざとツ！ とは思つたんだけど、なんかこう、それと同じくらい、胸がぼかぼかしてくるのも感じるんですよ。

そしてそれはどうやら私だけではないようで、一旦は衝撃の事実（ゆきのんとガハマさんの件について！）に困惑と憤りに心が揺れた人達も、いろはのめつちちゃん甘つたるいあざとさに全力で引いた人達も、いろはのあまりの格好よさに、今やこの会場には万雷の拍手と歓声が鳴り響いている。

「いいぞ会長〜！」「めつちちゃん格好いい〜！」「わたし超応援しちゃう〜！」「リア充クソ野郎死ねばいいのに」なんて温かい声（一部全然温

かくはない)が体育館いっぱいに反響し、そんな素敵な声援に包まれ、照れ臭そうに顔を綻ばせるいろはの姿を見る度に……、……私は――

「…………う、う” ええ」

……くっそ、なんだよ！ 目頭がちよっぴり熱くなっちゃったじゃねーか！ ええいこんちくしょうめ！ 歳取ると涙脆くなっていけねえや…………！

うう、もうほんと急にこういうのやめてよね！ 最近じゃいちごちゃんとかきちゃんやんのユニットライブ観ただけで大号泣しちゃうんだから！ ……べ、別に泣いてねーし。

……ふええ、よかった、よかったよう…………！ 最近あいつ、柄にもなく恋愛トークとかにちよつと大人しめだったから、大好きな先輩方の旅立ちの日にこんなにも生き生きしてる姿が見られて、ほんとよかったよう！

今は姿は見えないけれど、このいろはのアホな勇姿に、紗弥加も智子もエリエリも、あと有志として手伝いにきてくれた元一年C組の面々も、苦笑いを浮かべながらも目をじんわり滲ませてるんだろうなあ…………。ひひっ！

「と、ゆーわけで、プロム恒例公開告白イベントは、これにてお開きとなります」

なんて感慨に耽っていたら、突如いろはの口からなんともドライなセリフが。

マジすかいろはさん！ 見て見て!! みんな感無量って感じで盛り上がってる真っ最中でしょ!! ほらほら、あんたの格好よさにせつかく感動してたのに、突然の幕引きにみなさん唾然としちゃってますよ！

自分が言いたいこと言い切って満足したらハイそれまでですかさうですか。どんだけドライなんだよ。どんこ(乾燥しいたけ)だってもうちよつとしつとりしてんぞ！

「くくっ」

でもま、そんなトコがいろはらしいっちらしいんだよなあ。むしろあまりにもらしすぎて、まだ涙と鼻水でぐじゅぐじゅしてるつのに、つい笑いが漏れちゃうまでである。泣いてなんかねーし。

恋愛脳に見えて、実はクレバーでリアリストないろはさん。

みんな忘れてると思うけど、本日の主役はあくまでも現在観客に成り下がってるみなさんであり、現在主役の一色いろはは、本来は主役を送り出す側であり脇役でいなければならない立場。

いくら盛り上がっているとはいえ、自身の要件が済んだあとまで、あつかましくいつまでも主役の席を譲らないわけにはいかないのである。

……それに、こいつにはこの後、まだやりたいこと残ってるしね☆
「ではでは……、このイベントで恋が成就した人、想いが叶わなかった人、告白する人を見て勇気を貰えた人、プロムが終わったあと、自分も好きな人と過ごしてみようかなって思った人、色々な想いを胸に抱いた方がいらつしやると思いますが、どなたさまにも素敵な未来が訪れますようお祈り申し上げます、」

……って、あれ？ いろはの乾きつぷりに苦笑いしてすっかり忘れてたけど、今のいろはのフレーズには、なんだか覚えがあるような……

「これにて余興の時間を終了とさせていただきます、」

……え、あ、あれ？ ……あ、っべー！ これつてもしや……！

「みなさんお待ちかねっ！ ダンスタイム、第二部をはじめます！」

「「ウエエエエーイツ！」」

ツギヤー！ やっぱそうだったあ！ 今のフレーズ、第二部再開の合図だったよ！ ちょ、ちょっと待ってよいろはあ！ まだ心の準備ってやつがさあ！ っべー！ べべべべー！

——段取りガン無視のいろはの大暴走により、すっかりとお仕事を忘れていた私。

おいマジふぎげんな。進行ぐつちやぐちやにしといて、なんの前触れもなくいきなり仕事振つてくんじやないわよお！

っべー！　べべべべー！　あつれー？　次照明どうすんだっけ？

と、いろはのあまりのフリーダムっぷりにあわあわしていると、不意にインカムからザツとノイズが走った。

『ぐすつ、……香織先輩、いろはは、先輩がつ、めちやくちややつてくれた、せい、で、すっかり忘れて、ました、けど……、ズズツ、第二部の準備、だいじよぶ、でふか？　だいじよぶなら、次のいろは先輩のセリフのあと、一気にいっちやい、ますよ……？　つ、う、うう』
それは、突然仕事を振られて、私と同じように慌ててお仕事の確認をしてきた小町ちゃんの声だった。てか小町ちゃん、めつちや泣いてんじやん。

あはは、普段は姑息でクズいお義姉ちゃん候補のとっても立派な姿に、つついっい涙腺弛んじやつたんだねえ。んもう、この子つてばほんと可愛い♡

ふふつ、あんがとね小町ちゃん！　お姉さんもちよつと慌てちやつてたけど、私よりぐつちやぐちやになつてそうな小町ちゃんの可愛らしい声聞いたら、途端に頭がクリアになったよ♪

だからそんな小町ちゃんを落ち着かせてあげる為にも、小町ちゃんも違つてちよつぱり目頭が熱くなつてしまっただけの私は、あくまでも冷静に、あくまでも沈着に、クールでスマートな素敵なお姉さんっぷりを存分に発揮して、大丈夫だよって、優しくこう声をかけてあげるのです。

「ずびびつ、が、がじごま、あ」

てへっ！　これは酷い☆（白目）

× × ×

「それじゃ小町ちゃん行くよー！　3つ」

「かしこまちです！　2つ」

『1つ、せーのっ！』「それでは、ミュージック、スターテイ

ン！」

いろはの余興終了の号令にぴたり合わせるように小町ちゃんも掛け声を合わせ、告白会場だったこの体育館は再びダンスホールへと変貌する。

スポットライトから放たれるレーザービームのような光がミラーボールの反射でキラキラと降り注ぐと、光の元に集まるダンサー達の笑顔もキラキラ輝く。

そしてそんな光の奔流と同時に流れ始めたこの曲。ここまで洋楽のスタンダードナンバーばかりを選曲していたプロムのダンスタイムには、正直不向きと思えるこの邦楽。

きつと、ここに集まっているのが私達総武高校二年生以上の生徒でなければ、運営がなぜここでこの曲をセレクトしたのか、意図が理解出来なかったことだろう。

しかし、曲のイントロが流れ始めた途端の卒業生達の弾けるような笑顔が、ここでこの曲を選んだのがまちがいでないかと教えてくれる。

ていうか、正直私も、本当の意味では今初めて理解出来たのかもしれない。運営が……、んーん？　なぜ運営の責任者であり、この企画のプロデューサーさんであるいろはPが、なぜここでこの曲を——去年の文化祭、今や伝説として語り継がれている雪ノ下先輩達のバンドで、メインヒロイン二人が歌い上げたあの曲の原曲をセレクトしたのかを。

そんな、若干踊り狂いづらいつらいと思える曲をバックに、みんなが思い思いに下手ついで愉快的なダンスを披露しはじめた頃、すでにMCとしての役目を終え、人知れず舞台袖へと下がる手順であるはずのいろはが、不意にステージの上からふわっと羽ばたくことになる。

亜麻色の髪とチェックのミニスカートをふわり靡かせて、彼女はとても楽しそうに舞台からダンスホールへと舞い降りたのだ。

「やっぱり、ね」

今や主役がいろはから卒業生に移った中、もう誰も注意を向けていないはずの彼女の次なる行動をしつかり目撃していた私。んふふ、あなたの行動なんて香織ちゃんにはお見通しだよ♪

だから私は、彼女に向けてとびつきりのサービスをしてあげましょう。今の私だけに許された、極上のおもてなしを。

「ほれ、ぽちつとな☆」

その瞬間、彼女の姿が闇夜にぽっかり浮かび上がる。

なんのことはない。先ほど消したばかりの余興用のスポットライトを、いろはに向けてばびゅんと発射してやったのだ！

思いがけない突然の照射に、一瞬びつくりした私の友達。

でもすぐに私の意図したことに気付いたのだから彼女は、咎めるようないろは……、それでいて、ありがとね、と謝意を示すかのような眼差しを一瞬だけこちらに向けると、ヤツはすぐにまた正面へと視線を戻した。

薄暗い会場を縦横無尽に駆け回る原色のスポットライト。その中にあり、ひとつだけ輝く一筋の白い光は、まるでファッションショーの会場でモデルだけを浮かび上がらせるかのような効力を存分に発揮し、今や主役の座を明け渡したはずの一色いろはは、またもや会場中の視線を一身に集める主役の座へと返り咲いた。否、責任者のくせに無茶苦茶やって私達を振り回してくれたお返しに、いろは被害者の会名誉役員たる私が無茶苦茶やって、あいつを主役に返り咲かせてやったのである。あんた、まだ主役を放り出すのは早いっしょ？　つてね。ふひっ！

私の悪巧みによりふたたび集まってしまった視線に一瞬苦笑を浮かべたいろはだけれど、そこはさすがのいろはさん。すぐさま自信たっぷりの微笑を浮かべ、真っ直ぐ前へと歩き出す。

スポットライトに照らされる、生徒会長の風を切るようなウォーキングの邪魔にならないよう、愉しげに踊っていた群衆が我も我もと進路を空けてゆき、たった一人分だけひらけたその道はまるでランウェイのよう。見慣れた制服姿であるはずなのに、自信満々にその道を突

き進んでいく彼女の姿は、まるで華やかなドレスに身を纏い、光輝くランウェイを闊歩するトップモデルのような装いで。

やがて、その歩みは終演の刻を迎える事となる。彼女が目的の地へと辿り着いたのだから。

ランウェイの終わりの地。そこにあるのは、いろはが求めてやまない安住の温もり。拗れて捻くれて腐っているけれど、それでも、恋する乙女にとっては何よりも大切な温もり。

いろはは、その大切な温もりに向けてすつと手を伸ばす。まるでヒロインをダンスに誘う素敵な王子様のように。

『あとでダンス誘いに行くんで、文句があるならその時まで待っててください』

なぜダンスタイムには不向きと思われるこの曲をいろはが選んだのか。

——いろはは、きつと初めからここで比企谷先輩をダンスに誘うつもりだったんだ。卒業生みんなの前でライバル達に挑戦状を叩きつけ、衆人環視のなか愛しの人が決して逃げられないよう外堀を埋めて、この曲が大音量で流れる中ヒロイン二人を押し退けて自分が比企谷先輩と踊るということは——

「あはは、これ完全に挑発じゃん」

比企谷先輩に対しても、メインヒロイン二人に対しても、ね。

ぷつ、やっぱいろはは凄いわ。この一年間、こっちは失意に暮れる友達を無駄に心配してたつてのに、当のあんたはこの日この時この瞬間のために、わざわざめんどくさいことやって、長い時間かけて、考えて、思い詰めて、しんどくなつて、じたばたして……、それでも嫌にもならず嫌いにもならず、諦めることもやめて、こうして清々しく果たし状をばしんと叩きつけちゃったんだもん。我が友達ながら、ほーんと無茶苦茶なヤツだよ。

……たぶん、涙ながらに先輩を送り出そうとしている姿も、勇ましく戦いを挑む姿も、どっちもいろはのホントなんだと思う。

比企谷先輩と雪ノ下先輩が付き合い始めてからのこの一年、色々悩んだ末に出したのが、やっぱりまだ諦めない！ って答えなんだね。いろは、今度こそほんとお疲れ！ その調子で、これからも一色いろはらしく、思うがまま自由に恋を楽しめよう！ あんたがそのつもりでいるんなら、私、どこまでも覗い……けぷけぷ、見守るから！

——あの曲が響き渡り、スポットライトに照らされたミラーボールの光が爛々と降り注ぐ中、本日を持ってご卒業した三年生方の羨望と嫉妬の視線を目一杯受けて、頭痛を抑えるかのようにこめかみに手を当てる雪ノ下先輩と、たははくと苦笑いを浮かべる由比ヶ浜先輩の真ん前で、逃げ道を完全に塞がれがんにがらめに縛られて、男前な少女から伸ばされた手に、嫌々そうに……ほんつとに嫌々そうにそつと手を添えるツンデレヒロインさながらの比企谷先輩のしかめっ面をにんまり見つめるいろはの小悪魔めいた笑顔を見て、私家堀香織はこう思うのです。

——最近友達の一色いろはがあざとくない件についてだって？ いやいやとんでもない！

やはり、私の友達一色いろはは、最高にあざとい件についてっ！

了

キャスト

主演 一色いろは

ヒロイン 比企谷八幡

女子生徒A 家堀香織

作画 家堀香織

企画 家堀香織
制作 家堀香織
監督 家堀香織

なーんて素敵なエンドロールを脳内で流しつつ、現在私は軽くエピソードしながら、夕陽が射し込む茜色の体育館でせかせか後片付けをしています。

ひーこら言いながらあつちを駆け回りこつちを駆け回り、ここがつい先程までド派手なダンスホールだったのがまるで夢であったかのような、乱雑に散らかったケータリング類やら装飾やらをせかせか片付ける辛い日々。

それもそのはず、プロムが終了したと同時に、我らが代表者いろはPが雪ノ下先輩方に連れ去られてしまったのだ！ 大将首が落とされた今、残された残党達は統率もなくただ闇雲に戦後処理をするのみである。大将、早く帰ってこないかしらん……（涙目）

それにしても、アレ今日中に解放されるのかしら……？ なんか首根っこ掴まれて、凄い勢いで奉仕部に連れ込まれてったけど。おーこわ。

そんなこんなで、今や体育館上部の窓から降り注ぐ光が紅から群青へと変わり始める中、それでもいつ終わるともわからない作業をぶつくさ文句を言いつつ真面目にこなしながらも、私はついさっきまでの喧騒を思い出しては、思わずにへつと口元を弛ませてしまう。

馬車馬のようにこき使われながらニヤニヤしちゃうとか、これももう完全に社会という名の上級国民にすっかりと調教された立派な社畜さんですわ。

『……お前な、ほんと勘弁してくれ……、俺を殺す気なの？ まだ墓の準備できてないんだけど……』

『先輩がいけないんじゃないですか。今まで何度もそういう空気出し

てたのに、気付かないフリして流し続けてきたからこういう目に合うんですよ？ ……ハッ、今もしかして文句言うフリして口説いてましたか墓の用意が出来たら同じ墓に入ろうとか言っていましたか正直なかなか悪くない提案ですけど今はそんな未来の話より今をイチヤイチャ過ごしたいんでそういうったお話は数十年後に言っして下さいごめんなさい』

『…………えええ』

上からじゃ声なんて全然聞こえなかったけど、今ごろそんなくたらない漫才を繰り広げてるんだろうな、って容易に想像出来た、手と手を取り合った二人のシャルウィーダンス。あの嫌そうな顔と愉しそうな顔を眺めながらにまにまにしました時の事を思い出す度、私はまるで口に練乳でも流し込まれたかのような甘ったるさに胸焼けをおこして、胸の中でこんな悪態を吐いちゃうのだ。

——まったく、諦めて送り出すつもりなんだと思ってたなら、なんなのよあれ。諦めるどころかヤル気満々じゃんよ！ あーあ、なんか余計な心配して損しちゃったよ。とつとと爆発しちゃえば？

ってね！

あいつの行動力と実行力はマジパない。あの様子じゃ、あいつまちががなく比企谷先輩の大学に受かっちゃうだろうし、あの宣言通りこれからガンガン攻めまくるのだろう。そしたらこれからも否応なしに、一色いろはがあざとくない件が続いていくじゃない☆そしたらさ？ 私も覚悟決めなきゃなんないじゃん？

そんな事を思う度、私の可憐でぶるつやな口元はどうしたって弛んじやうのさ。困惑と苦笑が入り雑じる、とつても変な感情だけどさつ！

そして私家堀香織は、周りに変な目で見られないよう真面目に労働してるフリをしながら、ほんのりと口角を吊り上がらせてこんな独り言をぼしより呟くのだった。

「おいおいマジかよ、比企谷先輩の大学とか超ハードル高いじゃんか。……ふええ、じゃあ私も明日から勉強めっちゃ頑張んなきゃ……ッ」

そう。私の友達一色いろはがそのつもりならば、私のお仕事だってまだまだ終わらないのです！ ならば、私もついて行くしかあるまいよ♪

お仕事という名の悪癖に命を掛けるわたくし家堀香織は、受験戦争突入を来月に控えた今日、こうして進学先を決めたのでした！

私の覗き活動ノゾカツつ、大学生編始まります！ フフツヒ（嘘）普通は全力で悩むこと必至の人生の分かれ道なはずなのに、こんなにスムーズに、こんなにはつちし進路を決められるなんて、キャハ☆私ってラッキー♪

………ラッキーなのか………？

やはり、私の青春はちよつぴり残念である♡

〈 f i n 〉

著者 家堀香織

「あざとくないスピノフ」こうして友達の一色いろ
は後日談はあたしが語る 前編

カーテンの隙間から零れてくる淡い光の線に瞼まぶたを焼かれ、気怠い微睡みのなか、ゆつくりと目を醒ます。嗅ぎ慣れない匂い。触り慣れない感触。そして見慣れない景色。

それらの事象が、次第に覚醒してゆく頭に現在のいま自分の状況を教えにくれた。いや、思い出させてくれた、と言った方が正しいのか。なかなか激しかった、昨夜の行為を。

「……あー、ヤツたあとそのまま寝ちったかー」

耳朶に届いた、口を衝いて出てきた色気もクソもないその台詞は、なんとも気怠そうな響きだった。寝起きだからなのか。それとも普段からこんなものなのか。

「……あ、やっぱ」

しかし、そんな呑気に構えていられるのもほんの一瞬の話。

そのまま寝てしまった。つまりは予定外ってこと。予定外の行動を起こしてしまったということは、その行動に見合うだけの見返りがあるということなわけで。

あたしは、嗅ぎ慣れず触り慣れてもいないシーツを荒々しく剥ぐと、隣で寝ていた裸の男など気にも留めず、見慣れない景色の中から、床に脱ぎ散らかされた見慣れた制服と下着の中に見慣れたスクールバッグを見つけ出した。

すぐさま慌ててスマホを取り出してみると……

「……うっわ、マジやば」

そこには、母親からの着信履歴と通知履歴が鬼のように残っていた。どしよ、怖くて開けないんですけど。こりや今夜は正座でお説教、来月は小遣い抜きコースだわ。

「……はあ、しゃーないか。あとで智子辺りに話合わせてもらうかー」

他にも話を合わせてくれそうな友達は何人が居るけれど、ソツチ方面の話での口裏合わせに向いているのは、残念ながら智子くらいなものである。他の子は、遊んでそうに見えるのは実は真面目で潔癖だったり、一応彼氏みたいな存在が居たことはあるものの実はソツチ方面は二次元にしか耐性がないむつつり残念オタクだったり、実はもなにも見たまんまポンコツだったり、この手の話を持ち掛けたら、しよっぱい顔をする奴、平気な顔を装いつつ赤面して吃りどもそうな奴、パニック起こして失言繰り返したりしそうな奴と、当てにならないような雰囲気一枚拳にいとまがない。

智子も友樹んち泊まるときの口裏合わせに使うのはあたくしくらいのものであるから、こういう時は持ちつ持たれつというやつだろう。

そうと決まれば話は早い。早速智子と母親に事情説明の連絡を。もちろん送る内容はまるつきり違うけど。

「……おお、起きたんか」

「……」

「あれ？ 無視？」

「……うっさい。いま忙しいから黙っててくんない？」

「……へーい」

シーツを剥ぎ取られた拍子に目が覚めたらしい隣の男は、そう言いながらじやれついてこようとすする。

「邪魔って言ったよね。なに揉んでんの？ マジでウザいから。誰のせいで朝から慌ててっと思ってるわけ？ イラツとすんだけど」

いちやいちやムーヴとかの欠片が一片いっぺんもないガチギレムーヴでその吐き捨ててやると、こいつは「おーこわ」とか言ってへらへらしながら、自分も気怠そうにスマホを弄りはじめた。こういうバカはこっそりハメ撮りとかしそうだから、普段は行為の前後にスマホなんて触らせないようにしてるんだけど。

しかし今は緊急事態でもあるし、ちよつとくらい弄るのはしょうがない。送信終わったら即没収で。

「……ま、こんなもんかな」

友と親、二人に対する同じ事態に対する違う説明を送り終えたあた

しは、期待半分諦め半分の嘆息を吐き出すと、ベッドの上にスマホをぽいと放る。無断外泊な以上、正座でのお説教は免れないだろうけど、智子の口添えが上手いこと作用して、せめて晩ご飯抜きと小遣い抜きくらいは免れることを期待しておこう。無断は無断でも、男の部屋からの朝帰りよりは幾分マシ、なはず。

「……さて、と。……ねえ和也、シャワー借りるから」

不幸中の幸いか、目覚めが早めで良かった。現在時刻を考えたら、シャワー浴びてからでも学校には間に合うはずだから。これで遅刻だ欠席だになるものなら、目も当てられないとこだったわ、マジで。

「……おー。あ、一緒に入る？」

「……冗談」

「へいへい」

厭らしくへらへらするこいつに冷え切った視線だけを置いて、気怠く髪を掻き上げながら、迷いなく浴室へと向かうあたし。勝手知ったる……わけでもないけど、お風呂の場所程度なら知っているくらいには、この部屋に来たことがあるから。

使い慣れないシャワーヘッドでも、噴き出てくるお湯の温度と心地よさは変わらない。よく女連れ込んでんだから、気を利かせてヘッドはミラブルくらいには替えとけよ、とは思うけど。

それでも、あまり気分良く目覚められた訳では無い今朝の心と、あいつに舐め回されたベタベタに汚れた身体を洗い流してくれるシャワーから噴き出す有り難いお湯に、ようやく一息つけたとホッと身を任す。

あいつ——和也とは、一年半くらい前、高校一年の時の冬に、友達の付き合いで行った合コンで知り合った。大学生と高校生。遊べる女子高生好きな男と背伸びしたがる女が相手を見繕う為の席ついでう、よくあるやつだ。

もちろん友達とはいっても、いつもの気の置けなくてとても大切な残念メンバーではない。あの子ら、チャラついた大学生との合コンとか秒で拒否するし。

あたしを合コンに誘ってくるのは、あいつらではなく、もつと軽薄で、もつとぺらっぺらな関係性の友達。

で、そこで男側の幹事をしてるのが和也。和也は、一見すると頼りになる爽やかイケメン。合コンを巧く回し、緊張する女子高生達に優しく気を遣う、見るからに女慣れしていそうな男だった。

当然、参加してた子達はターゲットを和也に向けてたっばい。ま、この男からしたら、ターゲットにされてることをほくそ笑みながら、好みの女を品定めしてたわけだ。

でも和也が選んだのは、残念ながらその子達ではなくあたしだった。それだけの話。

ぶっちゃけて言ってしまうと、合コン開始からずっと爽やか笑顔で馬鹿な女子高生を丸め込んでいたこいつの本性なんて、最初っから見抜いてた。でもあたしは、ま、いつか、と誘いに乗ってあげた。ちようどフリーだったし、なんとなく人肌は恋しいけど恋愛したいって気分でもなかったし、顔はいいから抱かれても嫌悪対象にはならなそうだったから、っていう薄い理由で。

和也にしても、そんなあたしの感情を感じ取った上での誘いだっただろう。要はお互いに後腐れなく遊べる相手——って感じだろうか。つまり、あたしと和也の関係は、セフレって形が一番近いのだからと思う。

とはいえ、和也の狙い通りとはゆかず、セフレってほど頻繁に遊んでいるわけでもない。会ったの、一年半で二桁にも満たないし。

ちなみにあたしはビッチってわけではない。ビッチの定義なんて人それぞれ過ぎて、誰かさんから見たら立派なビッチに見られるのかもしらんけど。

ただ彼氏以外と肉体関係持ったのはこれが初めてだし、そもそもその彼氏という存在自体、今まで二人だけだし。

セフレって聞くと、なんかバカで都合のいい女が男に利用されてるってイメージされるかもしれないけど、あたしと和也の場合は完全に逆である。頻繁に誘ってくる和也からの連絡をほぼガン無視し、たまに無性に人肌が恋しくなった時だけこの関係を利用させても

らつてゐるだけ、セフレと呼ぶにしてもさらに薄っぺら過ぎる関係だ。

この日も、放課後に無性に人肌が恋しくなってしまう出来事と遭遇し、そんな時ちようど都合よくこいつからお誘いのLINEが入ったから、ま、いつか、って和也のマンションに寄つたのだ。

気分が満たされたらすぐ帰るつもりだったのに、寝落ちしてしまつた、まだ保護対象である高校生でしかないあたしを起こしもせず、そのまま部屋に泊てめしまつたこいつのせいで、朝からこんなに慌てる羽目になつてしまつた。それが、現在起きてる事の顛末つてわけ。

ふう、と息を漏らしシャワーを止める。乾かすほどの時間は無さそうだから、髪を洗えなかつたことは悔やまれる。とはいえそこそこの爽快感は得られたし、まあ良しとしようか。

浴室から出て、水気を取つたバスタオルで包んだ身体は、程良く温まつてほんのりとピンク色に染まつている。元々のスタイルの良さに加えた艶やかさに、我ながら惚れ惚れしてしまいそうまである。自画自賛おつ。

「……あー。途中でコンビニ寄つて下着とか買わなきゃかー」

しかし、バスタオル一枚で脱衣所を後にしたあたしは、ベッドの脇に脱ぎ散らかされた服達を発見し、自画自賛真つ最中から現実に引き戻された。

「パンツとかブラくらいならあつけど、使う？」

「……使わないから」

誰のだよ。そんな出処不明な下着、使うわけないでしょ。

「そ？　じゃあ靴下はー？　それは俺ので良ければだけど」

「……いらない。うざい。もう時間ないから黙つてて」

「……へーい」

相手にするのも面倒なので、その場でとつと着替えを済ますことに。湿つたバスタオルをそこら辺に放り投げて、気持ち悪けど少しの間昨日の下着を身に着けておくことにした。コンビニ寄るまでの我慢である。

そのまま制服も身に着け、スクールバッグから化粧ポーチを取り出

すと、もう一度脱衣所へと足を向けた。時間はあまり無いけれど、最低限の身嗜み^{みだしな}程度はしとかなきゃね。これでも一応お年頃のJKっすから。

時間と戦いながら鏡の中の自分を少しづつ綺麗に整えつつ、朝目が覚めてからずつと胸に燻っているモヤモヤと一緒に、こんな思いを人知れず吐き出すのだった。

「……そろそろ、かなあ」

なにがそろそろなのかは言うまでもない。この関係性が、だ。

こんな歪んだ人間関係なんて、いつまでも現状維持のままではいられないはずもなく。そもそもこんな関係が一年以上続いているのが、ちよつと異常なのかもしれない。

人間関係とは、どんな綺麗なカタチの物であれどんなに歪んだカタチの物であれ、速度の違いはあれど、変化というものを余儀なくされるものである。

もちろんあたしとこいつの異常な関係だって、最初の頃と現在とではそれなりに変化しているし、その終焉がもう間近に迫ってきているのも、最近では肌で感じている。

その『終焉』が、関係性の崩壊なのか、それとも別の形への構築になるのかは、まだちよつと分からないけれど。

そんな変化のカタチを如実に表しているのが、今まさにこの時。着替えを終えてメイクも終えて、足早にこの部屋を出てゆこうとしているあたしに掛けられた、和也とのこんなやり取りの中に潜んでいる。

「……じゃ」

「……あ、ちよつと待って。一言も無しで行っちゃうとか、いくらなんでもさすがにドライ過ぎでしょ」

「じゃ、って言ったけど」

「それ一言じゃなくて一文字じゃん。あ、活字に起こすと二文字か」

そう言う和也は、困ったような苦笑を浮かべていた。

「……時間ギリなら、学校まで送るけど?」

「勘弁してよ。あなたの自己主張強めの車なんかで送られるとこ知り合いに見られたら、恥ずかしくて次の日から学校行けなくなるって

の

ホント、なんで自意識過剰な男つてのは、これ見よがしに外車とか乗りたいがるんだか。しかもオープン。ホント勘弁してほしい。

「はは、ひでーな」

「そういうわけだから。じゃあね」

「お、一文字から三文字にランクアップした」

「……しょーもな」

そしてあたしは玄関を開ける。いつまでも構ってあげられないのよ。暇な大学生と違ってね。

ようやく下らないやり取りから解放されて、玄関を潜ろうとした時だ。和也は、いつになく真剣な声色で、あたしにこう言葉を投げ掛けてくるのだ。

「……あの、さ。……次、いつ会えっかな」

「……さあ。またそういう気分になったときじゃない？」

「……あはは、だよな」

そう言った和也は、また困ったような顔して笑ってた。

——そんな和也の顔を見て、なんとも言えない陰鬱な感情を胸に抱きつつ、でもそれを心の奥の見えないところに一旦押し込めて、あたし笠屋紗弥加^{かさやさやか}は、見慣れた世界に戻るため、見慣れない風景の街の中に足を踏み出すのだった。

× × ×

「おはよー」

「お、紗弥加だ、おっすー」

「紗弥加おはー」

「紗弥加ちゃんおはよお」

いつもの教室に入り、グループの中心人物一色いろはの席がある、グループの溜まり場所である窓際後方へ向かっていると、慣れない世界からようやく慣れ親しんだ世界に帰ってきたって感じ。朝のSH

Rが始まるまでの、クラスメイト達が作り出す弛緩した喧騒の中、教室入ってこいつらと挨拶を交わすと、なんだか無性にホツとする。

なんか正気を疑う理由で身の丈に合わない大学を目指し始めた、最近勉強するときは眼鏡かけて参考書と向き合っている、中学からの親友の香織。

同じく中学からの付き合いで、性悪腹黒のわりには一途な恋愛を続けている智子。

高二になってから一旦クラスは別れたものの、何の因果か三年でまた同じクラスになってしまったこいつらと、下らない会話交わして馬鹿みたいに笑い合っていると、憂鬱だった気分が不思議と和らいでいく。

あ。あと忘れてたけど襟沢もね。こいつだけ三年に進級してもクラスは別のままなのに、空き時間の度にあたしらんとこに来ててうざい。たまに居るよね、うざいけど憎めないやつ。むしろ一周回って可愛いのかと錯覚しちゃうタイプなのかもしれない。

とにかく、こいつらと居ると、なんかお婆ちゃんやんと縁側でお茶でも飲んでるみたいに落ち着くんだよなあ。こんな気持ちになれる友達との出会いなんて、人生の中で早々あるものじゃない。他のどんな関係性が変化して無くなっていったとしても、こいつらとの頭の悪い腐れ縁という関係だけは、出来ればずっと大切にしていきたい、なんて、些か恥ずかしい事を思うあたしだった。

もつとも、今はちよつとだけ落ち着かなかったりする。この中で一人だけ呆れたように目を細め、意味ありげにこちらに視線を投げつけてきてるやつがいるから。言わずもがな、朝一で口裏合わせをお願いしたあいつである。

今はピュア軍団が居るから追求はまたあとにしといてね、と、軽く手を合わせて視線だけで訴えかけると、智子もはいはいと視線だけで返してきた。さすがは長い付き合いの親友だけはある。

「あれ？　そういえばいろはは？」

と、慣れ親しんだ安心感と、悪友からの痛い視線を受けた居心地悪さにすっかり忘れてたけど、どうやらこの場には、この大事な関係性

の中にあつて、これまた大事な一ピースが欠けていたことに今更ながら気付く。ホツとし過ぎるのも考えものだ。

一色いろは。総武高の生徒会長であつたり、あたし達のグループの中心だったり、濃すぎる前三年生が巣立っていった今、校内一の有名人だつたりする。

そんないろはは、二ヶ月前に行われた、今や伝説として語り継がれているあのやらかしプロムを経て、すっかり受験勉強の虫と化していた。それはそうだろう。大観衆の前で身の丈に合わない進学先の大発表会をしてしまったのだから。

相変わらず生徒会活動には真面目に派手に取り組んではいるものの、空いた時間を見つけては香織と共に智子からのご教授を受けている。

授業の合間の休み時間や昼休み。もちろん朝のHR前のこの一時間だつて、彼女にとっては毎日の貴重な勉強ルーティンの一環である。

まあ、昨日は放課後にたっぷり勉強を楽しんだはずだし、その遊び疲れの余韻で、今朝くらいは休息中だつたりするのだろうか。

「いろはちゃんならもう来てるよお？」

なんて思っていたところ、襟沢からそんな情報が齎もたらされた。じゃあ生徒会室とか奉仕部部室辺りで、小町と昨日の話で盛り上がったりにてるのかねえ、とか思い直したのだけれど、どうやらそれも違うようだ。智子が、にやりとこんなことを教えてくれたから。

「いろは、いま呼び出し食らつてんの。噂のイケメンくんから」

「あーマジか。そっかー。いつくつかなどは思ってたけど、やっぱ来たかー」

噂のイケメンくん。たったこれだけの情報量で全てを理解してしまふほどには、今やあたし達のあいだでは、この話題はごくごくありふれた話題なのである。

——やらかしプロムで文字通りやらかしたいろは。あの雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に宣戦布告してまでの、彼氏と想い人の堂々略奪宣言。あの日以降、目に見えているのはモチなくなつた。いや、正確に

は男子から言い寄られることが極端に減った、といえる。

それはそうだろう。なにせあの超有名人達との大立ち回りを演じる覚悟と決意を大勢の観衆オーディエンスの前で宣言する程の愛なのだ。

それが噂として校内を駆け巡ったあとに、一体どんな勇者がいろはを口説ける勇気が持てるというのか。

故に、今までいろはに密かに想いを寄せていたであろう男子諸君は、これをもつて完全に沈黙したのである。その代わりにあたし達グループメンバーへの告白は増えてしまった気がする。まったくもつて迷惑な話だ。

……しかし、それはあくまでもプロム時点の在校生に限られる。

プロム後に入学してきた若駒達は、そんな事件は知らない。部活等の繋がりで上級生からそんな事件のあらましを聞いていたのだとしても、あの雪ノ下先輩を知らないのだから、一色いろはという校内一の有名人であり憧れの先輩である彼女は、新入生男子にとっては『彼女持ちの男に片想いはしてるけど、今現在は誰も手を出さない超有名人でフリーの女の子』という存在。

中坊上がりのまだまだ可愛い少年達とはいえども、中学時代からモテ男として名を馳せてきたであろう自意識過剰で血気盛んな男子——つまり恐れを知らないイケメンくん達が放っておく手はない存在なのだ。

そんな高嶺で憧れの花となったいろは。元々の在校生からの告白は無くなったのだが、勘違い新入生からの勘違い告白は、すでに何度か数えられている。

そしてここにきてのこのお話。件の噂くだんのイケメンくんというのは、新年度が始まり新入生が入学してきてから、どうやら校内でもわりと話題になっていた男子である。

爽やかに整った笑顔。入学からまだ二ヶ月だというのに、早くも次期サッカー部エースと目される程の運動神経。なんか一部では葉山先輩以来の逸材なんじゃない？　なんて噂もちらほら上がっているらしい。

偶然ながらチラツと見た限りでは、さすがに葉山先輩と比べるのは

可哀想かな、とは思ったけれど、まあ女子達がきやーきやー騒ぐのも分らないでもない。あの爽やかそうなイケメンぶり、未来の和也の有望選手って感じ。

そんな噂のイケメンくん、仲間内ではいろは先輩LOVEを公言しているとのこと。仲間内の話題が校内に広がっている時点で、彼の中では最初から仲間内だけの話題などではなく、いろはに意識させようと自ら意識的に触れ回ってる節ふしさえある。自分の話題が三年生の耳にも届くであろうか思っているあたり、かなりの自信家のようだ。過度の自惚れともいえる。

だから早晩動きがあるのだろうと思っただけの、この話である。

イケメン好きでステータス好きのいろはなら、あの話題のイケメンが相手なら、そろそろ靡なびいちゃってもしようがないかもね、なんて、一年半くらい前なら思っただろう。

でも、今はもう結果は知れている。だからこそ、あたしが登校してからいろはの不在を指摘するまで、メンバー内で特に話題にも上がってなかったのだろう。話題にするまでもない、日常茶飯事の瑣末事さまつごとだから。

香織なんてあたしと挨拶交わしたあとは、いろはの話題など目もくれず、また眼鏡かけ直して頭抱えて、「ウツキー！」とか奇声発して参考書との格闘始めてるし。ホントお前どれだけ必死なの。

じゃあまあそういうことならいろはの帰還もそう遅くはならないだろうなと思っただけどころ……

「ただいまー。あ、紗弥加も来てたんだ、おはよー」

案の定、うちの姫がさくつと帰ってきた。普通の高校生なら一大イベントであるはずの告白という一大イベントなのに、まるで何もなかったかのよう。

「おはよ、いろは」

だからあたしもまるで何事も無かったように、いつもと変わらぬ態度と声で、そう返すのだ。

——こうして、今日も心休まる慣れ親しんだ毎日がスタートする。

× × ×

「で、で、どおだったのお!？」

いろはの態度から、てつきり流すものかと思われていた——説明するのにも面倒だから流せと無言の圧力を掛けられていた——件の恋バナ。

しかし如何せん、うちのグループには、空気が読めない——いやさ空気という物の存在すら知らないんじゃないかと思わせる程のアホの子が居るのだ。

期待に満ち満ちたきらきらな表情で、席に座ったいろはに真っ先に食い付いた。

当然あたしと智子は顔を見合わせ苦笑い。香織は相変わらず強敵との格闘中である。あんたホントブレないね。

そんな空気を知らないアホの子へ向けて、いろははとびつきりの笑顔を向けた。

「あれ? えりちゃんなんでクラス違うのにまた居るの? まだ居るの?」

「ひどいっ!? 私達親友だよね!？」

「え? そうだったんだ。なんかわたしとえりちゃん、親友って概念に対する認識に大きな隔たりがあるみたい」

「ひどいっ!? ね、ねえねえ、香織ちゃんからもなんか言っちゃってやってよおー!」

「え? あ、うん。そだね。聞いてなかったけど」

「聞いてないのになんで同意したの!？」

「ところでゆんゆん、今いいとこだからちよつと静かにしててくんない? 親友(笑)なら分かってくれるよね。ねっ、親友(笑)」

「聞いているじゃん! それ、超聞いているよ!?! ゆんゆん、ってなに!?! あとなんで親友の後に(笑)付けるのかな!?! そろそろ私泣くからね!?!」

——ああ、やっぱいなあ。

あまりにもいつも通り。あまりにも慣れ親しんだこいつらのしよーもないこのやり取りに、どうしようもなく安心を感じてしまふ。

最上級生ながらに相変わらずマスケットキャラが定着してしまっているアホをからかって、にやにやと楽しんでるいろはと香織。

そんな二人に散々遊ばれて、「うえくん」と立ち上がって自分のクラスにでも走り去っていくのかと思いきや、結局その場に留まりむくれる襟沢。

このありふれ過ぎた日常の風景を見て、不覚にもまにまに口元が弛んでしまっているあたしは、どうやら自分が思っていた以上に心が肌荒れを起こしていたらしい。

「……ねえねえ、紗弥加」

と、そんな時だった。楽しんでるあつちの三人には聞こえないよう、気付かれないよう、そっと智子があたしの耳元に囁いてきたのは。

「……ん？」

なんて疑問形を口に出してはみたものの、まあ、これはあれだろう。あつちはあつちで盛り上がってるから、こつちはこつちであの件をこつそり話さない？ ということ。

「……とりあえず結論から言っとく。今日は放課後友くんとスイパラ行く予定なんだけど、仕方ないからそつち早く切り上げて、夜は紗弥加んち行ってあげっから。んで、そんとき紗弥加のお母さんに上手いこと言ったげる」

「マジ？ あんがと。助かる」

「いいって。友くんち泊まる時はいつもお世話になってるし、ま、こんなくらいはね」

「そか。さんきゅ」

「ん」

これで伝えたいことはお仕舞い、とばかりに、とてもとても短い返事で会話を締めた智子。でもその表情からは、伝えたいことの終了なんていう空気は全く感じられず……

彼女は、なんとも複雑で、なんとも微妙そうな表情をしていた。な

にかを言いたい。なにかを伝えたい。でも、そこに踏み込んでしまうのに躊躇している。そんな複雑な感情。

正直、智子がなにを言いたいのかも、なにを躊躇しているのかも解ってる。それを言いたい優しさも。それを躊躇う優しさも。

だから――

「ねえ智子」

「……………ん？」

「なんか言いたいことあんでしょ。言いたいこと分かってるし、なに言われても別にやじやないし、いいから言ってみ？」

「……………んー」

あたしからのお誘いに、智子は躊躇いながらも、ようやく重い口を開く決心をしてくれたらしい。

「……………あのね、……………いつまで今の関係続けんのかな、って」

「……………和也との？」

「……………ん」

「……………あはは、だよね」

和也とのあまり綺麗ではない関係を初めて智子に話したのは、関係が始まってから三回目の夜だった。

今日の朝帰り程ではないけど、かなり帰宅が遅くなってしまい、親に叱られる面倒を考えて、親が信頼しているあたしの友人関係の中で、唯一ソツチ方面に理解がありそうだった智子に口裏合わせをお願いしたのが始まりだ。

打ち明けたとき、最初はさすがに呆れてたけど、生理的嫌悪とかは示さず、正論言って説得してくるとかもなく、友樹との口裏合わせをよくあたしに頼んでた手前もあり、深く追求はせずお願いを聞いてくれたのだ。

でも分かっていた。本当は智子がなにも感じてないわけ無いって。だってこいつはこう見えて、中学時代からずっと一途な恋愛を続ける、腹黒に見せ掛けた腹白なのだから。

長い付き合いの友達が、知らない大学生と爛れた関係を持ってい

る。そんなの、気持ちがいい事なわけがない。もしあたしがいろはや香織にそんなの告白されたら、思いつきり引く自信ある。やめといたほうがいいって、って、思い付く限りの正論並べて説得してしまう自信だってある。

「どうでもいい友達だったらただのネタとか笑い話で済む、セフレだとか不倫だとか。パパ活だとか。」

しかしそれが一度大切な友達ひとたびの話ともなると、途端に汚い話に感じてしまう。

エゴでしかないけど、少なくともあたしは、大切な友達からは爛れた性事情を匂わせて欲しくはないのだ。

でもそれはつまり、あたしはそれを智子に共有することを強いてしまっていたってことを意味するのだ。自分がされたら嫌なのに、友達の智子にしてしまっていた。その事実が見えなくなるくらい、智子の気持ちに甘えてしまっていた。

なんだか、途端に申し訳なくなってきた。と同時に、途端に自分が汚い物に感じてしまった。今まで智子に、汚い物を見る目で見られてたのかな、って。

そんな思考が頭を掠めてしまって、己の不甲斐なさに歪みそうになっちゃった顔に、笑顔——苦笑を貼り付けて空笑いすらくらいしか出来ないでいた。

「あ、勘違いしないでね」

そんな情けない感情が態度に出てしまっていたのだろう。智子はあたしに誤解を与えないよう、汚い物を見る目などではなく、まるで身内にも向けるかのような、とても暖かい目であたしを見ていた。「別にね、セフレが悪いって言ってるわけじゃないんだ。別にいいじゃんセフレ。ビバセフレ。自分が満足してて自分が楽しめてるんなら」

「……ええ、そう？」

自分がしていることなのに、自分が築いた関係性なのに、親友で悪友の智子に『別にいいんじゃない？』と肯定されて、逆に『そうか？』と眉を潜めて訝しんでしまった。

「そうそう。そこに愛はあるんか？　とか、超余計なお世話ってカ
ンジ。あるじゃん、愛。相手に対してじゃなくなつてよくない？　肉
欲？　って言うんだっけそういうの。その欲に対して忠実な自己
愛って言う愛が、さ」

「いや肉欲で」

おかしい。わりと真剣でセンチティブな話をしてたと思つてたの
に、悪友のドヤ顔な悪い笑みに、いつの間にか当の本人が苦笑いして
しまう可笑しい状況というね。

「だから今までは紗弥加のしたいようにすればいいんじゃない？　とか
思つて放つておいたんだけどさ。ま、もちろん呆れてはいたけど」
「やっぱ呆れてたんじゃん」

「そりやねー」

そう言つて、智子はけたけたと笑つた。

しかし彼女は、あたしに向けていた視線をふつと外すと、まだあつ
ちで楽しんでいる三人に向け、ふんわりと微笑む。

そして、「でも、さ」と、こんな台詞へと紡ぐのだ。

「……さつき、あいつらのほんつとにしようもないやり取り見てる紗
弥加の顔見ちゃつたらさく。なんか、違うのかな、って」

「か、顔？　……違うってなにが？」

「そ。だつてさ、普段の紗弥加だつたらあの程度のコント見ても、あんな顔しないじゃない？　あんな安心しきつたにまにま面」

「……う」

……それは確かに自覚ある。なんか今日は我ながらキモいくらい、
にまにましちやつてんなあ、とか思つてた。

自覚はあつたけど、その締まりの無い顔を智子に見られてたのかと
思うと、ちよつとハズい。

でも、それと智子の言う『違う』とは、なにが繋がるのだろうか。そ
う首をひねつたあたしに、こんな、まるで目からウロコが落ちるかの
ようなアンサーが叩きつけられるのだ。

「……見慣れた下らないコント見てあんなに安心しちゃうってことは
さ、………それつてつまり、昨夜は一息つける余裕がないくらいつ

まんなかったってことじゃん。それはもう現在の紗弥加の状況は、紗弥加自身が満足して楽しめてるってのとは、違くない？」

「……ああ、そういう」

「そそ。……私はさ、紗弥加が満足してるんなら放っておこうかと思つてたけど、でもそうじゃないんなら、やっぱり友達として一言くらいは言つとこうと思つたわけ」

「……そっか」

うん、そうだ、と彼女は笑う。そしてもう一度、あたしの目をしっかりと見て言う。

「付き合ひの長い親友としてはさ、やっぱり紗弥加には楽しんでてもらいたいわけなのですよ。友達がつまんなそうにしていると、私もつままないじゃん？ だから今日は一言物申したつてわけ。じゃないと、私がつままないから」と。

……そっか。『大切な友達の乱れた性事情は知りたくない』は、あくまでもあたしのエゴ。

でも智子のエゴは、あたしなんかよりよっぽど大人みたいに達観してて、あたしよりもずっと子供の我儘じみている『満足してるなら好きにすればいいけど、友達がつまないと自分もつままないからやだ』なんだ。

彼女は、彼女のエゴを忠実に貫いていただけ、ということ。

もちろん自分がされたら嫌なことを、知らず知らず智子に強いてしまつていたというモヤモヤが消えるわけではないけれど、でも、少なくとも智子に汚い物を見ている目を向けられていたわけじゃなかったんだなあ、とか、あたしが楽しんでないと朋子もつままないんだなあ、なんてくすぐつたさが、モヤツていた気分をめっちゃ軽くしてくれた。

「てなわけで、私は今の状況のままだとつまりません。よって改善を要求します」

「い、いきなりだなく。改善……かあ」

「そ。ま、私はさ、紗弥加がなんでそんな爛れた関係になつてるとか、

なんでそこまでして人肌求めちゃってるのかとか、そこらへんの理由教えてもらってるし、多少は理解もしてるつもり。だからいきなり関係終わらせちゃいなよとか、いつそちゃんと付き合ってみちゃえば？

とかは言えないんだけど——」

「待って？ ……ええ、付き合おう……？」

「ん？ なんか変なこと言った？ だって金持ってるしデザイナーズマンションとか住んでるらしいしいい車乗ってるらしいイケメンだしで、女遊びが過ぎるってところ以外は超優良物件じゃん。意外とちゃんと付き合ってみたら悪くないかもしくない？ 私としては紗弥加が楽しきやなんでもいいわけだし、試しにちゃんと付き合ってみて、紗弥加が楽しめれば万々歳ですよ。だって、都合のいい人肌捨てちゃうのも勿体ないでしょ？」

「その発想はなかった」

「逆に、それこそ今この瞬間に連絡入れてバイバイしちゃうのもアリだしね。で、今度は素敵なガチ彼みつげんの」

「……あはは、それが出来ないからこんななっただけど」

「それなく！ ま、なんにせよ——」

と、そのとき、校内に予鈴の音色が響き渡った。これが鳴ってしまえば、朝のSHRまでの時間は残りわずか。この話し合いの終了の合図である。

「お、もう時間かく。じゃ、この件はこれでお仕舞いつてことで」

「いやいや、言い掛けのままとか気になんじゃん。なんにせよ、なに？」

「あ、気になっちゃうカンジ？ じゃあこれだけ言つとこうかな」

そう勿体ぶるように、彼女は嗜虐的に笑んだ。

「なんにせよ、紗弥加超モテんだから、その気になれば選り取り見取りつしよ。だから気楽に気長に構えて、満足して楽しめる素敵な彼氏作んなよ！ つてこと。ま、友くんみたいな最高の彼にはなかなか巡り会えないんだけど」

「なんだよ最終的には惚気けたかっただけかよ、ウツザ」

それにげんなりと応えたあたしの顔からは、朝のモヤモヤもつい

さっきのモヤモヤも、なんだかどこかに吹っ飛んでいた。なんかもう人肌恋しさ埋めてくれる和也セツレなんか要らないから、今後は智子に温めてもらいたいレベル。

「ほらほら絵里く、HR始まる前に早く帰らないと、よりクラスで浮いちやうぞく」

「ヒツ……！……いやいや待って？ 私べつに浮いてないし！」

別クラのくせに未だこの場にどしんと居座り、いろは達との談笑を続けていた襟沢の背中をばしんと叩いて軽くイジリながら、教室の廊下側前方にある自分の席に戻ってゆく智子のショートボブが、とても楽しげにさらさら揺れていた。

まだごめんもありがどうも言えてないけれど、それはまた次の機会まで取っておくでしょう。智子の言うところの、自分自身がちゃんと満足出来て、ちゃんと楽しくなれたその時に。

おっとやばい。すっかりと気持ちが悪くなって、そんな感慨に耽っていたら、廊下の向こうからドカドカとガサツな足音が聞こえてきた。そろそろ担任の厚木が到着するのだろう。

あたしもとつと窓際前方にある自分の席に戻らなければと、行動を始めようとした時だった。不意に、とても愉しげなハミングが耳に届いた。

「〜♪」

ふとそちらに視線を寄越してみると、そこにはご機嫌な鼻歌と共に、楽しそうにふわふわ揺れる亜麻色の髪。

よほど昨日の勉強会が楽しかったのだろう。

正直、ついさっきまでのあたしなら、この艶々な亜麻色の綿あめのダンスには、ノーコメントで席に戻っていたと思う。でも今は智子のお陰で多少の余裕が出てきたから。だから今なら、この後この子が見せてくるであろう目が眩むほどの笑顔にも、きつと耐えられる、はず。

「お、いろはご機嫌じゃん」

だから、席に戻るための歩を進めたままに、彼女の肩をぽんと叩いて笑い掛けたのだ。

「よっほど昨日の勉強会楽しかったんだく」

と、ね。

すると一色いろはは言いました。あたしの予想通り、いや、それをも超えた輝く笑顔で、この一言を。

「んー？ まあ、ね。普通よりのまあまあかなー」
と。

そんなドライな台詞とは裏腹に、ほんのりとした朱色を可憐な頬に添えて。

うわ、前言撤回。耐えられなかった。

あぶない。眩しすぎて、危うく目を逸しかけてしまった。

そんないろはに、にっこりと笑顔だけで返事をして、急いで席へと戻るあたし。軽くなりかけていた胸のモヤモヤが、ほんの少しだけ鎌首をもたげてしまった。

そう。あたしは昨日の放課後、学外で偶然いろはと遭遇したのだ。

その遭遇は、あまりにも眩しくて、あまりにも胸を締め付けられて。

あまりにもくらくらし過ぎて、ニケ月ぶりに和也という都合のいい人肌をつい求めてしまうような、そんな遭遇だったのだ。

——そしてあたしは、横柄に扉を開けてどすどすと登壇し、煩わしく五月蠅い声でHRを開始した厚木の、ビジネス臭くてわざとらしい広島弁を聞き流しつつ、頬杖について窓の外の景色をぼんやり眺めながら、昨日の放課後の記憶へと思い馳せるのだった。

続く

「あざとくないスピノフ」こうして友達の一色いろは後日談はあたしが語る 中編

『ねえ今日放課後どするー？ あたし新しいサンダルとか見に行こうかと思っただけど』

『ごめくん、私今日友くとデートなんだよね〜』

『お前らいつもデートしてんね。香織は？』

『うう……、行きたいのは山々だけどさ、今夜のは個人的にリアタイ視聴マストなんだよお……。それまでに現国、今日のノルマ分までは達成しとかなないと心置きなく観れないじゃん……？ 今日はこちらとむりぽく……』

『そ、そか。なんか色々大変そうよね、オタクって』

『オタクじゃねーし！』

『はいはい。いろはは？』

『ごめん、わたしも無理ー。今日サイゼで勉強の予定あるから、それまでに速攻で生徒会の仕事片付けなきゃ』

『りよ。じゃ、今日は仕方ないか。たまには一人でウインドウショッピングと洒落込みますかね』

『待って!? ねえ、私は!? 私には聞かないの!? 紗弥加ちゃん私今日放課後超空いてるよ!』

『あーごめん。さすがにあたし一人だと襟沢の相手はまだ荷が重いわ。遊ぶのはツツコミ要員間に合ってる日にしようか』

『ひどい!? まだ、って、私たち友達になってからもう一年半くらい経つよね!』

本日の学業を終えたあとの教室の放課後で。

そんなやり取りを交わしたあたし達グループは、予定が合わずバラバラに過ごすことが決定した。

智子はこのところ、かなりの頻度で友樹と会っているようだ。受

験戦争突入を間近に控えた今、少しでも最後の晩餐を楽しもうと、心ゆくまで足掻いているのだろう。

対して、香織というははずでに戦争状態である。いろはに関して、なんならあのやらかしプロム以前には……いや、それどころか二年に進級した頃から徐々に突入してたっけ。

そんなこともあり、ここ最近では全員が集まって遊ぶ機会もめっきり減ってきてしまった。

三年だし仕方ないかと思う一方、三年だからこそ最後の一年を目一杯楽しみたいのになあ、と、一抹の寂しさを覚えたりもしてしまう。

ま、襟沢に関しては、ちよつと可哀想だったから今度は誘ってやるか、とか思ってる。

キヤラ的なものとテンション的なものもあって、あたし一人だとうしてもツツコミきれないんだよね、あいつ。

でも襟沢なりに最後の年を目一杯楽しみたいんだろうし、次の機会には多少の妥協はしてやろう。

そんな決意を秘めながら、あたしは放課後のこの時間、一人で街に繰り出していた。

みんなに宣言した通り、夏に向けて新作のサンダルを見たり新作の服を合わせたり新作の小物を眺めたりと、千葉駅周辺のお店をぐるぐると冷やかして回っていた。

あたしは、休み時間に連れ立ってトイレに行ったりするわけでもなく、ハブられるのが怖くていつ何時なんどきでも逐一スマホチェックを欠かさないわけでもないこの性格的に、元来一人で行動することを特に苦くはしていない。一人だとナンパされる確率が高いのがウザい、という部分以外は。

だからこういうたまのソロ活動は、我ながら気も楽しそれなりにわくわくしたりもするようだ。

そうしてそれなりの満喫感のなか街を練り歩き、気が付けば空の色が藍から橙へと、その様相を変化させはじめたことに気付く。

電車混むのも面倒だし、そろそろ帰路につくことにしようかと、駅前のロータリーへ足を踏み出した時だった。そこで、ちよつと意外な

人物との思いがけない遭遇を果たしたのは。

あたしは、その遭遇にふと口元を弛めてしまう。この感情って、なんていうのだろうか。悪戯心？ 嗜虐心？

そんな、名前の分からない感情を抱えたままのその足で、あたしはその珍客に向かつてすたすた歩いてゆく。そしてにやりと口角を上げながら、こう声をかけるのだ。

「ちーす、卒業式ぶり〜。なにげ一対一絡みとか初じゃない？ 比企谷パイセ〜ン」

「……うわぁ」

そう。あたしからの、爽やかにして庇護欲を否応なしに擦る可愛い後輩の挨拶に対して、心外にも心底嫌つそうに顔を歪めたこの男。

三ヶ月弱前に我が校を巣立っていった噂の先輩、比企谷八幡である。

× × ×

比企谷先輩とは、二年に上がって暫くしてから、いろはとか香織繋がりで、たまに顔を合わせるようになった。

他人との距離を取りたがる先輩、基本的に冷めた性格のあたし。もちろん馬が合うはずもなく、初顔合わせの時に挨拶を交わしたあとは、いろはなり香織なりが話している横で、智子と話してたり一人でポチポチとスマホを弄ったりしている程度だった。

しかしそれが何度か続いていけば、さすがに多少の会話程度には繋がってゆくわけで。そしてある程度のやり取りを繰り返していれば、おのずと情も沸いてゆくわけで。

で、今ではあたしは意外なことに、この先輩がなかなか好きだったりする。当然恋愛的なLOVEな感情は皆無。人としてのLIKEである。

もちろん最初は『なんでこの程度の男にあのいろはが夢中になってるんだか』とか『こんなのと一緒に居たらいろはの価値落ちちゃうん

じやないの?』なんて、月並みなこと考えてた時期もあった。

でも会話を重ねてやり取りも増えていけば、その人の人となりも判ってくるというもの。他人には興味ないけど、身内には過保護なくらい甘かったり、他の男では女に対して絶対に吐かないような失礼極まりない発言を平気で吐いたり、同じ年上の男でも、あたしがよく知っている、とても軽薄で、他人に自分を良く見せようと、ルックスとか車とかいい部屋で自分をゴテゴテと飾り立てる、とある大学生とはまるで違う、自分を一切飾らない妙な面白さがある人なんだと気付いたりしている内に、いつの間にかかなり好感を抱いていた。

結果、なぜいろはや香織がこの人に懐いているのかも理解しているし、あたしもこの人と話すことを楽しむようになっていて、今では敬意を込めてパイセンと呼ぶほどの仲になっている。うん、完全に馬鹿にしてんな。まあ、それだけ親近感を抱いてるってことで。

「引きこもるのが何より好きなパイセンにしては、外で発見できるなんて珍しいですね〜」

駅前で偶然遭遇し、あたしを発見するなり失礼にもウザそうな顔を向けてきた比企谷先輩へとお返しとばかりにニヤニヤとウザ絡みするあたし。こういうところがウザがられてるんですね。知っててやってんすけど。

「……新種発見かよ。……あー、面倒くさいのに遭遇しちゃったなあ」
「いやいや、それ本人前にはつきり言う?　ほんとパイセンは人間が出来てないよね」

「出会い頭に引きこもり扱いしてきた失礼な女子高生に言われたくないセリフ第一位だわ」

「……ブツ!　確かに!　あははは!」

人目も憚らず、思わず腹を抱えて爆笑してしまうあたし。なんなら先輩の肩をバシバシ叩きながら。

男相手だどうしても斜に構えてしまいがちな自分も、男相手にこんな風に素で笑えるんだなど、自分で感心してしまうほど。基本冷めた性格だ、とか、よく言えたものである。

「で、パイセンが外に居るとか、どういう心境の変化?　……あ」

目尻に浮かんだ涙を指で拭いながら、そこでとあることを閃いて、にんまりと口元を歪めてしまった。

「そっか、雪ノ下先輩とデートとか？ いや、もしくは暫く見ないあいだに大学デビューしちゃうったとか？」

もちろん後者のはただの悪戯心からくるからかいである。この人に限ってデビューしちゃうとは思えないし。

なにせ、相変わらずの適当な髪型と没個性な服装という今の格好がそれを物語っているから。

この明らかにデビューしてない格好で、あの雪ノ下先輩と街をデートできちゃうとか、ホント凄いや精神力の持ち主だなあ、なんて内心感心している——

「どっちでもないから」

と、意外な返答である。きよどきよどと照れた顔して、仕方なく雪ノ下先輩とのデートを白状するのかと思っていたから、ちよつと肩透かし状態のあたし。

「あ、そなんだ。明らかに待ち合わせしてますって感じで構えてたからってつきり」

「……お前んとこのボスに呼び出されてんだよ。勉強教えろってな。誰のせいで受験勉強の時間が取れないと思ってるんですかと脅されると、なんも言えなくなる」

「あー」

なるほど、そういうことね。

そういえばいろはは、さつき『サイズで勉強の予定がある』とか確かに言ってた。

自分次第でどうとでもなる勉強に、予定もなにもないだろ、とか思ってたけど、勉強は勉強でも、先輩との勉強会ってことだったのか。それならそれで、今さら照れとかしてないで、はつきりそう言えば良かったのに、とか思いかけてはみたものの、それはつきり言っちゃったら余計なノゾキ魔も付いてきちゃうからしょうがないね、と自己完結。

リアタイ視聴マスト？ だっけ。とにかく、うちの兄貴みたいなよ

くわかんないことを兄貴みたいな早口で言ってたけど、ノゾキに命賭けてるあいつからしたら、血の涙流してでもノゾキに来そうだし。

「……にしても、パイセンもお人好しっていうか物好きっていうか生粋おんなたらの女誑おんなたらしというか、まあ色々大変だよね」

親友として、あのノゾキ魔の将来はちよつと心配だけでも、今はそのノゾキ魔に代わって、この遭遇を楽しませてもらうとしよう。

手始めに、あたしは前々からずつと感じていたことを、本人にぶつけてみる事にした。

「おい、最後のは違うだろ。なんなの？ デイスリたいだけなの？」

「そんなことなくない？ 可愛い可愛い後輩に優しいのはご立派だけど、でも振った女に優しくしたまま側に置いてとくとか、キープ目的だよ、とか、期待だけ持たせられて可哀想、とか、振った方から距離取るのが優しさでしょ、とか思われてもおかしくないしょ？ 周りにそう思われてもいいの？」

とは言ってみたものの、その実あたしはそうは思っていない。

もちろん他の男に取られるのが勿体ないって理由でキープしとく、とか、単純に身体目的でキープしとく、とか、下衆い考えで『振った女に優しくしとく』ってクズ男の考えだったら最低だとは思う。

でもこの人の場合は絶対違うって理解してるから、じゃあどうして未だにこんなにいるのは面倒見てるんだろ、つて単純に疑問だったのだ。

するとこの人は言う。悪役よろしくキモイドヤ顔で、なんの悪怯れもなく、なんの躊躇いもなく。

「そんなどこの誰が作ったのかわからんクソみたいな一般論知らん。そんなの、それこそ人によるもんだろ。俺から距離を取るのが優しさとか、それどんな上から目線の傲慢だよっていう話過ぎてすげえ気持ち悪い。そもそも側に置いてるんじゃないやなくて絡まれてるだけだし。一色がそうして欲しいなら解るが、葉山の時のこと考えると、一色つてそういうタイプじゃないだろ。少なくとも一色がそれを望んでない以上、俺の方から気を遣わなきゃ！ とか自意識過剰なことはいしたくない。一色が愛想尽かしてちゃんとした相手見つけるまでは、あい

つの好きなようにさせとくことくらいしか出来ないわ。俺みたいなのを好つ——き、気に入ってるのなんて、一色みたいなしっかり者の現実主義者からしたら麻疹はしかに罹った程度のもんだろうし、どうせ今に飽きるだろ」

と。

本当に……本当にバカだ。

バカ過ぎて惚れ惚れするほどにバカ。

要は、それこそ身内に対する過保護さつてことだ。自分に対する対面なんて気にもせず、身内を信用して、ただただ身内の好きなようにさせてあげたい。ただそれだけのことだったのだ。身内が望むのなら、自分はどう思われても構わないという、この人の身内に対する甘さの表れ。

裏を返せば、それは自分に対する甘さでもある。大切な身内を可愛がりたいという、自分の欲求を満たすための、自分に対する甘さ。

つまりは、そう欲求してしまうくらいには、この人にとっては、いろははもう身内と認識されているのだ。

「あはははは！ 受動態すぎ！ マジでパイセンってパイセンだよね〜！ そんなドヤ顔で偉そうなこと言ってるわりに、いざいろはに彼氏とか出来たら超凹みそう。なのに顔に出ないように頑張つて口元とかふるふるさせて、夜になったら悔し涙で枕濡らしそう！」

「そ、そんなわけねえだりよ」

「ぶふウツ！ そういうとこっすよ」

「……チツ、どういうとこだ」

そりゃ、ね。いろはみたいな現実主義者の皮を被つた下手物ゲテモノ好きが、自ら進んで沼にハマリに行っちゃうとこすよ。それ言うともまた屁理屈こねて誤魔化そうと必死になりそうだから言わんけど。

「あと、好きっていうのも恥ずかしくて言えなくて、キョドリながら、気に入ってる、とか言い直しちゃう辺りも超キモくて超パイセンって感じ。いい意味で」

「質問無視した上に、さらにデイスリ被してくるのやめてくれない？」

「あはははは！ ヤッバ！ ほんとパイセンって面白いね！」

無然とする先輩放置で、あたしはひとり爆笑の渦の中へと引きずり込まれてゆく。

これはもう面白くて堪らない。違う形とはいえ、大好きな人にかけてまで愛されているいろはに、ちよつと妬げちゃうくらい笑えるよね。惜しいなあ。この愛が、違う形じゃなくて、ちゃんと恋愛方面の形だったらもつと面白いのに。

でもま、ここまで愛されてるのなら、もしかしたらボタンの掛け違いひとつ——いろはの頑張り次第で、今後そういう愛の形に変化しちゃうことだってあるのかもね。

だから彼にひとつだけに間違いを指摘してあげるとしたら、ああいうタイプこそ、そう易々とは飽きないよ？　ってとこかな。面白いから言わんけど。

「でもさ、いくら仲がいいっていても、彼女さん嫌がなんいの？　パイセンの甲斐甲斐しい後輩想いっぷり」

ひとしきり笑い倒してからかい倒してからも、あたしは追撃の手を緩めない。それはそれ、これはこれなのだ。

可愛い可愛い身内を猫っ可愛がりするのはご立派だが、さすがに彼女が居る身で……しかも告られている女の子にこんなに親身になるのはいただけない。

そこんとこ説明よろしく、とばかりにニヤニヤ訊ねてみたところ、先輩はしよっぱい顔して、ちよつと想っていたのとは違う答えを返してきた。

「生憎だが、その彼じ……パートナーがすげえ乗り気だな……。一色が雪ノ下を挑発すんだよ。あれー？　わたしは先輩のせいで勉強時間が取れなくなっちゃったから責任とってもらってるだけなんですけど。雪乃先輩はこんなことくらいで彼氏とられちゃうとか不安になっちゃうくらい自信しかないんですかー？　……つてな。で、そういうのに乗っちゃうんだよ……、あの人」

「……あ、あー。な、なんかうちの友達がご迷惑おかけしてます」
すいと目を逸らして、つい平謝りしてしまった。

いろはのモノマネ交えながら説明する比企谷先輩が非常に気持ち

悪かったことは置いて、いろは、あの子ホント性格ヤバいなー。あの雪ノ下先輩に対して狩る気満々じゃないですか。ハート強すぎる。

それと雪ノ下先輩は煽り耐性なさすぎ。あの人、完璧美人に見えて、たまに香織並みに残念だったりするのよね。

そんな、なんだか二人してあはは……としよっぱい顔になってた時だった。とある闖入者ちんにゆうしやの登場により、この場の雰囲気ガラリと変貌することとなるのだった。

× × ×

その闖入者は不意に現れた。とても目立つ容姿だから、近づいてくる姿は視界に入ってはいただけだ。

その闖入者、先輩とあたしの姿を捉えた途端、とととと真っ直ぐに駆け寄ってきた。彼女が走るたびにぴよこぴよこ弾む見慣れないポニーテールがあまりにも楽しそうで、普段毎日のように顔合わせてるからあまり気にならなかったけど、そういえばいろは、あの頃より幾分髪を伸ばしてたんだなあ、なんて、今更ながらに思ってしまった。

てかポニーで。あんたのポニー姿、はじめて見たんですけど。さっきまでいつも通りのヘアースタイルだったじゃん。

……あざとい予感しかない。

そんな亜麻色のテールを靡なびかせ疾走する一頭の可愛らしいポニー。愛する飼い主の元に辿り着くなり、その飼い主の横っ腹にどーんとパUNCHを入れました。

「先輩お待たせしました。生徒会の仕事が思ったより手間取っちゃいました」

「……いってえ。セリフと行動合ってなくない？ 待たせた謝罪しながらなんでいきなり暴行なんだよ」

「そんなことよりわたしの居ないところでなに人の友達ナンパしてん

ですかねこの人」

「してねえよ……。むしろ俺が笠屋にウザ絡みされてたんだが」

「へー。そのわりに随分と盛り上がってるように見えただけですけど。あ、紗弥加さつきぶりー」

「さつきぶりー。やー、いろは助かったわ。しつこいナンパイセンに絡まれてさー」

「だよねー。なんか遠目から紗弥加困ってそうに見えたんだー」

「……会って早々、結託して人を陥れるのやめてね?」

げんなりする先輩をよそに、にんまりとハイタッチで健闘を讃え合ういろはとあたし。この三人が絡むと、大体いつもこんな感じ。この弛い空気感、割と気に入っている。

「あ、そだ。ちよつと女の子同士のお話があるんで、先輩はあつちの方に行つてもらえます?」

と、急にいろはが動き出す。ええ……としが響める先輩の背中をぐいぐい押して、ロータリーの隅つこの方へと追いやると、も一度いろはがあたしのところにはたばたと戻ってきた。

「ど、どしたの?」

「やー、先輩が邪魔だったから、ちよつとあつちに掃いといただけ」
「掃いといたで。で、どした?」

「……んと、さつき先輩と盛り上がってたじゃない? なに話してたのかなー、なんて」

……ん? これ、もしかしてヤキモチ的な警戒的なアレ? とか一瞬思っただけけど、どうやら違うようだ。

いろはさん、頬をほんのり染めて、困ったかのように眉をハの字に潜めながら、こしょこしょとこそう耳打ちしてきた。

「……先輩に変なこと訊かれたりして、紗弥加、余計なこと言っていない?」

「余計なこと?」

「そ。ほら、わたしの勉強のこととか……。もし変なこと言ったら、このあとのペース握りに影響しちゃうし、一応その確認的な……」

「あー、そゆこと?」

なるほど。どうやらそういうことらしい。

——そういうこと。それは、いろはの受験勉強への熱の入りようのこと。

一色いろは。どうやらこの子は、比企谷先輩に隠し事をしているらしい。

それは、普段の学校生活で、受験勉強を超頑張っていること。

この子の羞恥の沸点がどこにあるのかよく分からないが、どうやら先輩を追うために、私生活を全て犠牲にしてまで勉強に熱を入れてるのを知られてしまうことが、結構恥ずかしいらしい。頑張つて追いかけてきましたアピールをぐいぐいするタイプかと思いきや、そんなこともなく。

いや、頑張つてますアピールはちゃんとしているのだ。要は、その度合いの問題である。

その度合いを越してまでの頑張りを知られてしまい、ストレートに感心されたり褒められたりすると、どうやらマジ照れしちゃって恥ずかしいんだとか。

昔、先輩と小町が二人して褒め殺しにしてきて、真っ赤になって辱められた過去があり、それ以来、実は『好きな人達からストレートに褒められるとヤバいわたし』が居ることを知ってしまったらしい。

考えてみれば、いつの頃からか生徒会の仕事も、先輩に頼らず、自分たちでなんとかするようになっていたし、仕事の裏側の努力も極力見せないように努力していた。見せていたのは、あくまでも表向き程度の頑張つてますアピールのみ。

休み時間、机に文化祭の資料を拡げて唸っていたことや、夜中にエナジードリンク片手に体育祭の準備に奔走していたことなどは、先輩に見せないようにしていた。

自分の頑張りを必要以上に知られたくないというのは、どうやら彼女にとつての譲れないポイントらしい。

そういう事情があるため、先ほど先輩とあたしが何を話していたのかが気になったのだろう。

なにせいろはと先輩の待ち合わせ理由が『受験勉強』なのだ。その

現場に居合わせた以上、必然的にあたしと先輩の会話内容は絞られる。その際もしも先輩があたしに『そーいやあいつ、普段勉強頑張ってるのか?』などと聞いたとしよう。そこであたしが『死ぬほど頑張ってますよ〜』などと包み隠さず答えていようものならば、いろは的には恥ずかしくてもじもじしちやって、余裕を装った本日のペースを崩してしまうだろう。だからいろははどうしてもあたしに確認を取っておきたかったのだ。お前、余計なこと言っていないだろうな?と。

だって一色いろはは、いつだって比企谷八幡に対して余裕の立場でいたいのだ。

「だいじょぶだいじょぶ。そういう話はしてないから」

「……そ? ならいいんだけど。……じゃあ、あんなに楽しそうになに話してたわけ?」

「んー? どしよっかな。それはあたしとパイセンのプライベートの問題だからな〜」

「……んー?」

「いやマジやめて? その目は人を殺せちゃうタイプの目だから」

ホント、急に瞳から光消すのやめてほしい。なんでキラキラな笑顔でその目ができんの。

プライベートな問題とか言って、どうせわたし関係の話に決まってるんだろ? と、その瞳が凄い圧かけてきてる。

「はいはい、言いますよ〜。つつても、パイセン待たせてるから要点だけ」

「おっけ」

よし。凄い目をプレゼントしてくれたお礼に、あたしからもお返しに素敵なプレゼントをしてあげよう。悶えと辱めという、とっておきの贈り物を。

「ま、要約すると、いかにパイセンがいろはを大事に想ってるかってお話、かな〜。なんかいろは、あたしが思ってたよりずっとパイセンに愛されてるっぽいね?」

「は? ……………え?」

ほら、最初きよとんとしてたいろはの顔が、ぶわあつと赤くなりはじめた。

「……えと、マジで?」

「マジマジ」

「……そ、それは確かな情報筋からの信憑性の高い情報なわけ?」

なに言ってるんだこいつ。

「いやあたしが直接パイセンから聞いたんだから」

「……そ、そかそか。……い、いやまあ、今さら?　っていうか?　そんなのとつくに知ってましたけども?　ま、どうせ身内とか妹みたいとか、そういうアレに対してのアレなんでしょ?」

とか言いながら、口元が弛んでしまわぬように表情筋をふるふると引き締め、熱を帯びた顔を手でぱたぱた扇いでますけども。

ホントこの子、ストレートな好意に弱いよね。

「……ま、そゆことなら、今日はちよつとくらい手加減してあげよつかな」

火照った顔にむふんと満足気な笑みを浮かべると、いろはは、んんつ、と咳払い。ここで一旦自分を落ち着けてから、先ほど隅の方へと追いやった先輩をちよいちよいと呼び付けた。

そんな横暴極まりない飼い主に、なんだよ……みたいな顔しながらも大人しく命令に従っているのはの元に寄ってくる先輩は、まるでよく躡けられた忠犬のようだ。

「……なに?　女の子同士の話とやらは終わったのか?」

「はい。ばつちり終わりました。いかに先輩がここ最近調子に乗っちゃってるのかがよく分かりましたので」

「は?　笠屋となに話したの?　別に調子になんて乗ってないが」

「いやいや、紗弥加ナンパしたりとかわたしに欲情したりとか、最近先輩マジでちよつと調子に乗ってるじゃないですか?」

あれ?　今日は手加減しとくんじゃなかったっけ?

ぷくりと頬を膨らませ、いろはの口撃が勢いづいてきた。どうやらあたし、ここからはただの傍観者になりそう。

でもそれもこの関係性の醍醐味のひとつである。一人でによによ

しちゃうかも知れないけれど、いつも通り生暖かい目で見守らせてもらうとしようかな。

「いやちよつと待て。ナンパの件はもうどうでもいいとして、欲情とかいう謂れのない悪評を街中まちなかで口にするのやめてね？」

「え？ こないだ勉強してるとき思いつきり欲情してたじやないですか。髪が垂れてくるの邪魔だったからちよつと結ゆわいてみたら、ちらちらとうなじに熱視線向けてきてたのバレバレでしたけど」

「……………み、見てないですけど」

うん。どうやら超見てたらしい。いろはなんか、へつ、とか鼻で笑ってるし。

てかこれか。いろはがポニーになってる原因は。

単純に意識されたのが嬉しかったからなのか、新鮮な髪型の反応が満更でも無かったから気を良くしたのか、こうやってじゃれ合いを楽しみたいが為の布石なのか。

どれにせよ、やっぱりあざとい予感的中してた。

「男子つて、なんで目線がバレてないとか思ってるんですかねー。言つときますけど、結衣先輩と一緒に居るとき胸の方に目が行っちゃってるのかもバレてますからね？ 本人に」

「……………え、マジ……………」

「です。たまにあの人もじつとするじやないですか。あれですあれ。もう結衣先輩があれした時は、わたし達全員先輩に引いてますからね？ わりと強めに」

「……………ぐう」

あ、先輩がぐうの音出して、今にも駅ビルの屋上に向かいそうな顔して悶えてる。ぐうの音ってリアルに出るものなんだ。

わあ、そんな先輩見て、いろは凄い悪い顔して楽しんでんなあ。

「まったく。雪乃先輩といちゃこらしてる横にわたしとか結衣先輩とか振った女はべらせて欲情しといて、これで調子に乗ってませんか、常識的に考えて社会通念上通用しなくないですかー？」

「横から失礼しちゃうけど、パイセン、それはちよつと調子に乗りすぎ」

「ねー」

「ね〜」

傍観者も思わず口を挟んでしまうくらいの調子乗りすぎ問題。

まあ、年頃の男子が本能に抗えないのは仕方ないから、あたしもいろはも別に責めてるわけじゃないんですよ。攻めてるだけなんです。

「やっぱあれですか。好意伝えちゃってからですか、調子に乗っちゃってんの。ま、しよーがないですよねー、こんなに好意向けられれば、男の子なら多少は調子乗っちゃいますよねー。でも惚れた弱みって言うんですか？　そういう情けないところ好きって思えちゃって、ダメ男を甘えさせちゃうわたしも悪いつてゆーか？」

と、ここで突然いろはの口撃姿勢に変化が表れ始めた。なんだろうか。いろはが妙に素直なだけだ。

「……なっ、お、お前こんなところでなに言つて……」

「なに今さら照れてるんですか。ちよつと気持ち悪くて無理なんですけど。てか最近いつも好きって言ってますよね？」

「……いい、いや、だから」

いろはの物言いに戸惑いを見せた先輩は、恥ずかしそうにあたしをチラ見する。分かります。気まずいんですね。

うん、正直なところ、今あたしもめっちゃ恥ずかしいんだけど。なにこれ、お馴染みの光景かと思つて油断してたら、思つてたのとちよつと違うみたいだ。

あたし今なに見せられてんの？

「とにかくです。先輩のこと好きすぎて調子に乗らせちゃってるわたしも悪いんですけど、そんな可愛い後輩を弄んでいい気になりすぎる先輩が一番悪いの言うまでもないので——」

二人の世界に入ってから、ずつとぷくりと頬を膨らませていた彼女。平気そうな顔して好き好きアピールしてるわりには、その膨らんだ頬とか、ポニーテールのせいでいつもよりも丸見えになってる耳がほんのりと赤く染まって、実は結構恥ずかしそうなバレバレだったけど。

そんな彼女が、不意に洩らした艶めいた笑み。その笑顔は

とても小悪魔めいていて。それでいて、恋する乙女そのもののような、天使めいた輝きも兼ね備えていた。

「というわけで、お詫びとして本日の勉強会は終電まで延長決定でいてすよねー？ で、お家帰るの遅くなっちゃうんで、当然家までの警護はマストで」

「う、うす」

「あれ？ やけに素直じゃないですか。どうせまた屁理屈捏ねてやり過ぎそうと思ってくると思ってたのに。……はっ!? もしかしてこの状況を利用してわたしの両親に挨拶済ませちゃおうとか思ってたかそれは確かに今後にとって必要な工程ですけどさすがにそれは段階飛ばし過ぎで下手したら悪手になりかねないので親に会う前にまず雪乃先輩と別れてくださいごめんなさい」

「ええ……」

「はあはあ……じゃ、サイズ行きますよサイズ。善は急げとか言うじゃないですかー？」

「……どこにも善の要素ないんだよなあ……」

——昔と変わらぬ見慣れた光景。

でも、昔とはちよつと違う見慣れない光景。

プロム以来初めて目にした二人の夫婦漫才は、あの頃と同じように、ちよつとだけ違ってた。

好意を伝える以前、隠し誤魔化しとぼけていた先輩への口撃^{じやれ付き}。でも、一度好意^{ひとたひ}を伝えてしまえば、あとは気持ち真っ直ぐ突っ走る。

好意を伝えられる以前、隠し誤魔化しとぼけていたいろはからの口撃。こちらは好意を伝えられてからも相変わらずの情けなさだけれど、でも身内に対する甘さには磨きがかかった。

二人の性格を考えれば、『あれからの世界』では、こうなる予感は確かにあった。

けれど、いざこうして目の当たりにすると、それは堪らなく微笑ましくて、そして堪らなく眩しい。

あまりの微笑ましく眩しすぎる光景に、思わず目を逸らしてしま

そんなほどこに。

「じゃね紗弥加、また明日ねー」

「ん。また明日〜。パイセンもまた今度遊ぼうね〜」

「おう。遊ばないけど」

「遊ばないんだ、あはは」

ゆっくりと離れていく二つの背中。

肩をぶついたり背中をぺしぺし叩いたり、昔はあまり見られなかったスキンシップを多分に取りながら、いろはは勉強会という名の楽しみの中へと消えてゆく。

先輩の隣を歩くいろはの見慣れぬテールが愉しげにぴよこぴよこ弾むたび、あたしはその眩しさから目を逸らし、なんとなく空しさを覚えてしまう。

あのいろはがねえ……

今さらながらそう考えるたび、なんだか一人だけ取り残された気分
に襲われてしまい、また二人から目を逸らしてしまう。

「やく、久しぶりにパイセンで遊ぶの楽しかったー」

だから、いま口を衝いて出てきた強がり丸出しな独り言も、ただただ空しく響くだけ。

「……あく、なんか帰んの面倒になっちゃったな〜」

ウインドウショッピングにもあらかた満足し、帰りの電車が込むのを嫌い改札へと向けていた足取りが止まってしまった。

どしよ。もうちよつとそこらへんぶらぶらしてこうかな。

「……ん？」

そんなとき、不意にスクールバッグから、ぽこん、と間抜けな音がした。

普段なら気にも止めないそんな音。なにかしら、誰かしらからの連絡が入っても、そんなのはすぐにチエツクしなくなつて、適当なときに、適当に目を通せばよいのだから。

「……」

でも、今だけは気になってしまう。誰からだろう、なにか用事でもあるのだろうか、と。それは、今は誰かと繋がりたいと思つてしまつ

たからだろう。

別に香織でもいいし智子でもいいし。なんなら襟沢でもいいし。とにかく、誰かと今繋がれるのなら、それで気晴らしにでも暇潰しにでもなる。会ってバカ話に花を咲かすんでもいいし、どっか美味しいもの食べに行くんでもいい。帰るのも面倒になつてしまった今の気持ちを、誰かに満たして欲しい。

……そんな思いで開いたスマホ。そこに届いていたこんな通知。

『【和也】よ。久しぶりにメシでも食い行かない？』

『こないだすげえ美味い店見つけてさあ』

『ちよつと高い店んだけどドレスコードとか要らない店だから今からどう？』

「……」

深く……深く溜まった息を吐き出した。繋がりは繋がりでも、体の？がりが、と。

急速に心が冷えていくのを感じる。そしてそれに反比例するように、温かい体温を求めてしまっている自分が居ることにも気付いてしまった。

冷えた心を物理的に温めることなど、決して出来やしないというのに……

——久しぶりに無性に人肌恋しくなっちゃったとこだし、ま、いつか。

しかし心の中でそう言い訳して、あたしは止まっていた足を再び動かした。

家とは真逆の、あのマンションへと。

続く

「あざとくないスピノフ」こうして友達の一色いろ
は後日談はあたしが語る 後編

校内に、終業を知らせる鐘の音が高らかに響き渡る。毎日のように聴き慣れたその音を合図に、教室から一人、また一人と、思い思いの場所へと散ってゆくクラスメイト達。

受験前、最後の青春を謳歌しようと、あるいは連れ立ってカラオケに、あるいは部活動に勤しみに、あるいは我先に受験準備の為の勉強の場へと、その表情は千差万別、それぞれの心と立場の赴くままに。昨日のこと、そして今朝のこと。

それらのことに頭を囚われすぎて、受験生だというのに窓の外をぼーっと眺めているうちに、どうやら今日という一日の学校生活が終わっていたらしい。我ながら呆れてしまうほどの、反省すべき点である。

ちなみに、本日も気の置けない友人達との約束の予定はない。それどころか、放課後のだらだら駄弁りを交わしてさえもない。

というのも、今日は珍しく一番騒がしい奴がこの教室に来ない、というのが、その一因を担っているのだろう。

あの襟沢が、珍しくクラスメイト達から遊びに誘われているらしい。一限目の休み時間というかなり早い段階で、ドヤ感満載で自慢してきて非常にウザかった。

あの容姿なのにクラスで浮いているというのは、一重にあいつの自業自得——すでに学年ではヘタレとして有名なくせして、相変わらずの痛々しい言動で新しいクラスメイト達から引かれた——ではあるのだが、まああんなんだけど、一応アレでもあたし達いろはグループの一員なわけだし、その他大勢の生徒達からしたら一目置かれる存在ではあるわけで、これを機に、あのバカの僅かばかりのいいところが、クラスメイトの皆さんにも少しでも伝わってくれたらいいのにな、な

んで、ほんの少しだけ応援していたりする。

これはあれかな、あたしも襟沢に対するツンデレ期に突入しちやつたかな。

とにかくそんな襟沢の自慢話が休み時間に行われたことにより、その場で他のみんなも本日の予定を発表することに。

いろはは昨日の勉強会という名のお遊戯会が祟って、本日は生徒会室に監禁らしい。どうやら昨日、実は仕事をほっぽらかして、こっそり抜け出してきちやっただとか。

帰りのHRが終わった直後に教室に突入してきた、今や副会長の書記ちゃんと、奉仕部部长兼生徒会書記の小町に連行されていた。

智子は予告通り友樹とスイパラへ。

あたしの為に今日の予定を早めに切り上げる必要があるから、少しでも早く友樹と遊ぼうと、さつきダツシュで帰っていった。

あいつにはホントに感謝している。けど、あいつらホント毎日毎日よく飽きないな。

あたしは昨日の親への不義理があるため、今日はそもそも早く帰るつもりでいる。一人で帰るのは恐いから、最寄り駅のマックとかで智子を待ってから一緒に帰ろうかな……とかも画策しているのだけけど、さて、どうしたものか。

そして香織は――

「紗弥加く、一緒に帰ろうぜー!」

なんか一緒に野球にでも誘うかのような声掛けをしてきた。

「あれ? 今日予備校じゃなかったっけ」

そう。香織は休み時間に行われた本日の予定発表会にて、今日は予備校なんだよね、と、死にそうな顔をした。

だからってつきり今日も教室で全員解散になるものかとばかり思っていたのだけれど。

「そうなんだけど、まだ時間押してるわけでもないし、どうせ千葉まで一緒に帰るじゃん?」

香織が通っている予備校は千葉駅周辺の雑居ビル内にあり、あたしは一旦千葉駅まで出てから線を乗り換えて帰宅する。つまり香織の

言うように、途中までの道程は一緒。

特に香織が急いでいるわけでもないのならば、むしろ一緒に帰るのが自然の流れなのである。

「ん。じゃ、一緒に帰りますか」

「かしこまツツ☆」

「……」

なんだこいつ。いつものオタ臭い掛け声とポーズ、やけに気合い入ってんな。まるであまりの久しぶりな決め台詞に張り切りすぎちゃったモブのようだ。

中学以来の親友、家堀香織とあたし。こうして、千葉駅までの短い旅路の道連れとなった。

× × ×

「しっかし、あんたもよくやるよね」

「ん？ なにが〜？」

「クソしょーもない理由で無謀な進路変更して、毎日毎日勉強に明け暮れてる上に、さらにこの予備校通い。よくやる以外の言葉が見つからなすぎてウケンだけど」

「クソしょーもない言うなし！ これは私の存在証明だもん！」

駅までのまったり散歩。二人の会話は、状況的にも必然的にこの話題に。

つい先日梅雨入りが発表された通り、曇天に守られ逃げ場を失った湿気が、嫌なジメジメで街を容赦なく攻め立ててくる。うだるような蒸し暑さにじわり滲む汗。下着が透けちゃうからやめてほしい。少しでも気分をあげようと途中で寄ったコンビニで買ったパルムをパクつきながら、香織の未来を憂う話題に花を咲かせる二人。

いろはと先輩を覗き見ることが存在証明とか頭沸いてることを平気で宣言できちゃうこの親友を、わりとガチめに尊敬しています。

「てかさ、今更なんだけど、香織の成績であそこ間に合うわけ？」

「いやー、ぶっちゃけなかなか厳しいですなー。いろはは二年トキか

らちよつとずつ進めてたからなんとか合格圏内みたいだけど、私は時間的に厳しすぎてギリギリかな〜」

「だよね。てかいくら時間があっても、そもそもが香織の頭じゃ無理だと思っただけだ」

「ひどくね？ ……んー、こないだの模試でC判定だったから、夏休み中くらいにはBまでは持つていききたいとこなんですよね〜」

「は？ C？ え、マジ？」

「そそ。これだけ頑張つててまだCなんすよお……。無茶な進路変更宣言してママンにもめっちゃ怒られてさあ。しかも私立じゃん？

浪人とかマジ無理。『覚悟があるなら滑り止め禁止。それでも良いりゃ好きに変更しな！』とか言われててさあ。死ぬ気で頑張らないと、私来年の春にはバイトしながら職探し☆」

てへつと笑いながら、参ったねこりやと舌をちろり出す香織。

でも違う。あたしが言いたかったのはそれじゃない。いや、今のセリフの中にも突っ込みたいことは山ほどあったけど。

「違くてさ、あんたの学力じゃ、今までCどころか圏外だったじゃん！

いつの間にも!？」

そう。たったの三ヶ月弱で、E判定と言うにも鳥澁がましかったレベルから、進路先として十分視野に入れられるレベルにまで持つてきているところはかなり驚いているのだ。

「え？ そりゃまあ決意固めてから三ヶ月近く経ってるし、普通それなりの形にはなるっしょ」

「いやいやいや、それは普通ではないから。……あんたって、思いのほか天才肌よね」

「ん？ 香織ちゃんの天賦の才に今ごろ気付いたのん？ フヒヒ」

「だね。やー、オタ知識への情熱とかノゾキに対する渴望とか、ひとたび興味持ったもんを手に入れる為のあんたの変態性悔ってたわ」

いやほんとに。もしも香織の興味対象が比企谷先輩じゃなくて葉山先輩だったら、下手したら東大だっけ行ってたかもしれないよこのアホ。

「変態言うなし。あとオタクじゃねーし。私アニメとかラノベとか

ゲームとか声優とか全然詳しくないですから。推しとか居ませんし推しに後先省みない課金とか投げ銭とかしませんから」

「お、おう」

まあ香織の推しはいろはと先輩のじゃれ合いだから、ある意味この先の人生を課金・投げ銭してんだけどね。掛け金が人生とか重っ！

「まあ香織のヤバさは今更だからこの際置いとくとして」

「ヤバさってなに」

長い付き合いの親友の狂気に戦慄と畏怖の念を抱きすぎて、すっかり流すところだった。

あたしは先ほど香織が語った、もう一つの衝撃を口に出す。

「いろはって、もう合格圏内なんだあ。めっちゃ頑張ってるのは知ってたけど、ほんとにもう手の届くとこまで来てんだく……」

そう。この事実も、感心を通り越して衝撃を受けるレベルのお話なのである。

ぶっちゃけ、リアルに勉強が得意ではなかった——というか、興味対象ではないため全く力を入れていなかったあの子。そのため成績としては中の下。一年の頃は、確か香織とそう変わらないくらいの成績だったはずのあのいろは。

世の中というのは不条理なもので、正直、いくら頑張っていたからといって、そこは地頭の問題もあれば適正の問題もある。だから、せいぜい受験本番時点でもギリギリ圏内まで持っていけるかどうか、ってレベルだったはずのいろは。それが今や、それなりの有名大学の合格ラインに入っているという。

いろはといい香織といい、呆れてしまう程に頭が下がる。愛に対しての熱が眩しすぎるのよ、あんたらはさ。

「ま、合格圏内っていつても、このまま油断しなきゃって話ではあるんだけどね。でもやっぱいろはってばマジすげえー。私なんて決意してから即部活辞めちゃったのに、いろはは結局生徒会も最後までやっちゃやしきく、勉強だって全速前進ヨーソロー。比企谷先輩への愛が為せる業だねえ、これは」

「ん」

本当にそう思う。香織の愛は狂気じみてるけど。

「あ、そういえばいろはと言えばさ、朝の告白事件の顛末って知ってる？」

「ん？ 知らないけど。朝襟沢が虐殺された時点で本人に聞く気も起きんし。香織は知ってたんだ？」

「や、それがさ、後輩の子に聞いてちゃったんだよね。なんか一年のあいだではかなりのトレンドらしくて」

「へー」

ちなみに後輩というのは、今や引退してしまった部活の後輩のことだろう。

受験勉強に専念するため、プロム明けに即退部した香織。行動力半端ない。

しかしながらこの見た目と性格のため、未だに当時の部活繋がりの生徒——とりわけ後輩達からえらく慕われているらしい。香織の自己申告ではなく、廊下とか通学路とかを香織と一緒に歩いてた時の実感である。

これは、ある日廊下で後輩数人から「あ、香織先輩だ……！」と、憧れの眼差しで声を掛けられた時の余談。

会話を交わすなかで香織がお得意の「かしこま☆」を決めた際、その後輩達がめっちゃキャッキヤ言いながら口とポーズ揃えてかしこま☆レスポンスしてきた時は、軽く慄おのいたからね。なんならヒエツて変な声出た。

そんなわけで、今やトレンドらしいその話題、尚且つ香織の友達の話題ともなれば、おのずと香織の耳に入ってくるのも必然だろう。

「で、さあ？ 噂のイケメンくん、元々いろは狙いで通ってたじゃん？」

よくよく聞いてみたら、なんか『俺、いろは先輩オトすから』とか前々からイキってたらしいんだよね。で、いざ告白本番になってもあまりに自信満々だったから、軽くギャラリーとか出来てたんだって「マジか」

「マジマジ。やー、正に、認めたくないものだな、これが若さ故の過ちというものか、ってやつだわコレ」

「うんうん。……うん？」

「ごめんそれはちよつと分からんわ。」

で、さらに香織の話によると、そのあとはあたし達の予想に違わぬ通り、即断られたみたい。どれくらい即かというと、なんなら告白の文言言い切る前に断ってたらしい。

「いや、もうびつくりですよ。だつてお断り芸すらないくらいバツサリだったらしいんだもん。いろはもその時点でちよつとイラツ☆つとしてたんだらうね。そんな断わりづらい状況作られた上での告白に。で、イベントはそれで終わると思うじゃん？ チツチツチ、でもそうは問屋が卸さないのが若さ故のなんとやらですよ。なんとイケメンくん、そつから食い下がったんだつてさ！ しかも最悪な選択肢選んじやつて！」

そう。断られるまではあくまでも前座に過ぎない。ここからが、この顛末のメインイベントなのだ。

「たぶんさあ、引つ込みつかなくて焦っちゃったんだらうね。自分の雄姿（笑）を見守ってるギャラリーも自分で招いちやつたようなもんだし」

「だらうね。なんか聞いてる限りじゃアンチも多そうなタイプっぽいし。確かにそれで終わったら、しばらくはクラスでネタ供給マシーン確定だわ」

「ふひっ、ネタ供給マシーンで！ 紗弥加さんてば辛辣ですなあ」

乙女の欠片も見せず、腹抱えてけらけら笑う親友。ま、あたしもワケありなんすよ、エセ爽やかイケメンに対して手厳しくなっちゃうのは。

で、ひとしきり笑ってから息を整えた香織が語った、彼が焦って手を伸ばしてしまったらしいその手段。それは……うん、やべえ。思いつく限り、悪手の極地だわ。

「え、なんなのそのイケメン。死ぬ気？」

「ですなー。思わずこいつ自殺志願者かよ？ って勘違いしちゃうレベル」

香織が語った最悪の選択。それはよりにもよつて……比企谷先輩

の悪口だったのだ。

『いやいやいや、俺、サッカー部の先輩からヒキタニとかいう人の話聞かせてもらったり写真見せてもらったんですけど、いろは先輩とは釣り合わないっつーかなんっつーか、ぶっちゃけたただの冴えない陰キヤですよね!? なんか二年とき文化祭でやらかして校内ですげえ嫌われてたらしいし! なんでいろは先輩があんなのに執着してんのかマジで意味分かんないんですけど! まあたぶん優しいいろは先輩の可哀想な陰キヤに対する思い遣りとかだとは思うんですけど、そんなの絶対やめたほうがいいですって! マジ俺のほうがいろは先輩幸せに出来ますから! ホラ、俺めっちゃモテるしめっちゃ人望あるし、いろは先輩と釣り合うなら絶対俺のほうがっすよ!』

とかなんとか。

皆の前で振られたくなくて必死だったのか知らんけど、そんな感じの痛々しい口説き文句をつらつらと並べてたらしい。

なんだろう。なんかデジャヴ。

「でっさく、いろは、その間かんずつとニコニコ笑顔浮かべてたらしいんだけど、やつと無駄に長いセリフ終わって『どうよ?』ってドヤ顔浮かべてたイケメンくんに、満面のいろはスマイルで答えてあげたんだって〜」

『ありがと。わたしのこと心配してくれるなんて優しいんだねー。で、答えなんだけど、わたし超カッコ良い人好きになったこともあるし冴えないクソ陰キヤも好きになるんで恋愛の守備範囲かなり広い方だと思うんだけどー、んー……………幼稚なガキと自意識過剰なナルシストはキモくて守備範囲外ですごめんなさい』

「って、終始笑顔で。トドメんところはおっそろしく冷え冷えした声で」「おおぅ…………」

「で、場を凍りつかせて微笑みながら去ってったんだけど、最終的には女マネ時代の人脈使って比企谷先輩の話と写真使って一緒に笑ってた二年生部員を午前中には特定して、サッカー部部長含めた三人揃って生徒会室呼び出し。『学校としては、こういう陰湿なこととして悦んでるような部活にスポーツとかやってて欲しくないですよねー。』

だって健全な精神が宿らない肉体なんて、ただの臭くて汚い筋肉じゃないですかー？ 世の中の目って厳しいんです。いくら勝ったからって、へろへろ球当たった程度でいつまでもメソメソしてるボールガールをダシにして、失格勝ち取ってニヤニヤしてるスポーツ選手（笑）は世界中から大バッシングされる時代なんですよ。そんな健全じゃないなんちゃってスポーツにお金出すとか、学校的に無駄でしかないですかー？』って、部費全カットちらつかせて土下座謝罪。しかもその間ずっと笑顔。イケメンくん、そのあと部長……ってか三年部員達から『奴を刺激すんじゃないやねえよ社会的に抹殺されるのはお前だけじゃねえんだぞ殺すぞ！』ってこつてり絞り上げられたんだってささ、あはは！」

「待つて？ 今のサッカー部部长つてうちらが一年ときのクラスメイトじゃなかった？ やば、監督不行き届きとはいえ、とばっちりなのに元クラスメイト土下座させてんだ、やば」

つい語彙力がヤバくなるくらいヤバイ。

なんかあれよね。妙にデジャヴかと思つたら、一年半前のこと思い出しちゃってたわ。よかつたね襟沢。朝いろはからこの話聞けなくて。聞いてたらアレがフラッシュバックしてパニックに陥つてたかもだよ。

「ね！ マジでヤバイよねえ。……つかあ、失敗したあ！ 結果分かつてる告白イベントなんて興味ないやって悔つてたけど、そんなに面白エピソードになるなら見学に行きや良かったぜ〜！ ちえ〜っ」
ただまあ、これだけ無惨な結果が知れ渡れば、中学時代に数々の浮き名を流してきたのであろう思い上がったお子様達からの告白フェスも、これにて幕を下ろすことになるだろうね、なんて一人で含み笑いでいたなら、なんか香織がノゾキに行かなかつたことを後悔してた。

まあね。普通の告白ショーじゃ香織のお眼鏡には適わないけど、先輩絡んだいろはのマジグレショーともなると、完全に香織の領域だもんね。わかるわかる。

親友の危ない趣味に適応し始めちゃってる自分の危なさにも若干

引くけど。

あ、そういえば、香織の危ない趣味といえは……

「そういえばさ、いろは覗きソムリエ御用達エピソードといえは……」
今や話題は香織の受験トークからいろはトークへと様変わりしている。

それもちょうどノゾキ関連の話題になっているのであれば、この新たな話題は千葉駅までの旅路のいいお供となるに違いない。

正直、あたしからこの話題を振るのは結構なリスクを伴う。なぜならそれを語るあたし自身が、胸に靄が掛かってしまうから。

でもこの話は香織絶対聞きたいだろうし、別に口止めされてるわけでもないの、あたしは酒の肴ならぬアイスの肴がわりに、この話題を提供してやろうと思う。

「なにになに？」

「昨日あたし一人で買い物行ったじゃん？　そんなとき千葉駅でいろはに会ったよ。ひっそしぶりに比企谷パイセンとのじゃれ合いも見れちゃった」

「は？　え？　ちよつと待って？　ちよいちよいちよい、それ私喚ばれてないんですけど!?　ねえねえねえ、私のお仕事盗んでくんないかなアア!?　……ふ、ふええ、紗弥加がっ、紗弥加が私の人生を奪いにくるよおっ……!」

泣くなよ。必死すぎて引くわ。あと呼ぶを喚ぶって変換してそう
で恐い。

「で？　で？　どんな攻防が繰り広げられたワケ!?　ほらほら、youご披露しちやいなよー!　youやちやいなよー!　あ、やちやいなよーって言っても、今話題のツアーー!　な情報はいらないYOー!」

グイグイくるなあ……。そりやいろはも先輩との勉強会のこと香織にバレないようにするわ。

ほらほら、ヨダレを拭いて、そのペンとノートを仕舞いなさい？

「ホントあんたつてつくづく残念だよね。つたく、しよーがないなあ」

トークの切り出しを、期待に満ち満ちた表情で今か今かと待ち構える親友。そんな親友の様子に呆れながらも、嘖き出しかけた笑いを抑えてやれやれと応じるあたし。靄が掛かりかけた胸の内はどこにいったのやら。

そうしてあたしは、自分の目で現場を目撃出来なかった口惜しさに歯噛みをしながらも、まだ知らぬ夫婦漫才ネタに胸を膨らます香織のハイエナのように迫ってくる顔をぐいぐい押しやりながら、昨日体験した出来事を掻い摘んで報告してやることになるのだった。このアホにとつての、極上のエンターテイメントショーを。

× × ×

「昨日さ、千葉でサンダルとか小物とか見て回ってたらさ

——」

「ほうほうー」

あたしは語る。買い物終わりに先輩を発見し、ウザ絡みしにいつて玩具にしたと。

「でさあ、パイセンってば、いろはの可愛がり過ぎててさあ、噂に聞いてた通りの過保護っぷりに超笑えんの。でね——」

「だよねだよねー」

嫌々な顔しながらも、本当は嬉しいであろういろはのワガママに、面倒くさそうなフリして付き合う先輩の姿。

「マジありえないってゆーか、言うに事欠いて『そんなクソみたいな一般論知らん。俺から距離取るのが優しさとか傲慢過ぎて反吐が出るほど気持ち悪い』だよ？ なんなんあの人ヤバくない？ だからあたし——」

「あははは！ それはヤバイ」

嫌々な顔しながらも、あたしのウザ絡みに渋々付き合ってくれる、面倒見のいい先輩の間抜けな姿。

「したら、そこでは登場ってね。てかいろは、なんかポニーになってただけど！ なにごと？ って思ったらどうやらさ——」

「うひよ！ マジすか」

そこに御本人登場による化学変化も加わり、盛り上がりが最高潮に達したり、

「いろはのやつ、パイセンほっぽってなにすんのかと思ったら、なんかあたしにオハナシがあつたみたいで——」

「なんなのなんなの!？」

突然可愛らしさを発揮し始めたいろはの恋する乙女っぷりを、食べ終わったパルムの棒をタクト代わりに、身振り手振りで披露する。

気が付けば学校からの最寄り駅には到着してたけど、それからも改札抜ける間も、電車の到着待ってるホームでも、乗客まばらな車内の数分間も、何処であろうとそこはトークショーのステージと化す。

いつの間にやら短い旅路も終焉を迎え、目的地の千葉駅にはとつくにご到着。しかしそれでも語り部べによるエピソードトークは終わらない。

お客さんが求める以上、語り部に休息の時間は訪れないのだから。「信じらんなくない？ だっていろはがだよ？ あのいろはが、急に好き好き言い始めてさ——」

「うんうん」

今やステージは、千葉駅改札外にあるベンチの一角に。予備校までの腹ごなしだと、途中でテイクアウトしたハンバーガーとポテトを肴に、極上のトークを美味しく召し上がるあたし達。

相変わらず迫ってくる圧が半端ないが、聞き手が上手に盛り上がってくれと、語り手も饒舌になるといふもの。

「……正直、ちよつと油断してたところあるよね。……まさかあのいろはがさ——」

「……うん」

気を良くしたあたしも、今度はアイスの棒からカリカリのポテトをタクトに持ち替えて、大仰な仕草はなしでお囁はなに彩りを添える。

「照れちゃってキモさに磨きがかかっちゃってるパイセン見るいろはの笑顔がさ——」

「……そだね」

ときにコミカルに、ときにシニカルに。昨日の記憶に残るいろはと先輩との芳しいエピソードを――

「……ほんと、見てるこつちが恥ずかしくなるつつの。もうさ、アホかつつーくらい眩しくてさ――」

「……そっか〜」

……面白可笑しく、語り部やれてると思ってたんだけどなあ。

――どうやらあたしは、香織と違っていろはと比企谷先輩の物語を綴る語り部には、少々向いていなかったらしい。

だって、語りを聞いてくれるお客さんを、心から楽しませることが出来なかったのだから。

「ね、紗弥加」

「……んー？」

「なんか、話したいことあんじやないの？」

「……んー」

「なんか悩みとかあんなら、香織お姉さんが聞いたげるよ？」

「……んー……」

そう。確かに楽しく語ってた。あたしだって盛り上がってたし、香織だって興奮してた。

けど、途中から気づいてた。口調だってテンションだってそのままだったはずなのに、顔にだけは本心が出ちやっってたんだろうな、って。いつのまにか香織の表情が、夫婦漫才への興味から、あたしへの慈しみに変化していたから。

「いいからいいから。話したくないならいーけど、話すだけでも気が楽になるかも知らないよ？　ま、智子みたいに頼りにはならないのかもだけどさ〜」

「……う」

しかも、どうやら盛大に気づかれてたっぽい。智子にだけは打ち明

けていた、あたしのしよーもない悩みを。

「……ちなみに聞くけど」

であるならば、これは聞いておかなきゃならない気がする。

「なにを？」

「あたしが変だなんて、いつくらいから思ってた……？」

「ん？ そーだなあ。確か……、一年の三学期くらい？」

思いのほか早々はやはやバレてた。

「めっちゃ初期じゃん！　なんか最近紗弥加変じゃない？　とか聞
きやいーじゃん！」

「えー、だつてさ、紗弥加の性格上、自分から言つてこないつてことは、
今は言うときじゃないのかなー、つて。いちお様子見てたら智子には
言つてるっぽかったから、言いたくなつたら今に言つてくるつ
しよ、つて。で、さつきまでの紗弥加、朝、智子と話してたときみた
いな顔してたから、あ、なんか言いたいのかなー、つて」

「……んだよ、やつぱ朝も顔に出てたんか……」

「ま、微々たるもんよ微々たるもん。付き合い短いろはとか襟沢
じや見逃しちゃうレベルのやつ。フツ、俺じやなきや見逃しちゃう
ね」

うわあ、この言つてやつたぜ感。こういう顔してる時つて、なにか
しらのネタに走つてるときなんだよねえ。知らない人にドヤ感出さ
れても……

「……うぜー。なんか悔しいんだけど。香織ごときの掌の上つて感
じ」

「へへー、華麗に躍らされてますなー」

「……あのさ、一応これだけは言つとくけど、智子に相談したのは、成
り行きつていうかやむにやまれぬ事情が起きちゃつたからつていう
か、とにかくそんな感じで事情を話さざるを得ない状況になつちやつ
たからであつて、それが無かつたら未だに智子にも話してなかつただ
ろうし、別に香織だけ除け者にしてたわけじゃないかね」

「はいはい、分かつてるつつの。どんだけ付き合い長いと思つてんだ
か」

そう言つて、人好きのする笑顔でニカツと微笑む香織は、普段よりずっと頼りがいのある、めつちやイイ女に見えた。

………こんなイイ笑顔されたら、実はこの件を打ち明けるのは、香織が女になつてからにしようかな、なんて思つてたことは口が裂けても言えない……

だつて耐性のない香織にそんな穢れた大人な世界の話を打ち明けても、『ぜぜぜ全然大丈夫だし!?』そ、その程度のエロトーク、この恋愛マスター香織ちゃんにおまかせ☆(震え声)』とか言つて、赤面涙目で絶対強がるし。したら逆にこつちが気を遣う羽目になつて、本末転倒になつちやうし。

だから今まで香織には打ち明けてこなかったのだけれど、こういう機会を持つてしまつたからには、せつかくだし言つてしまつてもいいのかもしれない。

持つてしまつたものにも、トークの最中からあたしに対する香織の様子が変化しているのを気付いていながらも、気付かないフリしてそのままトークを強行していた時点で、本当はあたし自身が、この胸の燻りを吐き出せる場所を香織に求めていたのかも知れないけれど。

「……じゃあ、聞いてくれる?」

そうして、あたしは語り始める。まだ香織に打ち明けてなかつた胸の内を。

もちろん、香織にはセフレ^{結果}を打ち明けるのはまだまだ早いだろう。だから結果は伏せた上で、そこに至るようになってしまつた要因までを、だけどね。

× × ×

「あたし、今までまともにも人を好きになつたこと無いんだよね」
そんな告白から始まつた、あたしの独白。

人を、とか言つたりしてはみたものの、実際は人どころか、物でも趣味でもなににでも、好きになつた……強い感情を向けた経験がない。

唯一なにかに対して強い感情を向けているとしたら、それは昔馴染みの香織や智子、そこにいろはも含めたこの友人関係くらいだろう。この関係だけは、本当に大事に想ってる。

あ、いじけると面倒臭くて仕方がないから、ついでに襟沢もその仲間に入れといてやろう。

そういうわけもあって、恋愛に本気で夢中になれる人種というのは、あたしにとつととても眩しい存在なのである。

そして今まで築いてきた関係性のなかで、あたしの回りにいる人達は、みんな眩しいくらいの熱を持っていた。

智子。そして友樹。この二人は言うまでもない。中学時代から付き合い始めて、未だ変わらずお互いを想い続けていられるこの二人は、あたしにとつと最も身近な眩しい存在。

で、香織の元カレだった直哉も、かなり一方通行だったとはいえ、めっちゃ香織が好きだった。

それに比べて、あたしにはなんの熱もない。

彼氏が居たことはあつたけど、なんとなく付き合っていただけ。やはり熱とか夢中とかの強い感情とは無縁のまま、体だけの関係でしかなかった。そういった意味では、彼氏と和也セツレは、本質的な部分では大して変わらない存在なのかもしれない。

「いやいや、それ言ったら私だつて大して変わらなくない？ 私だつて男好きになったことないし。私と直哉の関係性知ってるじゃん」

これは、そんな独白（和也抜き）をしていたとき、香織が挟んできた台詞。

確かにね。一方的に熱を向けてきてたのは直哉の方だけだった。香織は情のカタチを友情から愛情に変化させることが出来ないまま、それでも直哉は友情以上を求めて破綻した。

だから香織はまだ恋愛に強い感情を持ったことはない。そう、まだ。

「でもさ、香織見ると超分かん。こいつは一度男に夢中になったら、とことんのめり込むヤツだろうな、つて」

今は恋愛には向けていない強い感情。でも、恋愛以外の興味対象へ

の熱量は尋常じゃない。香織の場合、興味を向ける対象に出会っているかどうかの問題であり、一度出会いを自覚してしまえば、あとはもう真つ直ぐ一直線に突っ走ることが出来る女の子なのである。

「……えー？　そ、そう？」

「うん、それはもう確実に。なんならのめり込みすぎて、もし相手に好きな女とか彼女が居た場合でも略奪上等になっちゃうレベル」

「略奪なんかするわけじゃないじゃん!?　私、こう見えて超常識人なんですけども！」

……もうね、どう見ても略奪しにいく未来しか見えない。

「……」一応忠告しとくけど、今はいろはとの漫才見るのに夢中だからいいけど、なんかの間違いでパイセン好きになるとかあったら、マジでヤバイからね……？」

「いやいやいや、それはない！　だって考えただけで胃が持たないし！　ちよつとやめて？　変に意識させないでくれます？　そういうのは違う世界線の私に任せといてますんで……！」

ホントに大丈夫かなこいつ。

ま、それはそれとして。

つまりはそういうこと。智子や友樹、直哉だけじゃない。香織だってそうなのだ。あたしの周りに居る人達は、いつだって眩しすぎるのだ。昔から、ずっと。

眩しくて眩しくて、一人になると、一人だけ取り残されていく気分に襲われる。そんなのが、ずっと続く毎日だった。

そんなとき出会ったのが、一色いろはという女の子。見るからに恋愛脳。見るからにあたしとは真逆の世界の住人。

でも、あたしは一目見ただけで解ってしまった。あ、こいつはあたしと同じタイプの人種だ、つて。こいつは、本気で恋愛に強い感情を持つことが出来ない人種だ、つて。

元々いろはをグループに引き入れたのは、当時はまだクラスで幅を利かせていたウザい襟沢を黙らせるため、という打算からだった。

もちろん計算高いいろはも、そこところはあたし達と一緒だった

のだろう。クラスで同性の友達が居るか居ないかでは、男子ウケがまるで違うから。だから疾しい気持ちで近付いてきたあたし達を、逆に都合良く利用するつもりだったのだと思う。

でも、実はあたしは一人だけ違ってた。香織とも智子ともいろはとも違う、別の打算のカタチだったのだ。

——こいつと一緒に居れば、あたしだけ取り残されることは無くなるのかもしれない。

そしてグループは、いろはを引き入れた。

最初は打算まみれで始まったあたし達のグループ。とりあえず表向きだけは仲良さげにして襟沢黙らせて、ついでにあたしのモヤモヤの逃げ場にもなってもらおう。

表向きの付き合いが続くなか、いろはが葉山先輩をオトす為に女マネになったり、教室で愉しげに葉山先輩の話題を出すたびに、その笑顔を見てあたしはどこか安心してた。よし、その表情。それでこそいろはだ、と。

でもそんな打算も、いろはと長く接してゆくうちに……いろはの人となりを感じてゆくうちに……、そんなものはいつの間にかどこかに霧散していた。たぶん香織も智子も。そして、いつの頃からかあたし達の前では 素 丸出しな表情をするようになったいろはも。

そして気付いた頃には、あたし達は本当の友人関係を築けていた。

季節は流れ、春色だったあたし達の桃色吐息が、刺すような冷気に白く色付き始めたころ。

相変わらず香織は興味あるものに全力で、智子は友樹と全力で、そしていろはは全力とは真逆のクレバーさで。

そんな毎日に、今までに無い心地良さを覚え、逆に、いろはに対しての打算を忘れていた頃だった。

『せんぱあ、どーしたんですかー？』

そんな甘ったるい響きが、あたしの耳朶と心を揺さぶった。いろはが。あのいろはが。

恋愛を見つけてしまった。眩しくて目を向けていられない程の強い感情を知ってしまった。

あの甘い響きは、あたしに否応なしにその事実を告げてきた。

その頃には、香織や智子と変わらない、とても大事な友達になっていたいろは。

だからあのいろはがそんなにも好きになれる人と出会えたんだってことを、心から祝福した。もつとも、奉仕部の人間関係が面倒くさすぎて、全力で祝福出来る状況にはなかったけれど。

でも心から祝福したのは本当だ。そのことだけは、自信を持って言える。

だからこそなのだろう。彼女の幸せを心から祝福出来るくらい本当に大切な友人になったからこそ、逆に行く宛のない気持のやり場が無くなってしまったのだ。

どうしようもない程の置いてきぼり感。

中学時代、香織達に対して抱いていた感情が、再び胸を締め付けてきた。あたしと同じ——いや、あたしよりずっと恋愛にクレバーだったあのいろはの恋する乙女っぷりを目の当たりにすれば、中学時代以上の置いてきぼり感を抱いてしまうのは、致し方なかったことなのかもしれない。

そして取り残されたあたしは、無性に人肌を求めてしまった。心で熱を感じる事が出来ないのであれば、せめて体の熱だけでも感じていたい、なんて思ってしまったのは、さすがに短絡的すぎただろうか？

そんな頭の悪い短絡さに突き動かされ、我ながら馬鹿な行動力を発揮してしまったのが、今から一年半ほど前の、ある冬の日のことだった。

「あはは、なっさけないよね。あたしき、結局のところ、いろはに嫉妬してるんだよ」

そう呟いて、あたしの長い長い独白は終わった。

× × ×

仲のいい友達に対して嫉妬心を抱いている。しかも、しょーもなくて一方的で、とても手前勝手な理由で。

こういう醜い部分って、出来れば大切な友達には見せたくないものだ。誰だって、友達にはダサくて格好悪い自分を見られたくない。

だからあたしは香織にずっと言わなかった。本当は智子にだって言うつもりはなかった。

智子はあたしにそう告白されても引くことはなかったけれど、まだピュアっピュアな香織のことだ。こんなことを友達から告白されて、何て返せばいいのか迷っているだろう。

だからあたしは顔を上げた。知らず知らず下を向いてしまっていた顔を、頑張って踏ん張って上へ上へと。

そして、歯を食いしばって向けた顔。その先にいた香織は――

「……うわあ」

めっちゃ引いてた。めっちゃ苦虫の大群噛んでそうな顔で、うわあとか言われた。

「……ねえ、紗弥加さあ……」

「……う、うん」

「……………え、なに？ 私にはやめとけとか言いながら、実は紗弥加が比企谷先輩LOVE!？」

「いやなんでよ。ちゃんと人の話聞いてた？ なんでそつちななのよ」

「へ？ そつちじゃないって事は……………も、もしかして……………ゆ、百合？」

「おいお前マジふざげんな」

マジやめて。悩ましげに瞳潤ませて、小指をぶるつやな唇にそつと添えるのマジやめて。

「……………あのさあ、あたし今、結構シリアスな話してたと思うんだけど……………」

ホント香織はこれだから…………と、やれやれ顔で溜め息を吐くあたし

を見て、あろうことかこの女は、

「あははははー！ ごめんごめん☆」

けらけらと笑ってました。うん。これだから香織は……

恨みがましく睨めつけてやる。あたし怒ってますよ、って、こいつに知らしめてやるために。

ただ、どうしたって唇はとんがってしまふ。心底怒っているわけではないと丸分かりになってしまふであろう、まるで駄々を捏ねる子供みたいに、つんつてとんがってしまふ。

なんとなく解ってしまうから。このおバカな空気で場を包み込んでしまふのが、この子の温かさなんだって。

「だってさ、紗弥加がおつきなまちがいに気付いてないんだもん」

やっぱり、香織なりの気の遣い方だったのだろう、おバカな世界へのお誘い合わせ。この、歯を見せてニツと笑んだ表情がそれを物語っていた。

でも、その口から放たれた言葉は、思いのほか意外なものだった。

——あたしのまちがい。

それって、なんのこと？

もちろんあたしの状況がまちがいだらけなのは十二分に理解している。

しょーもない嫉妬心を友達に抱いてしまふのも。

それを一人でウジウジ悩んでいるのも。

熱を求めて、どこぞの男に縋ってしまったのも。

でも和也との関係は伏せてあるし、嫉妬心を持っていることやウジウジ悩んでいることも、家堀香織という女の子がけらけら笑い飛ばすのとは、なんだか違う気がする。

そこんとこ説明よろ、とばかりに訝しげに見つめっていると、香織はまたも予想外の発言をかましてくるのだった。

「いいじゃん嫉妬！ 私、嫉妬って嫌いじゃないよ」

「……はい？」

ここでまさかの嫉妬大好き発言であった。略奪愛の素質があることのカミングアウトかな？

いや、まあ言いたいことはなんとなく分かる。たぶん香織は、嫉妬なんて恥ずかしいことじゃないんだよ？　って、あたしに言ってくれようとしているのだろう。

それは分かるんだけど、いきなりいいじゃんとか言われましても……

「知ってる？　嫉妬って、嫉ましいと妬ましいを重ね掛けして出来てんだよ？　凄くない？　暗黒闘気発してそんな言葉をさらに重ね掛けしちゃうとか、なんか禍々しくてめっちゃ強そうじゃない？　なんか中二心撥られるよね！　邪王炎殺黒龍波も道譲るレベル」

……どうやらあたしの考え過ぎだったらしい。香織の思考回路は遙か斜め下を行っていた。いいじゃん！　って、言葉萌えの事だったみたい。

「なにいつてんだこいつ。なに強そうって」

「だってさ、メラとヒヤドでさえ重ね掛けすればメドロアになれんだよ？　それも最強っしょ」

「お、おう」

ドヤ感強すぎ！　なんでちょっと胸張ってんの。

なんかもう頭痛くなってきたので、両手でこめかみをぐりぐりしながら、その真意を探るべく、ヤツを注意深く観察するあたし。あまり深く真意に迫りすぎると、向こうからヤバい真意が覗き返してきそうで怖いけど。こいつニーチエか。

すると、ここでようやく種明かしの時間がやってきた。

「つまりね」

香織はドヤ感満載のまま人差し指をぴっと立てると、まあまあ育っている胸を一杯に張ってぱちりとウインク。

「それほどに、嫉妬って感情には強い気持ちちが宿ってるってことですよ。紗弥加は自分はあるま強い感情を人に向けられないって言うだけだし、ひひ、向けてんじゃん！　超強いヤツ！」

「……ああ、そういう」

なんだか、してやられた気分だ。言われてみて初めて気が付いた。あたし、強い感情向けてんじゃん。その善し悪しはこの際置いておく

としても。

「そそ。私さ、嫉妬しちゃうくらい強い感情持つてる紗弥加は嫌いじゃないよ？ そりゃ確かに嫉妬って良くない感情かも知んないし、嫉妬に駆られて誰かに酷いことしちゃうとかだったら、マジで最低っと思う。でも紗弥加のは違うじゃん。だから嫉妬ってそんなに悪いことじゃないかなって」

「……そっか。うん、そうだね」

「ね？ これが紗弥加のまぢがいの一つ目。で、さ。人って、なんで他人を妬ましくなっちゃうと思う？ ムカつくから？ 嫌いだから？」

どうやら一つ目が終わらったらしい、あたしのまぢがい発表会。

すると香織は、早速第二回まぢがい発表会を執り行いはじめた。

「……んー、そういうのもあるのかも知んないけど、あたしはいろはにムカついてるわけじゃないし、まして嫌いでもないし」

なんなら好きだし。恥ずかしいから言わんけど。

……あれ？ じゃああたし、そういえばなんでいろはに嫉妬してたんだっけ？

「おやおや、お悩みのようですなく。ではここで分かりやすい例題をひとつ。みんな大好き葉山隼人。誰もが仲良くなりたがる人気者の葉山先輩だけど、もちろんみんながみんな好きなわけじゃないじゃない？ それどころか一部には葉虫とか呼んで、裏でこそこそ馬鹿にしたり、あることないことでっち上げて悪口言ってる人達だって居ます」

いろはに対する嫉妬について考えてたら、なんか始まった。

葉虫で。誰だよそんな頭悪そうな呼び名付けて悦んでんの。

「じゃあなんで葉山先輩をそこまで妬む人達が居るのでしょうか？ 直接会話したこともなければ関わったことがあるわけでもないのに、なんでそんなダッサいこととしてまで妬んでいるのでしょうか？」

「……んー、羨ましいから？」

正直、香織の意図はよく分からない。けど、その答えはなんとなく分かった。

だって、葉山先輩が嫌い、って感情だけならまだ理解できるけど、そ

れはあくまでちゃんと会話したり関わったりした上で、きちんと人となりを理解してからの話でしょ。

でもそれが、会話も関わりも皆無なのに妬ましいって感情が生まれるのだとしたら、もうそれは羨ましいから、しかなくない？

「大正解！ 答えは羨ましいからでしたあー！」

正解だったみたい。

「自分に無いもの持つてて、自分が成りたい者になれてて、でも自分はそうなれなくて、悔しくて口惜しくてしようがないから、羨ましくて仕方ないんだよ」

そう言つて、意味ありげにあたしを覗き込む香織。その表情は、とてもしてやったりなニヤリ顔。

「そ。羨ましいの。嫉妬つてさ、超羨ましがるから起きんじやん。で、羨ましいってことは、自分もそうなりたいからそう思うんじやん？

これが紗弥加のまちがいのもう一つ。紗弥加は男に強い感情向けること出来ないって言うけどさ、それっておかしくない？ ホントにそうなら、羨ましいなんて思わないと思うんだよね。いろはが比企谷先輩に夢中になるのが智子が友樹とよろしくやろうが、あ、そう、よかつたね、って鼻で笑うんじやない？」

「……あー」

「でしょ？ 私が思うに、恋愛に夢中になれる子を見て羨ましがれるって、その時点で恋愛に夢中になれる素質あると思うんだよね」

……その発想はなかった。

「しかもさ、そもそもそのいろはこそが、紗弥加否定説の生き証人だったりするわけよ」

「……はい？」

「ほら、さっき紗弥加言つてたじやん。いろはは自分と同じ人種だつて。じゃ、そのいろはが今じゃ男に夢中になつてんだもん。紗弥加がそうなれない理由、無くない？」

「……あ、そっか」

「恋愛マスターの私から言わせてもらうと、結局は出会いの問題だと思ふのよ。紗弥加はまだ紗弥加にとっての比企谷先輩に出会つてな

いだけじゃない？ ほら、こう言っちゃなんだけど、紗弥加の元彼って二人いたけどさあ、どっちともさつき話してた噂のイケメンくんみたいな感じじゃなかった？ 年上だったり学校違ったりで私らとはほとんど絡み無かったから知らんけど、イケメンだしモテるけど、中身カラッポみたいなの」

「いきなり人の元彼、デイスンないでくんない？ そもそもお前、マスターどころか男も知らない処女だし」

そう言いながらも、ついククツと失笑が口から漏れ出てしまった。和也も含めてだけど、あまりにいい得て妙すぎたから。

「ひどい!! セクハラ反対モラハラ反対! M e T o o すんぞコンニャロオ!」

ムツキイイー! と涙目で憤慨する香織をどうどうと宥めてやると、んんつ、と一つ咳払いをしたこいつは、赤い頬つぺを残したまま、ぴこつと人差し指を立てた。

「とにかくさ、ぶっちゃけ紗弥加って、実は男選びが下手なんじゃない? てかなんか自分に合ってる男をわざわざ見繕ってるみたい」

……それは確かにあるのかも。どうせ相手に強い感情抱けないのなら、せめて見た目くらいは、って選んでたら、自然とあんなのぼっかになっちゃうのかも。

「いろは見てみ? あんだけイケメン大好きステータス大好きだった女が、今じゃ比企谷先輩に夢中になってんだぜ? 男の趣味悪いっていう自分の好みに忠実になった途端にあの素な笑顔見せられるんだよ? 私、今でも超覚えているよ、比企谷先輩がうちの教室来たときの、キラツ☆ ぐるん! にまあ♪ってヤツ! あれが忘れらんなくて未だに付け回してるフシさえあるよね〜! だから紗弥加も恋愛からじゃなくて、まずはああいう素の笑顔見せられる相手見つけることから始めてみたらいいのかもよ?」

「……」

——正直、そういう考え方もあるんだなあ、って、ちよつとだけ感心してしまった。ポロツと溢しちやつた付け回してるって発言はどうかと思うけど。

これは、楽天的な香織だからこそその考え方もしれない。そんなポジティブ過ぎる考え方や、現実ではそう上手く事が運ぶことはないかもしれない。

でもそんなお花畑な思考回路に、悔しいことに気持ちがスツと軽くなってしまうのだ。ああ、もつと気楽に考えたらいいのかも。そんなに焦んなくてもいいんじゃない？ って。

「ハア〜。やっぱ香織は香織だよ〜。こんなことなら、もつと早く香織に相談すれば良かったわ〜」

「え？ なんだって？ そんなに頼りになっちゃうのかね私って！ さすが私っ！ 友のモヤモヤを瞬時に打ち消しちゃう、この清浄の女神感☆」

「いやそういうんじゃないよ、しょ〜もなすぎて毒気抜かれてスツキリしちゃった的な」

「おい、誰がデトックス美少女だって？」

「あはははは！ 言ってる〜！」

軽くなりすぎた気持ちに香織のあまりのアホさ加減も手伝って、人目も気にせず腹を抱えて大爆笑してしまうあたし。

香織の提案に乗せられてあげるのならば、こういうバカ笑いを平気で晒せられる男を見つければいいってことかな。

しかしそれはなかなか難易度が高い気がする。なにせあたしは基本的に冷めた性格の上、男相手だどつい斜に構えてしまいがちな女子だからである。

……んー、でも、なんか最近、男相手にバカ笑いした記憶があるよ
うな……？

そんなことを考えながらも相変わらずゲラゲラ笑っていると、思いもよらない反撃を受けることとなる。

いつまでも笑われていることにヘソを曲げちゃったのか、まるでやり返してくるかのようになり、ニヤアつと厭らしい笑みを浮かべた香織さん。

「てかてかあ、それよりも私としましてはあ〜、今までの人間関係の中で大事に思えたことがあるのが、私達の友人関係だけ、って部分のほ

うが、よっぽど気になっちゃったんですけどお。気になるし照れちゃうしで夜も寝れなくなりそうなんで、んふ、そこらへん詳しく!」
「なあ!？」

途端に、顔と言わず体と言わず、全身がぶわあつと熱くなる。
完全に忘れてた。てか、なんであたしそんな告白しちゃった？

情けない独白の最中、なんか頭も胸もいっぱいいっぱいになっちゃって、思わず口走っちゃったのであろう完全なる失言である。

「……は、はあ？　あたしそんなこと言ってるじゃないし。捏造すんなクソ香織」

めっちゃムカつく面によよしてバカにそう言ってるやつたもの、たぶんコレ、顔赤すぎてバレバレなんだろうな。

「言いましたあ。あたし、あんた達との友達関係くらいしか、今まで大事って思えた関係がないのおお！　って言いましたあ。私だつて紗弥加は大事な大事な友達だよ!　ってイケボで言い返してあげましょつかあ？　おやおやー？　顔真っ赤にしちゃってどうしましたあ？」

ぐあああ！　は、腹立つ！　なにそのムカつく面！

「こいつマジぶつ殺す！　この痛々しい拗らせオタバージンがあ！」

「なっ!?　ううううっせーわ！　人をメタバースみたいに言うな、ここのイケメン大好きビッチいー！」

「はあああ!？」

「ああああ!？」

もうね、駅前で取っ組み合いの喧嘩である。

香織と違って自分で言うのは憚られるけど、なかなか華のある女子高生二人が駅前で醜く争う様は、あまり人様にお見せできるようなものじゃないよね。通行人の方々の視線が痛いこと痛いこと。

でもなにか一番イタいって、醜く罵り合って取っ組み合ってる当の二人が、軽くニヤついちゃってるところだろうか。あー、恥っず。

× × ×

「あ、ところでバ香織ー」

「バ、バカっ……!? な、なによク紗弥加」

「ク、クサっ……!? い、言い忘れてただけだよー」

「なに」

「あなたの講義の時間まで、あと三分しかないんだけどー」

「あ? ……へ? ……ほあああ!」

お互いに、額に血管浮き上がらせながらの激しい戦い。そんな子供の喧嘩じみたボロボロの最終局面、あたしからの最後の攻撃は、どうやら効果抜群だったようだ。

慌ててスマホで時間を確認した香織は、現在時刻を見て愕然とする。

「ぎ、紗弥加ア! キ、キサマ気付いてて黙ってたなあ!」

「へっへーん、ぎつまあ」

「ちつきしよー! 覚えてやがれー!? 明日教室で散々イジリ倒してやっかんなあ!」

「へっ、返り討ちにしてやんよ」

あの講師、遅刻したら「やる気のない生徒はいつ辞めるの? 今でしょ!」とか言って、嫌味がねちっこいんだからねエ!? とかなんとか喚きながら、ぴゅーつと走り去ってゆく友の背中。そんな背中に笑顔で中指を立てながら「いつてらく」と煽りエールかましてやると、震え声で耳に届いた「かしこまあ……!」のレスポンス。やはり最終的に勝利するのは正義なのか……と、心の中で美酒に酔い痴れた。

ま、酔い痴れて乾杯してるのは、一時の勝利いっときに対してではなく、これからも長い付き合いになるであろう友達に、だけど。

とても大切でとても大好きで、そしてとても有り難い親友に乾杯、つってね。

「……は……、なんか超スッキリしたあ!」

激しいバトルで立ち上がっていた我が身を、も一度ベンチに荒々しくダイブさせる。どっしーんと勢い良く伸し掛かってきた美尻にキイと悲鳴を上げるベンチにごめんねしつつ、さらにのびつと身を預けて背もたれを酷使しちゃうのだ。

「あく、久しぶりだなく、こんな軽いの」

あれかな。普通のランドセル背負^{しょ}ってた小学生が天使の羽に換えたりしたら、こんな身軽な気持ちになれんのかな。

我ながら頭のおかしい喻えに、いよいよ脳が香織に侵食されてきてんな、なんて苦笑してしまう。

——朝の智子に続いて、またも友に助けられてしまった。

もつとも、ここ何年もずっと抱き続けてきたこのモヤモヤは伊達じゃない。ちよつとスッキリしたからといって、それがいつまで継続してくれるのかなんて分からないし、いろはのあの笑顔見せつけられたら、またモヤつとしてしまうことだってあるだろう。

「でも、ま」

そしたら、また友に頼ればいい。何度もモヤモヤして、そして何度もスッキリすればいいだけなのだ。

なぜそんな簡単なことに今まで気付けなかったのか。香織にスッキリさせられた今となつては、もはや謎だらけである。でも——
「んっ！」

もう一度のびつとしながら、ま、そんなことどうでもいいかと思え直す。

今のあたしに必要なのは、ジメつとした過去を振り返ることじゃない、カラツとした未来に目を向けることなのだから。もう、いろは達の眩^{まぶ}しさに眩^{くら}まなくても済むような、そんなカラツとした眩しい未来に。

「ん？」

そんなとき、不意にスクールバッグから、ぽこつと間抜けな音がした。

昨日に引き続き、またも一人になったタイミングでのこの通知音に。なんだか既視感を覚えつつ、ごそごそ漁って取り出したスマホ。

そこに表示されていたのは——

『【和也】ひま？ 今日も会わね？』

嫌な予感的中。こいつ実は近くで見張ってんじやないの？ と

思ってしまうくらいのタイピングで放たれた、ジメつとした過去からの連絡だった。

「……ハア」

この、せつかくの良い気分がブチ壊された感。思わずむーつと唸っ
てしまうほど。

普段なら無視一択。昨日なら応じてたこの通知。

でも………むしろ今は僥倖なのかも。デトックス美少女（笑）に
スツキリさせてもらったばかりのあたしなら、……もう大丈夫！

自然と動く。迷いのない返信内容をタップする、踊るように舞うあ
たしの指が。

『意外とちゃんと付き合ってみたら悪くないかもしんないし』

文章を紡ぐ。朝の智子の言葉を思い出しながら。

『素の笑顔見せられる相手見つけることから始めてみたらいいのかも
よ？』

送信をぽちっとタップする。さっきの香織の言葉を思い出しなが
ら。

すると、返信から僅か数秒、すかさず返ってきたLINE——じや
なくて通話だった。必死すぎてちよつとだけウケる。

「もしもし」

『紗弥加か？ ……なんだよ、もう会わないって』

「え？ 言葉通りの意味しかない？」

——結構前から感じていた、この関係性の終焉。それは、和也の心
変わりに気付いたから。

『……でも』

「あのさ、もともとあたしらの関係なんて、そんなもんだったはずじゃ
ん。で、その片方がもう会うのやめるって言ってるワケ。それでよく
ない？」

——人づてに聞いて知ってたよ。あれだけやりまくってた女遊び、
最近ぱったりとやめたらしいってこと。

態度とか空気とかで感じてたよ。あんたがあたしに本気になり始
めてたってこと。

だからこの関係のままじゃ、もう続かないって思ってた。

『……そりやそうなんだけどさ……。あのさ、やっぱちゃんと言うわ。俺、本気でおま——』

「それにさ、あたしらって、ぶつちやけ体の相性あんまりだったじゃん？ 女って、演技すんのも大変なんだよね」

——智子が言ってみたみたいに、付き合つちやう未来を考えたこともあった。付き合ってみれば、もしかしたら、なんて事があるかもしれないから。

でも無理でしょ。だって、香織が言ってみたみたいな笑顔、一年半も居て、あんたの前では一度だって出来たことないから。

『……だ、だからって——』

「だから、もう……ね？」

——こんな歪な関係を無理して続けてたって、どうせ碌ろくな結果になりはしないのだ。

それでもなあなあのままこの関係を引き伸ばしてきてしまったのは、一重ひとえにあたしが臆病だったから。どんなに友達の眩しさから逃げ出してしまっても、手を伸ばす範囲に人肌という抛り所がある。そんな歪んだ安心感を手放してしまうことが、とても怖かったから。

でも逆に怖かった。こんな都合のいいだけの存在に、なにかのまちがいまちがいで歪んだ情を抱いてしまい、離れられなくなってしまうことが。

「……………じゃね、今まであんがと」

『さやっ——』

そこで途切れた和也の声。まさか最後に聞く和也の声が『さや』とは思わなかったよ。ちよつと笑える。

——和也の人肌に救けられた部分もあったけど、その救いは、残念ながらあたしを痛めつけてもきてた。

昨日までのあたしなら、そんなこと承知の上で縋すがってしまっていたけれど、今はもう、大丈夫だから。

だからこれであたし達はお仕舞いにしよう。今まで散々女泣かせて遊んできたんでしょ？ だからこれはあたしからの最後のプレゼント。

後学の為にも、たまには弄ばれて捨てられて泣く側の気分も味わえよ♪

「やっつとー」

なんたる解放感だろうか。今ならどんより曇ったこの梅雨空でさえ、どこまでも澄み渡る広がるスカイに見えちやうよね。

これでもう、救いでもあり呪いでもあつた人肌という抛り所は無くなったわけだ。でも、眩しさに目が眩みそうになる日々は、これからも続くわけで。

じゃあ、今あたしがするべきことってなんだろう。香織と智子と変わらないくらいに大切な友達から、目を背けないでいられるようになるには？

——その答えは、もう出てる。香織達が教えてくれたから。

「よっし！・ そんじゃまあ、まずはイイ男でも見つけますかねー！」
すつくと立ち上がってスクールバッグを背負いこんで、明日へと向かって歩き始めたあたし。ぽしより独り言ちたあたしの笑顔は、自画自賛分を差し引いたとしても、きつと凄くイイ女のソレだろう。

香織の言うように、いつかこんな素の笑顔を気兼ねなく晒せる男に出会えるといいんだけどねー。

「あ」

そんなとき、ふと思ひ出した。昨日いろはが乱入してくる数分間、比企谷先輩と話してたときのあたしって、そういえばこんな笑顔してなかったっけ？

「……いやいやないない」

そう。ないない。あたしが比企谷先輩に対して強い感情抱いちゃうとか、うん、ないない。……ない、よね？

ない………んだけども、でも、なんとなくあたしの恋愛感の傾向と対策が見えてきた気がする。どうやらあたし、いろはのこと言えないくらい、もしかしたら男の趣味が超悪いのかもしれない。

そういえば香織にも言われてた。カラッポなイケメンは、あたしに合わないんじゃないかって。

……実は、そういう軽い気持ちで付き合える水溜まりみたいな
じゃなくて、深い深い泥沼の方が好みなのかも。よほどの物好きしか
入りたがらない、泥どころか底無し沼適なやつが。

「ぶっ……！」

思わず溢れる嘔き出し笑い。

だったら、さっきの前言を撤回しなきゃだね。だってあたしが見つ
けたいのは、どうやらイイ男とかではないらしいから。

そう、あたしが見つけたいのはイイ男じゃなくて――

「そんじゃまあ、まずは変な男でも見つけますかね〜！」

軽い足取りというのは、普通に前へ進むだけで、自然とスキップで
も踏んでいるかのよう。学校指定のローファーでスキップを踏むあ
たしの姿。なるほど、これが世に言う（香織が言ってただけ）スキッ
プとローファーとかいう青春ってやつか。

このスキップじみた軽い足取りは、一体あたしをどこへと運んでく
れるのだろう。

行き先はまだ分からない。分からないけれど、願わくば、そこは友
達の一色いろはの眩しさに眩まなくてもいいくらいに輝いた、眩しい
明日であってほしい。

そう願わずにはいられない、梅雨曇りの晴れ渡った空の下、いろは
と比企谷先輩の後日談を語るあたしの帰り道。

了